那覇市文化財調査報告書　第109集

フクヂ山古墓群

― 那覇広域都市計画道路事業３・２・浦１号沢岷石嶺線に係る緊急発掘調査報告 ―

2019(平成31)年　１月

那覇市

序

本報告書は、那覇広域都市計画道路事業３・２・浦１号沢岻石嶺線の道路敷設工事に伴う埋蔵文化財「フクヂ山古墓群」の緊急発掘調査の成果を収録したものです。発掘調査は３次に及び、平成 26・27 年度に実施いたしました。

フクヂ山古墓群は、那覇市首里石嶺町と浦添市字前田との境となる概ね南西から北東へと伸びる丘陵の南側斜面に所在しております。那覇市首里石嶺町は、平良・末吉(大名を含む)とともにかつては西原村(現在の西原町)に所属しておりましたが、1906(明治 39)年に平良が、1920(大正９)年に石嶺・末吉・大名が首里区に編入されました。

近代以降に首里の一部となった石嶺ですが、近世琉球の時代から王都首里との関係は深く、今でも伊江御殿・読谷山御殿等の王族の墓がいくつか所在しております。また、石嶺は浦添・西原・首里の三地域に接する場所であり、三地域の人々の往来や文化的・経済的交流のあった場所であることが考えられ、今後綿密な調査が継続的に実施されれば首里の中心とは異なる石嶺独自の地域的特徴が浮かび上がってくる可能性もあります。

今回実施したフクヂ山古墓群の発掘調査では、多様な古墓形態が確認されました。調査の対象となった古墓の多くが、発掘調査が実施される直前まで元の墓所有者によって使用されており、そのことは古墓がもつ埋蔵文化財としての特殊性を顕著に表しています。

墓は、沖縄の人々が有する古くからの死生観を現在でもよく感じさせる場所です。普段は意識に上らずとも、親や先祖が伝えてきた死に関する観念や禁忌、所作などは私達の心の奥深くに強く刻み込まれているものではないでしょうか。生きた伝統を色濃く残す墓について私達がより詳細に知ることができれば、複雑で多様な価値観が溢れる現代において健全で心豊かに生活するヒントがもしかすると得られるかもしれません。

本報告書を作成・刊行するにあたって、多くの方々のご助言とご協力を賜りました。末尾ではありますが、ここに記して、心より深く感謝申し上げます。

2019(平成 31)年１月

那覇市長　城間 幹子

例　言

1　本報告書は、平成 26・27 年度に実施した「フクヂ山古墓群緊急発掘調査」の成果を収録したものである。

2　本発掘調査は、那覇広域都市計画道路事業３・２・浦１号沢岻石嶺線の道路敷設工事に伴うものである。浦添市都市建設部道路課の委託を受けて、那覇市が発掘調査業務の指導・監督を行った。

3　本発掘調査は、那覇市の管理・指導のもと、調査現場での発掘・測量・写真撮影等の調査作業に伴う業務全般を民間の発掘調査支援組織へ委託した。平成 26･27 年度での発掘調査は３次に及び、株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店へ委託し、発掘調査業務の支援を受けた。

4　フクヂ山古墓群発掘調査により検出された人骨資料の分析業務を、平成 28 年度に株式会社文化財サービス沖縄営業所へ委託した。その分析結果については、本報告書に附編１として掲載している。

5　フクヂ山古墓群発掘調査に伴い第 11 号墓墓庭より検出された動物骨の分析業務を、平成 28 年度に株式会社文化財サービス沖縄営業所へ委託した。その分析結果については、本報告書に附編２として掲載している。

6　フクヂ山古墓群発掘調査により検出された漆喰資料について、資料６点の分析業務を平成 28 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社沖縄支店へ委託した。その分析結果については、本報告書に附編３として掲載している。

7　フクヂ山古墓群発掘調査により検出されたモルタル資料について、資料６点の分析業務を平成 28 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社沖縄支店へ委託した。その分析結果については、本報告書に附編４として掲載している。

8　フクヂ山古墓群発掘調査により検出された銭貨資料について、資料７点の非破壊による蛍光Ｘ線分析業務を平成 28 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社沖縄支店へ委託した。その分析結果については、本報告書に附編５として掲載している。

9　蔵骨器の実測図作成に使用するオルソ写真の作成業務を、平成 28 年度に株式会社シン技術コンサル沖縄営業所へ委託した。それに伴い、陶製軒付甕形蔵骨器６基(蓋４点・身６基)、陶製家形蔵骨器２基(蓋２点・身１基)のオルソ写真 16 枚を作成した。今回、それに基づき実測図の作成を行い、本報告書に掲載した。

10　フクヂ山古墓群発掘調査に伴い作成された遺構図の編集業務を、平成 29 年度に株式会社琉球サーベイへ委託した。本報告書に掲載した第５～61 図は、その成果に基づくものである。

11　フクヂ山古墓群発掘調査により検出された蔵骨器 102 点（蓋 41 点・身 61 点）の写真図版作成業務を、平成 29 年度に株式会社アーキジオパシフィック支店へ委託した。本報告書に掲載した図版 70～90 は、その成果に基づくものである。

12　本報告書で使用する方位は、座標北である。座標値は、世界測地系に基づくものである（平面直角座標系第ＸⅤ系）。基準高は、海抜高を用いた。

13　第２図の那覇市全図は、国土地理院発行の１：25,000 地形図（平成 21 年 11 月１日発行）を複製して使用した。

14　第３図は、『旧首里の歴史・民俗地図』（那覇市史編集室　1978 年 12 月）の一部を加工・修整したものである。

15　第４図の那覇市首里石嶺町及び浦添市字前田周辺の地図は、沖縄県企画部総合情報政策課が作成した縮尺五千分の一の地図を複製して使用した。

16　図版１・２となる那覇市首里石嶺町及び浦添市字前田周辺の空中写真は、国土地理院が 2010（平成 22）年９月 27 日に撮影した縮尺五千分の一のものを複製して使用した。

17　本報告書での出土遺物の色調表記に関して、以下の文献を参考にした。
　清野恒介・島森功 『色名事典』 新紀元社　2005 年

18　凡例模式図（３）に示した亀甲墓の部分名称については、以下の文献を参考にした。
　名嘉真宜勝 『沖縄の人生儀礼と墓』 沖縄文化社　1999 年　72 頁

19　附編２の図１に示したブタ頭蓋骨各部の名称については、以下の文献に掲載された図に加筆している。
　加藤嘉太郎・山内昭二 『新編 家畜比較解剖図説』上巻　養賢堂　2003 年
　　第 17 図版 98・99 図（35 頁）、第 19 図版 105 図（39 頁）、第 21 図版 115 図（43 頁）

20　各蔵骨器に記されたミガチ（銘書）の内容については、諸般の事情により今回報告することできなかった。今後の課題として、適宜検討したい。

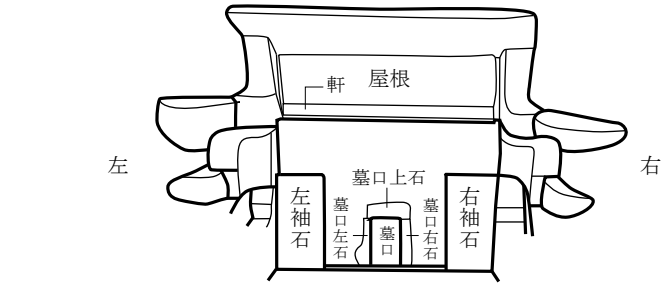
21　本報告書の編集は、當銘由嗣が行った。執筆は、下記のとおりである。
　當銘　由嗣（那覇市市民文化部文化財課 主任専門員）　第Ⅰ～Ⅵ章

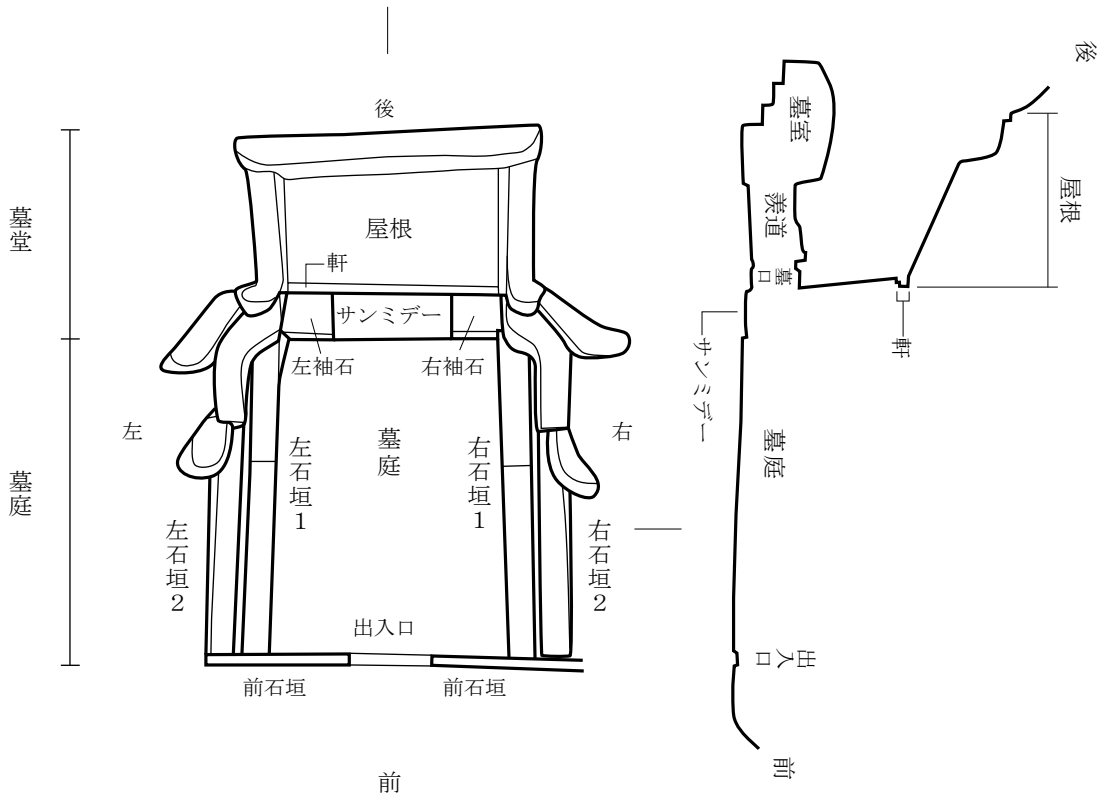
株式会社 文化財サービス 沖縄営業所　　附編１・２
パリノ・サーヴェイ株式会社 沖縄支店　　附編３～５

22　おもに調査報告書の刊行を目的とした資料整理業務は、下記のメンバーで行った。
＜平成 27 年度＞
阿部　直子　　仲井眞　美佐枝　　小原　忍　　宮里　朝野　　大城　亜姫代　　新垣　成子
＜平成 28 年度＞
阿部　直子　　仲井眞　美佐枝　　石川　ひとみ　　宮里　朝野　　大城　亜姫代
新垣　成子
＜平成 29 年度＞
阿部　直子　　仲井眞　美佐枝　　宮里　朝野　　大城　亜姫代　　新垣　成子
＜平成 30 年度＞
阿部　直子　　宮里　朝野

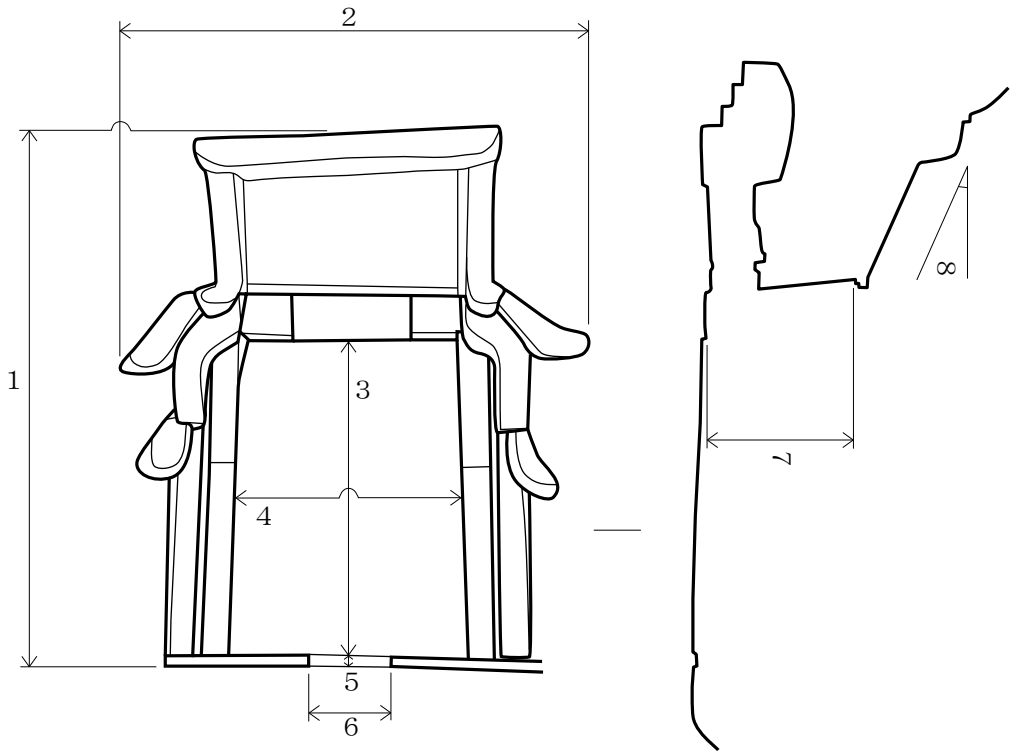
23　出土遺物の写真撮影及び図版データの編集作業は、宮里朝野が行った。

24　出土遺物は、那覇市 市民文化部 文化財課で保管している。

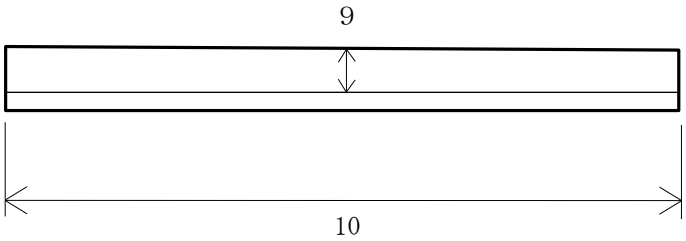




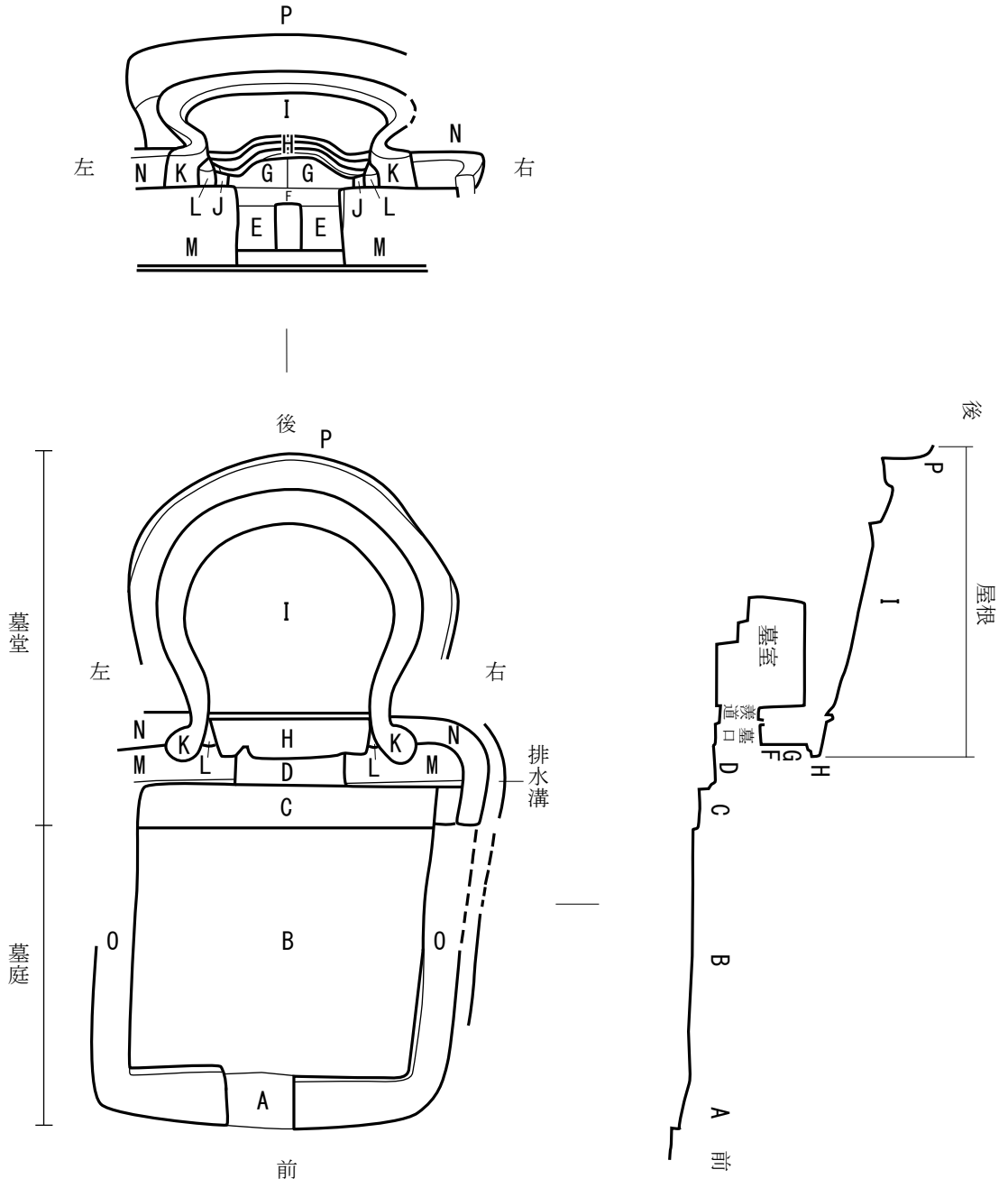
凡例模式図（1）　墓の部分名称（1）



軒の計測位置



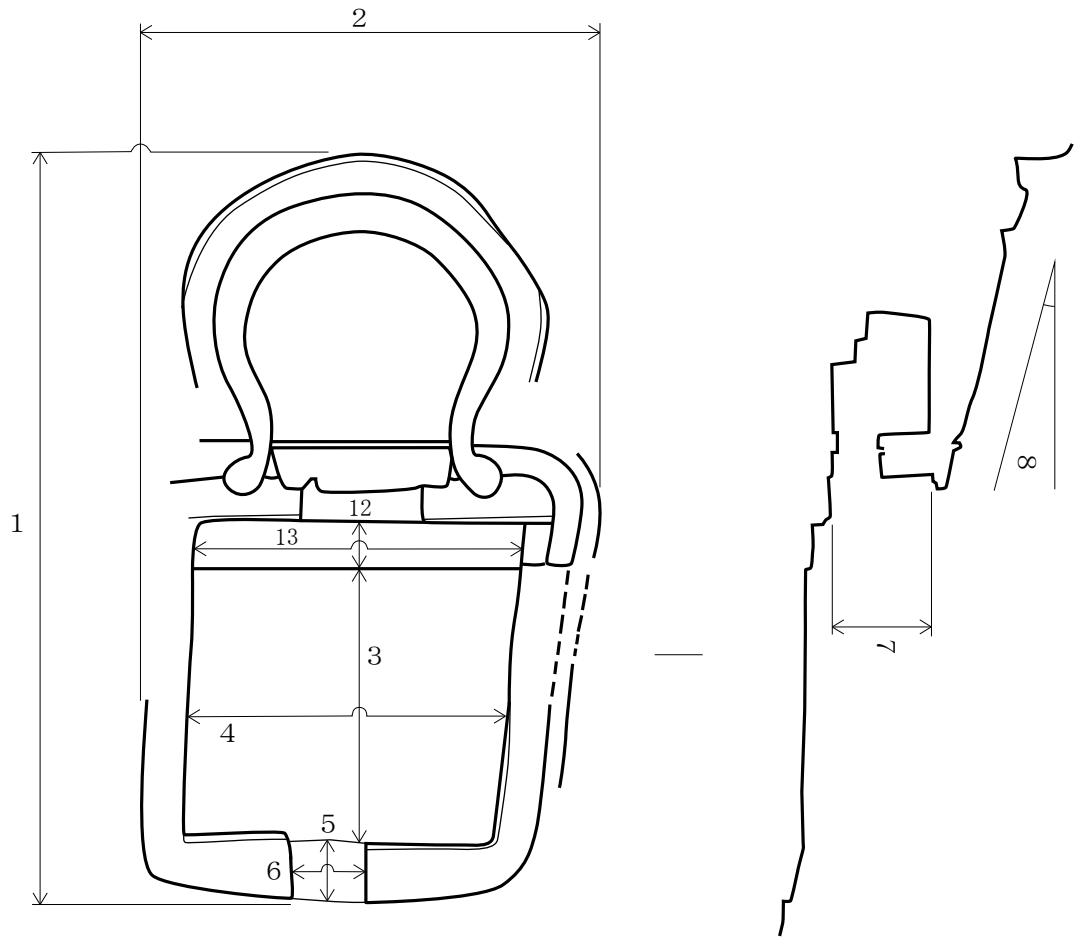
凡例模式図（２）　墓の計測部位（１）



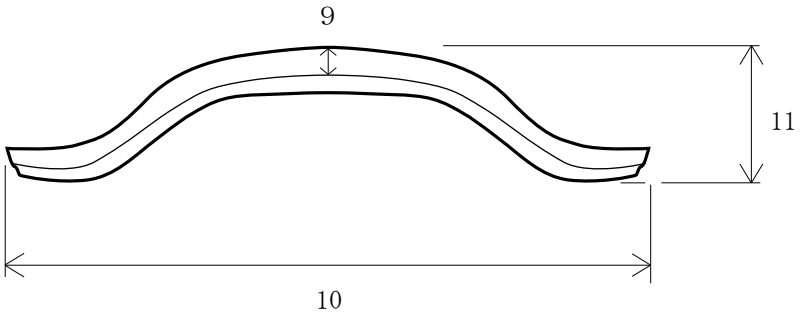
A ハカヌジョー(墓の門)　B ハカヌナー(墓の庭)・ナー　C・D サンミデー・イーン(縁)
E ジョーバシラ・シミイシ　F ジョウカブイ(門被い)　G カガンイシ(鏡石)　H マユ(眉)
I チジュ(頂上)・ボージ　J ヌンチャ　K ウーシ(臼)　L クヮウーシ(子臼)
M スディイシ(袖石)　N ワラビヌティ(童の手)　O スディガチ(袖垣)・ナージミ(庭積み)・チンバー
P ヤジョーマーイ・ウスディマーイ

※本報告書では、Aは墓庭への「出入口」、Bは「墓庭」、Cは「サンミデー下段」、Dは「サンミデー上段」、Mは墓正面左右の「袖石」、Oは墓庭左右及び前の「石垣」と呼称する。凡例模式図(1)を参照。

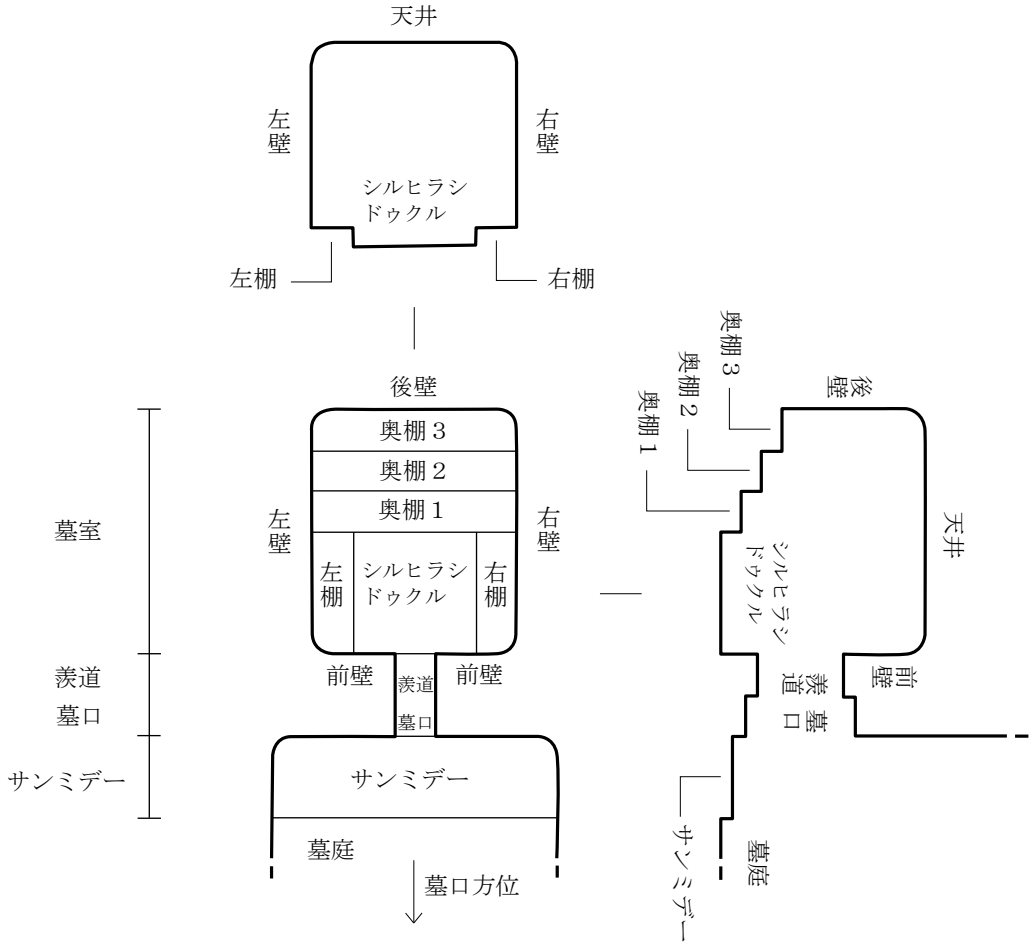
凡例模式図(3)　墓の部分名称(2)　亀甲墓(第 11 号墓)



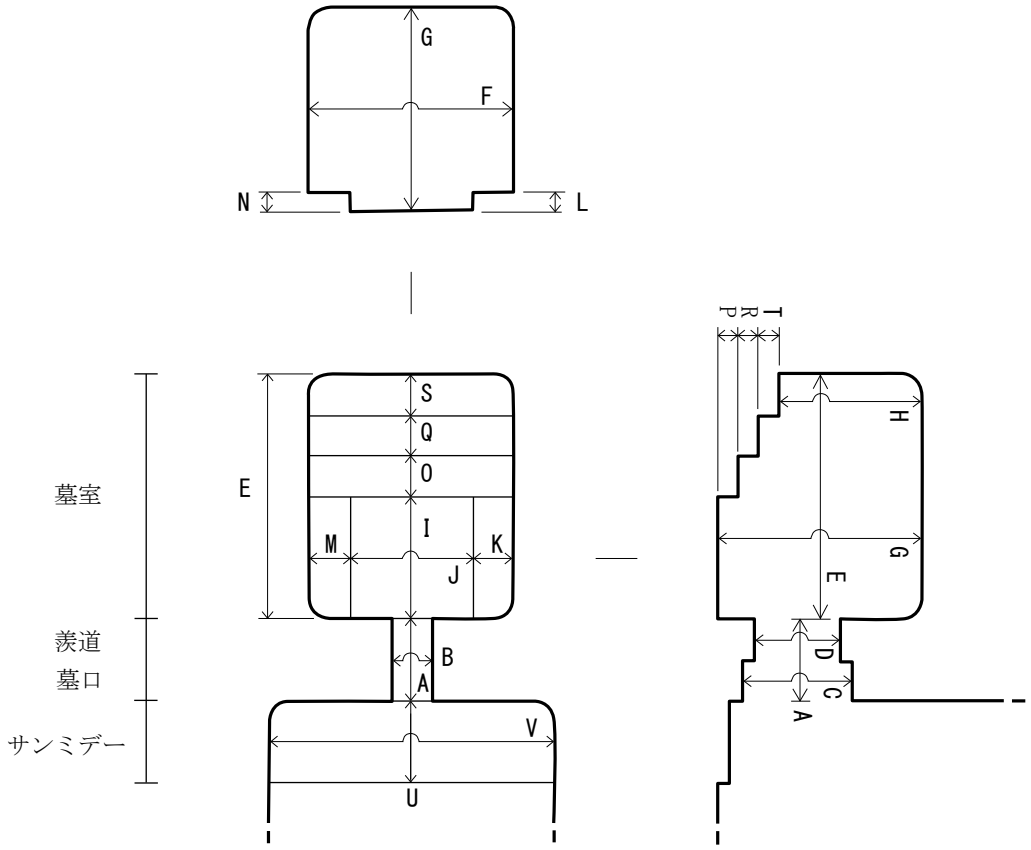
マユ（眉）の計測位置



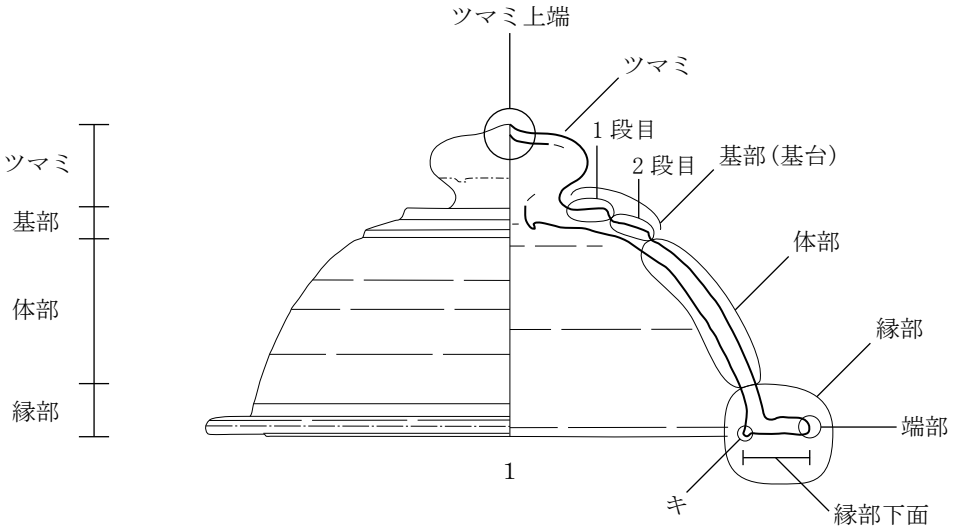
凡例模式図（４）　墓の計測部位（２）　亀甲墓（第 11 号墓）

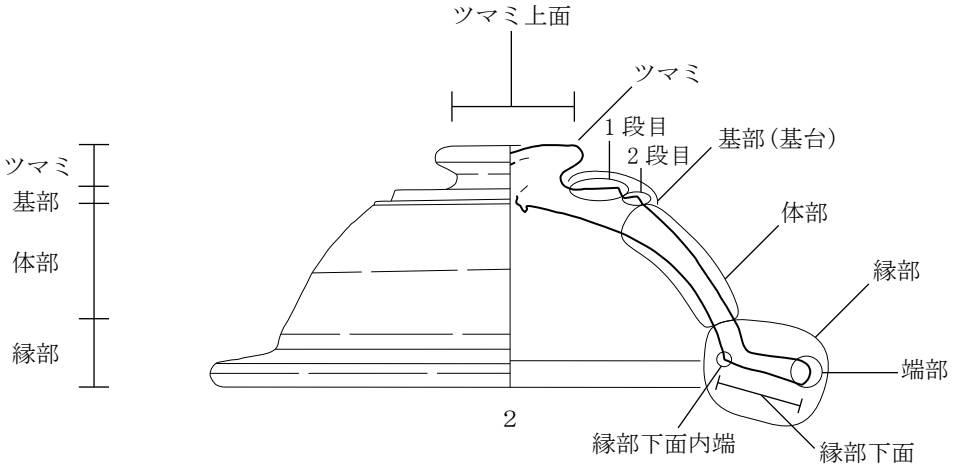


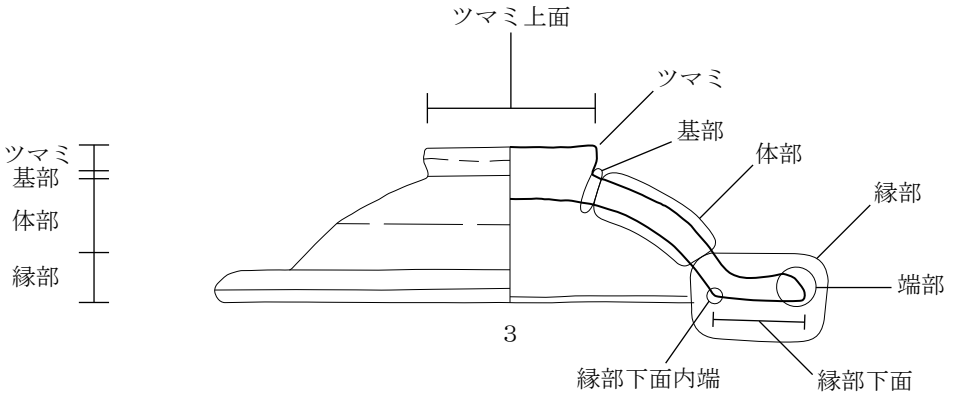
凡例模式図（５）　墓の部分名称（３）



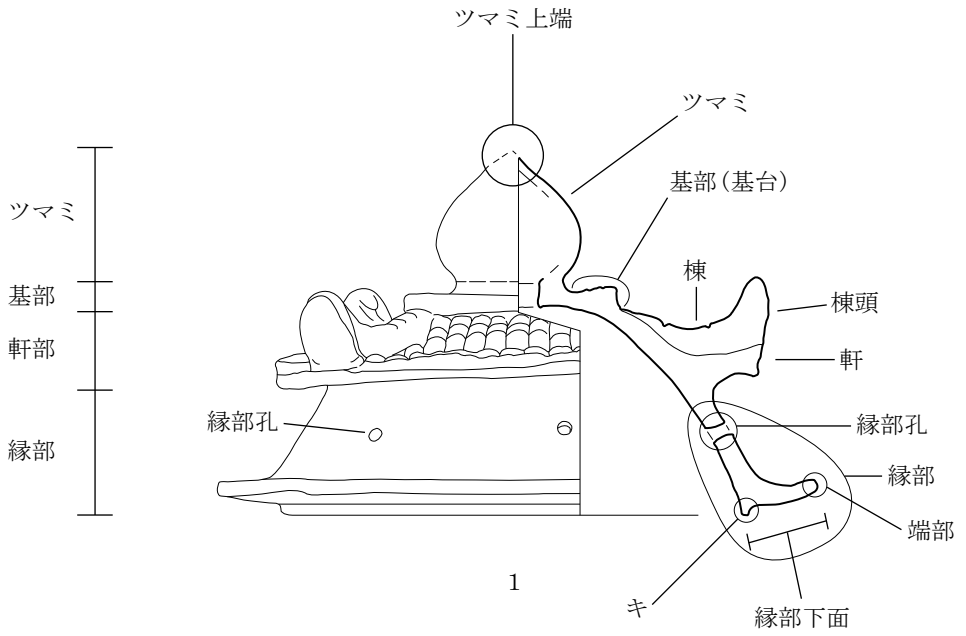
凡例模式図（６）　墓口・墓室・サンミデーの計測部位（Ａ～Ｖ）



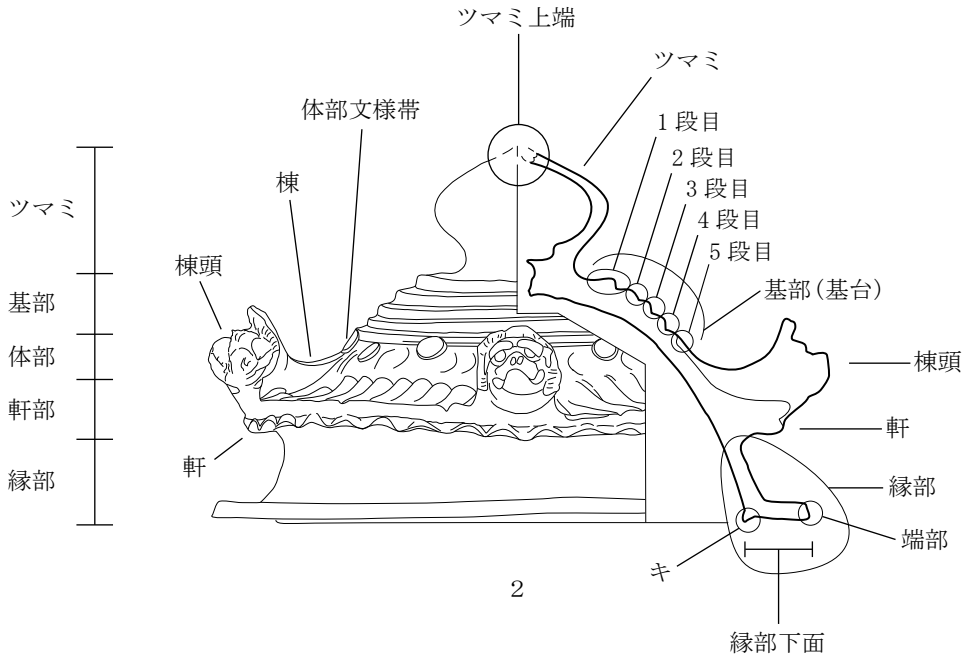




凡例模式図（7）　蔵骨器(蓋)の部分名称（1）

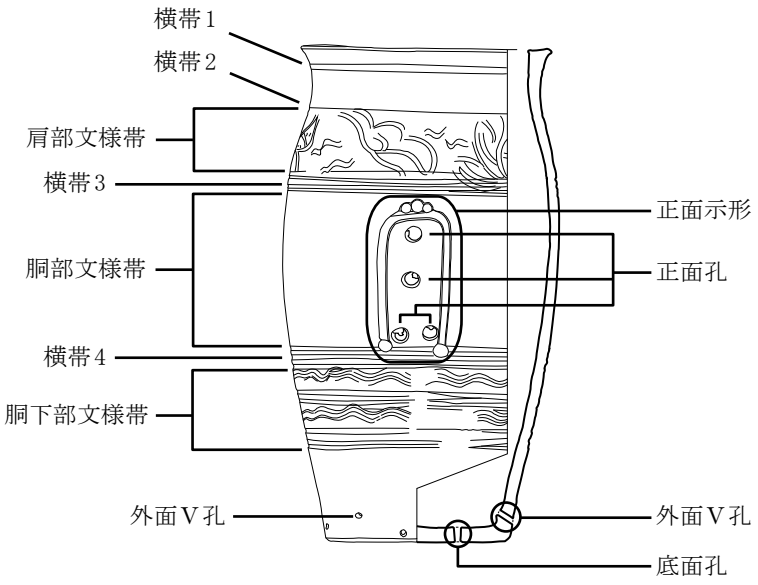


1

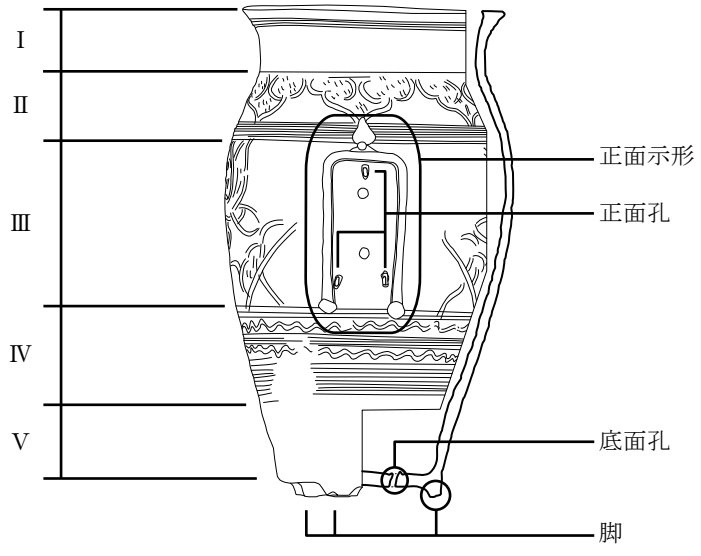


2

凡例模式図（８）　蔵骨器(蓋)の部分名称（２）

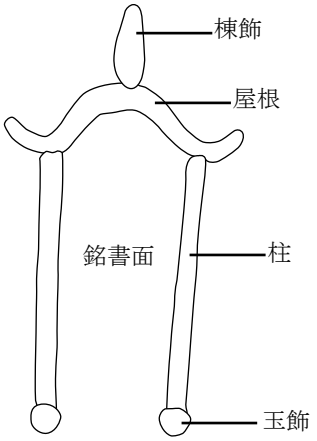


1

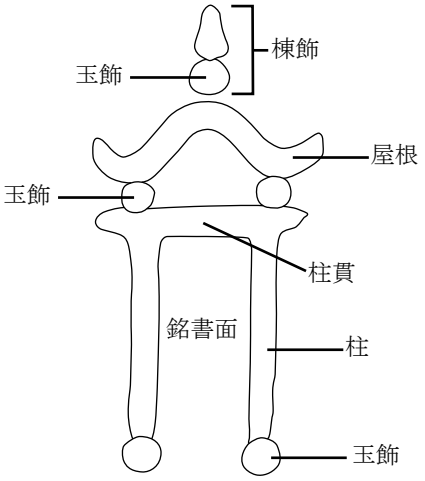


2

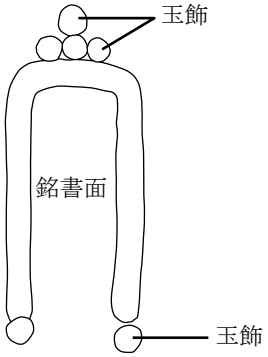
凡例模式図（９）　陶製有頸甕形蔵骨器の部分名称と器外面の区画表示



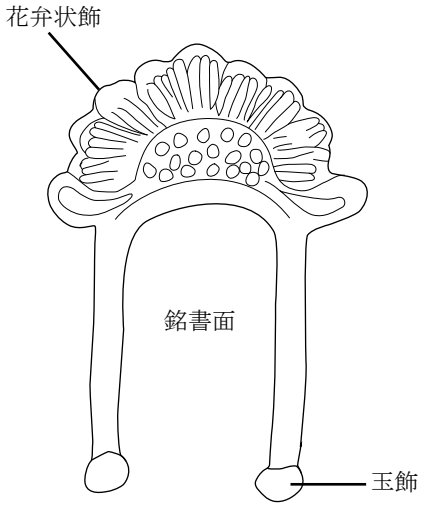
唐破風形１



唐破風形２

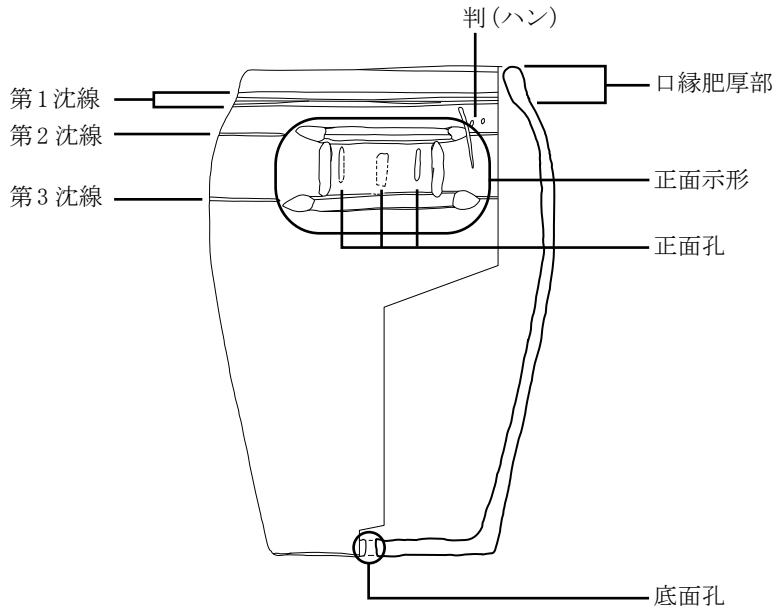


アーチ形

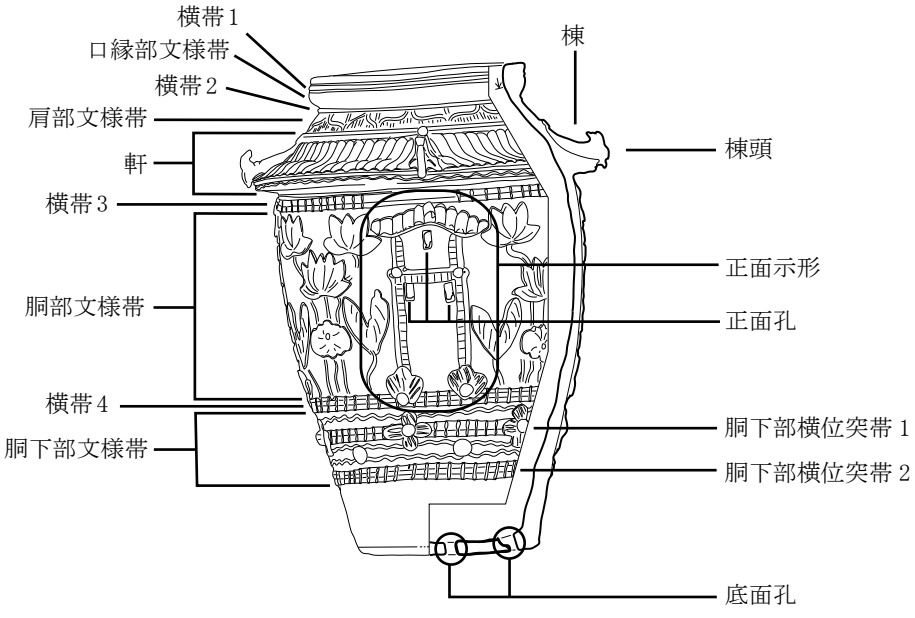


花　形

凡例模式図（10）　陶製有頸甕形蔵骨器の正面示形（浮文）各部名称

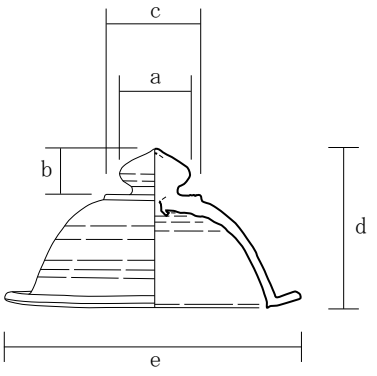


1

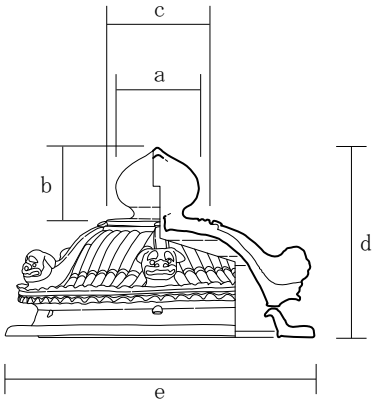


2

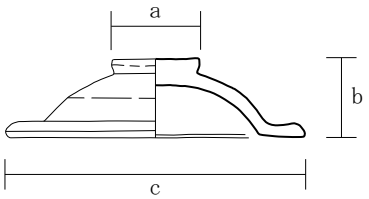
凡例模式図(11)　陶製無頸甕形蔵骨器及び陶製軒付甕形蔵骨器の部分名称



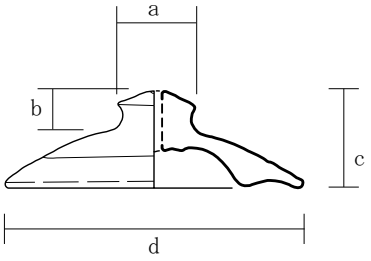
1



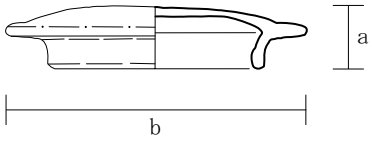
2



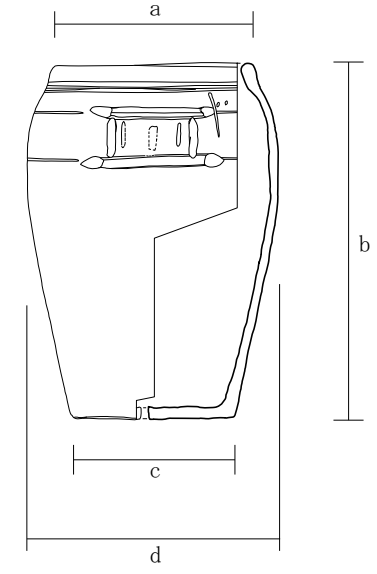
3



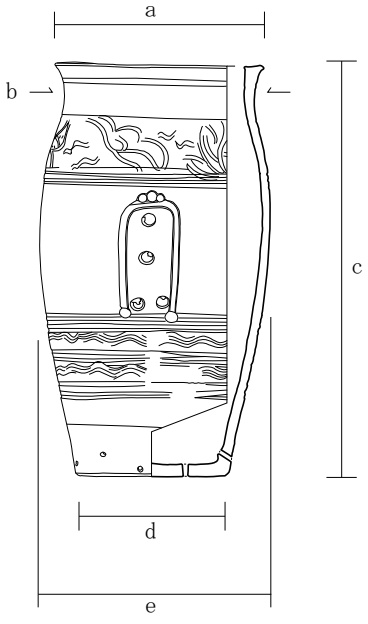
4



5

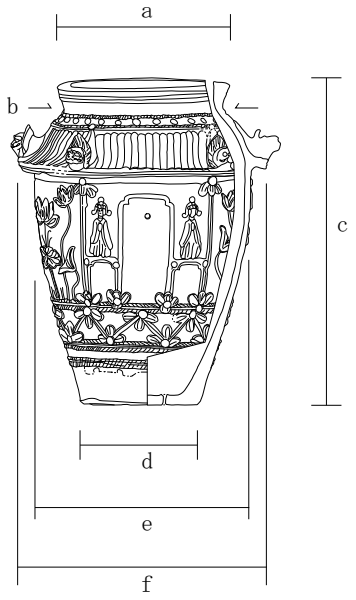


6

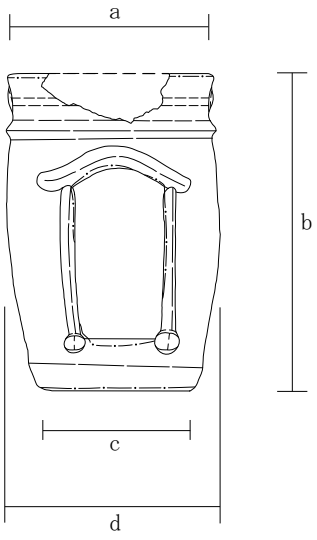


7

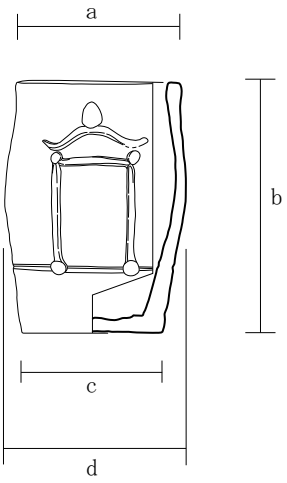
凡例模式図(12) 蔵骨器の計測部位(１)



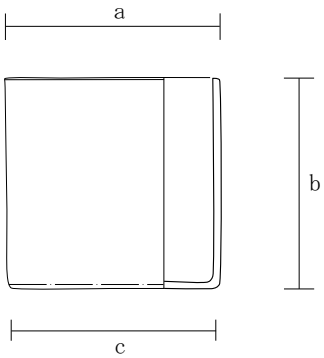
1



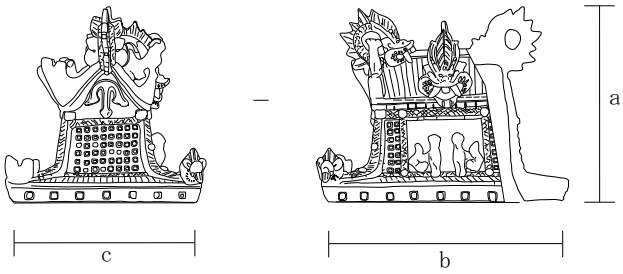
2



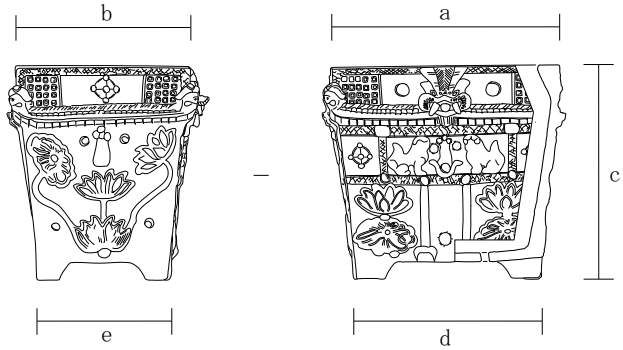
3



4

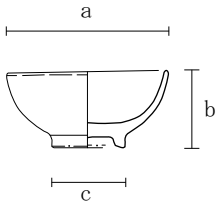


5

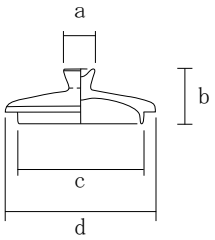


6

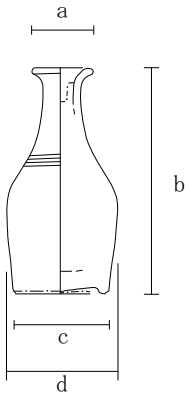
凡例模式図(13)　蔵骨器の計測部位(２)



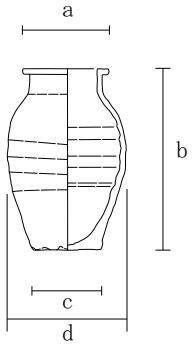
1



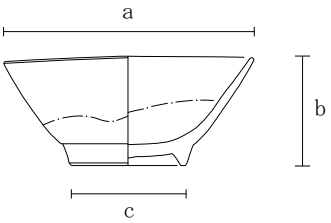
2



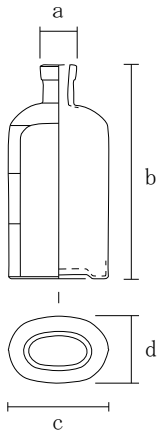
3



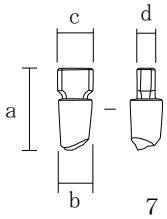
4



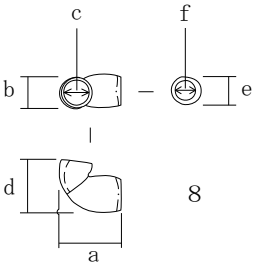
5



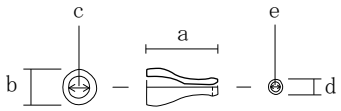
6



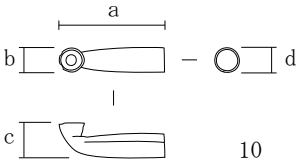
7



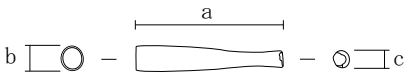
8



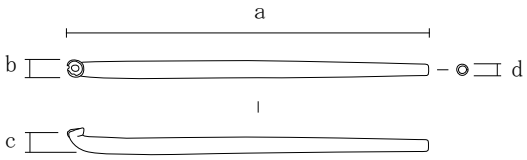
9



10

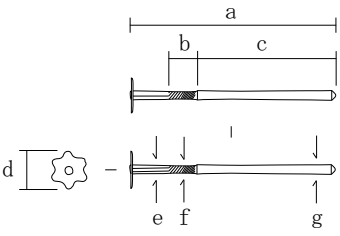


11

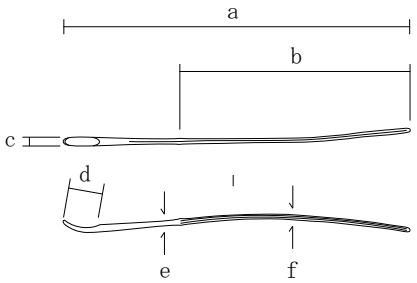


12

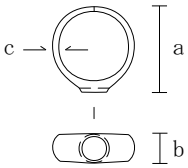
凡例模式図(14) 各遺物の計測部位(1)



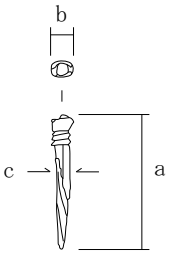
1



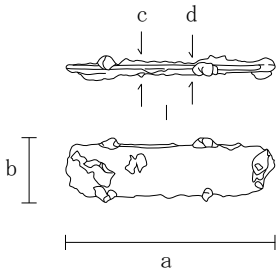
2



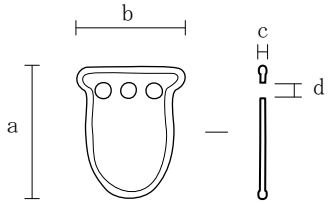
3



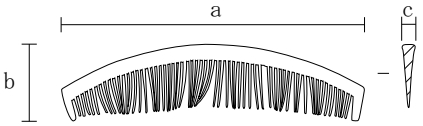
5



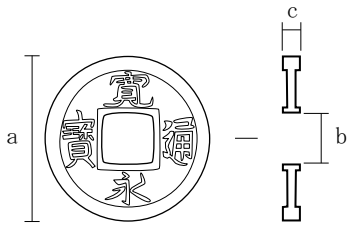
6



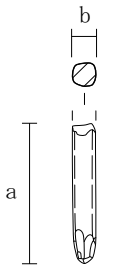
4



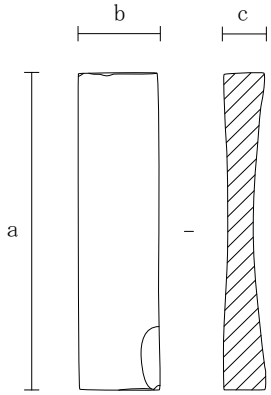
8



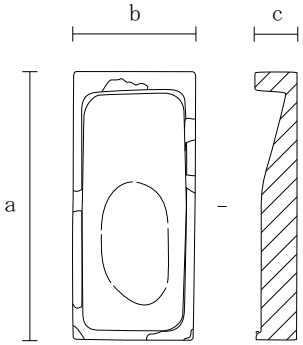
7



9



10



11

凡例模式図(15)　各遺物の計測部位(２)

目　次

序
例言
凡例模式図(１)～(15)
目次
挿図・挿表・図版 目次
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
第Ⅲ章　調査経過と調査組織 …… 8
　第１節　調査経過 …… 8
　第２節　調査組織 …… 14
第Ⅳ章　遺構 …… 17
第Ⅴ章　遺物 …… 117
　第１節　蔵骨器 …… 117
　第２節　その他の遺物 …… 153
　　青花　　色絵　　本土産陶磁器　　沖縄産陶器　　ガラス製品(瓶等)
　　石製品(石筆？・硯)　　プラスチック製品(櫛)　　煙管　　簪　　指輪
　　小鉤　　鉄釘　　針　　金具？　　刀子　　銭貨　　墓誌
第Ⅵ章　まとめ …… 168
附編 …… 171
　附編１　フクヂ山古墓群出土の人骨資料について …… 173
　附編２　フクヂ山古墓群第 11 号墓出土の動物骨資料について …… 177
　附編３　フクヂ山古墓群より検出した漆喰資料について …… 195
　附編４　フクヂ山古墓群より検出したモルタル資料について …… 209
　附編５　フクヂ山古墓群出土銭貨の蛍光Ｘ線分析について …… 224
図版１～109
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　那覇市の位置 …… 5
第２図　那覇市内の遺跡(古墓群)分布図 … 6
第３図　遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図
(昭和初期頃)…… 7
第４図　調査地区位置図 …… 38
第５図　フクヂ山古墓群
古墓分布状況 …… 39
第６図　第１号墓、第1-1号墓 平面図 …… 41
第７図　第１号墓 …… 42
第８図　第１号墓 断面図 …… 43
第９図　第１号墓 平面図 …… 45
第10図　第１号墓 墓室 …… 46
第11図　第２号墓 …… 47
第12図　第２号墓 平面図 …… 48
第13図　第２号墓 断面図 …… 49
第14図　第２号墓 墓庭 遺物分布状況 …… 51
第15図　第２号墓 墓室 …… 53
第16図　第３・４号墓 …… 54
第17図　第３号墓 断面図 …… 55
第18図　第４号墓 断面図 …… 57
第19図　第３～６号墓、第3-1号墓、
第4-1号墓 平面図 …… 59
第20図　第３号墓 墓室 …… 60
第21図　第４号墓 墓室 …… 61
第22図　第３号墓 墓庭 遺物出土状況 …… 62
第23図　第３・４号墓 墓庭 遺物分布状況 … 63
第24図　第５・６号墓 …… 65
第25図　第６号墓 断面図 …… 66
第26図　第５号墓 断面図 …… 67
第27図　第５号墓 墓室 …… 69
第28図　第５号墓 墓室
蔵骨器配置状況概略図 …… 70
第29図　第６号墓 墓室 …… 71
第30図　第７～９・13号墓 平面図 …… 72
第31図　第７号墓 …… 73
第32図　第７号墓 平面図 …… 74
第33図　第７号墓 断面図 …… 75
第34図　第７号墓 羨道方位 …… 77
第35図　第７号墓 墓室 …… 78
第36図　第７号墓 墓室
蔵骨器配置状況概略図 …… 79
第37図　第７号墓 墓庭 遺物出土状況 …… 80
第38図　第７号墓 墓庭 遺物分布状況 …… 81
第39図　第８号墓 …… 83
第40図　第８号墓 平面図 …… 84
第41図　第８号墓 断面図 …… 85
第42図　第８号墓 墓室 …… 87
第43図　第８号墓 墓室
蔵骨器配置状況概略図 …… 88
第44図　第８号墓 墓庭 遺物分布状況 …… 89
第45図　第８号墓 墓庭 遺物出土状況 …… 91
第46図　第８号墓 墓庭 前石垣(左側)上面
銭貨検出状況 …… 92
第47図　第９号墓 …… 93
第48図　第９号墓 平面図 …… 94
第49図　第９号墓 断面図 …… 95
第50図　第９号墓 墓室 …… 97
第51図　第11号墓 …… 98
第52図　第11号墓 断面図 …… 99
第53図　第11号墓 平面図 …… 101
第54図　第11号墓 墓室…… 102
第55図　第11号墓 墓室
蔵骨器配置状況概略図 …… 103
第56図　第11号墓 墓庭
豚頭蓋骨検出状況 …… 104
第57図　第11号墓 墓庭
遺物分布状況(１)…… 105
第58図　第11号墓 墓庭
遺物分布状況(２)…… 107
第59図　第13号墓 …… 109
第60図　第13号墓 断面図・平面図 …… 110
第61図　第13号墓　墓室 …… 111
第62図　鉢形蓋

陶製無頸甕形蔵骨器
陶製有頸甕形蔵骨器 ····· 130
第63図 鉢形蓋
陶製有頸甕形蔵骨器 ····· 131
第64図 鉢形蓋
陶製有頸甕形蔵骨器 ····· 132
第65図 鉢形蓋
陶製有頸甕形蔵骨器
陶製軒付甕形蔵骨器 ····· 133
第66図 陶製軒付甕形蔵骨器 ····· 134
第67図 陶製軒付甕形蔵骨器 ····· 135
第68図 陶製軒付甕形蔵骨器 ····· 136
第69図 陶製家形蔵骨器 ····· 137
第70図 陶製家形蔵骨器 ····· 138
第71図 沖縄産火葬用甕形蔵骨器 ····· 139
第72図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(1)·· 140
第73図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(2)·· 141
第74図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(3)·· 142
第75図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(4)·· 143
第76図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(5)·· 144
第77図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(6)·· 145
第78図 陶製有頸甕形蔵骨器 肩部文様(7)·· 146
第79図 陶製有頸甕形蔵骨器 胴部文様(1)·· 147
第80図 陶製有頸甕形蔵骨器 胴部文様(2)·· 148
第81図 陶製有頸甕形蔵骨器 胴部文様(3)·· 149
第82図 陶製有頸甕形蔵骨器 胴部文様(4)·· 150
第83図 陶製有頸甕形蔵骨器 胴部文様(5)·· 151
第84図 陶製有頸甕形蔵骨器 胴部文様(6)·· 152
第85図 本土産磁器　　ガラス製品
沖縄産施釉陶器　　陶製品 煙管
沖縄産無釉陶器 ····· 160
第86図 金属製品 煙管
金属製品 簪
金属製品 刀子 ····· 161
第87図 金属製品 指輪
鉄釘
石製品 石筆？····· 162
第88図 銭貨 ····· 163
第89図 銭貨 ····· 164
第90図 銭貨 ····· 165
第91図 銭貨 ····· 166
第92図 墓誌
石製品 硯 ····· 167

挿 表 目 次

第１表 古墓計測一覧(１)····· 36
第２表 古墓計測一覧(２)····· 37
第３表 遺物出土一覧 ····· 112
第４表 蔵骨器観察一覧 ····· 125
第５表 遺物(蔵骨器以外)観察一覧 ····· 154

図 版 目 次

図版１ 遺跡一帯の空中写真(１)
図版２ 遺跡一帯の空中写真(２)
図版３ 調査地一帯の空中写真
図版４ 上：調査地一帯の空中写真
下：調査地近景
図版５ 調査地一帯の空中写真
第１～９・11 号墓分布状況
図版６ 上：第１号墓、第 1-1 号墓 空中写真
下：第１号墓
図版７ 第１号墓
図版８ 第１号墓
図版９ 第１号墓
図版10 第１号墓、第 1-1 号墓
図版11 上：第２号墓 空中写真
下：第２号墓
図版12 第２号墓
図版13 第２号墓
図版14 第２～４号墓
図版15 上：第３～６号墓、第 3-1 号墓、
第 4-1 号墓 空中写真

下：第３～５号墓、第5-1 号墓
図版16　上：第３・４号墓、第3-1 号墓、
第5-1 号墓
下：第３～６号墓、第4-1 号墓
第5-1 号墓
図版17　第３～６号墓、第4-1 号墓、
第5-1 号墓
図版18　第３号墓
図版19　第３号墓、第3-1 号墓
図版20　第3-1 号墓、第４号墓
図版21　第４号墓
図版22　第４号墓、第4-1 号墓
図版23　第4-1 号墓、第５・６号墓
図版24　第５号墓 正面
図版25　第５号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版26　第５号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版27　第５号墓
図版28　第5-1 号墓、第６～９号墓
図版29　第６号墓 正面
図版30　第７～９号墓
図版31　上：第７～９・11 号墓 空中写真
下：第７～９号墓 空中写真
図版32　第７号墓
図版33　第７号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版34　第７号墓
図版35　第７号墓
図版36　第７・８号墓
図版37　第８号墓
図版38　第８号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版39　第８号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版40　第８号墓
図版41　第８号墓
図版42　第８号墓
図版43　第８号墓
図版44　第８号墓、第8-1 号墓
図版45　上：第8-1 号墓 安置蔵骨器
下：第９号墓 墓庭
人骨(焼骨)片集中部
図版46　第９号墓
図版47　第９号墓
図版48　第９号墓
図版49　第９号墓
図版50　第９・11 号墓
図版51　上：第 11 号墓 空中写真
下：第 11 号墓 全体
図版52　第 11 号墓
図版53　第 11 号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版54　第 11 号墓 墓室 蔵骨器配置状況
図版55　第 11 号墓
図版56　第 11 号墓
図版57　第 11 号墓 墓庭
図版58　第 11 号墓 墓庭
図版59　第 11 号墓 墓庭
図版60　第 11 号墓 墓庭 豚頭蓋骨
検出状況
図版61　第 11 号墓 墓庭
図版62　第 11 号墓 墓庭
図版63　第 11 号墓
図版64　第 11 号墓 墓室
図版65　第 11 号墓、第 11-1 号墓
図版66　上：第 13 号墓 正面
下：第 13 号墓 墓室 検出状況
図版67　第 13 号墓
図版68　上：第１号墓墓室より検出した
木炭片
下：第１号墓墓室より検出した
卵殻片
図版69　上：第７号墓墓庭前石垣より検出
したニービヌフニ砕片
下：第 11 号墓墓庭出土の沖縄産無
釉陶器(壺)内部より検出した
枝サンゴ礫
図版70　第２号墓 １号蔵骨器
第４号墓 １～６号蔵骨器
図版71　第４号墓 ７～10 号蔵骨器
第５号墓 １号蔵骨器

図版72　第５号墓　２～６号蔵骨器
図版73　第５号墓　７～12 号蔵骨器
図版74　第５号墓 13 号蔵骨器
第６号墓　１号蔵骨器
第７号墓　２・４～７号蔵骨器
図版75　第７号墓　１・３号蔵骨器
図版76　第８号墓　２・９号蔵骨器
図版77　第８号墓　１・３号蔵骨器
図版78　第８号墓　４・５・７・８・
10 号蔵骨器
図版79　第８号墓　６号蔵骨器
第９号墓　１号蔵骨器
図版80　第９号墓　２・３号蔵骨器
図版81　第９号墓　４・５号蔵骨器
図版82　第 11 号墓　３・14・15・26・27・
28 号蔵骨器
図版83　第 4-1 号墓　１号蔵骨器
第 8-1 号墓　１・２号蔵骨器
第 11 号墓　１・２・４・５号蔵骨器
図版84　第 11 号墓　６・７号蔵骨器
第 13 号墓　１・２号蔵骨器
図版85　ミガチ(銘書)
第２号墓　１号蔵骨器
第４号墓　１・２・４～７号蔵骨器
図版86　ミガチ(銘書)
第４号墓　８～10 号蔵骨器
第 4-1 号墓　１号蔵骨器
第５号墓　５・７・13 号蔵骨器
第６号墓　１号蔵骨器
図版87　ミガチ(銘書)
第７号墓　１～７号蔵骨器
第８号墓　１号蔵骨器
図版88　ミガチ(銘書)
第８号墓　２～９号蔵骨器
図版89　ミガチ(銘書)
第８号墓 10 号蔵骨器
第 8-1 号墓　１・２号蔵骨器
第９号墓　１～４号蔵骨器
図版90　ミガチ(銘書)
第９号墓　５号蔵骨器
第 11 号墓　１・５・６・14・
15 号蔵骨器
第 13 号墓　１・２号蔵骨器
図版91　青花 小杯
色絵 小碗
染付 皿
本土産磁器 徳利・小杯
図版92　本土産陶磁器 小杯・小碗
沖縄産施釉陶器 碗・小杯・蓋付鉢
図版93　沖縄産施釉陶器 小杯
図版94　沖縄産施釉陶器 瓶
図版95　沖縄産施釉陶器 瓶
図版96　沖縄産施釉陶器 瓶
沖縄産無釉陶器 壺
図版97　ガラス製品 瓶等
図版98　ガラス製品 おはじき・ビー玉等
石製品 石筆？
プラスチック製品 櫛
本土産磁器 小杯
図版99　陶製品 煙管
金属製品 煙管
図版100　金属製品 煙管
図版101　金属製品 簪
金属製品 指輪
図版102　金属製品 指輪
図版103　金属製品 小鉤
鉄釘
金属製品 針
図版104　金属製品 金具？
金属製品 刀子
図版105　銭貨
図版106　銭貨
図版107　銭貨
図版108　銭貨
図版109　墓誌
石製品 硯

第Ⅰ章　調査に至る経緯

今回のフクヂ山古墓群緊急発掘調査は、那覇広域都市計画道路事業に伴い実施された。３・２・浦１号沢岻石嶺線は、国道 330 号（３・４・52 号内間牧港線）（浦添市内間一丁目）を起点とし、県道宜野湾南風原線（３・４・５号松川石嶺線）（那覇市首里石嶺町３丁目）を終点とする。延長は、約 2,170m となる。本路線は概ね東西方向に伸び、浦添市から那覇市首里石嶺町へ繋ぐ幹線道路である。

今回の調査契機となった道路敷設の工事区域は３・２・浦１号沢岻石嶺線の東端となる場所で、３・３・浦１号国際センター線から県道宜野湾南風原線へ至る沖縄都市モノレールが導入される延長約 210mの部分である。

那覇広域都市計画道路事業に伴い、那覇市首里石嶺町３丁目地内の土地に関して平成 23 年 12 月 13 日付『埋蔵文化財事前審査願』（浦都都第 325 号）が、浦添市都市建設部都市計画課から当市教育委員会へ提出された。それを受けて、当市教育委員会は平成 23 年 12 月 20 日付『埋蔵文化財事前審査報告書』にて、当該申請地に関して「遺跡あり」と回答している。当該地は周知の埋蔵文化財「フクヂ山古墓群」の範囲に含まれ、その当時から複数の古墓が当該地に所在することが知られていた。その後、当該地での古墓分布の詳細に関する踏査が、平成 24(2012)年６月 22 日・26 日に当市教育委員会文化財課職員数名によって実施された。その結果、計 12 基の古墓が確認され、１から 12 までの通し番号を各古墓に付している（第５図参照）。その内、第 10・12 号墓は、道路敷設の施工範囲外であったため、今回発掘調査は行っていない。また、調査対象古墓の現状確認のため、平成 26(2014)年３月 11 日に調査予定地区の踏査を当市文化財課職員が再度行った際に、第９号墓東側に近接して小規模な掘込墓１基を新たに発見し、これを第 13 号墓とした。

工事計画の進展に伴い、浦添市は文化財保護法第 94 条に基づく平成 26 年６月９日付『埋蔵文化財発掘の通知について』（浦都道第 278 号）を当市教育委員会へ提出し、同文書の沖縄県教育委員会への進達を依頼した。その依頼を受けて、当市教育委員会は同通知文書を平成 26 年６月 12 日付文書（那市文財第 97 号）にて沖縄県教育委員会へ進達した。その後、沖縄県教育委員会より上記文書への回答である平成 26 年６月 25 日付『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）』（教文第 573 号）が届き、当市教育委員会から平成 26 年７月１日付（那市文財第 124 号）で浦添市へ伝達した。

発掘調査は、第３次調査まで行われた。第１次発掘調査は、第７～９・11・13 号墓（計５基）を調査対象とし、平成 26(2014)年９月３日から同年 11 月 28 日まで実施した。第２次発掘調査は、第１～６号墓（計６基）を調査対象とし、平成 27(2015)年１月 21 日から同年４月 17 日まで実施した。第３次発掘調査は、道路敷設区域の丘陵開削工事に伴い浦添市の協力を得て、崩落した第２号墓墓室上の大形岩塊を除去し、墓室の検出作業を行い、遺構の実測図作成及び写真撮影等を実施した。調査期間は、平成 27(2015)年９月８日から同年 10 月 30 日までである。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

那覇市は、沖縄県の主要都市で、県庁所在地である。沖縄本島の南西に位置しており、東中国海に面する。北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城市が接する。面積は 39.98ｋ㎡(平成 29 年 10 月 1 日現在)、住民基本台帳による人口は 324,157 人(平成 29 年 1 月 1 日現在)、住民基本台帳による世帯数は 149,274 世帯(平成 29 年 1 月 1 日現在)である。

那覇市の東に識名台地、北東には首里台地があり、標高 80～140mの段丘面を成す。首里台地の西方は、地形的に大きく二段の平坦面に区分され、高位面が標高 30～60m、低位面が標高 10～20mとなる。前者は、小禄や国場、天久等の台地である。後者は、波上宮、久米、牧志一帯で、現在の市街の中心地となる。

市内には概ね東西方向に流れるいくつかの河川があり、その代表的なものが北から安謝川・安里川・久茂地川・国場川となる。安里川に沿う谷状地形は周辺台地との比高差が 50m以上にもなり、深い谷底平野を形成する。国場川の下流域は、かつては大きな入り江で、漫湖と呼称されてきたが、現在ではかなり埋め立てが進行している。安里川の河口には泊ふ頭があり、国場川の河口周辺は那覇ふ頭となっている。

那覇市一帯を構成する地質は、下位から上位へかけて数百万年前の新生代第三紀鮮新世島尻層群、50～70 万年前の第四紀更新世琉球石灰岩、数万年前の安謝粘土層、一万年前から現在までの完新世沖積層及び現世サンゴ礁堆積物に分類される。

那覇市及びその周辺の海域は、島尻層群を基盤とする。島尻層群の最上面が形成する地形(琉球石灰岩基底面構造)は、全体として現在の那覇市の地形の概要とほぼ調和しており、天久～首里の台地と、楚辺～識名の台地、さらに宇栄原台地があり、北西に開いた谷地形となっている。

琉球石灰岩は、島尻層群を不整合に覆い、首里台地から段丘面や沖積面下及び海底下まで共通して分布する。主な分布地は、首里台地、識名台地、宇栄原から那覇空港自衛隊施設一帯、天久台地、波上、牧志、楚辺等に点々と露出する。これらの分布域では首里台地のものが最も高い位置にあり、標高 120～130mの平坦面をつくる。また、その南側の識名台地では、標高 90～100mの平坦面を形成し、首里の平坦面より 20～30m低くなっている。

安謝粘土層は、琉球石灰岩台地面上、または那覇沖の海底下深所に分布し、特に那覇沖海底下の現世サンゴ礁堆積層の直下に層厚１～11mで分布する。琉球石灰岩上面に形成された凹地内に厚く堆積し、周辺の石灰岩風化土(島尻マージ)が流入して形成された二次堆積層であろうとのことである。

沖積層は、那覇市街地からその沖合海底下にまで延びて広く分布しており、最も新しい地層に相当する。琉球石灰岩とその上位に分布する安謝粘土層を不整合に覆い、一般に層厚 10～20mで分布し、最も厚いところでは 35～40mに達する。新港ふ頭第四バース付近の海底では、有機質粘土及びサンゴ細片を含む暗灰色粘土が基底部を形成し、その上位は泥混じり砂で、下部になる程砂の割合が多くなるとのことである。上位に向かって次第に泥質から粘土質になり、きわめて軟弱な粘土層であるという。

首里石嶺町は、那覇市の北東隅に位置し、北は浦添市、東は西原町に接する。町域の南西側が１丁目、南東側が２丁目、北西側が３丁目、北東側が４丁目となる。平成 30 年３月時点での首里石嶺町１

丁目の人口は 2,918 人、世帯数は 1,107 世帯である。２丁目の人口は 6,340 人、世帯数は 2,581 世帯、３丁目は 3,825 人、1,541 世帯、４丁目は 8,724 人、3,709 世帯である。石嶺は、かつては西原村に属していたが、大正９(1920)年に末吉・大名とともに首里区に編入された。大正末期に、石嶺町１～４丁目となった。

近世琉球となる時代、石嶺には、伊江御殿、読谷山御殿、豊見城御殿等の王族の広大な墓所が所在していた。現在でも、かつての王族の墓が首里石嶺町内にいくつか点在している。伊江御殿墓は、首里石嶺町１丁目に所在する。県内で最も古い亀甲墓とされ、1687(康熙 26)年頃に造営されたものとされる。国指定の建造物である。読谷山御殿の墓も亀甲墓で、首里石嶺町２丁目に所在する。18 世紀末から 19 世紀初頭へかけての造営であるという。市指定建造物である。

フクヂ山は､那覇市首里石嶺町と浦添市字前田との境に所在する概ね南西から北東へ伸びる丘陵で、頂部には琉球石灰岩の岩盤となる部分がある。丘陵は、浦添市側の北側斜面に比べ、那覇市側の南側斜面では傾斜がきつくなっており、断崖状の地形となる場所もある。現在、フクヂ山の南北の斜面地は広い範囲で墓地として利用されており、多数の現代墓が密集して設置されている。丘陵の地質的基盤としては、頂部に見られる琉球石灰岩の岩盤のほかは、南北斜面で島尻層群の砂岩(ニービ)や泥岩(クチャ)が確認できる。

フクヂ山の地名の由来は、かつて丘陵上にオトギリソウ科の常緑高木である福木(ふくぎ)が密生していたためであるという。その当時は、ユーリードゥクル(幽霊の出る所)として恐れられていたとのことである。しかし、それらの福木も、沖縄戦時に地下壕に利用するための用材として殆どが伐採されてしまったとのことである。今では、往時の姿を全く見ることができない。

《引用・参考文献》

沖縄風土記刊行会(編) 『沖縄風土記全集 那覇の今昔』 沖縄図書教材株式会社 1969 年 279・280 頁

「思い出のわが町〈36〉 石嶺町」 『沖縄タイムス(朝刊)』 1976 年 12 月 30 日

宮里朝光 「第一章第一節一(四) 旧西原村」 『那覇市史』(資料篇第２巻中の７ 那覇の民俗) 1979 年 28～30 頁

東恩納寛惇 「南島風土記」 『東恩納寛惇全集』７ 第一書房 1980 年

久高友章 「石嶺 いしみね」 沖縄タイムス社 『沖縄大百科事典』上巻 1983 年

中山満 「那覇市 なはし」 沖縄タイムス社 『沖縄大百科事典』下巻 1983 年

古川博恭 「第一編第一章第一節 地形・地質」 『那覇市史』(通史篇第１巻 前近代史) 1985 年

那覇市教育委員会 『那覇市歴史地図 ― 文化遺産悉皆調査報告書』 1986 年３月

「いしみね 石嶺」 「那覇市」 『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川書店 1986 年 152・739～745 頁

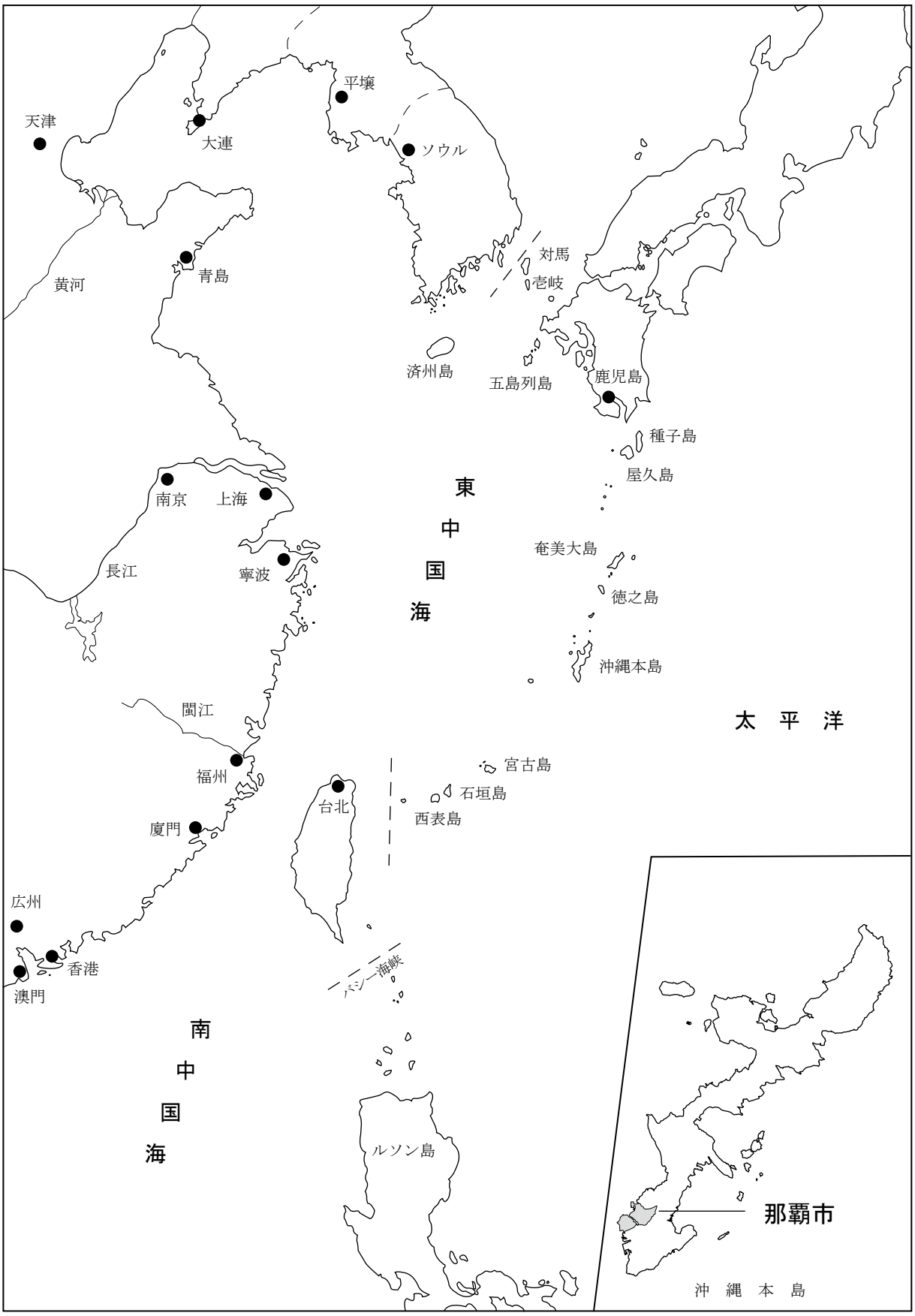
宮城勉 「第一編第一章 地形・地質」 『浦添市史』第六巻(資料編５) 1986 年

久手堅憲夫 『南島文化叢書 22 首里の地名 ― その由来と縁起』 第一書房 2000 年 372～390 頁

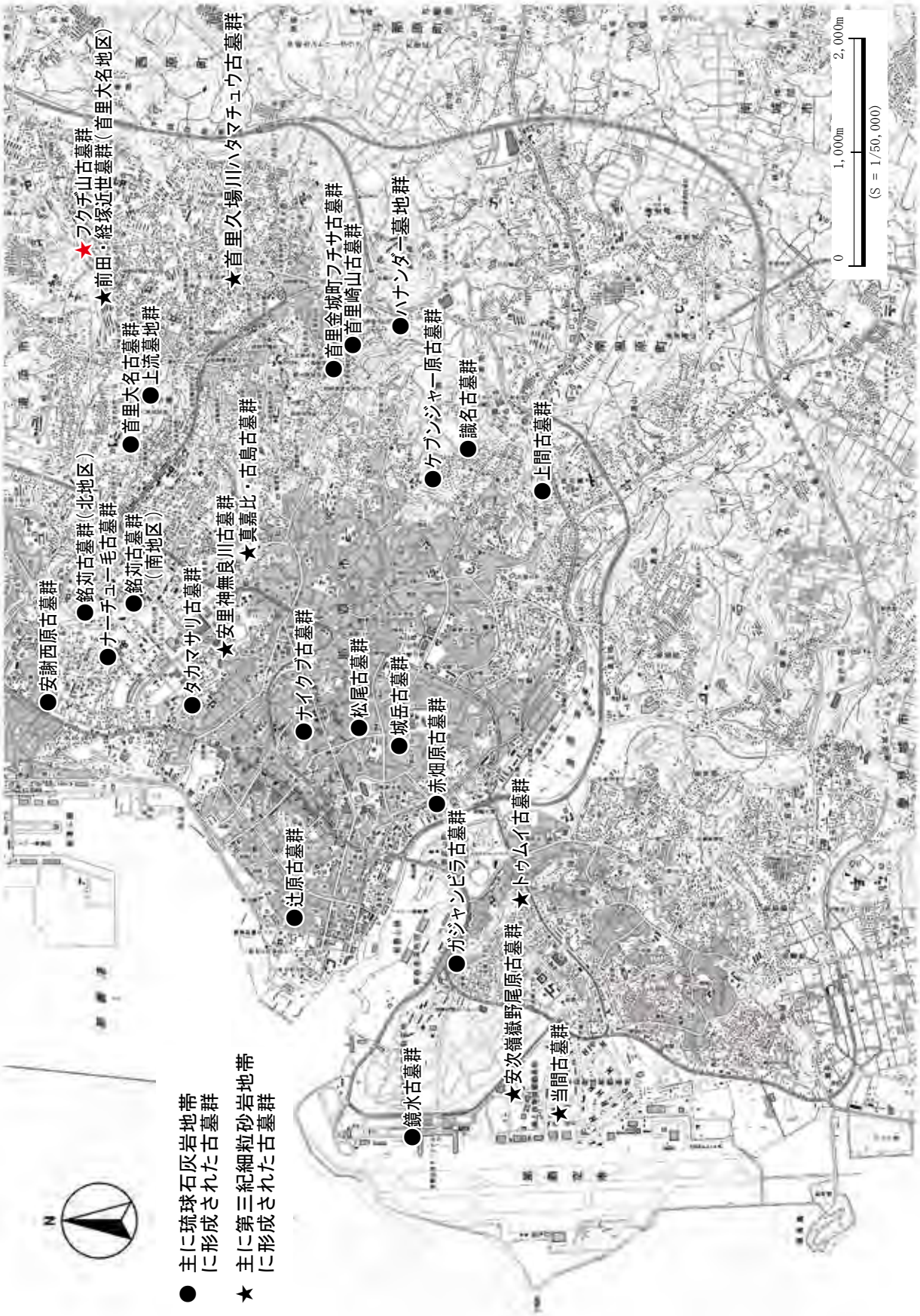
「旧島尻郡地区」 「石嶺村」 『日本歴史地名大系第 49 巻 沖縄県の地名』 平凡社 2002 年 168・184 頁

那覇市教育委員会 『那覇市の文化財 平成 18 年度』 2007 年３月

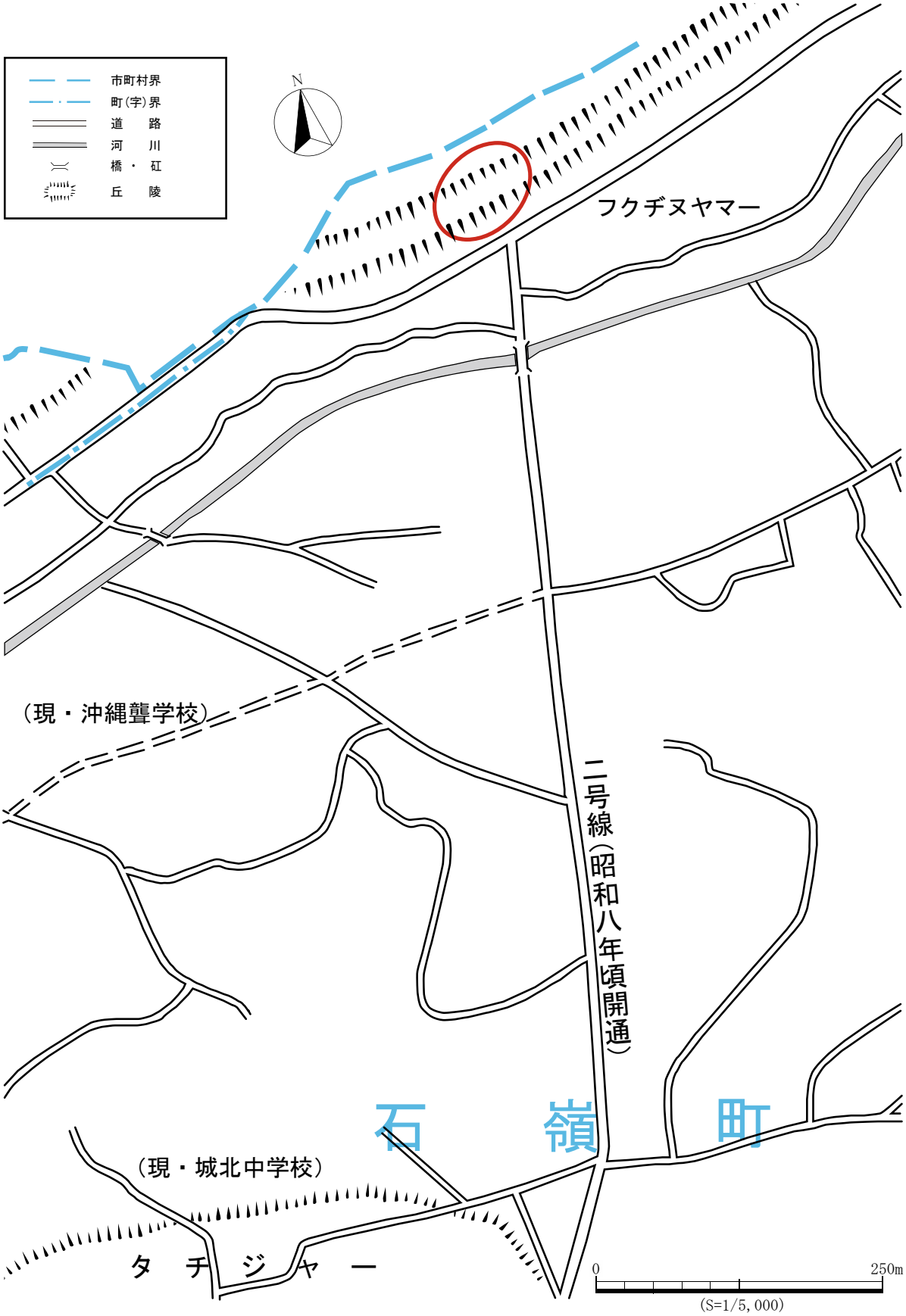
『西原町史』第一巻(通史編 Ⅰ・Ⅱ) 2011 年
沖縄県企画部市町村課(編)「那覇市」『沖縄県市町村概要』(公財)沖縄県市町村振興協会 2018(平成 30)年３月
那覇市企画財務部企画調整課統計グループ 『統計那覇 平成 30 年５月 (№171)』 那覇市役所


天津
大連
平壌
ソウル
対馬
壱岐
青島
黄河
済州島
五島列島
鹿児島
種子島
屋久島
南京
上海
東
中
国
海
奄美大島
寧波
長江
徳之島
沖縄本島
閩江
太　平　洋
宮古島
福州
台北
石垣島
西表島
厦門
広州
香港
澳門
バシー海峡
南
中
国
海
ルソン島
那覇市
沖　縄　本　島

第１図　那覇市の位置



第２図　那覇市内の遺跡（古墓群）分布図



第３図　遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図(昭和初期頃)　(S ≒ 1/5,000)
(赤が、調査地区位置)

第Ⅲ章　調査経過と調査組織

第１節　調査経過

フクヂ山古墓群の緊急発掘調査は、第１次発掘調査を平成 26(2014)年９月３日に開始し、同年 11 月 28 日に終了した。第１次発掘調査は、第７～９・11・13 号墓の計５基を調査対象として行った。第２次発掘調査は、平成 27(2015)年１月 21 日に開始し、同年４月 17 日に終了した。第２次発掘調査は、第１～６号墓の計６基を調査対象として行った。第３次発掘調査は、平成 27(2015)年９月８日に開始し、同年 10 月 30 日に終了した。第３次発掘調査は、崩壊した第２号墓の墓室を調査対象とし、浦添市の協力を得て行った。３次に及ぶ調査は、那覇市市民文化部文化財課の指導及び監督の下、株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店に発掘調査作業全般の支援業務委託を行い、実施した。以下に、調査経過の概略を記す。

《第１次発掘調査》

平成 26(2014)年

９月３日(水)～９月 15 日(月)

調査前準備。

９月 16 日(火)

作業員による現地作業開始。ハブ避けのためのネット設置作業を行った。

９月 19 日(金)

調査地区内の磁気探査を開始。第 11 号墓の屋根にて、小型の不発弾を発見。当日の内に自衛隊による処理が行われ、終了した。

９月 22 日(月)

伐採業者による機械を使用した調査地区周辺の樹木伐採を開始。

９月 24 日(水)

作業員等による第７～９号墓の遺構検出作業開始。

９月 26 日(金)

第７・８号墓の漆喰・モルタル等を除去する前の写真撮影を行った。第 11・13 号墓の遺構検出作業開始。

９月 29 日(月)

第７・８号墓の墓室より検出した遺物の取り上げを行い、墓室内部での遺構検出作業を行った。

10 月３日(金)

台風 18 号の接近に備え、調査地区内の暴風対策を行った。第９号墓墓室の写真撮影を実施。

10 月９日(木)

第 11・13 号墓の遺構検出状況の写真撮影。第 11 号墓墓室の遺物検出状況の写真撮影。台風 19 号の接近に備え、調査地区内の暴風対策を行った。

10 月 15 日(水)

第 11 号墓の遺構検出状況の写真撮影。第７～９号墓の漆喰・モルタル除去後の写真撮影。

10 月 16 日(木)

第７～９号墓の実測図作成に伴う写真撮影を開始。第 13 号墓の遺構検出状況の写真撮影。

10 月 17 日(金)

第７～９・13 号墓の実測図作成に伴う写真撮影を実施。第 11 号墓墓室の漆喰・モルタル除去作業を開始。

10 月 20 日(月)

第７～９号墓の屋根に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を開始。第７号墓墓庭を半裁し、西側を掘削。

10 月 21 日(火)

第７～９・13 号墓の墓庭を半裁し、西側を掘削。第 11 号墓墓室の漆喰・モルタル除去作業が終了。第９号墓墓庭より、人骨(焼骨)片集中部検出。

10 月 22 日(水)

第７・８号墓墓室の半裁作業開始。第８号墓の墓庭南西隅で、遺物集中部２を検出。第７～９号墓屋根の土層堆積状況の写真撮影終了。

10 月 23 日(木)

第７～９号墓屋根の土層断面図作成開始。第７・８号墓墓庭及び第 13 号墓前の土層断面図作成開始。第８号墓墓庭の遺物集中部２の写真撮影。第８号墓墓庭の前石垣(左側)上面より、銭貨数枚が重なった状態で検出された。

10 月 24 日(金)

第７～９号墓墓庭及び第７・９号墓墓室の土層断面図作成。第８号墓墓庭前石垣上面検出の銭貨集中、及び第８号墓墓庭遺物集中部２の実測図作成に伴う写真撮影を実施。

10 月 27 日(月)

ドローンによる調査地区全体の空中写真撮影を行った。また、第 11 号墓の実測図作成に伴う写真撮影を実施。

10 月 28 日(火)

第７～９号墓屋根のトレンチを埋め戻した。

10 月 29 日(水)

第７・８号墓墓庭東側を掘削。第７号墓墓庭南東隅にて遺物集中部を検出。第８号墓墓庭南東隅にて遺物集中部１を検出。第８号墓墓庭前石垣上面より検出された複数の銭貨を取り上げた。

10 月 30 日(木)

第７・８号墓の墓庭南東隅で検出された遺物集中部の写真撮影を行った。

10 月 31 日(金)

第７・８号墓の墓庭南東隅で検出された遺物集中部から各遺物を取り上げた。その後、各墓の墓庭を埋め戻した。本日で、第７～９・13 号墓での調査作業は、ほぼ終了した。第 11 号墓の正面図及び縦断面図の作成に伴う写真撮影を実施。また、測量も行った。

11 月４日(火)

第 11 号墓墓庭の掘削を行った。墓庭東側第１層より、人骨片・蔵骨器片を検出。第 11 号墓墓

室の実測図作成に伴う写真撮影を実施。

11 月５日(水)

第 11 号墓墓庭の掘削作業。墓庭南東側で、小杯・瓶等の本土産磁器や沖縄産陶器、煙管、簪、指輪等を検出。

11 月６日(木)

第 11 号墓墓庭掘削に伴い、墓庭のほぼ中央にてブタの頭蓋骨(下顎骨)が複数検出された。頭蓋骨には、複数枚の銭貨が伴っていた。

11 月 10 日(月)

第 11 号墓の屋根に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を開始。墓庭中央にも、土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を開始した。墓庭南東隅の遺物取り上げを開始。墓庭中央で検出したブタ頭蓋骨(下顎骨)の実測図作成に伴う写真撮影を実施。

11 月 12 日(水)

第 11 号墓屋根の土層断面図作成開始。墓庭の土層堆積状況の写真撮影を行った後、土層断面図作成開始。

11 月 13 日(木)

第 11 号墓墓庭右石垣直下に沿ってトレンチを設定し、掘削を開始。

11 月 14 日(金)

第 11 号墓墓庭中央で検出したブタ頭蓋骨(下顎骨)の写真撮影を実施。作業員による現地作業は、本日で終了。以後は、受託調査員等のみで現地作業を行った。

11 月 15 日(土)

第 11 号墓墓庭中央で検出したブタ頭蓋骨(下顎骨)の実測図作成に伴う写真撮影を実施。

11 月 19 日(水)

第 11 号墓墓庭中央で検出したブタ頭蓋骨(下顎骨)の実測図作成を、現地にて行った。

11 月 20 日(木)

第 11 号墓墓庭中央で検出したブタ頭蓋骨(下顎骨)の取り上げを行った。また、墓庭右石垣直下に沿って設定したトレンチ内より出土した遺物の写真撮影を行った。

11 月 21 日(金)

墓庭右石垣直下に沿って設定したトレンチ内より出土した遺物の取り上げを行った。取り上げ終了の後、トレンチを埋め戻した。本日で、現地での調査作業は全て終了した。

11 月 25 日(火)～28 日(金)

発掘調査業務委託終了に伴う成果物納品準備のため、室内にて整理作業を行った。

《第２次発掘調査》

平成 27(2015)年

１月 21 日(水)～２月 12 日(木)

調査前準備。

２月 13 日(金)・14 日(土)

伐採業者による機械を使用した調査地区周辺の樹木伐採を行った。

2月16日(月)

作業員による現地作業開始。降雨のため、午後から作業を始めた。ハブ避けのためのネット設置作業を行った。第１～４号墓の遺構検出作業を開始。

2月17日(火)

調査地区内の磁気探査を行った。第１～６号墓の遺構検出作業を実施。

2月19日(木)

第３～６号墓の遺構検出の後、写真撮影を行った。第3-1号墓検出。

2月20日(金)

第１号墓の遺構検出の後、写真撮影を行った。第３・４号墓は、漆喰・モルタルの除去作業を開始。第２号墓墓室の岩盤崩落部分にて、不発弾を発見。当日の内に自衛隊による処理が行われ、終了した。

2月23日(月)

第１号墓は、漆喰・モルタルの除去作業を開始。

2月26日(木)

第３号墓墓室の漆喰・モルタルの除去作業を開始。

3月２日(月)

第５号墓サンミデー上に堆積した岩塊や土砂を除去。

3月３日(火)

第１号墓墓庭中央に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を開始。第２号墓墓室の岩盤崩落部分にて、迫撃砲弾及び手榴弾を発見。当日の内に自衛隊による処理が行われ、終了した。

3月５日(木)

第１号墓右側全体(屋根・右石垣２等)の漆喰・モルタル除去作業を開始。

3月９日(月)

第４号墓墓室の写真撮影。第５号墓墓室の漆喰・モルタルの除去作業を開始。第６号墓墓室の現況での写真撮影の後、遺構検出作業を開始。

3月10日(火)

第１号墓屋根中央に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を開始。第４号墓墓室の漆喰・モルタル除去後の写真撮影。第５号墓外観の漆喰・モルタル除去後の写真撮影。第６号墓墓室検出状況の写真撮影。

3月11日(水)

第５号墓墓室内の蔵骨器を取り出した。第５号墓墓室の現況での写真撮影。

3月12日(木)

第１号墓墓室検出状況の写真撮影。

3月13日(金)

第１号墓墓庭西側外の表土掘削、及び墓庭南西側外にある階段の漆喰・モルタルの除去作業を開始。第３～６号墓の実測図作成に伴う写真撮影を開始。

3月16日(月)

第１号墓墓庭西側外に遺構検出のためのトレンチを設定し、掘削を開始。第１号墓墓室の漆喰・モルタルの除去作業を開始。

３月 18 日(水)

第１号墓墓室・羨道の検出状況の写真撮影。第４号墓墓室の実測図作成開始。

３月 19 日(木)

第２号墓の墓庭表土掘削開始。第６号墓墓室の実測図作成開始。

３月 20 日(金)

第１号墓外観の漆喰･モルタル除去後の写真撮影。第１号墓墓庭西側外にて第 1-1 号墓を確認。第５・６号墓墓室の実測図作成。第２号墓墓庭にて、手榴弾を発見。当日の内に自衛隊による処理が行われ、終了した。

３月 23 日(月)

第１号墓羨道の実測図作成開始。第４・５号墓墓庭の表土掘削開始。

３月 25 日(水)

ドローンによる第１号墓の実測図作成に伴う写真撮影を実施。第２号墓墓庭での表土掘削に伴い、墓庭排水口を検出。第３号墓墓庭の表土掘削開始。

３月 26 日(木)

第１号墓墓室の実測図作成開始。第２号墓墓庭前石垣外にて、排水に伴う暗渠を検出。第４号墓墓庭表土掘削に伴い、遺物集中部を検出。

３月 27 日(金)

第３～５号墓屋根に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を開始。第５号墓墓室の実測図作成開始。

３月 30 日(月)

第２号墓墓庭にて、黄燐弾と手榴弾を発見。当日の内に自衛隊による処理が行われ、終了した。

３月 31 日(火)

ドローンによる第１号墓の実測図作成に伴う写真撮影を実施。第３・４号墓墓室の土層堆積状況確認のため、掘削開始。第３号墓墓庭の掘削作業に伴い、硯１点と石筆(？)１点が検出された。

４月１日(水)

第３号墓墓室の実測図作成開始。第５号墓墓室の土層堆積状況確認のため、掘削開始。

４月２日(木)

第２号墓全体の遺構検出状況の写真撮影。第３～５号墓墓庭の土層堆積状況の写真撮影。

４月３日(金)

ドローンによる調査地区全体の空中写真撮影を行った。

４月６日(月)

第１号墓屋根･墓庭の土層断面図作成を行った。第１号墓墓庭南東隅にて、墓庭排水口を検出。第２号墓墓庭に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定し、掘削を行った。第２号墓墓庭の土層堆積状況を写真撮影。第２号墓墓庭南東隅にて、遺物集中部を検出。第３～５号墓の土層断面図作成を行った。第４号墓墓庭の遺物集中部全体を検出。

４月７日(火)

第３～５号墓墓庭の土層堆積状況確認のための畦を掘削し、除去した。

４月８日(水)

第３～５号墓墓室の土層堆積状況の写真撮影。

４月９日(木)

調査終了の前に調査地区周辺の安全対策を作業員等にて実施。各墓やその周辺に設けたトレンチを、土嚢にて埋め戻した。第２号墓墓庭南東隅の遺物集中部(上部)の検出作業を行った。

４月 10 日(金)

作業員による現地作業は、本日で終了。調査地区周辺の安全対策を作業員等にて実施。第２号墓墓庭南東隅の遺物集中部(下部)の検出作業を行った。その後、遺物出土状況の写真撮影を行い、出土遺物を取り上げた。本日で、現地での調査作業は終了した。

４月 13 日(月)～17 日(金)

発掘調査業務委託終了に伴う成果物納品準備のため、室内にて整理作業を行った。

《第３次発掘調査》

平成 27(2015)年

８月 31 日(月)・９月２日(水)

浦添市の協力の下、道路敷設区域の丘陵開削工事に伴って、岩盤が崩落した第２号墓墓室上の大形岩塊を土木機械により除去した(図版 14 の１段目左・右)。

９月８日(火)・９日(水)

株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店による現地での発掘調査作業を開始。作業員による第２号墓墓室の検出作業。墓室天井はなく、前後左右の四壁も殆ど残っていなかった。墓正面の形態も、全く不明である。墓室底面と羨道、サンミデーの一部、右袖石の基部が、検出された。調査作業に伴い、沖縄戦時のものと推測される銃弾３発を発見。発見した銃弾３発について、警察署へ連絡。その後、警察署員により、危険物処理に伴う手続きが行われた。

９月 10 日(木)

第２号墓墓室の平面実測図の作成。作業員による現地作業は、本日で終了。

９月 11 日(金)・14 日(月)

第２号墓墓室の平面実測図の作成。

９月 15 日(火)

平面図及び見通し断面図の作成。

９月 16 日(水)

見通し断面図の作成。本日で、現地での調査作業は終了した。

９月 17 日(木)～10 月 30 日(金)

発掘調査業務委託終了に伴う成果物納品準備のため、室内にて整理作業を行った。

第２節　調査組織

本遺跡の調査組織は、次のとおりである。

事業主体	那　覇　市	市　　長	翁長　雄志(平成 12～26 年度)
	〃	市　　長	城間　幹子(平成 26 年度～)
	市民文化部	部　　長	島田　聡子(平 26・27 年度)
	〃	〃	玉寄　隆雄(平成 28 年度)
	〃	〃	徳盛　　仁(平成 29 年度～)
	〃	副　部　長	玉寄　隆雄(平成 26・27 年度)
	〃	〃	渡慶次　一司(平成 28 年度～)
事業所管	那覇市市民文化部文化財課	課　　長	古塚　達朗(平成 25～27 年度)
	〃	〃	岸本　　修(平成 28・29 年度)
	〃	〃	末吉　正睦(平成 30 年度～)

※　那覇市が施行する市内の埋蔵文化財に関する開発調整・試掘調査・発掘調査は、那覇市市民文化部文化財課埋蔵文化財グループ及び開発調整グループが主管する。

調査総括	那覇市市民文化部文化財課	副　参　事	島　　弘(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	内間　　靖(平成 30 年度～)
調査事務	那覇市市民文化部文化財課	副　参　事	島　　弘(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	内間　　靖(平成 30 年度～)
〃	〃	主　　幹	内間　　靖(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	玉城　安明(平成 30 年度～)
〃	〃	主　　査	新里　清美(平成 25～27 年度)
〃	〃	〃	神谷　あけみ(平成 28 年度～)
〃	〃	主任主事	瑞慶山　由香里(平成 25・26 年度)
〃	〃	〃	高嶺　朝美(平成 27～29 年度)
〃	〃	〃	徳元　　剛(平成 26 年度・臨時職員)
調　査　員	那覇市市民文化部文化財課	副　参　事	島　　弘(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	内間　　靖(平成 30 年度～)
〃	〃	主　　幹	内間　　靖(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	玉城　安明(平成 30 年度～)
〃	〃	専門員主査	玉城　安明(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	仲宗根　啓(平成 25 年度～)
〃	〃	〃	樋口　麻子(平成 30 年度～)
〃	〃	主任主事	島　　弘(平成 30 年度～)

調　査　員	那覇市市民文化部文化財課	主任専門員	樋口　麻子(平成 25～29 年度)
〃	〃	〃	當銘　由嗣(平成 25 年度～)
〃	〃	〃	知念　政樹(平成 25～30 年度)
〃	〃	主任学芸員	安斎　真知子(平成 29 年度～)
〃	〃	〃	吉田　健太(平成 30 年度～)
〃	〃	学　芸　員	安斎　真知子(平成 25～28 年度)
〃	〃	〃	吉田　健太(平成 27～29 年度)
〃	〃	〃	天久　瑞香(平成 30 年度～)
〃	〃	〃	江上　　輝(平成 30 年度～)
〃	〃	調査補助員	加納　立巳(平成 26 年度・非常勤職員)
〃	〃	非常勤専門員	城間　千栄子(平成 26 年度)
〃	〃	〃	長濱　愛梨(平成 26～28 年度)
〃	〃	〃	徳元　　剛(平成 27～30 年度)
〃	〃	〃	牧山　美緒(平成 28 年度)
〃	〃	〃	玉城　真紀子(平成 28 年度)
〃	〃	〃	江上　　輝(平成 28・29 年度)
〃	〃	〃	砂川　暁洸(平成 29 年度)
〃	〃	〃	渡辺　幸雄(平成 29・30 年度)
〃	〃	〃	阿部　直子(平成 29 年度)
〃	〃	〃	髙良　夏枝(平成 29・30 年度)
〃	〃	〃	山道　　崚(平成 30 年度)
〃	〃	〃	名嘉山　美野(平成 30 年度)

平成 26・27 年度発掘調査業務委託(第１～３次発掘調査)

株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店

知花 一正(支店長)　　宇田 員将(調査員)　　上原 尚樹(土木施工管理技士・測量士)

亀島 正(調査補助員)　　喜屋武 志保

平成 28 年度人骨資料分析業務委託

株式会社 文化財サービス 沖縄営業所

安座間 奈緒(所長)　　土肥 直美

平成 28 年度動物骨資料分析業務委託

株式会社 文化財サービス 沖縄営業所

安座間 奈緒(所長)　　金井 慎司

平成 28 年度漆喰資料分析業務委託

パリノ・サーヴェイ株式会社 沖縄支店

上田 圭一(支店長)　石岡 智武　坂元 秀平

平成 28 年度モルタル資料分析業務委託

パリノ・サーヴェイ株式会社 沖縄支店

上田 圭一(支店長)　石岡 智武

平成 28 年度銭貨資料蛍光X線分析業務委託

パリノ・サーヴェイ株式会社 沖縄支店

上田 圭一(支店長)　齋藤 紀行

平成 28 年度蔵骨器オルソ写真作成業務委託

株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所

平井 貢(所長)　持田 健司　半浦 聖智　喜多 亮輔　佐藤 武彦　菊池 康一郎

平成 29 年度遺構図編集業務委託

株式会社 琉球サーベイ

大濵 正之(代表取締役)　後神村 純史郎　伊計 めぐみ　富里 歩美

平成 29 年度蔵骨器写真図版作成業務委託

株式会社 アーキジオ パシフィック支店

西井 敏夫(支店長)　宮平 千春(調査員)

第Ⅳ章　遺 構

第５～61 図。図版１～67。

本報告で使用する古墓の部分名称については、凡例模式図（１）・（３）・（５）をご覧いただきたい。また、凡例模式図（２）・（４）・（６）に基づく各古墓の計測値は、第１・２表に示した。

今回実施したフクヂ山古墓群での緊急発掘調査は、第３次調査まで行った。第１次発掘調査は、第７～９・11・13 号墓となる計５基の古墓を調査対象とした。第２次発掘調査では、第１～６号墓となる計６基の古墓を調査対象としている。第３次発掘調査は、第２次調査で確認することのできなかった第２号墓の墓室を調査対象とした。

今回調査を行った古墓の外観の形態としては、第１・３・４号墓が平葺墓、第７号墓が破風墓、第 11 号墓が亀甲墓、第 13 号墓が規模の小さい掘込墓となる。今回、第１号墓を平葺墓としたが、亀甲墓との折衷型とすべきものかもしれない。その点については、後述する。第２号墓は、掘込墓になる可能性が高いと考えられるが、墓室が崩壊しているため判然としない。第５号墓は、墓正面に軒の構造が一部残存してはいるが､何らかの理由で屋根の構造物のほぼ全体がある時期崩壊したようであり、墓の外観の形態が判然としない。第３・４号墓と同じく、平葺墓となるものか。第６号墓は、第４・５号墓の墓庭石垣の石積み内に墓室が構築された規模の小さな墓である。仮墓(註１)的な機能を有するものと推測される。ここでは、このような形態の墓を「石積墓」と仮称する。第８・９号墓は、墓堂の外観が亀甲墓に似るが､マユ(眉)やウーシ(臼)､スディイシ(袖石)等がなく(凡例模式図(３)参照)、屋根の形状も蒲鉾形となり直線的である。このように、墓の全体的な外観が亀甲墓に類似するが亀甲墓そのものとは細部の構造が異なる墓を「疑似亀甲墓」と仮称する。

なお、道路敷設の施工範囲外であったため、今回発掘調査を行っていない第 10・12 号墓は、２基ともに亀甲墓である。

第１～５・７・13 号墓となる計７基の古墓の墓室は、地質的な基盤を水平方向に掘り込んだ横穴となるものである。第１号墓は、ニービ(第三紀細粒砂岩)に墓室となる横穴を掘り込んでいる。第２号墓は、墓室の検出状況から、琉球石灰岩とクチャ(島尻層群シルト質泥岩)との間の不整合面を掘り込んで、墓室を設けているようである。残る第３～５・７・13 号墓は、琉球石灰岩の岩盤に横穴を掘削し、墓室としている。

それに対し、第６・８・９・11 号墓となる計４基の古墓の墓室は、琉球石灰岩を加工した切石を使用して構築した墓室構築墓である。第６号墓の墓室については、上述したように規模の小さな石積墓である。第８・９号墓の墓室は、部分的な墓室構造に岩盤をうまく利用しており、墓室後壁や棚等は岩盤を加工して設けている。第 11 号墓は、墓室底面から天井までの全ての墓室構造を、切石によって構築していると推測される。第８・９・11 号墓の墓室天井は、その左右方向の断面形がいずれもアーチを描くもので、いわゆる「マチバカ(巻墓)」と呼ばれるものである。

規模の小さい第６・13 号墓を除く、計９基の古墓の墓室面積(第２表)は、概ね４～６㎡程である。同じく計９基のシルヒラシドゥクルの面積は、1.3～2.3 ㎡程となる。シルヒラシドゥクルの前後方向の長さ(第２表・計測値Ⅰ)は 0.8～1.5m程、左右方向の長さ(計測値Ｊ)は 1.2～1.8m程となる。墓口羨道の長さ(計測値Ａ)については、70～238 ㎝と数値にばらつきが見られるが、概ね１m前後となる

ものが多いようである。墓口幅(計測値Ｂ)は、61～66 ㎝の範囲に収まる概ね一定した数値となっており、何らかの規定があったことを窺わせる。墓口及び羨道の高さ(計測値Ｃ・Ｄ)は、計測値Ｃが 92～106 ㎝、計測値Ｄが 79～99 ㎝の範囲に収まる。

墓室のシルヒラシドゥクルに据える被葬者の遺体を納めた棺箱(クヮンチェーバク)は、その寸法が概ね決まっており、長さ３尺６寸４分(110.3 ㎝)、幅１尺５寸４分(46.7 ㎝)、高さ１尺６寸４分(49.7 ㎝)が標準であるという(註２)。棺箱がシルヒラシドゥクルに占める面積は、約 0.52 ㎡となる。上述した墓室のシルヒラシドゥクルや墓口・羨道の寸法・面積は、この棺箱の標準寸法と整合的で、当然ではあるが棺箱の寸法を意識して墓を構築していることが分かる。

今回、屋根構造を有する第１・３・４・７～９・11 号墓に関して、屋根の傾斜角度の計測を行った(第１表・計測値８)。平葺墓となる第１・３・４号墓の屋根の傾斜角度は、22～24° 程となる。破風墓となる第７号墓は、27° である。疑似亀甲墓となる第８・９号墓及び亀甲墓となる第 11 号墓では、15～16° 程となっている。今回の調査結果では、墓堂の外観形態が同一か類似する古墓の屋根の傾斜角度は､平葺墓及び亀甲墓(疑似亀甲墓)では各々でかなり近い数値を示している｡この事については、今後の調査事例の蓄積に伴い、再度検討されるべきであろう。

道路敷設工事の実施に伴い、平成 26 年度の７月から 11 月へかけて事前に行われた第４・５・７～９・11 号墓(計６基)の墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に、那覇市文化財課職員が許可を得て立会い、調査を行うことができた。その際に、第５・７・８・11 号墓の計４基については、墓所有者の許可を得て墓口を開けた直後の蔵骨器の配置状況を写真撮影させていただくことができた。第５号墓の蔵骨器の配置状況を、図版 25・26 に示した。第７号墓については図版 33、第８号墓は図版 38・39、第 11 号墓は図版 53・54 に蔵骨器の配置状況を示した。その画像に基づき、蔵骨器の配置状況概略図を作成した。第５号墓は第 28 図、第７号墓は第 36 図、第８号墓は第 43 図、第 11 号墓は第 55 図に、蔵骨器の配置状況について概略図を示した。図中の円形または方形は、甕形(円筒形)または家形となる蔵骨器の外底面の形状を表現している。円形または方形の内側に記入された矢印は、蔵骨器の正面向きを表している。矢印のないものについては、蔵骨器に正面がないか、正面の向きが不明のものである。

以下に、各古墓の特徴について述べる。

第１号墓は、墓堂の外観形態が平葺墓となるものである。第６～10 図に図示した。今回、第１号墓の屋根の形状から平葺墓としたが、屋根前側の左右に通常亀甲墓に付随する構造物であるウーシ(臼)やワラビヌティ(童の手)に類似する形状のものが設けられており、平葺墓と亀甲墓の折衷型の墓とすべきものかもしれない。袖石は、墓正面の左右に各１つである。サンミデーは１段のみで、全て石敷きによって築造されていた。カビアンジは、確認できなかった。墓庭左右の石垣は、１・２の二重構造となっていた(凡例模式図(１)参照)。

第１号墓の屋根及びその前側左右の張出し、墓庭左右の石垣１・２上面は、その外面をコンクリートによって整形した後に漆喰を表面に施していた。屋根は、地山(ニービ)を屋根の傾斜に合わせて成形し、その上に大きさ 10～20 ㎝程の石灰岩礫を敷き詰め、コンクリートを流し込んで整形した後、厚さ５㎜程で漆喰を施していた(第８図、図版８の３段目左)。屋根前側左右の張出し、及び墓庭左右の石垣１・２は、石積みで成形した後、コンクリートをその表面に施して整形し、最後に漆喰を厚さ 10～15 ㎜程で施している。施された漆喰は多孔質で、植物の繊維を混入しているのが確認できた。苅と

推測される。

墓正面上の軒は、屋根のトレンチ掘削により、コンクリートで正面石積みに固定されているのが確認された。石材の落下防止のためであろう。

墓庭は、全体的にコンクリートが流し込まれていた。墓庭の南東隅には排水口が設けられ、排水のための金属製のパイプが前石垣下に埋め込まれていた(図版８の１段目右)。墓庭のコンクリート下では、深さの浅い位置で地山であるニービが検出された(第８図、図版８の２段目右)。

墓の屋根や墓庭、墓庭左右の石垣１・２上面のコンクリート中からは、太さ５～６㎜の鉄筋が格子状に組まれた状態で検出された。

墓庭左右の石垣１の墓庭側壁面や墓正面、袖石、屋根後ろ側には、石積みの面がそのまま残され、切石間の隙間にモルタルが充填されていた。墓庭の前石垣は、いわゆる「粟石」を方柱状に加工したもので石積みを構築している。

第１号墓では、石材として通常の琉球石灰岩の他に粟石が多用されていた。粟石は、墓正面の軒や軒直下、屋根後ろ側の石積み、墓庭左右石垣１の前側端、墓庭前石垣等に利用されており、漆喰やコンクリートを除去した屋根前側右の張出しの石積みにも確認できた。おそらく、粟石は石質が均質で加工しやすいため、墓の造形で美麗な細工を求められる部分に使用されているのではないかと推測される。

墓庭左右の石垣１の裏込めには、細かく砕かれた陶製家形蔵骨器等の破片が多く見られた。

土砂の流入防止のためか、第１号墓の屋根後ろ側や左右の墓構造物の輪郭に沿って、コンクリート・ブロックを１列に並べて設置していた。

墓口の香炉石や蓋石には、粟石を石材として利用していた(図版８の４段目左、３・４段目右、図版９の１段目左・右)。第１号墓の羨道は、他の古墓に比べ長く、約 2.4m(第２表・計測値Ａ)であった。羨道の底面には、コンクリートが敷かれていた。羨道の右壁は石積みで、天井と左壁は地山となるニービが露出していた。墓室の棚は、まず地山となるニービを階段状に粗雑に加工し、その上にコンクリートを被せ整形していた。棚は、左右棚が各１段、奥棚が３段あった。シルヒラシドゥクルには、細かい石灰岩礫が敷かれていた。墓室の前後左右の壁面及び天井では、地山となるニービがそのまま露出していた。墓室壁面の所々で、ニービヌフニ(硬質の第三紀細粒砂岩)が突出していた。墓室壁面には、地山(ニービ)に墓室となる横穴を掘削する際に使用した工具の先端痕が明瞭に残されていた。工具先端の幅は、約６㎝のものや 13～14 ㎝程のものが確認できた。鍬状の工具によるものか。墓室天井は、左右方向の断面形がアーチ形であった。マチバカ(巻墓)を模したものか。墓室にどのような蔵骨器が安置されていたのかについては不明である。

奥棚１のほぼ中央に、砥石に「一九六四年十二月五日竣工／元亮室千代建立之」と墨書された墓誌(図版９の２段目右、３段目左、第 92 図１、図版 109 の１)が置かれていた。墓誌の内容をそのまま受け取ると、第１号墓は 1964(昭和 39)年頃に造営された現代墓ということになる。しかし、地山に掘削した横穴を墓室とし、外観は琉球石灰岩の石積みを多用するなど墓の造営方法が古色を呈しており、興味深い。近代以前の墓の造営方法に倣って、造ったものか。施主の嗜好を反映したものであろうか。今後、古墓の新古を検討する際に、参考にすべき貴重な調査事例の一つとなるのではないかと考える。

墓室奥棚３のほぼ中央に、木炭の破片が１つ置かれていた(図版９の３段目右、図版 68 上)。また、墓室の棚上面に、細かい卵殻片が散乱していた(図版９の４段目右、図版 68 下)。これらの遺物は、墓

での何らかの祭儀に伴うものであった可能性がある。

第１号墓に伴うことが明確な蔵骨器は、今回得られていない。

第１号墓の墓庭前石垣左側外に階段があったため、第１号墓の西側にも墓があったことが推測された。その可能性を確認するため、トレンチを設け、掘削を行った(図版６上)。その結果、小規模なコンクリート製の墓の基礎が検出された。基礎の大きさは、前後方向が 87 ㎝、左右方向が 73 ㎝であった。墓は、コンクリートを敷いた基礎の上に、平面形がほぼ正方形となるようにコンクリート・ブロックを積み上げて墓室を構築していたようである。墓室のサイズは、前後方向が 37 ㎝、左右方向が 35 ㎝となるものであった。墓正面の基礎には、香炉の機能をもつと推測される穴があった。現代墓と推定されるが、これを第 1-1 号墓とした(第６図、図版 10 の４段目左・右)。仮墓的機能を有するものと考えられる。第 1-1 号墓に伴う蔵骨器は得られていない。第１号墓との関係は、不明である。

第２号墓は、墓室が崩壊していたために不明瞭ではあるが、掘込墓であったと推測される。第 11～15 図に図示した。当初、墓室上の岩盤が崩落し、墓室構造が明確には確認できなかった。墓庭の墓室側(西側)には、多量の石灰岩礫が集積されていた(第 11 図、図版 11)。それに接するように、墓庭にコンクリート製の墓碑が建てられ、「真玉橋家之墓」と陰刻されていた。墓庭を囲う石垣は部分的に残存しており、墓庭前石垣左側から左石垣へかけて低い石積みが確認できた。墓庭への出入口は、墓庭の前側にあった。墓庭前石垣左側では排水口が検出され(図版 12 の３段目左)、石垣を挟んで排水口の反対側となる墓庭外では排水に伴う暗渠が確認された。墓庭前石垣に設けられた排水口の高さは 19 ㎝、幅は 16 ㎝であった。墓庭外の暗渠は、掘り込まれた溝に石灰岩の礫が充填されていた(図版 12 の３段目右)。

墓庭の南東隅より、遺物の集中が検出された(第 12・14 図、図版 12 の４段目左・右、図版 13 の１～３段目左・右)。沖縄産施釉陶器の小杯や瓶、煙管・簪・指輪等の金属製品等が検出されており、被葬者の副葬品であったと推測される。また、鉄釘が多く得られていることから、被葬者の遺体を納める棺箱に使用されていた可能性が考えられる。複数回の洗骨儀礼に伴い、墓庭に廃棄されたものと推測される。副葬品を墓庭に廃棄した場所が墓庭の一部に偏ることから、廃棄する場所に何らかの規定があったことが考えられる。図版 13 の１段目左は第 14 図の遺物№019～027 等の出土状況、１段目右は遺物№014～018 等、２段目左は遺物№030、２段目右は遺物№012、３段目左は遺物№039～054 等の出土状況である。図版 13 の３段目右に見える沖縄産施釉陶器の瓶は、第 14 図の遺物№036 である。

第３次発掘調査において、第２号墓墓室上の大形岩塊を除去し(図版 14 の１段目左・右)、墓室の遺構を検出した。その結果、墓室底面と羨道、サンミデーが検出された。墓室の棚は、左右棚が各１段、奥棚は２段目まで確認できた。土砂や岩塊の崩落の危険があったため、墓室周囲の掘削はそれ以上行わなかった。確認できた墓室底面は、石敷きとなるものであった。墓室底面からの出土遺物として、銃弾や眼鏡、シャベル等が出土し、また第２号墓の墓庭から手榴弾や不発弾等が検出されたことから(第Ⅲ章第１節参照)、第２号墓の墓室は沖縄戦時に兵士によって利用されていた可能性がある。第２号墓の墓室崩壊も、あるいは戦時における戦闘に伴い破壊されたものであろうか。墓室の壁面は、右壁前側が僅かに残存するのみであった。

サンミデーは、上下の２段に分かれる(凡例模式図(３)参照)。サンミデー上下段の各上面には、モルタルが施されていた。サンミデー上段に比べ、下段の幅は狭い。サンミデー上段左端の墓正面側隅に、平面形が方形となるカビアンジが設けられていた(図版 14 の４段目左)。

墓正面の右袖石の基部が僅かに残存してはいたが、第２号墓正面の全体的な形態については不明である。

第２号墓から得られた全体形の分かる蔵骨器資料は鉢形蓋(図版 70 の１)１点のみであったが、墓庭から表面採集された資料であり、本来第２号墓に伴うものではなかった可能性がある。

第３・４号墓は、平葺墓である。第 16～23 図に図示した。第３・４号墓の２基は、墓正面石積み及び屋根を共有しており、同時期に造営されたものであろう。

第３～６号墓となる計４基の古墓は、近接して造られている。丘陵斜面の石灰岩岩盤を垂直方向に掘削して、掘削坑の底面を墓庭とし、そこから第３～５号墓の墓室となる横穴を各々の方向へ掘り込んでいる。墓庭の全体的な平面形は、略方形となる。墓庭は、部分的に岩盤となっているが、基本的には石灰岩礫を集積して造成されている。後日実施した埋蔵文化財の試掘調査に伴い、第３号墓の墓庭を土木機械により掘削したところ、深さ 1.9ｍまで石灰岩礫が堆積しているのが確認できた。墓庭への出入口は、第３号墓の墓庭前側右端にある。

当初、第３・４号墓の屋根と軒には、漆喰とモルタルが施されていた。また、墓正面石積みの切石間の隙間には、モルタルが充塡されていた。屋根上面は、地山となる岩盤または島尻マージの上にイシグー(石粉)を集積して平らに成形し、その上にモルタルを施して整形し、さらにその上に厚さ７～８㎜程で漆喰を施していた。漆喰・モルタルを除去した第３・４号墓の軒や正面石積み等は、各切石間の隙間が大きく、各切石の整形の粗雑さが目立った。この事は、第３・４号墓を造営する際に、最後の仕上げとして漆喰・モルタルで墓の表面を整えることが前提となっていたことを推測させる。それが正しければ、第３・４号墓は近代以降に造営された墓である可能性が高いと言えよう。

第３・４号墓は２基ともに左右一対の袖石を有するが、第３号墓の左袖石、第４号墓の右袖石は一つの構築物である。２基ともにサンミデーは１段のみで、サンミデー左端の墓正面側隅に平面形が方形となるカビアンジを有する(図版 17 の４段目左、図版 20 の２段目左)。第３号墓のサンミデーは全て石敷きによって築造され、第４号墓ではサンミデーの左側が岩盤を加工したもので、残りは石敷きの面となっている。

第３号墓の墓口及びサンミデーは、第４号墓のものよりも僅かに高い位置にある。また、墓庭は第３号墓と第４号墓の間で石列によって仕切られ(図版 16 下、図版 17 の１段目左)、第３号墓の墓庭が第４号墓のものよりもやや高くなるように造成している。このような墓の造営方法は、フンシー(風水)に基づくもので、「並んで墓がある場合、できるだけ上方に上げて造る」という習俗に従ったものではなかろうか(註３)。

第３号墓の墓庭前側の表土中から、硯１点と石筆と推測される製品１点が出土した(第 23 図遺物№001・002(青)、第 22 図、図版 18 の１段目左・右)。これらは、被葬者の副葬品であった可能性がある。また、沖縄産施釉陶器(火取？)の底部片が、１点得られている(第 23 図遺物№003(青)、図版 18 の２段目左)。その他、第３号墓の墓庭表土からは、ラムネ瓶(図版 97 の４)やおはじき(図版 98 の１)、ビー玉(図版 98 の３)等が得られているが、これらが第３号墓の被葬者と関係する資料であるかは不明である。子供等が墓庭で遊んだ際に残したものである可能性が考えられる。

第３・４号墓の２基は、墓の外観はほぼ同じであるが、墓室の大きさが異なる(第 19 図)。第３号墓の墓室面積は約 5.5 ㎡であるが、第４号墓は 2.1 ㎡で第３号墓墓室面積の２分の１よりも小さい。同時期に造営され、外観も同じであるのに、墓室の面積が大きく異なるのは何故であろうか。その理由

については不明であるが、当時における墓造営の発注者、または墓購入希望者の何らかの意向が反映されたものであることも考えられようか。

第３・４号墓墓口の蓋石及び香炉石は、ともにニービヌフニ製であった(図版 18 の３・４段目左・右、図版 21 の２段目右、３・４段目左・右)。第３号墓の墓室は、左右棚が各１段、奥棚が２段であった。各棚の縁は石列で築造し、その背後にイシグーを充填して棚とする。第４号墓の墓室は、奥棚が１段あるのみであった。第３号墓と同様、棚の縁を石列で築造し、その背後にイシグーを充填していた。第３号墓の墓室では、岩盤を加工した天井部分で幅 13 ㎜及び 23 ㎜の掘削用工具の先端痕が確認できた。第４号墓では、岩盤を加工した墓室壁面に幅３㎝程の掘削用工具の先端痕が確認された。いずれも、鑿状工具の使用によるものであろうか。

第３号墓では、墓に伴う蔵骨器は検出されなかった。第４号墓では、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に立会うことができた。墓室に安置されていた蔵骨器は破壊されることなく全て墓室に残され、遺物として発掘調査の際に採取した(図版 22 の１段目左)。蔵骨器は計 10 基あり、全て蓋・身がセットになるもので、蓋は全て鉢形蓋で、身は全て陶製有頸甕形蔵骨器であった(第４号墓の１～10 号蔵骨器、第 62 図３～６、第 63 図、第 64 図１～４、第 65 図１～４、図版 70 の２～13、図版 71 の１～８)。各蔵骨器の詳細については、第４表をご覧いただきたい。各蔵骨器の墓室での配置状況については、遺骨移転の立会調査の際に確認することができなかった。

第３号墓の墓庭右側中央にて、仮墓と推測される小規模な墓の基礎が検出された。第３号墓の元の所有者と関係するものではないかと推測される。これを、第 3-1 号墓とした(第 19 図、図版 19 の４段目右、図版 20 の１段目左)。墓室となる構造物は残っていなかったが、墓所有者による遺骨移転作業の際に破壊されたものであろうか。第 3-1 号墓基礎の前後方向の長さは約 98 ㎝、左右方向の長さは約 80 ㎝である。墓正面には、サンミデー状の台があり、その上に香炉の機能をもつと推測される方形の穴があった。サンミデー状台の前後方向の長さは、46 ㎝である。香炉となる穴の前後方向の長さは 14 ㎝、左右方向の長さは 20 ㎝であった。第 3-1 号墓は、漆喰とモルタルを使用して構築していたようである。

第４号墓での遺骨移転作業に立会った際、墓所有者から墓庭にある小規模なコンクリート・ブロック製の墓と第６号墓の被葬者が縁戚関係にあることを聴取した。小規模なコンクリート・ブロック製の墓を、第 4-1 号墓とする(第 19 図、図版 22 の４段目右、図版 23 の１段目左)。第 4-1 号墓及び第６号墓は、第４号墓の仮墓的機能を有するものと推測される。第 4-1 号墓は、コンクリート・ブロックを平面形が方形となるように積み上げて、蔵骨器を安置するための墓室としていた。墓室底面には、海砂が敷かれていた。第 4-1 号墓屋根の前後方向の長さは 48 ㎝、左右方向の長さは 72 ㎝、地表面から屋根頂部までの高さは 45 ㎝であった。第 4-1 号墓の墓室前には、コンクリート・ブロックを組み合わせてサンミデー状の台を作り、香炉となる方形の穴を設けていた。第 4-1 号墓の墓室からは、沖縄産の火葬用甕形蔵骨器１基が得られている(第 4-1 号墓の１号蔵骨器、第 71 図１・２、図版 83 の１・２)。

第６号墓は、第４号墓墓庭前の石積み内に設けられた小規模な墓である。第 19・24・25・29 図に図示した。当初、墓口は、石灰岩の切石を複数個組み合わせて塞いでいた(図版 28 の２段目左)。墓室内には蔵骨器１基が安置され(図版 28 の２段目右)、鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器のセットであった(第６号墓の１号蔵骨器、図版 74 の２・３)。墓室後壁は、岩盤である。墓口前に石灰岩礫を並べサンミ

デー状の台とし、その上にモルタルを施していた(図版 29)。

第４号墓の墓庭前側、第６号墓前周辺の表土中より、遺物が集中して検出された(図版 20 の３・４段目左・右、図版 21 の１段目左・右)。これらは被葬者の副葬品であったものを洗骨儀礼の際に廃棄したものと推測されるが、第 4-1 号墓及び第６号墓が第４号墓と関係する墓であることから、第４号墓の被葬者に伴うものであった可能性が考えられる。遺物は、第６号墓前のサンミデー状台の下にも分布していた。図版 20 の３段目左・右は、遺物集中部の全体的な遺物分布状況で、第 23 図の遺物№001～015(赤)の分布域に相当する。図版 20 の４段目左は第 23 図の遺物№004～007(赤)の出土状況、４段目右は遺物№004・005(赤)、図版 21 の１段目左は遺物№008～010(赤)、１段目右は遺物№009・010(赤)の出土状況である。図版 21 の１段目左の沖縄産施釉陶器(瓶)(第 23 図遺物№008(赤)、図版 95 の５・５-1)は、古典焼となる資料である。大正元(1912)年から昭和７(1932)年へかけての時期に製作されたものか(註４)。

上述したように、第３・４号墓は近代以降に造営された墓ではないかとしたが、被葬者の副葬品であったと推測される第４号墓の墓庭出土遺物の内容から、第３・４号墓は明治・大正から昭和初期へかけての近代となる時期の所産ではないかと考える。

第５号墓については、第 19・24・26～28 図に図示した。第５号墓は、屋根の大部分が崩壊し、軒の右端が残るのみである。屋根が崩壊した原因については不明であるが、沖縄戦時の戦闘に伴い破壊された可能性もあろうか。崩壊した屋根の表面には、土砂流出や岩塊崩落の防止のためと考えられるモルタルが施されていた。第３・４号墓と同様、第５号墓は平葺墓であった可能性があるが、調査時の状況では判然としなかった。第５号墓の正面には、付随する袖石がなかった。

当初、第５号墓ではサンミデーが確認されず、墓正面前は石灰岩礫と土砂で壇状に盛り上げていた(図版 15 下、図版 16 下、図版 24 上)。壇状の盛り土に使用された石灰岩礫は大形のものが含まれ、加工された切石ではないかと考えられるものがあった。この事から、これらの礫は、本来は墓正面上部や屋根の部材だったものではなかろうか。墓の屋根が崩壊した後、崩落した切石がかなり重かったために、それらを墓庭外に出すことはせずに墓前に積み上げて、土砂とともに盛り上げたのではなかろうか。

第５号墓前の壇状盛り土の上に、ほぼ墓正面に接するようにコンクリート製の小型墓が設置されていた。これを、第 5-1 号墓とする(図版 16、図版 24 上、図版 28 の１段目左・右)。第 5-1 号墓は、屋根、墓本体(墓室)、基台の３つに分かれる。屋根の前後方向の長さは 75.5 ㎝、左右方向の長さは 77 ㎝である。基台の前後方向の長さは 86.5 ㎝で、基台上面から屋根頂部までの高さは 66.5 ㎝である。墓前の基台上に、コンクリート製の香炉が置かれていた。第 5-1 号墓の内部には、本土産の現代磁器と推測される火葬用筒形蔵骨器が１基安置されていた。これは、第８号墓の 11 号蔵骨器と同種のものであった(図版 38)。第 5-1 号墓に安置されていた蔵骨器は、墓所有者によって現地から運び出されている。蔵骨器の内容物については、確認することができなかった。第 5-1 号墓は第５号墓の仮墓的機能を果たすものと推測されるが、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に立会った際に聴取した話では、第 5-1 号墓の設置理由として宗教的職能者の関与が窺われた。

第５号墓前の壇状盛り土が設けられた直接的な理由は、上述したように屋根の崩壊に伴うものであったかもしれないが、その盛り土の上に第 5-1 号墓を設置していることから、この盛り土が第４号墓と第５号墓の土地利用の境界を明確にしていた可能性が考えられる。かたちの上では、第４号墓と第

５号墓は墓庭を共有してはいるが、第４号墓に関係する第 4-1 号墓と第６号墓の設置が墓庭の四隅を押さえることとなり、第４号墓が墓庭の占有権を主張しているように見える。あるいは、第３・４号墓の造営が第５号墓よりも先だったために、第４号墓の墓所有者が墓庭を早くから利用しており、墓庭利用に関する主導権を持っていたことも考えられようか。この事が、第３・４号墓と第５号墓の墓造営の先後関係を暗に示しているのかもしれない。

第５号墓前の壇状盛り土を半裁した結果､その下からサンミデーが検出された(図版 23 の２段目左)。サンミデーは１段のみで、サンミデー左端の墓正面側隅に平面形が方形となるカビアンジがあった。第５号墓のサンミデーは、全て石敷きによって築造されていた。

第５号墓の墓口は、方形に加工されたサイズの異なる５つの切石を組み合わせて塞いでいた。香炉石は、確認されていない。墓室は、左右棚が各１段、奥棚が３段あった。各棚の縁は石列で築造し、その背後にイシグーを充塡して棚としていた。岩盤を加工した墓室壁面には、幅 22～23 ㎜程の掘削用工具の先端痕が確認できた。鑿状工具の使用によるものと推測される。

第５号墓では、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に立会うことができた。墓室に安置されていた蔵骨器については、その全ての蓋と一部の蔵骨器が墓から運び出され、墓所有者が現在も保管しているものと推測される。その他の蔵骨器の身の大部分は、破壊されずに墓室に残された(図版 23 の４段目左)。それらの蔵骨器は、遺物として発掘調査の際に採取した。墓室に安置されていた蔵骨器は計 15 基あり、全て蓋と身がセットになるものであった(第５号墓の１～15 号蔵骨器、第 28 図、図版 25・26)。２・４～14 号蔵骨器が、鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器がセットとなるものである。１・３号蔵骨器の２基は陶製軒付甕形蔵骨器、15 号蔵骨器は沖縄産火葬用甕形蔵骨器である。これらの内、現場で遺物として採取した蔵骨器は、１～13 号蔵骨器の身となる資料である(第 64 図５、第 65 図５・６、図版 71 の９、図版 72・73、図版 74 の１)。各蔵骨器の墓室での配置状況については、第 28 図をご覧いただきたい。

第７～８号墓の３基は、概ね東西方向に並んで配置されている(第 30 図、図版 31 下)。墓庭を囲む石垣に関しては、墓庭間の境で共有する部分がある。墓庭の出入口も、３基ともに概ね東西方向に並んでおり、各墓間の親密性を表すように見受けられる。その親密性が、各墓を造った人々の墓造営の志向性に伴うものか、または、各墓の墓所有者間の関係性に起因するものかは、不明である。ちなみに、第７号墓と第８号墓の元の墓所有者は、縁戚関係にあるという。

第７号墓は、破風墓である。第 30～38 図に図示した。第７号墓の墓庭は、前後方向に長い。第７号墓の墓室は岩盤に横穴を掘り込んだもので、第８・９号墓の墓室は切石により天井を構築したものである。第８・９号墓は、墓室となる横穴を掘削することのできる岩盤より前に墓堂を構築していると推測される。そのため、墓庭出入口の位置を古墓３基で合わせることにより、第７号墓の墓庭がその分長くなったのではないかと考える。第７号墓のサンミデーは前後方向に長く、その段の縁が第８・９号墓の墓正面の位置に概ね合う点は興味深い(第 30 図)。

第７号墓の墓正面には、袖石がない。墓正面や墓庭左石垣の後ろ側では、広い範囲で岩盤を加工しうまく利用している。屋根と軒の間には、自然の岩盤の露頭がそのまま残されていた(図版 32)。屋根は、コンクリート・ブロック等を利用して構築していた。屋根の構造物は後で付け足したもので、本来、第７号墓には屋根がなかったのではなかろうか。そうであれば、第７号墓の外観形態は、元々は墓正面上部に軒がある掘込墓ということになる。軒の左右端の上端は反り上がり、隅頭石のようにな

っていた。当初、墓庭には、コンクリートが敷かれていた(図版 32 上)。サンミデーは低い段で、前後方向に長かった。墓庭のコンクリートを除去した後、岩盤を加工して前後方向に長く低い段のサンミデーを設けているのが確認された(第 30～32 図)。カビアンジはモルタル製の蓋付き箱形で、墓正面の左側に設置されていた(図版 30 の３段目左、４段目左・右、図版 32 上)。墓庭左石垣の前側端には、階段と考えられる施設が部分的に残存していた(図版 34 の２段目左・右)。墓庭左石垣上の丘陵斜面へ上るためのものであろう。

第７号墓の墓庭前石垣左側上面には、多くのニービヌフニの砕片が散乱していた(第 32 図、図版 69 上)。いずれも薄い剥片状で、エッジが鋭い。鑿状工具の先端の痕跡を有する資料もあった。これらは、第７号墓墓口のニービヌフニ製の蓋石(図版 35 の２段目右)を整形する際に発生した砕片ではないかと考える。墓口のサイズに合わせるため、蓋石となるニービヌフニを現地で加工したことを裏付ける資料ではなかろうか。今後の類例資料の追加が待たれる。

第７号墓の墓庭南東隅にて、第１層掘削に伴い遺物の集中が確認された(第 37・38 図、図版 34 の４段目左・右)。本土産近代磁器となる小杯(覗き盃)やガラス製の薬瓶、簪、鉄釘等の他、残存した木製品の一部かと推測される木片が検出されたが、腐食が著しく判然としない。また、これらの遺物とともに、人骨片も検出されている。人骨は、性別不明成人の腓骨１点、足の基節骨２点である。人骨資料については、附編１をご覧いただきたい。

第７号墓の墓室墓口の蓋石は、上述したようにニービヌフニ製であった(図版 35 の２段目右)。香炉石は、琉球石灰岩を石材とする(図版 35 の１段目右、２段目左)。墓室は、左右棚が各１段、奥棚が３段あった。各棚の縁は石列で築造し、その背後にイシグーを充填していた。各棚上面には、厚さ２～４㎝程でモルタルを施していた。墓室の左右及び後壁は、若干「コ」字状に掘り込まれているように見受けられ、かつては出窓状の棚であった可能性がある。当初、凸形墓室(註５)であったものを、後世に階段状棚の墓室に造り替えたものであろうか。シルヒラシドゥクルの上面には、枝サンゴの礫が敷かれていた。第７号墓の墓室では、岩盤を加工した壁面に掘削用工具の明瞭な痕跡は確認できなかった。

第７号墓の羨道は、墓の正面向きに対して、その中心ラインの伸びる方向がかなりずれている。また、墓庭出入口が向く方向も、墓正面向きとはずれていた。第 34 図に示すように、墓正面上部の軒に平行する方向をラインⅠとし、ラインⅠに直交する方向をラインⅡとする。ラインⅡは、墓正面向きの方向となる。羨道の中心ラインが伸びる方向をラインⅢとし、墓庭出入口が向く方向をラインⅣとした。ラインⅡとラインⅢがなす角度は９°、ラインⅡとラインⅣがなす角度は 12° である。また、ラインⅡと平面直角座標のＸ軸がなす角度は、東側へ 8.5° であった。

名嘉真宜勝氏は、墓の造営に関して、次のように述べている。「墓の立地や墓の向きについても気を配っている。一般にこれらのことをフンシー(風水)と称し、専門のフンシーミーに見てもらって、建てる場所、とくに墓口の方向について選定してもらっている。」(註６)。そして、県内各地で伝えられるフンシーとして、墓口を御嶽へ向けてはならない(註７)とするものや、首里城や座喜味城の方向へ向けてはならない(註８)等とする事例を紹介している。この事から、墓を造営する際、その墓口を聖域や特別な場所などへ向けるべきではないとする認識があったことが分かる。

第７号墓のほぼ南側には、約２㎞離れた位置に弁ヶ嶽が所在している。第７号墓(座標：Ｘ 25,992.945・Ｙ 22,778.546)と弁ヶ嶽小嶽のやや西側となる地点(座標：Ｘ 24,101・Ｙ 23,058)を結

ぶ線分と、平面直角座標のＸ軸がなす角度は、東側へ大体 8.5°となる。つまり、第７号墓の墓正面は弁ヶ嶽の方向を概ね向いており（ラインⅡ）、墓口をその方向からずらすためにラインⅡとラインⅢの方向が平行とならないようにした可能性が考えられる。

それでは、一見して第７号墓と概ね同じ方向を向くように見える第１・３・４・８・９・11 号墓では、どうであろうか。計６基となる各古墓の位置（第１表・座標）と弁ヶ嶽大嶽の丘陵頂部付近（座標：Ｘ 24,180・Ｙ 23,141）を結んだ線分と、平面直角座標のＸ軸がなす角度を、以下では「角度Ａ」と呼称する。角度Ａは、計６基の古墓では、いずれも東側へ 10～11°程の角度となる。第７号墓の角度Ａも、東側へ 11°である。次に、計６基の各古墓のラインⅡ（墓正面向き）と平面直角座標のＸ軸がなす角度を、「角度Ｂ」とする。第７号墓に隣接する第８号墓の角度Ｂは、東側へ 16.5°となる。そのため、弁ヶ嶽大嶽の丘陵頂部付近から東へ約 170m離れた地点を、第８号墓の正面は向いていることになる。第９号墓の角度Ｂは東側へ 17°で、弁ヶ嶽大嶽から東へ約 200m離れた地点に墓正面が向いている。第 11 号墓の角度Ｂは東側へ 19.5°で、弁ヶ嶽大嶽から東へ約 300m離れた地点に墓正面が向いている。第１号墓の角度Ｂは東側へ 21.5°で、弁ヶ嶽大嶽から東へ約 400m離れた地点に墓正面が向いている。第３・４号墓の角度Ｂは東側へ 22°で、弁ヶ嶽大嶽から東へ約 400m離れた地点に墓正面が向いている。つまり、第１・３・４・８・９・11 号墓となる古墓計６基の正面は、いずれも弁ヶ嶽の方向へ向いているとは言い難いと考える。

では、第７号墓の正面は、なぜ弁ヶ嶽へ向く方向に設定されたのであろうか。第７号墓は掘込墓であるため、墓室となる横穴を掘削する岩盤の状態や地形に墓の造形が大きく制限される。その結果、第７号墓の正面が弁ヶ嶽へ向くこととなったため、墓口・羨道の方向をずらす方法で問題を解決したのではなかろうか。第７号墓の正面向きについては、なるべく第８・９号墓の２基と一体性をもたせる意図もあったかもしれない。

第７号墓では、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に立会った。墓室に安置されていた蔵骨器は計９基あり、全て蓋と身がセットになるものであった（第７号墓の１～９号蔵骨器、第 36 図、図版 33）。その内、８・９号蔵骨器の２基は、墓所有者によって現地から運び出されたものと推測され、発掘調査の際には確認されなかった。その他の１～７号蔵骨器は現地にて破壊され、調査時には墓室内にその破片が散乱していた（図版 35 の３段目左）。それらの蔵骨器の破片は、調査時に遺物として採取した。１・３号蔵骨器が陶製家形蔵骨器（図版 75）、２・４～７号蔵骨器は鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器がセットになるものであった（図版 74 の４～13）。８号蔵骨器は沖縄産の火葬用家形蔵骨器、９号蔵骨器が火葬用筒形蔵骨器で本土産の現代磁器と考えられる。９号蔵骨器は、第 13 号墓の２号蔵骨器（図版 84 の５・６）と同種のものである。各蔵骨器の墓室での配置状況については、第 36 図をご覧いただきたい。

第８号墓は、墓堂外観の形態が亀甲墓に類似している。このような墓を、ここでは仮に「疑似亀甲墓」と呼称しておく。第８号墓に関しては、第 30・39～46 図に図示した。第８号墓は、墓堂の外観が亀甲墓に似るが、マユ（眉）やウーシ（臼）、スディイシ（袖石）等がない。また、屋根が蒲鉾形に近い形状を示し、その平面形が直線的である。疑似亀甲墓は、亀甲墓の装飾を省き、簡略化したような形態である。

疑似亀甲墓のような形態の墓は、近世琉球の時代に百姓となる身分の人々が使用したものではなかろうか。『田地奉行規模帳』や『久米具志川間切規模帳』には、百姓の墓の面積を６間角までとし、墓

の屋根(亀甲)に漆喰を用いることは許可するが、その他の装飾や墓庭を囲む石垣、袖石を設けてはならないと記されている(註９)。１間を1.82mとすると、６間は10.92mとなる。６間角の面積は、36坪(約119㎡)である。第１表では、第８号墓の計測値１が8.8m、計測値２は５mで、墓域面積は44㎡となる。また、第８号墓は、墓庭石垣を有しはするが、亀甲墓としての装飾がなく、袖石もない。

実は、第８号墓によく似た墓が、宜野座村松田に所在している。幸地屋ヌ墓(幸地屋門中の墓)(註10)が、それである。幸地屋ヌ墓は、「近世王府時代の末期頃に百姓に禁じられていた亀甲墓と漆喰を使い墓を建造したところ間切役人に呼ばれ強いお叱りを受けたと伝承がともなう墓である」(註11)という。幸地屋ヌ墓の墓堂は、外観が第８号墓とよく似ている。ただし、幸地屋ヌ墓には、墓庭石垣がない。この点は、百姓の墓造営に関する琉球王府の令達に対して忠実である。幸地屋ヌ墓は、墓造営に関する伝承が残り、墓造営の時期が近世琉球となる時代の末期と概ね分かっており、墓堂外観の類例が少ないという点で、貴重な古墓である。

上述した点から、第８号墓は、近世琉球の末頃に造営された墓である可能性が考えられる。墓造営の技術的系譜は、幸地屋ヌ墓に繋がるものと推測される。疑似亀甲墓は類例となる墓が少ないことから、特定の職人集団がその造営に係わっていたことも考えられる。

第８号墓の屋根は、墓室天井の切石の上にイシグーを充塡し盛り上げ、成形している。発掘調査時には殆ど失われていたが、イシグーで成形した墓屋根は、仕上げとして最後に表面を漆喰で固めていたようである。屋根の左右端には、排水のための溝が設けられていた。１段あるサンミデーは、石列によって墓庭との境が示され、その後ろ側には土砂(第１層)が充塡され均されていた。カビアンジは、確認されていない。

第８号墓の墓正面上部の石積みは、かつてある時期に崩落したことが考えられる。墓正面上部石積みの切石間にはモルタルが充塡され、屋根上面の前側端もモルタルで補強されていた(図版40の４段目左・右)。また、墓正面の墓口上石が中央で欠損し、窪んでいた(図版37等)。沖縄戦時の戦闘で破壊され、崩落したものであろうか。その原因については、今のところ判然としない。

第８号墓墓庭の南東隅及び南西隅では、各々で遺物の集中が確認された(図版41の２段目右、３段目左・右、４段目左)。墓庭南東隅の遺物の集中を遺物集中部１、南西隅の遺物の集中を遺物集中部２とする(第44・45図)。第44図の③拡大図が遺物集中部１を、①拡大図が遺物集中部２を示している。図版41の３段目右、４段目左は第44図の③拡大図(遺物集中部１)の遺物出土状況、２段目右、３段目左は①拡大図(遺物集中部２)の遺物出土状況である。ガラス製の薬瓶やプラスチック製の櫛等の明らかに近代以降となる遺物が含まれている。

第８号墓で検出された特筆すべき遺物の出土状況として、墓庭前石垣左側上面の銭貨の集中が挙げられる(図版41の４段目右、図版42の１～３段目左・右)。現場での検出時には、前石垣上面の銭貨集中の上に、石灰岩礫が１つ置かれていたという。図版42の１段目左が、礫が置かれていた状況を再現したものである。図版42の１段目右の銭貨集中検出状況と比べていただきたい。ただし、第８号墓の墓庭石垣は、それまでに草木の伐採やモルタルの除去等の作業が複数の作業員によって行われており、銭貨集中の上にあったとされる礫がその時点で原位置を保持していたかは判然としない。石垣上面では、計11枚の銭貨が検出されている。第44図の②拡大図及び第46図に、その検出状況を図示した。銭文の分かるものは、寛永通寶のみである。古寛永と新寛永が混じっている。また、銭文不明の銭貨は、表面の腐食が著しく、いわゆる鉄銭と考えられる。検出された複数枚の寛永通寶については、

銭文を陽刻した面が概ね下を向いていた。緡を通していたものか。第 44 図②拡大図の遺物№8-001～8-006 となる銭貨６点に関しては、遺物№8-001 が最も上で、次に 8-002、8-003 と順次重なり、遺物№8-006 が最も下である。遺物№8-009～8-011 となる銭貨３点は、遺物№8-006 の下から検出され、遺物№8-009 が最も上で、遺物№8-011 が最も下になる。図版 42 の２段目右、３段目左が第 44 図の②拡大図遺物№8-001～8-008 の検出状況、３段目右が遺物№8-009～8-011 の検出状況である。また、同じ墓庭前石垣左側の内部からも、寛永通寶１点が検出された。図版 42 の４段目左がその検出状況で、第 44 図の②拡大図遺物№8-012 である。これらの銭貨の集中が何を意図するものかは不明であるが、墓での何らかの祭儀に関係するものであろうか。今後の古墓調査において、類似する銭貨の検出状況が増加した際に、その意味するところについて検討されるべき事例であろう。なお、このような石の上に置かれた銭貨が長らくそのまま残されているという事例は、『球陽』外巻である『遺老説伝』や『琉球国由来記』、『琉球国旧記』等に記載された十貫瀬の地名由来に関する説話を想起させる。

第８号墓の墓口蓋石はニービヌフニ製で(図版 43 の１段目右、２段目左)、香炉石は琉球石灰岩を石材とする(図版 43 の１段目左)。墓室は、左右棚が各１段、奥棚が１段であった。右棚の殆どの部分と奥棚は岩盤を加工して設けており、右棚前側端と左棚は石積みの背後にイシグーを充塡して棚としていた。左右壁の広い範囲と後壁は、岩盤を加工したものであった。岩盤を加工した墓室壁面には、掘削用工具の明瞭な痕跡は確認できなかった。墓室天井は切石によって構築したもので、大きな板状の切石を左右と中央で計３枚組み合わせていた。天井の左右方向の断面形はアーチ形となり、いわゆるマチ墓(巻墓)であった。

第８号墓では、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に立会うことができた。その際、第７号墓の遺骨移転作業も同時に行われ、第７号墓と第８号墓の墓所有者は縁戚関係にあるとのことであった。第８号墓の墓室に安置されていた蔵骨器は計 13 基あり、全て蓋と身がセットになるものであった(第８号墓の１～13 号蔵骨器、第 43 図、図版 38・39)。その内、11～13 号蔵骨器の３基は、墓所有者によって現地から運び出されており、発掘調査の際には確認されなかった。その他の１～10 号蔵骨器は現地にて破壊され、調査時には墓室内にその破片が散乱していた(図版 43 の２段目右)。それらの蔵骨器の破片は、調査時に遺物として採取した。ただし、３号蔵骨器の身に関しては、墓所有者に依頼し、破壊せずにそのままの状態で現地に残してもらい、調査時に採取した。１・３・４・10 号蔵骨器が陶製軒付甕形蔵骨器(第 66～68 図、図版 77、図版 78 の１・２・９・10)、２号蔵骨器が陶製家形蔵骨器(赤焼御殿型厨子甕)(第 69 図、図版 76 の１・２)、６・９号蔵骨器も陶製家形蔵骨器(上焼ツノ型厨子甕)(図版 76 の３・４、図版 79 の１・２)、５・８号蔵骨器は鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器がセットになるもの(図版 78 の３・４・７・８)、７号蔵骨器が鉢形蓋と陶製無頸甕形蔵骨器がセットになるものであった(第 62 図１・２、図版 78 の５・６・6-1・6-2)。11・12 号蔵骨器は火葬用筒形蔵骨器で、本土産の現代磁器であろうと考える。13 号蔵骨器は、沖縄産の火葬用甕形蔵骨器である。各蔵骨器の墓室での配置状況については、第 43 図をご覧いただきたい。

第８号墓の墓庭中央左側に、コンクリート製の小型墓が設置されていた。これを、第 8-1 号墓とする(第 39 図、図版 37、図版 44 の４段目左・右)。第 8-1 号墓は、屋根、墓本体(墓室)、基台の３つに分かれる。屋根の前後方向の長さは 77 ㎝、左右方向の長さは 85 ㎝である。墓本体の前後方向の長さは 57.5 ㎝、左右方向の長さは 60 ㎝である。基台の前後方向の長さは 93 ㎝、左右方向の長さは 70 ㎝である。基台下から屋根頂部までの高さは、81 ㎝であった。屋根の正面は、唐破風形を呈する。墓前

の基台上に、コンクリート製の香炉が置かれる。第 8-1 号墓は、第８号墓の仮墓的機能を果たすものと推測される。平成 26 年度の墓所有者による遺骨移転作業に立会った際、第 8-1 号墓の内部に計３基の蔵骨器が安置されていたのが確認できた(第 8-1 号墓の１～３号蔵骨器、図版 45 上)。１・３号蔵骨器は沖縄産の火葬用甕形蔵骨器、２号蔵骨器は鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器がセットとなるものであった。３号蔵骨器は、墓所有者が遺骨移転の際に現地から運び出したものと推測される。１・２蔵骨器は破壊された状態で現地に残され、発掘調査時に遺物として採取した(第 71 図３・４、図版 83 の３～６)。

第９号墓も、第８号墓と同様、疑似亀甲墓である。第 30・47～50 図に図示した。古墓の外観及びその規模は、第８号墓とほぼ同じである。第８・９号墓の２基は隣接して造営され、外観も同じであることから、ほぼ同時期に造られた墓ではないかと考えられる。

第９号墓の屋根は、第８号墓と同じく墓室天井の切石の上にイシグーを充填して盛り上げ、成形している。発掘調査時には殆ど失われていたが、イシグーで成形した墓屋根は、仕上げとして最後に表面を漆喰で固めていたと推測される。屋根の後端には、低い石積みが構築されていた(図版 48 の２段目左)。屋根の左右端には、排水のための溝が設けられていた。１段あるサンミデーは、岩盤を加工して設けていた。カビアンジは、検出されなかった。

第９号墓の墓庭から、20～30 ㎝程の範囲で焼かれた人骨片の集中が検出された(第 48 図、図版 45 下、図版 48 の３段目右)。得られた人骨片は、量的には少ない。人骨資料の分析については、附編１をご覧いただきたい。

第９号墓の墓口蓋石はニービヌフニ製で(図版 49 の１段目左)、香炉石は琉球石灰岩を石材とする(図版 48 の４段目右)。墓口の蓋石をニービヌフニで作り、香炉石は琉球石灰岩で作るという点は、第７～９号墓に共通している。墓室は、左右棚が各１段、奥棚が２段であった。各棚と、墓室後壁及び右壁、左壁の殆どは、岩盤を加工して設けていた。岩盤を加工した墓室壁面には、左壁で幅 22 ㎜、後壁では幅 24 ㎜の掘削用工具の先端痕が確認できた。鑿状工具の使用によるものと推測される。墓室天井は板状の大きな切石を組み合わせて構築しており、天井の左右方向の断面形がアーチ形となるマチ墓(巻墓)であった。

第９号墓では、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨移転作業に立会った。当該墓にて当市の文化財課職員が立会った遺骨移転作業は２回目のもので、それより前に一度殆どの遺骨の移転を終わらせていたようである。１回目の遺骨移転作業には、文化財課職員は立会っていない。文化財課職員が立会った際には、墓庭にて陶製家形蔵骨器１基の遺骨移転作業が行われた。作業終了後、その陶製家形蔵骨器は、破壊されることなく墓庭にそのまま放置され(図版 47 の１段目左)、発掘調査時に遺物として採取した。墓庭に放置された陶製家形蔵骨器は、第９号墓の５号蔵骨器とした。墓室内には、立会い時に遺骨移転がすでに終了していた陶製家形蔵骨器計４基が破壊されずに左右棚に置かれており(図版 49 の１段目右、２段目左)、発掘調査時に各々１～４号蔵骨器として採取した。第９号墓の１～５号蔵骨器は、いずれも蓋と身がセットになるもので、全て陶製家形蔵骨器であった(第 70 図、図版 79 の３・４、図版 80・81)。各蔵骨器の墓室での配置状況については、確認することができなかった。また、１～５号蔵骨器以外にも、墓室に安置されていた蔵骨器があったことも考えられる。

第 11 号墓は、亀甲墓である。第 51～58 図に図示した。亀甲墓外観の部分名称については、凡例模式図(３)に示した。また、亀甲墓の計測部位については、凡例模式図(４)に示した。

第 11 号墓の袖石は、墓正面の左右に各１つである。サンミデーは、上下２段となる。カビアンジは、確認されなかった。墓庭に、ヒンプンはない。墓庭の出入口は、石敷きとなっていた。墓庭左右の石垣外には排水溝があり、降雨時に屋根から流れてくる水を墓外に排出するためのものであろうと考えられる。

墓正面、及び袖石の正面・側面の石積みに使用された石材は、他の部分に比べ大きかった。特に、墓正面の石材は、他よりも際立って大きいものであった。墓正面、及び袖石の正面・側面の石積みは、殆どの石材が方形に加工され、布積みによって構築されていた。その他の部分での石積みは、概ねあいかた積みによるものであった。墓庭左右の石垣では、石材を魚鱗状または扇状に加工して積んでいる部分もあった。墓庭前石垣は、墓の南側が地形的に傾斜しているためか、墓庭外へ向かって崩れていた。また、屋根左側前端から墓庭左石垣へかけてが、大きく崩れていた。沖縄戦時の戦闘に伴い、破壊を受けたものであろうか。

墓屋根は、石敷き、石列、石積みによって築造されている。造営当時から、調査時のような状態であったのかは不明であるが、屋根石敷き面の一部に僅かに漆喰が残存していたことから、当初は屋根全体の表面に漆喰を施していた可能性も考えられる。

墓屋根の構築方法で、亀甲墓となる第 11 号墓と他の古墓との違いは、他の墓が屋根にイシグーを充塡し盛り上げているのに対し、第 11 号墓ではイシグーの他に粘性のある土を用いている点である。平葺墓や破風墓となる他の古墓の屋根が直線的で単純な形状であるのに対し、亀甲墓の屋根は曲線的で繊細な造形を行うため、土を突き固めて築造し、屋根の形状が崩れることや石材が剥落することを防いでいたのではなかろうか。

第 11 号墓の墓庭からは、多数の遺物が得られている(第 57・58 図)。墓庭右側中央では、表土中より多くの蔵骨器片が検出され、それに人骨片が伴っていた(第 58 図遺物№11-002～11-007、11-035～11-042 等、図版 56 の２段目左・右、３段目左)。第 11 号墓の墓庭から得られた蔵骨器は、蓋となるものが計 12 点、身が計 11 基である。蓋は、全て鉢形蓋であった。身は、陶製有頸甕形蔵骨器となるものが計 10 基、陶製軒付甕形蔵骨器が１基であった。蓋には、14 から 25 までの番号を付し、第 11 号墓の 14～25 号蔵骨器とした。身は、各々に 26 から 36 までの番号を付し、第 11 号墓の 26～36 号蔵骨器とした。陶製軒付甕形蔵骨器は、36 号蔵骨器である。破片の残存する量が多く、全体形の概ね分かる資料を、図版 82 の２～６に掲載した。身となる計３基については、石膏復元を行った。各蔵骨器の詳細に関しては、第４表をご覧いただきたい。これらの蔵骨器は、器面に残存していたミガチ(銘書)の内容から、かつては第 11 号墓の墓室に安置されていたものと考えられる。蔵骨器片に伴って検出された人骨片は、本来これらの蔵骨器に納められていたものではなかろうか。第 11 号墓の墓庭より得られた人骨資料の詳細については、附編１をご覧いただきたい。

第 11 号墓のサンミデー下段右端に接して、墓庭より沖縄産無釉陶器の壺１点が検出され(第 57 図遺物№11-001、第 85 図８、図版 56 の３段目右、４段目左、図版 96 の６)、その内部には枝サンゴ礫が計 50 点入っていた(図版 69 下)。その埋納は、明らかに意図的なものであると考える。慰霊のための祭儀に伴うものであろうか。

第 11 号墓の墓庭右側中央から前側へかけて、本土産や沖縄産の瓶・小杯等の陶磁器、煙管、簪、指輪、銭貨、鉄釘等の多くの遺物が出土している(第 58 図)。他の墓についても上述してきたように、これらは元々被葬者の副葬品を主体とし、洗骨儀礼に伴い廃棄されたものと推測される。これらの遺物

の分布が墓庭の南東隅に集中することから、なんらかの規定に基づいて廃棄する場所を決めていたことが窺える。

図版 56 の４段目右は、第 58 図遺物№11-009・11-010 の出土状況である。図版 57 の１段目左は第 58 図遺物№11-010 の出土状況、１段目右は遺物№11-011～11-023・11-044・11-045 等、２段目左は遺物№11-013～11-022 等、２段目右・３段目左は遺物№11-014～11-019・11-044・11-045、３段目右は遺物№11-011～11-019・11-044・11-045、４段目左は遺物№11-011・11-012、４段目右は遺物№11-024～11-028 の出土状況である。図版 58 の１段目左は第 58 図遺物№11-027 の出土状況、１段目右は遺物№11-025、２段目左は遺物№11-026、２段目右・３段目左は遺物№11-048～11-054・11-056・11-057、３段目右は遺物№11-056、４段目左は遺物№11-059～11-061、４段目右は遺物№11-059 の出土状況である。図版 59 の１段目左は第 58 図遺物№11-084～11-086・11-088～11-094 等の出土状況、１段目右は遺物№11-084～11-086、２段目左は遺物№11-089、２段目右は遺物№11-090 の出土状況である。

図版 57 の２段目右と３段目左は、煙管の雁首・吸口（遺物№11-014・11-019）とともに、指輪（遺物№11-015～11-018）４点が人の手の基節骨（遺物№11-044・11-045）に嵌められた状態で検出された際の出土状況である。煙管の雁首・吸口は、第 86 図１・２に図示した（図版 100 の３・４）。指輪４点は、第 87 図１～４に図示した（図版 102 の５～８）。人の手の基節骨が、なぜ蔵骨器に納められなかったのかについては不明である。人骨資料については、附編１をご覧いただきたい。

図版 58 の４段目左・右は、灰釉碗（遺物№11-059）１点の出土状況である。灰釉碗は、第 85 図７に図示した（図版 92 の６）。破片がいくつか失われているが、残存する状況から本来は完形となる資料ではなかったかと推測される。墓庭南東隅の角となる部分にほぼ接して検出された。墓での祭儀に伴い埋納されたことが考えられ、碗の内部に何かを入れていた可能性があるが、検出することはできなかった。灰釉碗のすぐ近くから、寛永通寶２点が出土している（遺物№11-060・11-061）。

第 11 号墓の墓庭中央から、８個体分の豚頭蓋骨（下顎骨）が検出されている。第 56～58 図に図示した。図版 59 の３・４段目左・右、図版 60・61、図版 62 の１～３段目左・右が、豚頭蓋骨の検出状況である。検出した豚頭蓋骨（下顎骨）には、南から北へかけて各個体にアルファベットのＡからＨまでを付している（第 56 図）。豚頭蓋骨（下顎骨）Ａ～Ｈは、墓庭中央の南から北へかけて配置され、いずれも墓庭の出入口へ向かうかたちで埋納されていた。Ａ～Ｈの全体的な位置関係にあまり規則性がないことから、これら８個体分の豚頭蓋骨が同時に埋納されたものではないと考える。Ｃ・Ｄ・ＥとＧ・Ｈは、頭蓋骨が接していることから、同時に埋納された可能性がある。ただし、Ｅは、Ｃ・Ｄより後に埋納されたことも考えられる。検出された各豚頭蓋骨の詳細については、附編２をご覧いただきたい。以下では、各豚頭蓋骨の検出状況と共伴遺物について述べる。

豚頭蓋骨Ａは、下顎骨のみの資料である（図版 61 の１段目左・右）。本来は、頭蓋が伴うものであったか。銭貨３点が伴って検出された（第 89 図８・９、第 90 図４、図版 106 の８・９、図版 107 の４）。銭貨は、いずれも寛永通寶である。その内、２点は新寛永である。第 89 図８・９の２点は下顎骨の先端内側から、第 90 図４は右下顎枝の外側に接して検出された。

豚頭蓋骨Ｂは、頭蓋と下顎骨が揃って検出された（図版 61 の２段目左・右）。銭貨２点が伴って検出された（第 89 図 10、第 90 図６、図版 106 の 10、図版 107 の６）。銭貨は、２点ともに寛永通寶（新寛永）である。第 89 図 10 は、下顎骨の先端上から検出された。第 90 図６は、Ｂ採取後のクリーニング作業中に検出された。検出時の状況から、下顎骨先端付近の内側に位置していた可能性がある。

豚頭蓋骨C・Dは、隣り合って検出された(図版 61 の３段目左・右、４段目左)。２点ともに頭蓋と下顎骨を揃えて埋納したようであるが、頭蓋は大分崩れている。C・Dに伴って、銭貨２点が検出されている(第 90 図１・５、図版 107 の１・５)。第 90 図１は、寛永通寶(新寛永)となる資料で、Dの下顎骨先端の左側面に接して検出された(図版 61 の４段目左)。第 90 図５は、いわゆる鉄銭で、腐食が著しい。銭文は不明であるが、輪郭が隅丸方形を呈しており、仙臺通寶となる可能性がある。C・Dの下顎骨の間から検出された。

豚頭蓋骨Eは、C・Dの北側に接して検出された(図版 61 の３・４段目左・右)。頭蓋と下顎骨を揃えて埋納したようであるが、頭蓋はかなり崩れている。Eに伴って、銭貨２点が検出されている(第 90 図７・８、図版 107 の７・８)。銭貨２点は、E採取後のクリーニング作業に伴いE下顎骨内側のほぼ同じ位置から検出された。第 90 図７は、寛永通寶である。第 90 図８は鉄銭で、腐食が著しく、銭文不明である。

豚頭蓋骨Fは、頭蓋と下顎骨が揃って検出された(図版 62 の２段目左・右)。銭貨１点が伴って検出された(第 90 図３、図版 107 の３)。銭貨は、寛永通寶(新寛永)である。Fの先端付近より検出された。

豚頭蓋骨G・Hは、隣り合って検出された(図版 62 の３段目左・右)。２点ともに頭蓋と下顎骨を揃えて埋納したようであるが、頭蓋はかなり崩れていた。G・Hに伴って、銭貨３点が検出されている(第 90 図２、第 91 図１・２、図版 107 の２、図版 108 の１・２)。第 90 図２は鉄銭で、表面の腐食が著しく、銭文不明である。H先端の右側面付近に接して検出された(図版 62 の３段目左)。第 91 図１・２となる２点は、寛永通寶である。第 91 図１は新寛永、２は古寛永である。寛永通寶２点は、G・H採取後のクリーニング作業に伴って、GとHの間のほぼ同じ位置で検出された。

これら豚頭蓋骨８個体分の墓庭への埋納は、墓での何らかの祭儀に伴うものであろう。玉木順彦氏は、このような墓への獣骨の埋納は、造墓儀礼に伴うものではないかとしている(註 12)。また、名嘉真宜勝氏によれば、県内での墓造りに伴う落成祝いの際に「豚の頭骨を墓のなかや周辺にうめる」という(註 13)。菅原広史氏は、古墓調査で検出される獣骨を埋納した事例がそれほど多くないことから、「「落成」という全ての墓に共通して存在する要素と繋がるものと考えて良いのかどうか疑問を禁じ得ない」とし、各墓で獣骨を埋納した状況が多様であることから「埋設行為の形態が統一された規格の下ではなく、個別の造墓あるいは埋葬に合わせたことによるためではないか」としている(註 14)。今回、第 11 号墓の墓庭から検出された豚頭蓋骨８個体分の埋納は、墓での祭儀に伴うこのような獣骨埋納が１度限りのものではなく、複数回行われる事例もあったことを示していると考えられる。つまり、墓での獣骨の埋納が、必ずしも造墓儀礼だけに伴うものではなかったことを意味するのではなかろうか。今後は、実施される頻度の少ない墓での祭儀で、経済的事情にも左右されることが考えられるもの(たとえば、年忌)についても、獣骨の埋納が行われた可能性がないか検討されるべきであろう。

ところで、第 11 号墓の墓庭に豚頭蓋骨が埋納されたのは、いつ頃のことであろうか。その時期については、豚頭蓋骨に寛永通寶等の銭貨が複数共伴していたことから、近世琉球となる時代であったことが考えられる。沖縄では、明治 16(1883)年以後、明治政府による新しい通貨制度が急速に浸透したようである(註 15)。その事からすると、第 11 号墓の墓庭で検出された豚頭蓋骨の埋納は、それより前であった可能性がある。しかし、明治 26(1893)年に造られた近代墓の墓庭からも寛永通寶が複数検出されており(註 16)、寛永通寶等の銭貨の検出が必ずしも近世の時期的指標とはならないことを示している。近代において、一般の人々が、墓での儀礼用として寛永通寶等の近世の銭貨をある程度備蓄

していた可能性もあろうか。もしそのようなことがあったとすれば、第８号墓の墓庭前石垣上面から検出された複数の銭貨も、そのような意図に基づき現地にて保管されていたものなのかもしれない。

第 11 号墓の墓口は、墓所有者による遺骨移転作業に立会った際、コンクリート・ブロックを積み上げて塞いでいるのを確認した。第 11 号墓の墓庭周辺には、墓口の蓋石であったと推測される板状のニービヌフニの破片がいくつか散乱していた(図版 63 の２段目右、３段目左・右)。琉球石灰岩製の香炉石は、墓口のコンクリート・ブロックの前に置かれ、墓口でそのまま使用されていた(図版 63 の１段目左・右、２段目左)。ニービヌフニ製の蓋石は、何らかの原因により破壊されたと推測される。沖縄戦時の戦闘に伴い破壊されたものであろうか。

墓室は、左右棚が各１段、奥棚が２段であった。墓室底面は、琉球石灰岩を加工した切石を組み合わせて敷いたものと考えられる。墓室の前後左右の壁面は、切石をあいかた積みにしたものであった。墓室天井では、断面形が弧を描く板状の切石を３つ程組み合わせて１つのアーチを形成し、それを前後に４列配していた。第 11 号墓は、墓室天井の左右方向の断面形がアーチ形となるマチ墓(巻墓)であった。

第 11 号墓では、平成 26 年度に墓所有者による被葬者の遺骨の移転作業に立会うことができた。第 11 号墓の墓室に安置されていた蔵骨器は計 13 基あった(第 11 号墓の１～13 号蔵骨器、第 55 図、図版 50 の３・４段目右、図版 53・54)。その内、８～13 号蔵骨器となる計６基は、墓所有者によって現地から運び出されており、発掘調査の際には確認されなかった。また、１・３～７号蔵骨器の蓋も、現地に残されていなかった。１・３～７号蔵骨器の身と転用蔵骨器となる２号蔵骨器は、現地にて破壊され、調査時には墓室内にその破片が散乱していた(図版 63 の４段目左)。それらの蔵骨器の破片は、調査時に遺物として採取した。１・６・７・11・13 号蔵骨器は、沖縄産の火葬用甕形蔵骨器である(図版 83 の７、図版 84 の１・２)。５号蔵骨器も、沖縄産の火葬用甕形蔵骨器と考えられる(図版 83 の 10)。２号蔵骨器は転用蔵骨器(油甕)(図版 83 の８)、３・４・10・12 号蔵骨器が鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器がセットになるもの(図版 82 の１、図版 83 の９)、８号蔵骨器は陶製家形蔵骨器(荒焼御殿型厨子甕)、９号蔵骨器も陶製家形蔵骨器(上焼ツノ型厨子甕)である。

遺骨移転作業に立会った際に確認し得た範囲では、１・６号蔵骨器の内部には琉球石灰岩の小石がいくつか納められており、人の骨らしきものは見られなかった。何らかの理由で被葬者の遺骨がなく、その代わりとして蔵骨器に小石を納めたものと考える。

沖縄産の火葬用甕形蔵骨器となる 13 号蔵骨器は、シルヒラシドゥクルの墓口側に置かれていた。いわゆるジョーバン(門番)と考えられる。ジョーバンとは、「次の死者が出るまでは墓の門番の役目を担う」被葬者のことである(註 17)。かつては、那覇市首里においても、洗骨を行った被葬者の遺骨を蔵骨器に納めた後、その蔵骨器を「次の死者が出るまで、墓口近くで「墓守り」として安置」していたという(註 18)。

第 11 号墓において、平成 26 年度の遺骨移転作業に伴い確認した墓室内の１～13 号蔵骨器と、発掘調査時に墓庭より破壊された状態で検出された 14～36 号蔵骨器との関係は、どのようなものであろうか。西原町字千原に所在するイシグスク内古墓群は、1985 年に沖縄県教育委員会によって発掘調査が実施されている。その第２号墓に関する報告において、次のような記述がある。「1945 年の沖縄戦では、イシグスクの周辺も激戦地であった。本墓も日本軍によって納骨器は全て外に出されて避難用に使用された。石灰岩を掘り込んだ古い納骨器もあったというが、その時にほとんど失ってしまった。

戦後新しい納骨器を購入して納骨したという。」(註 19)。フクヂ山古墓群の第 11 号墓においても、沖縄戦時に同様のことが起こったのではなかろうか。第 11 号墓の墓庭より検出された 14～36 号蔵骨器は、戦前まで墓室内に安置されていたもので、戦時に墓庭へ出され、戦闘に伴い破壊されてしまったのかもしれない。墓室内に安置されていた１～13 号蔵骨器のいくつかは、破壊された 14～36 号蔵骨器を戦後に整理し、素性の分かる遺骨や誰のものかよく分からない遺骨を分類して、新しい蔵骨器に納め直したものかもしれない。その際には、宗教的職能者(ユタ等)が関与した可能性も考えられる。

フクヂ山古墓群の第 11 号墓は、その造形の特徴や規模等が、上述したイシグスク内古墓群の第１・２号墓とよく似る。報告によれば、イシグスク内古墓群第１号墓の造営年代は 1925(大正 14)年頃とされ、第２号墓はそれより若干古い 1885(明治 18)年頃ではないかとされる。つまり、どちらも、近代となる時期に造営された墓であることが考えられる。同様に、その可能性については、フクヂ山古墓群の第 11 号墓に関しても言える。第１表に示したフクヂ山古墓群第 11 号墓の墓域面積は 181.5 ㎡で、近世において百姓に許可されていた墓域面積である６間角(約 119 ㎡)を超えている。また、近世琉球となる時代に亀甲墓を造ることは、百姓には許されていなかった。つまり、第 11 号墓の造営年代が近世にまで遡るのであれば、当然、第 11 号墓は士族が造った墓ということになる。しかし、遺骨移転作業に立会った際に第 11 号墓の元の墓所有者から聞いた範囲では､彼らが士族の子孫となる家系であることを示すような情報は得られていない。墓の売買によって、以前は別の所有者がいた可能性も考えられるが、その事を証拠立てるようなものは何も見つかっていない。イシグスク内古墓群第１・２号墓及びフクヂ山古墓群第 11 号墓が近代に造られた亀甲墓であるとすれば､今後は近世に造られた亀甲墓と詳細に比較検討を行い、近世と近代の亀甲墓の違いをより明確にしていく必要があろう。

第 11 号墓の墓庭前石垣左内側に接して、コンクリート製の小型墓が置かれていた。これを、第 11-1 号墓とする(第 51・53 図、図版 55 の２段目右、３段目左、図版 65 の３段目右、４段目左・右)。第 11-1 号墓は、屋根(蓋)、墓本体(墓室)の２つに分かれる。墓本体は、コンクリート製の箱形となる形状であった。第 11-１号墓は、第 11 号墓で遺骨移転作業が行われる前からすでに使用されておらず、屋根は返された状態で墓本体の上に置かれていた。屋根の前後方向の長さは 59 ㎝、左右方向の長さは 78 ㎝、高さは 12 ㎝である。墓本体の前後方向の長さは 45.5 ㎝、左右方向の長さは 73 ㎝、高さは 61 ㎝である。第 11-1 号墓は、第 11 号墓の仮墓的機能を果たすものと推測されるが、内部に安置された蔵骨器はなかった。また再度利用することを意図して、第 11 号墓の墓庭に置いていたものであろう。

第 13 号墓は、小規模な掘込墓である。第 30・59～61 図に図示した。当初、第 13 号墓の墓前は、堆積した土砂でほぼ埋没していた(図版 67 の１段目左・右)。墓前の堆積土を除去した結果、第 13 号墓の墓口には石灰岩礫がいくつか積まれ(図版 66 上)、外観的には岩陰墓(チヂフギ)(註 20)のような形態であった。墓口に積まれた石灰岩礫は、加工を施していない自然礫を使用したものであろうか(図版 67 の４段目右)。岩盤を加工した墓口の上辺は、弓状に弧を描く形状を呈していた。墓前に、墓庭を囲む石垣等はなかった。第 13 号墓の規模から考えて、第９号墓等の仮墓的機能を有していたものではなかろうか。

第 13 号墓の墓室内から、蔵骨器等の遺物は検出されなかった。発掘調査の開始時に、第 13 号墓の墓前周辺から戦後(1945 年以降)のものと考えられる本土産火葬用筒形蔵骨器や沖縄産火葬用家形蔵骨器の破片が表面採集され、これを第 13 号墓の１・２号蔵骨器とした(図版 67 の２段目左、図版 84 の３～６)。ただし、１・２号蔵骨器の２基が、第 13 号墓に安置されていたものかは不明である。墓

室底面は狭く、平らになるように整形しているようであったが、やや傾斜しており、前側が高く、後ろ側で若干低くなっていた。岩盤を加工した墓室壁面には、掘削用工具の明瞭な痕跡は確認できていない。

《註》

1　名嘉真宜勝　「仮墓 かりばか」　沖縄タイムス社　『沖縄大百科事典』上巻　1983 年
2　名嘉真宜勝　「棺箱 かんばこ」　沖縄タイムス社　『沖縄大百科事典』上巻　1983 年
3　名嘉真宜勝・泉川良彦　「第八章第六節 墓制」　『読谷村史』第四巻(資料編３・読谷の民俗 下)　1995 年　335 頁
4　株式会社ライフスタイル研究所スタジオ 29(編)『琉球古典焼』(ちゃんぷる一別冊第１号)　2007 年 12 月
5　那覇市教育委員会『首里久場川ハタマチュウ古墓群』 2011 年２月
6　名嘉真宜勝・恵原義盛 『沖縄・奄美の葬送・墓制』　明玄書房　1979 年　159 頁
7　名嘉真宜勝　「Ⅴ 沖縄の墓」　『沖縄の人生儀礼と墓』 沖縄文化社　1999 年　74 頁
8　註３文献　335 頁
9　「琉球産業制度史料」 小野武夫(編)『近世地方経済史料』第九巻　吉川弘文館　1958 年　67 頁、「第四章 史料 久米具志川間切規模帳」『久米島具志川村史』 1976 年 307 頁、玉木順彦 「沖縄の葬法の変遷」 浦添市教育委員会 『墓からわかる家族の歴史 ― 近世墓シンポジウム報告書』 2004 年３月
10　知名定順 「第Ⅵ章第四節 墓制」 『宜野座村誌』第三巻(資料編Ⅲ 民俗・自然・考古) 1989 年 429・430 頁、知名定順 「写真から見る沖縄の墓」 『宜野座村立博物館紀要 ガラマン』14　2008 年　27 頁
11　知名定順 「写真から見る沖縄の墓」 『宜野座村立博物館紀要 ガラマン』14　2008 年　27 頁
12　玉木順彦 「第４章第３節３ 内間西原近世墓群に関する民俗学的所見」 浦添市教育委員会 『内間遺跡 内間カンジャーヤーガマ遺跡 内間西原近世墓群Ⅲ』 2004 年３月
13　註７文献　77 頁
14　菅原広史「近世墓から出土する脊椎動物遺体 ― 浦添市内の近世墓における動物骨埋納に関する予察」 沖縄考古学会 『琉球近世墓の考古学 ― 発表報告編』沖縄考古学会 2013 年度研究発表会資料集　2013 年７月７日
15　牧野謙吉 「第２編第８章 金融機関の設立とその変遷」 『那覇市史』(通史篇 第２巻) 1974 年
16　那覇市教育委員会 『城岳古墓群(Ⅰ)』 2006 年２月
17　崎原恒新 「第３章１ ②本島中部地区」 沖縄県教育委員会 『沖縄の葬制に関する総合調査報告書』　2012 年３月　67 頁
18　上江洲均 「第３章１ ③那覇地区」 沖縄県教育委員会 『沖縄の葬制に関する総合調査報告書』 2012 年３月　148 頁
19　沖縄県教育委員会 『イシグスク内古墓群』 1986 年３月　15 頁
20　平敷令治 「墓」 那覇市教育委員会(編)『那覇市歴史地図 ― 文化遺産悉皆調査報告書』 1986 年

第1表　古墓計測一覧（1）

挿図番号	墓番号	墓形態	座標（墓口前）	標高(m)（墓口前）	墓口方位	計測値(m・度) 凡例模式図(2)・(4) 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	面積(㎡) 墓域（1×2）	墓庭	備考
第6～10図	第1号墓	平葺墓	X 26,024.847 Y 22,825.025	113.427	S-22°-E	12	10.6	6.92	5.05	0.27	1.78	3.18	24	0.25	4.63	－	－	－	127.2	33.67	－
第11～15図	第2号墓	掘込墓	X 26,016.912 Y 22,803.520	117.922	S-76°-E	11.5	7.5	(4.9)	(5.6)	0.8	(1.66)	－	－	－	－	－	0.43 ～ 0.47	－	86.25	(28.5)	墓室崩壊のため、墓庭の範囲が不明瞭となっている。
第16・17・19図 第20・22・23図	第3号墓	平葺墓	X 26,009.577 Y 22,798.194	116.919	S-25°-E	11	5	4	3.2 ～ 3.56	0.6	1	2.47	22	0.16 ～ 0.29	7.06	－	－	－	55	13.85	計測値9・10は、第4号墓と共有する。
第16・18・19図 第21・23図	第4号墓	平葺墓	X 26,008.340 Y 22,795.069	116.768	S-25°-E	10	4.2	3.5	3.8	－	－	2.63	23	0.16 ～ 0.29	7.06	－	－	－	42	12.97	墓庭は、第5号墓と共有する。 計測値9・10は、第3号墓と共有する。
第24・26～28図	第5号墓	平葺墓？	X 26,004.937 Y 22,793.224	116.657	N-79°-E	8.1	4.6	3.8	3.5	－	－	2.39	－	0.17	(0.82)	－	－	－	37.26	12.97	墓庭は、第4号墓と共有する。
第24・25・29図	第6号墓	石積墓	X 26,004.090 Y 22,795.459	116.741	N-11°-W	1.2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1.2	－	－
第30～38図	第7号墓	破風墓	X 25,992.945 Y 22,778.546	114.372	S-1°-W	11	5	4.6	3.1 ～ 3.6	0.6	1.4	2.8	27	0.17	3.05	－	－	－	55	15.99	－
第30・39～46図	第8号墓	疑似亀甲墓	X 25,991.715 Y 22,783.365	114.007	S-16°-E	8.8	5	3.3	3.5	0.7	1.3	2.36	15	－	3.75	－	－	－	44	11.62	－
第30・47～50図	第9号墓	疑似亀甲墓	X 25,992.976 Y 22,787.402	114.063	S-17°-E	9.4	5	3.3	3.3 ～ 3.5	(0.8)	(1.2)	2.25	16	－	3.45	－	－	－	47	11.65	－
第51～58図	第11号墓	亀甲墓	X 25,988.176 Y 22,799.657	108.320	S-19°-E	16.5	11	5.95 ～ 5.98	6.93 ～ 7	1.3	1.37 ～ 1.47	2.26	15	0.14	3.54	0.71	0.97 ～ 1.02	7.17	181.5	42.45	－
第30・59～61図	第13号墓	掘込墓	X 25,994.752 Y 22,792.995	114.585	S-2°-W	2.3	2.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5.06	－	－

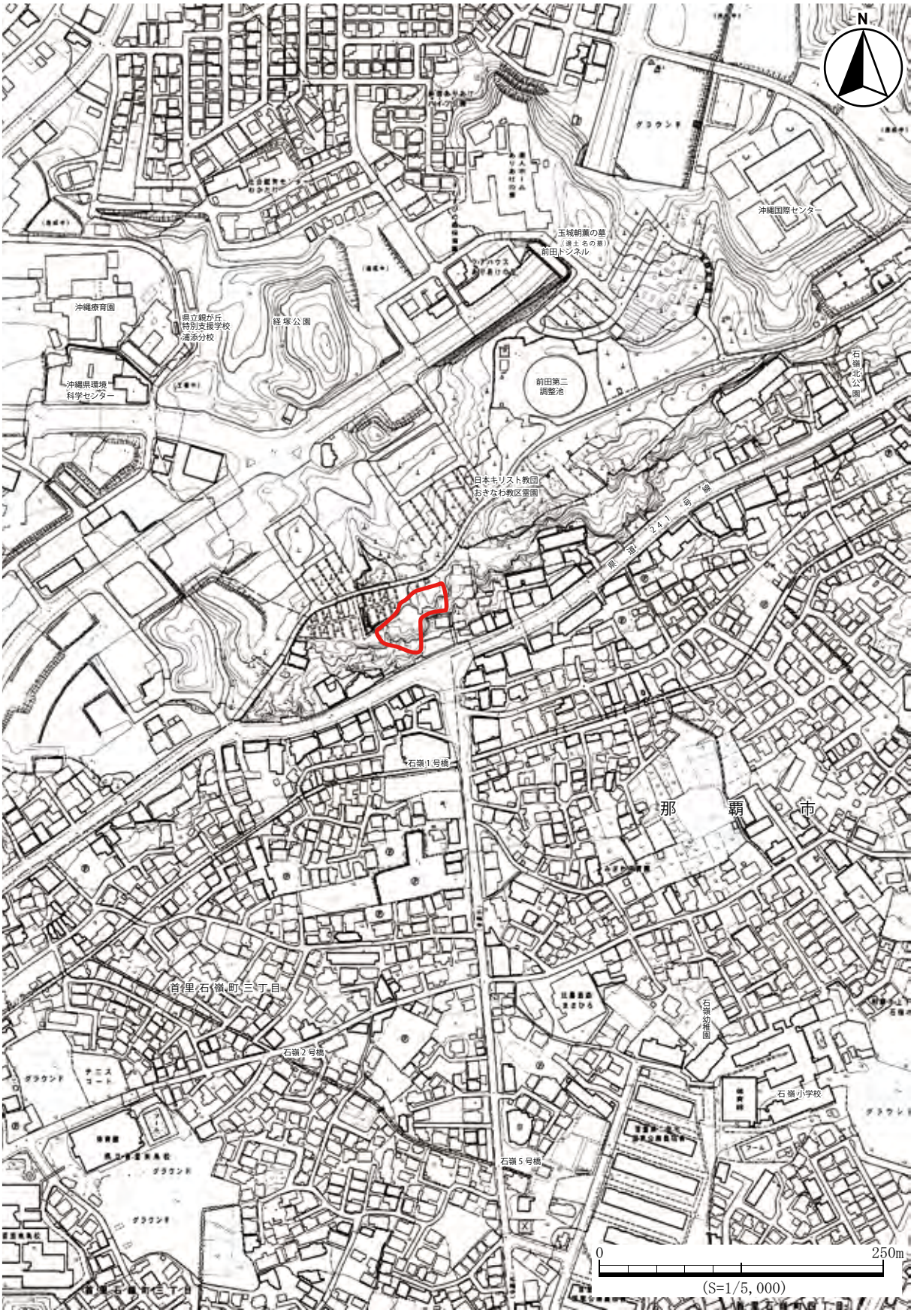
※　「墓域」及び「墓庭」の面積は、各々の直交する計測距離の積となる近似値である。

第2表　古墓計測一覧（2）

挿図番号	墓番号	墓形態	凡例模式図（6）																				サンミデー（cm）		面積（㎡）		
			墓口・羨道（cm）				墓室（cm）																		墓室		サンミデー
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	シルヒラシドゥクル	全体	
第6～10図	第1号墓	平葺墓	238	64	106	98 ～ 99	276 ～ 279	240	193	98	134	140	47 ～ 55	37 ～ 38	45 ～ 50	35 ～ 36	41 ～ 44	43 ～ 44	48 ～ 51	21	47 ～ 51	21 ～ 24	89 ～ 90	266	1.78	6.27	2.36
第11～15図	第2号墓	掘込墓	102	64 ～ 66	—	—	(260)	246 ～ 258	—	—	132	154	41 ～ 52	19 ～ 20	47 ～ 51	13 ～ 18	58 ～ 62	21 ～ 24	58 ～ 66	19 ～ 23	—	—	91 ～ 94	250	1.91	(6.0)	上段 (2.33)
第16・17・19図 第20・22・23図	第3号墓	平葺墓	80 ～ 81	62	93	82	270 ～ 272	199 ～ 231	166	97	110	155	32 ～ 40	25 ～ 30	31 ～ 34	25 ～ 26	74 ～ 78	31 ～ 33	71 ～ 84	27 ～ 28	—	—	73 ～ 75	233 ～ 243	1.64	5.53	1.75
第16・18・19図 第21・23図	第4号墓	平葺墓	70 ～ 72	61	92	83	132 ～ 133	147 ～ 180	133	100	80	180	—	—	—	—	53 ～ 55	30 ～ 32	—	—	—	—	73 ～ 77	239	1.31	2.10	1.82
第24・26～28図	第5号墓	平葺墓？	74 ～ 76	63	93	83	260	201 ～ 240	150	72	133	151	25 ～ 45	19 ～ 20	29 ～ 40	18 ～ 20	45 ～ 47	25	44 ～ 46	14	23 ～ 32	14 ～ 15	68 ～ 77	273 ～ 293	2.10	5.63	1.95
第24・25・29図	第6号墓	石積墓	—	37	67	—	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	40	88	—	0.24	0.34
第30～38図	第7号墓	破風墓	98	65	106	93	250	303	178	104	128	154	66 ～ 78	14 ～ 21	58 ～ 76	19 ～ 21	37 ～ 40	23 ～ 25	38 ～ 41	21	42 ～ 50	21 ～ 22	170 ～ 184	273 ～ 300	1.65	6.04	5.05
第30・39～46図	第8号墓	疑似亀甲墓	83	62	103	94	193 ～ 200	200	208	132	115	116	28 ～ 41	47	36 ～ 39	50	63 ～ 70	75	—	—	—	—	96 ～ 105	328	1.42	3.84	3.17
第30・47～50図	第9号墓	疑似亀甲墓	101	61	95	79	215	200 ～ 206	188	124	110	125	32 ～ 38	41	37 ～ 39	40	39 ～ 46	47	40 ～ 46	24	—	—	90	330	1.45	4.18	3.00
第51～58図	第11号墓	亀甲墓	94 ～ 97	61	106	95	260 ～ 262	240 ～ 244	208	136	154	148	45 ～ 47	37	44 ～ 45	36 ～ 37	51	51 ～ 52	52 ～ 55	20 ～ 21	—	—	92 ～ 93	258 ～ 264	2.29	6.12	上段 2.37 下段 6.85
第30・59～61図	第13号墓	掘込墓	—	—	—	—	104	83	76 ～ 80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.67	—

※　「墓室」の「全体」の面積は、羨道部分を除く墓室全体の面積である。

※　「墓室」（シルヒラシドゥクル・全体）及び「サンミデー」の面積は、各々の直交する計測距離の積となる近似値である。



第４図　調査地区位置図（赤線内が、調査地区範囲）

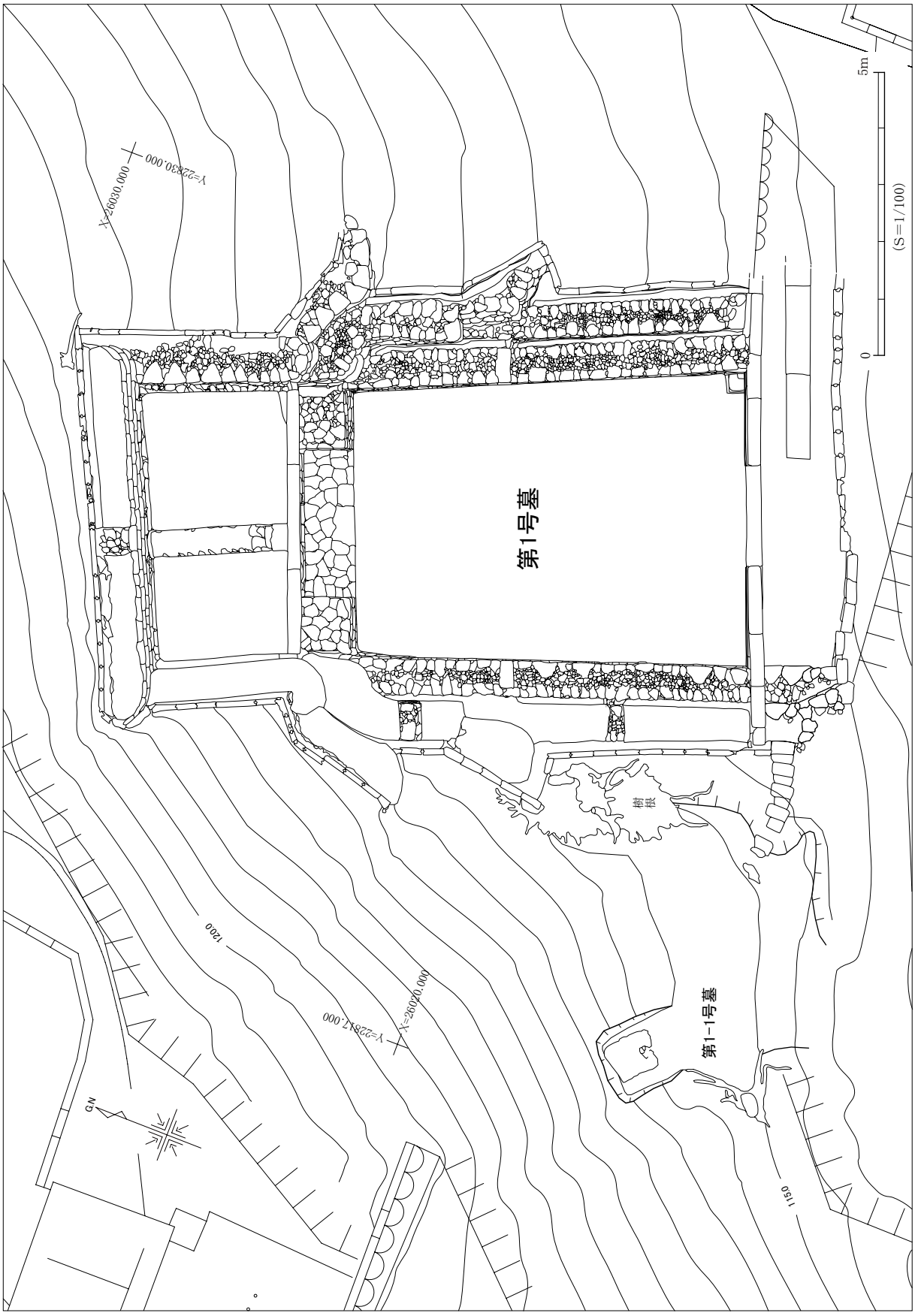
凡 例

記 号	名 称
⊕	基準点
座標値	X=世界測地系座標 X=日本測地系座標 Y=世界測地系座標 Y=日本測地系座標

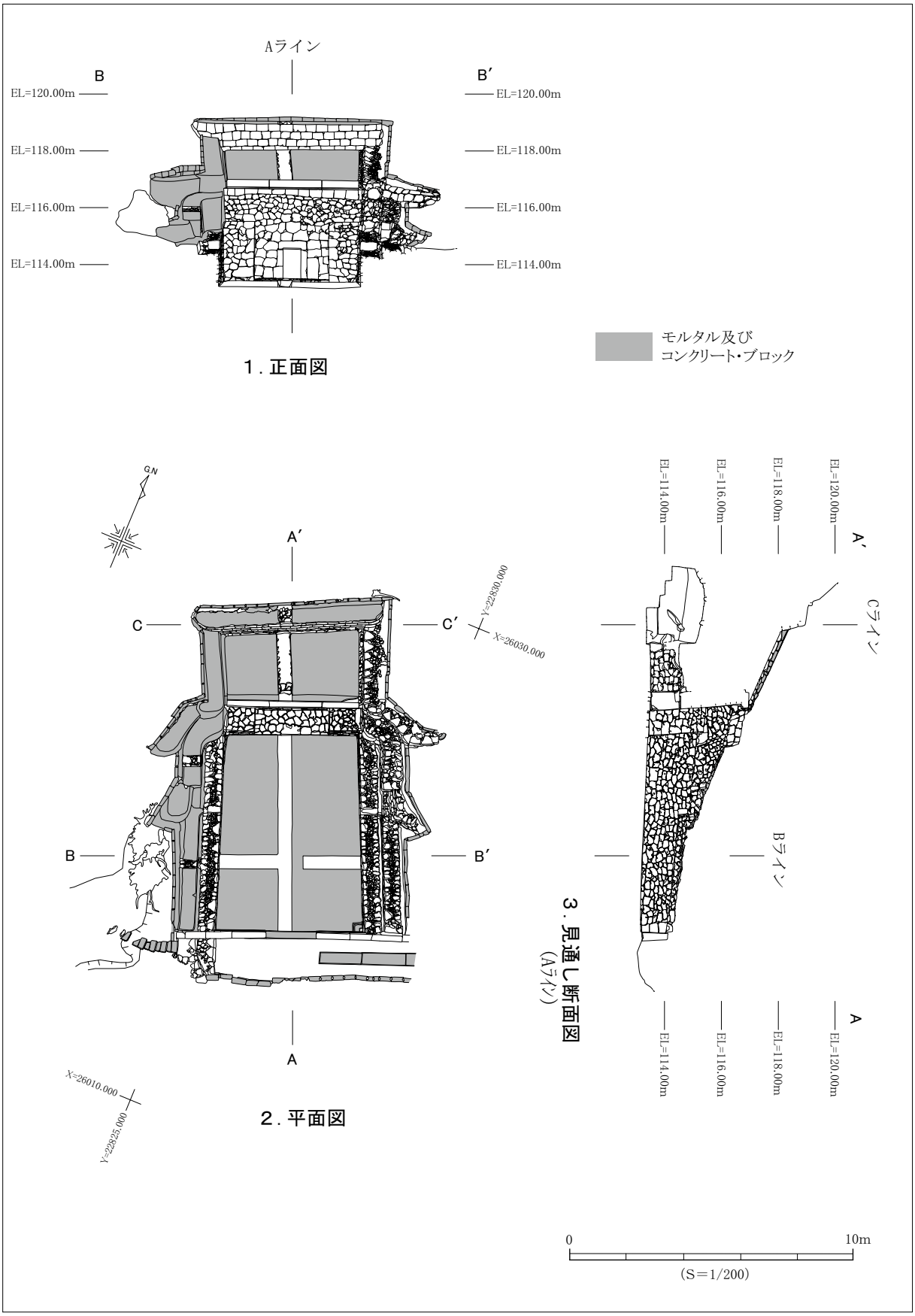
座標一覧表

点 名	X座標	Y座標	Z座標	
402	26016.383	22820.837	115.338	既設基準点
403	26001.541	22808.473	114.190	既設基準点
404	25978.747	22804.266	107.122	既設基準点
HK1	25989.860	22792.147	113.767	新設基準点(その1)
HK2	25985.139	22782.252	113.699	新設基準点(その1)
HK3	25973.338	22767.611	0.000	新設基準点(その1)
HK401	25997.201	22778.954	0.000	新設基準点(その2)
HK402	26020.045	22809.078	122.075	新設基準点(その2)
HK403	26009.965	22806.701	118.559	新設基準点(その2)

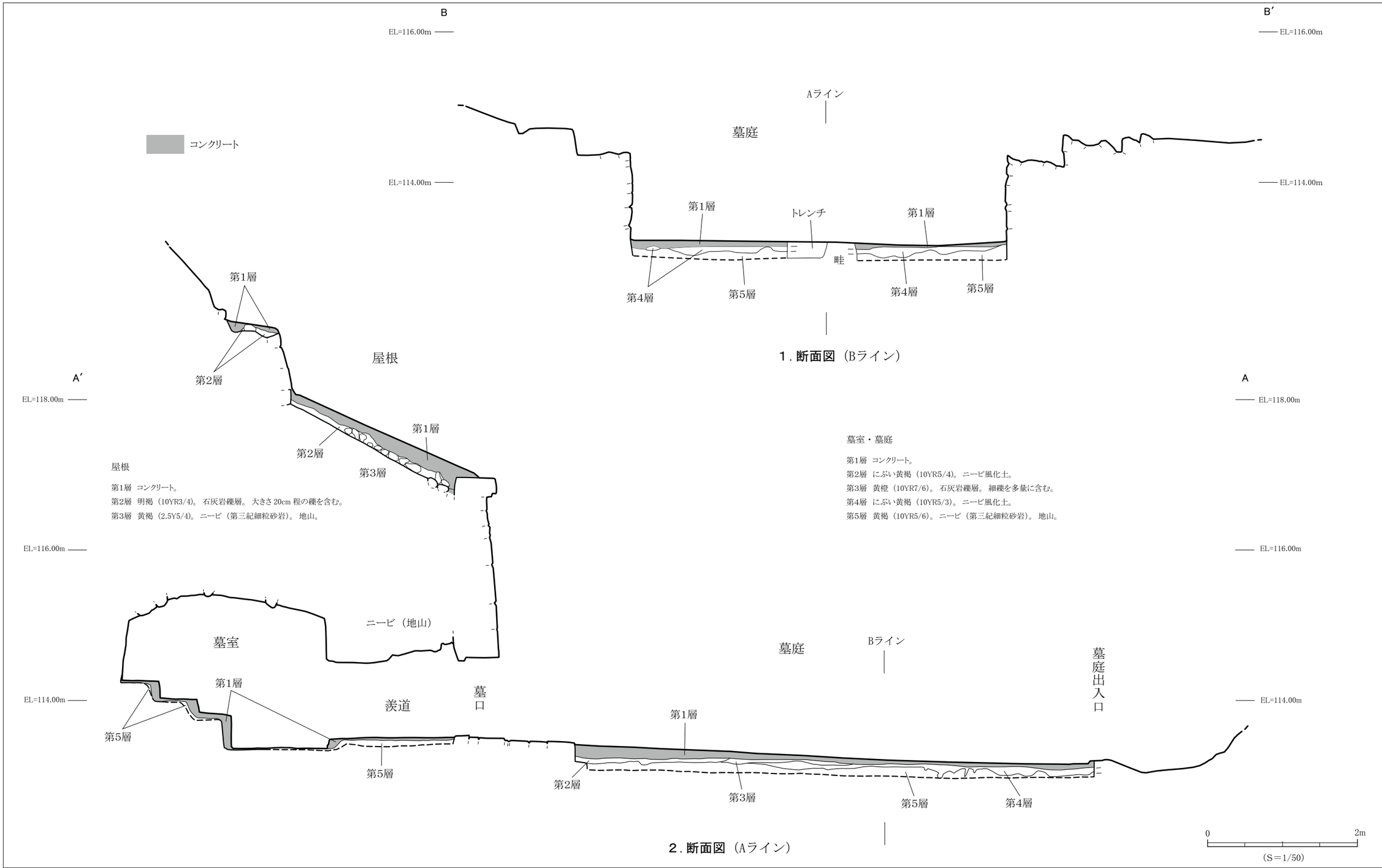
第５図　フクヂ山古墓群 古墓分布状況



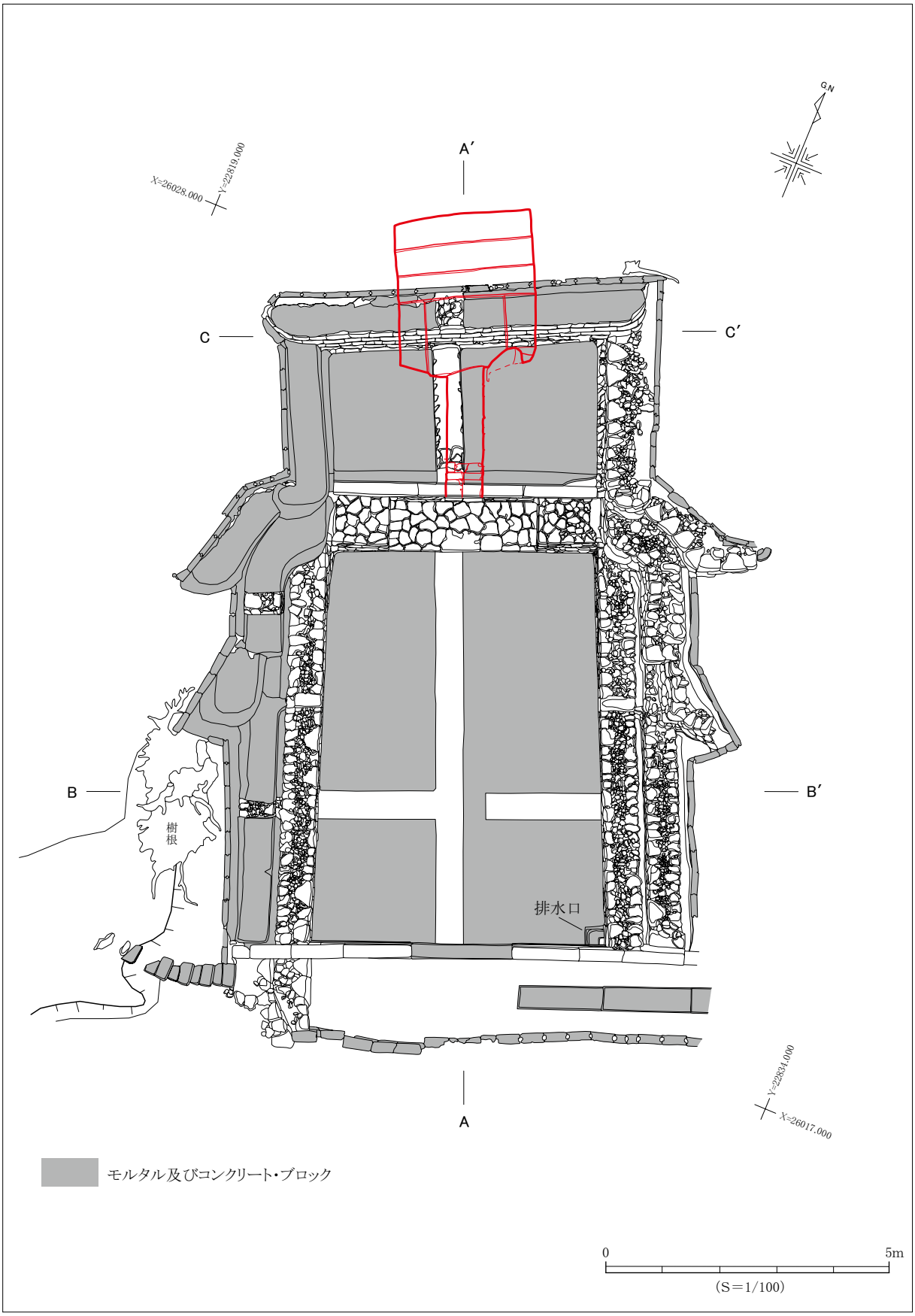
第６図　第１号墓、第1-1号墓 平面図


Aライン
B
B′
EL=120.00m
EL=118.00m
EL=116.00m
EL=114.00m
モルタル及び
コンクリート・ブロック
1．正面図
G.N
A′
C
C′
B
B′
A
X=26030.000
Y=22830.000
X=26010.000
Y=22825.000
2．平面図
3．見通し断面図
(Aライン)
Cライン
Bライン
A′
A
0
10m
(S＝1/200)

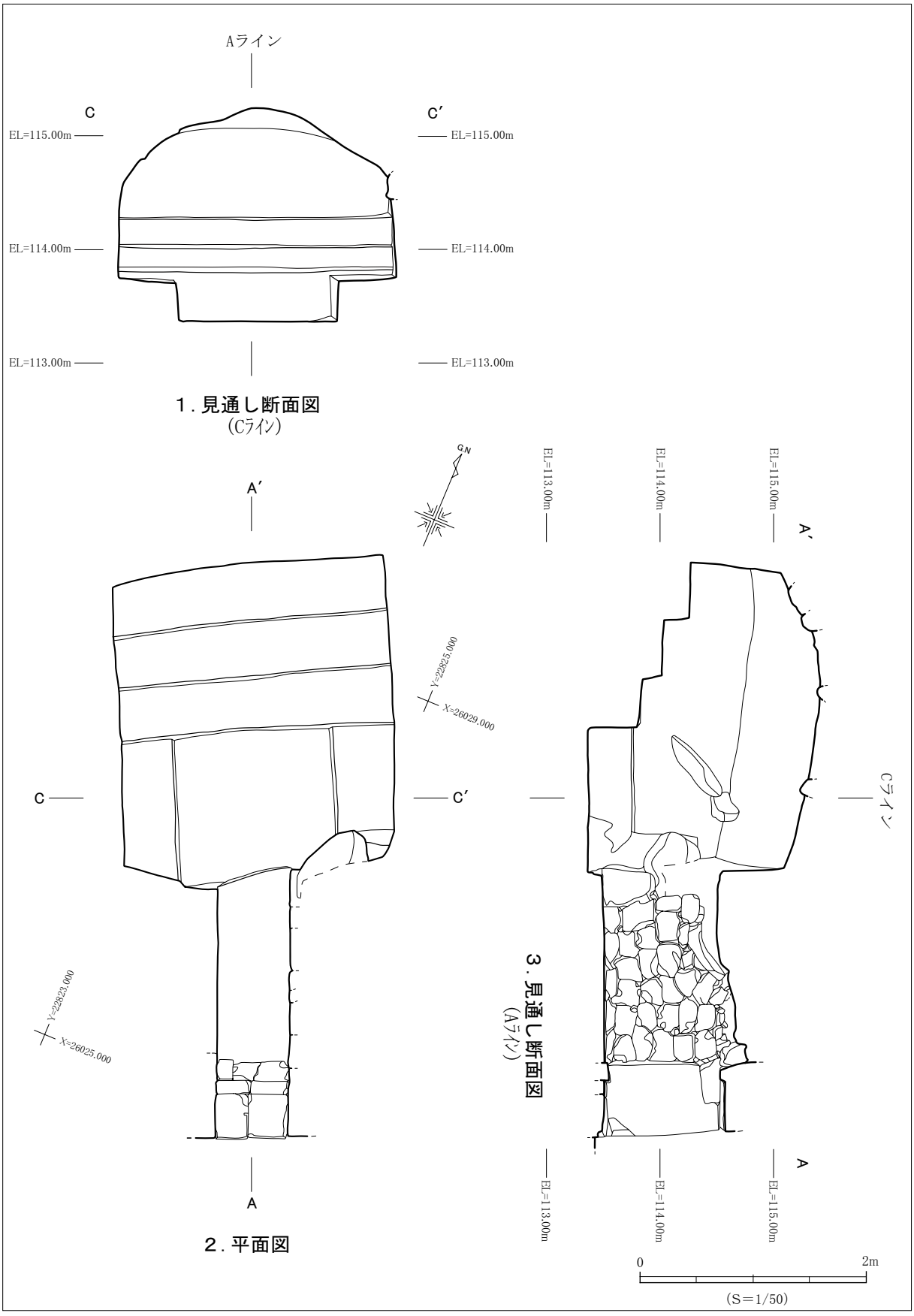
第７図　第１号墓


コンクリート
B
EL=116.00m
B′
EL=116.00m
Aライン
墓庭
EL=114.00m
EL=114.00m
第1層
トレンチ
第1層
畦
第4層
第5層
第4層
第5層
1．断面図（Bライン）
A′
EL=118.00m
A
EL=118.00m
第1層
第2層
屋根
第1層
第2層
第3層
屋根
第1層 コンクリート。
第2層 明褐（10YR3/4）。石灰岩礫層。大きさ20cm程の礫を含む。
第3層 黄褐（2.5Y5/4）。ニービ（第三紀細粒砂岩）。地山。
墓室・墓庭
第1層 コンクリート。
第2層 にぶい黄褐（10YR5/4）。ニービ風化土。
第3層 黄橙（10YR7/6）。石灰岩礫層。細礫を多量に含む。
第4層 にぶい黄褐（10YR5/3）。ニービ風化土。
第5層 黄褐（10YR5/6）。ニービ（第三紀細粒砂岩）。地山。
EL=116.00m
EL=116.00m
ニービ（地山）
墓室
Bライン
墓庭
墓庭出入口
EL=114.00m
羨道
墓口
EL=114.00m
第1層
第5層
第5層
第1層
第2層
第3層
第5層
第4層
0
2m
（S＝1/50）
2．断面図（Aライン）

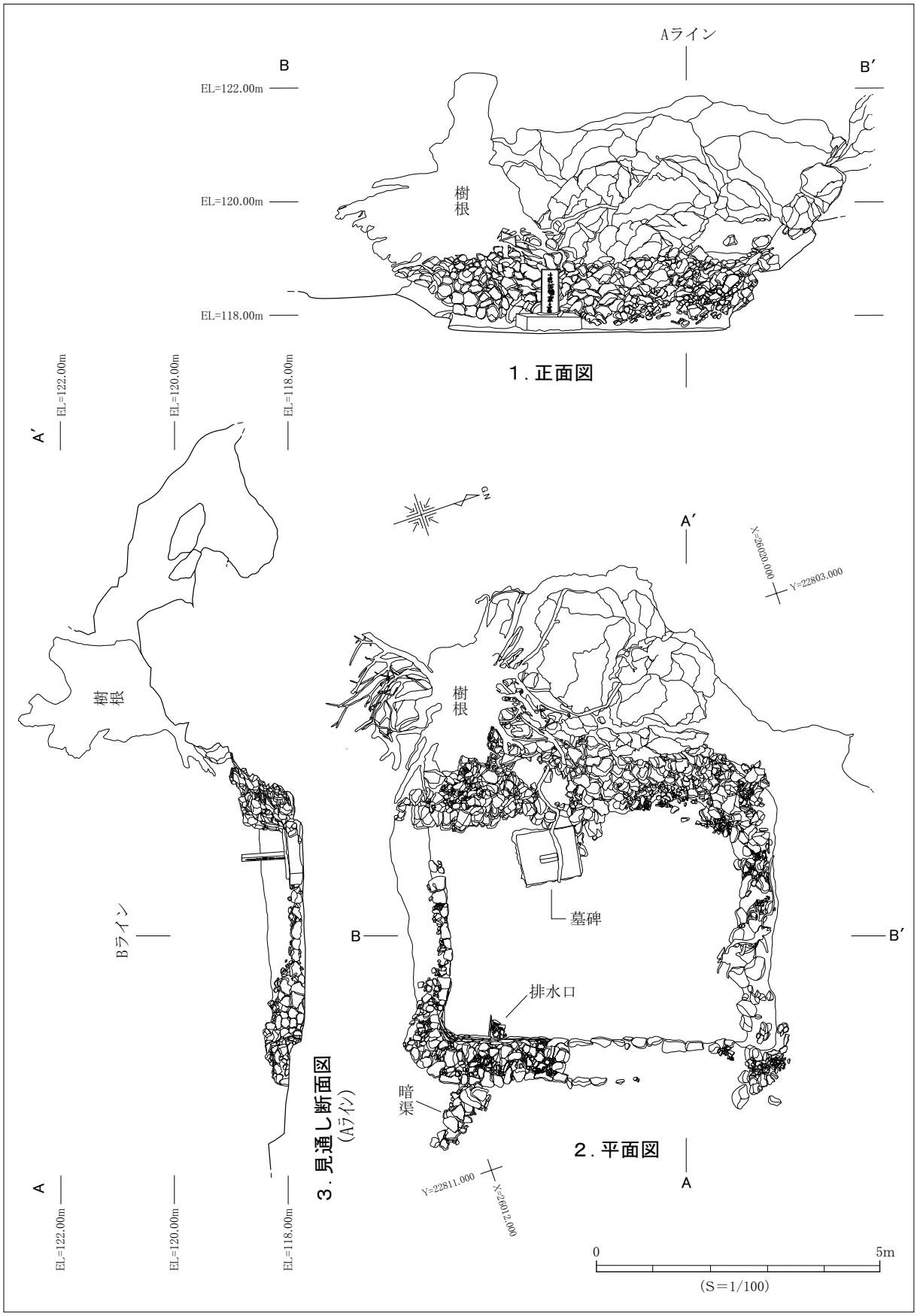
第８図　第１号墓 断面図



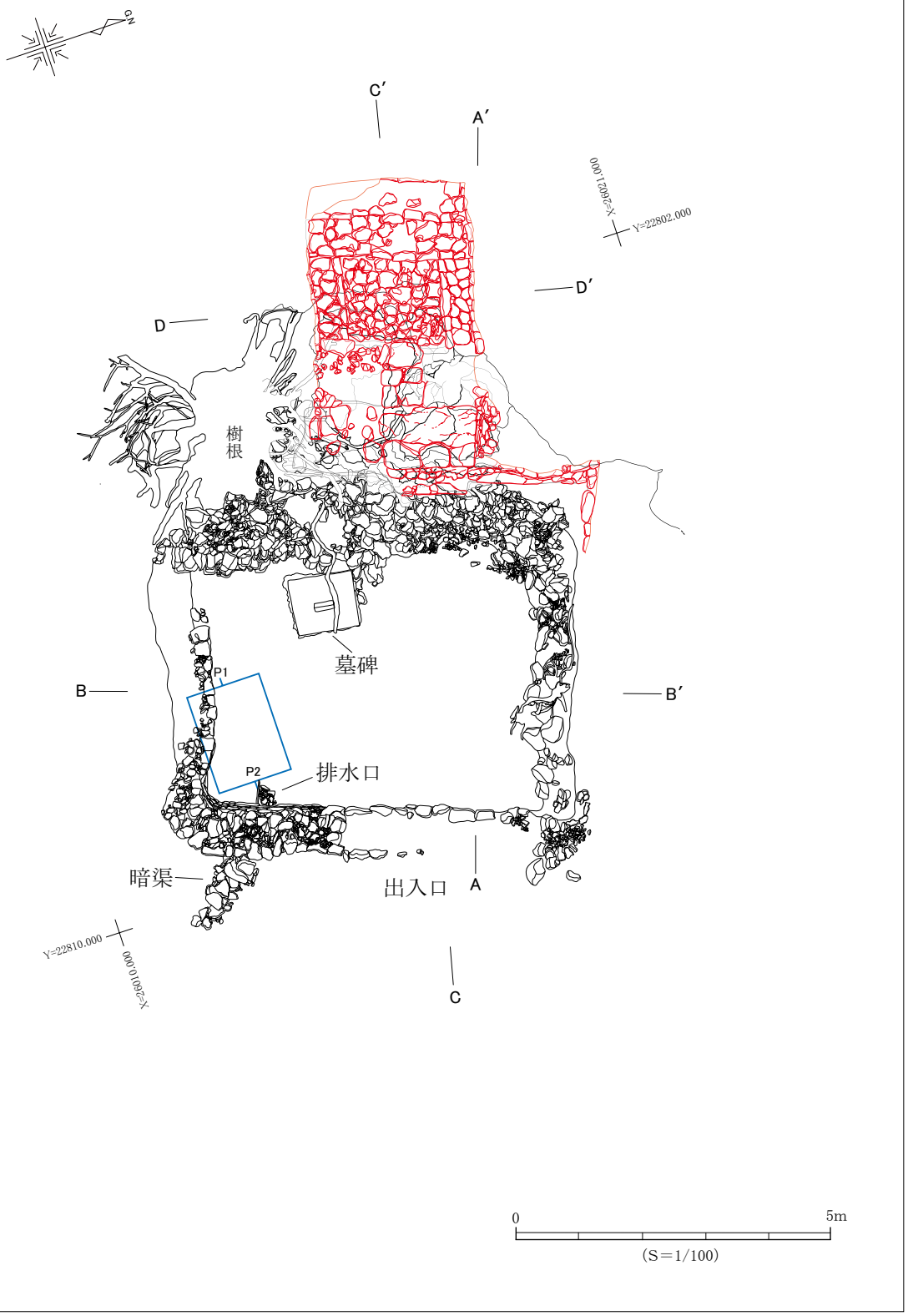
第９図　第１号墓 平面図（赤は、墓室平面図）


Aライン
C
C′
EL=115.00m
EL=114.00m
EL=113.00m
1．見通し断面図
(Cライン)
A′
A
C
C′
G.N
Y=22825.000
X=26029.000
Y=22823.000
X=26025.000
2．平面図
EL=113.00m
EL=114.00m
EL=115.00m
Cライン
3．見通し断面図
(Aライン)
0
2m
(S＝1/50)

第 10 図　第 1 号墓 墓室


Aライン
B
B′
EL=122.00m
EL=120.00m
EL=118.00m
樹根
1．正面図
A′
A
Bライン
3．見通し断面図
(Aライン)
N
X=26020.000
Y=22803.000
墓碑
排水口
暗渠
Y=22811.000
X=26012.000
2．平面図
0
5m
(S＝1/100)

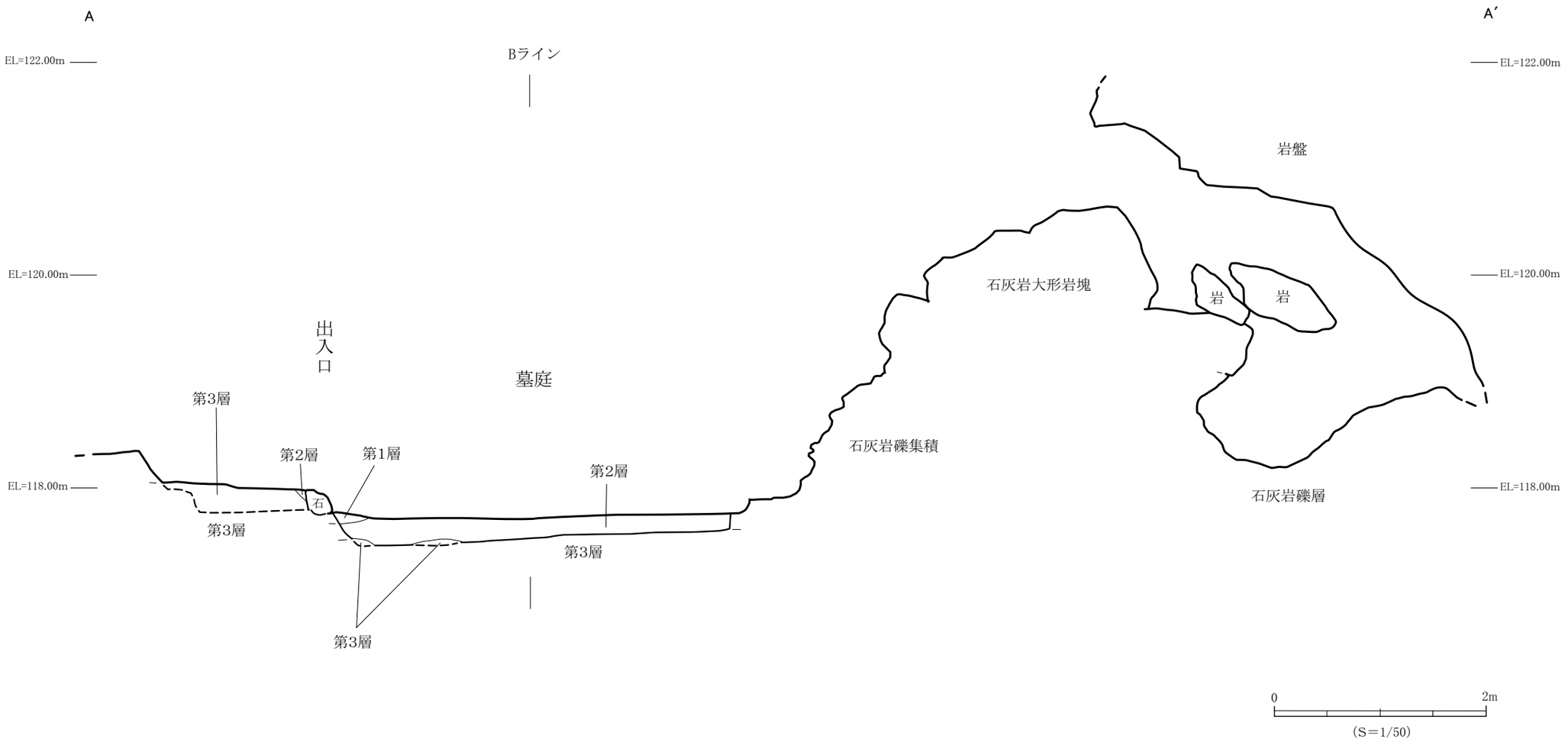
第 11 図　第２号墓



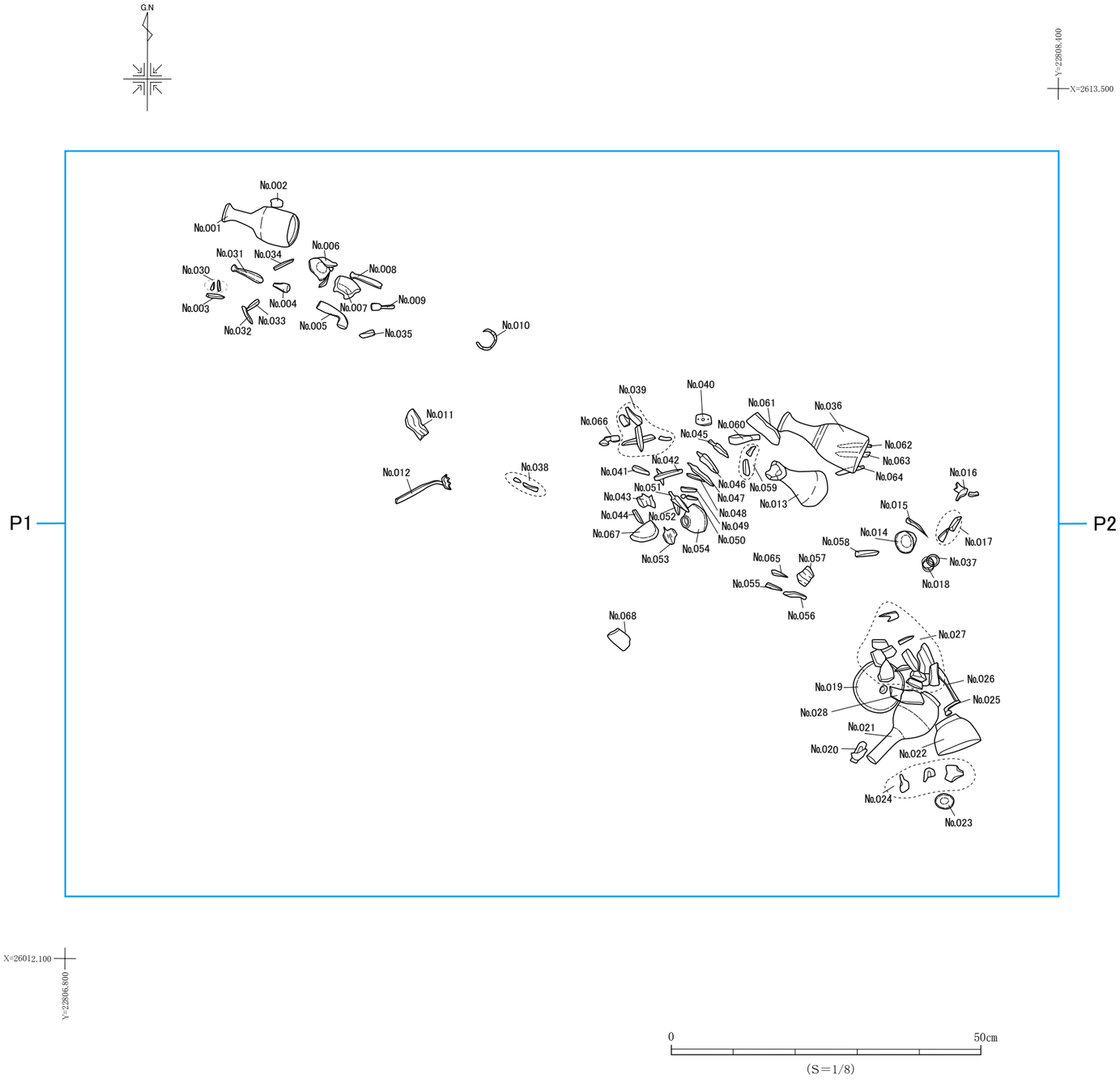
第 12 図　第２号墓 平面図（赤は、墓室・サンミデー平面図）
※ 青は、墓庭の遺物分布状況図（第14 図）のＰ１・Ｐ２に対応

墓庭

第1層　にぶい黄褐（10YR4/3）。石灰岩小礫を多量に含む。
第2層　にぶい黄褐（10YR5/4）。クチャ礫やニービ風化土を多く含む。
第3層　西側ではクチャ礫（島尻層群泥岩）を主体とし、東側ではニービ（第三紀細粒砂岩）となる。地山となる可能性が高い。



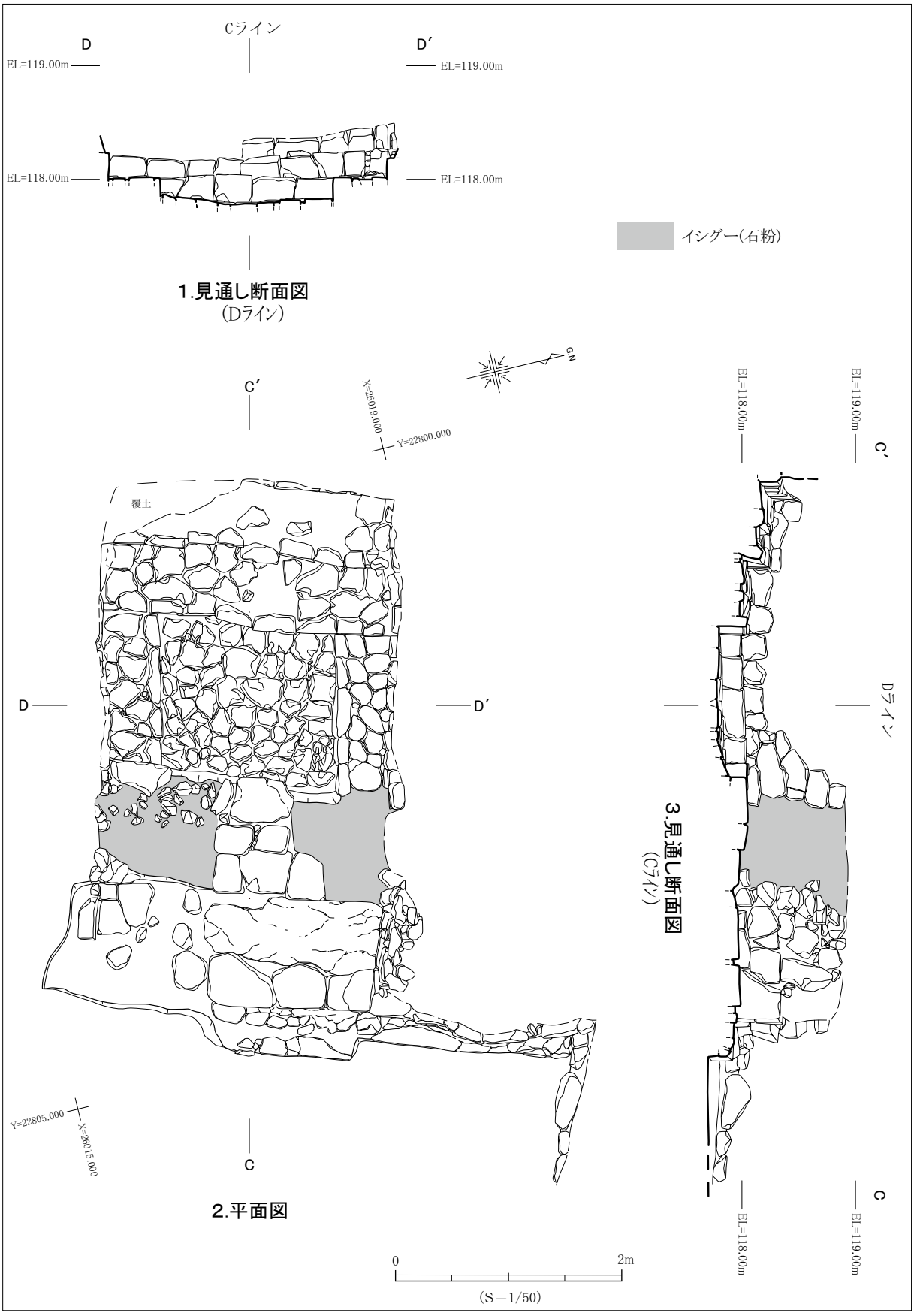
第 13 図　第 2 号墓 断面図



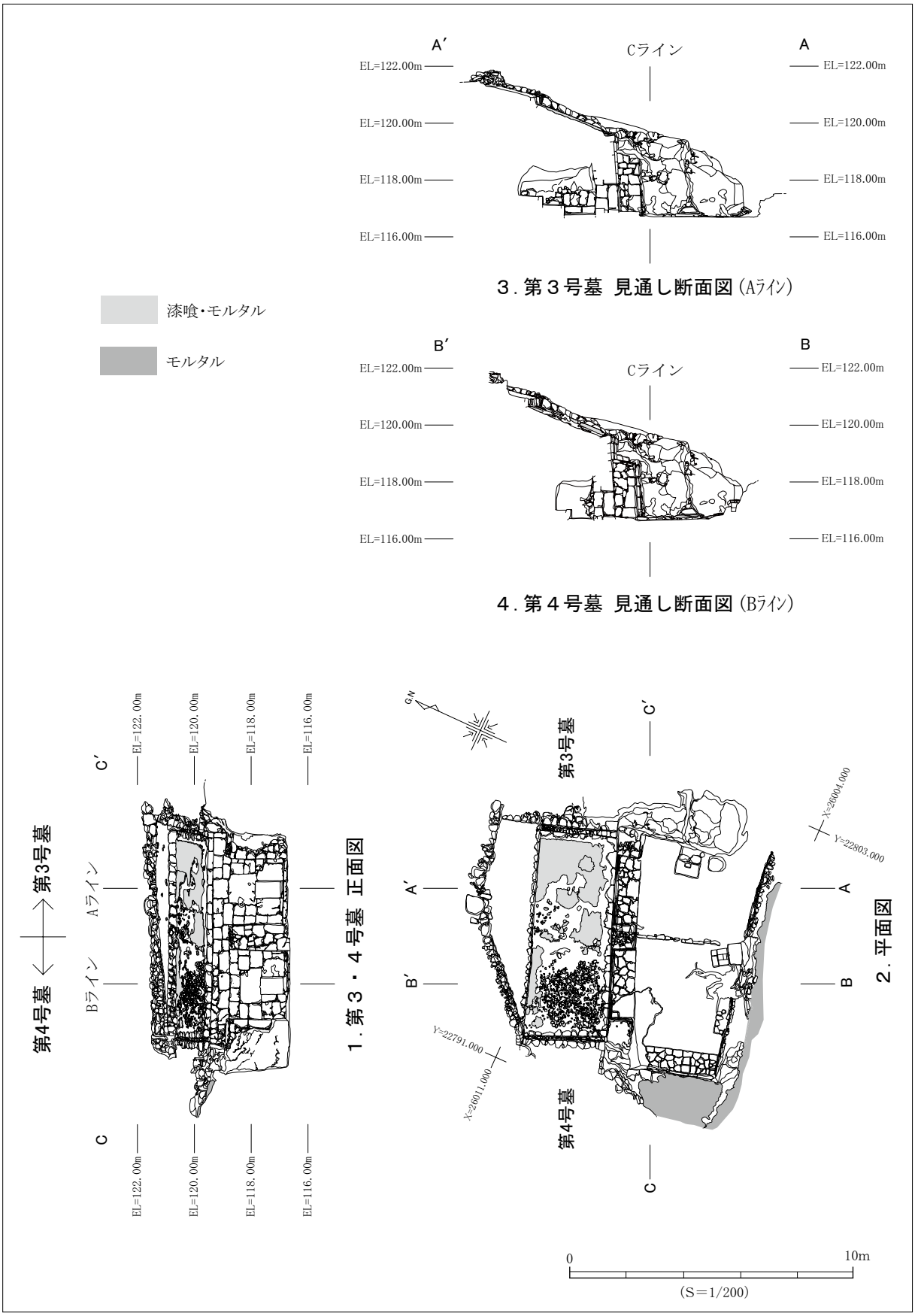
取上座標一覧表

点　名	X座標	Y座標	Z座標	種　別	備　考
№.001	26013.281	22807.123	117.752	沖縄産施釉陶器 瓶	
№.002	26013.317	22807.140	117.722	金属製品 金具？	
№.003	26013.166	22807.041	117.722	金属製品 簪	№.030と接合
№.004	26013.181	22807.149	117.641	金属製品 煙管 雁首	
№.005	26013.141	22807.230	117.633	金属製品 煙管 雁首	
№.006	26013.212	22807.212	117.628	沖縄産施釉陶器 小杯	№.007と接合
№.007	26013.184	22807.255	117.632	沖縄産施釉陶器 小杯	№.006と接合
№.008	26013.193	22807.285	117.629	鉄釘	
№.009	26013.148	22807.312	117.620	金属製品 煙管 吸口	
№.010	26013.091	22807.491	117.637	金属製品 指輪	
№.011	26012.961	22807.363	117.610	金属製品 刀子?	
№.012	26012.867	22807.411	117.683	金属製品 簪	
№.013	26012.877	22807.961	117.670	沖縄産施釉陶器 瓶	
№.014	26012.766	22808.137	117.541	沖縄産施釉陶器 小杯	
№.015	26012.799	22808.169	117.555	鉄釘	
№.016	26012.848	22808.254	117.604	鉄釘	
№.017	26012.791	22808.224	117.598	鉄釘	
№.018	26012.731	22808.187	117.554	金属製品 指輪	
№.019	26012.530	22808.124	117.544	沖縄産施釉陶器 鉢 蓋	№.022と対
№.020	26012.430	22808.077	117.547	金属製品 金具？	
№.021	26012.491	22808.170	117.551	沖縄産施釉陶器 瓶	
№.022	26012.458	22808.224	117.569	沖縄産施釉陶器 鉢 身	№.019と対
№.023	26012.352	22808.222	117.551	本土産磁器 近代 小杯	
№.024	26012.399	22808.190	117.540	鉄釘、金属製品 刀子?	
№.025	26012.506	22808.227	117.525	金属製品 煙管 雁首	
№.026	26012.546	22808.218	117.540	金属製品 煙管 吸口	
№.027	26012.573	22808.160	117.547	鉄釘、金属製品 金具？	
№.028	26012.523	22808.156	117.553	金属製品 刀子	
№.029	26013.745	22807.563	117.735	沖縄産施釉陶器 小杯	青枠外のため、図中に記載なし
№.030	26013.181	22807.043	117.690	金属製品 簪	№.003と接合
№.031	26013.200	22807.095	117.720	金属製品 煙管 吸口	
№.032	26013.136	22807.091	117.638	鉄釘	
№.033	26013.151	22807.103	117.629	鉄釘	
№.034	26013.217	22807.151	117.629	鉄釘	
№.035	26013.104	22807.288	117.612	鉄釘	
№.036	26012.925	22808.045	117.569	沖縄産施釉陶器 瓶	
№.037	26012.743	22808.202	117.550	金属製品 指輪	
№.038	26012.862	22807.539	117.577	鉄釘	
№.039	26012.951	22807.723	117.545	鉄釘	
№.040	26012.969	22807.829	117.520	骨片、金属製品 金具？	
№.041	26012.886	22807.725	117.550	鉄釘	
№.042	26012.880	22807.770	117.532	鉄釘	
№.043	26012.835	22807.734	117.541	鉄釘	
№.044	26012.810	22807.722	117.558	鉄釘	
№.045	26012.922	22807.851	117.531	鉄釘	
№.046	26012.897	22807.834	117.530	鉄釘	
№.047	26012.879	22807.824	117.539	鉄釘	
№.048	26012.872	22807.815	117.522	鉄釘	
№.049	26012.854	22807.806	117.524	鉄釘	
№.050	26012.840	22807.809	117.520	鉄釘	
№.051	26012.835	22807.787	117.536	鉄釘	
№.052	26012.819	22807.787	117.530	鉄釘	
№.053	26012.776	22807.775	117.550	鉄釘	
№.054	26012.804	22807.813	117.530	沖縄産施釉陶器 小杯	
№.055	26012.698	22807.937	117.476	鉄釘	
№.056	26012.685	22807.976	117.473	鉄釘	
№.057	26012.714	22807.994	117.473	鉄釘	
№.058	26012.750	22808.090	117.499	鉄釘	
№.059	26012.903	22807.898	117.515	鉄釘	
№.060	26012.935	22807.892	117.503	金属製品 煙管 吸口	
№.061	26012.951	22807.924	117.513	金属製品 刀子?	
№.062	26012.925	22808.097	117.486	鉄釘	
№.063	26012.911	22808.092	117.485	鉄釘	
№.064	26012.881	22808.055	117.485	鉄釘	
№.065	26012.720	22807.946	117.472	鉄釘	
№.066	26012.936	22807.678	117.497	金属製品 煙管 雁首	
№.067	26012.787	22807.734	117.516	沖縄産陶質土器 鍋 蓋	
№.068	26012.612	22807.692	117.520	金属製品 刀子?	

第 14 図　第２号墓 墓庭 遺物分布状況
※ 第12 図（第２号墓 平面図）の青（Ｐ１・Ｐ２）に対応


Cライン
D
D′
EL=119.00m
EL=119.00m
EL=118.00m
EL=118.00m
イシグー(石粉)
1.見通し断面図
(Dライン)
C′
X=26019.000
Y=22800.000
覆土
D
D′
Y=22805.000
X=26015.000
C
2.平面図
EL=118.00m
EL=119.00m
C′
Dライン
3.見通し断面図
(Cライン)
EL=118.00m
EL=119.00m
C
0
2m
(S=1/50)

第 15 図　第２号墓 墓室


A′
A
Cライン
EL=122.00m
EL=120.00m
EL=118.00m
EL=116.00m
3．第３号墓 見通し断面図（Aﾗｲﾝ）
漆喰・モルタル
モルタル
B′
B
4．第４号墓 見通し断面図（Bﾗｲﾝ）
C′
C
Aライン
Bライン
第3号墓
第4号墓
1．第３・４号墓 正面図
N
X=26004.000
Y=22803.000
Y=22791.000
X=26011.000
2．平面図
0
10m
(S=1/200)

第 16 図　第３・４号墓

屋根

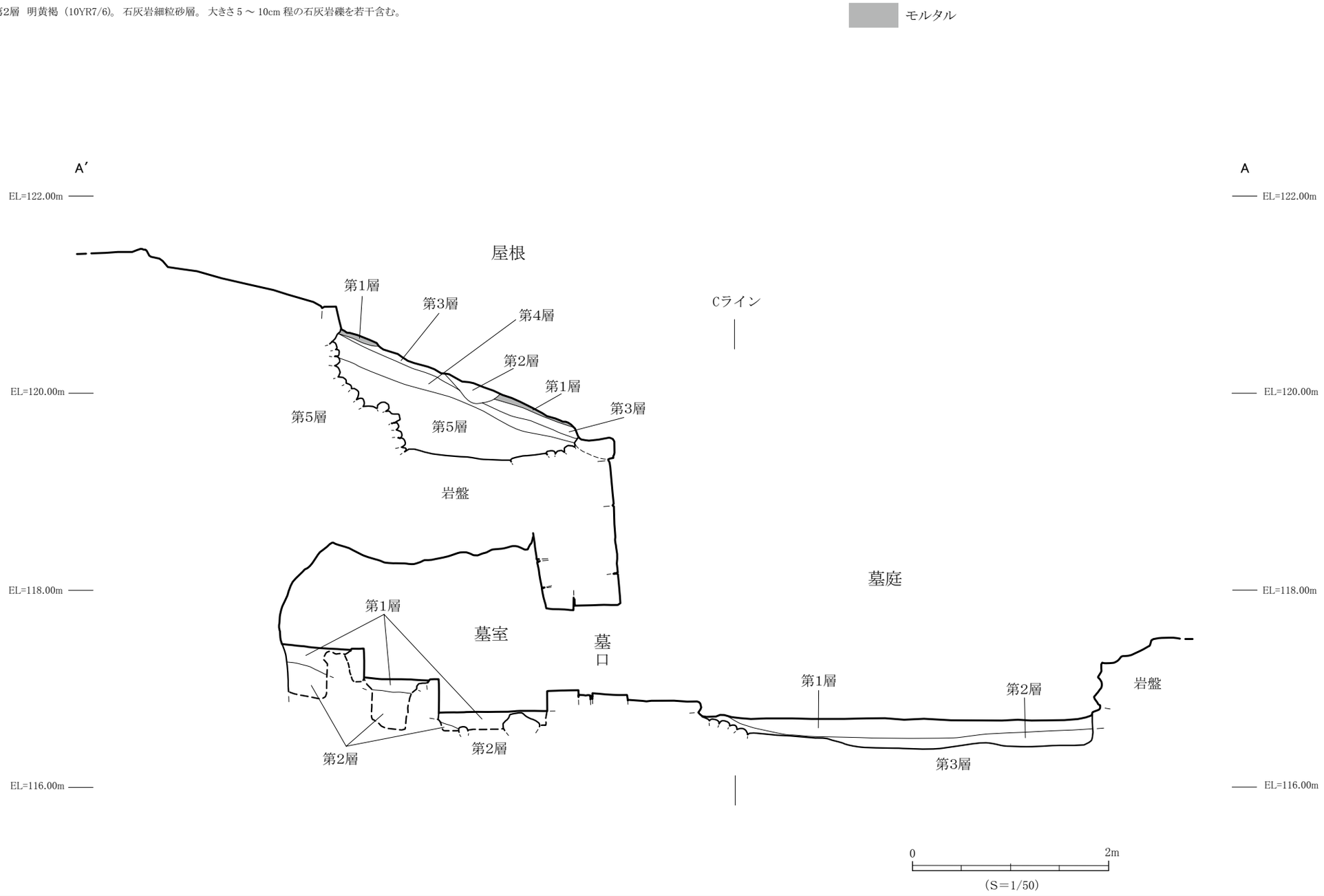
第1層　モルタル。
第2層　灰黄褐（10YR6/2）。植物の根の影響による攪乱と推測される。石灰岩小礫を多量に含む。
第3層　黄褐（10YR5/6）。石灰岩砂礫層。小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。植物の根の影響による攪乱を受ける。
第4層　明黄褐（10YR6/6）。石灰岩砂礫層。小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。堅緻。
第5層　明黄褐（10YR6/6）。石灰岩礫層。大きさ30cm以上の大形礫を多量に含む。

墓室

第1層　明黄褐（10YR6/8）。石灰岩砂礫層。小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩細粒砂層。大きさ5～10cm程の石灰岩礫を若干含む。

墓庭

第1層　暗褐（10YR3/3）。表土。大きさ10cm以下の石灰岩小礫を多量に含む。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ10cm以下の小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。
第3層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩礫層。大きさ10～20cm以上の礫を多量に含む。第1・2層に比べ、大形礫の混入が顕著となる。



第17図　第3号墓 断面図

屋根

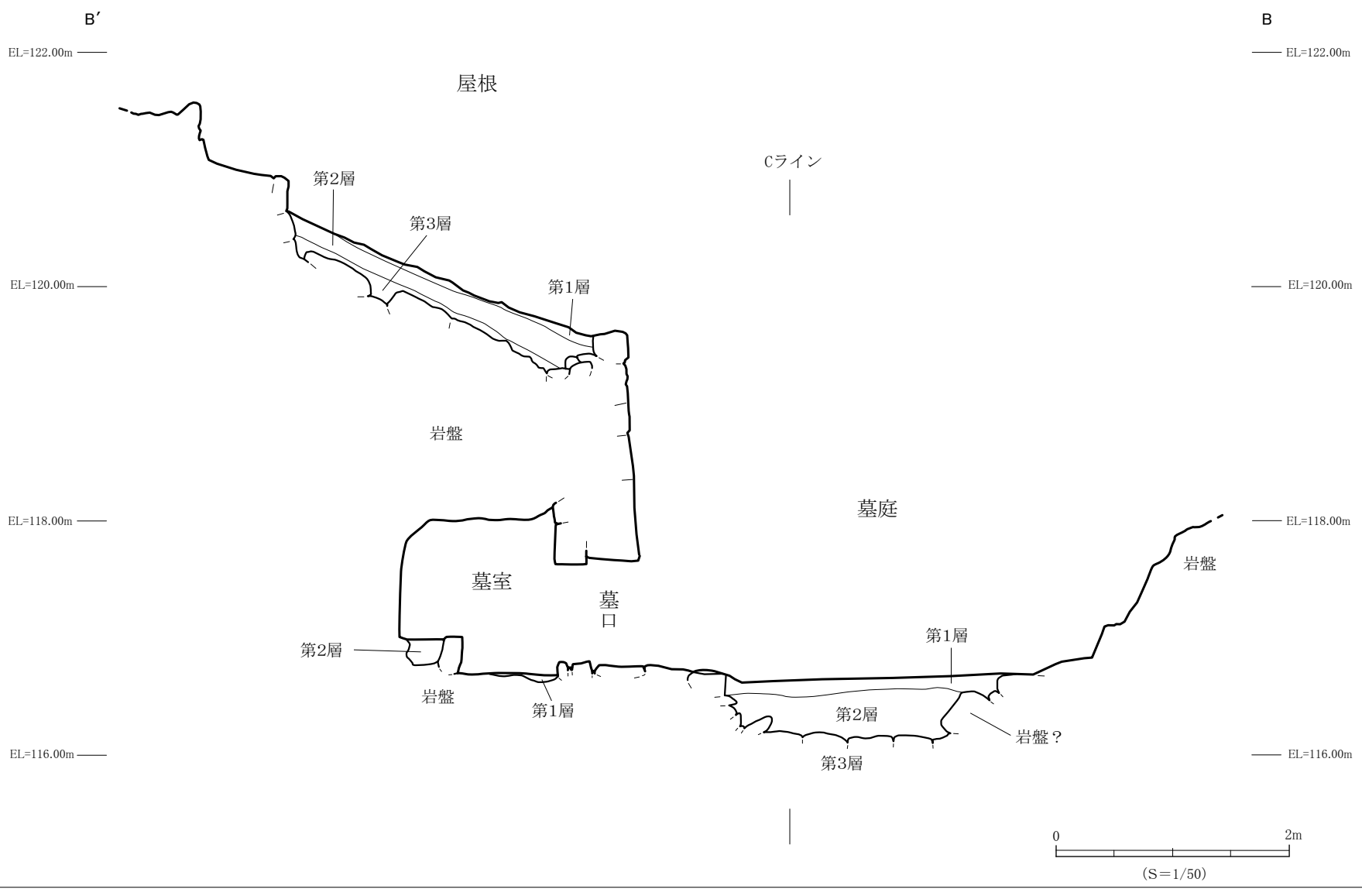
第1層　褐（10YR4/4）。石灰岩砂礫層。大きさ 10 ～ 20cm 程の礫を主体とする。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第3層　暗褐（10YR3/4）。粘質土層。島尻マージに由来する岩盤上の自然堆積層と推測される。

墓室

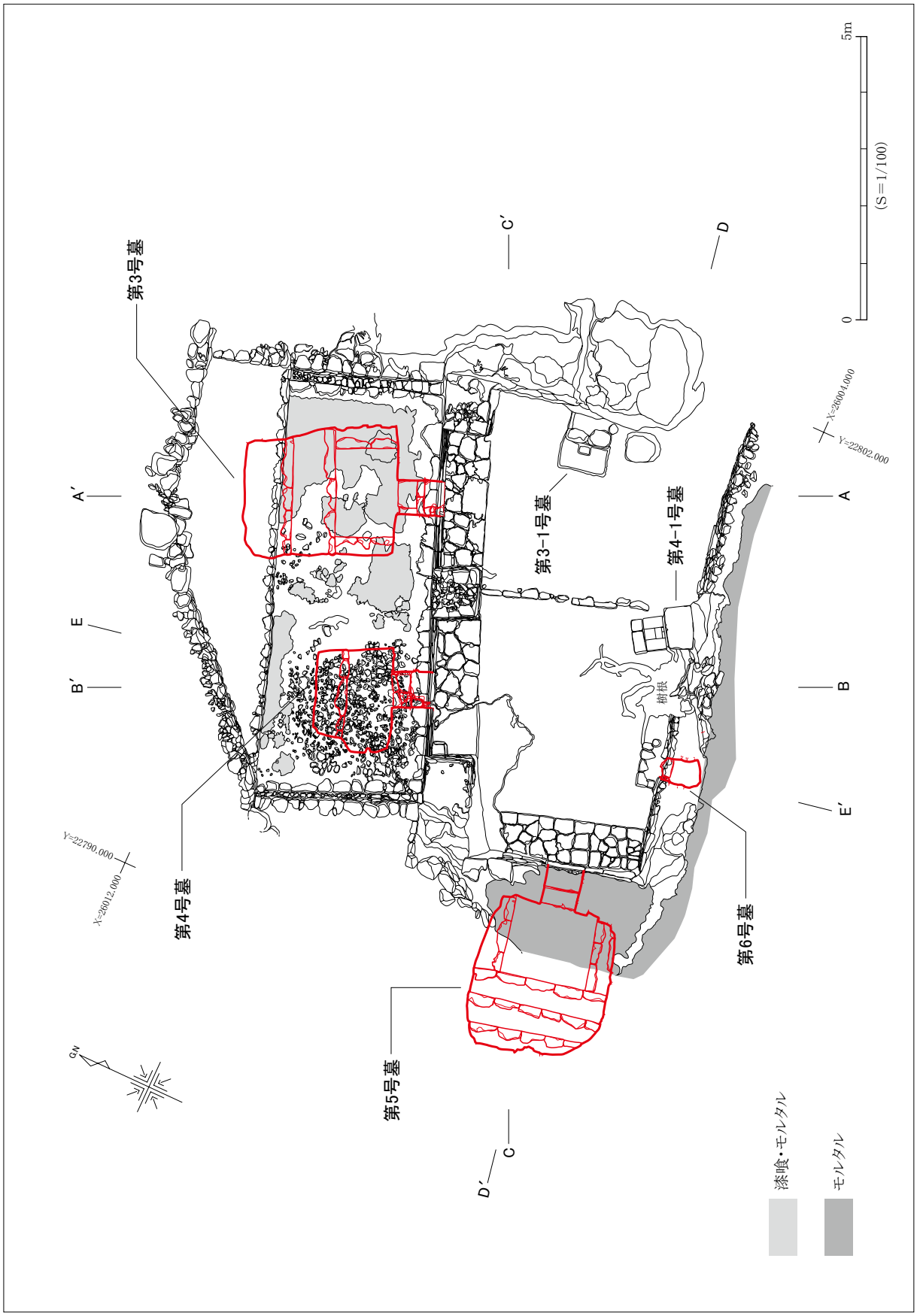
第1層　褐（10YR4/4）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第2層　黄橙（10YR8/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。

墓庭

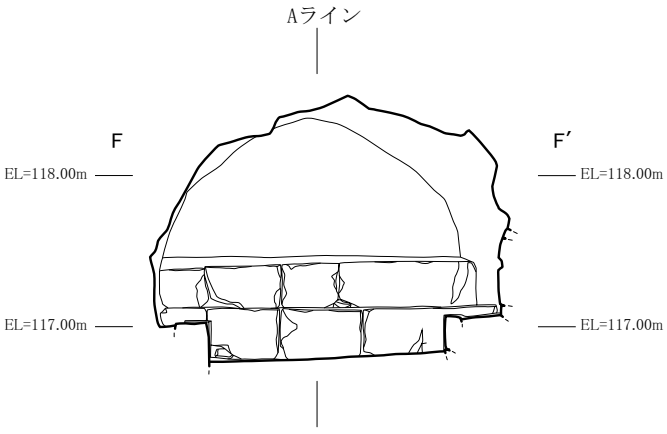
第1層　暗褐（10YR3/3）。表土。大きさ 10cm 以下の石灰岩小礫を多量に含む。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ 10 ㎝以下の小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。
第3層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩礫層。大きさ 10 ～ 20cm 以上の礫を多量に含む。第1・2層に比べ、大形礫の混入が顕著となる。



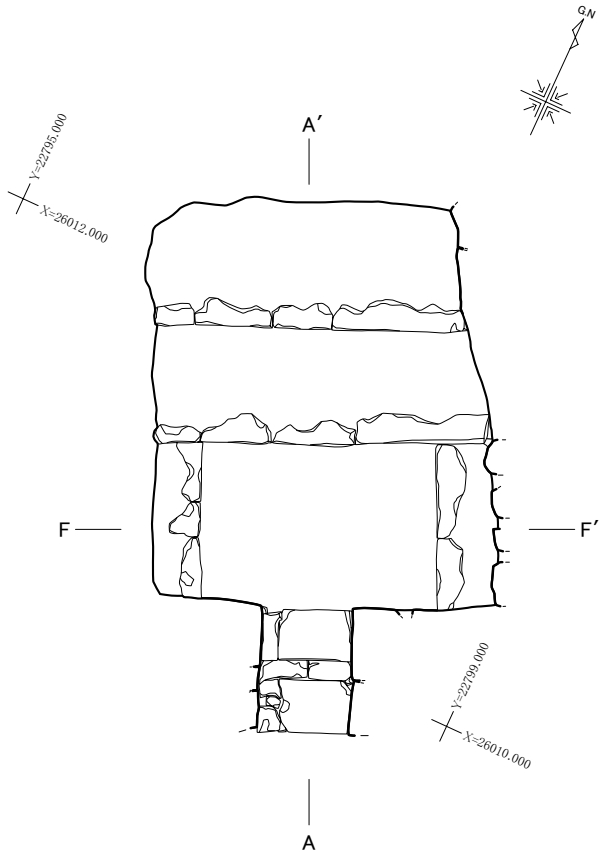
第 18 図　第４号墓 断面図



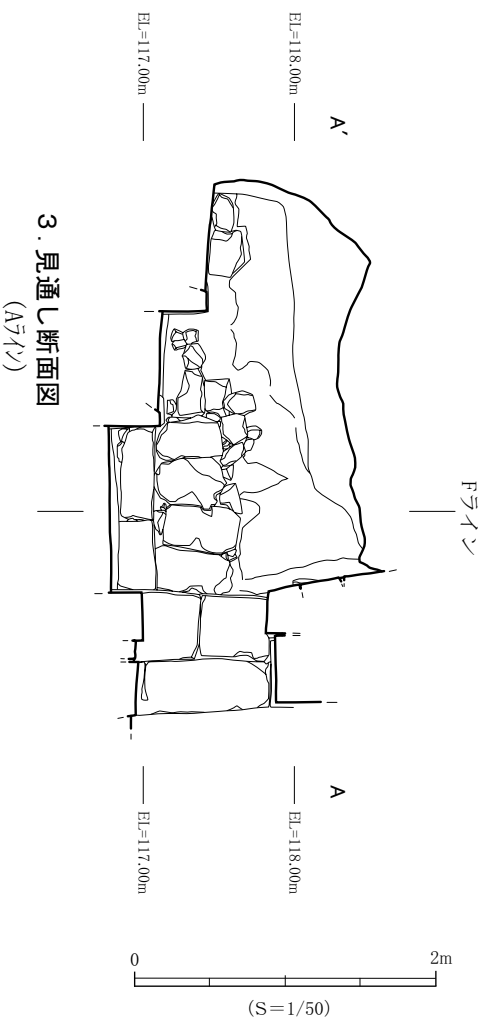
第 19 図　第３～６号墓、第３－１号墓、第４－１号墓 平面図（赤は、各墓の墓室平面図）



1．見通し断面図
(Fライン)

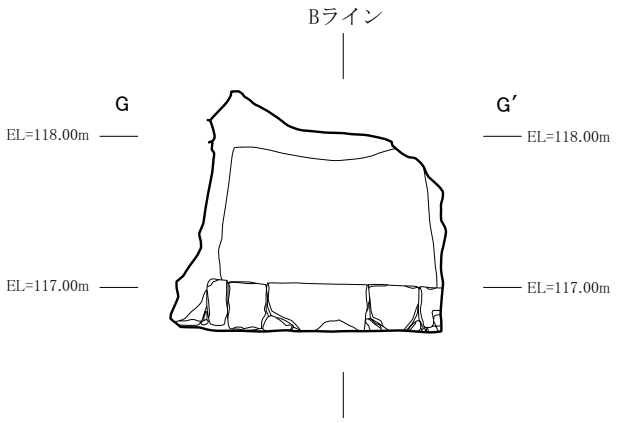


2．平面図

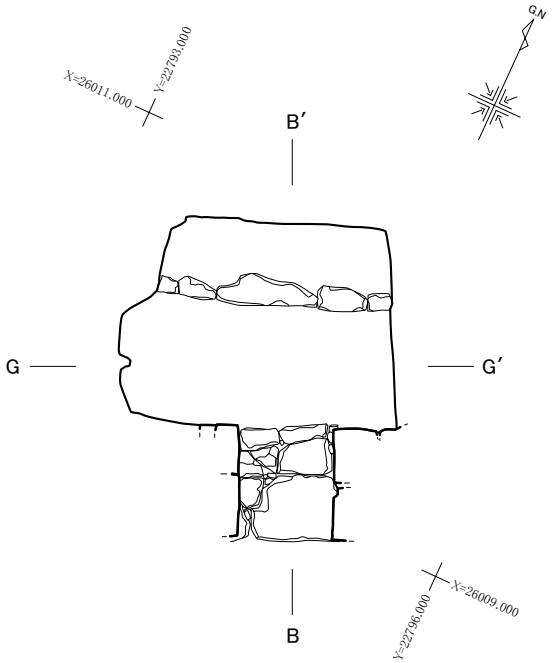


3．見通し断面図
(Aライン)

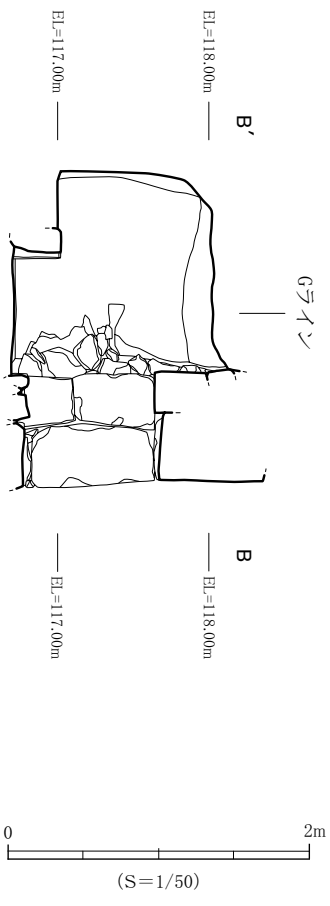
第 20 図　第３号墓 墓室



1．見通し断面図
(Gﾗｲﾝ)



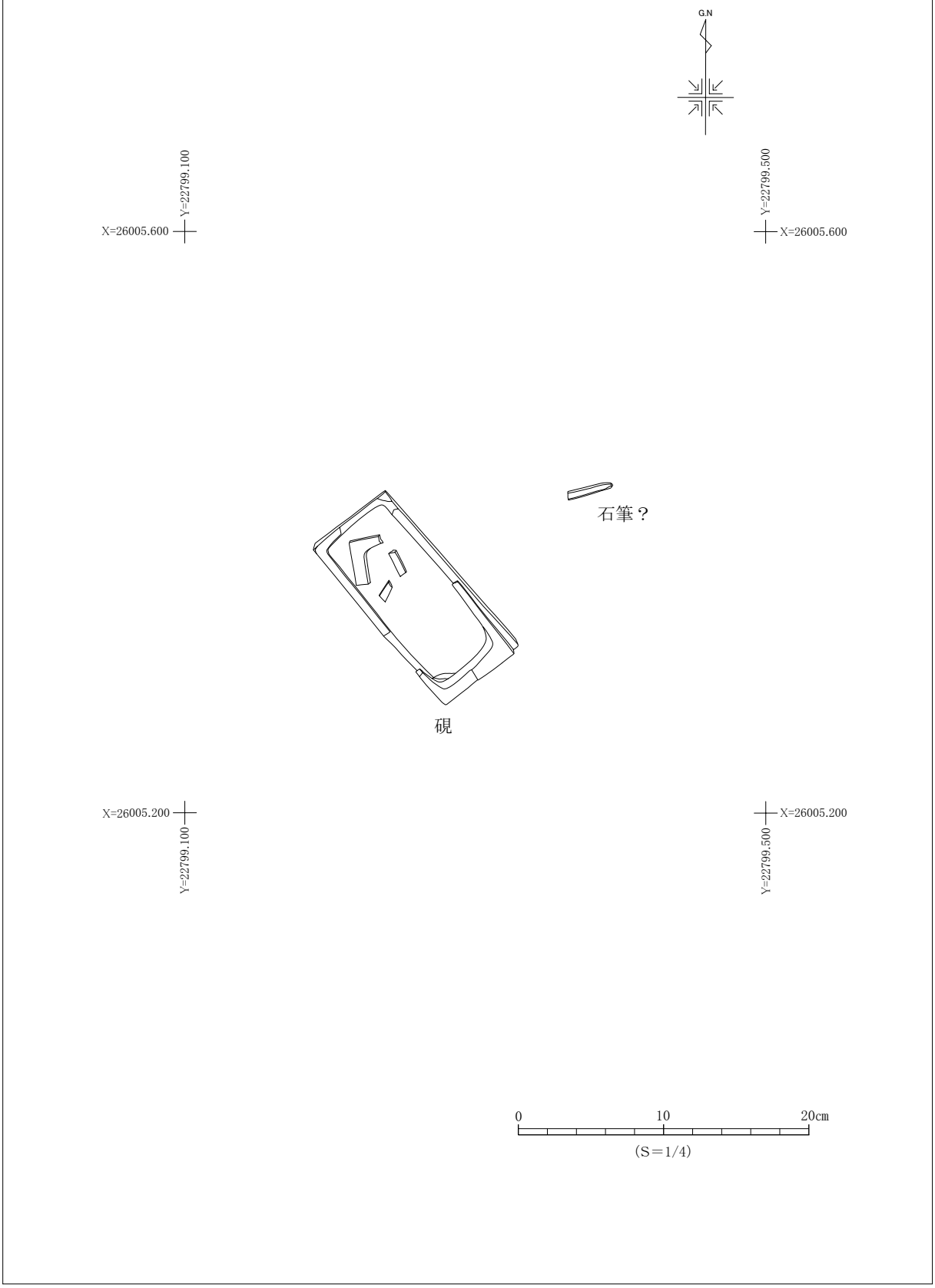
2．平面図



3．見通し断面図
(Bﾗｲﾝ)

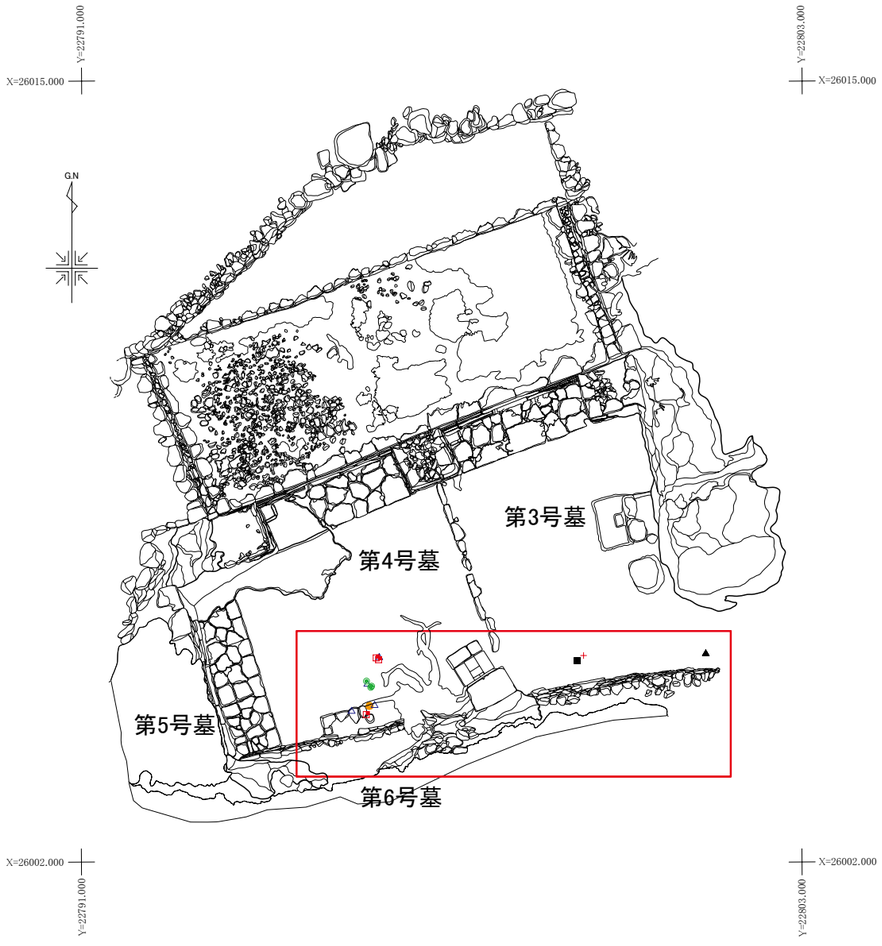
0 2m
(S＝1/50)

第 21 図　第４号墓 墓室

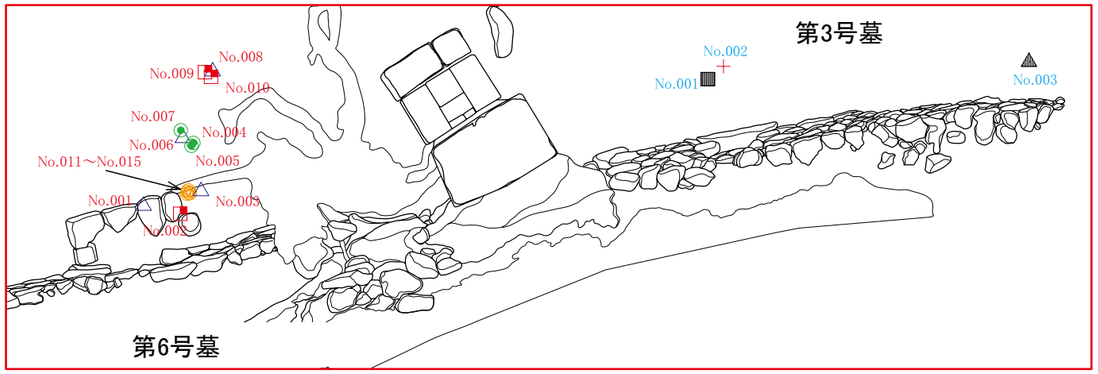


第 22 図　第 3 号墓 墓庭 遺物出土状況
※ 第 23 図の遺物 No.001・002 (青) に対応

平面図　S=1/100



拡大図　S＝1/40



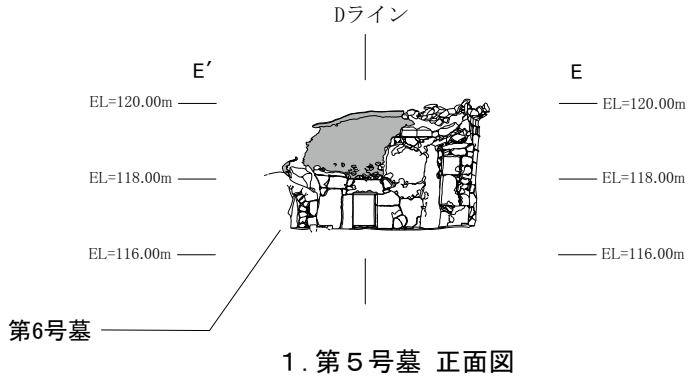
凡　例

記 号	名　称
◎	金属製品
△	陶磁器
■	煙管
◉	指輪
▲	陶器片
▥	硯
＋	石製品

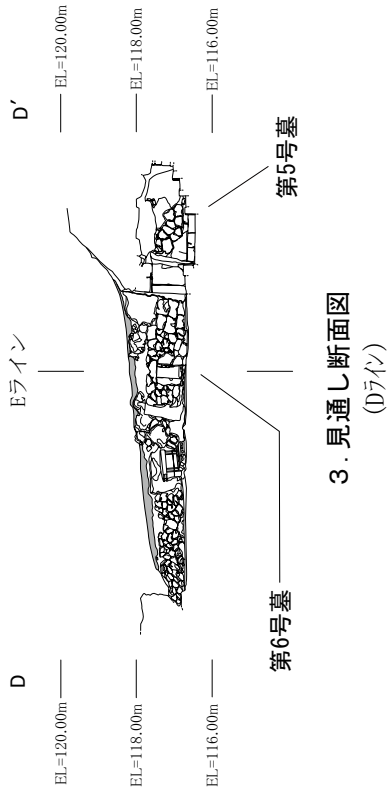
取上座標一覧表

点　名	X座標	Y座標	Z座標	種別	備考
No.001	26005.350	22799.256	116.530	石製品 硯	第3号墓
No.002	26005.435	22799.360	116.514	石製品 石筆?	第3号墓
No.003	26005.464	22801.395	116.681	沖縄産施釉陶器 火取？	第3号墓
No.001	26004.506	22795.497	116.607	本土産磁器 近代 徳利	第4号墓
No.002	26004.453	22795.741	116.566	金属製品 煙管 吸口	第4号墓
No.003	26004.603	22795.880	116.494	本土産磁器 近代 徳利	第4号墓
No.004	26004.925	22795.829	116.414	金属製品 指輪	第4号墓
No.005	26004.906	22795.816	116.408	金属製品 指輪	第4号墓
No.006	26004.957	22795.759	116.441	沖縄産施釉陶器 瓶	第4号墓
No.007	26005.009	22795.745	116.407	金属製品 指輪	第4号墓
No.008	26005.401	22795.957	116.575	沖縄産施釉陶器 瓶	第4号墓
No.009	26005.396	22795.906	116.470	金属製品 煙管 吸口	第4号墓
No.010	26005.365	22795.946	116.475	金属製品 煙管 雁首	第4号墓
No.011	26004.609	22795.795	116.396	金属製品 小鉤	第4号墓
No.012	26004.599	22795.790	116.396	金属製品 小鉤	第4号墓
No.013	26004.587	22795.787	116.401	金属製品 小鉤	第4号墓
No.014	26004.592	22795.805	116.405	金属製品 小鉤	第4号墓
No.015	26004.591	22795.803	116.402	金属製品 小鉤	第4号墓

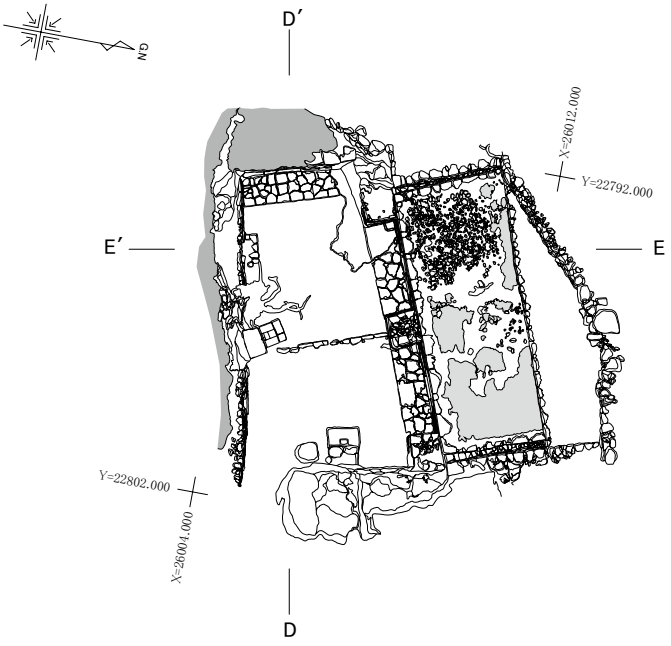
第 23 図　第３・４号墓 墓庭 遺物分布状況



1．第５号墓 正面図



3．見通し断面図
（Dライン）



2．平面図

漆喰・モルタル

モルタル

0　10m

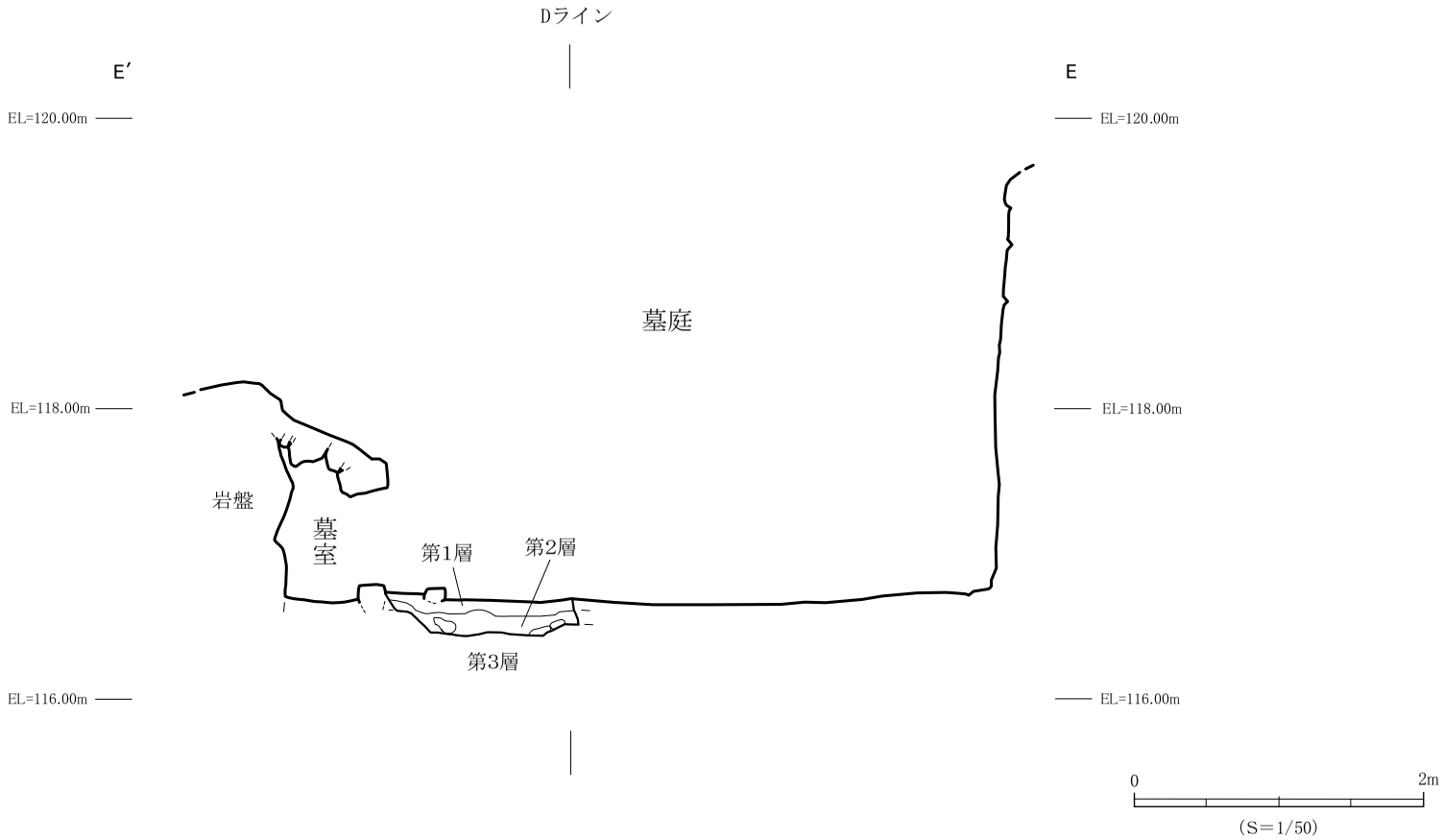
（S＝1/200）

第 24 図　第５・６号墓

第25図　第6号墓　断面図

墓庭

第1層　暗褐（10YR3/3）。表土。大きさ10cm以下の石灰岩小礫を多量に含む。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ10㎝以下の小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。
第3層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩礫層。大きさ10～20cm以上の礫を多量に含む。第1・2層に比べ、大形礫の混入が顕著となる。



墓庭

第1層　暗褐（10YR3/3）。表土。大きさ10cm以下の石灰岩小礫を多量に含む。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ10㎝以下の小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。
第3層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩礫層。大きさ10～20cm以上の礫を多量に含む。第1・2層に比べ、大形礫の混入が顕著となる。

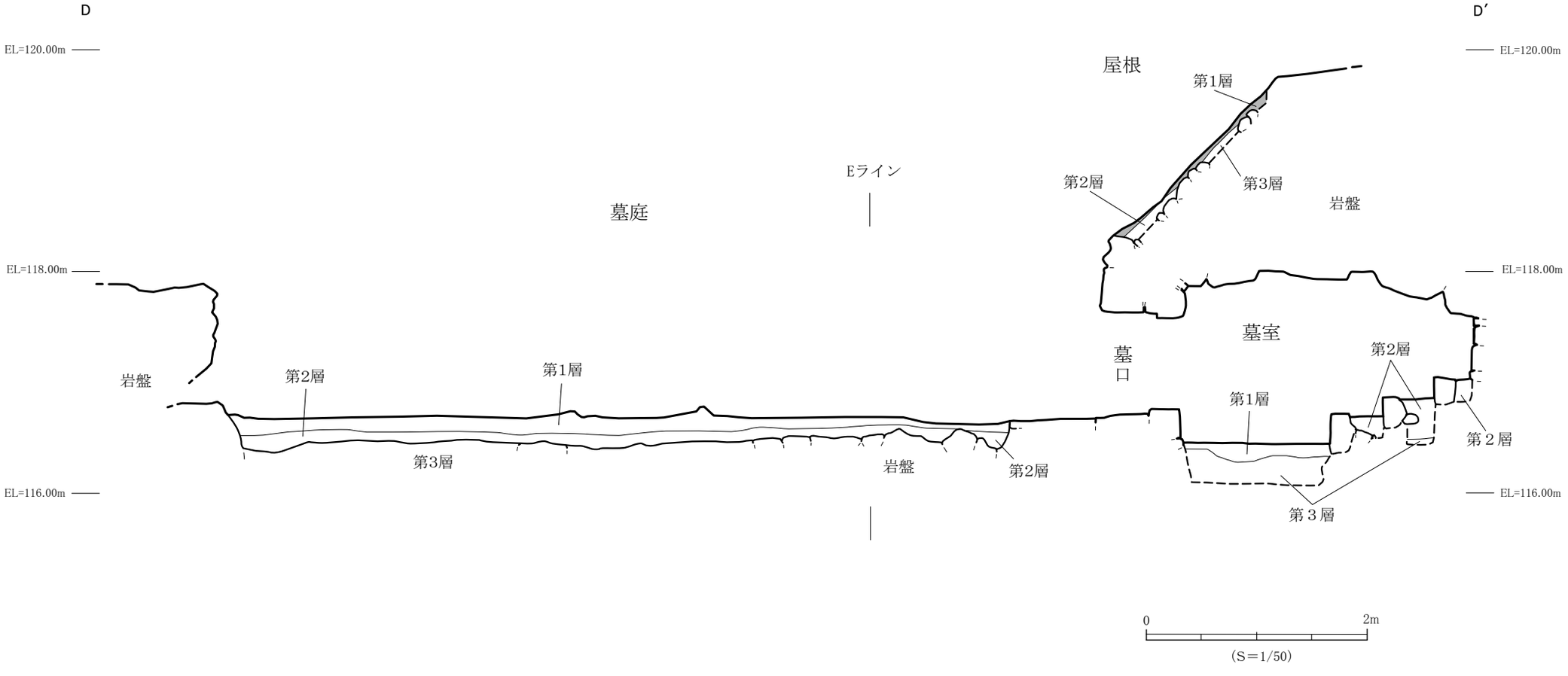
屋根

第1層　コンクリート。
第2層　黄橙（10YR8/6）。石灰岩礫層。
第3層　褐（10YR4/4）。石灰岩の砂礫を多く含む土層。

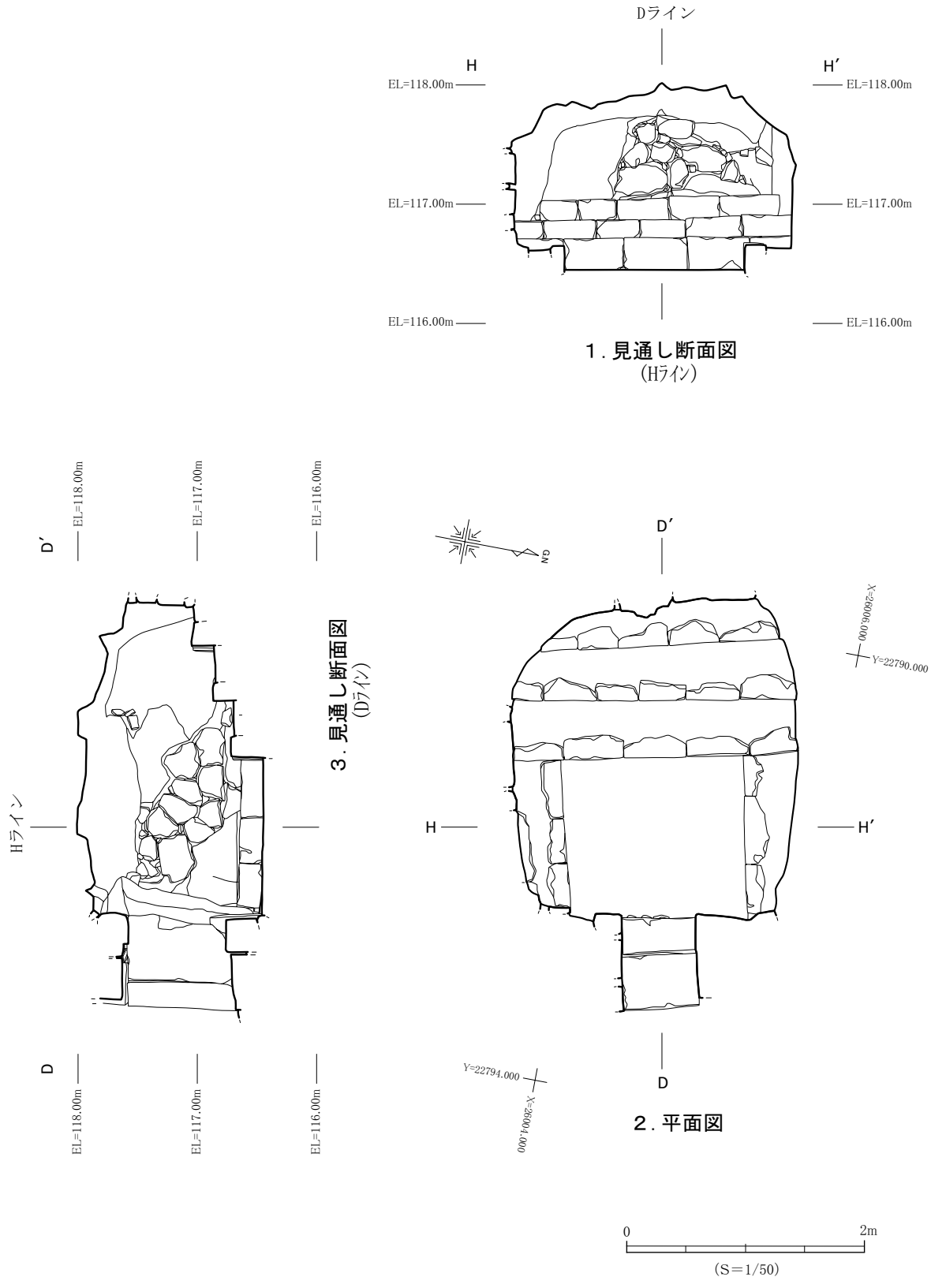
墓室

第1層　明黄褐（10YR6/8）。石灰岩砂礫層。細かい砂礫を主体とする。イシグー（石粉）。
第2層　黄橙（10YR5/6）。石灰岩砂礫層。大きさ10～20cm以上の礫を多く含む。イシグー（石粉）。
第3層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ10～20cm以上の礫を多く含む。イシグー（石粉）。

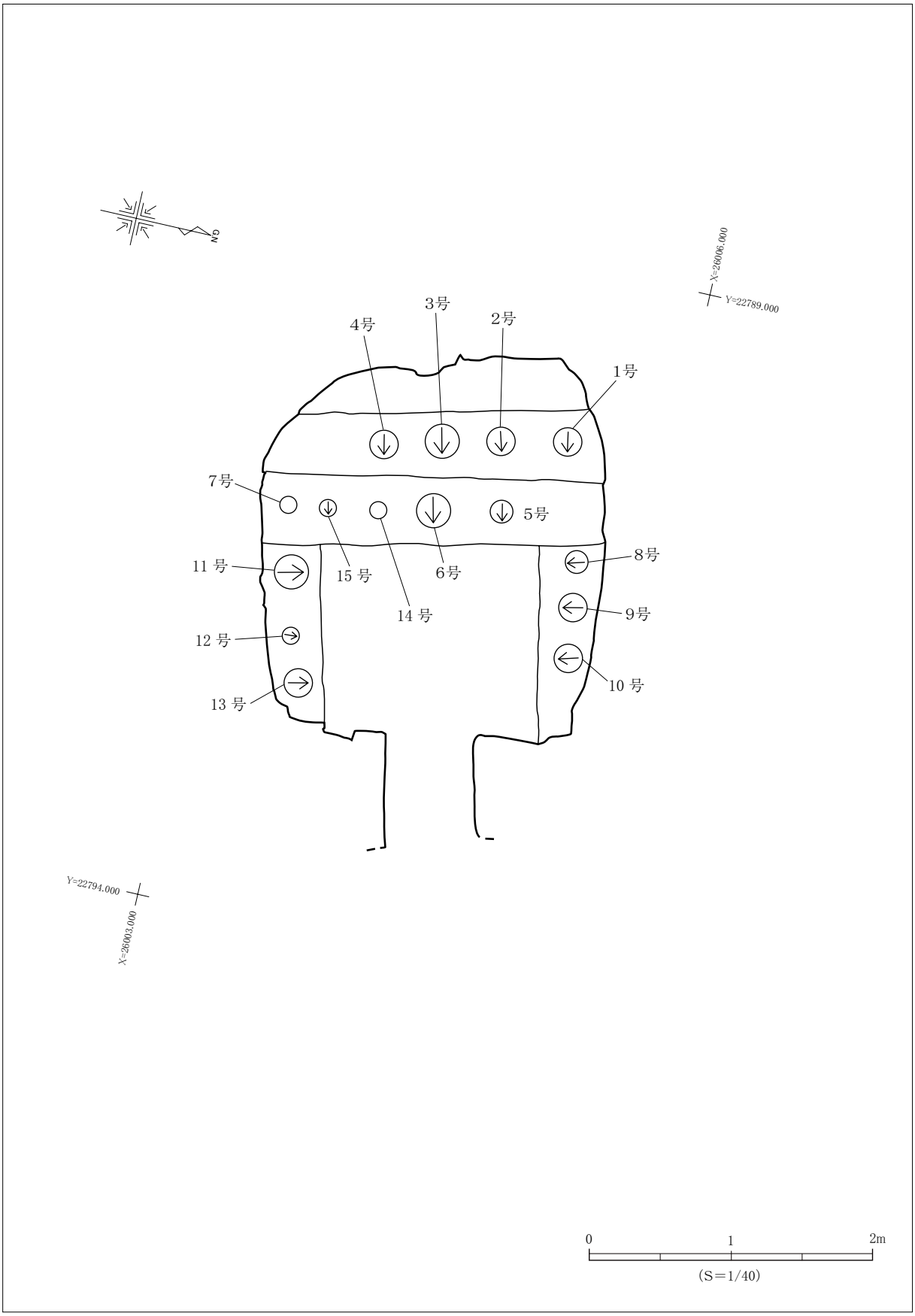
コンクリート



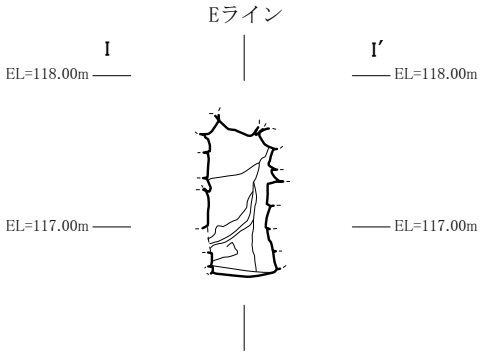
第26図　第５号墓 断面図


Dライン
H
H′
EL=118.00m
EL=117.00m
EL=116.00m
1．見通し断面図
(Hﾗｲﾝ)
D′
D
Hライン
3．見通し断面図
(Dﾗｲﾝ)
GN
X=26006.000
Y=22790.000
Y=22794.000
X=26001.000
2．平面図
0
2m
(S＝1/50)

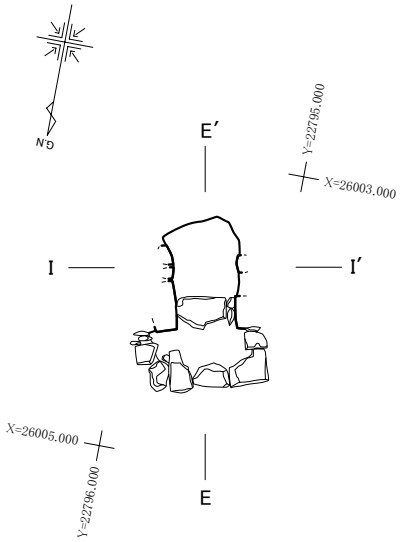
第 27 図　第 5 号墓 墓室



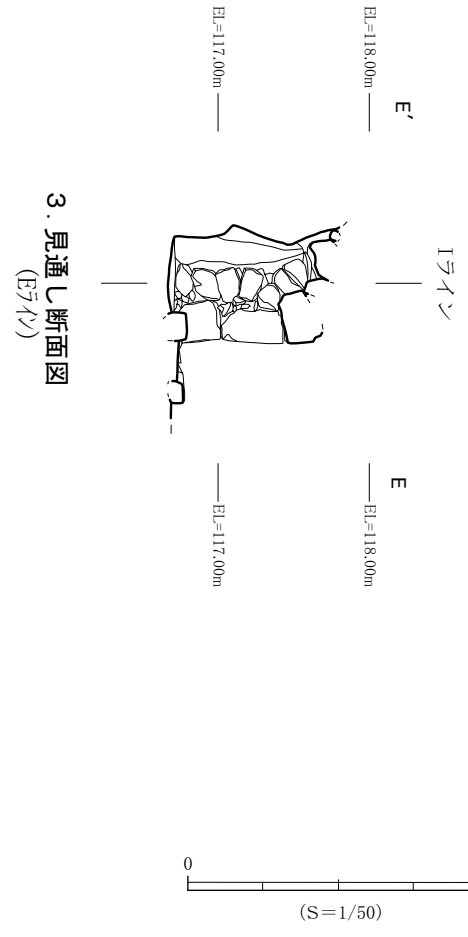
第 28 図　第 5 号墓 墓室 蔵骨器配置状況概略図



1．見通し断面図
（Iﾗｲﾝ）

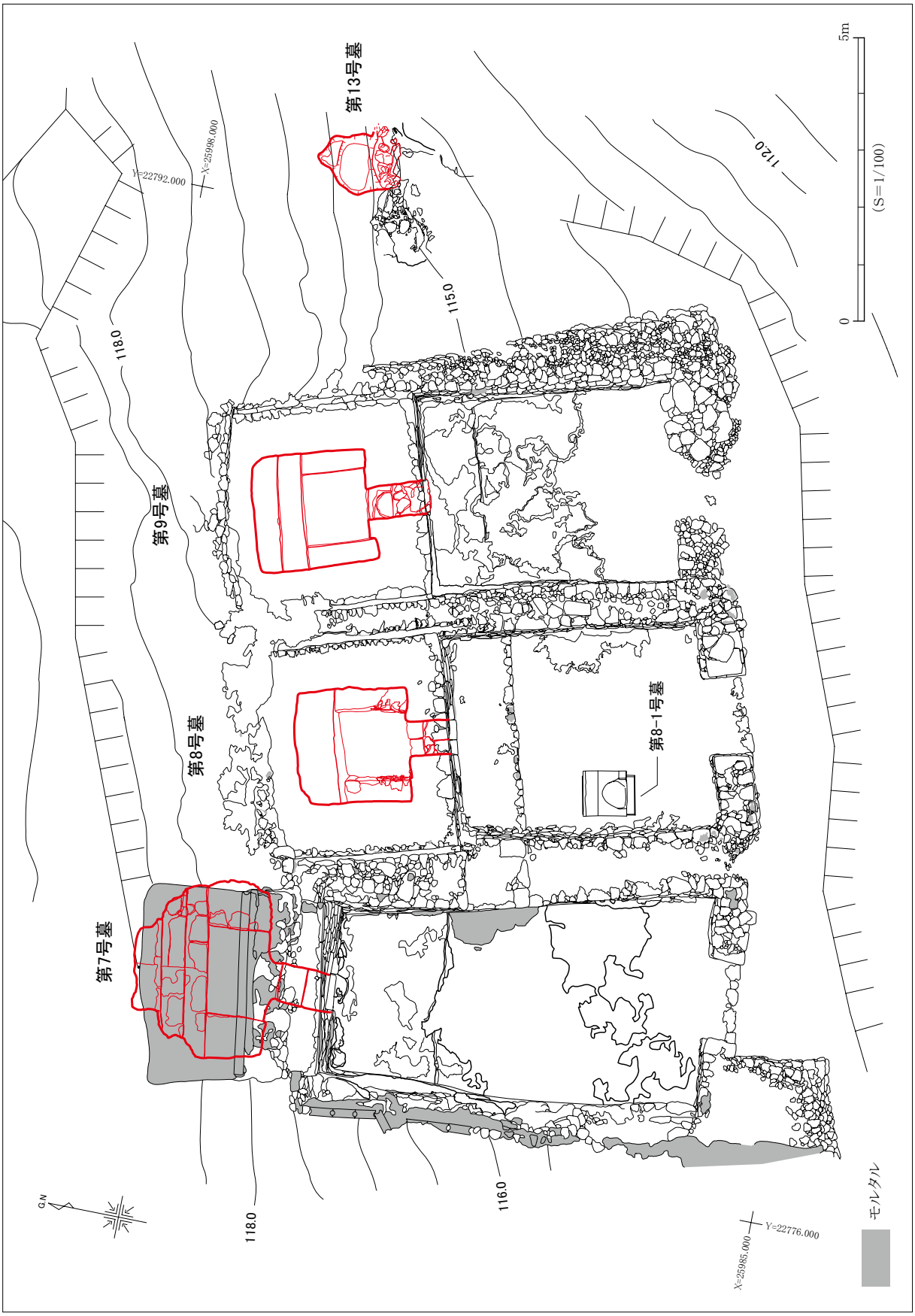


2．平面図

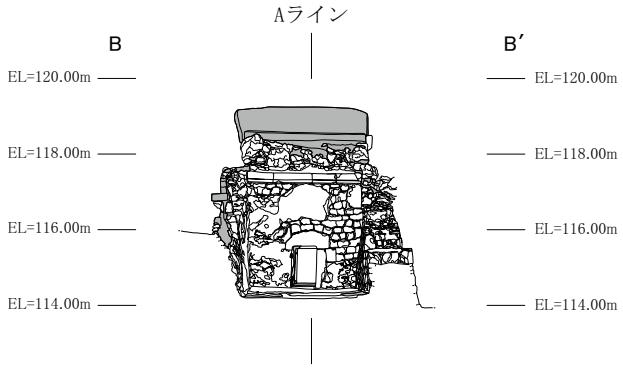


3．見通し断面図
（Eﾗｲﾝ）

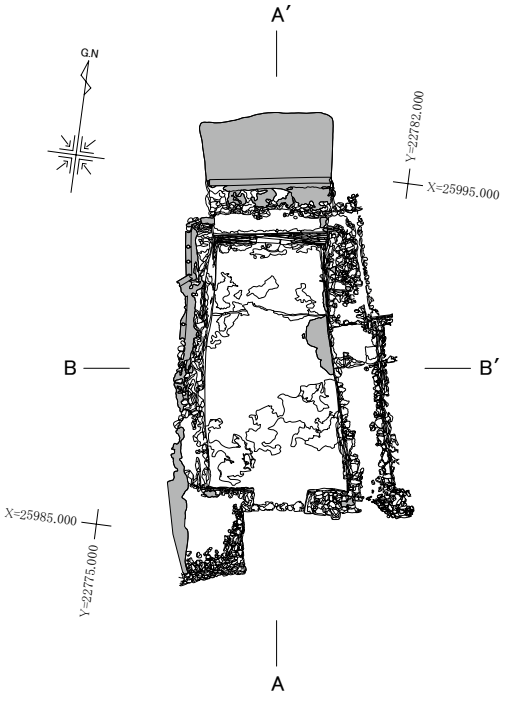
第 29 図　第６号墓 墓室



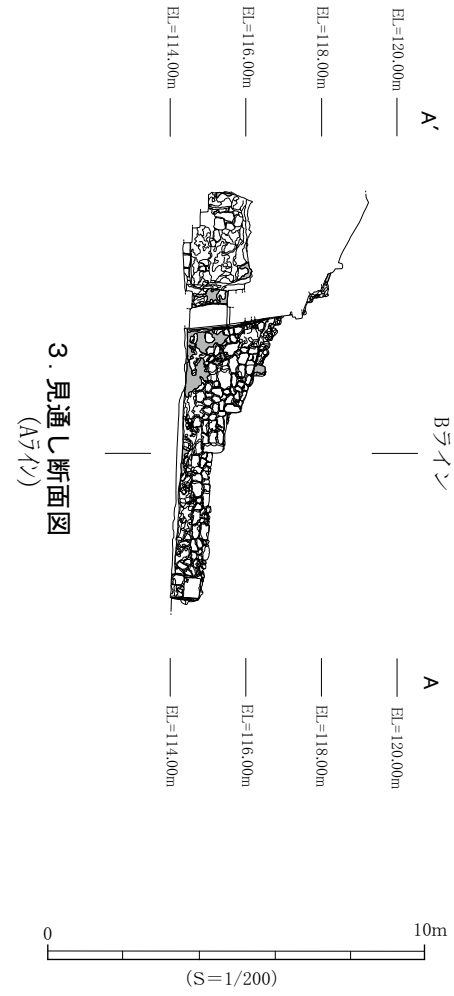
第 30 図　第 7 ～ 9 ・13 号墓 平面図（赤は、各墓の墓室平面図）



1．正面図

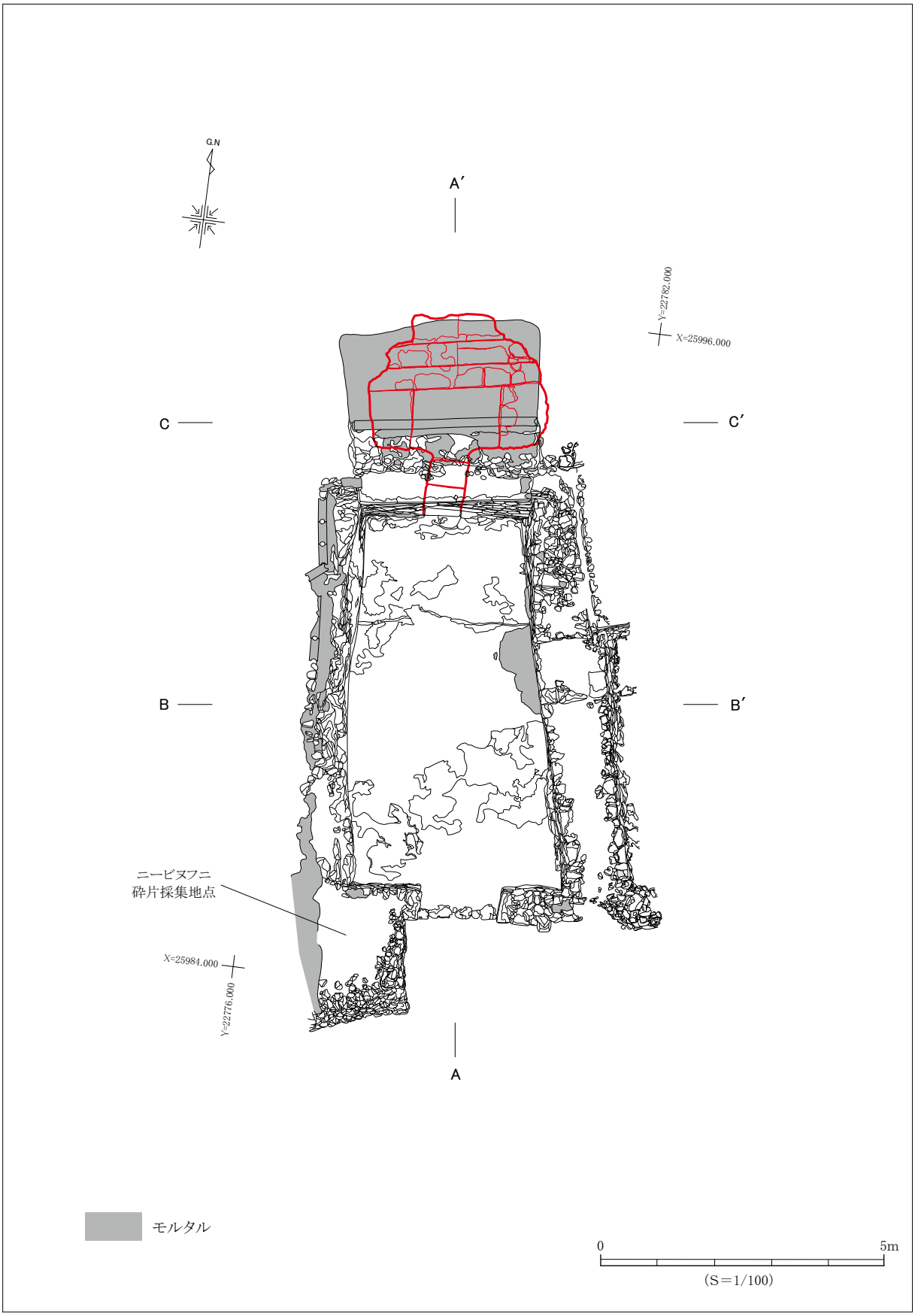


2．平面図



3．見通し断面図
(Aライン)

第 31 図　第 7 号墓



第 32 図　第 7 号墓 平面図（赤は、墓室平面図）

屋根

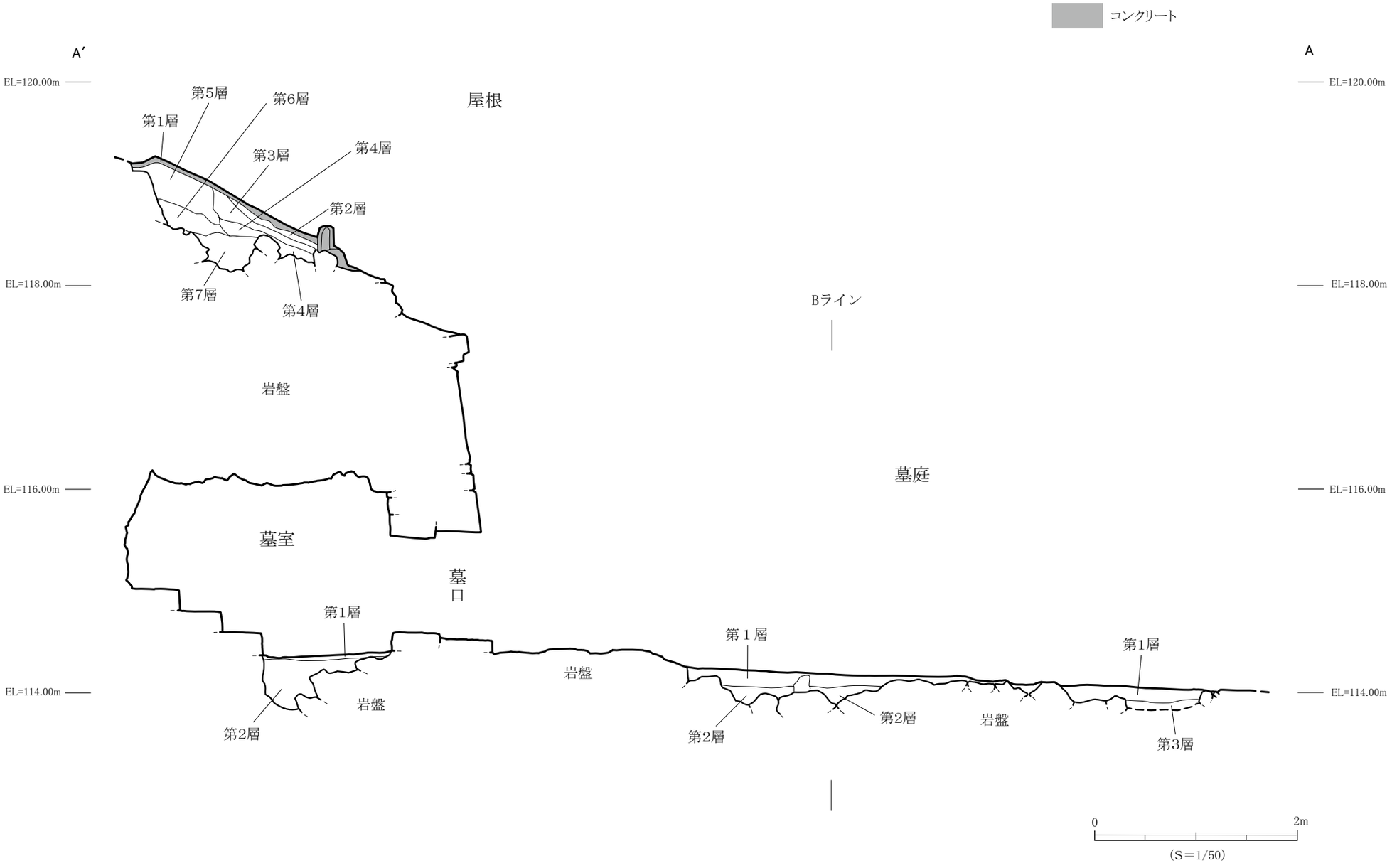
第1層　コンクリート。
第2層　黄橙（10YR8/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第3層　褐（10YR4/4）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第4層　暗褐（10YR3/4）。石灰岩の砂礫を多く含む土層。
第5層　明黄褐（10YR6/8）。石灰岩礫層。大きさ10～20cm程の礫が主体。
第6層　明黄褐（10YR6/8）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第7層　暗褐（10YR3/3）。石灰岩の砂礫を多く含む土層。

墓室

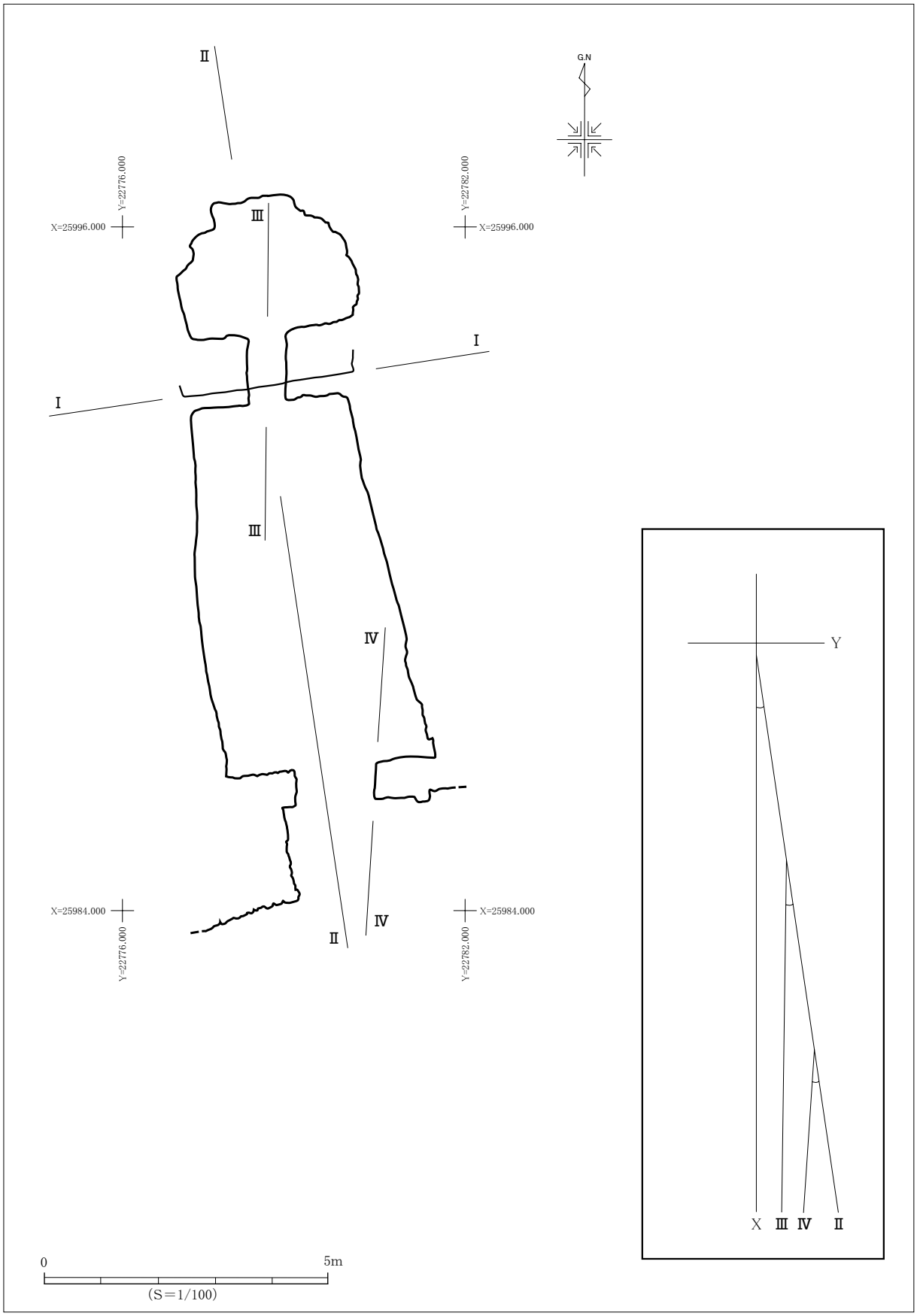
第1層　褐（10YR4/6）。石灰岩砂礫層。細かい砂礫を主体とする。イシグー（石粉）。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ5～10㎝程の礫を多く含む。イシグー（石粉）。

墓庭

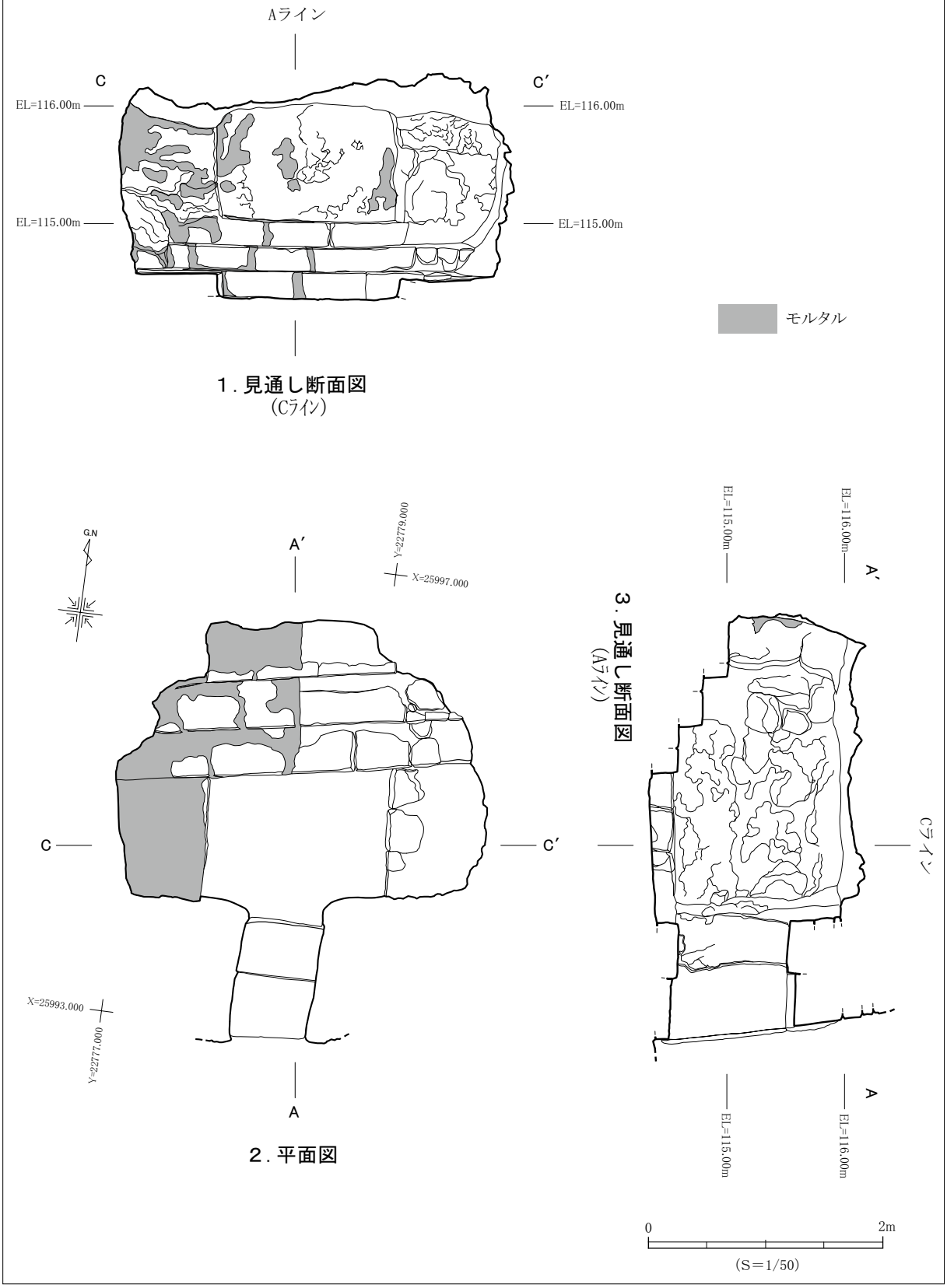
第1層　褐（10YR4/4）。石灰岩の細かい砂礫を多量に含む土層。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。大きさ10㎝以下の小礫を多量に含む。イシグー（石粉）。
第3層　褐（7.5YR4/6）。石灰岩の砂礫を含む粘質土層。島尻マージに由来する自然堆積層と推測される。



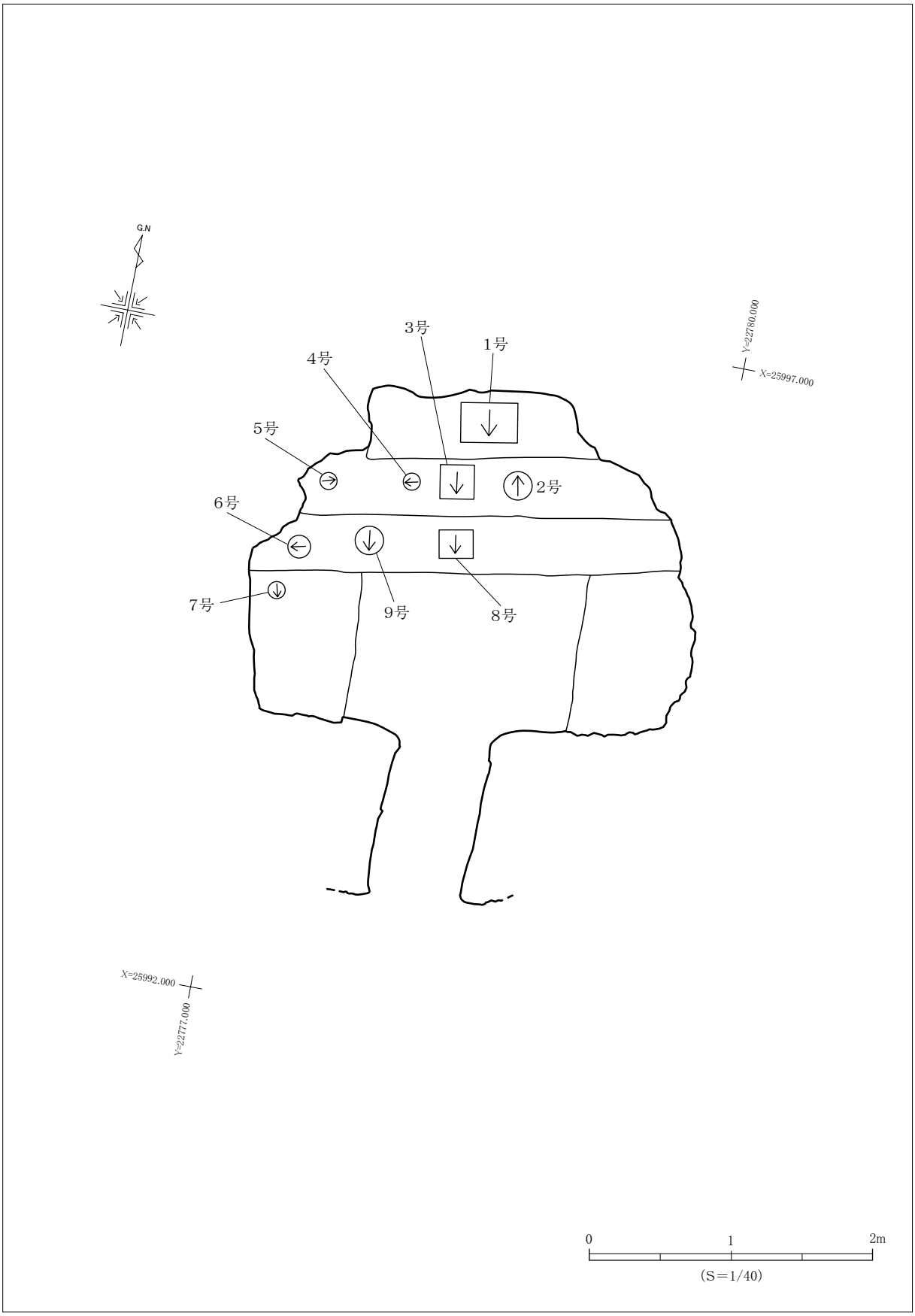
第 33 図　第 7 号墓 断面図



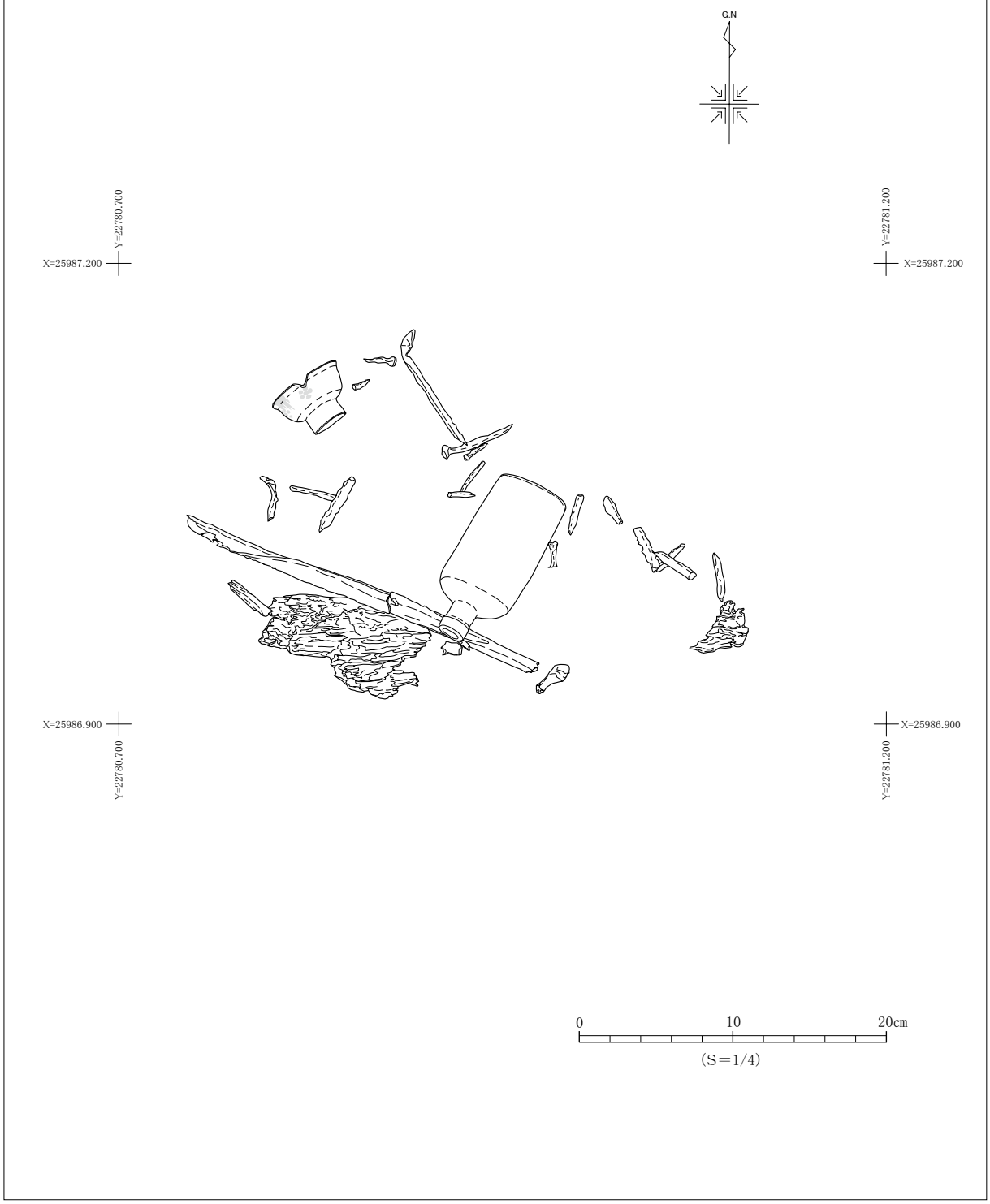
第 34 図　第 7 号墓 羨道方位


Aライン
C
C′
EL=116.00m
EL=115.00m
モルタル
1．見通し断面図
(Cライン)
G.N
A′
Y=22779.000
X=25997.000
C
C′
X=25993.000
Y=22777.000
A
2．平面図
3．見通し断面図
(Aライン)
EL=115.00m
EL=116.00m
A′
Cライン
A
0
2m
(S＝1/50)

第 35 図　第 7 号墓 墓室

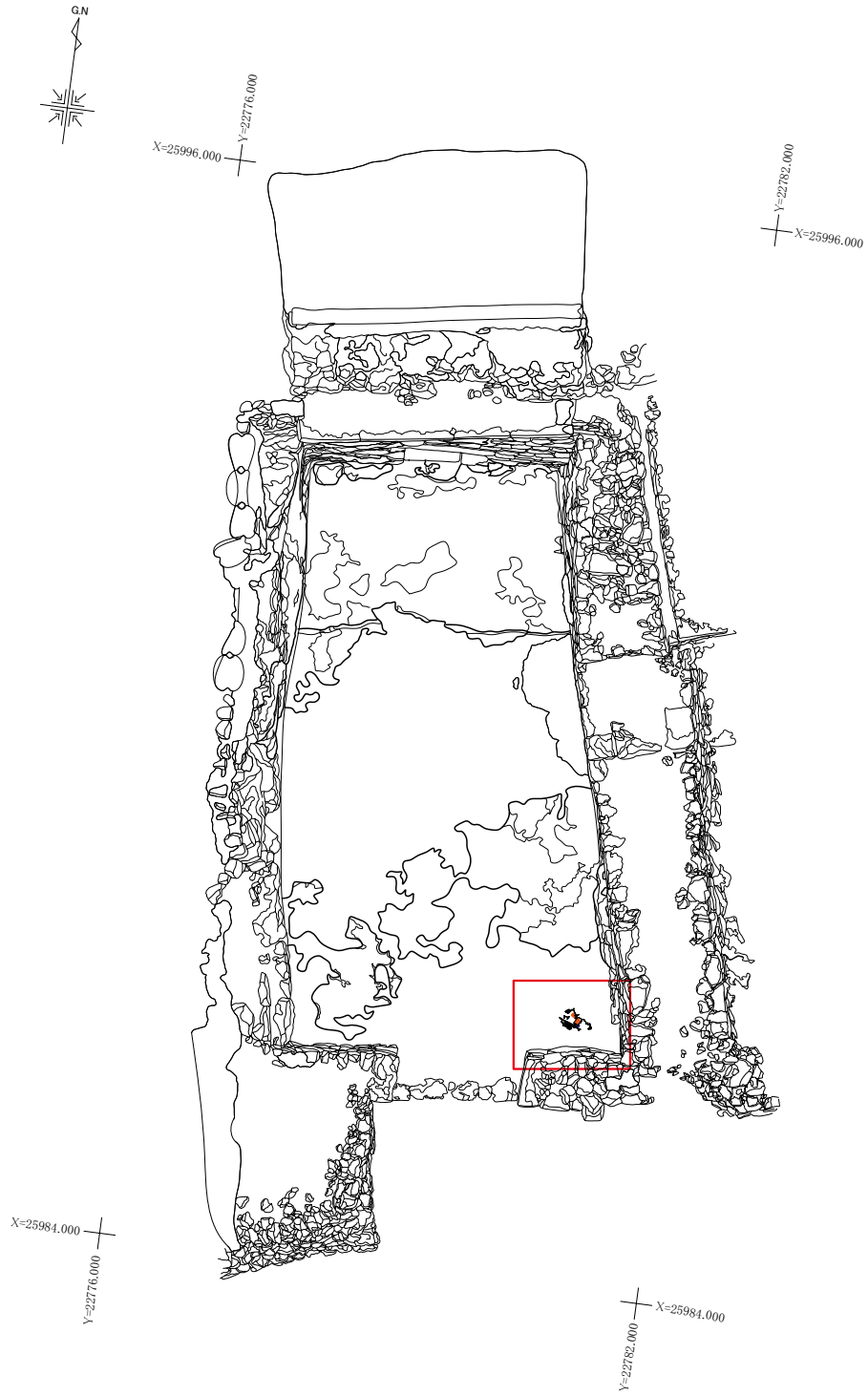


第 36 図　第 7 号墓 墓室 蔵骨器配置状況概略図

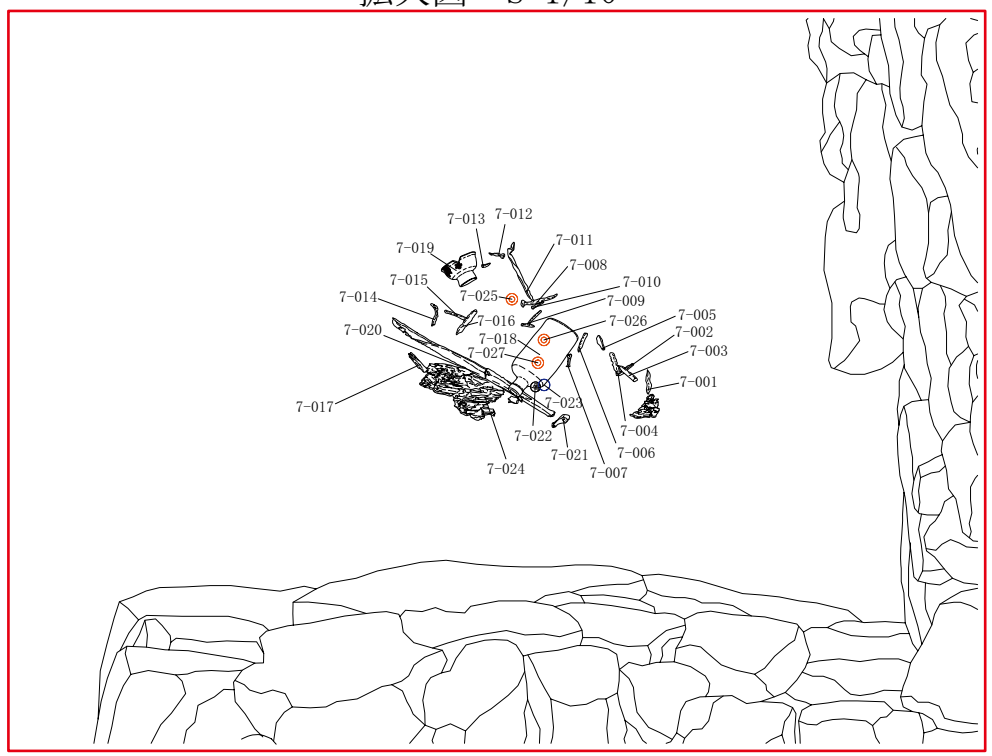


第 37 図　第 7 号墓 墓庭 遺物出土状況

平面図　S=1/80



拡大図　S=1/10

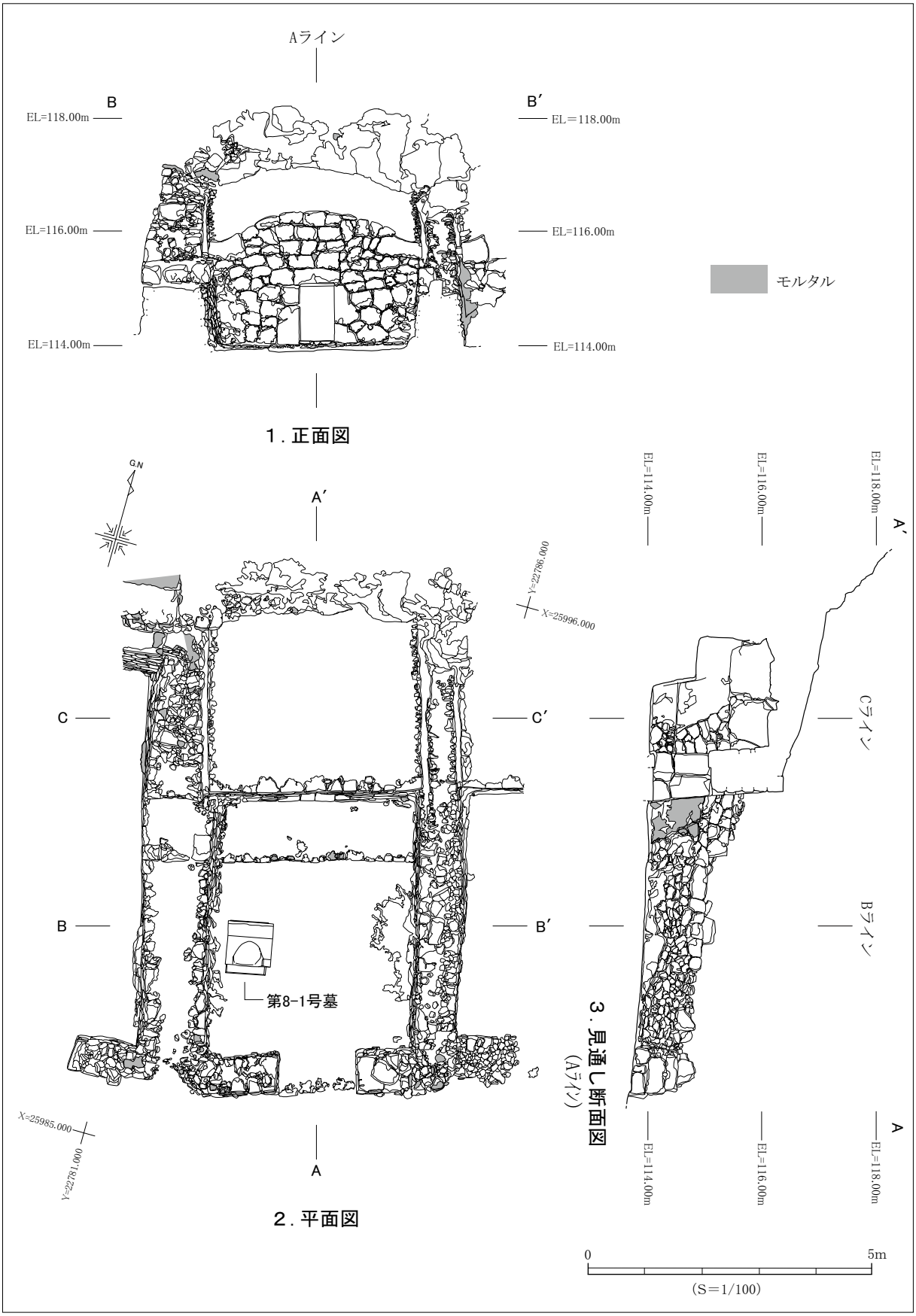


取上座標一覧表

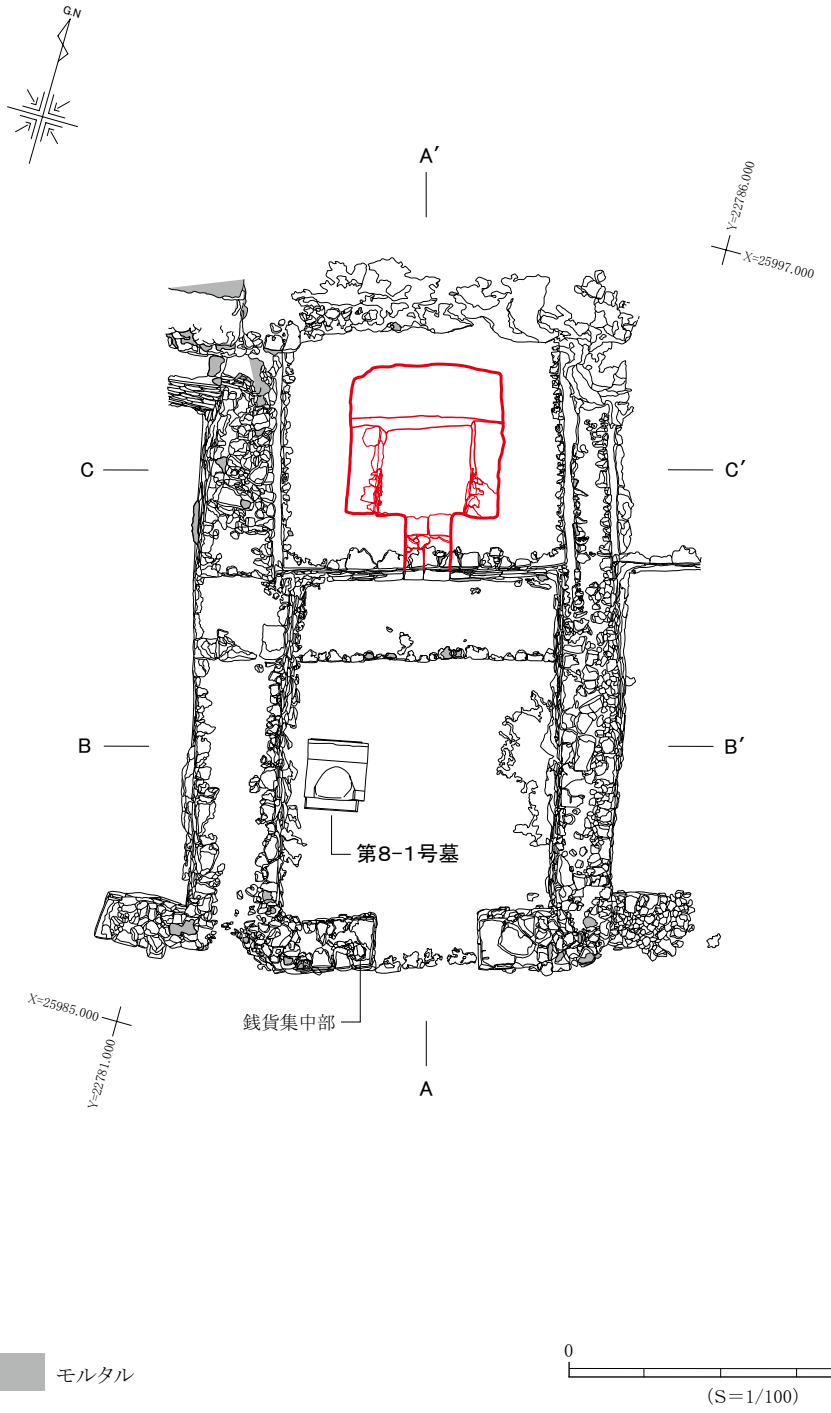
点 名	取上座標			種 別
	X座標	Y座標	Z座標	
7-001	25986.986	22781.092	113.877	鉄釘
7-002	25987.010	22781.061	113.884	鉄釘
7-003	25987.001	22781.065	113.879	鉄釘
7-004	25987.005	22781.049	113.879	鉄釘
7-005	25987.032	22781.025	113.861	鉄釘
7-006	25987.028	22780.995	113.853	鉄釘
7-007	25987.003	22780.983	113.858	鉄釘
7-008	25987.082	22780.932	113.843	鉄釘
7-009	25987.053	22780.925	113.838	鉄釘
7-010	25987.075	22780.930	113.843	鉄釘
7-011	25987.093	22780.916	113.847	金属製品 簪
7-012	25987.136	22780.873	113.866	鉄釘
7-013	25987.118	22780.855	113.880	鉄釘
7-014	25987.041	22780.800	113.871	鉄釘
7-015	25987.051	22780.828	113.856	鉄釘
7-016	25987.037	22780.838	113.856	鉄釘
7-017	25986.979	22780.788	113.863	鉄釘
7-018	25987.013	22780.944	113.870	ガラス製品 薬瓶
7-019	25987.109	22780.820	113.912	本土産磁器 近代 小杯
7-020	25986.977	22780.868	113.861	人骨片
7-021	25986.932	22780.986	113.861	人骨片
7-022	25986.970	22780.944	113.842	人骨片
7-023	25986.974	22780.955	113.846	サンゴ片
7-024	25986.947	22780.880	113.852	木製品？
7-025	25987.081	22780.898	113.842	鉄釘
7-026	25987.033	22780.947	113.822	鉄釘
7-027	25987.002	22780.943	113.811	鉄釘

※7-018の下より7-022、7-023出土。
※下位より7-025、7-026、7-027出土。

第 38 図　第 7 号墓 墓庭 遺物分布状況


Aライン
B
EL=118.00m
B′
EL＝118.00m
EL=116.00m
EL=116.00m
EL=114.00m
EL=114.00m
モルタル
1．正面図
N
A′
C
C′
B
B′
第8-1号墓
A
X=25985.000
Y=22781.000
Y=22786.000
X=25996.000
2．平面図
EL=114.00m
EL=116.00m
EL=118.00m
A′
Cライン
Bライン
A
EL=114.00m
EL=116.00m
EL=118.00m
3．見通し断面図
（Aライン）
0
5m
（S＝1/100）

第 39 図　第 8 号墓



第 40 図　第 8 号墓 平面図（赤は、墓室平面図）

屋根

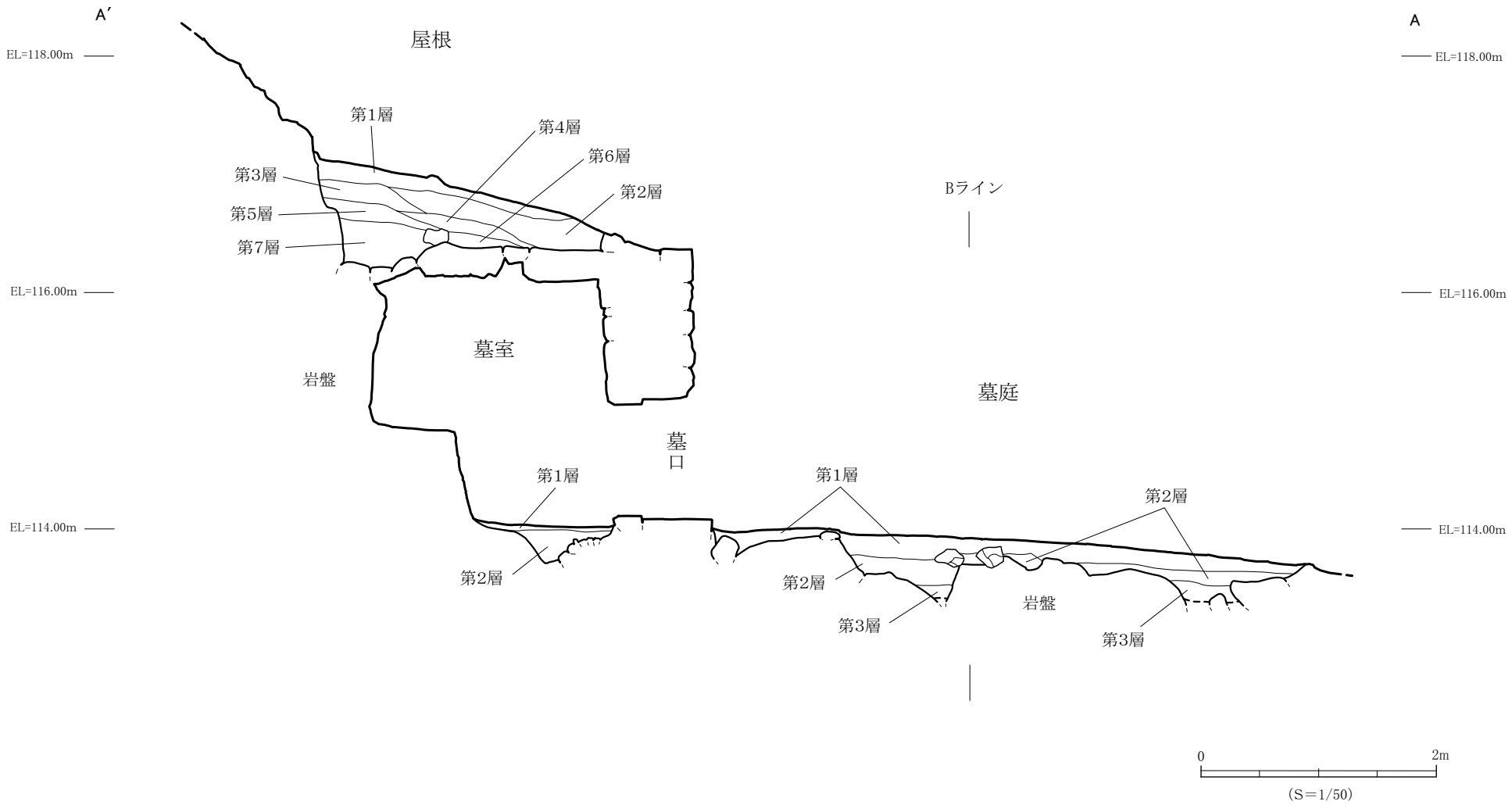
第1層　暗褐（10YR3/4）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。植物の根が多く見られる。
第2層　黄褐（2.5Y5/6）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。植物の根が多く見られる。
第3層　黄（2.5Y7/8）。石灰岩礫層。大きさ 10cm 以上の礫を主体とする。
第4層　明黄褐（10YR6/8）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第5層　褐（10YR4/6）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。
第6層　褐（10YR4/6）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。
第7層　黄（2.5Y7/8）。石灰岩礫層。大きさ 10cm 以上の礫を主体とする。

墓室

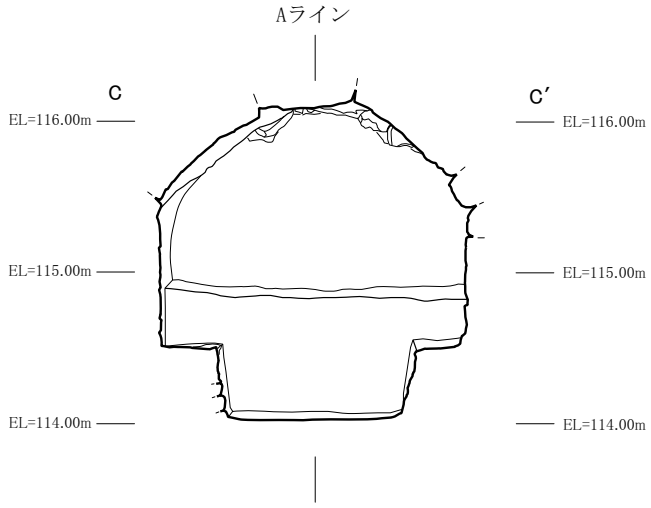
第1層　褐（10YR4/6）。石灰岩の細かい砂礫を多く含む土層。
第2層　明黄褐（10YR7/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。大きさ 20 ～ 30cm 程の礫も見られる。

墓庭

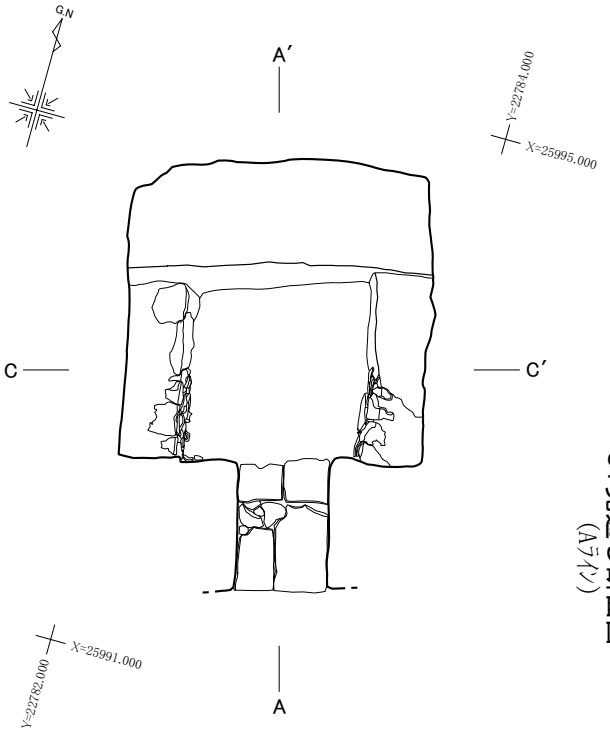
第1層　黒褐（10YR3/2）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。
第2層　褐（10YR4/4）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。
第3層　褐（10YR4/6）。粘質土層。島尻マージに由来する自然堆積層と推測される。



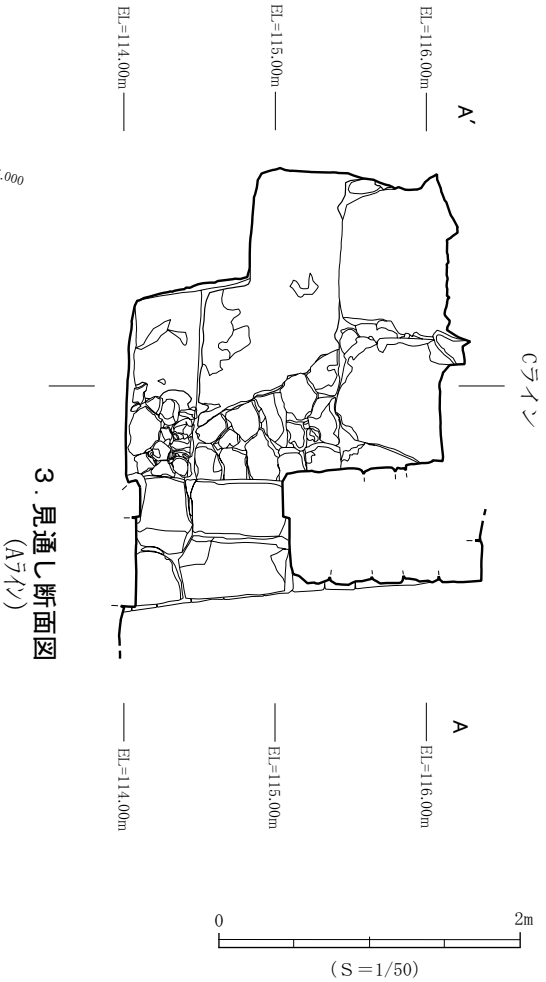
第 41 図　第８号墓 断面図



1．見通し断面図
（Cﾗｲﾝ）



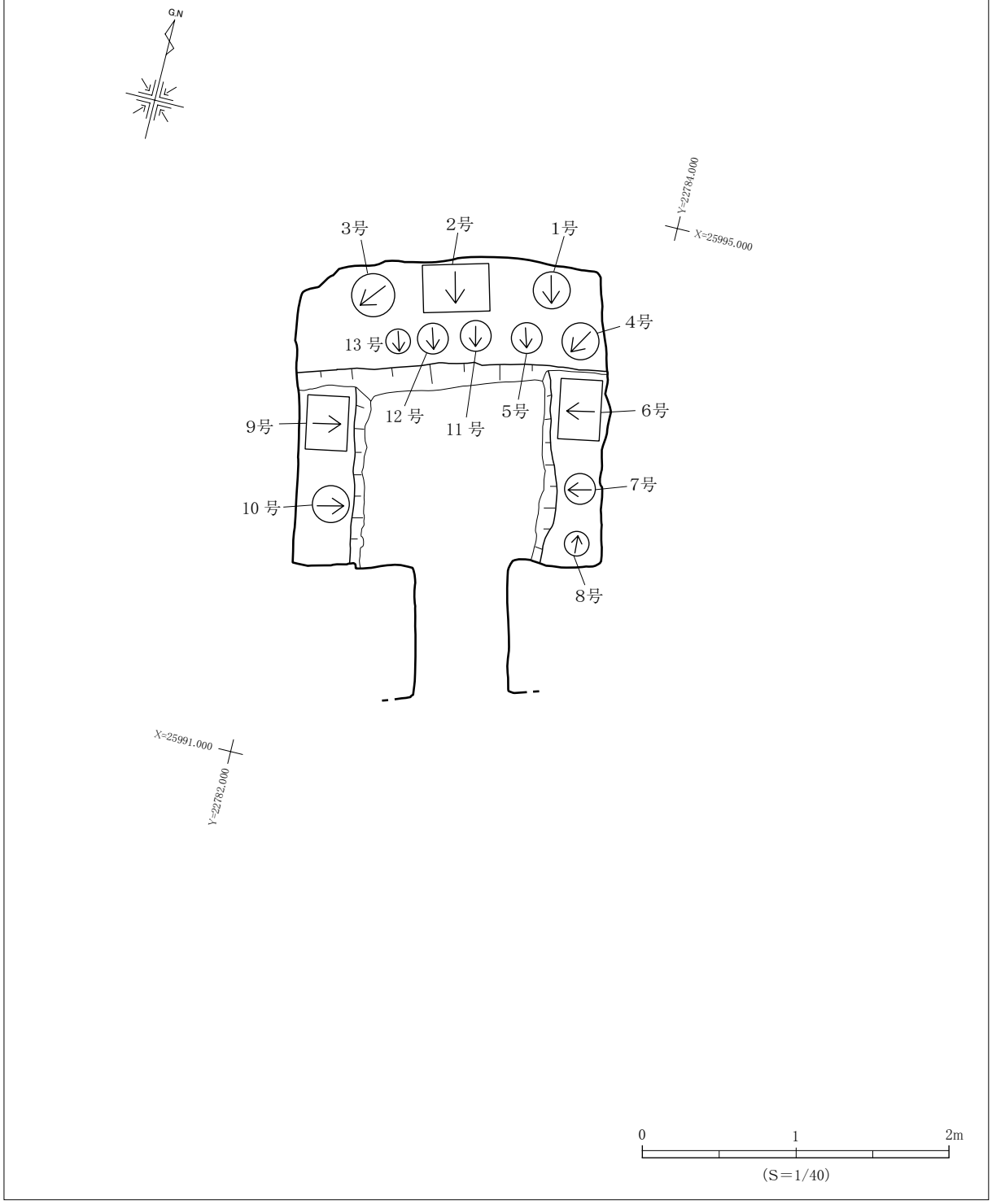
2．平面図



3．見通し断面図
（Aﾗｲﾝ）

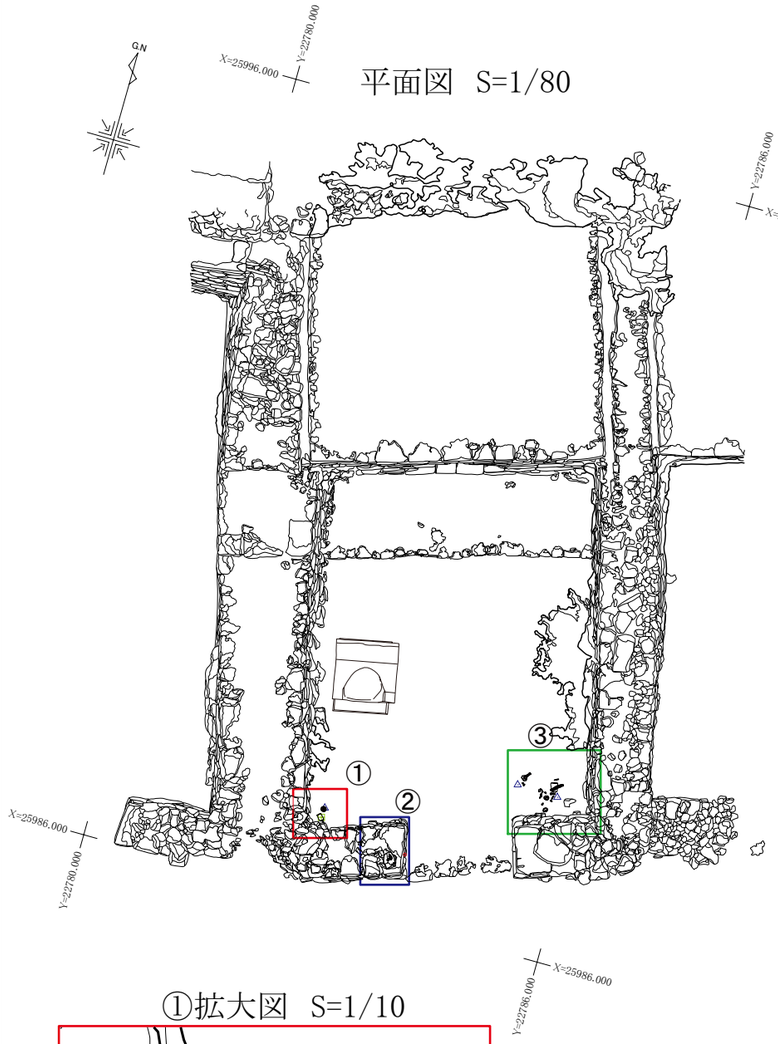
0　2m
（S＝1/50）

第 42 図　第８号墓 墓室

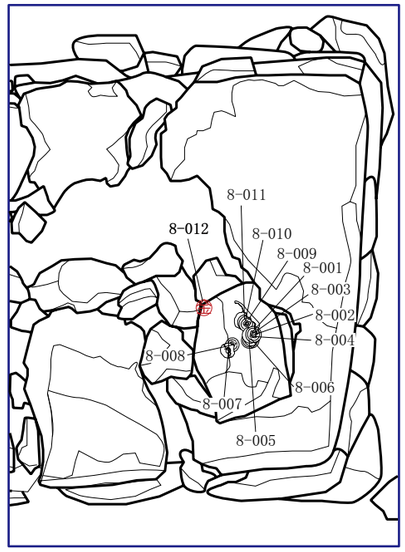


第 43 図　第８号墓 墓室 蔵骨器配置状況概略図

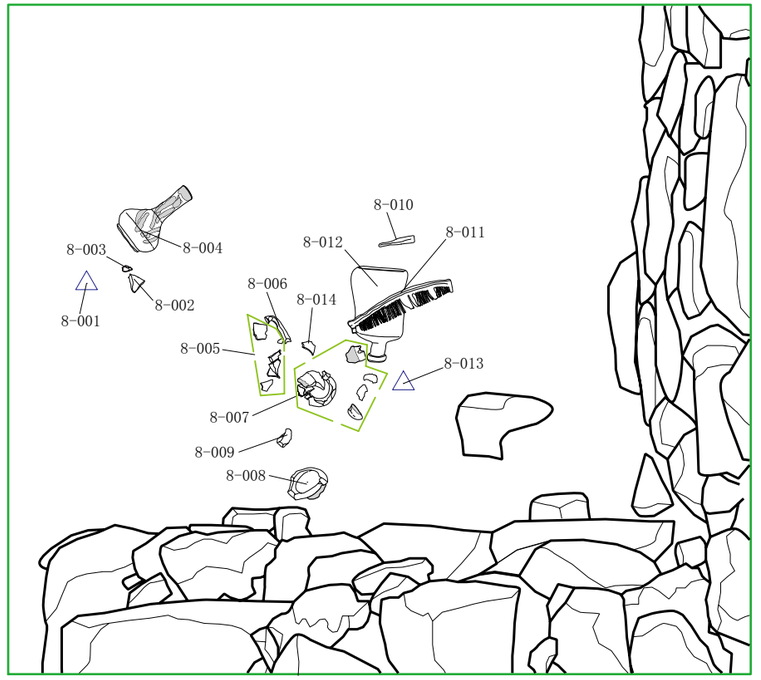
平面図　S=1/80



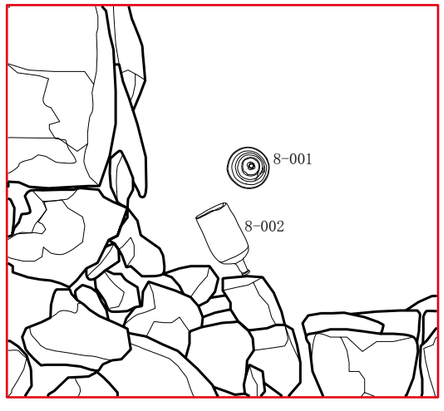
②拡大図　S=1/10



③拡大図　S=1/10



①拡大図　S=1/10



②拡大図 取上座標一覧表

点名	取上座標			種別
	X座標	Y座標	Z座標	
8-001	25986.778	22783.847	114.426	銭貨 寛永通寶(新)
8-002	25986.772	22783.847	114.425	銭貨 寛永通寶(古)
8-003	25986.774	22783.847	114.423	銭貨 銭文不明
8-004	25986.772	22783.850	114.421	銭貨 寛永通寶(新)
8-005	25986.765	22783.846	114.419	銭貨 寛永通寶(新)
8-006	25986.768	22783.848	114.418	銭貨 寛永通寶(新)
8-007	25986.740	22783.819	114.420	銭貨 銭文不明
8-008	25986.751	22783.824	114.417	銭貨 銭文不明
8-009	25986.796	22783.836	114.402	銭貨 寛永通寶(古)
8-010	25986.793	22783.832	114.401	銭貨 寛永通寶(新)
8-011	25986.795	22783.830	114.399	銭貨 銭文不明
8-012	25986.795	22783.763	114.196	銭貨 寛永通寶

※下位より8-009、8-010、8-011、8-012出土。

③拡大図 取上座標一覧表

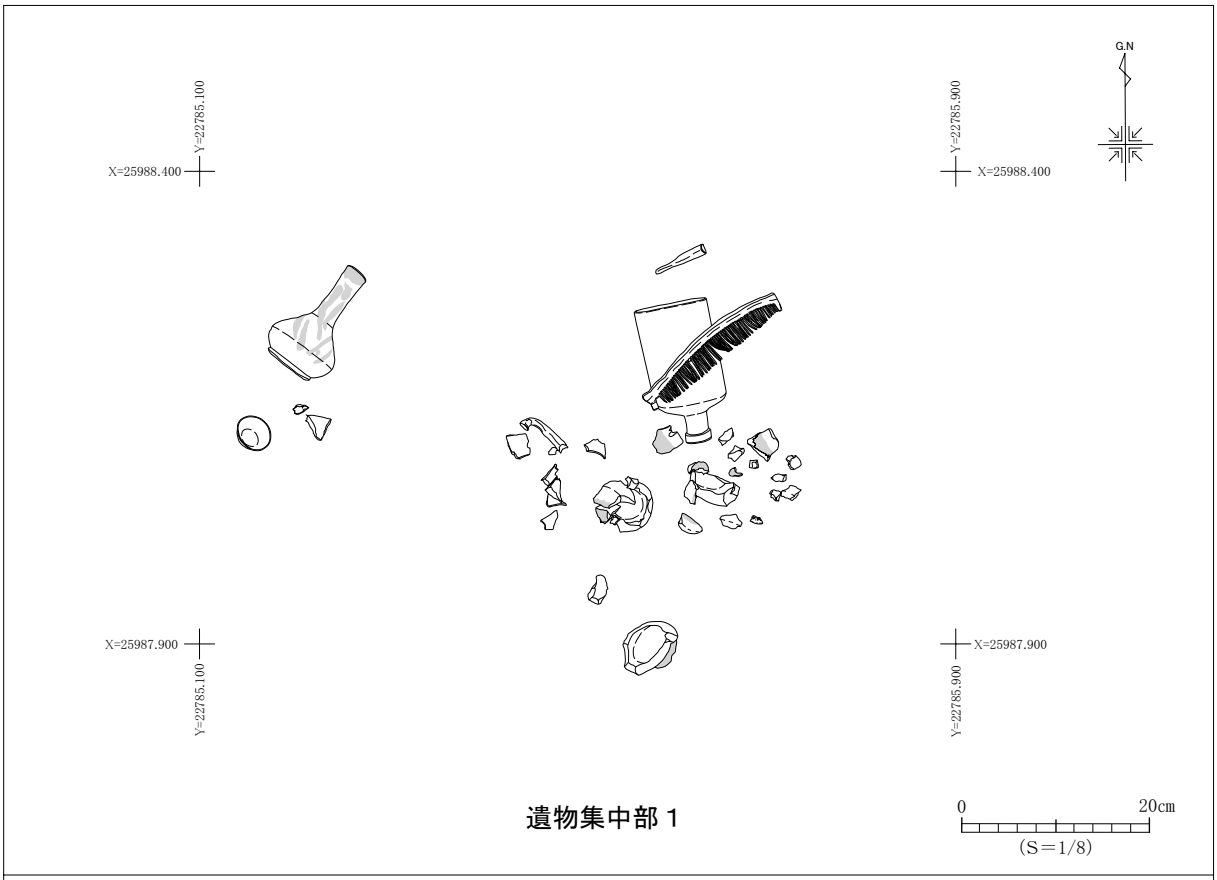
点名	取上座標			種別
	X座標	Y座標	Z座標	
8-001	25988.109	22785.151	113.635	沖縄産施釉陶器 小杯
8-002	25988.136	22785.222	113.589	沖縄産無釉陶器 瓶
8-003	25988.150	22785.207	113.589	銭貨 銭文不明
8-004	25988.214	22785.210	113.640	沖縄産施釉陶器 瓶
8-005	25988.076	22785.468	113.574	本土産磁器 クロム青磁？ 小杯
8-006	25988.128	22785.464	113.582	金属製品 煙管 雁首
8-007	25988.061	22785.563	113.616	沖縄産施釉陶器 瓶
8-008	25987.896	22785.575	113.659	沖縄産施釉陶器 瓶
8-009	25987.963	22785.524	113.583	青花 小杯
8-010	25988.310	22785.607	113.679	金属製品 煙管 吸口
8-011	25988.230	22785.637	113.736	プラスチック製品 櫛
8-012	25988.230	22785.598	113.737	ガラス製品 薬瓶
8-013	25988.092	22785.680	113.580	沖縄産施釉陶器 瓶
8-014	25988.113	22785.517	113.598	蔵骨器片？

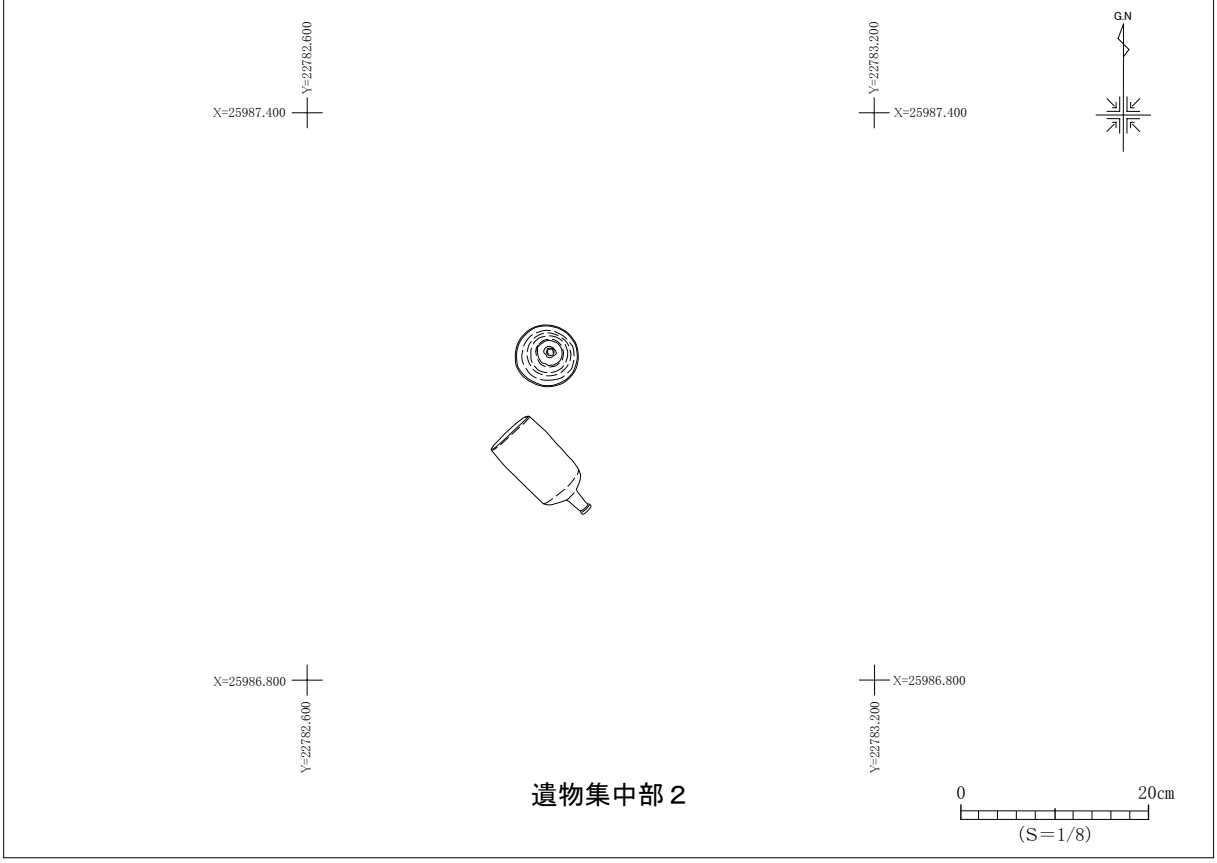
①拡大図 取上座標一覧表

点名	取上座標			種別
	X座標	Y座標	Z座標	
8-001	25987.160	22782.865	113.806	本土産磁器 近代 小杯
8-002	25987.034	22782.855	113.771	ガラス製品 薬瓶

第 44 図　第８号墓 墓庭 遺物分布状況

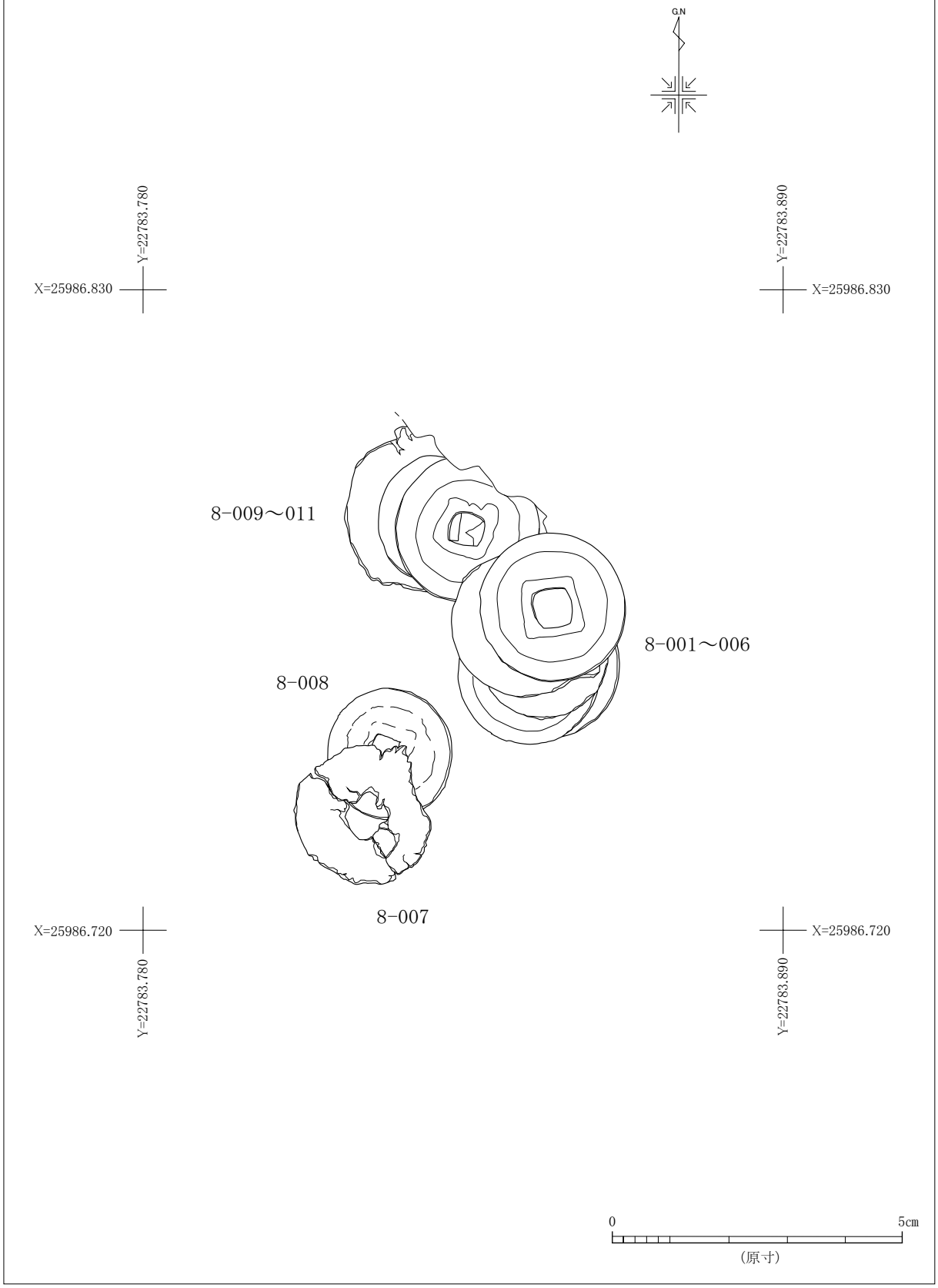
※ 凡例については、第 57 図等をご覧いただきたい。





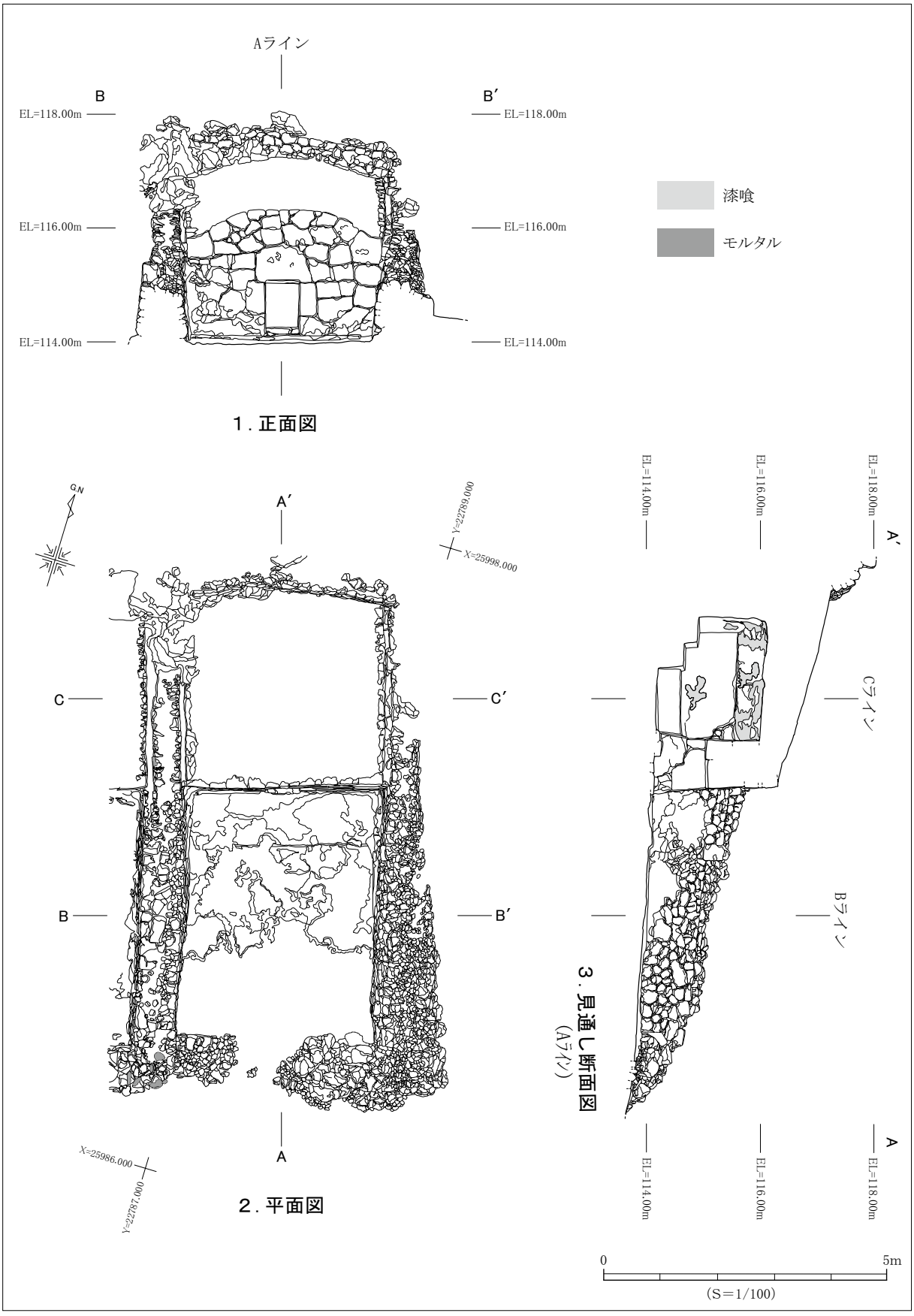
第 45 図　第８号墓 墓庭 遺物出土状況

※ 遺物集中部１は第 44 図の③拡大図に対応、遺物集中部２は①拡大図に対応

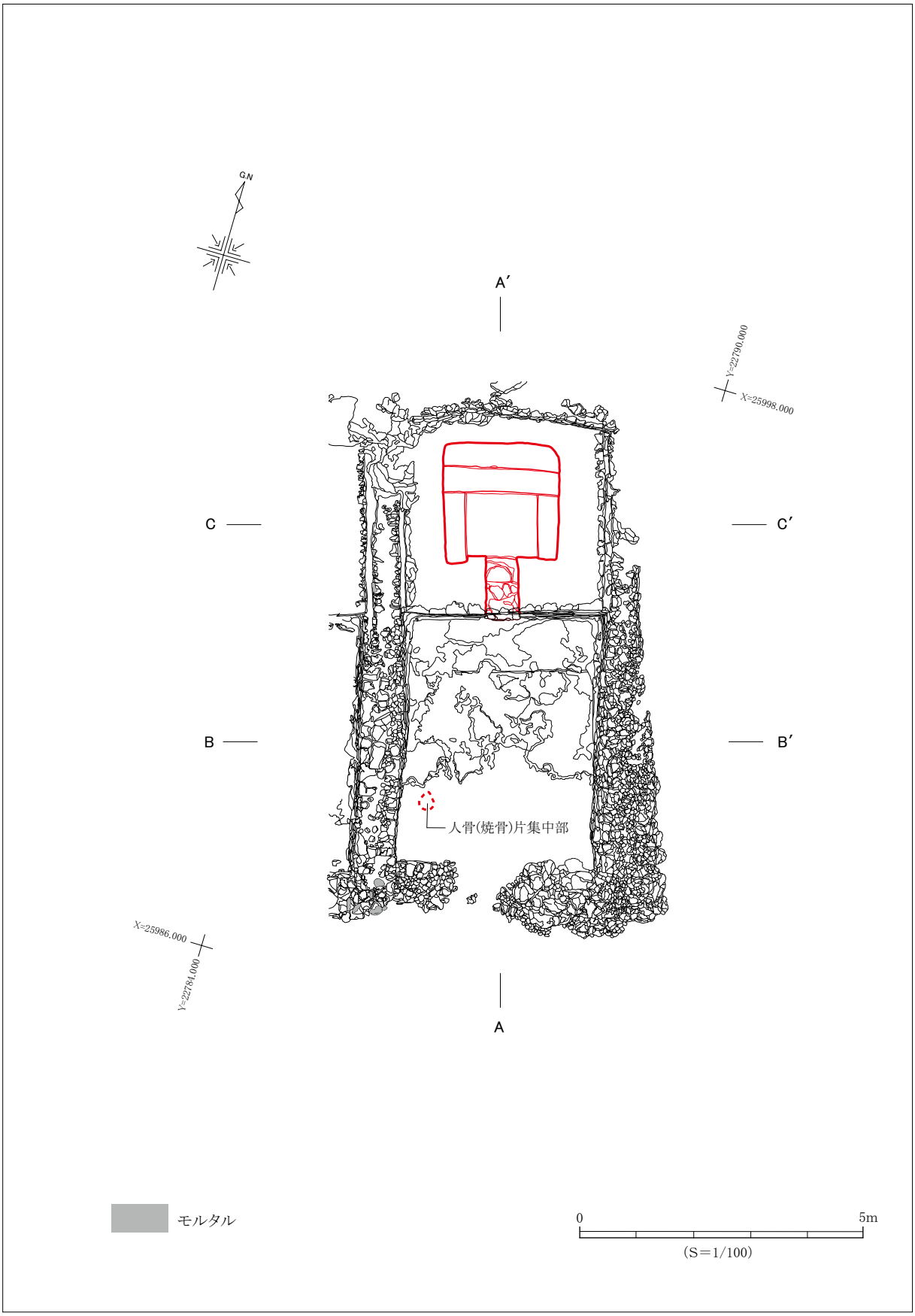


第 46 図　第 8 号墓 墓庭 前石垣(左側)上面 銭貨検出状況

※ 第 44 図の②拡大図に対応


Aライン
B
B′
EL=118.00m
EL=116.00m
EL=114.00m
漆喰
モルタル
1．正面図
A′
C
C′
B
B′
A
X=25998.000
Y=22789.000
X=25986.000
Y=22787.000
2．平面図
3．見通し断面図
（Aライン）
Cライン
Bライン
0
5m
（S＝1/100）

第 47 図　第 9 号墓



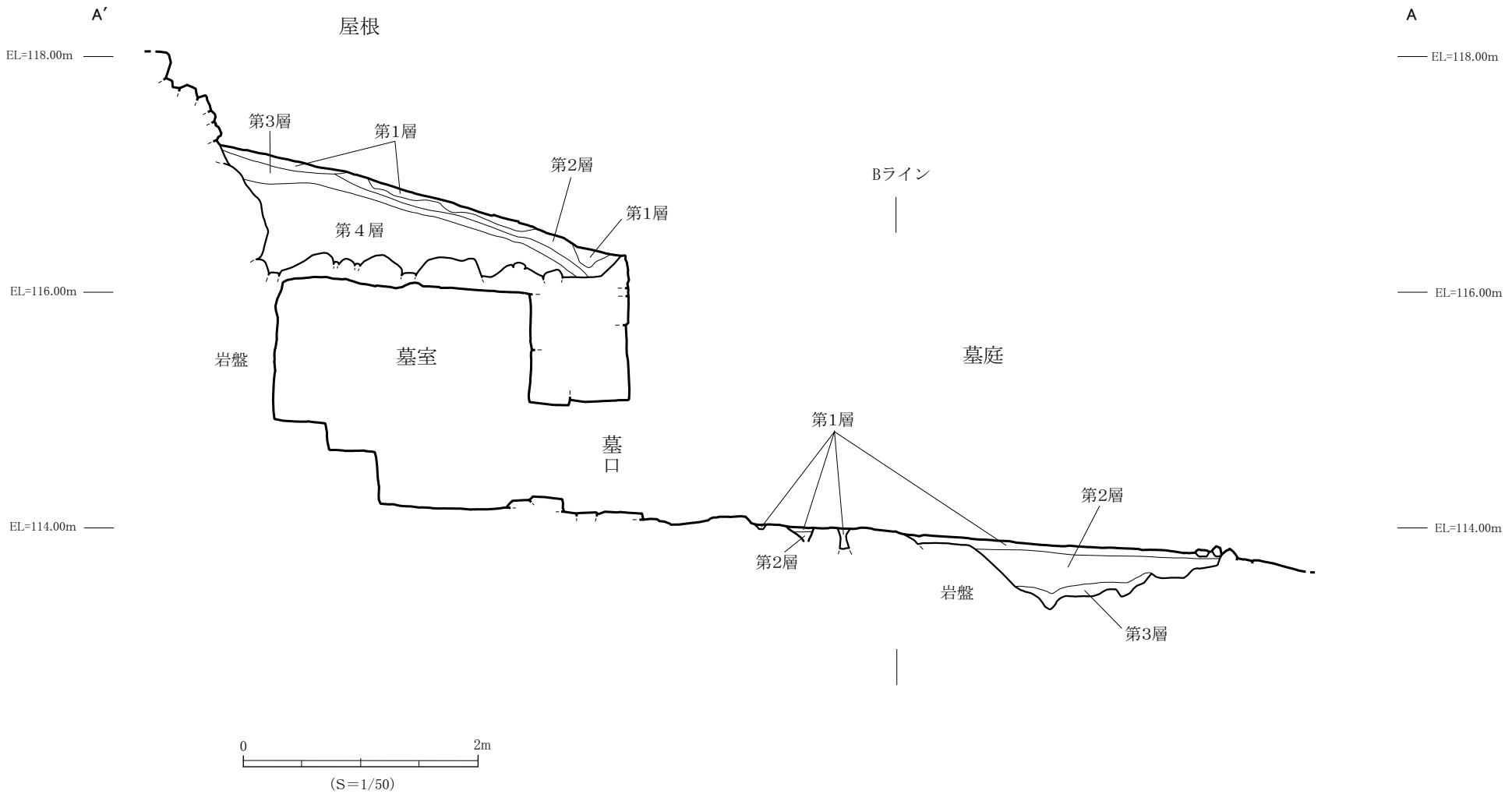
第 48 図　第 9 号墓 平面図（赤は、墓室平面図及び墓庭人骨（焼骨）片集中部の範囲）

屋根

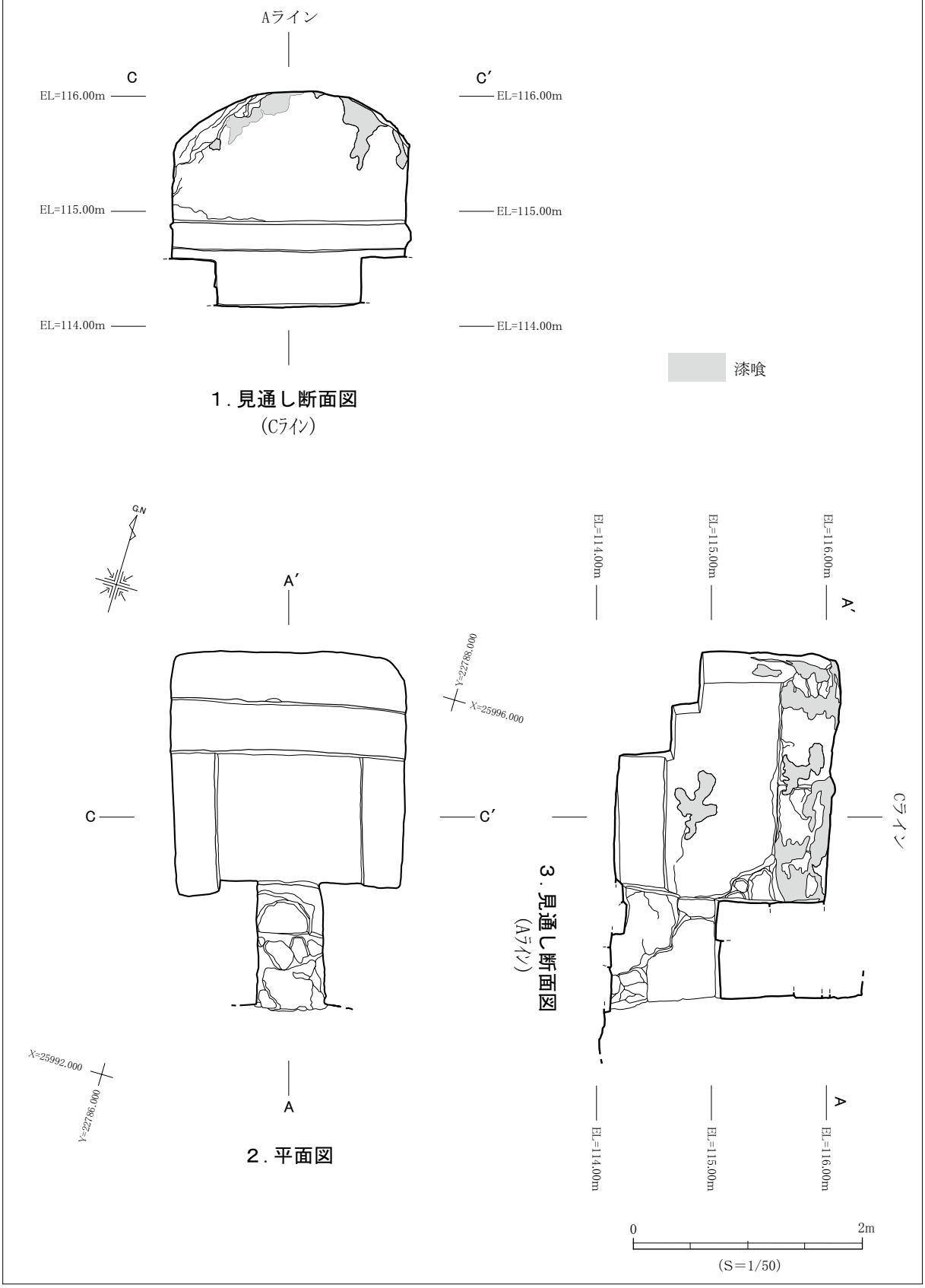
第1層　黒褐（10YR3/2）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。植物の根が多く見られる。
第2層　黄橙（10YR8/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。
第3層　褐（10YR4/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。植物の根が多く見られる。
第4層　明黄褐（10YR6/6）。石灰岩砂礫層。イシグー（石粉）。

墓庭

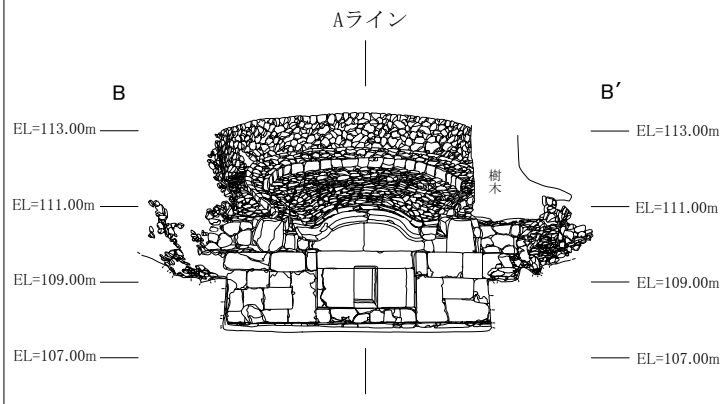
第1層　黒褐（10YR3/2）。石灰岩の砂礫を多量に含む土層。
第2層　褐（10YR4/4）。石灰岩砂礫層。
第3層　褐（10YR4/6）。石灰岩の砂礫を多く含む土層。



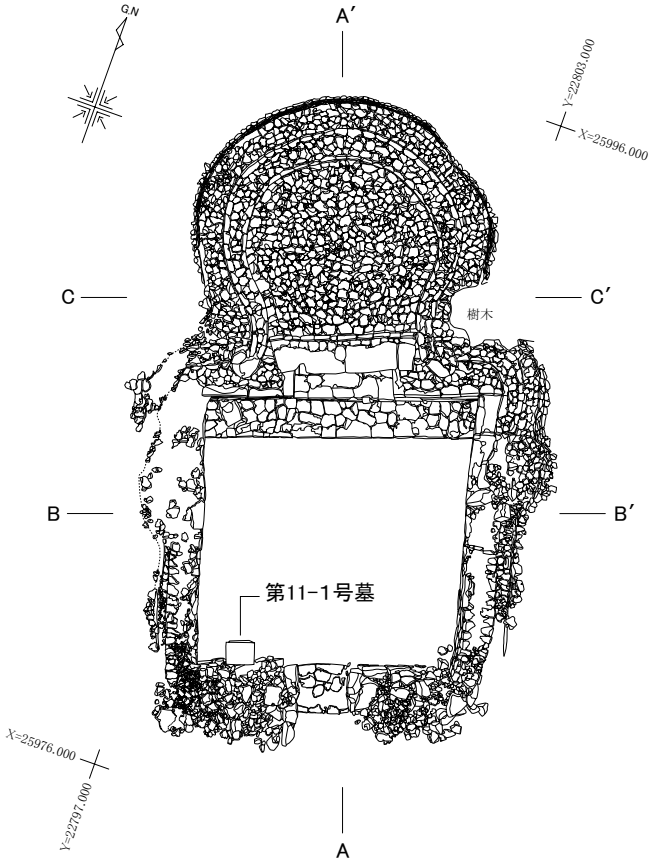
第 49 図　第９号墓 断面図


Aライン
C
C′
EL=116.00m
EL=115.00m
EL=114.00m
漆喰
1．見通し断面図
(Cライン)
A′
A
C
C′
X=25996.000
Y=227788.000
X=25992.000
Y=227786.000
2．平面図
3．見通し断面図
(Aライン)
Cライン
0
2m
(S＝1/50)

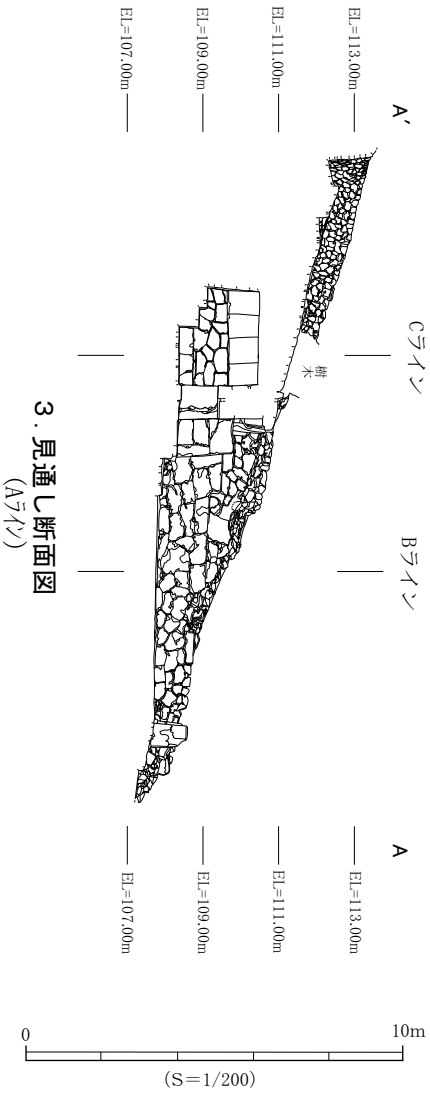
第 50 図　第 9 号墓 墓室



1．正面図



2．平面図



3．見通し断面図
(Aライン)

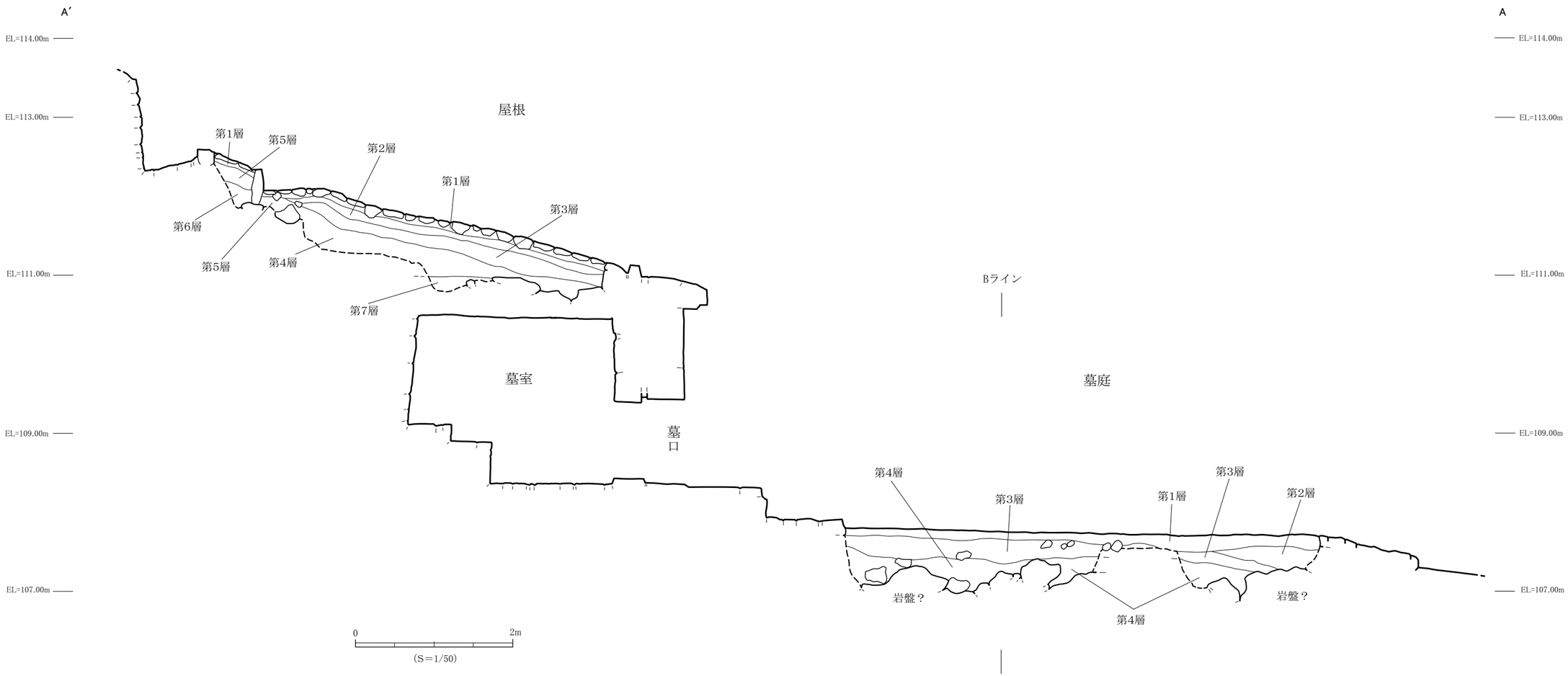
第 51 図　第 11 号墓

屋根

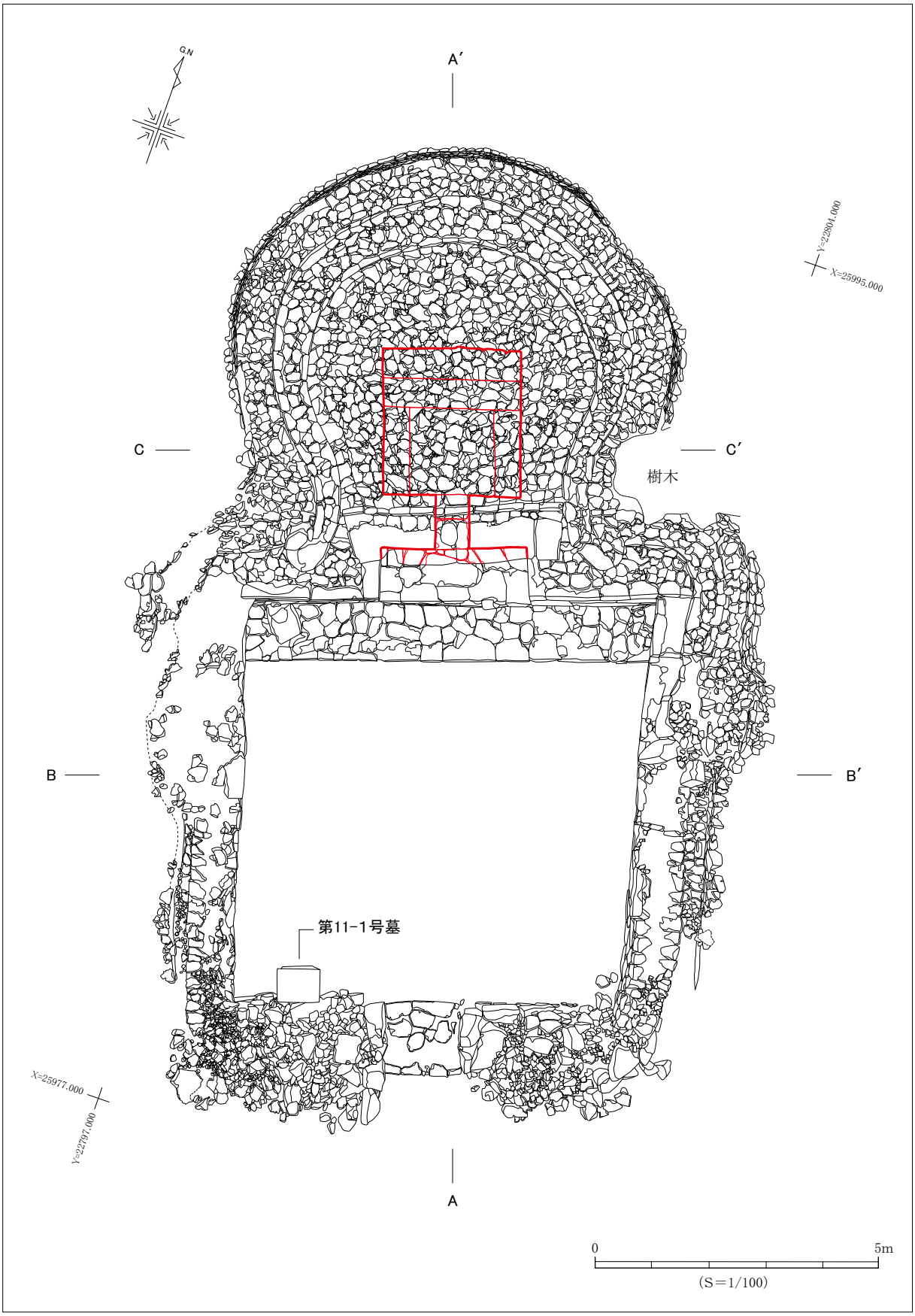
第1層　黒褐（10YR3/2）。粘性があり、しまる。石灰岩の細かい砂礫を含む。
第2層　褐（7.5YR4/4）。粘性があり、しまり強い。石灰岩の細かい砂礫を多く含む。
第3層　褐（10YR4/4）。粘性があり、しまり強い。石灰岩の礫は、あまり含まない。
第4層　褐（10YR4/6）。粘性あるが、しまりはない。石灰岩の砂礫を多量に含む。
第5層　明黄褐（10YR6/6）。石灰岩砂礫層。粘性、しまりともになし。
第6層　褐（10YR4/4）。粘性、しまりともにあり。石灰岩の砂礫を多く含む。
第7層　褐（10YR4/4）。粘性あるが、しまりは弱い。石灰岩の砂礫を含む。

墓庭

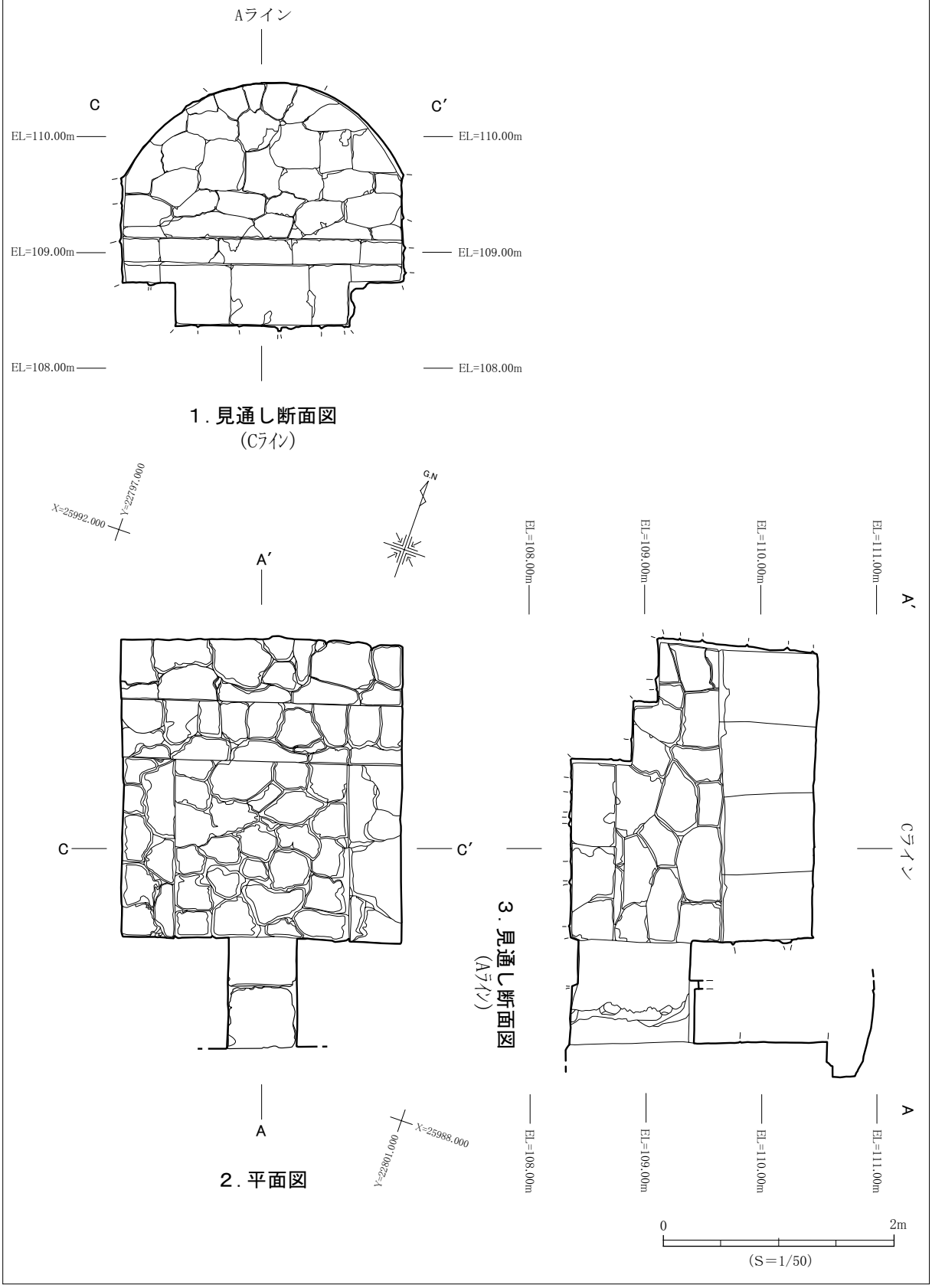
第1層　黒褐（10YR3/3）。粘性、しまりともにあり。石灰岩の砂礫を多く含む。
第2層　褐（7.5YR4/4）。粘性、しまりともにあり。
第3層　褐（10YR4/6）。粘性、しまりともにあり。石灰岩の砂礫を多く含む。
第4層　褐（10YR4/6）。粘性あるが、しまりは弱い。石灰岩の砂礫を多く含む。大きさ 20 ～ 30cm 以上の礫も多く見られる。



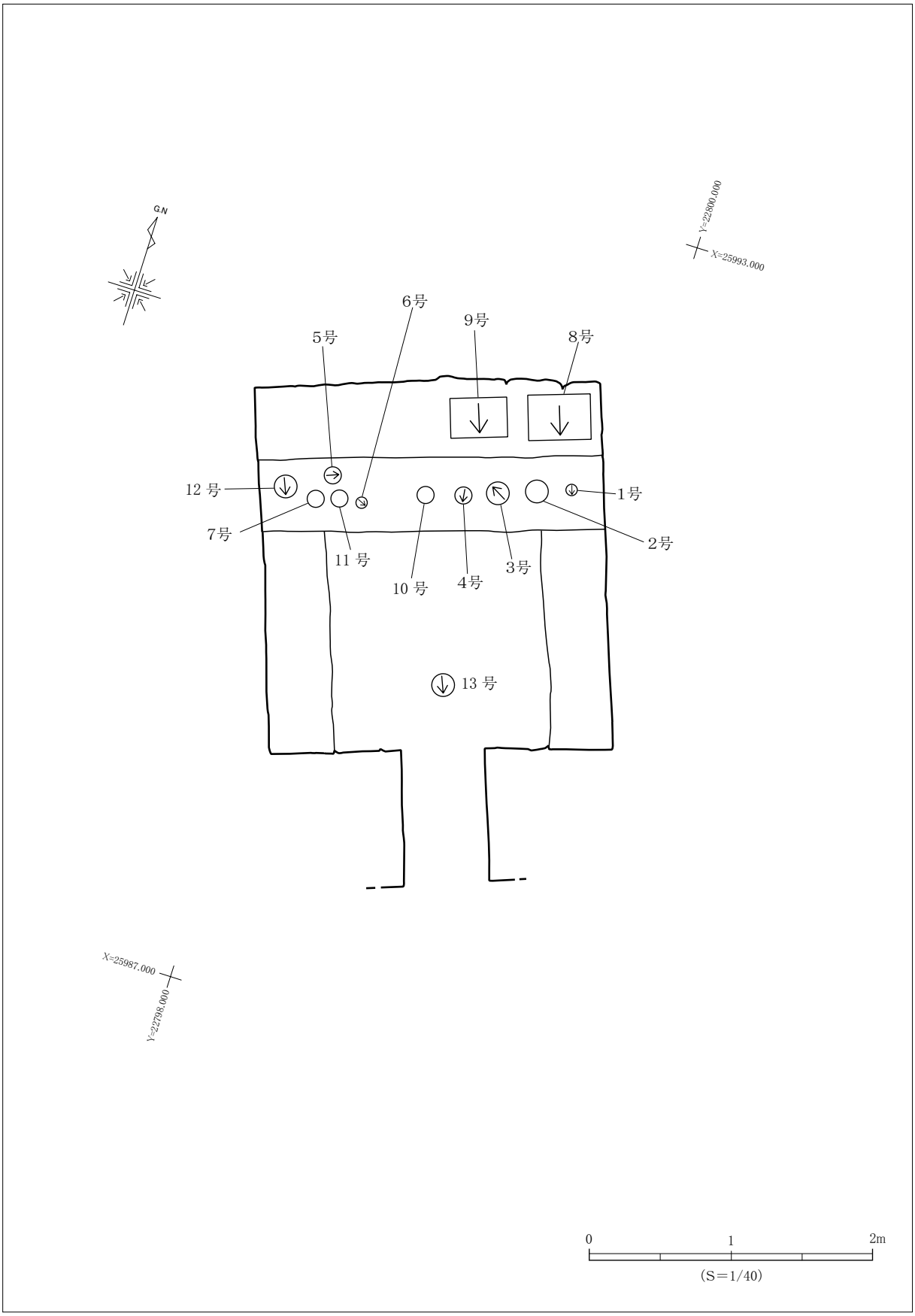
第 52 図　第 11 号墓 断面図



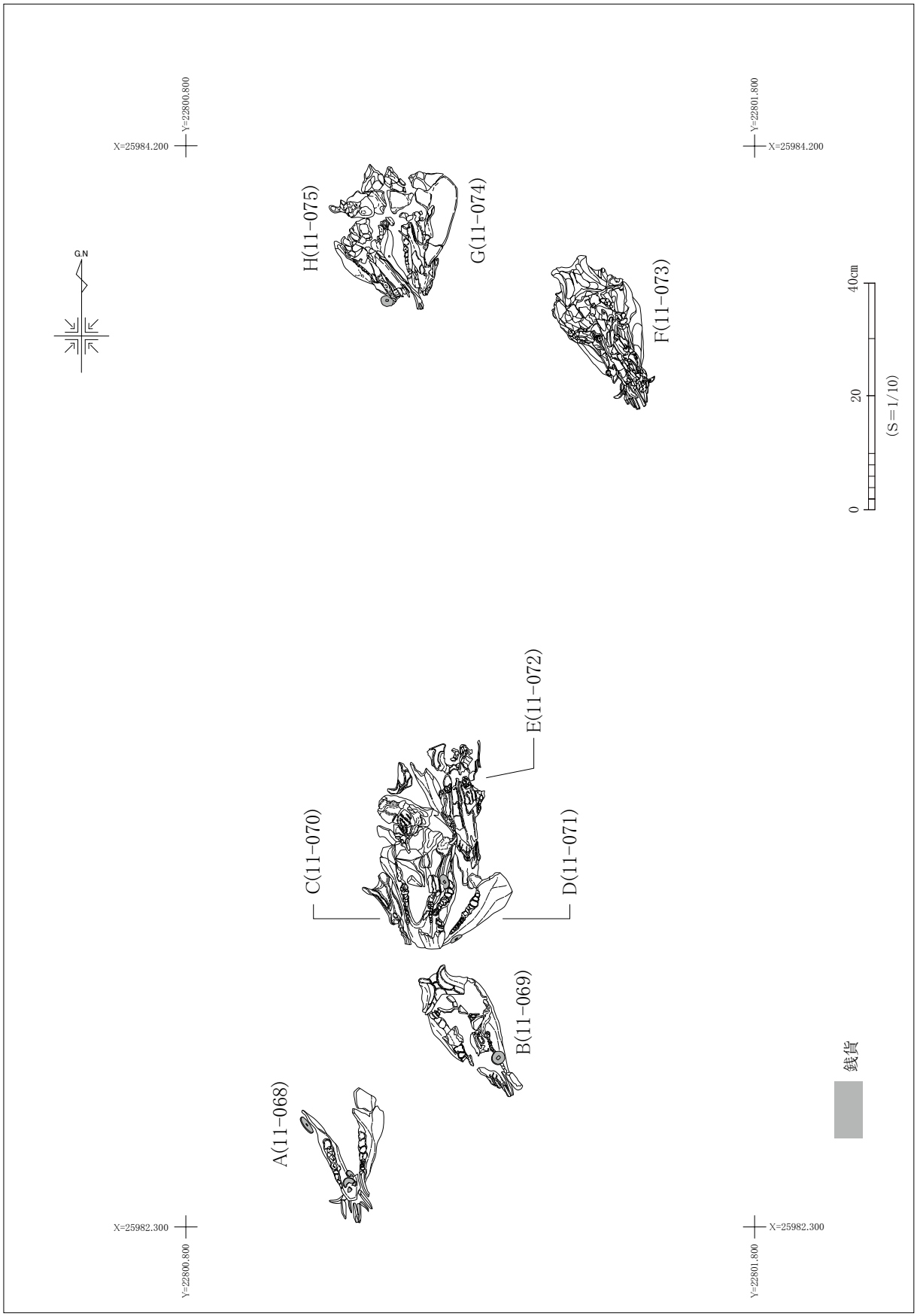
第 53 図　第 11 号墓 平面図（赤は、墓室平面図）



第 54 図　第 11 号墓 墓室



第 55 図　第 11 号墓 墓室 蔵骨器配置状況概略図



第 56 図　第 11 号墓 墓庭 豚頭蓋骨検出状況

取上座標一覧表

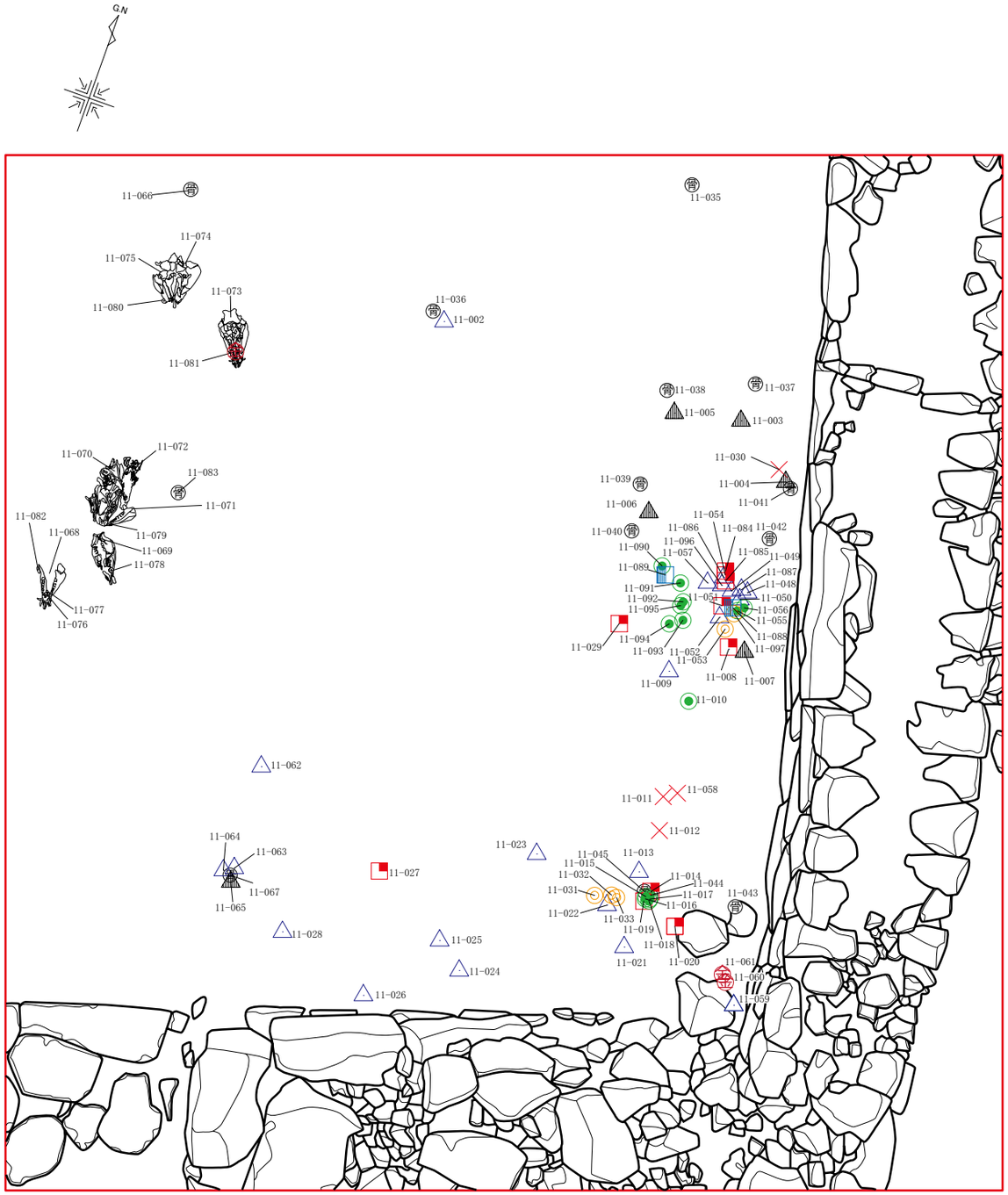
点 名	取上座標			種 別
	X座標	Y座標	Z座標	
11-001	25987.287	22803.436	107.695	沖縄産無釉陶器 壺
11-034	25983.612	22797.533	107.673	本土産陶器 小碗
11-046	25980.630	22799.227	107.565	銭貨 銭文不明
11-047	25985.810	22801.126	107.492	銭貨 寛永通寶(新)

凡 例

記 号	名 称
◎	金属製品
×	簪
▯	刀子
△	陶磁器
◪	煙管
金	銭貨
▲	蔵骨器片
◉	指輪
骨	骨

平面図 S=1/80

第 57 図 第 11 号墓 墓庭 遺物分布状況（1）



拡大図　S=1/30

取上座標一覧表

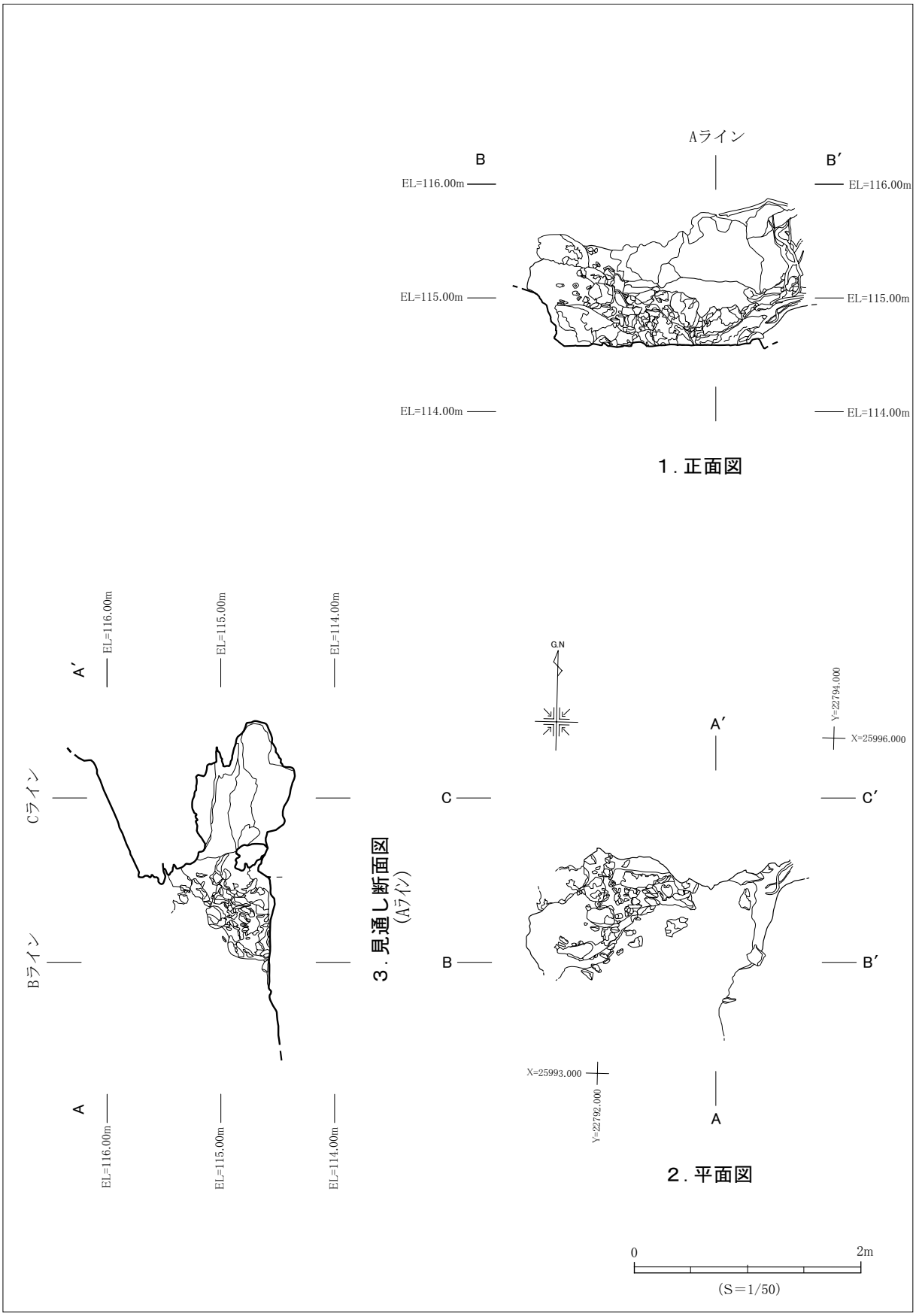
点 名	取上座標 X座標	取上座標 Y座標	取上座標 Z座標	種 別
11-002	25984.291	22802.484	107.665	蔵骨器片
11-003	25984.317	22804.020	107.665	蔵骨器片
11-004	25984.107	22804.327	107.669	蔵骨器片
11-005	25984.244	22803.699	107.677	蔵骨器片、青花 碗、他
11-006	25983.743	22803.743	107.679	蔵骨器片、沖縄産施釉陶器 鍋
11-007	25983.254	22804.413	107.655	蔵骨器片、沖縄産施釉陶器 瓶
11-008	25983.241	22804.336	107.700	金属製品 煙管 吸口
11-009	25983.041	22804.096	107.546	沖縄産施釉陶器 瓶
11-010	25982.935	22804.236	107.532	金属製品 指輪
11-011	25982.452	22804.274	107.419	金属製品 簪
11-012	25982.289	22804.312	107.405	金属製品 簪
11-013	25982.064	22804.285	107.439	沖縄産施釉陶器 瓶
11-014	25981.993	22804.372	107.395	金属製品 煙管 雁首
11-015	25981.961	22804.357	107.387	金属製品 指輪
11-016	25981.950	22804.358	107.382	金属製品 指輪
11-017	25981.956	22804.379	107.378	金属製品 指輪
11-018	25981.947	22804.378	107.378	金属製品 指輪
11-019	25981.937	22804.355	107.366	金属製品 煙管 吸口
11-020	25981.871	22804.540	107.412	金属製品 延べ煙管
11-021	25981.692	22804.339	107.360	沖縄産施釉陶器 小杯
11-022	25981.858	22804.191	107.427	沖縄産施釉陶器 瓶
11-023	25981.980	22803.782	107.487	本土産磁器 近代 小杯
11-024	25981.314	22803.614	107.610	沖縄産施釉陶器 瓶
11-025	25981.421	22803.474	107.649	沖縄産施釉陶器 小杯、瓶
11-026	25981.043	22803.211	107.676	本土産磁器 クロム青磁 小杯
11-027	25981.644	22803.082	107.646	金属製品 煙管 吸口
11-028	25981.204	22802.733	107.642	沖縄産施釉陶器 瓶、蔵骨器片
11-029	25983.180	22803.788	107.647	金属製品 煙管 雁首
11-030	25984.154	22804.276	107.638	金属製品 簪
11-031	25981.883	22804.118	107.383	鉄釘
11-032	25981.912	22804.196	107.385	鉄釘
11-033	25981.909	22804.223	107.388	鉄釘
11-035	25985.328	22803.408	107.592	人骨片
11-036	25984.321	22802.416	107.573	人骨片、二枚貝
11-037	25984.511	22804.027	107.595	人骨片、歯
11-038	25984.337	22803.628	107.589	人骨片、歯
11-039	25983.860	22803.657	107.585	人骨片、歯
11-040	25983.629	22803.694	107.586	人骨片
11-041	25984.084	22804.360	107.575	人骨片
11-042	25983.818	22804.344	107.547	人骨片
11-043	25982.060	22804.787	107.360	人骨片
11-044	25981.975	22804.377	107.273	人骨片
11-045	25981.983	22804.341	107.279	人骨片
11-048	25983.533	22804.331	107.481	沖縄産施釉陶器 小杯
11-049	25983.515	22804.254	107.468	沖縄産施釉陶器 小杯
11-050	25983.489	22804.306	107.517	沖縄産施釉陶器 瓶
11-051	25983.431	22804.234	107.457	陶製品 煙管 雁首
11-052	25983.373	22804.242	107.447	沖縄産施釉陶器 小杯
11-053	25983.328	22804.287	107.455	鉄釘
11-054	25983.578	22804.199	107.481	陶製品 煙管 吸口
11-055	25983.433	22804.314	107.520	金属製品 指輪

点 名	取上座標 X座標	取上座標 Y座標	取上座標 Z座標	種 別
11-056	25983.457	22804.340	107.509	金属製品 指輪
11-057	25983.513	22804.130	107.470	沖縄産施釉陶器 小杯
11-058	25982.491	22804.334	107.316	金属製品 簪
11-059	25981.602	22804.941	107.270	沖縄産施釉陶器 灰釉碗
11-060	25981.695	22804.865	107.279	銭貨 寛永通寶(新)
11-061	25981.726	22804.838	107.248	銭貨 寛永通寶(古)
11-062	25981.934	22802.365	107.675	沖縄産施釉陶器 瓶
11-063	25981.420	22802.406	107.645	沖縄産施釉陶器 瓶
11-064	25981.392	22802.359	107.630	沖縄産施釉陶器 瓶
11-065	25981.351	22802.412	107.623	蔵骨器片？
11-066	25984.488	22801.096	107.660	歯
11-067	25981.381	22802.398	107.602	人骨片
11-068	25982.547	22801.014	107.499	豚頭蓋骨A
	25982.306	22801.106	107.568	
11-069	25982.734	22801.200	107.585	豚頭蓋骨B
	25982.513	22801.337	107.622	
11-070	25983.061	22801.204	107.530	豚頭蓋骨C
	25982.799	22801.218	107.574	
11-071	25982.914	22801.344	107.588	豚頭蓋骨D
	25982.797	22801.225	107.560	
11-072	25983.103	22801.287	107.585	豚頭蓋骨E
	25982.937	22801.324	107.587	
11-073	25983.963	22801.490	107.653	豚頭蓋骨F
	25983.800	22801.576	107.594	
11-074	25984.135	22801.192	107.596	豚頭蓋骨G
	25983.978	22801.213	107.623	
11-075	25984.057	22801.093	107.621	豚頭蓋骨H
	25983.945	22801.187	107.617	
11-076	25982.379	22801.093	107.561	銭貨 寛永通寶
11-077	25982.395	22801.091	107.552	銭貨 寛永通寶(新)
11-078	25982.595	22801.352	107.581	銭貨 寛永通寶(新)
11-079	25982.809	22801.277	107.539	銭貨 寛永通寶(新)
11-080	25983.929	22801.146	107.590	銭貨 銭文不明
11-081	25983.811	22801.569	107.539	銭貨 寛永通寶(新)
11-082	25982.477	22801.015	107.549	銭貨 寛永通寶(新)
11-083	25983.065	22801.533	107.663	豚右下顎犬歯
11-084	25983.597	22804.194	107.380	金属製品 煙管 雁首
11-085	25983.552	22804.211	107.399	沖縄産施釉陶器 煙管 吸口
11-086	25983.565	22804.196	107.389	沖縄産施釉陶器 瓶
11-087	25983.537	22804.298	107.368	沖縄産施釉陶器 碗
11-088	25983.439	22804.288	107.427	金属製品 刀子
11-089	25983.481	22803.922	107.474	金属製品 刀子
11-090	25983.517	22803.892	107.472	金属製品 指輪
11-091	25983.468	22804.005	107.426	金属製品 指輪
11-092	25983.385	22804.048	107.426	金属製品 指輪
11-093	25983.300	22804.077	107.461	金属製品 指輪
11-094	25983.261	22804.020	107.477	金属製品 指輪
11-095	25983.364	22804.043	107.431	金属製品 指輪
11-096	25983.525	22804.200	107.376	沖縄産施釉陶器 瓶
11-097	25983.414	22804.303	107.421	金属製品 針

凡 例

記 号	名 称
◎	金属製品
×	簪
▥	刀子
△	陶磁器
▪	煙管
金	銭貨
▲	蔵骨器片
◉	指輪
骨	骨

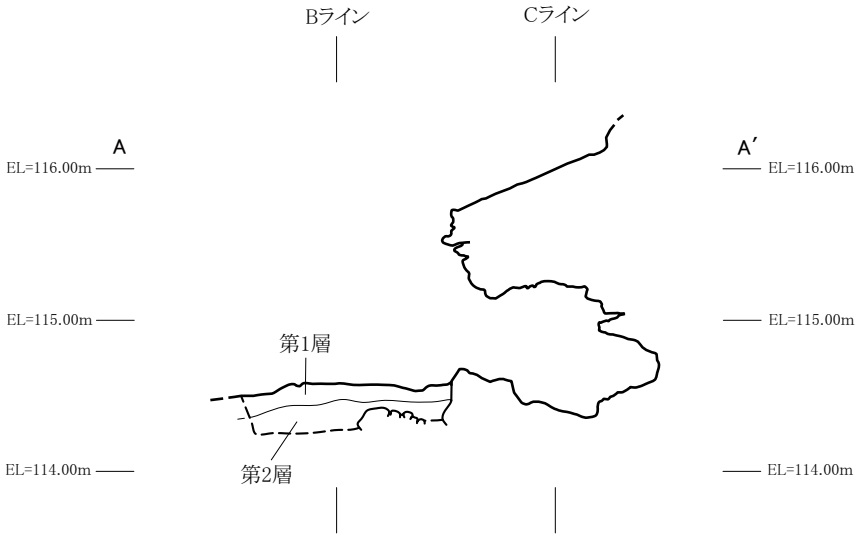
第 58 図　第 11 号墓 墓庭 遺物分布状況（2）


Aライン
B
B′
EL=116.00m
EL=115.00m
EL=114.00m
1．正面図
A′
A
Cライン
Bライン
3．見通し断面図
(Aライン)
G.N
C
C′
B
B′
Y=22794.000
X=25996.000
X=25993.000
Y=22792.000
2．平面図
0
2m
(S＝1/50)

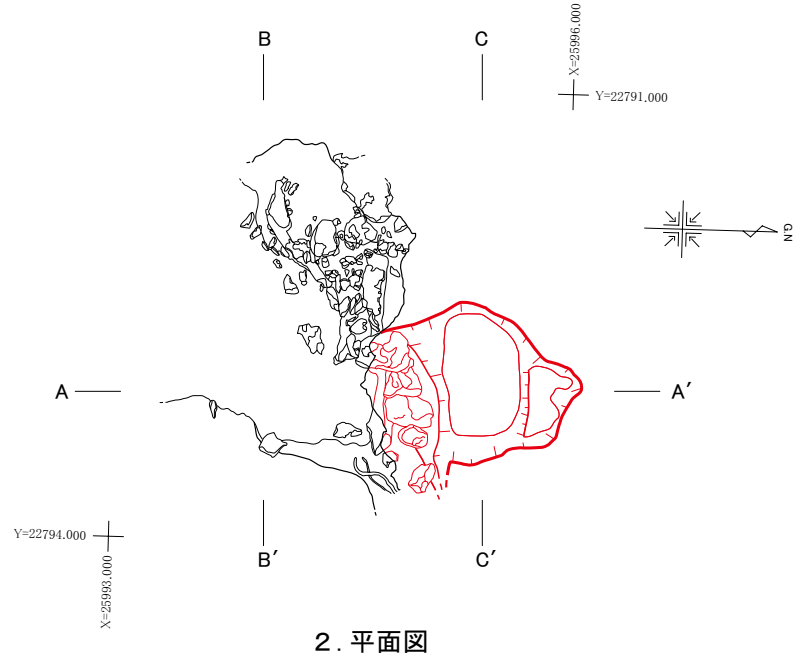
第 59 図　第 13 号墓

第1層　暗褐(10YR 3/4)。粘質土。大きさ2cm程の石灰岩小礫を少量含む。

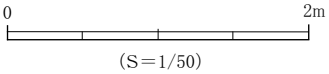
第2層　褐(7.5YR 4/4)。粘質土。島尻マージ土に由来する土壌と推測される。地山への移行層か。



1．断面図
（Aライン）

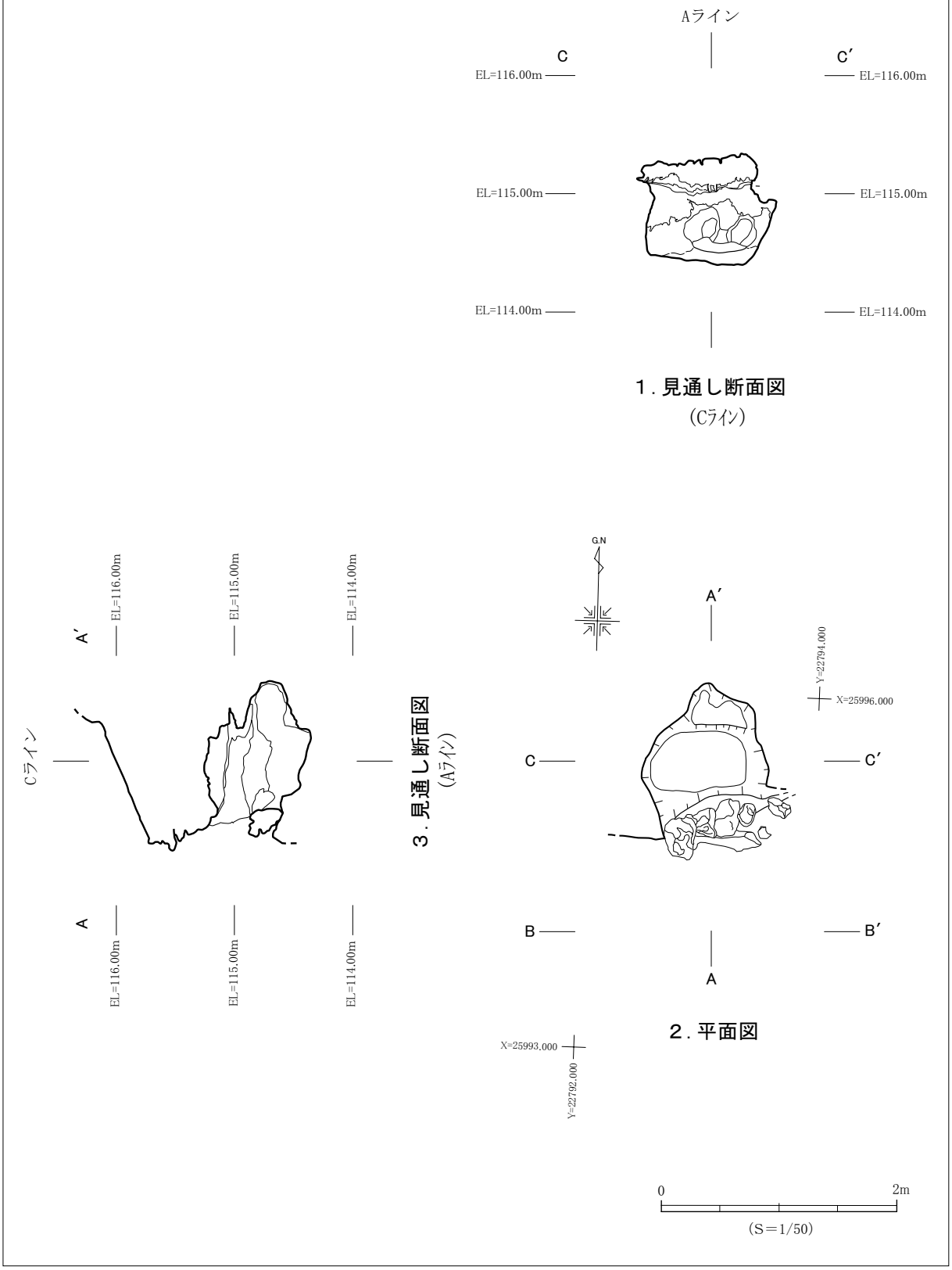


2．平面図



（S＝1/50）

第 60 図　第 13 号墓 断面図・平面図（赤は、墓室平面図）



第 61 図　第 13 号墓 墓室

第3表 遺物出土一覧

出土地点		小計	蔵骨器 身 陶製甕形 無頸 口-底	無頸 口縁部	無頸 胴部	有頸 完形	有頸 口-底	有頸 口-胴	有頸 胴-底	有頸 口縁部	有頸 胴部	有頸 底部	軒付 完形	軒付 口-底	軒付 胴部(軒)	陶製家形 完形	陶製家形 口-底	火葬用 甕形 完形	甕形 口-底	甕形 口縁部	甕形 胴部	甕形 底部	家形 口-底	本土産現代磁器 口-底	転用 油甕 口-底	蓋 陶製甕形 鉢形 完形	鉢形 ツマミ-縁部	鉢形 基部-縁部	鉢形 体部-縁部	鉢形 基部	鉢形 体部	鉢形 縁部	笠形 ツマミ-縁部	笠形 胴部	軒付 ツマミ-縁部	軒付 基部-縁部	軒付 体部(軒)	陶製家形 完形	陶製家形 頂部-縁部	火葬用 甕形 ツマミ-縁部	甕形 頂部-縁部	家形 頂部-縁部	本土産現代磁器 頂部-縁部	不明
第1号墓	墓室																																											
	墓庭 第2層																																											
第1-1号墓	墓上覆土	4									3																				1													
	東側トレンチ																																											
第2号墓	墓室																																											
	墓庭 遺物集中部	1			1																																							
	墓庭 表採	201								3	109	61			3											1	1			5	4	14												
	墓庭 第1層																																											
	墓庭 第2層	48								6	33	1			1																6	1												
	墓庭外	32																												4	21	4												3
第3号墓	墓庭 遺物集中部																																											
	墓庭 第1層	3									3																																	
	墓庭 第2層																																											
	屋根 第2層	1																																										1
第4号墓	墓室	23				8	2				3															8	2																	
	墓庭 遺物集中部																																											
	墓庭 第1層																																											
	墓庭 第2層																																											
第4-1号墓	墓室	2																1																						1				
第5号墓	墓室	13				10	1						2																															
	墓庭 表採																																											
	墓庭 第1層																																											
第6号墓	墓室	2				1																					1																	
第7号墓	墓室	14					5										2										5												2					
	墓庭 遺物集中部																																											
	墓庭 前石垣内																																											
第8号墓	墓室	22	1				2						1	3			3										3								3	1		1	2					2
	墓庭 遺物集中部1																																											
	墓庭 遺物集中部2																																											
	墓庭 左側 第1層																																											
	墓庭 前石垣上																																											
	墓庭 前石垣内																																											
第8-1号墓	墓室	4					1												1								1														1			
第9号墓	墓室	8														4																						4						
	墓庭	2														1																						1						
第11号墓	墓 室	7					2												4						1																			
	ｻﾝﾐﾃﾞｰ表採	5									5																																	
	墓庭 表採	44								4	36	4																																
	墓庭 第1層	154					5	1	1	8	101	11		1						1	1						14	4	3		1	2												
	墓庭 撹乱土坑	5									5																																	
	墓堂 屋根	1									1																																	
	墓庭 右側外	10					2				5											1												1			1							
	墓庭 左側外	13		1							11																						1											
第13号墓	墓口																																											
	墓前 表採	4																					1	1																		1	1	
	墓庭 第1層																																											
小計			1	1	1	19	20	1	1	21	315	77	3	4	4	5	5	1	5	1	1	1				9	27	4	3	9	33	21	1	1	3	1	1	6	4	1	1			
					3							454			11		10					9	1	1	1							106		2			5		10		2	1	1	6
合計		623																																										623

出土地点		種類	中国産							褐釉陶器	本土産																													
			白磁	青花				色絵	不明		磁器																													
		器種	小碗	碗			小杯	小碗		不明	碗	小杯	器種不明		染付	色絵				印判手																			
															皿	小碗		皿		型紙摺り			銅版転写			ゴム判		近現代										
		部位																		碗			碗	皿		徳利	小碗		碗	小碗				小杯				
		小計	口縁部	口縁部	胴部	底部	口－底	口縁部	胴部	胴部	底部	完形	口縁部	胴部	口－底	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	胴部	口－底	口縁部	完形	口縁部	胴部	底部	口縁部	完形	口－底	底部	完形	口－底	口縁部	底部
第1号墓	墓室																																					
	墓庭 第2層	3			1																		1		1												
第1-1号墓	墓上覆土																																					
	東側トレンチ	2							1	1																												
第2号墓	墓室																																					
	墓庭 遺物集中部	1										1																										
	墓庭 表採																																					
	墓庭 第1層																																					
	墓庭 第2層	2				1							1																									
	墓庭外	2									1		1																									
第3号墓	墓庭 遺物集中部																																					
	墓庭 第1層	1																	1																			
	墓庭 第2層																																					
	屋根 第2層																																					
第4号墓	墓室																																					
	墓庭 遺物集中部	1																								1												
	墓庭 第1層	2																																			1	1
	墓庭 第2層	1												1																								
第4-1号墓	墓室																																					
第5号墓	墓室																																					
	墓庭 表採																																					
	墓庭 第1層																																					
第6号墓	墓室																																					
第7号墓	墓室																																					
	墓庭 遺物集中部	1																																				
	墓庭 前石垣内	3																								1			2									
第8号墓	墓室	1																																				
	墓庭 遺物集中部1	1					1																															
	墓庭 遺物集中部2	1																																				
	墓庭 左側 第1層	2			1	1																																
	墓庭 前石垣上																																					
	墓庭 前石垣内																																					
第8-1号墓	墓室																																					
第9号墓	墓室																																					
	墓庭																																					
第11号墓	墓室																																					
	サンミテー表採	1																																				
	墓庭 表採	1																																				
	墓庭 第1層	32	1	1	2			1		14					1	1	1	1		2	1	3																
	墓庭 攪乱土坑																																					
	墓堂 屋根	8				1														1		1						1		2			2				
	墓庭 右側外	4				1		1																						1				1				
	墓庭 左側外	3																		2				1													
第13号墓	墓口																																					
	墓前 表採																																					
	墓庭 第1層																																					
小計			1	1	4	4	1	2	1		1	1	2	1	1	1	1	1	1	5	1	4	1	1	1	1	1	1	3	3	2	2	2	2	1	1	1
				9			1	2	1		1	1	3		1	2		1	1	10			1	2		1	2		1	12				5			
合計		73							14	15																												

出土地点		種類	本土産																	沖縄産																							
			磁器																陶器	施釉陶器																							
			近現代																																								
		器種	小碗		瓶		急須				徳利	不明			染付 碗	染付 小碗	クロム青磁 小杯		鉢	碗				小碗			小杯		鉢	急須	鍋			壺	油甕			瓶					酒器
		部位 / 小計	口縁部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	把手	完形	口縁部	胴部	底部	口縁部	口ー底	完形	口ー底	口縁部	口ー底	口縁部	胴部	底部	口ー底	口縁部	底部	完形	口ー底	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	胴部	底部	完形	口ー底	口縁部	胴部	底部	胴部
第1号墓	墓室																																										
第1号墓	墓庭 第2層																																										
第1-1号墓	墓上覆土																																										
第1-1号墓	東側トレンチ																																										
第2号墓	墓室																																										
第2号墓	墓庭 遺物集中部	8																									3	1											4					
第2号墓	墓庭 表採																																										
第2号墓	墓庭 第1層	2														1																		1									
第2号墓	墓庭 第2層	1																																									1
第2号墓	墓庭外	1																	1																								
第3号墓	墓庭 遺物集中部																																										
第3号墓	墓庭 第1層	6										2	3	1																													
第3号墓	墓庭 第2層																																										
第3号墓	屋根 第2層																																										
第4号墓	墓室																																										
第4号墓	墓庭 遺物集中部	4									2																												2					
第4号墓	墓庭 第1層	22	1	1	1	3						1	9									3	3																					
第4号墓	墓庭 第2層	3										1	2																														
第4-1号墓	墓室																																										
第5号墓	墓室																																										
第5号墓	墓庭 表採																																										
第5号墓	墓庭 第1層																																										
第6号墓	墓室																																										
第7号墓	墓室																																										
第7号墓	墓庭 遺物集中部																																										
第7号墓	墓庭 前石垣内	1													1																												
第8号墓	墓室	2			1	1																																					
第8号墓	墓庭 遺物集中部1	12																1									1												1		1	7	1	
第8号墓	墓庭 遺物集中部2																																										
第8号墓	墓庭 左側 第1層	6																					4	1						1														
第8号墓	墓庭 前石垣上																																										
第8号墓	墓庭 前石垣内																																										
第8-1号墓																																											
第9号墓	墓室																																										
第9号墓	墓庭																																										
第11号墓	墓 室																																										
第11号墓	ｻﾝﾐﾃﾞｰ表採																																										
第11号墓	墓庭 表採	6											1																								3	2						
第11号墓	墓庭 第1層	83						1		1			4				1			1	1		3		11	2	4	2	1	1			3		3	26	1	2	2	2	7	4	
第11号墓	墓庭 攪乱土坑																																										
第11号墓	墓堂 屋根																																										
第11号墓	墓庭 右側外	13					1		1														1		3			1			1	1	1			2					1		
第11号墓	墓庭 左側外	2							1				1																														
第13号墓	墓口																																										
第13号墓	墓前 表採																																										
第13号墓	墓庭 第1層																																										
小計			1	1	2	4	1	1	2	1		4	20	1			1	1		1	4	8	4	3	11	2	9	4			1	1	3		5	29	3	9	2	4	14	5	
小計				2		6				5	2			25	1	1		2					17			16		13	1	2			5	1			37					34	1
合計		172																44	1																								127

出土地点		種類	沖縄産																																瓦			円盤状製品
			施釉陶器												無釉陶器										陶質土器												明朝系瓦			磁器
		器種	火炉			火取	香炉	蓋付鉢		不明				瓶	壺			鉢	擂鉢			水甕	不明		土鍋		土瓶	不明			蓋						赤色			碗
																															土鍋		土瓶	不明						
		部位	口縁部	胴部	底部	底部	底部	身完形	蓋完形	口縁部	胴部	底部	不明	口縁部	口｜底	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	胴部	底部	底部	胴部	底部	頂部	縁部	端部	体部	縁部	丸瓦	平瓦	不明	底部
		小計																																				
第1号墓	墓室																																					
	墓庭 第2層																																					
第1-1号墓	墓上覆土	3					1																1															1
	東側トレンチ	4									1							1					2															
第2号墓	墓室																																					
	墓庭 遺物集中部	4						1	1																						2							
	墓庭 表採																																					
	墓庭 第1層																																					
	墓庭 第2層	10		1							2										3	1					3											
	墓庭外																																					
第3号墓	墓庭 遺物集中部																																					
	墓庭 第1層	6				1						1									1		1										2				
	墓庭 第2層	1																														1					
	屋根 第2層																																					
第4号墓	墓室																																					
	墓庭 遺物集中部																																					
	墓庭 第1層	1																				1															
	墓庭 第2層	1									1																											
第4-1号墓	墓室																																					
第5号墓	墓室																																					
	墓庭 表採	1														1																					
	墓庭 第1層	1																																		1		
第6号墓	墓室																																					
第7号墓	墓室	1																							1													
	墓庭 遺物集中部																																					
	墓庭 前石垣内	5																					5															
第8号墓	墓室																																					
	墓庭 遺物集中部1	2												1									1															
	墓庭 遺物集中部2																																					
	墓庭 左側 第1層	18									6		1															3	5	1	1	1					
	墓庭 前石垣上	1																										1									
	墓庭 前石垣内																																					
第8-1号墓	墓室																																					
第9号墓	墓室																																					
	墓庭																																					
第11号墓	墓室																																					
	サンミデー表採	2													1		1																					
	墓庭 表採	2																2																				
	墓庭 第1層	124		3	1					1	15		1			1	7	1		1	4							5	2			18	12				1	1	
	墓庭 攪乱土坑	1																			1																	
	墓堂 屋根	6	1	1							2						1																					
	墓庭 右側外	16								1	2						7																			1		1	
	墓庭 左側外	2																			1		1															
第13号墓	墓口																																					
	墓前 表採	2																					1												1			
	墓庭 第1層																																					
小計			1	5	1					2	29	1	2	1	1	1	17	1	3	1	9	2	2	61	5	3	1	1	25	19	1	3	1	2	2	2	2	
					7	1	1	1	1				34	1				20	3			12	1		63			9	1		44		4	1	3				
合計		214											45											100										62				6	1

出土地点		種類 / 器種 / 部位 / 小計	ガラス製品							プラスチック製品		煙管				金属製品												銭貨					墓誌	石製品			ビニール製品		ボタン	タイル（現代遺物）	獣骨	人骨	不明骨
			瓶	ラムネ瓶	薬瓶	コップ	おはじき	ビー玉	不明	櫛	不明	陶製品		金属製品			管	鉄釘		針	指輪	瓶栓	小鉤	刀子	金具		眼鏡	シャベル	不明	寛永通寶		銭文不明		桐一銭青銅貨	十円青銅貨	一円アルミ貨		石筆？	硯	砥石	食品ラベル	不明					
			蓋	口ー底	完形	完形						雁首	吸口	雁首	吸口	延べ煙管		完形	破片						ベルト	不明				完形	破片	完形	破片												
第1号墓	墓室	1																															1									
	墓庭 第2層																																										
第1-1号墓	墓上覆土																																										
	東側トレンチ																																										
第2号墓	墓室	24							3		1													1		1	1	11												1		5	
	墓庭 遺物集中部	211												4	4		2	1	152		3			1		5			36													3	
	墓庭 表採	254																																								254	
	墓庭 第1層																																										
	墓庭 第2層																																										
	墓庭外																																										
第3号墓	墓庭 遺物集中部	2																																1	1								
	墓庭 第1層	9		1			1	1											1			1									1	3										
	墓庭 第2層																																										
	屋根 第2層																																										
第4号墓	墓室																																										
	墓庭 遺物集中部	11												1	2						3		5																	3			
	墓庭 第1層	4						1																																		
	墓庭 第2層	15												1					10				4																				
第4-1号墓	墓室																																										
第5号墓	墓室																																										
	墓庭 表採																																										
	墓庭 第1層																																										
第6号墓	墓室																																										
第7号墓	墓室																																										
	墓庭 遺物集中部	28			1													1	2	19									2													3	
	墓庭 前石垣内	1																1																									
第8号墓	墓室																																										
	墓庭 遺物集中部1	11			1					1				1	1				5	1												1										
	墓庭 遺物集中部2	1			1																																					
	墓庭 左側 第1層																																										
	墓庭 前石垣上	11																												7		3	1									
	墓庭 前石垣内	1																												1												
第8-1号墓	墓室																																										
第9号墓	墓室																																										
	墓庭	19				1																																			18	
第11号墓	墓室																																										
	サンミデー表採																																										
	墓庭 表採																																										
	墓庭 第1層	835	1				1					1	2	3	3	1	3		43	2	11			2		2			1	12	1	3								688	55	
	墓庭 攪乱土坑	5																								2						1		1					1			
	墓堂 屋根																																										
	墓庭 右側外																																										
	墓庭 左側外																																										
第13号墓	墓口	1																																				1				
	墓前 表採	2																																					2			
	墓庭 第1層	1																												1												
小計			1	1	3	1	2	2	3	1	1	1	2	10	10	1	7	3	233	3	17	1	9	3	1	10	1	1	50	20	2	7	2	1	1	3	1	1	1	1	3				
																										22						9										
合計		1447							13		2					24													335							36	1			3			4	1	2	688	76	262

第Ⅴ章　遺 物

フクヂ山古墓群の３次に及ぶ発掘調査では、蔵骨器以外にも多数の遺物が得られている。特徴的な遺物の出土状況として、いくつかの古墓の墓庭から表土の掘削に伴い複数の遺物が集中して検出されることがあった。その場合、それらの遺物には、保存状態の良いものがいくつか含まれていた。今回の発掘調査での全体的な遺物の出土状況については、第３表をご覧いただきたい。以下では、まず今回の調査で得られた蔵骨器となる資料の概要について報告し、次にその他の遺物として蔵骨器以外の遺物に関して述べたい。

第１節　蔵骨器

第 62～84 図。図版 70～90。第４表。凡例模式図(７)～(13)参照。

ここでは、被葬者の遺骨を納める容器を「蔵骨器」と呼称する。今回の調査で得られた蔵骨器には、陶製の専用蔵骨器のほかに、日常雑器(油甕)を利用した転用蔵骨器が１点含まれている(第 11 号墓２号蔵骨器・図版 83 の８)。蔵骨器の分類については、金武正紀氏による分類案(註１)を踏襲する。また、適宜必要に応じて上江洲均氏の分類(註２)も併用する。今回得られた専用蔵骨器の種類としては、陶製無頸甕形蔵骨器・陶製有頸甕形蔵骨器・陶製軒付甕形蔵骨器・陶製家形蔵骨器・火葬用蔵骨器がある。陶製無頸甕形蔵骨器及び陶製有頸甕形蔵骨器の身とセットになる蓋の形態に関しては、全てが鉢形蓋となる。

なお、通常、専用蔵骨器の正面には、そこが正面であることを示す文様(浮文・沈線文等)が施される。それは、陶製無頸甕形蔵骨器であれば庇(註３)・眉(註４)・マド枠(註５)、陶製有頸甕形蔵骨器では屋門(註６)などと呼称される。専用蔵骨器の正面を示すこのような文様の総称として、本報告書では「正面示形」の名称を用いることとする(凡例模式図(９)～(11)参照)。また、正面示形の内側及びその周辺に通常施される孔については、専用蔵骨器に共通する名称として「正面孔」を用いる(凡例模式図(９)・(11))。なお、専用蔵骨器の底面に施される孔については、すべて「底面孔」と総称する(凡例模式図(９)・(11))。

本報告では、蔵骨器の正面の反対側となる面を「背面」と呼ぶ。蔵骨器の正面へ向かって右側を蔵骨器の「右」とし、その反対側を「左」とする。

Ａ　鉢形蓋

第 62 図１・３・５、第 63 図１・３・５・７、第 64 図１・３、第 65 図１・３。図版 70 の１・２・４・６・８・10・12、図版 71 の１・３・５・７、図版 74 の２・４・６・８・10・12、図版 78 の３・５・７、図版 82 の２・３、図版 83 の５。

鉢形蓋の部分名称については、凡例模式図(７)をご覧いただきたい。

鉢形蓋は、体部から縁部へかけての器形が沖縄産無釉陶器の鉢(擂鉢)を伏せたような形状である。基部から体部へかけての内面の断面形は半円状となり、縁部で「く」字状に屈曲して外側へ鍔状に張り出す。鍔状に張り出す縁部の下面は身と接し、その内端には滑り止めとなるキが突出する。ただし、

鉢形蓋にはキをもたない資料もある。

鉢形蓋のツマミ下の基部には、上面が平坦となる円盤状の基台となるものがある。基台の縁は段状となり、その段が１段または２段となるものが主体であるが、３段以上のものもある。

鉢形蓋には、蓋内面の最上部に穿孔するものと、穿孔しないものの２つがある。前者は、蓋内面の最上部に穿孔することにより、その上にあるツマミの内部にある中空部分とつなげている。図版 70 の４(第 65 図３)、図版 74 の６、図版 78 の３・７、図版 82 の２、図版 83 の５は後者となるもので、蓋内面最上部に穿孔しない。全般的に考えて、セットとなる身の陶製有頸甕形蔵骨器のサイズが小形となる資料については､鉢形蓋の内面最上部に穿孔しないものがあると推測される｡図版 74 の 10 は、蓋内面の最上部に穿孔はするが、ツマミ内部に中空となる部分はないようである。第 11 号墓の墓庭より検出された鉢形蓋となる 16～25 号蔵骨器(部分的に欠失した破片資料)では、16・17・20・23・25 号蔵骨器の計５点で蓋内面の最上部に穿孔していることが確認できた。残りの計５点に関しては、ツマミ欠失のため穿孔の有無は不明である。

鉢形蓋のツマミの形態には、いくつかのバリエーションが見られる。２つに大別すると、ツマミの下部で括れ、上部で幅が広がるもの(凡例模式図(７)の１・２等)と、円盤状のツマミを蓋体部上に基台状に設けるもの(凡例模式図(７)の３)がある。また、前者は、ツマミ上部の幅が最大となる部分の断面形がU字状に弧を描くもの(凡例模式図(７)の１等)と、ツマミ上部の幅が最大となる部分で強い綾を有するもの(凡例模式図(７)の２等)に細分される。後者(凡例模式図(７)の３)は、基本的にサイズが小形となる資料に見られる形態である。

第４表に、今回得られた鉢形蓋の計測値を示した。ツマミの下部が括れ、ツマミ上部で幅が広がる鉢形蓋(凡例模式図(７)の１・２等)の計測位置については凡例模式図(12)の１を、円盤状のツマミを蓋体部上に基台状に設ける鉢形蓋(凡例模式図(７)の３)の計測位置に関しては凡例模式図(12)の３をご覧いただきたい。前者はａ～ｅとなる計測値を、後者はａ～ｃとなる計測値を第４表に示した。

Ｂ　陶製無頸甕形蔵骨器

第 62 図２。図版 78 の６、6-1、6-2。

陶製無頸甕形蔵骨器(以下、「無頸甕形」と略す)の部分名称については、凡例模式図(11)の１をご覧いただきたい。

今回の調査では、無頸甕形となる資料は、小片資料を除けば第８号墓７号蔵骨器の身１基のみである。正面示形の形態は、平葺形となる(註７)。セットとなる蓋の形態は、鉢形蓋である(第 62 図１、図版 78 の５)。

第４表に、今回得られた無頸甕形(第８号墓７号蔵骨器(身))の計測値を示した。計測値のａは、口径である。計測値ｂは、器高である。計測値ｃは、底径である。計測値ｄは、最大胴径である。計測値ａ～ｄの各々の計測位置については、凡例模式図(12)の６をご覧いただきたい。

Ｃ　陶製有頸甕形蔵骨器

第 62 図４・６、第 63 図２・４・６・８、第 64 図２・４・５、第 65 図２・４、第 72～84 図。図版 70 の３・５・７・９・11・13、図版 71 の２・４・６・８、図版 72 の１・３・４・５、図版 73、図版 74 の１・３・５・７・９・11・13、図版 78 の４・８、図版 82 の１・４・５・６、図版 83 の６・９。

ここで述べる陶製有頸甕形蔵骨器(以下、「有頸甕形」と略す)とは、マンガン掛け厨子甕に限るものである。

有頸甕形の器外面を、凡例模式図(９)の２に示すようにⅠ～Ⅴの５つに区分した。外面Ⅰは口縁部から頸部へかけて、外面Ⅱは肩部、外面Ⅲは胴部、外面Ⅳは胴下部、外面Ⅴは底部にほぼ相当する。そのうち、施文されるのは外面Ⅰ～Ⅳが主体で、外面Ⅴは概ね無文である。ただし、外面Ⅴには、孔を穿つものがある(外面Ⅴ孔)。

有頸甕形の部分名称については、凡例模式図(９)の１をご覧いただきたい(註８)。口縁外面上端に廻らされる沈線を「横帯１」、頸部と肩部との境に廻らされる突帯(沈線)を「横帯２」、肩部と胴部との境に廻らされる沈線(突帯)を「横帯３」、胴下部に廻らされる沈線(突帯)を「横帯４」と呼称する。そして、横帯２と横帯３の間となる施文部位を「肩部文様帯」、横帯３と横帯４の間となる施文部位を「胴部文様帯」、横帯４の下の施文部位を「胴下部文様帯」とする。凡例模式図(９)の２に示した外面Ⅰには横帯１と横帯２、外面Ⅱには肩部文様帯と横帯３、外面Ⅲには胴部文様帯、外面Ⅳには横帯４と胴下部文様帯が含まれる。

今回得られた有頸甕形では、横帯３・４がともに沈線となる資料が主体で、横帯３が突帯、横帯４が沈線となるものは少量である。横帯３・４がともに突帯となることが明確なものは、第 11 号墓の墓庭から検出された部分的に欠失した破片資料である 30 号蔵骨器の１基のみである。

今回の調査で得られた有頸甕形の正面示形の形態は、浮文となるもの、沈線で表現するもの、正面孔のみのもの、正面示形及び正面孔がないもの(蔵骨器に正面がないもの)の４つに大別される。正面示形が浮文となるものは、凡例模式図(10)に示すように、さらに４つに細分される。

有頸甕形となる各資料の肩部文様帯及び胴部文様帯に施された沈線文を、第 72～84 図に図示した。肩部の沈線文は、植物の花や葉等をモチーフにすると推測される様式化したものが主体である。連弁の表現を含むものであろうか。また、モチーフ不明のデザイン調の沈線文もある。第 73 図４、第 76 図４、第 77 図１・５、第 78 図１・２は、蓮の葉の側面観を表現するものと推測される。第 77 図２は、この種の文様を簡略化させたものであろう。第 76 図１は、一見山林を表現しているように見えるが、実際は上記の蓮の葉文が崩れたものであろうか。

胴部の沈線文は、基本的に蓮の花や葉等を表現するものが主体であると考えられる。ただし、第 83 図１のように、胴部に格子状の沈線文を施すものもある。第 82 図４は、植物の葉を表現したものであろうか。第 83 図４は、肩部に施される沈線文に類似するものがあり、モチーフが判然としない。

第４号墓の７号蔵骨器と第５号墓の５号蔵骨器は、その肩部文様(第 73 図１・第 74 図３)と胴部文様(第 80 図１・第 81 図３)の構成が類似しており、同一人物によって施文された可能性が考えられる。両資料の器形の特徴も、よく一致する。この２基は、同一の工房で製作されたことが推測される。第４号墓７号蔵骨器の鉢形蓋に記載されたミガチ(銘書)の洗骨実施年は 1937(昭和 12)年で、第５号墓５号蔵骨器の鉢形蓋に記載されたミガチの洗骨実施年は 1922(大正 11)年であった。ただし、第４号墓７号蔵骨器の鉢形蓋には、消されたミガチがあった。一度使用した蔵骨器を、再利用した可能性が考えられる。

第４表に、今回得られた有頸甕形の計測値を示した。計測値のａは、口径(外径)である。計測値ｂは、最小頸径である。計測値ｃは、器高である。計測値ｄは、底径である。計測値ｅは、最大胴径である。計測値ａ～ｅの各々の計測位置については、凡例模式図(12)の７をご覧いただきたい。

D　陶製軒付甕形蔵骨器

第65図５・６、第66～68図。図版71の９、図版72の２、図版77、図版78の１・２・９・10。

陶製軒付甕形蔵骨器(以下、「軒付甕形」と略す)の蓋の部分名称については、凡例模式図(８)をご覧いただきたい。

軒付甕形の蓋は、鉢形蓋の体部に軒の造形を施したような器形である。軒付甕形(蓋)の軒の造形については、基台と軒部との間に体部文様帯を設けるもの(凡例模式図(８)の２)と、基台直下まで軒となるもの(体部文様帯がないもの)（凡例模式図(８)の１)の２つに大別される。図版77の１(第68図３)、図版78の１(第68図１)は前者となるもので、図版77の３(第67図１)、図版78の９(第66図１)は後者となる。ただし、図版77の１(第68図３)の体部文様帯は、無文である。

図版77の１(第68図３)、図版77の３(第67図１)、図版78の９(第66図１)は、軒直下の縁部に穿孔する(縁部孔)。図版78の１(第68図１)は、縁部孔がない。

第４表に、今回得られた軒付甕形(蓋)の計測値を示した。計測値のａは、ツマミの最大径である。計測値ｂは、ツマミ高である。計測値ｃは、基台１段目の直径である。計測値ｄは、器高である。計測値ｅは、蓋の最大幅である。計測値ａ～ｅの各々の計測位置については、凡例模式図(12)の２をご覧いただきたい。

軒付甕形の身の部分名称については、凡例模式図(11)の２をご覧いただきたい。口縁外面上端に廻らされる沈線を「横帯１」、頸部と肩部(または軒)との境に廻らされる突帯を「横帯２」、軒直下に廻らされる突帯を「横帯３」、胴下部に廻らされる突帯を「横帯４」と呼称する。そして、横帯１と横帯２の間となる施文部位を「口縁部文様帯」、横帯２と軒の間となる施文部位を「肩部文様帯」、横帯３と横帯４の間となる施文部位を「胴部文様帯」、横帯４の下の施文部位を「胴下部文様帯」とする。

軒付甕形の身は、有頸甕形の胴上部に軒の造形を廻らしたような器形となる。器形や施文手法等については有頸甕形と共通する部分もあるが、有頸甕形に比べ器外面の装飾が全体的に華美となり、型抜きした貼付文を多用する傾向が見られる。また、加飾方法が多様で、文様構成の細部に関しては個体毎の共通性を見出しにくい部分もある。

今回得られた軒付甕形(身)の正面示形の形態は、全て浮文となる。有頸甕形の正面示形の形態によく似たものがあり、図版78の10(第66図２)の正面示形は瓦屋形に、図版77の２(第68図４)のものは位牌形、図版78の２(第68図２)は唐破風形２に近似する(註９)。

基本的に横帯１は沈線、横帯３・４・５は突帯となるが、図版78の２(第68図２)は横帯３となる突帯がなく、施文されない。

軒付甕形の身は、横帯２と軒の間に肩部文様帯を有するものと、横帯２の直下まで軒となるもの(肩部文様帯がないもの)の２つに大別される。今回得られた資料では、後者となるものは図版78の10(第66 図２)の１基のみで、他は全て前者となる。また、前者には、肩部文様帯の幅が狭いもの(図版 71の９(第65図５)、図版77の２(第68図４))と、広いもの(図版72の２(第65図６)、図版77の４(第67図２)、図版78の２(第68図２))がある。このような特徴は、製作年代の時期差を示すものである可能性が考えられる。

軒付甕形(身)の軒の上面観は、その縁がなす概形が通常円形となるが、第８号墓の３号蔵骨器(身)では六角形となっている(図版77の4-1(第67図２ｂ))。

第４表に、今回得られた軒付甕形(身)の計測値を示した。計測値のａは、口径(外径)である。計測

値ｂは、最小頸径である。計測値ｃは、器高である。計測値ｄは、底径である。計測値ｅは、最大胴径である。計測値ｆは、棟頭を除く軒部分の幅である。計測値ａ～ｆの各々の計測位置については、凡例模式図(13)の１をご覧いただきたい。

Ｅ　陶製家形蔵骨器

第 69・70 図。図版 75・76・79～81。

図版 76 の１・２(第 69 図)は、赤焼御殿型厨子甕となる資料である。図版 80 の３・４は、上焼本御殿型厨子甕である。図版 75 の１・２、図版 76 の３・４、図版 79、図版 80 の１・２、図版 81 の１・２(第 70 図)、図版 81 の３・４の計７基は、上焼ツノ型厨子甕となる資料である。図版 75 の３・４は、上焼コバルト掛け厨子甕と考えられる。

赤焼御殿型厨子甕の蓋となる図版 76 の１(第 69 図１)は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。蓋頂部の左右端には鯱１対が向かい合って配され、それよりやや下位の屋根上に獅子頭を蓋の前後に２つずつ配する。身となる図版 76 の２(第 69 図２)は、正面示形の左右に法師像を各１つ貼付し、左右両側面の中央にも各１つの法師像を配する。かなり剥落しているが、蓋・身の外面には白土(石灰？)を施す。胎土には、多量の籾殻が混入されている。

上焼本御殿型厨子甕の蓋となる図版 80 の３は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。蓋頂部の左右端に鯱１対が向かい合って配され、正面頂部には龍頭が置かれる。上下二層となる軒の各棟頭には、獅子頭が貼付される。下層軒下面から外面全体へ白化粧が施され、外面には呉須・飴釉を施し彩色する。外面全体に、透明釉を施すと推測される。蓋内面全体には、褐釉が施される。身となる図版 80 の４は、胴上部四面に軒の造形を施す。正面では、唐破風の造形となる。内面全体から外面へかけて白化粧を施す。外面は呉須・飴釉で彩色し、正面示形の内側を除く外面全体に透明釉を施すと推測される。内面には、内底面を除く前後左右の四面に褐釉を施す。外底面にも、褐釉を施すものか。判然としない。

上焼ツノ型厨子甕となる計７基の蓋は、いずれも軒が上下二層となる屋根形を呈する。図版 81 の１(第 70 図１)以外は、蓋頂部の左右端に鯱１対が向かい合って配され、正面頂部に龍頭を置く。図版 81 の１(第 70 図１)に関しては、蓋頂部の左右端に鯱ではなく龍頭１対が向かい合って配される。

今回得られた上焼ツノ型厨子甕となる資料に関しては、その造形や施釉方法にある程度の個体差が見られた。いずれの資料も、蓋に重ね焼きのための器台(ツノ３つ一組)を複数設けるが、正面側には器台を設けないもの(図版 81 の１(第 70 図１))や、正面側の龍頭上も含めて蓋上部の前後に６組の器台を設けるもの(図版 79 の１、図版 81 の３)、下層軒の棟頭だけでなく軒上にも複数の器台を設けるもの(図版 79 の１)等、器台の設置位置や数に関して個体毎に違いが見られた。また、いずれの資料も、身の内面全体から外面へかけて白化粧を施すことは共通するようであるが、外面に緑釉や褐釉を施すのみで全体に透明釉は施さないと推測されるもの(図版 80 の１・２、図版 81 の３・４)や、内面に褐釉を施さないもの(図版 76 の４、図版 79 の４)などがあった。その他、身の胴上部に軒の造形を有するものと、軒のないものがあった。

上焼コバルト掛け厨子甕の蓋となる図版 75 の３は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。蓋頂部の左右端に鯱１対が向かい合って配され、その間に獅子を置く。上層軒上の左右端に、各々火炎宝珠(？)の造形を施す。下層軒上の正面側棟頭にだけ、獅子を１対向かい合わせて配す。蓋の外面全体から内

面下部まで、白化粧を施す。ほぼ外面全体にコバルトを施し、部分的に飴釉を施釉する。外面全体に、透明釉を施すようである。身(図版 75 の４)については、その胴上部に軒の造形を施さない。身は、内面全体から外面へかけて白化粧を施す。内面には、褐釉(飴釉)を施さず、白化粧のみである。外面には、正面示形の内側を除く大部分にコバルトを施し、部分的に飴釉を施釉する。外面全体に、透明釉を施すようである。外底面は、白化粧もされず、露胎である。蓋・身の外面に施されるコバルトは色調が暗く、インクブルー(マンセル値 7.1ＰＢ2.4/6.6)に近い色調である。

第４表に、今回得られた陶製家形蔵骨器の計測値を示した。陶製家形蔵骨器の蓋について、計測値ａは器高、計測値ｂは方形となる蓋下面の正面(背面)側(長辺)の長さ、計測値ｃは方形となる蓋下面の側面側(短辺)の長さである。計測値ａ～ｃの各々の計測位置については、凡例模式図(13)の５をご覧いただきたい。

陶製家形蔵骨器の身に関して、計測値ａは方形となる口縁上面の正面(背面)側(長辺)の長さ、計測値ｂは方形となる口縁上面の側面側(短辺)の長さ、計測値ｃは器高、計測値ｄは方形となる外底面の正面(背面)側(長辺)の長さ、計測値ｅは方形となる外底面の側面側(短辺)の長さである。計測値ａ～ｅの各々の計測位置については、凡例模式図(13)の６をご覧いただきたい。

Ｆ　火葬用蔵骨器

第 71 図。図版 83 の１～４・７・10、図版 84。

沖縄県で火葬が普及したのは、1950 年代から 1960 年代へかけての時期であるという(註 10)。火葬した被葬者の遺骨を納めるために製作されたと考えられる蔵骨器は、基本的に蓋・身に穿孔せず、サイズが小さい。本土産と推測される製品と沖縄産陶器となるものがある。沖縄産陶器となる資料は、身の器形が甕形になるものと、蓋・身全体の形状が家形となるものに分けられる。

図版 84 の５・６は、本土産現代磁器となる資料と考えられる。蓋上部の断面形は、弧状となる。身は、筒形である。第７号墓の９号蔵骨器(図版 33)が、これと全く同種の製品となっており、平成９(1997)年の日付を有していた。

沖縄産陶器の甕形となる資料は、図版 83 の１・２(第 71 図１・２)、図版 83 の３・４(第 71 図３・４)、図版 83 の７、図版 84 の１・２がある。

蓋となる図版 83 の１(第 71 図１)は、ツマミ頂部から蓋内面へかけて穿孔している。孔の直径は、約４㎜である。蓋縁部下面内端に、滑り止めとなるキを有する。内面から縁部下面へかけて、白土を施している。身となる図版 83 の２(第 71 図２)の正面示形は、有頸甕形の正面示形である唐破風形２(凡例模式図(10))とほぼ同形である。正面示形の下端となる位置で、器面に沈線１条を廻らす。内面と正面示形の内側に、白土を施す。本来は、外器面に塗料を施していたようで、一部に紺色の塗料が僅かに残存する。蓋に穿孔するが、そのサイズや身に穿孔しないこと、外面に塗料を施すことなどから、図版 83 の１・２(第 71 図１・２)を火葬用蔵骨器として判断した。

蓋となる図版 83 の３(第 71 図３)は、ツマミがなく、上部の断面形が弧状を呈する。縁部下面内端に、滑り止めとなるキを有する。蓋上面に狼色(マンセル値 7.7ＰＢ２/9.7)の釉薬を施釉し、内面から縁部下面へかけては露胎である。身となる図版 83 の４(第 71 図４)の正面示形は、屋根上に棟飾のない唐破風形となる(凡例模式図(10)の唐破風形１を参照)。口縁部に直径 15 ㎜程の円形貼付文を４つ配していたと推測されるが、１つは欠失している。正面示形の直上に、突帯を廻らす。施釉のため判

然としないが、正面示形の下端に細い沈線を１条廻らすようである。本資料のこれらの特徴は、本来、陶製軒付甕形蔵骨器の模倣に淵源すると推測される(註 11)。器外面に蓋と同じく狼色の釉薬を施し、内面から口唇面へかけてと正面示形の内側、外底面は露胎となる。

身となる図版 83 の７と図版 84 の１は、ほぼ同種の製品である。正面示形は、有頸甕形の唐破風形１に近似する(凡例模式図(10)参照)。正面示形の上下端には、各々数条の沈線を器面に廻らす。内面から口唇面へかけてと正面示形の内側に、白土を施す。胴部に、塗料で蓮の花や葉の文様を施していたようである。外面には、紺色の塗料が部分的に残存している。外底面は円形に削られ、低い高台状となる。

器形や施文状況から、図版 83 の１(第 71 図１)は鉢形蓋を、図版 83 の２(第 71 図２)や図版 83 の７、図版 84 の１は有頸甕形を模して製作している可能性が考えられる。

図版 83 の 10 は、外底面及び底部側面に穿孔している。しかし、蔵骨器のサイズがかなり小さく、外面が塗料によって彩色されることなどから、甕形の火葬用蔵骨器ではないかと推測される。正面示形は、有頸甕形のアーチ形と同形である(凡例模式図(10)参照)。外面から外底面へかけて、黒色に近い色調の塗料を施す。胴部に蓮の花や葉、茎等を沈線で表現し、その上から金色、銀色、緑色等の塗料で彩色している。正面示形には金色、その内側には銀色の塗料を施す。

図版 84 の２は、正面示形がない。胴部が膨らみ、頸部外面の断面形が直線的で、その器壁はほぼ直立し、口縁部がＬ字状に屈曲する。口縁内面から外底面へかけて、黒色に近い色調の塗料を施す。肩部から胴部へかけて、緑色、金色等の塗料で彩色する(蓮の花や葉を表現するか)。

沖縄産陶器の家形となる資料は、図版 84 の３・４である。蓋となる図版 84 の３は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。欠失してはいるが、蓋頂部の左右端に、鯱１対が向かい合って配されていたと推測される。正面頂部には、獅子を置く。外面全体には、紺色(マンセル値 7.4ＰＢ2.3/6.5)の塗料を施し、金色、銀色、緑色等の塗料で彩色している。身となる図版 84 の４の正面示形は、有頸甕形の唐破風形１と同形になるものであろうか(凡例模式図(10)参照)。外面には、蓋と同様の紺色の塗料を施す。正面及び左右側面に蓮の花や葉、法師像の貼付文を施し、その上に金色、銀色、緑色等の塗料を施して彩色する。

その器形や施文状況から、沖縄産の火葬用家形蔵骨器は、陶製家形蔵骨器を模していると推測される。

図版 83 の１・２(第 71 図１・２)や図版 83 の７、図版 84 の１～４等の沖縄産陶器となる火葬用蔵骨器は、施釉されないことから沖縄産無釉陶器に分類すべき資料と考えられる。ただ、図版 83 の１・２(第 71 図１・２)や図版 83 の７、図版 84 の１等は、素地土の質感が沖縄産陶質土器(アカムヌー)に近似しており、低火度焼成の製品である可能性がある。

第４表に、今回得られた火葬用蔵骨器の計測値を示した。各資料の計測値の計測位置については、凡例模式図(12)の４・５、凡例模式図(13)の２～６、凡例模式図(14)の４をご覧いただきたい。

G　転用蔵骨器

図版 83 の８。

今回の調査にて、転用蔵骨器が１点のみ得られている。図版 83 の８は、油甕を蔵骨器に転用したものである。第 11 号墓の２号蔵骨器となるもので、墓所有者による被葬者の遺骨移転作業に立会った際、

内部に焼かれた遺骨が納められているのを確認した。火葬した被葬者の遺骨を納めたものであろうか。

《注》

1　たとえば、金武正紀「第Ⅴ章第１節 蔵骨器」（那覇市教育委員会『銘苅古墓群（Ⅰ）』1998 年３月）等。なお、金武氏は、後に陶製有頸甕形蔵骨器から陶製外反甕形蔵骨器を設定し分離しているが（金武正紀「第６章 考古学から見た銘苅古墓群」那覇市教育委員会『銘苅古墓群 ― 重要遺跡確認調査報告』2007 年３月）、ここでは当初の陶製有頸甕形蔵骨器の分類概念に従う。

2　上江洲均「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書 1980 年、上江洲均「第五章 沖縄の厨子甕」神奈川大学日本常民文化研究所（編）『日本常民文化研究所調査報告第８集 紀年銘（年号のある）民具・農具調査等 ― 西日本』1981 年

3　上江洲均「沖縄の厨子甕」（『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書 1980 年）、金武正紀「第Ⅴ章第１節 蔵骨器」（那覇市教育委員会『銘苅古墓群（Ⅰ）』1998 年３月）等

4　沖縄県立埋蔵文化財センター『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』2001 年 12 月、西銘章「厨子研究における方法論の検討（１） ― 久米島ヤッチのガマ資料の検討」（沖縄国際大学大学院地域文化研究科『地域文化論叢』第６号 2004 年）等

5　安里進・新里まゆみ「第一部 比嘉門中墓の家族史 ― 家族の数だけ歴史がある」浦添市教育委員会『比嘉門中墓の家族史・比嘉門中墓の調査概要』2006 年３月

6　浦添市教育委員会『伊祖の入め御拝領墓』1996 年３月、浦添市教育委員会『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者 ― 近世墓の考古学的調査による家族復元』1997 年３月

7　安里進・新里まゆみ「第一部 比嘉門中墓の家族史 ― 家族の数だけ歴史がある」浦添市教育委員会『比嘉門中墓の家族史・比嘉門中墓の調査概要』2006 年３月、那覇市教育委員会『首里久場川ハタマチュウ古墓群』2011 年２月

8　浦添市教育委員会『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者 ― 近世墓の考古学的調査による家族復元』1997 年３月、那覇市教育委員会『首里久場川ハタマチュウ古墓群』2011 年２月

9　浦添市教育委員会『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者 ― 近世墓の考古学的調査による家族復元』1997 年３月

10　平敷令治 「火葬 かそう」 沖縄タイムス社 『沖縄大百科事典』上巻　1983 年

11　那覇市 『首里崎山古墓群』 2014 年２月

《主要参考文献》 ※註文献を除く。

1　浦添市教育委員会 『チヂフチャー古墓群調査報告書』 1985 年３月

2　沖縄県教育委員会 『イシグスク内古墓群』 1986 年３月

3　那覇市教育委員会 『銘苅古墓群（Ⅱ）』 1999 年３月

4　那覇市教育委員会 『銘苅古墓群（Ⅲ）』 2001 年３月

5　那覇市教育委員会 『首里崎山古墓群』 2001 年３月

6　浦添市教育委員会 『中城村字津覇・呉屋家の墓被葬者の家族復元 浦添城跡出土のタイ陶磁器』 2003 年３月

第4表　蔵骨器観察一覧

挿図番号 図版番号	墓番号	蔵骨器 番　号	種　別	蓋・身	正面示形	正面孔 孔形 数	計測値(mm) 凡例模式図	凡例模式図(12)・(13) a	b	c	d	e	f	銘書	備考	出土地点
図版70の1 図版85の1	2	1	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	66	22	122	120	305	－	有	ツマミ上面が、やや凹む。基台2段。キなし。	第2号墓 墓庭 表採
第62図　5 図版70の2 図版85の2	4	1	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	63	37	(83)	120	260	－	有	ツマミ上端は、ほぼ平坦。基台縁の造形が曖昧で、凹線を基部の周囲に廻らすように見える。キなし。	第4号墓 墓室内
第62図　6 第72図　1 第79図　1 図版70の3	4	1	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	方形 3	(12)の7	279	228	516	186	281	－	無	横帯2は、不明瞭な突帯となる。横帯3・4は、沈線。口縁部から胴上部へかけて、モルタルを施し、補修している。	第4号墓 墓室内
第65図　3 図版70の4 図版85の3	4	2	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の3	54	59	160	－	－	－	有	キあり。	第4号墓 墓室内
第65図　4 図版70の5	4	2	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	円形 3	(12)の7	167	143	295	106	159	－	無	器外面には、波状沈線と直線的な沈線を各々数条一組で交互に廻らす。外面V孔あり。	第4号墓 墓室内
第63図　1 図版70の6	4	3	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	74	32	118	139	307	－	無	ツマミ上端は、尖る。基台2段。キなし。	第4号墓 墓室内
第63図　2 第72図　2 図版70の7	4	3	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 4	(12)の7	280	259	546	194	304	－	無	横帯2・3・4は、いずれも沈線となる。胴部は、無文。外面V孔あり。	第4号墓 墓室内
第63図　5 図版70の8 図版85の4	4	4	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	57	33	102	123	283	－	有	ツマミ上端の断面形は、弧状を呈する。基台1段。キなし。	第4号墓 墓室内
第63図　6 第72図　3 第79図　2 図版70の9	4	4	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 4	(12)の7	288	251	575	198	318	－	無	横帯2は、なし。横帯3・4、ともに沈線。	第4号墓 墓室内
第62図　3 図版70の10 図版85の5	4	5	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	69	43	－	165	268	－	有	ツマミ上端は、尖る。基台なし。キあり。	第4号墓 墓室内
第62図　4 第72図　4 第79図　3 図版70の11	4	5	陶製有頸甕形蔵骨器	身	沈線文	長方形 3	(12)の7	265	259	506	208	347	－	無	横帯2・3、ともに突帯。横帯4は、沈線。素地土に、籾殻が多量に混入されている。	第4号墓 墓室内
第65図　1 図版70の12 図版85の6	4	6	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	73	51	124	174	339	－	有	ツマミ上端は、やや尖る。基台2段。キあり。	第4号墓 墓室内
第65図　2 第72図　5 第79図　4 図版70の13	4	6	陶製有頸甕形蔵骨器	身	唐破風形2	長方形 3	(12)の7	351	320	663	258	406	－	無	横帯2・3は、突帯となる。横帯4は、沈線。	第4号墓 墓室内
第64図　3 図版71の1 図版85の7	4	7	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	71	45	108	160	302	－	有	ツマミ上端の断面形は、弧状を呈する。基台1段。キなし。	第4号墓 墓室内
第64図　4 第73図　1 第80図　1 図版71の2 図版85の8	4	7	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の7	302	259	562	190	332	－	有	横帯2・3・4は、いずれも沈線となる。脚あり。3つ一組。	第4号墓 墓室内
第63図　3 図版71の3 図版86の1	4	8	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	76	59	118	172	312	－	有	ツマミ上端は、やや尖る。基台1段。キあり。	第4号墓 墓室内
第63図　4 第73図　2 第80図　2 図版71の4	4	8	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の7	285	263	570	228	340	－	無	横帯2は、突帯となる。横帯3・4、ともに沈線。外面V孔あり。	第4号墓 墓室内
第64図　1 図版71の5 図版86の2	4	9	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	64	22	96	122	286	－	有	ツマミ上面は、平坦。基台1段。キなし。	第4号墓 墓室内
第64図　2 第73図　3 第80図　3 図版71の6 図版86の3	4	9	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の7	285	244	566	183	308	－	有	横帯2は、突帯となる。横帯3・4、ともに沈線。脚あり。3つ一組。	第4号墓 墓室内
第63図　7 図版71の7 図版86の4	4	10	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	54	34	91	125	269	－	有	ツマミ上端は、ほぼ平坦となる。基台1段。キなし。	第4号墓 墓室内
第63図　8 第73図　4 第80図　4 図版71の8	4	10	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の7	278	250	505	192	300	－	無	横帯2は、突帯となる。横帯3・4、ともに沈線。	第4号墓 墓室内
第71図　1 図版83の1 図版86の5	4-1	1	火葬用蔵骨器	蓋	－	－	(12)の4	29	14	36	111	－	－	有	沖縄産。器外面に施されていた塗料が、消失している。ツマミ上端から内面へかけて、穿孔する。内面及び縁部下面に、白化粧を施す。白化粧を施した内面に、ミガチを彫り込んでいる。	第4-1号墓 墓室内
第71図　2 図版83の2	4-1	1	火葬用蔵骨器	身	唐破風形	無	(13)の3	110	166	92	119	－	－	無	沖縄産。正面示形の造形が、陶製有頸甕形蔵骨器の唐破風形2と同形である。器外面に施されていた塗料が、ほぼ消失している。穿孔なし。	第4-1号墓 墓室内
第65図　5 図版71の9	5	1	陶製軒付甕形蔵骨器	身	唐破風形	長方形 3	(13)の1	250	238	575	205	357	424	無	肩部文様帯あり。棟が、4つある。	第5号墓 墓室内
第74図　1 第81図　1 図版72の1	5	2	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 3	(12)の7	283	245	545	200	319	－	無	横帯2は、突帯となる。横帯3・4、ともに沈線。脚あり。3つ一組。	第5号墓 墓室内

※ 陶製有頸甕形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態に関しては、凡例模式図(10)をご覧いただきたい。

挿図番号 図版番号	墓番号	蔵骨器 番　号	種　別	蓋・身	正面示形	正面孔 孔形 数	計測値(mm) 凡例模式図	凡例模式図(12)・(13) a	b	c	d	e	f	銘書	備考	出土地点
第65図　6 図版72の２	5	3	陶製軒付甕形蔵骨器	身	唐破風形	長方形 3	(13)の１	368	338	670	247	420	520	無	肩部文様帯あり。棟が、正面の龍頭を除き、５つある。正面示形の造形が、陶製有頸甕形蔵骨器の唐破風形２に近似する。	第５号墓 墓室内
第74図　2 第81図　2 図版72の３	5	4	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の７	296	265	536	199	324	－	無	横帯２は、不明瞭な突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。脚あり。３つ一組。	第５号墓 墓室内
第74図　3 第81図　3 図版72の４ 図版86の６	5	5	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	アーチ形 3	(12)の７	282	248	561	175	327	－	有	横帯２は、突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。脚あり。３つ一組。	第５号墓 墓室内
第74図　4 第81図　4 図版72の５	5	6	陶製有頸甕形蔵骨器	身	唐破風形２	アーチ形 4	(12)の７	351	328	660	251	418	－	無	横帯２は、突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。	第５号墓 墓室内
第75図　1 図版73の１ 図版86の７ 図版86の7-1	5	7	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	無	(12)の７	177	143	277	100	155	－	有	器外面に、２条一組の縦位沈線や波状沈線、直線的な沈線等を廻らす。胴部外面に、「①」状の墨書あり。外面Ｖ孔あり。	第５号墓 墓室内
第75図　2 第82図　1 図版73の２	5	8	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の７	256	234	488	177	300	－	無	横帯２・３、ともに突帯。横帯４は、沈線。脚あり。３つ一組。	第５号墓 墓室内
第75図　3 第82図　2 図版73の３	5	9	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 3	(12)の７	263	242	535	196	316	－	無	横帯２は、不明瞭な突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。脚あり。３つ一組。	第５号墓 墓室内
第75図　4 第82図　3 図版73の４	5	10	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の７	253	234	545	205	305	－	無	横帯２は、突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。脚あり。３つ一組。	第５号墓 墓室内
第64図　5 第76図　1 第82図　4 図版73の５	5	11	陶製有頸甕形蔵骨器	身	花形	円形 4	(12)の７	333	296	710	240	369	－	無	横帯２・３・４は、いずれも沈線となる。外面Ｖ孔あり。	第５号墓 墓室内
第76図　2 第83図　1 図版73の６	5	12	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 1	(12)の７	175	159	370	123	211	－	無	横帯２は、突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。	第５号墓 墓室内
第76図　3 第83図　2 図版74の１ 図版86の８	5	13	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 3	(12)の７	301	264	558	200	322	－	有	横帯２・３・４は、いずれも沈線となる。脚あり。３つ一組。	第５号墓 墓室内
図版74の２ 図版86の９	6	1	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	75	23	96	134	322	－	有	ツマミ上面は、平坦。基台２段。キなし。	第６号墓 墓室内
第76図　4 第83図　3 図版74の３	6	1	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 3	(12)の７	292	258	573	203	310	－	無	横帯２・３・４は、いずれも沈線となる。外面Ｖ孔あり。	第６号墓 墓室内
図版75の１ 図版87の１	7	1	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	－	－	(13)の５	(437)	488	376	－	－	－	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第７号墓 墓室内
図版75の２	7	1	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	唐破風形	円形 2	(13)の６	480	366	444	395	290	－	無	胴上部に、軒の造形を有しない。	第７号墓 墓室内
図版74の４ 図版87の２	7	2	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	66	20	113	104	300	－	有	ツマミ上面は、平坦。基台２段。キなし。	第７号墓 墓室内
第77図　1 図版74の５ 図版87の３	7	2	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 3	(12)の７	288	250	574	210	293	－	有	横帯２は、なし。横帯３・４、ともに沈線。外面Ｖ孔あり。	第７号墓 墓室内
図版75の３ 図版87の４	7	3	陶製家形蔵骨器 (上焼コバルト掛け厨子甕)	蓋	－	－	(13)の５	390	331	292	－	－	－	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第７号墓 墓室内
図版75の４	7	3	陶製家形蔵骨器 (上焼コバルト掛け厨子甕)	身	破風形	円形 2	(13)の６	332	292	437	240	220	－	無	胴上部に、軒の造形を有しない。	第７号墓 墓室内
図版74の６ 図版87の５	7	4	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	50	17	80	72	197	－	有	ツマミ上面は、ほぼ平坦。基台１段。キなし。	第７号墓 墓室内
第77図　2 図版74の７	7	4	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	円形 1	(12)の７	200	174	315	110	181	－	無	横帯２は、不明瞭な突帯。横帯３・４、ともに沈線。胴部は、無文。	第７号墓 墓室内
図版74の８ 図版87の６	7	5	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	47	25	67	82	178	－	有	ツマミ上端の断面形は、弧状を呈する。基台１段。キあり。	第７号墓 墓室内
第77図　3 第83図　4 図版74の９	7	5	陶製有頸甕形蔵骨器	身	沈線文	長方形 1	(12)の７	178	155	304	103	194	－	無	横帯２は、突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。	第７号墓 墓室内
図版74の10 図版87の７	7	6	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	54	21	－	85	209	－	有	ツマミ上面の断面形は、やや弧状を呈する。基台なし。キなし。	第７号墓 墓室内
第77図　4 第84図　1 図版74の11	7	6	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 3	(12)の７	190	170	395	145	237	－	無	横帯２は、突帯となる。横帯３・４、ともに沈線。	第７号墓 墓室内
図版74の12 図版87の８	7	7	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	60	19	72	86	204	－	有	ツマミ上面の断面形は、やや弧状を呈する。基台１段。キなし。	第７号墓 墓室内
図版74の13	7	7	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	方形 3	(12)の７	197	159	275	110	178	－	無	器外面には、波状沈線と直線的な沈線を各々数条一組で交互に廻らす。外面Ｖ孔あり。	第７号墓 墓室内

※ 陶製有頸甕形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態に関しては、凡例模式図(10)をご覧いただきたい。

挿図番号 図版番号	墓番号	蔵骨器 番　号	種　別	蓋・身	正面示形	正面孔 孔形 数	計測値(mm) 凡例模式図	凡例模式図(12)・(13) a	b	c	d	e	f	銘書	備考	出土地点
第68図　3 図版77の1 図版87の9	8	1	陶製軒付甕形蔵骨器	蓋	－	－	(12)の2	74	(22)	11	(146)	336	－	有	ツマミは、欠失。基台1段。体部は、無文。棟は、3つが残存。本来は、4つであったと推測される。縁部孔あり。キあり。	第8号墓 墓室内
第68図　4 図版77の2	8	1	陶製軒付甕形蔵骨器	身	位牌形？	円形 1	(13)の1	355	332	670	240	454	533	無	肩部文様帯あり。棟が、5つある。	第8号墓 墓室内
第69図　1 図版76の1 図版88の1	8	2	陶製家形蔵骨器 (赤焼御殿型厨子甕)	蓋	－	－	(13)の5	332	480	365	－	－	－	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。本来は、器外面全体に白化粧が施されていたと推測される。胎土に、籾殻が多量に混入されている。	第8号墓 墓室内
第69図　2 図版76の2	8	2	陶製家形蔵骨器 (赤焼御殿型厨子甕)	身	唐破風形？	長方形 3	(13)の6	481	341	450	440	334	－	無	正面示形の左右、及び両側面に、各々1つずつ法師像が貼付される。本来は、器外面全体に白化粧が施されていたと推測される。胎土に、籾殻が多量に混入されている。	第8号墓 墓室内
第67図　1 図版77の3 図版88の2	8	3	陶製軒付甕形蔵骨器	蓋	－	－	(12)の2	87	77	109	201	326	－	有	ツマミ上端は、尖る。基台2段。体部文様帯なし。棟が、5つある。縁部孔あり。キあり。	第8号墓 墓室内
第67図　2 図版77の4 図版77の4-1	8	3	陶製軒付甕形蔵骨器	身	唐破風形	長方形 2	(13)の1	321	297	687	265	440	523 ～ 555	無	肩部文様帯あり。棟が、6つある。軒の上面観が、六角形となる。	第8号墓 墓室内
第68図　1 図版78の1 図版88の3	8	4	陶製軒付甕形蔵骨器	蓋	－	－	(12)の2	95	(70)	112	(205)	329	－	有	欠失のため判然としないが、ツマミ上端は尖ると推測される。基台5段。体部文様帯あり。棟は、4つある。キあり。	第8号墓 墓室内
第68図　2 図版78の2	8	4	陶製軒付甕形蔵骨器	身	唐破風形	長方形 2	(13)の1	285	272	585	225	362	446	無	肩部文様帯あり。棟が、正面の龍頭を除き、3つある。正面示形の造形が、陶製有頸甕形蔵骨器の唐破風形2と同形である。口縁部から胴部へかけて、モルタルを施し、補修している。	第8号墓 墓室内
図版78の3 図版88の4	8	5	陶製有頸甕形蔵骨器	蓋	－	－	(12)の1	51	17	111	99	246	－	有	ツマミ上面は、凹む。基台2段。キなし。	第8号墓 墓室内
第77図　5 図版78の4	8	5	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形 (方形？)	円形 3	(12)の7	242	226	423	185	263	－	無	横帯2は、なし。横帯3・4、ともに沈線。胴部は、無文。外面V孔あり。	第8号墓 墓室内
図版79の1 図版88の5	8	6	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	－	－	(13)の5	(315)	462	332	－	－	－	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第8号墓 墓室内
図版79の2 図版88の6	8	6	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	唐破風形	円形 (3)	(13)の6	458	350	433	384	279	－	有	胴上部に、軒の造形を有する。	第8号墓 墓室内
第62図　1 図版78の5 図版88の7	8	7	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の1	62	33	84	119	265	－	有	ツマミ上端の断面形は、弧状を呈する。基台2段。キあり。	第8号墓 墓室内
第62図　2 図版78の6 図版78の6-1 図版78の6-2	8	7	陶製無頸甕形蔵骨器	身	平葺形	長方形 3	(12)の6	260	470	215	338	－	－	無	第1沈線の条数は、3である。肩部に判あり。漢数字の「三」であろうか。口縁部上端に、重ね焼きの痕跡あり(第62図2ｂのアミ入れ部分)。	第8号墓 墓室内
図版78の7 図版88の8	8	8	陶製有頸甕形蔵骨器	蓋	－	－	(12)の1	50	13	112	98	243	－	有	ツマミ上面は、凹む。基台2段。キなし。	第8号墓 墓室内
第78図　1 図版78の8	8	8	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	円形 3	(12)の7	245	230	367	170	245	－	無	横帯2は、なし。横帯3・4、ともに沈線。胴部は、無文。	第8号墓 墓室内
図版76の3 図版88の9	8	9	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	－	－	(13)の5	449	461	353	－	－	－	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第8号墓 墓室内
図版76の4	8	9	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	アーチ形	円形 3	(13)の6	465	358	453	350	269	－	無	胴上部に、軒の造形を有しない。	第8号墓 墓室内
第66図　1 図版78の9 図版89の1	8	10	陶製軒付甕形蔵骨器	蓋	－	－	(12)の2	83	(79)	121	(207)	342	－	有	ツマミ上端は、尖る。基台1段。体部文様帯なし。棟は、4つある。縁部孔あり。キあり。	第8号墓 墓室内
第66図　2 図版78の10 図版89の2	8	10	陶製軒付甕形蔵骨器	身	瓦屋形	長方形 1	(13)の1	300	300	690	250	422	475	有	肩部文様帯なし。棟は、4つある。	第8号墓 墓室内
第71図　3 図版83の3 図版89の3	8-1	1	火葬用蔵骨器	蓋	－	－	(12)の5	30	139	－	－	－	－	有	沖縄産。器外面に、狼色の釉薬を施す。穿孔は、確認できない。	第8-1号墓 墓室内
第71図　4 図版83の4 図版89の4	8-1	1	火葬用蔵骨器	身	唐破風形	無	(13)の2	136	210	91	137	－	－	有	沖縄産。唐破風形となる正面示形には、屋根の上に棟飾がない。口縁部に、直径約15mmの円形の貼付文を施す(4つか)。正面示形の直上に、突帯を廻らす。器外面に、狼色の釉薬が施される。穿孔なし。	第8-1号墓 墓室内
図版83の5 図版89の5	8-1	2	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の3	50	57	164	－	－	－	有	僅かに、キあり。	第8-1号墓 墓室内
図版83の6	8-1	2	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	円形 2	(12)の7	155	129	330	110	157	－	無	胴部に、2条一組の波状沈線を螺旋状に廻らす。口縁部と胴下部は、無文。	第8-1号墓 墓室内

※ 陶製有頸甕形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態に関しては、凡例模式図(10)をご覧いただきたい。

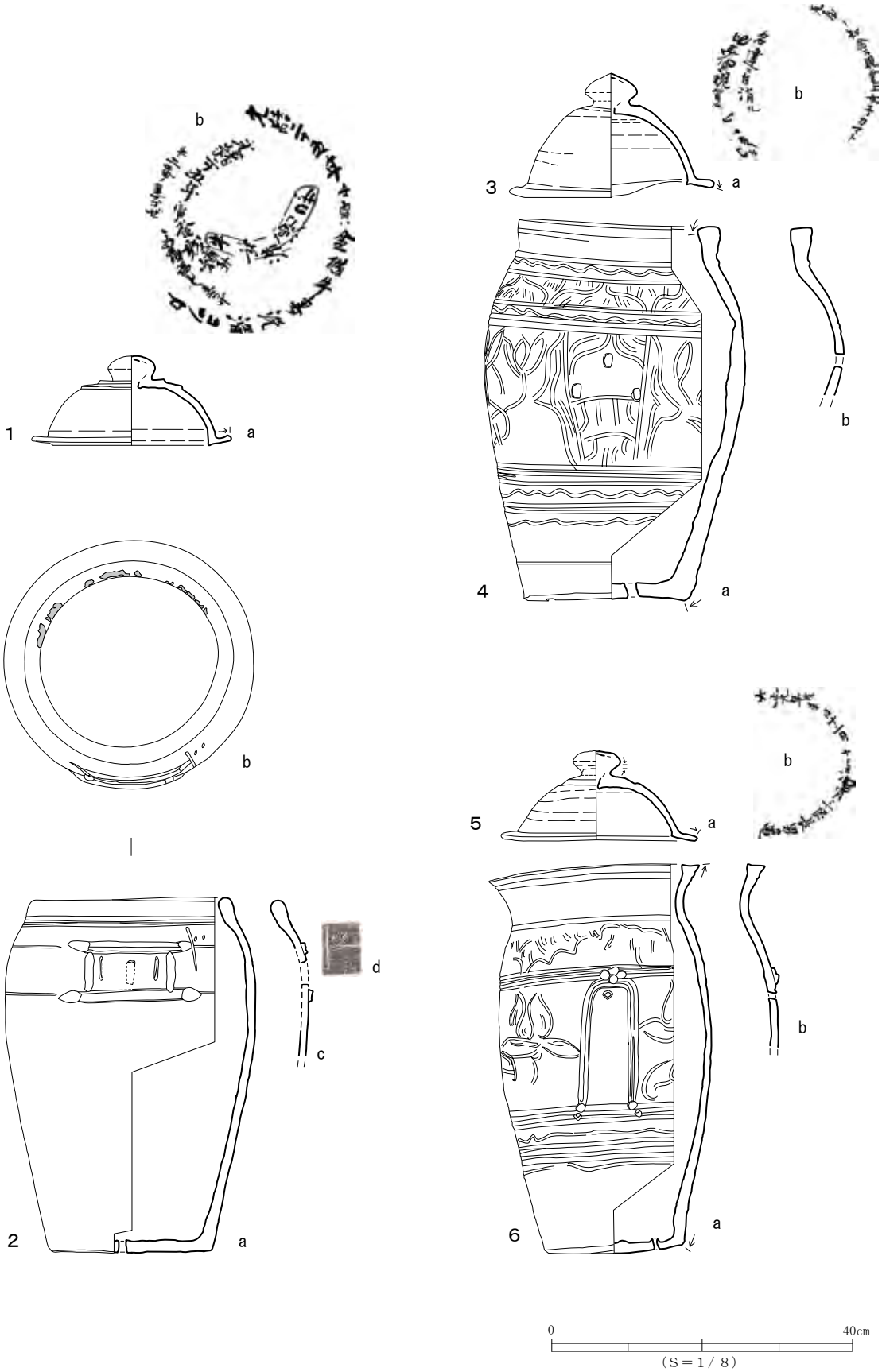
挿図番号 図版番号	墓番号	蔵骨器 番　号	種　別	蓋・身	正面示形	正面孔 孔形 数	計測値(mm) 凡例模式図	凡例模式図(12)・(13)・(14) a	b	c	d	e	f	銘書	備考	出土地点
図版79の3 図版89の6	9	1	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	−	−	(13)の5	(505)	448	338	−	−	−	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第9号墓 墓室内
図版79の4 図版89の7	9	1	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	アーチ形	円形 2	(13)の6	445	338	453	360	256	−	有	胴上部に、軒の造形を有しない。	第9号墓 墓室内
図版80の1 図版89の8	9	2	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	−	−	(13)の5	376	406	303	−	−	−	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第9号墓 墓室内
図版80の2	9	2	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	方形	円形 1	(13)の6	378	275	422	298	204	−	無	胴上部に、軒の造形を有する。	第9号墓 墓室内
図版80の3 図版89の9	9	3	陶製家形蔵骨器 (上焼本御殿型厨子甕)	蓋	−	−	(13)の5	444	484	359	−	−	−	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第9号墓 墓室内
図版80の4	9	3	陶製家形蔵骨器 (上焼本御殿型厨子甕)	身	アーチ形	長方形 2	(13)の6	481	354	448	388	300	−	無	胴上部に、軒の造形を有する。	第9号墓 墓室内
第70図　1 図版81の1 図版89の10	9	4	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	−	−	(13)の5	398	482	370	−	−	−	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。	第9号墓 墓室内
第70図　2 図版81の2	9	4	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	方形	円形 3	(13)の6	462	350	426	378	271	−	無	胴上部に、軒の造形を有する。	第9号墓 墓室内
図版81の3 図版90の1	9	5	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	蓋	−	−	(13)の5	422	479	370	−	−	−	有	全体的な造形は、軒が上下二層となる屋根形を呈する。本来は、墓室内に安置されていたものと考えられる。	第9号墓 墓庭
図版81の4	9	5	陶製家形蔵骨器 (上焼ツノ型厨子甕)	身	方形	円形 1	(13)の6	467	355	453	389	270	−	無	胴上部に、軒の造形を有する。本来は、墓室内に安置されていたものと考えられる。	第9号墓 墓庭
図版83の7 図版90の2	11	1	火葬用蔵骨器	身	唐破風形	無	(13)の3	104	143	92	119	−	−	有	沖縄産。正面示形の造形が、陶製有頸甕形蔵骨器の唐破風形1に近似する。器外面に塗布されていた塗料が、ほぼ消失している。穿孔は、確認できない。	第11号墓 墓室内
図版83の8	11	2	転用蔵骨器(油甕)	身	−	−	(14)の4	135	294	141	222	−	−	無	内部には、焼骨(火葬骨)が納められていた。	第11号墓 墓室内
第78図　2 図版82の1	11	3	陶製有頸甕形蔵骨器	身	沈線文	円形 3	(12)の7	215	199	390	157	219	−	無	横帯3は、突帯となる。横帯3・4、ともに沈線。胴部は、無文。	第11号墓 墓室内
図版83の9	11	4	陶製有頸甕形蔵骨器	身	無	円形 3	(12)の7	143	129	288	106	146	−	無	横帯1・2、いずれもなし。横帯3・4、ともに沈線。胴部には、波状沈線が廻らされる。口縁部及び胴下部、ともに無文。	第11号墓 墓室内
図版83の10 図版90の3	11	5	火葬用蔵骨器？	身	アーチ形	無	(13)の3	132	204	114	128	−	−	有	沖縄産。外面Vや底面は、穿孔されている。器外面及び外底面には、塗料が施される。	第11号墓 墓室内
図版84の1 図版90の4	11	6	火葬用蔵骨器	身	唐破風形	無	(13)の3	107	157	87	122	−	−	有	沖縄産。正面示形の造形が、陶製有頸甕形蔵骨器の唐破風形1に近似する。器外面に施されていた塗料が、消失している。穿孔なし。	第11号墓 墓室内
図版84の2	11	7	火葬用蔵骨器	身	無	無	(14)の4	148	262	112	162	−	−	無	器外面及び外底面には、塗料が施される。穿孔なし。	第11号墓 墓室内
図版82の2 図版90の5	11	14	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	50	27	−	82	200	−	有	部分的に欠失した破片資料。基台なし。ツマミ上端は、やや尖るか。基台なし。キあり。	第11号墓 墓庭
図版82の3 図版90の6	11	15	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	63	25	113	118	318	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミ上端は、平坦となる。基台1段。キなし。	第11号墓 墓庭
−	11	16	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	60	30	不明	123	276	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミ上端は、平坦となる。基台2段。僅かに、キあり。	第11号墓 墓庭
−	11	17	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	84	42	117	171	320	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミ上端は、やや尖る。基台1段。キあり。	第11号墓 墓庭
−	11	18	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	不明	不明	不明	(114)	350	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミは、欠失。基台は、2段目まで確認できる。キなし。	第11号墓 墓庭
−	11	19	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	不明	不明	不明	(131)	340	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミは、欠失。基台は、1段目まで確認できる。キあり。	第11号墓 墓庭
−	11	20	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	不明	不明	不明	(117)	304	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミ上端は、欠失。基台は、3段目まで確認できる。キあり。	第11号墓 墓庭
−	11	21	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	不明	不明	不明	(90)	341	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミは、欠失。基台の有無は、不明。キあり。	第11号墓 墓庭
−	11	22	鉢形蓋	蓋	−	−	(12)の1	不明	不明	不明	(104)	300	−	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミは、欠失。基台は、1段目まで確認できる。キあり。	第11号墓 墓庭

※ 陶製有頸甕形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態に関しては、凡例模式図(10)をご覧いただきたい。

挿図番号 図版番号	墓番号	蔵骨器 番　号	種　別	蓋・身	正面示形	正面孔 孔形 数	計測値(mm) 凡例模式図	凡例模式図(12)・(13) a	b	c	d	e	f	銘書	備考	出土地点
－	11	23	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	70	(48)	137	不明	不明	－	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミ上端は、尖るか。欠失のため、不明瞭。基台２段。キの有無は、不明。	第11号墓 墓庭
－	11	24	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	不明	不明	不明	(132)	(330)	－	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミは、欠失。基台は、１段目まで確認できる。キあり。	第11号墓 墓庭
－	11	25	鉢形蓋	蓋	－	－	(12)の１	不明	不明	92	(115)	292	－	有	部分的に欠失した破片資料。ツマミは、欠失。基台１段。キなし。	第11号墓 墓庭
第78図　3 第84図　2 図版82の４	11	26	陶製有頸甕形蔵骨器	身	不明 (唐破風形？)	不明	(12)の７	(348)	(311)	(676)	(239)	(407)	－	－	部分的に欠失した破片資料を、石膏を使用して復元した。横帯２・３は、いずれも突帯。横帯４は、沈線。	第11号墓 墓庭
第78図　4 第84図　3 図版82の５	11	27	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 (２)	(12)の７	(316)	(283)	(568)	(203)	(333)	－	－	部分的に欠失した破片資料を、石膏を使用して復元した。横帯２・３・４、いずれも沈線。外面Ｖ孔あり。脚あり。３つ一組。	第11号墓 墓庭
第78図　5 第84図　4 図版82の６	11	28	陶製有頸甕形蔵骨器	身	唐破風形１	長方形 ３	(12)の７	318	(293)	(491)	220	(368)	－	－	部分的に欠失した破片資料を、石膏を使用して復元した。横帯２・３、いずれも突帯。横帯４は、沈線。	第11号墓 墓庭
－	11	29	陶製有頸甕形蔵骨器	身	不明	不明	(12)の７	290	不明	不明	(230)	不明	－	－	部分的に欠失した破片資料。横帯２・３、いずれも突帯。横帯４は、沈線。	第11号墓 墓庭
－	11	30	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	長方形 ３	(12)の７	(280)	不明	(475)	218	不明	－	－	部分的に欠失した破片資料。横帯２・３・４、いずれも突帯。	第11号墓 墓庭
－	11	31	陶製有頸甕形蔵骨器	身	唐破風形	長方形？ (１)	(12)の７	340	不明	(663)	225	不明	－	－	部分的に欠失した破片資料。唐破風形となる正面示形が、１・２いずれになるかは不明。横帯２・３、いずれも突帯。横帯４は、沈線。	第11号墓 墓庭
－	11	32	陶製有頸甕形蔵骨器	身	唐破風形２？	アーチ形 (３)	(12)の７	(330)	不明	不明	不明	不明	－	－	部分的に欠失した破片資料。横帯２・３は、不明瞭な突帯。横帯４は、沈線。	第11号墓 墓庭
－	11	33	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形	円形 (１)	(12)の７	不明	不明	不明	200	不明	－	－	部分的に欠失した破片資料。横帯２は、突帯。横帯３・４、ともに沈線。	第11号墓 墓庭
－	11	34	陶製有頸甕形蔵骨器	身	アーチ形？	長方形？ (１)	(12)の７	201	不明	不明	122	不明	－	－	部分的に欠失した破片資料。横帯２は、突帯。横帯３・４は、ともに沈線。	第11号墓 墓庭
－	11	35	陶製有頸甕形蔵骨器	身	不明	不明	(12)の７	(250)	不明	不明	不明	不明	－	－	ほぼ口縁部のみの破片資料。横帯２は、突帯。横帯３・４については、不明。正面示形は、残存せず。	第11号墓 墓庭
－	11	36	陶製軒付甕形蔵骨器	身	唐破風形？	円形 (１)	(13)の１	281	不明	不明	220	不明	不明	－	部分的に欠失した破片資料。肩部文様帯なし。	第11号墓 墓庭
図版84の３ 図版90の７	13	1	火葬用蔵骨器	蓋	－	－	(13)の５	(203)	208	181	－	－	－	有	沖縄産。家形。部分的に欠失した破片資料。器外面には、塗料を施す。穿孔は、確認できない。	第13号墓 墓口前 表採
図版84の４ 図版90の８	13	1	火葬用蔵骨器	身	唐破風形？	無？	(13)の６	不明	175	242	158	153	－	有	沖縄産。家形。部分的に欠失した破片資料。器外面には、塗料を施す。穿孔は、確認できない。	第13号墓 墓口前 表採
図版84の５ 図版90の９	13	2	火葬用蔵骨器	蓋	－	－	(12)の５	57	222	－	－	－	－	有	本土産。磁器。部分的に欠失した破片資料。	第13号墓 墓口前 表採
図版84の６ 図版90の10	13	2	火葬用蔵骨器	身	位牌形？	無	(13)の４	205	207	206	－	－	－	有	本土産。磁器。円筒形。部分的に欠失した破片資料。	第13号墓 墓口前 表採

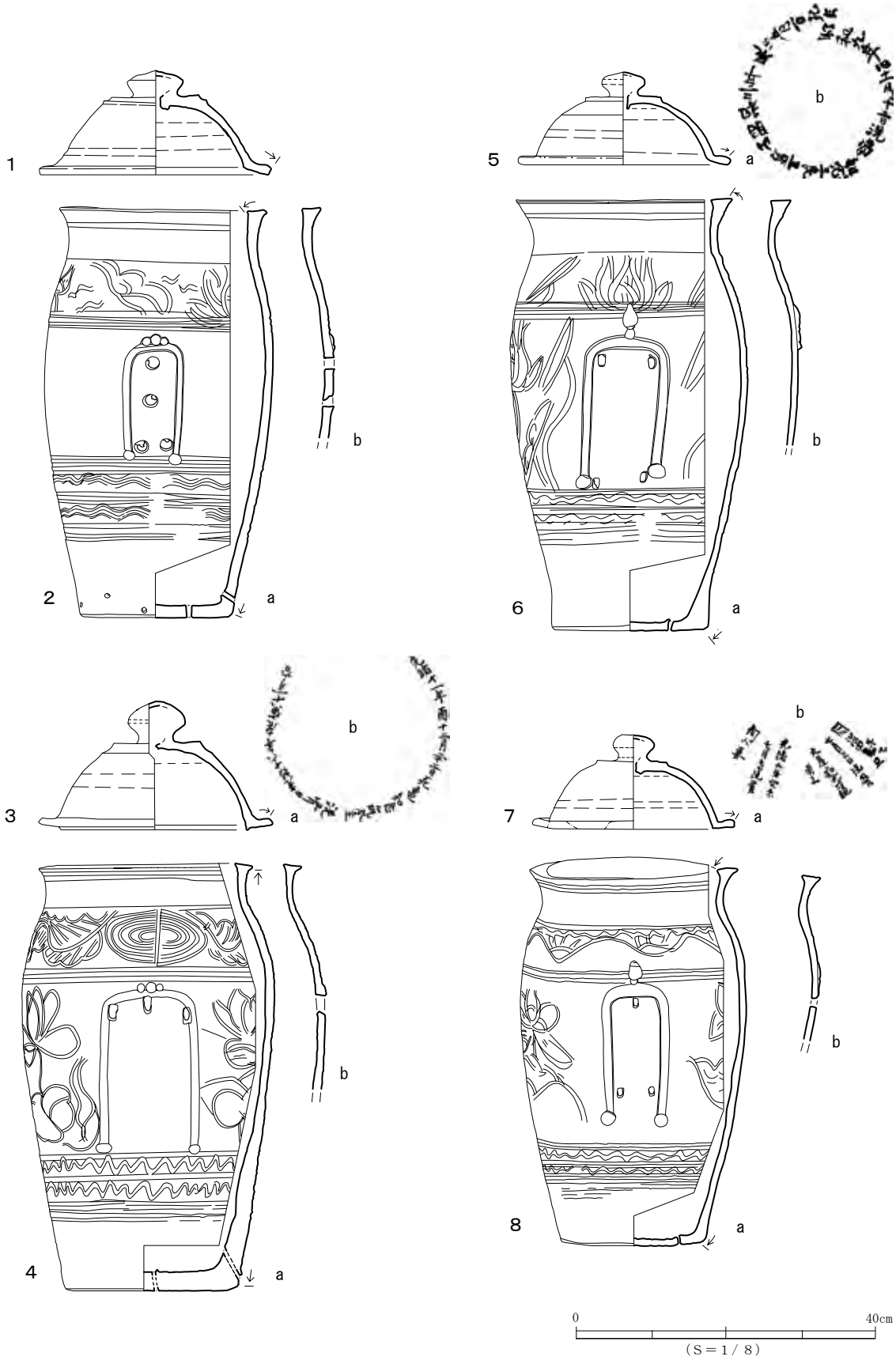
※ 陶製有頸甕形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態に関しては、凡例模式図(10)をご覧いただきたい。

1（図版 78 の５・図版 88 の７）　2（図版 78 の６・６－１・６－２）　3（図版 70 の10・図版 85 の５）
4（図版 70 の11）　5（図版 70 の２・図版 85 の２）　6（図版 70 の３）



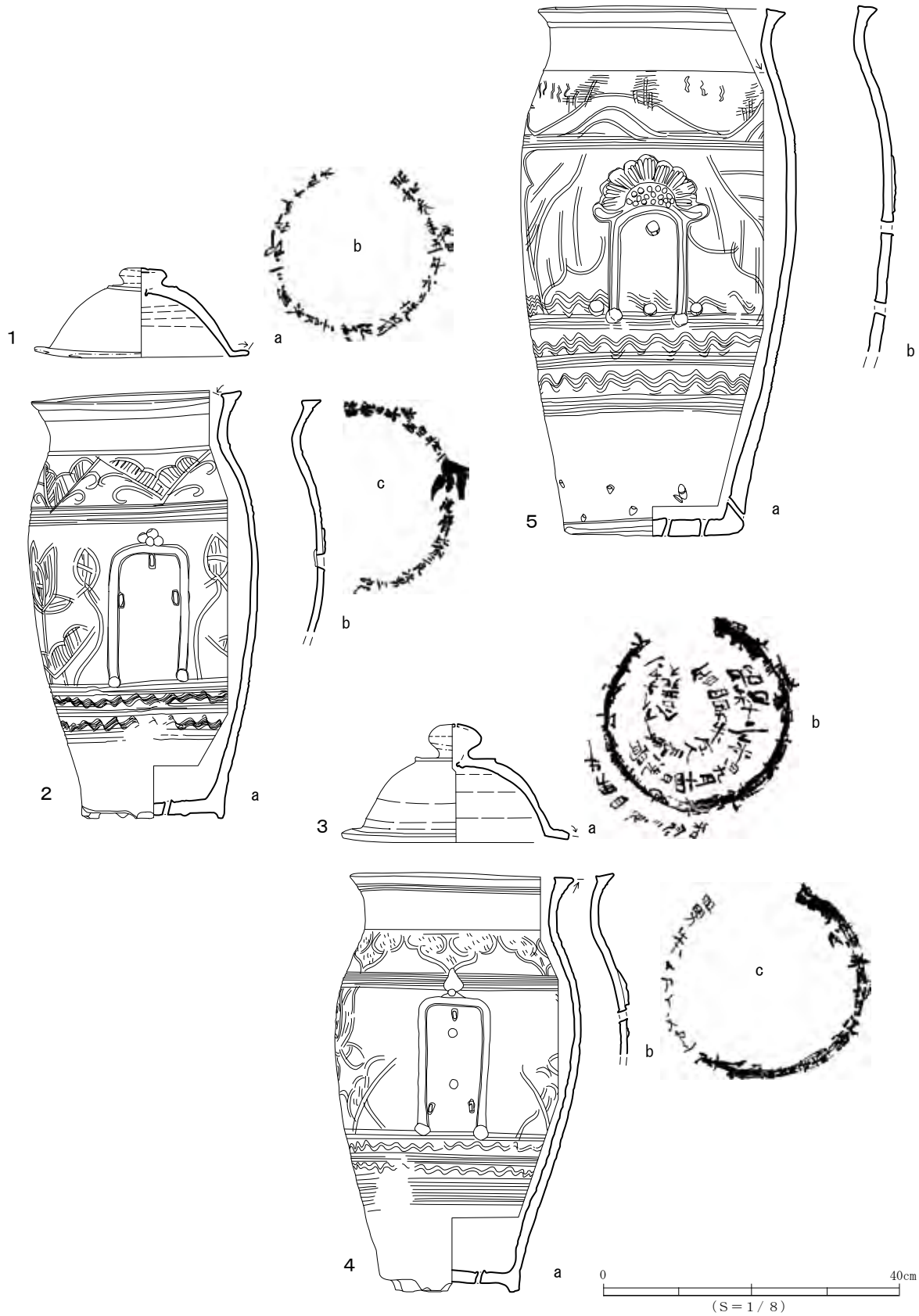
第 62 図　鉢形蓋（１・３・５）
陶製無頸甕形蔵骨器（２）
陶製有頸甕形蔵骨器（４・６）

1（図版 70の６） 2（図版 70の７） 3（図版 71の３・図版 86の１） 4（図版 71の４）
5（図版 70の８・図版 85の４） 6（図版 70の９） 7（図版 71の７・図版 86の４） 8（図版 71の８）



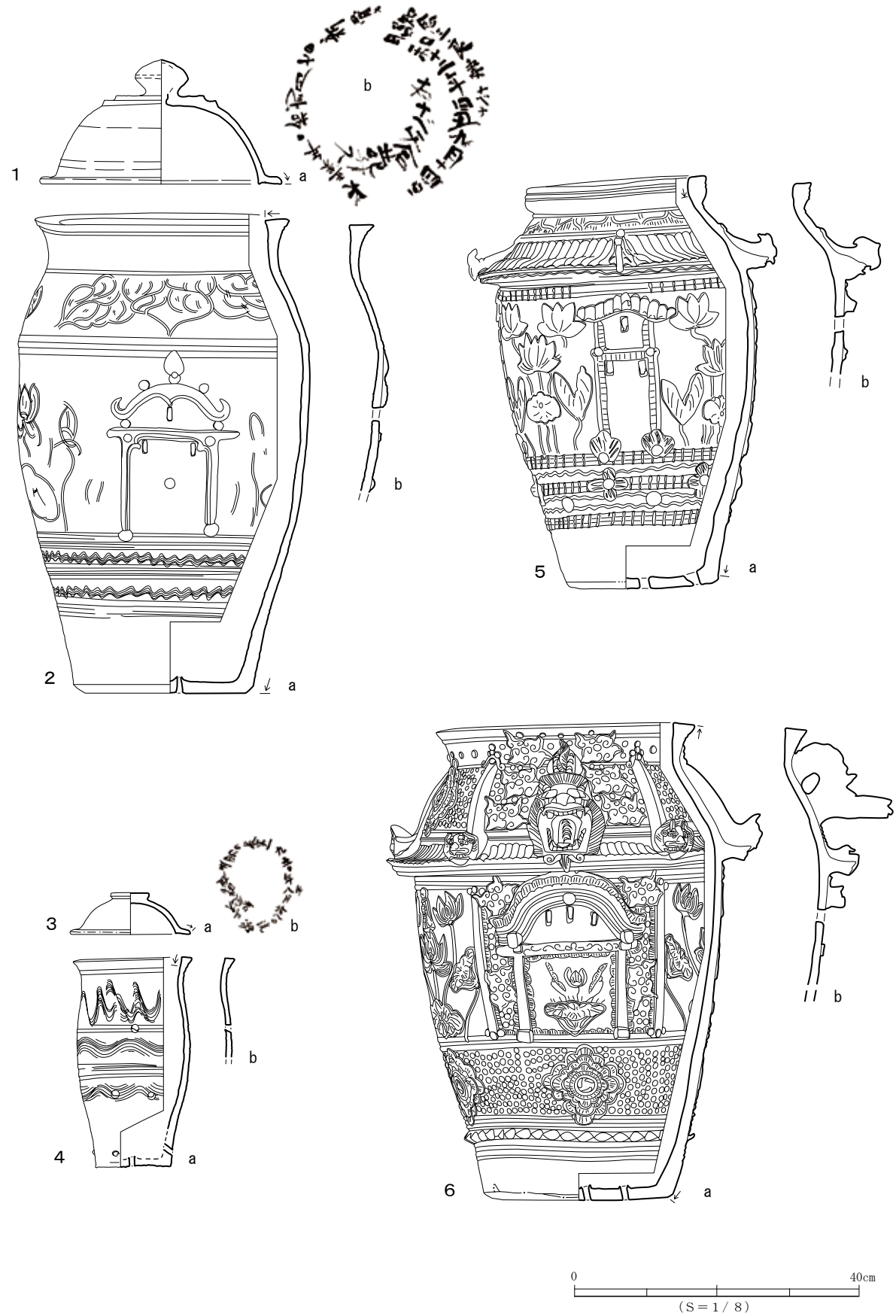
第 63 図 鉢形蓋（１・３・５・７）
陶製有頸甕形蔵骨器（２・４・６・８）

1（図版 71 の５・図版 86 の２）　2（図版 71 の６・図版 86 の３）　3（図版 71 の１・図版 85 の７）
4（図版 71 の２・図版 85 の８）　5（図版 73 の５）



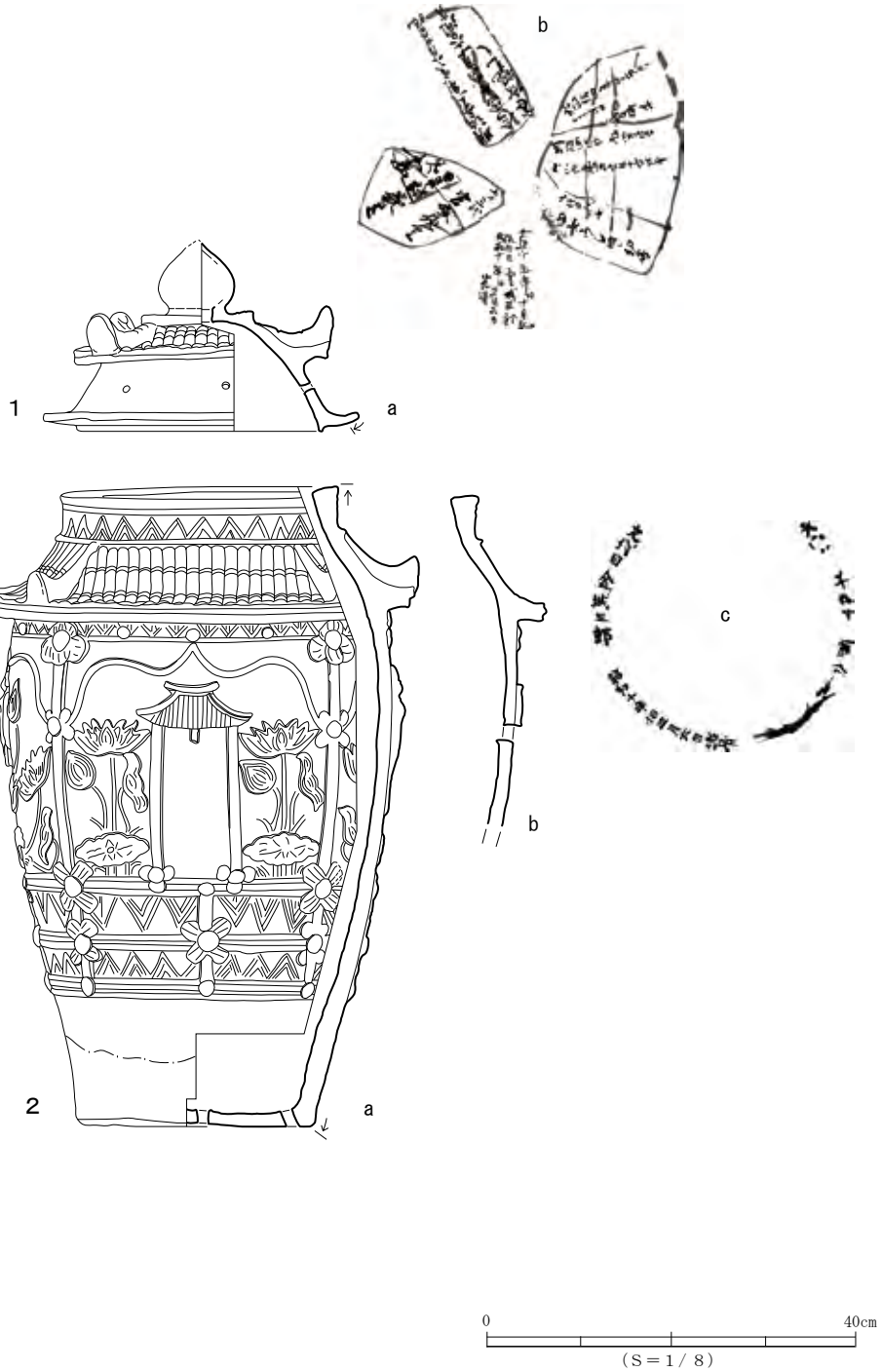
第 64 図　鉢形蓋（１・３）
陶製有頸甕形蔵骨器（２・４・５）

1（図版 70 の12・図版 85 の６） 2（図版 70 の13） 3（図版 70 の４・図版 85 の３） 4（図版 70 の５）
5（図版 71 の９） 6（図版 72 の２）



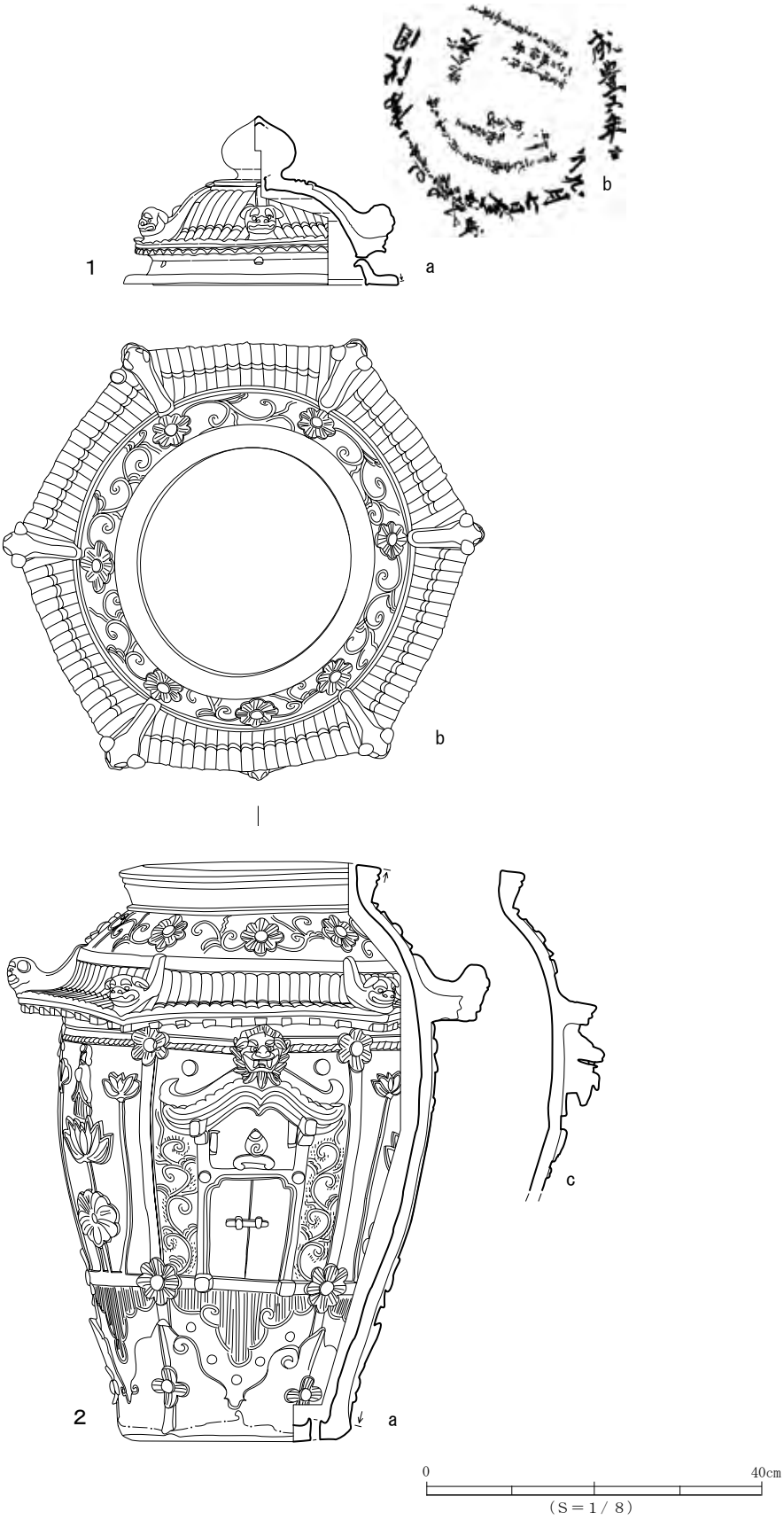
第 65 図　鉢形蓋（１・３）
陶製有頸甕形蔵骨器（２・４）
陶製軒付甕形蔵骨器（５・６）

1（図版 78の９・図版 89の１）　2（図版 78の10・図版 89の２）



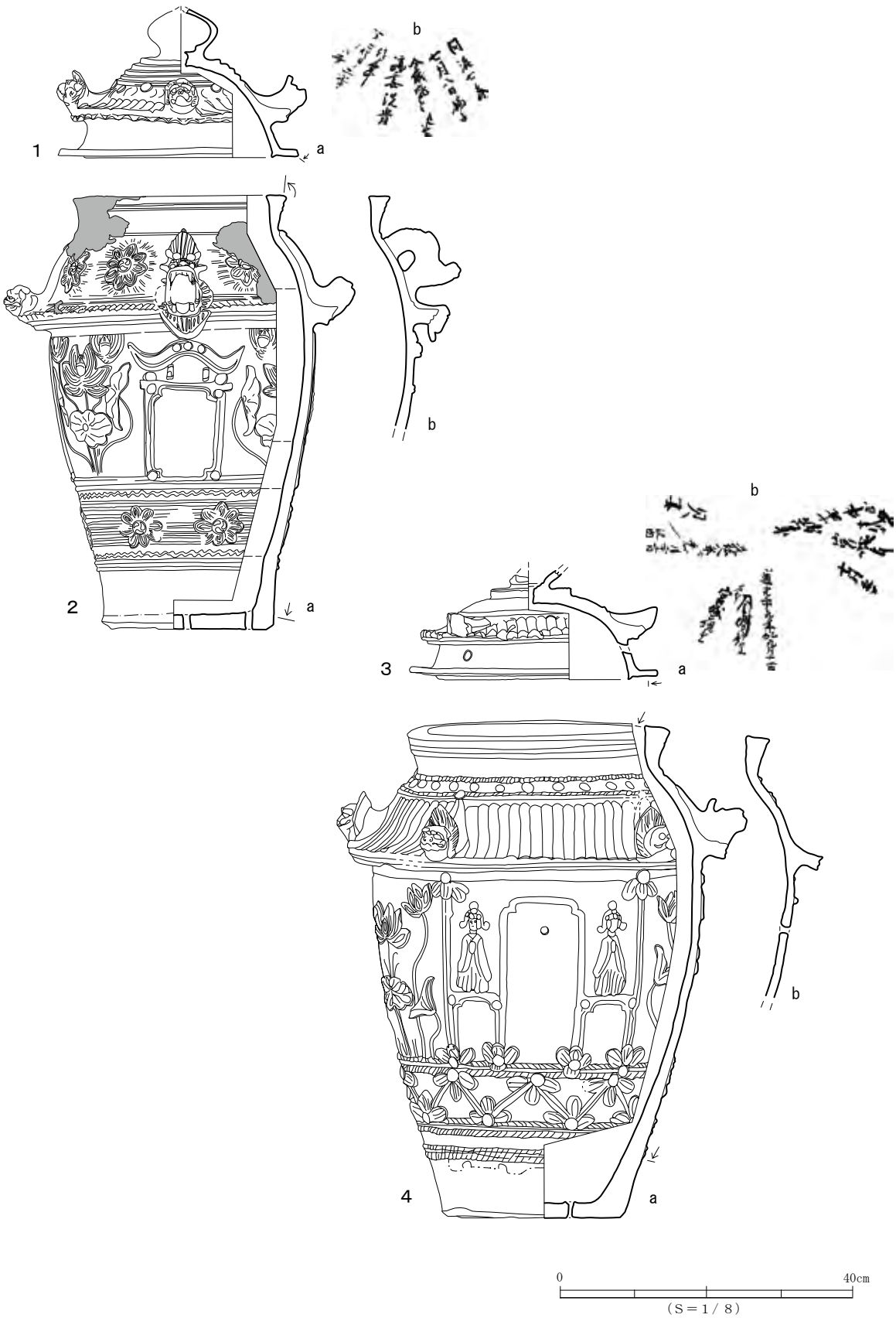
第 66 図　陶製軒付甕形蔵骨器

1（図版 77 の３・図版 88 の２）　２（図版 77 の４・４－１）



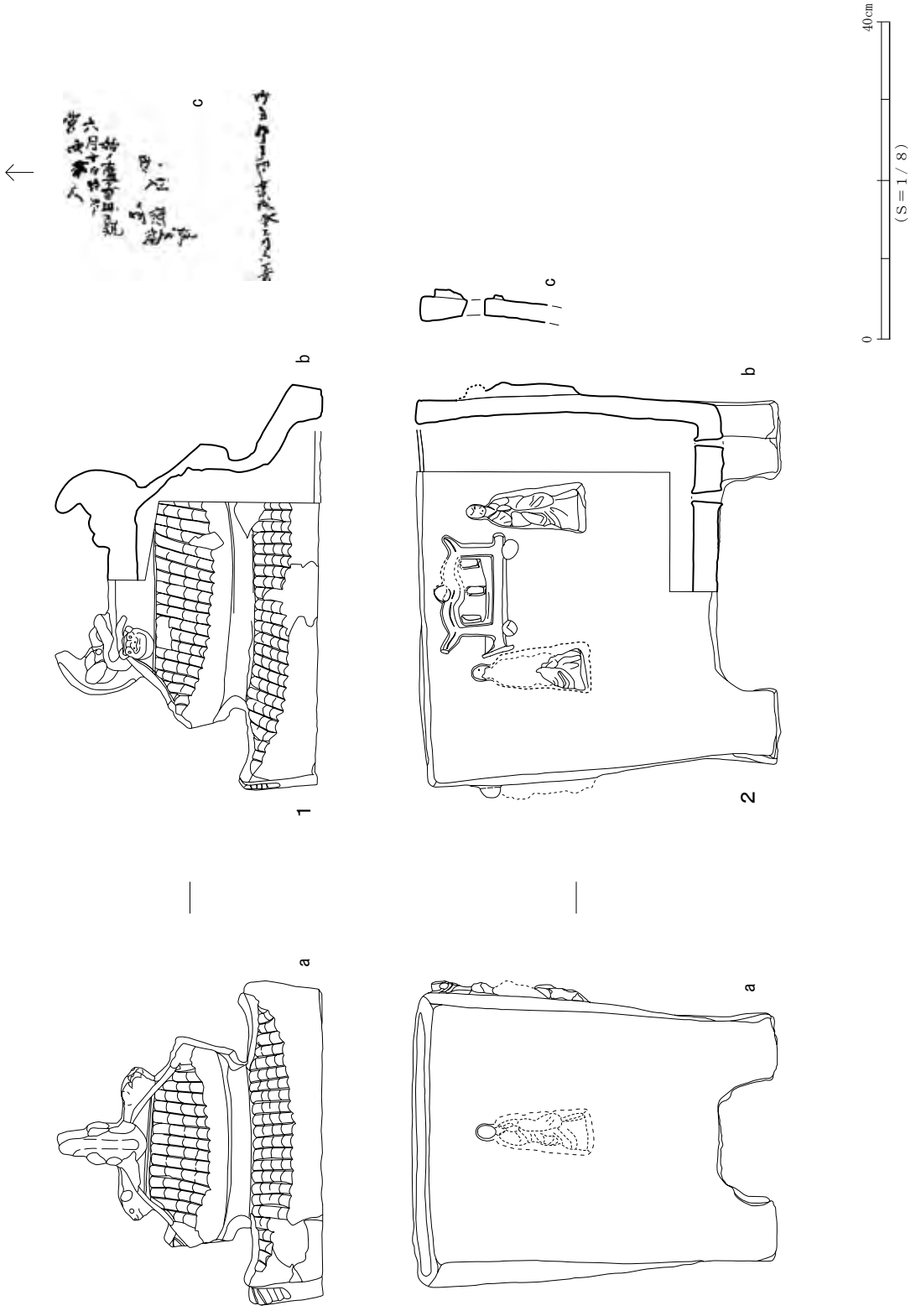
第 67 図　陶製軒付甕形蔵骨器

1（図版 78 の１・図版 88 の３）　2（図版 78 の２）　3（図版 77 の１・図版 87 の９）　4（図版 77 の２）



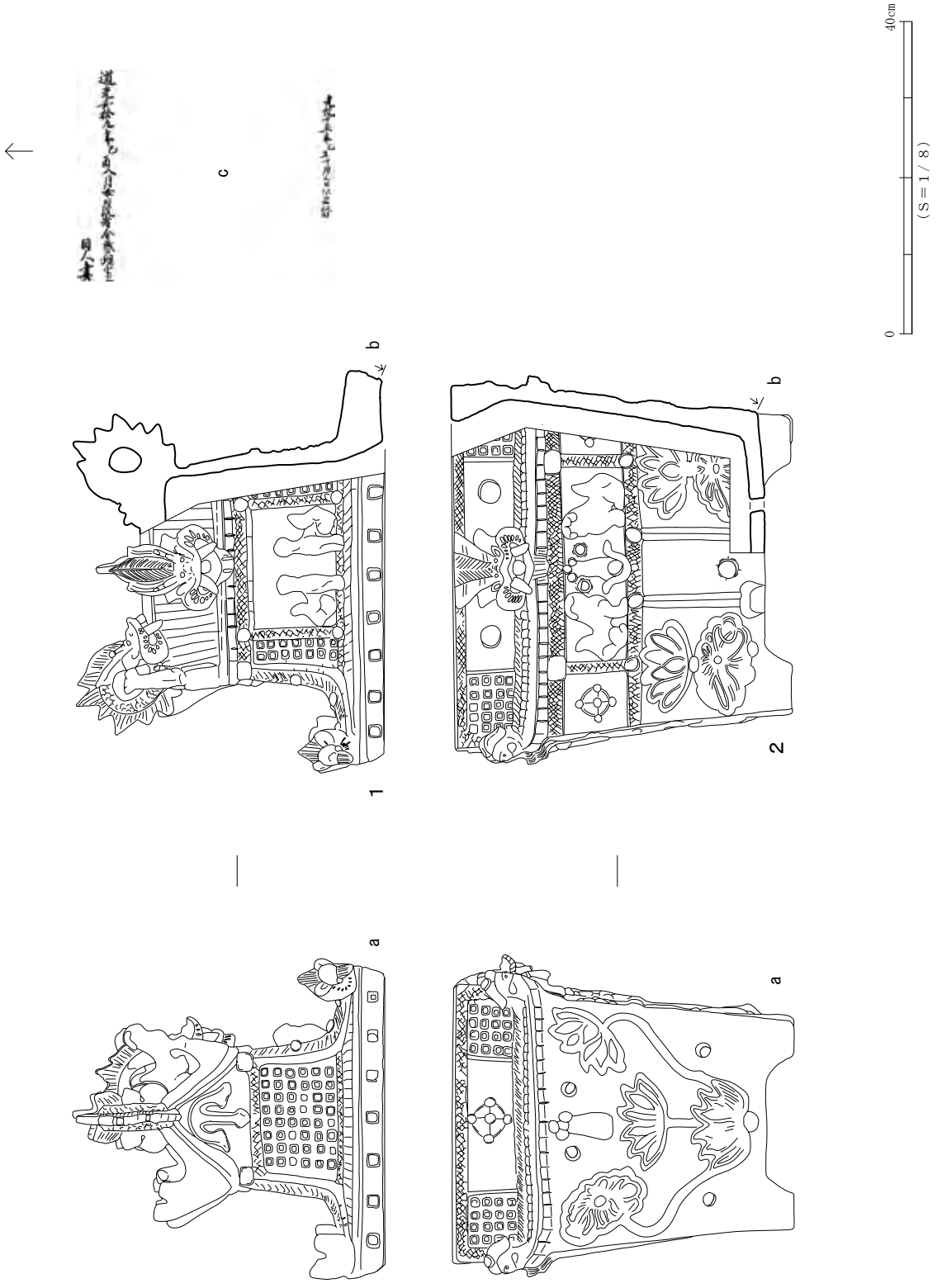
第 68 図　陶製軒付甕形蔵骨器

1（図版 76 の１・図版 88 の１）　2（図版 76 の２）



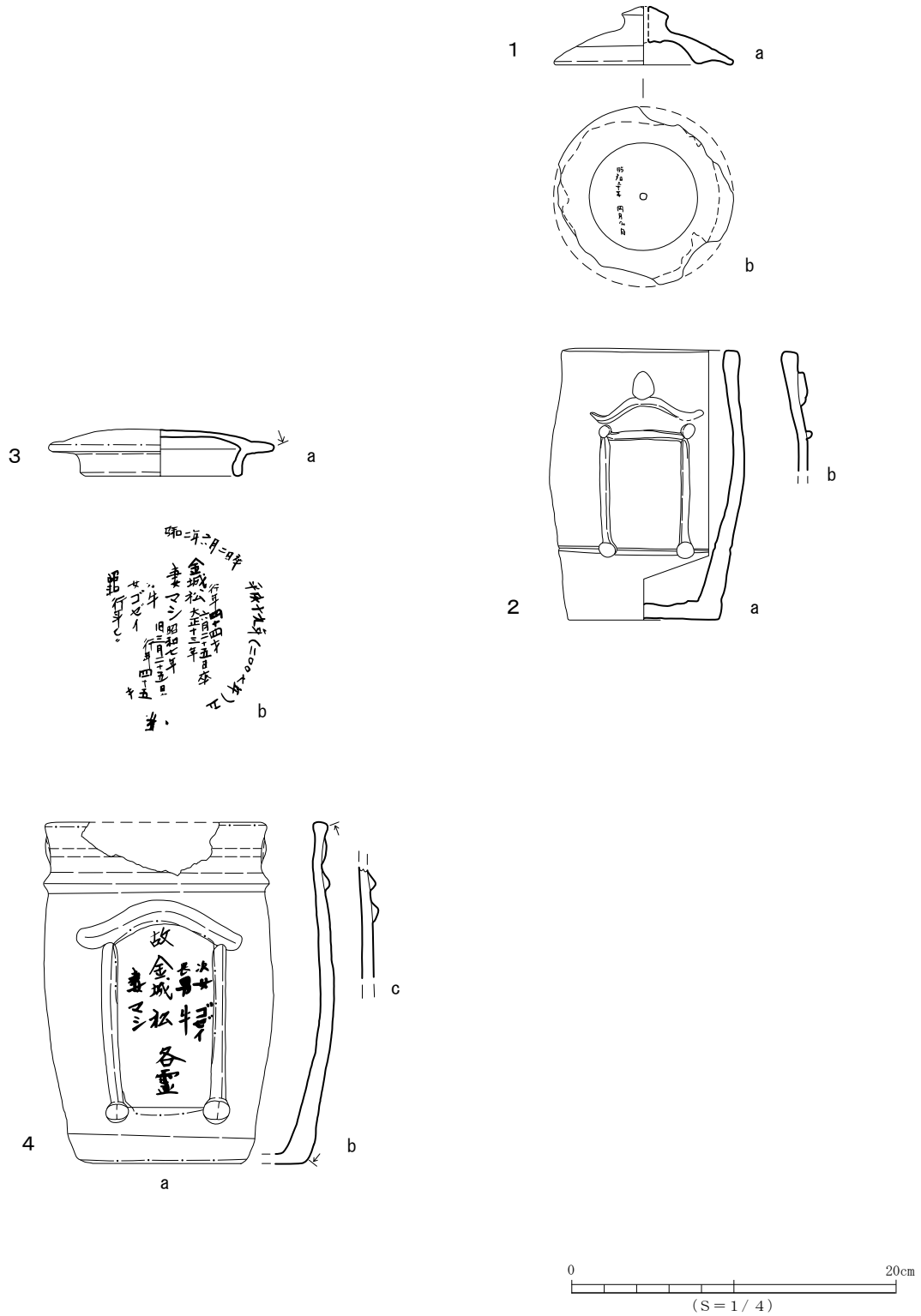
第 69 図　陶製家形蔵骨器

1（図版 81 の１・図版 89 の10）　2（図版 81 の２）



第 70 図　陶製家形蔵骨器

1（図版 83 の１・図版 86 の５） 2（図版 83 の２） 3（図版 83 の３・図版 89 の３） 4（図版 83 の４・図版 89 の４）



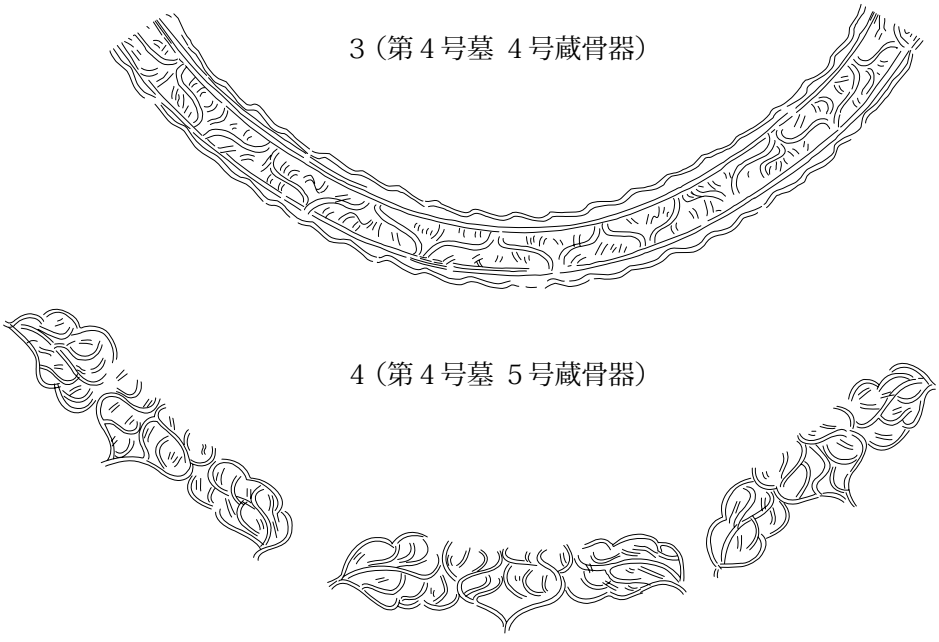
第 71 図　沖縄産火葬用甕形蔵骨器

1（図版 70 の３） 2（図版 70 の７） 3（図版 70 の９） 4（図版 70 の 11） 5（図版 70 の 13）

1（第４号墓 1 号蔵骨器）

2（第４号墓 3 号蔵骨器）

3（第４号墓 4 号蔵骨器）



4（第４号墓 5 号蔵骨器）

5（第４号墓 6 号蔵骨器）

0 40cm
（S＝1／8）

第 72 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（１）

1（図版 71 の２）　２（図版 71 の４）　３（図版 71 の６）　４（図版 71 の８）

1（第４号墓 ７号蔵骨器）

2（第４号墓 ８号蔵骨器）

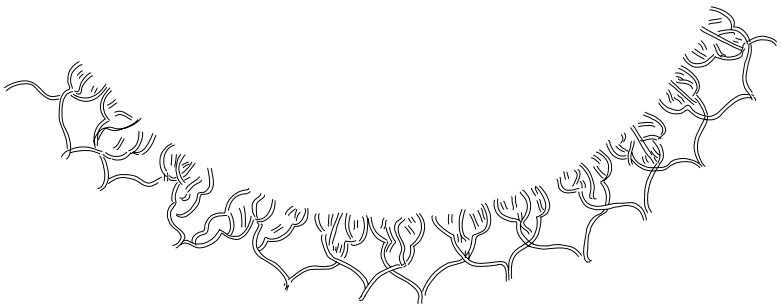
3（第４号墓 ９号蔵骨器）

4（第４号墓 10 号蔵骨器）

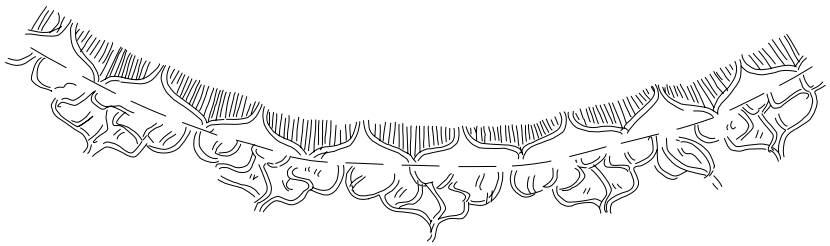
0　40cm
（S＝1／8）

第 73 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（２）

1（図版 72 の１） 2（図版 72 の３） 3（図版 72 の４） 4（図版 72 の５）

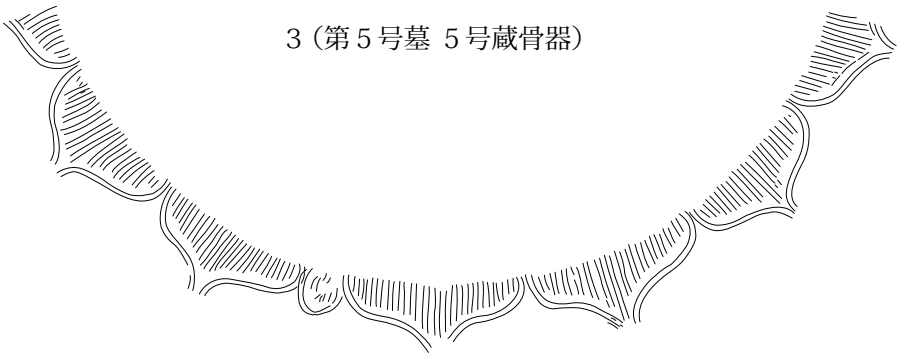


1（第５号墓 ２号蔵骨器）

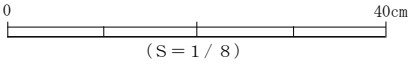


2（第５号墓 ４号蔵骨器）

3（第５号墓 ５号蔵骨器）

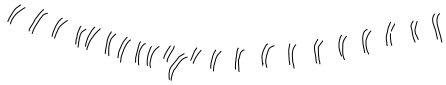


4（第５号墓 ６号蔵骨器）



第 74 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（３）

1（図版 73 の１）　2（図版 73 の２）3（図版 73 の３）　4（図版 73 の４）

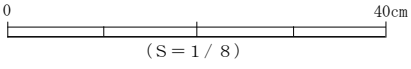


1（第５号墓 ７号蔵骨器）

2（第５号墓 ８号蔵骨器）

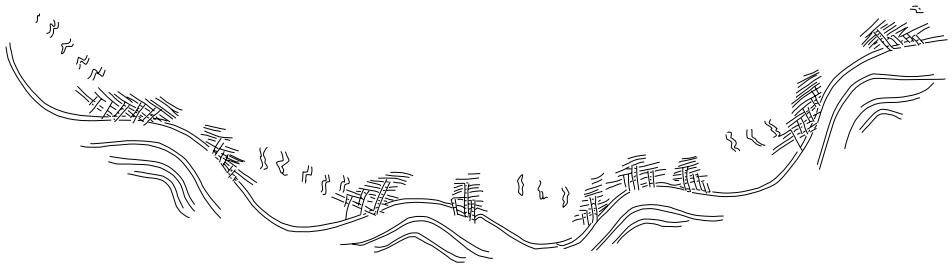
3（第５号墓 ９号蔵骨器）

4（第５号墓 10 号蔵骨器）



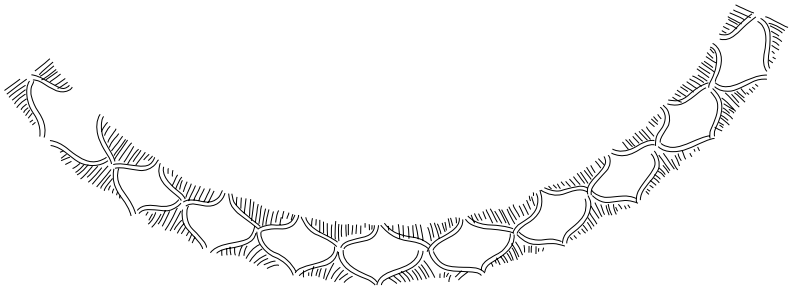
第 75 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（４）

1（図版 73 の５）　2（図版 73 の６）　3（図版 74 の１）　4（図版 74 の３）

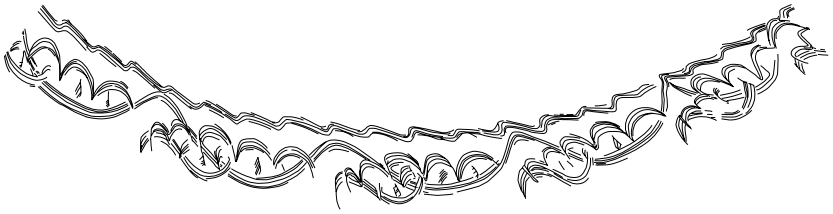


1（第５号墓 11 号蔵骨器）

2（第５号墓 12 号蔵骨器）



3（第５号墓 13 号蔵骨器）

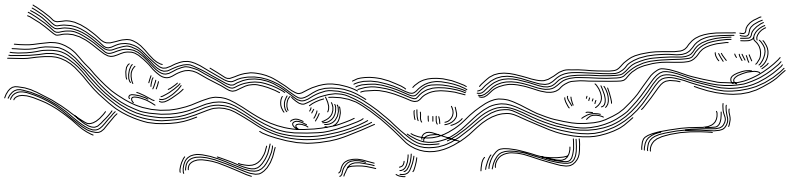


4（第６号墓 1 号蔵骨器）

0　40cm
（S＝1／8）

第 76 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（５）

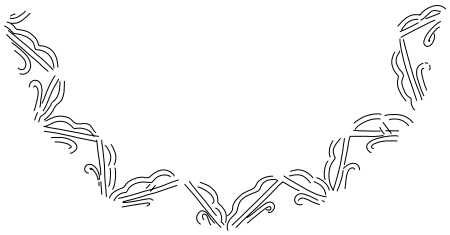
1（図版 74 の５）　2（図版 74 の７）　3（図版 74 の９）　4（図版 74 の 11）　5（図版 78 の４）



1（第７号墓 ２号蔵骨器）

2（第７号墓 ４号蔵骨器）

3（第７号墓 ５号蔵骨器）



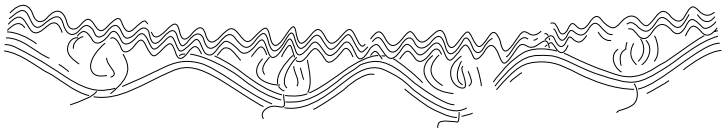
4（第７号墓 ６号蔵骨器）

5（第８号墓 ５号蔵骨器）

0　40cm
（S＝1／8）

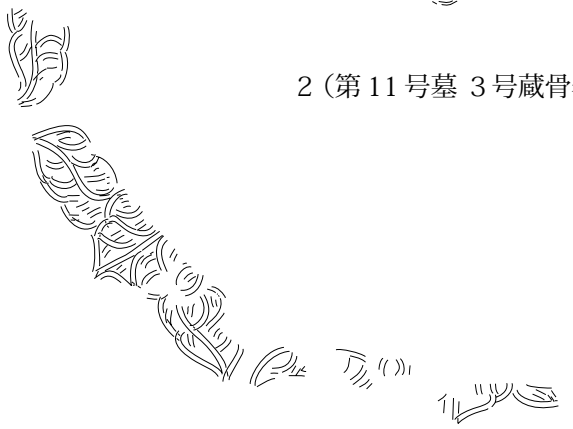
第 77 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（６）

1（図版 78 の８） 2（図版 82 の１） 3（図版 82 の４） 4（図版 82 の５） 5（図版 82 の６）

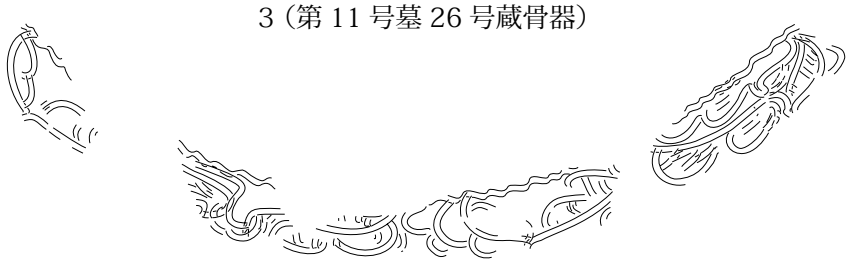


1（第８号墓 ８号蔵骨器）

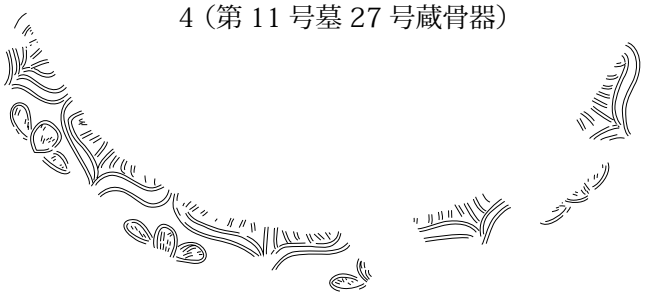
2（第 11 号墓 ３号蔵骨器）



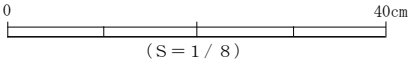
3（第 11 号墓 26 号蔵骨器）



4（第 11 号墓 27 号蔵骨器）



5（第 11 号墓 28 号蔵骨器）



第 78 図　陶製有頸甕形蔵骨器　肩部文様（７）

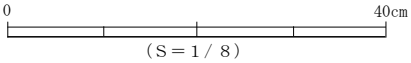
1（図版 70 の３）　2（図版 70 の９）　3（図版 70 の 11）　4（図版 70 の 13）

1（第４号墓 １号蔵骨器）

2（第４号墓 ４号蔵骨器）

3（第４号墓 ５号蔵骨器）

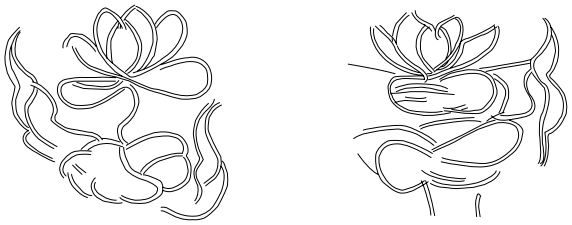
4（第４号墓 ６号蔵骨器）



第 79 図　陶製有頸甕形蔵骨器　胴部文様（１）

1（図版 71 の２）　2（図版 71 の４）　3（図版 71 の６）　4（図版 71 の８）

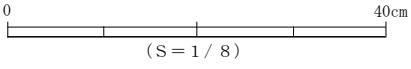
1（第４号墓 ７号蔵骨器）



2（第４号墓 ８号蔵骨器）

3（第４号墓 ９号蔵骨器）

4（第４号墓 10 号蔵骨器）

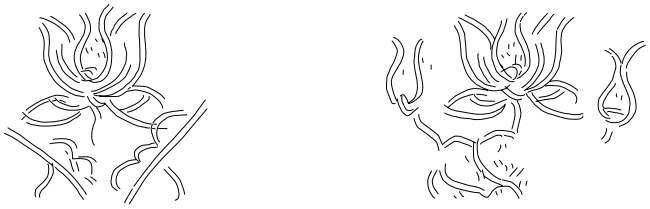


第 80 図　陶製有頸甕形蔵骨器　胴部文様（２）

1（図版 72 の１）　2（図版 72 の３）　3（図版 72 の４）　4（図版 72 の５）

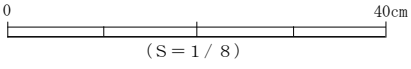
1（第５号墓 ２号蔵骨器）

2（第５号墓 ４号蔵骨器）



3（第５号墓 ５号蔵骨器）

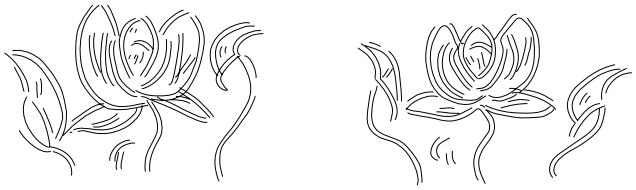
4（第５号墓 ６号蔵骨器）



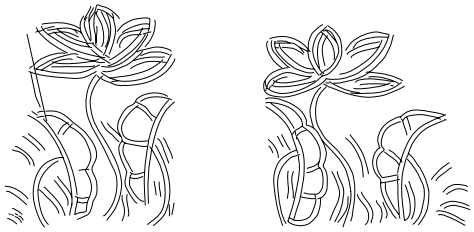
第 81 図　陶製有頸甕形蔵骨器　胴部文様（３）

1（図版 73 の２）　2（図版 73 の３）　3（図版 73 の４）　4（図版 73 の５）

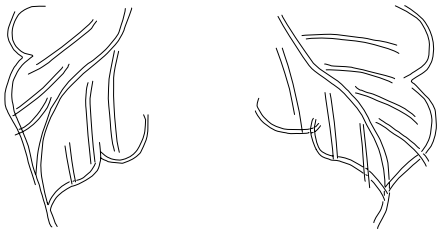
1（第５号墓 ８号蔵骨器）



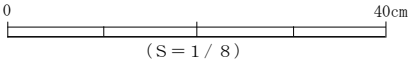
2（第５号墓 ９号蔵骨器）



3（第５号墓 10 号蔵骨器）

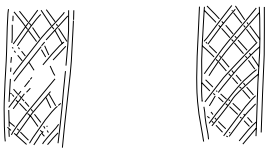


4（第５号墓 11 号蔵骨器）

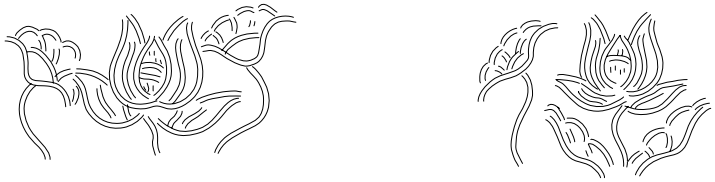


第 82 図　陶製有頸甕形蔵骨器　胴部文様（４）

1（図版 73 の６）　2（図版 74 の１）　3（図版 74 の３）　4（図版 74 の９）



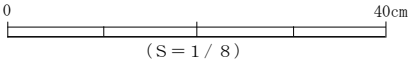
1（第５号墓 12 号蔵骨器）



2（第５号墓 13 号蔵骨器）

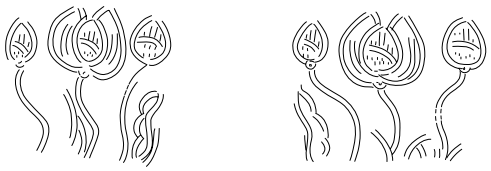
3（第６号墓 1 号蔵骨器）

4（第７号墓 5 号蔵骨器）

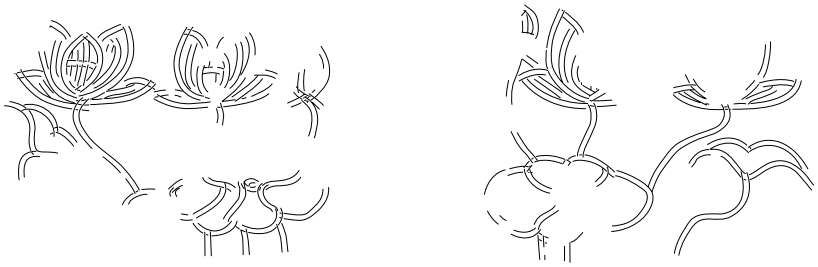


第 83 図　陶製有頸甕形蔵骨器　胴部文様（５）

1（図版 74 の 11）　2（図版 82 の４）　3（図版 82 の５）　4（図版 82 の６）



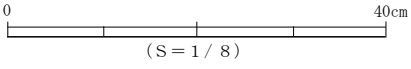
1（第 7 号墓 6 号蔵骨器）



2（第 11 号墓 26 号蔵骨器）

3（第 11 号墓 27 号蔵骨器）

4（第 11 号墓 28 号蔵骨器）



第 84 図　陶製有頸甕形蔵骨器　胴部文様（６）

第２節　その他の遺物

第 85～92 図。図版 91～109。第５表。凡例模式図(14)・(15)参照。

蔵骨器以外の遺物としては、青花や色絵等の中国産磁器、小杯や徳利、小碗等の本土産陶磁器、沖縄産陶器(施釉陶器・無釉陶器・陶質土器)、薬瓶等のガラス製品、プラスチック製品(櫛)、煙管や簪、指輪、小鉤、鉄釘、刀子等の金属製品、銭貨、石製品(石筆？・硯)、墓誌等が得られている。全体的な遺物の出土状況に関しては、第３表をご覧いただきたい。挿図や図版に掲載した各々の遺物の詳細に関しては、第５表に示した。

今回、挿図や図版に掲載した蔵骨器以外の遺物は、第２～４・７・８・11 号墓の墓庭にて検出された遺物集中部より得られた遺物を中心としている。

第5表　遺物（蔵骨器以外）観察一覧

挿図番号 図版番号	種　別	器種等	計測値（mm）								重量（g）	備　考	出土地点
			凡例模式図	凡例模式図(14)									
				a	b	c	d	e	f	g			
図版91の１	青花	小杯	(14)の１	(32.0)	19.5	16.2	－	－	－	－	－	第44図③拡大図遺物№８-009。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版91の２	本土産近代磁器	小杯	(14)の１	44.0	20.3	17.5	－	－	－	－	－	第14図遺物№023。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版91の３	色絵	小碗	(14)の１	80.0	(44.7)	不明	－	－	－	－	－	－	第11号墓 墓庭左側 第１層
図版91の４	染付	皿	(14)の５	不明	23.2	不明	－	－	－	－	－	－	第11号墓 墓庭右側 第１層
図版91の５	本土産近代磁器	徳利	(14)の３	27.4	144.7	50.3	54.2	－	－	－	－	第23図遺物№001(赤)。	第４号墓 墓庭 第１層
図版91の６	本土産近代磁器	徳利	(14)の３	19.0	170.5	44.3	60.0	－	－	－	－	第23図遺物№003(赤)。	第４号墓 墓庭 第１層
図版91の７	本土産近代磁器	小杯	(14)の１	66.4	(29.3)	(26.7)	－	－	－	－	－	第44図①拡大図遺物№8-001。	第８号墓 墓庭 遺物集中部２
第85図　1 図版92の１	本土産近代磁器	小杯	(14)の１	64.0	30.0	27.0	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-023。	第11号墓 墓庭 第１層
図版92の２	本土産近代磁器	小杯	(14)の１	63.3	24.6	26.4	－	－	－	－	－	第44図③拡大図遺物№8-005。クロム青磁となるか。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版92の３	本土産陶器	小碗	(14)の１	(80.0)	44.2	38.0	－	－	－	－	－	練上手。図版92の４と対になるか。	第11号墓 墓庭左側 第１層
図版92の４	本土産陶器	小碗	(14)の１	79.4	42.6	38.1	－	－	－	－	－	第57図遺物№11-034。練上手。図版92の３と対になるか。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　2 図版92の５	本土産近代磁器	小杯	(14)の１	62.0	25.0	26.0	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-026。クロム青磁。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　7 図版92の６	沖縄産施釉陶器	碗	(14)の５	132.0	58.0	62.0	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-059。灰釉碗。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　4 図版92の７	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	58.0	30.0	22.0	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-021。	第11号墓 墓庭 第１層
図版92の８	沖縄産施釉陶器	蓋付鉢 蓋	(14)の２	16.4	29.0	66.4	79.4	－	－	－	－	第14図遺物№019。図版92の９と対になると推測される。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版92の９	沖縄産施釉陶器	蓋付鉢 身	(14)の５	80.0	48.0	48.2	－	－	－	－	－	第14図遺物№022。図版92の８と対になると推測される。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版93の１	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	31.6	18.4	17.0	－	－	－	－	－	第14図遺物№006・007。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版93の２	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	37.7	20.5	18.1	－	－	－	－	－	第14図遺物№014。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版93の３	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	36.7	18.3	19.9	－	－	－	－	－	第14図遺物№029。	第２号墓 墓庭
図版93の４	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	31.4	16.8	14.8	－	－	－	－	－	第14図遺物№054。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版93の５	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	38.6	21.3	19.7	－	－	－	－	－	第44図③拡大図遺物№8-001。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版93の６	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	(34.9)	20.2	18.7	－	－	－	－	－	－	第８号墓 墓庭左側 第１層
図版93の７	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	34.7	19.8	18.8	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-025。	第11号墓 墓庭 第１層
図版93の８	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	34.5	20.6	14.8	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-048。	第11号墓 墓庭 第１層
図版93の９	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	33.2	18.2	16.8	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-049。	第11号墓 墓庭 第１層
図版93の10	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	34.0	20.5	15.5	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-052。	第11号墓 墓庭 第１層
図版93の11	沖縄産施釉陶器	小杯	(14)の１	30.8	18.5	14.7	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-057。	第11号墓 墓庭 第１層
図版94の１	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	23.6	147.2	49.5	70.4	－	－	－	－	第14図遺物№021。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版94の２	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	33.7	121.4	55.5	62.3	－	－	－	－	第14図遺物№001。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版94の３	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	33.4	126.0	59.3	63.8	－	－	－	－	第14図遺物№036。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版94の４	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	50.0	178.1	63.7	60.3	－	－	－	－	第14図遺物№013。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２

挿図番号 図版番号	種　別	器種等	計測値(mm)								重量(g)	備　考	出土地点
			凡例模式図	凡例模式図(14)・(15)									
				a	b	c	d	e	f	g			
図版94の５	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	24.1	123.3	62.0	88.0	－	－	－	－	第23図遺物№006(赤)。	第４号墓 墓庭 第１層
図版94の６	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	24.7	124.0	53.1	78.0	－	－	－	－	第44図③拡大図遺物№8-004。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版94の７	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	不明	(98.0)	67.5	60.8	－	－	－	－	第44図③拡大図遺物№8-008。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版95の１	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	21.3	106.5	56.5	83.1	－	－	－	－	第58図遺物№11-024・11-062。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　５ 図版95の２	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	32.0	119.5	48.0	59.1	－	－	－	－	第58図遺物№11-009。	第11号墓 墓庭 第１層
図版95の３	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	31.3	124.0	53.9	58.1	－	－	－	－	第58図遺物№11-050。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　６ 図版95の４	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	33.0	118.0	51.0	－	－	－	－	－	第58図遺物№11-013。底部から頸部へかけて窄まる器形のため、計測値ｄ(最大胴径)は表記していない。	第11号墓 墓庭 第１層
図版95の５ 図版95の5-1	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	33.2	115.1	49.0	80.0	－	－	－	－	第23図遺物№008(赤)。	第４号墓 墓庭 第１層
図版96の１	沖縄産施釉陶器	嘉瓶	(14)の３	(40.0)	(60.2)	不明	不明	－	－	－	－	図版96の２と同一個体である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
図版96の２	沖縄産施釉陶器	嘉瓶	(14)の３	不明	(162.0)	(70.8)	(99.0)	－	－	－	－	第58図遺物№11-028。図版96の１と同一個体である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
図版96の３	沖縄産施釉陶器	渡名喜瓶	(14)の３	不明	(83.5)	不明	不明	－	－	－	－	第58図遺物№11-007。図版96の４と同一個体である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
図版96の４	沖縄産施釉陶器	渡名喜瓶	(14)の３	不明	(101.7)	62.5	82.0	－	－	－	－	第58図遺物№11-022。図版96の３と同一個体である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
図版96の５	沖縄産施釉陶器	瓶	(14)の３	不明	(104.5)	65.0	(67.5)	－	－	－	－	第58図遺物№11-086。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　８ 図版96の６	沖縄産無釉陶器	壺	(14)の４	92.0	192.0	72.0	126.0	－	－	－	－	第57図遺物№11-001。サンミデー下段の右端に接して検出された。内部より、枝サンゴ礫計50点が検出された(図版69下)。	第11号墓 墓庭 第１層
図版97の１	ガラス製品	薬瓶	(14)の６	19.4	113.0	53.0	36.2	－	－	－	60.4	第38図遺物№7-018。器外面に、目盛りの陽刻あり。底面の形状は、楕円形となる。	第７号墓 墓庭 第１層
図版97の２	ガラス製品	薬瓶	(14)の６	18.2	116.8	52.3	38.7	－	－	－	69.1	第44図①拡大図遺物№8-002。器外面に、目盛りの陽刻あり。底面の形状は、楕円形となる。	第８号墓 墓庭 遺物集中部２
図版97の３	ガラス製品	薬瓶	(14)の６	22.3	142.5	65.4	43.4	－	－	－	108.9	第44図③拡大図遺物№8-012。器外面に、目盛りの陽刻あり。目盛りの最上位に、「200」の陽刻あり。底面の形状は、楕円形となる。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版97の４	ガラス製品	ラムネ瓶	(14)の６	24.9	190.0	52.3	－	－	－	－	396.0	内部に、ガラス玉(ビー玉)が封入されている。底面の形状は円形となるため、計測値ｄは表記していない。	第３号墓 墓庭 第１層
図版97の５	ガラス製品	コップ	(14)の６	57.0 〜 60.0	86.0	60.4	－	－	－	－	255.0	コーラ瓶を加工し、製作した製品と推測される。底面の形状は円形となるため、計測値ｄは表記していない。	第９号墓 墓庭 表採
図版98の１	ガラス製品	おはじき	－	－	－	－	－	－	－	－	1.13	直径14.8㎜。厚さ3.1㎜。	第３号墓 墓庭 第１層
図版98の２	ガラス製品	おはじき	－	－	－	－	－	－	－	－	1.45	直径14.3〜15.5㎜。厚さ2.6〜4.7㎜。	第11号墓 墓庭左側 第１層
図版98の３	ガラス製品	ビー玉	－	－	－	－	－	－	－	－	5.87	直径16.4㎜。	第３号墓 墓庭 第１層
図版98の４	ガラス製品	ビー玉	－	－	－	－	－	－	－	－	5.29	直径16.2㎜。	第４号墓 墓庭 第１層
第87図　７ 図版98の５	石製品	石筆？	(15)の９	37.0	6.0	－	－	－	－	－	2.5	第23図遺物№002(青)。蠟石製か。	第３号墓 墓庭 第１層
第85図　９ 図版98の６	ガラス製品	香水瓶 蓋	(14)の７	43.2	18.0	18.8	9.5	－	－	－	20.0	香水瓶の蓋と推測される。	第11号墓 墓庭左側 第１層
図版98の７	プラスチック製品	櫛	(15)の８	160.0	33.5	8.0	－	－	－	－	13.65	第44図③拡大図遺物№8-011。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
第85図　３ 図版98の８	本土産近代磁器	小杯	(14)の１	53.0	34.0	23.0	－	－	－	－	－	第38図遺物№7-019。覗き盃。外底面に「専賣特許/四一三二四」の陽刻あり。見込において、ガラスが球状に露出している。	第７号墓 墓庭 第１層
第85図　10 図版99の１	陶製品 煙管	雁首	(14)の８	24.5	12.0	9.0	21.1	11.0	8.0	－	4.5	第58図遺物№11-051。部分的に消失するが、外面に緑釉を施す。胎土の色調は、淡灰白色となるか。中国産か。図版99の２と一組になる可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
第85図　11 図版99の２	陶製品 煙管	吸口	(14)の９	28.0	14.0	8.0	6.0	3.0	－	－	3.3	第58図遺物№11-054。部分的に消失するが、外面に緑釉を施す。胎土の色調は、淡灰白色となるか。中国産か。図版99の１と一組になる可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
図版99の３	陶製品 煙管	吸口	(14)の９	32.5	15.1	10.8	9.3	4.3	－	－	6.0	第58図遺物№11-085。沖縄産施釉陶器。	第11号墓 墓庭 第１層
図版99の４	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	41.3	8.9	15.3	7.9	－	－	－	5.4	第14図遺物№025。図版99の５と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２

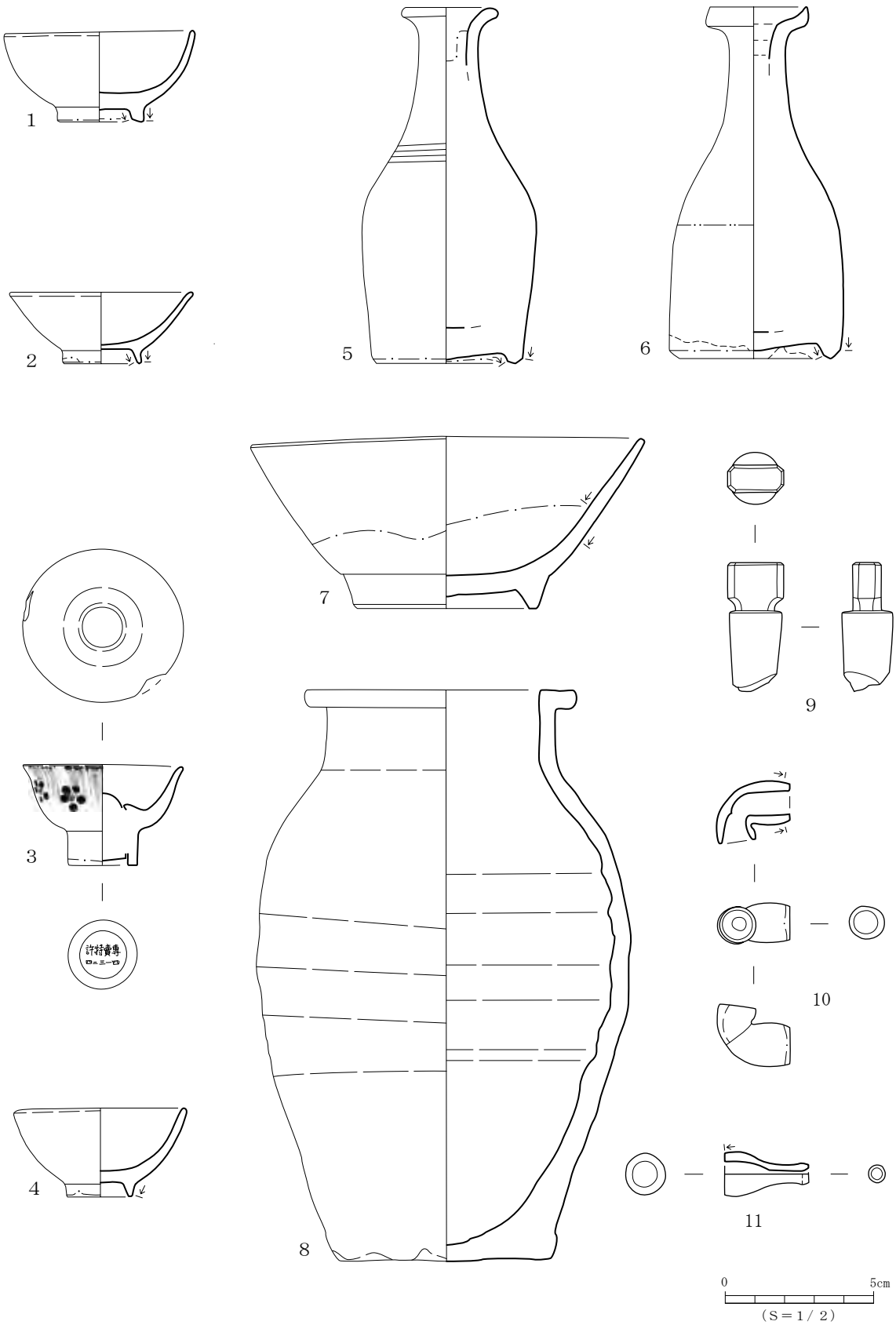
挿図番号 図版番号	種　別	器種等	計測値(mm)								重量 (g)	備　考	出土地点
			凡例模式図	凡例模式図(14)・(15)									
				a	b	c	d	e	f	g			
図版99の５	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	60.2	7.4	4.7	－	－	－	－	6.5	第14図遺物№026。鉄錆(？)が付着。図版99の４と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の６	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	31.2	10.2	16.2	10.1	－	－	－	5.7	第14図遺物№004。図版99の７と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の７	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	45.7	10.2	6.5	－	－	－	－	7.5	第14図遺物№009。陰刻された文様あり。植物の枝がモチーフか。図版99の６と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の８	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	38.6	10.8	19.7	(11.6)	－	－	－	8.0	第14図遺物№066。鉄錆(？)が付着。図版99の９と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の９	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	38.1	(12.0)	7.0	－	－	－	－	6.3	第14図遺物№060。鉄錆(？)が付着。図版99の８と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の10	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	38.8	10.2	15.5	9.5	－	－	－	4.5	第14図遺物№005。図版99の11と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の11	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	56.8	8.7	6.5	－	－	－	－	5.4	第14図遺物№031。図版99の10と一組である可能性がある。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版99の12	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	50.1	11.4	18.5	10.2	－	－	－	7.6	図版99の13と一組である可能性がある。	第４号墓 墓庭 第２層
図版99の13	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	75.5	10.1	7.3	－	－	－	－	8.4	第23図遺物№002(赤)。図版99の12と一組である可能性がある。	第４号墓 墓庭 第１層
図版99の14	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	39.7	9.6	14.8	8.9	－	－	－	4.8	第23図遺物№010(赤)。図版99の15と一組である可能性が高い。	第４号墓 墓庭 第１層
図版99の15	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	57.3	8.8	7.0	－	－	－	－	4.5	第23図遺物№009(赤)。図版99の14と一組である可能性が高い。	第４号墓 墓庭 第１層
図版100の１	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	48.0	9.6	17.2	10.4	－	－	－	6.3	第44図③拡大図遺物№8-006。図版100の２と一組である可能性が高い。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版100の２	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	61.0	(10.1)	5.4	－	－	－	－	4.7	第44図③拡大図遺物№8-010。図版100の１と一組である可能性が高い。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
第86図　1 図版100の３	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	41.6	9.5	14.1	9.7	－	－	－	4.2	第58図遺物№11-014。図版100の４と一組である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
第86図　2 図版100の４	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	58.5	9.4	6.6	－	－	－	－	5.5	第58図遺物№11-019。図版100の３と一組である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第１層
図版100の５	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	(43.3)	(7.5)	12.4	9.7	－	－	－	7.1	第58図遺物№11-029。火皿を欠失。図版100の６と一組である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第１層
図版100の６	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	56.2	10.1	6.6	－	－	－	－	10.3	第58図遺物№11-008。図版100の５と一組である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第１層
図版100の７	金属製品 煙管	雁首	(14)の10	35.6	11.6	19.1	11.7	－	－	－	8.5	第58図遺物№11-084。図版100の８と一組である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第１層
図版100の８	金属製品 煙管	吸口	(14)の11	(32.3)	11.6	(5.8)	－	－	－	－	4.7	第58図遺物№11-027。吸口の先端が、欠失している。図版100の７と一組である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第１層
第86図　3 図版100の９	金属製品 煙管	延べ煙管	(14)の12	(191.0)	9.0	14.2	6.0	－	－	－	47.1	第58図遺物№11-020。火皿が一部欠損。	第11号墓 墓庭 第１層
図版101の１	金属製品 簪	髪差	(15)の１	103.0	14.0	69.1	25.1	3.3	2.9	3.8	11.3	第14図遺物№012。男性用。花の厚さは、3.6㎜。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版101の２	金属製品 簪	ジーファー	(15)の２	106.9	78.0	11.3	12.6	4.1	4.8	－	3.5	第38図遺物№7-011。女性用と推測される。	第７号墓 墓庭 第１層
図版101の３	金属製品 簪	押差	(15)の２	152.0	101.0	4.6	17.5	1.9	2.2	－	4.5	第14図遺物№003・030。男性用と推測される。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
第86図　5 図版101の４	金属製品 簪	押差	(15)の２	183.5	122.3	4.7	19.0	4.1	2.4	－	8.2	第58図遺物№11-011・11-058。男性用と推測される。図版101の５と一組である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第１層
第86図　4 図版101の５	金属製品 簪	髪差	(15)の１	109.0	15.4	73.5	19.5	4.3	3.7	5.3	17.0	第58図遺物№11-012。男性用。花の厚さは、0.8㎜。図版101の４と一組である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第１層
図版101の６	金属製品 簪	押差	(15)の２	(41.1)	不明	4.9	22.7	2.2	不明	－	1.9	第58図遺物№11-030。男性用と推測される。	第11号墓 墓庭 第１層
図版101の７	金属製品 指輪	－	(15)の３	19.0	1.0 ～ 1.4	0.9 ～ 1.4	－	－	－	－	0.35	第14図遺物№037。図版101の７～14は、同一個体である可能性が高い。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版101の８	金属製品 指輪	－	(15)の３	(19.0)	0.9 ～ 1.1	0.7 ～ 1.0	－	－	－	－	0.13	第14図遺物№037。図版101の７～14は、同一個体である可能性が高い。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版101の９	金属製品 指輪	－	(15)の３	(19.0)	0.8 ～ 1.1	0.6 ～ 0.9	－	－	－	－	0.08	第14図遺物№037。図版101の７～14は、同一個体である可能性が高い。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版101の10	金属製品 指輪	－	(15)の３	(19.0)	0.8 ～ 1.1	0.7 ～ 1.0	－	－	－	－	0.06	第14図遺物№037。図版101の７～14は、同一個体である可能性が高い。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版101の11	金属製品 指輪	－	(15)の３	19.1	0.8 ～ 1.1	0.8 ～ 1.3	－	－	－	－	0.26	第14図遺物№018。図版101の７～14は、同一個体である可能性が高い。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２

挿図番号 図版番号	種　別	器種等	計測値(mm)								重量(g)	備　考	出土地点
			凡例模式図	凡例模式図(15)									
				a	b	c	d	e	f	g			
図版101の12	金属製品 指輪	－	(15)の3	19.0	0.8 ～ 1.2	0.8 ～ 1.1	－	－	－	－	0.24	第14図遺物№018。図版101の7～14は、同一個体である可能性が高い。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版101の13	金属製品 指輪	－	(15)の3	(19.0)	0.6 ～ 0.9	0.6 ～ 0.8	－	－	－	－	0.11	第14図遺物№018。図版101の7～14は、同一個体である可能性が高い。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版101の14	金属製品 指輪	－	(15)の3	(19.0)	0.4 ～ 1.0	0.4 ～ 0.9	－	－	－	－	0.07	第14図遺物№018。図版101の7～14は、同一個体である可能性が高い。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版102の1	金属製品 指輪	－	(15)の3	(22.6)	0.7 ～ 1.1	0.8 ～ 1.2	－	－	－	－	0.15	第14図遺物№010。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版102の2	金属製品 指輪	－	(15)の3	19.7	7.4 ～ 8.5	1.0 ～ 3.0	－	－	－	－	2.50	第23図遺物№004(赤)。	第4号墓 墓庭 第1層
図版102の3	金属製品 指輪	－	(15)の3	20.7	6.0 ～ 7.8	1.0 ～ 1.2	－	－	－	－	2.05	第23図遺物№005(赤)。	第4号墓 墓庭 第1層
図版102の4	金属製品 指輪	－	(15)の3	20.3	6.1 ～ 7.0	0.9 ～ 1.3	－	－	－	－	1.91	第23図遺物№007(赤)。	第4号墓 墓庭 第1層
第87図　1 図版102の5	金属製品 指輪	－	(15)の3	21.8 ～ 22.0	5.9 ～ 7.9	1.5 ～ 3.2	－	－	－	－	5.00	第58図遺物№11-015。	第11号墓 墓庭 第1層
第87図　2 図版102の6	金属製品 指輪	－	(15)の3	21.7 ～ 22.8	4.7 ～ 7.7	1.4 ～ 3.1	－	－	－	－	4.92	第58図遺物№11-016。	第11号墓 墓庭 第1層
第87図　3 図版102の7	金属製品 指輪	－	(15)の3	21.2 ～ 21.4	7.8 ～ 8.2	0.8 ～ 1.0	－	－	－	－	4.30	第58図遺物№11-017。	第11号墓 墓庭 第1層
第87図　4 図版102の8	金属製品 指輪	－	(15)の3	19.9 ～ 20.0	6.0 ～ 6.6	0.8 ～ 1.0	－	－	－	－	1.91	第58図遺物№11-018。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の9	金属製品 指輪	－	(15)の3	15.9 ～ 16.3	4.3 ～ 4.5	0.5 ～ 0.9	－	－	－	－	0.78	第58図遺物№11-090。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の10	金属製品 指輪	－	(15)の3	16.0	0.7	0.6	－	－	－	－	0.12	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の11	金属製品 指輪	－	(15)の3	16.4	1.0	0.6	－	－	－	－	0.16	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の12	金属製品 指輪	－	(15)の3	17.0	1.4	0.8	－	－	－	－	0.26	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の13	金属製品 指輪	－	(15)の3	(17.0)	1.2	0.6	－	－	－	－	0.06	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の14	金属製品 指輪	－	(15)の3	(17.0)	1.1	0.7	－	－	－	－	0.05	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の15	金属製品 指輪	－	(15)の3	(18.0)	0.7	0.6	－	－	－	－	0.05	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の16	金属製品 指輪	－	(15)の3	(19.0)	1.5	0.8	－	－	－	－	0.13	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の17	金属製品 指輪	－	(15)の3	(20.0)	1.5	0.8	－	－	－	－	0.09	第58図遺物№11-092。図版102の10～17は、同一個体である可能性がある。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の18	金属製品 指輪	－	(15)の3	14.9 ～ 15.5	1.8 ～ 4.5	0.6 ～ 1.2	－	－	－	－	0.40	第58図遺物№11-056。図版102の19と同一個体である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第1層
図版102の19	金属製品 指輪	－	(15)の3	(15.0)	1.3	0.6	－	－	－	－	0.10	第58図遺物№11-056。図版102の18と同一個体である可能性が高い。	第11号墓 墓庭 第1層
第87図　5 図版102の20	金属製品 指輪	－	(15)の3	20.0	9.7 ～ 10.0	1.3 ～ 1.4	－	－	－	－	3.88	第58図遺物№11-010。	第11号墓 墓庭 第1層
図版103の1	金属製品 小鉤	－	(15)の4	17.4	14.3	0.8	2.3	－	－	－	0.29	文字が陽刻されていると推測される。「十一文」か。第4号墓墓庭の遺物集中部付近で出土。	第4号墓 墓庭 第2層
図版103の2	金属製品 小鉤	－	(15)の4	17.5	14.3	1.1	2.2	－	－	－	0.49	文字が陽刻されていると推測される。「十一文」か。第4号墓墓庭の遺物集中部付近で出土。	第4号墓 墓庭 第2層
図版103の3	金属製品 小鉤	－	(15)の4	17.5	13.9	0.9	2.2	－	－	－	0.38	文字が陽刻されていると推測される。「登録／白鹿」か。第4号墓墓庭の遺物集中部付近で出土。	第4号墓 墓庭 第2層
図版103の4	金属製品 小鉤	－	(15)の4	17.4	14.3	1.1	2.2	－	－	－	0.51	文字が陽刻されていると推測される。「登録／白鹿」か。第4号墓墓庭の遺物集中部付近で出土。	第4号墓 墓庭 第2層
図版103の5	鉄釘	－	(15)の5	44.4	5.4 ～ 6.4	2.6	－	－	－	－	1.79	第14図遺物№008。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版103の6	鉄釘	－	(15)の5	45.2	不明	2.5 ～ 3.9	－	－	－	－	1.78	第14図遺物№045。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版103の7	鉄釘	－	(15)の5	58.5	不明	3.5	－	－	－	－	2.64	第14図遺物№047。	第2号墓 墓庭 P1・P2
図版103の8	鉄釘	－	(15)の5	35.5	不明	4.2	－	－	－	－	2.89	第14図遺物№053。	第2号墓 墓庭 P1・P2

挿図番号 図版番号	種　別	器種等	計測値(mm)								重量(g)	備　考	出土地点
			凡例模式図	凡例模式図(15)									
				a	b	c	d	e	f	g			
図版103の９	鉄釘	－	(15)の５	44.5	6.2 ～ 7.2	3.5	－	－	－	－	1.64	第38図遺物№7-008。	第７号墓 墓庭 第１層
第87図　６ 図版103の10	鉄釘	－	(15)の５	35.3	4.1 ～ 5.5	2.5	－	－	－	－	0.73	第38図遺物№7-025。	第７号墓 墓庭 第１層
図版103の11	鉄釘	－	(15)の５	45.1	不明	3.5	－	－	－	－	1.29	－	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版103の12	鉄釘	－	(15)の５	40.0	不明	3.0	－	－	－	－	1.49	－	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版103の13	鉄釘	－	(15)の５	34.0	4.9	2.8	－	－	－	－	2.05	第58図遺物№11-033。	第11号墓 墓庭 第１層
図版103の14	鉄釘	－	(15)の５	45.2	不明	4.4	－	－	－	－	2.59	第58図遺物№11-053。	第11号墓 墓庭 第１層
図版103の15	金属製品 針	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4.51	最大長52.1㎜。最大幅7.7㎜。厚さ2.5㎜。鉄製針を、数本束ねたものと推測される。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
図版103の16	金属製品 針	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.28	第58図遺物№11-097。最大長24.3㎜。最大幅4.0㎜。厚さ3.1㎜。鉄製針を、数本束ねたものと推測される。	第11号墓 墓庭 第１層
図版104の１	金属製品 金具？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1.40	第14図遺物№002。最大長28.0㎜。最大幅9.2㎜。厚さ1.0㎜。孔径(大)5.6㎜。孔径(小)0.9㎜。木製品等に付随する金具か。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版104の２	金属製品 金具？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1.96	第14図遺物№020。最大長36.3㎜。最大幅11.5㎜。厚さ1.0㎜。孔径3.9～6.7㎜。木製品等に付随する金具か。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版104の３	金属製品 金具？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.78	第14図遺物№040。最大長27.1㎜。最大幅14.3㎜。厚さ0.6㎜。孔径(大)4.0㎜。孔径(小)0.6㎜、1.3㎜。木製品等に付随する金具か。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版104の４	金属製品 金具？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1.17	最大長32.6㎜。最大幅6.3㎜。厚さ0.8㎜。木製品等に付随する金具か。	第２号墓 墓庭 遺物集中部
図版104の５	金属製品 金具？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.77	最大長16.6㎜。最大幅8.8㎜。厚さ2.0㎜。木製品等に付随する金具か。	第２号墓 墓庭 遺物集中部
図版104の６	金属製品 刀子	－	(15)の６	64.5	20.0	1.4 ～ 1.8	1.3 ～ 1.9	－	－	－	9.56	第14図遺物№028。刺刀か。	第２号墓 墓庭 Ｐ１・Ｐ２
図版104の７	金属製品 刀子	－	(15)の６	107.0	27.0	1.5 ～ 2.2	1.3 ～ 2.4	－	－	－	14.80	第58図遺物№11-088。刺刀か。	第11号墓 墓庭 第１層
第86図　６ 図版104の８	金属製品 刀子	－	(15)の６	83.0	21.0	0.9 ～ 2.2	1.3 ～ 2.1	－	－	－	17.20	第58図遺物№11-089。刺刀か。	第11号墓 墓庭 第１層
第88図　１ 図版105の１	銭貨	銭文不明	(15)の７	(23.0)	不明	1.2	－	－	－	－	0.6	第44図③拡大図遺物№8-003。全体の約4分の１が残存。「通」の字のみが確認できる。	第８号墓 墓庭 遺物集中部１
第88図　２ 図版105の２	銭貨	寛永通寶 (新)	(15)の７	24.5	6.6	1.0	－	－	－	－	2.8	第44図②拡大図遺物№8-001。新寛永。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　３ 図版105の３	銭貨	寛永通寶 (古)	(15)の７	24.2	(4.9)	(1.2)	－	－	－	－	3.5	第44図②拡大図遺物№8-002。古寛永。裏面に、錆が付着する。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　４ 図版105の４	銭貨	銭文不明	(15)の７	(23.8)	(4.7)	(2.3)	－	－	－	－	3.1	第44図②拡大図遺物№8-003。腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」と推測される。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　５ 図版105の５	銭貨	寛永通寶 (新)	(15)の７	22.6	6.2	1.2	－	－	－	－	2.5	第44図②拡大図遺物№8-004。新寛永。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　６ 図版105の６	銭貨	寛永通寶 (新)	(15)の７	24.6	6.5	1.1	－	－	－	－	3.2	第44図②拡大図遺物№8-005。新寛永。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　７ 図版105の７	銭貨	寛永通寶 (新)	(15)の７	24.4	5.7	1.4	－	－	－	－	3.3	第44図②拡大図遺物№8-006。新寛永。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　８ 図版105の８	銭貨	銭文不明	(15)の７	(27.6)	(9.3)	(1.7)	－	－	－	－	3.0	第44図②拡大図遺物№8-007。腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」と推測される。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　９ 図版105の９	銭貨	銭文不明	(15)の７	23.2	5.9	1.3	－	－	－	－	2.8	第44図②拡大図遺物№8-008。やや腐食する。材質として、鉄を多く含むか。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第88図　10 図版105の10	銭貨	寛永通寶 (古)	(15)の７	24.4	5.8	1.3	－	－	－	－	4.0	第44図②拡大図遺物№8-009。古寛永。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第89図　１ 図版106の１	銭貨	寛永通寶 (新)	(15)の７	21.8	7.0	0.9	－	－	－	－	1.7	第44図②拡大図遺物№8-010。新寛永。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第89図　２ 図版106の２	銭貨	銭文不明	(15)の７	(26.3)	(5.8)	(1.7)	－	－	－	－	3.8	第44図②拡大図遺物№8-011。腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」と推測される。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)上
第89図　３ 図版106の３	銭貨	寛永通寶 (不明)	(15)の７	22.5	6.4	1.0	－	－	－	－	2.1	第44図②拡大図遺物№8-012。墓庭の前石垣(左側)内部より検出。	第８号墓 墓庭 前石垣(左)内
第89図　４ 図版106の４	銭貨	銭文不明	(15)の７	(23.9)	(6.2)	(1.4)	－	－	－	－	2.9	第57図遺物№11-046。腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」であろうか。	第11号墓 墓庭 攪乱土坑内
第89図　５ 図版106の５	銭貨	寛永通寶 (新)	(15)の７	23.1	7.1	1.1	－	－	－	－	2.3	第57図遺物№11-047。新寛永。	第11号墓 墓庭 第１層

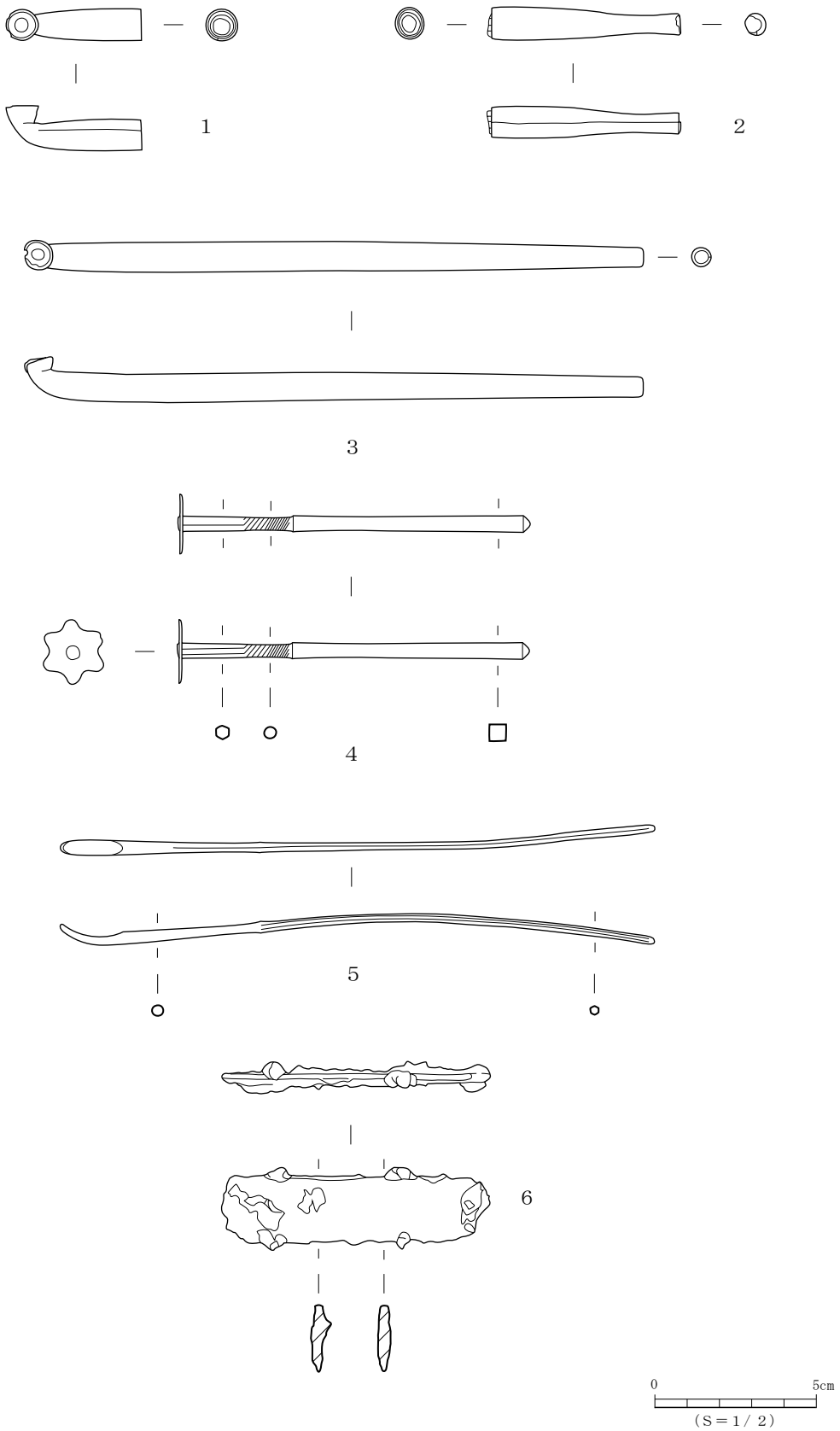
挿図番号 図版番号	種　別	器種等	計測値（mm）								重量（g）	備　考	出土地点
			凡例模式図	凡例模式図(15)									
				a	b	c	d	e	f	g			
第89図　6 図版106の６	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	23.1	6.5	1.0	－	－	－	－	2.3	第58図遺物№11-060。新寛永。	第11号墓 墓庭 第１層
第89図　7 図版106の７	銭貨	寛永通寶 （古）	(15)の７	23.2	5.9	0.9	－	－	－	－	2.2	第58図遺物№11-061。古寛永。	第11号墓 墓庭 第１層
第89図　8 図版106の８	銭貨	寛永通寶 （不明）	(15)の７	(22.9)	(5.2)	(1.3)	－	－	－	－	1.9	第58図遺物№11-076。豚下顎骨Ａの先端上で検出。本来は、完形であったと推測される。他に、接合可能な破片が数点ある。	第11号墓 墓庭 第１層
第89図　9 図版106の９	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	24.0	6.5	1.0	－	－	－	－	2.4	第58図遺物№11-077。新寛永。豚下顎骨Ａの先端付近で検出。図版106の８とほぼ接しており、それより下で検出された。	第11号墓 墓庭 第１層
第89図　10 図版106の10	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	24.1	5.8	1.2	－	－	－	－	3.0	第58図遺物№11-078。新寛永。豚頭蓋骨Ｂの下顎骨先端上で検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　1 図版107の１	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	23.7	6.3	1.3	－	－	－	－	3.0	第58図遺物№11-079。新寛永。豚頭蓋骨Ｄの下顎骨先端付近左側面に接して検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　2 図版107の２	銭貨	銭文不明	(15)の７	(26.2)	(6.2)	(1.8)	－	－	－	－	4.1	第58図遺物№11-080。腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」と推測される。豚頭蓋骨Ｈの下顎骨先端右側面付近より検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　3 図版107の３	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	23.3	6.8	1.1	－	－	－	－	2.6	第58図遺物№11-081。新寛永。豚頭蓋骨Ｆの先端付近より検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　4 図版107の４	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	24.5	5.8	1.2	－	－	－	－	2.8	第58図遺物№11-082。新寛永。豚下顎骨Ａの右側面にほぼ接して検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　5 図版107の５	銭貨	銭文不明	(15)の７	(21.7) ～ (23.9)	(5.3)	(1.6)	－	－	－	－	3.0	形状が、隅丸方形を呈する。仙臺通寶か。腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」と推測される。豚頭蓋骨ＣとＤの間から検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　6 図版107の６	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	22.4	6.9 ～ 7.2	1.0	－	－	－	－	2.1	新寛永。豚頭蓋骨Ｂに共伴して出土。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　7 図版107の７	銭貨	寛永通寶 （不明）	(15)の７	23.1	5.9 ～ 6.0	1.1	－	－	－	－	2.8	豚頭蓋骨Ｅの下顎骨内側から検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第90図　8 図版107の８	銭貨	銭文不明	(15)の７	(24.7)	(3.6) ～ (6.0)	(2.1)	－	－	－	－	3.1	腐食が著しい。いわゆる「鉄銭」と推測される。豚頭蓋骨Ｅの下顎骨内側から検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第91図　1 図版108の１	銭貨	寛永通寶 （新）	(15)の７	24.7	6.5	1.3	－	－	－	－	3.2	新寛永。豚頭蓋骨ＧとＨの間から検出。	第11号墓 墓庭 第１層
第91図　2 図版108の２	銭貨	寛永通寶 （古）	(15)の７	24.8	5.4	1.3	－	－	－	－	3.6	古寛永。豚頭蓋骨ＧとＨの間から検出	第11号墓 墓庭 第１層
第91図　3 図版108の３	銭貨	寛永通寶 （不明）	(15)の７	(23.3)	(5.8)	1.2	－	－	－	－	1.5	全体の約３分の２程が残存。	第13号墓 墓口前 第１層
第91図　4 図版108の４	銭貨	桐１銭青銅貨	(15)の７	23.1	－	1.3	－	－	－	－	3.4	昭和十(1935)年鋳造。	第11号墓 墓庭 攪乱土坑内
第91図　5 図版108の５	銭貨	１円アルミ貨	(15)の７	20.0	－	1.6	－	－	－	－	1.0	昭和五十一(1976)年鋳造。	第３号墓 墓庭 第１層
第91図　6 図版108の６	銭貨	１円アルミ貨	(15)の７	20.0	－	1.6	－	－	－	－	1.0	昭和四十八(1973)年鋳造。	第３号墓 墓庭 第１層
第91図　7 図版108の７	銭貨	１円アルミ貨	(15)の７	20.0	－	1.6	－	－	－	－	1.0	昭和四十九(1974)年鋳造。	第３号墓 墓庭 第１層
第91図　8 図版108の８	銭貨	10円青銅貨	(15)の７	23.7	－	1.6	－	－	－	－	4.5	平成五(1993)年鋳造。	第３号墓 墓庭 第１層
第92図　1 図版109の１	墓誌	－	(15)の10	210.0	53.5	29.0	－	－	－	－	465.0	砥石を転用している。墨書で、「一九六四年十二月五日竣工／元亮室千代建立之」と記される。	第１号墓 墓室 奥棚１中央
第92図　2 図版109の２	石製品 硯	－	(15)の11	142.5	66.0	22.0	－	－	－	－	385.0	第23図遺物№001(青)。	第３号墓 墓庭 第１層

1（図版 92 の１）　2（図版 92 の５）　3（図版 98 の８）　4（図版 92 の７）　5（図版 95 の２）　6（図版 95 の４）
7（図版 92 の６）　8（図版 96 の６）　9（図版 98 の６）　10（図版 99 の１）　11（図版 99 の２）



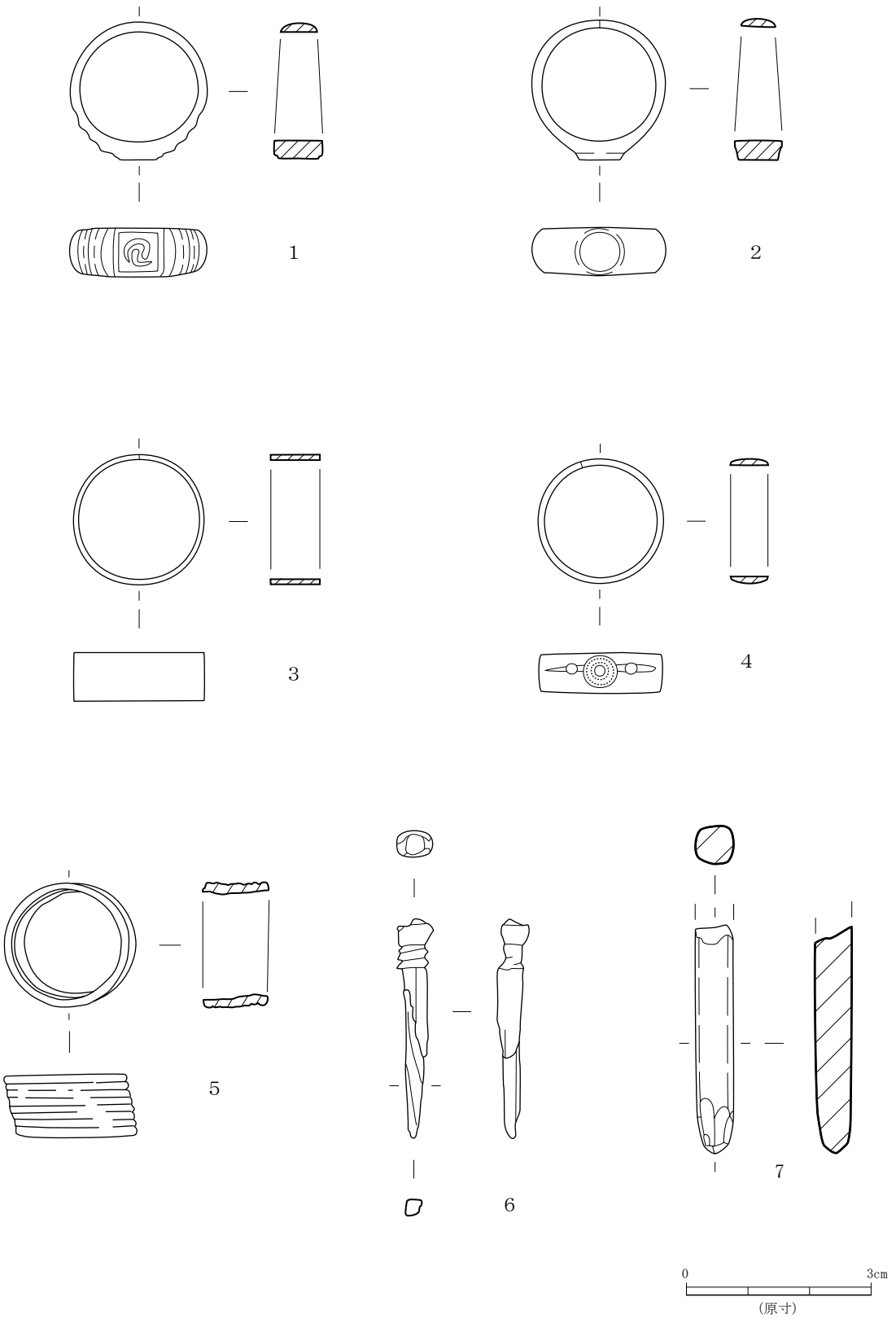
第 85 図　本土産磁器（１～３）　　ガラス製品（９）
沖縄産施釉陶器（４～７）　陶製品 煙管（10・11）
沖縄産無釉陶器（８）

1（図版 100 の３）　2（図版 100 の４）　3（図版 100 の９）　4（図版 101 の５）　5（図版 101 の４）
6（図版 104 の８）



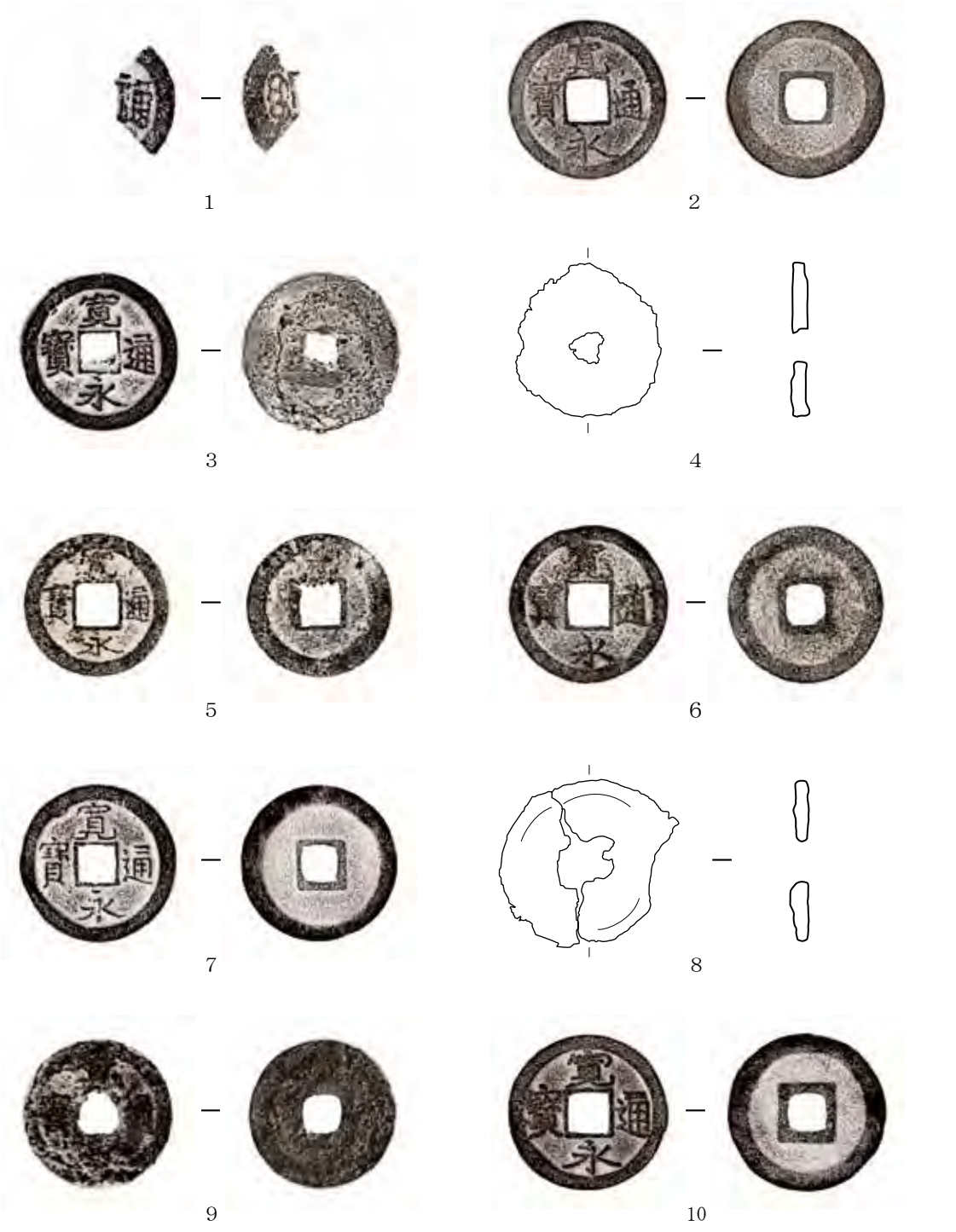
第 86 図　金属製品 煙管（１～３）
金属製品 簪（４・５）
金属製品 刀子（６）

1（図版 102 の５）　2（図版 102 の６）　3（図版 102 の７）　4（図版 102 の８）　5（図版 102 の 20）
6（図版 103 の10）　7（図版 98 の５）



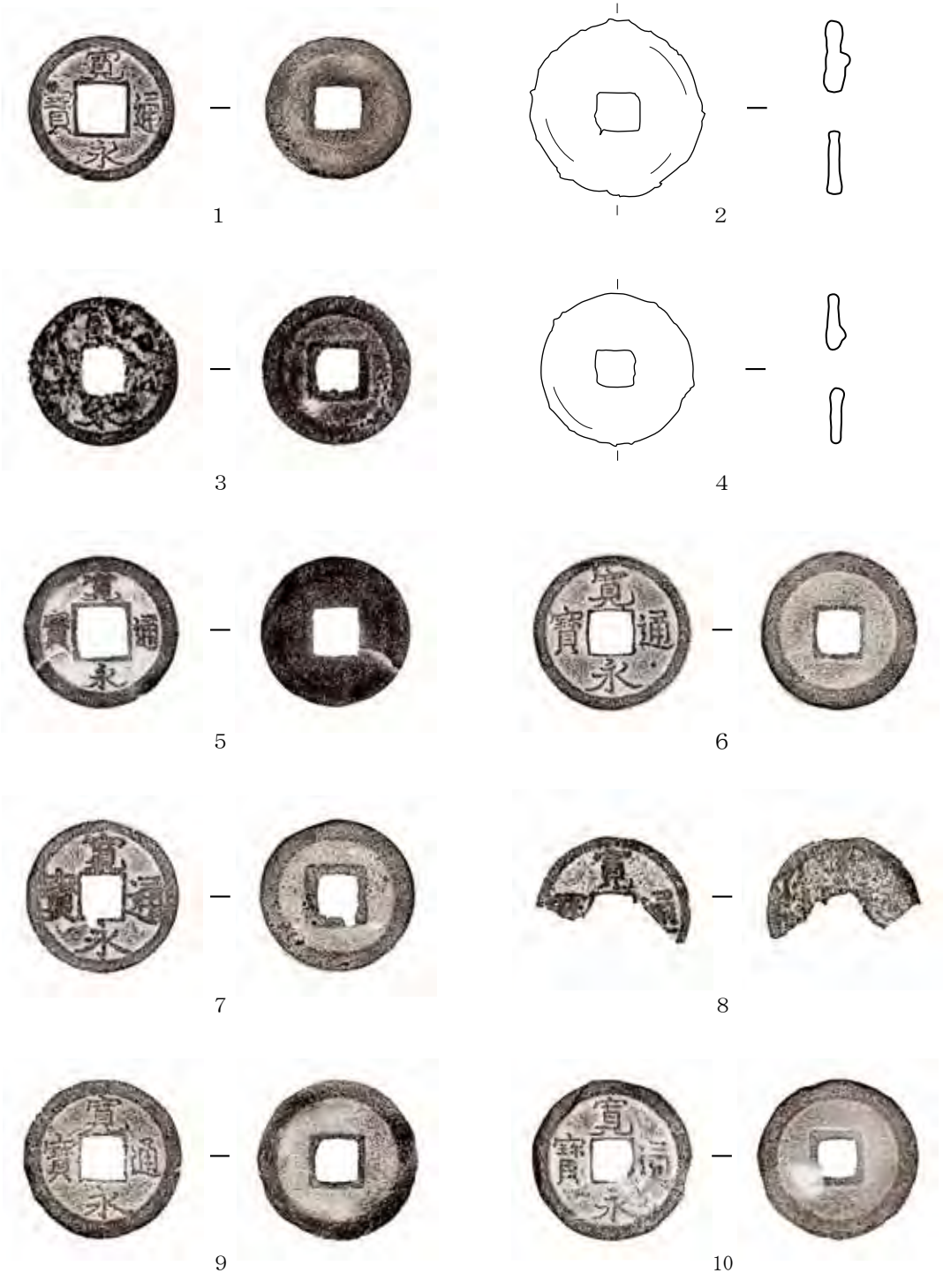
第 87 図　金属製品 指輪（１～５）
鉄釘（６）
石製品 石筆？（７）

1（図版 105 の１）　2（図版 105 の２）　3（図版 105 の３）　4（図版 105 の４）　5（図版 105 の５）
6（図版 105 の６）　7（図版 105 の７）　8（図版 105 の８）　9（図版 105 の９）　10（図版 105 の10）



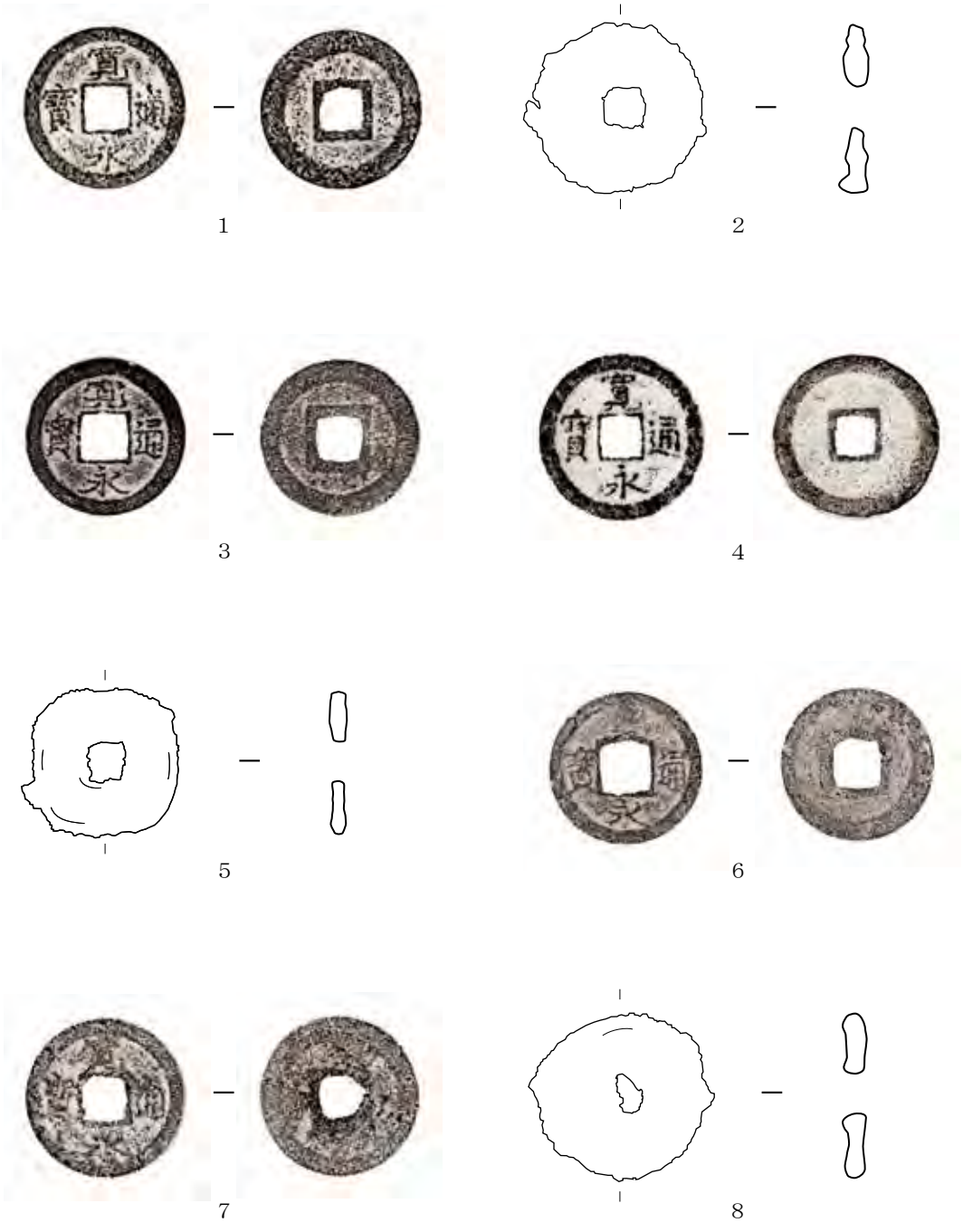
第 88 図　銭貨

1（図版 106 の１）　2（図版 106 の２）　3（図版 106 の３）　4（図版 106 の４）　5（図版 106 の５）
6（図版 106 の６）　7（図版 106 の７）　8（図版 106 の８）　9（図版 106 の９）　10（図版 106 の10）



第 89 図　銭貨

1（図版 107 の１）　2（図版 107 の２）　3（図版 107 の３）　4（図版 107 の４）　5（図版 107 の５）
6（図版 107 の６）　7（図版 107 の７）　8（図版 107 の８）



第 90 図　銭貨

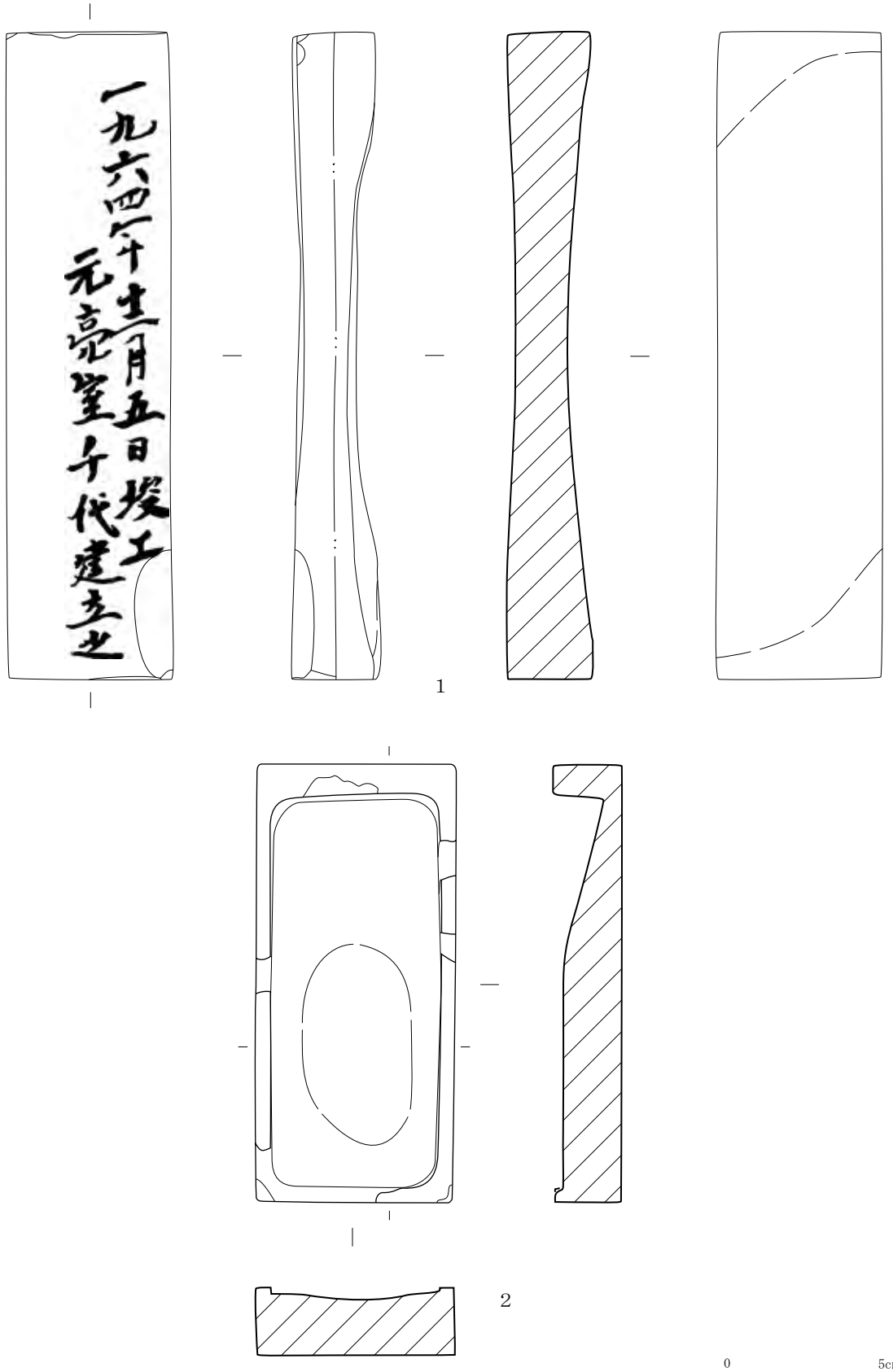
1（図版 108 の１）　2（図版 108 の２）　3（図版 108 の３）　4（図版 108 の４）　5（図版 108 の５）
6（図版 108 の６）　7（図版 108 の７）　8（図版 108 の８）

1　2　3　4　5　6　7　8

0　3cm
（原寸）

第 91 図　銭貨

1（図版 109 の１） 2（図版 109 の２）



第 92 図　墓誌（１）
石製品 硯（２）

第Ⅵ章　まとめ

今回実施したフクヂ山古墓群緊急発掘調査では、計 11 基の古墓を調査対象とした。また、これらの古墓に伴って、仮墓と推測される小型墓が計６基確認された。第６・13 号墓の２基も、その規模が小さく、仮墓的機能を有するものと考えられる。これらはコンクリート製のものが多く、殆どが新しい時期のものであることが考えられる。しかし、本墓とは別の仮墓という存在が、沖縄の人々がもつ死や墓に対する観念を如実に表出しているのではないかと感じられる。ある観念や意図に基づいて人が構築した遺構であるという意味において、新しいものであるからと言って決して軽んじられるべきものではなかろう。ただ、難しいのは、平成 26 年度に調査対象となる古墓の遺骨移転作業に立会った際に感じたことだが、根掘り葉掘りと墓の被葬者や遺構・遺物について聞くことは、墓所有者の複雑な事情や感情に深く立ち入ることにもなりかねないという点である。墓所有者の尊厳を尊重しつつ、個々の事例から帰納的に整理して一般化し、これら仮墓を含む古墓の遺構・遺物のもつ精神的意味合いについて、今後、より詳細に知ることができれば良いがと考える。

今回調査した殆どの墓は発掘調査が行われる直前まで使用されており、調査対象となる埋蔵文化財としての古墓が決して遠い過去に打ち捨てられたものではないことを改めて認識させられた。墓は造られた時から現代まで葬送や祭祀に伴う人々の儀礼が数多行われてきており、長く続いてきた人の活動の集積が調査対象である古墓の現在の姿として残されている。墓は、怖い場所でありながら、ある意味人々の心の拠り所として機能しており、ただ単に被葬者の遺骨を安置するだけの場所ではない。墓は、祖先や亡くなった家族・親族たちの「魂」を安定して安んずることのできる場所であると言えるかもしれない。そのような観点から古墓を観察し、発掘調査を行なうことにより、新たに発見できる遺構・遺物がないか、今後考えていきたい。

以下で、今回調査を行った各古墓の概要について述べ、まとめとしたい。

第１号墓は、墓室から検出された墓誌によれば、1964（昭和 39）年頃に造営されたものであるという。1964 年は、東京オリンピック開催の年である。墓誌の内容をそのまま受け取れば、第１号墓は現代に造られた墓ということになる。しかし、墓室が地山（ニービ）を掘削した横穴であり、また墓の外観に石積みが多用され、墓の全体的な形態が古色を呈する。古い墓を改修して造られた可能性がないか、検討の余地がある。第１号墓と他の古墓との大きな違いは、石積みの石材として粟石が使用されている点である。近代墓である可能性が高い第３・４号墓や、近代墓の可能性がある第 11 号墓では、確認する限りにおいて石材に粟石を使用してはいなかった。石材に粟石を使用していることが、戦後（1945 年以降）に造られた現代墓と、近代以前の古墓とを分ける一つの指標となる可能性がある。今後さらなる事例を集め、検証していくことが必要であろう。

第２号墓は、掘込墓であったと推測されるが、墓室上の岩盤が崩落し、墓室が崩壊していた。サンミデーにモルタルが施されていたことから、近代以降に墓室が崩壊したことが分かる。沖縄戦時の戦闘に伴い、墓室が破壊された可能性が考えられる。墓室底面から銃弾が数発検出されたことも、その可能性を補強している。

第３・４号墓は、第Ⅳ章で述べたように近代以降の墓であると考えられる。附編３で報告しているように、第３・４号墓の墓室前壁より採取した漆喰と考えられた資料が実はセメントを用いたもので、

モルタルと判定された。第３・４号墓の墓庭から検出された被葬者の副葬品であったと推測される遺物から、近代となる時期に造られた墓である可能性が高いと推測される。

第５号墓については、第Ⅳ章で述べたように第３・４号墓より後に造られた墓である可能性がある。第６号墓は、第５号墓のサンミデーから連続する墓庭石垣に造られていることから、第５号墓と同時期か、それより後に造られたことが考えられる。

第７～９号墓となる計３基の古墓は、相互に何らかの関係性を有する墓であると推測される。第７号墓の墓室は、出窓状の棚を有するものから階段状の棚へと改修された可能性がある。そうであれば、第７号墓は、近世に造られた墓であることも考えられる。隣接する第８・９号墓は、墓の規模、外観がほぼ同じで、２基ともに墓室構築墓となるマチ墓(巻墓)であることから、同時期に造営された墓となろうか。２基ともに疑似亀甲墓となるもので、墓堂の外観が宜野座村松田に所在する幸地屋ヌ墓(幸地屋門中の墓)によく似ることから、近世末に造営された墓である可能性がある。しかし、附編３で報告するように、第９号墓の墓室左壁から採取された漆喰様の物質がセメントを用いた建材であり、モルタルと判定されたことから、近代以降に造られた墓である可能性もある。近世の墓の造営方法を用いて、近代に墓を造ったものであろうか。そうであれば、第８・９号墓は、近代でもやや古い時期に造営された墓であることも考えられよう。

第Ⅳ章で述べたように、第７号墓の正面向きと墓口・羨道の中心ラインの伸びる方向が一致しないことから、弁ヶ嶽へ墓口を向けないための工夫ではないかとした。この事から類推して、墓正面が第７号墓と概ね同じ方角を向くように見える第１・３・４・８・９・11 号墓となる計６基の古墓についても検討し、これらの古墓の正面が弁ヶ嶽へは向いていないと結論付けた。また、これらの古墓は、首里城へも向いていないことを付け加えておく。このようなフンシー(風水)の観点から古墓について検討することにおいても、有意な調査結果を導きうる可能性があることを示していると考える。

第 11 号墓は、典型的な亀甲墓である。第Ⅳ章で述べたように、近代墓となる可能性がある。第 11 号墓の墓庭からは、多種多様な遺物が多く検出されており、長期にわたる人の活動の集積を感じさせる。墓庭南東隅から集中して検出された本土産や沖縄産となる小杯・瓶等の陶磁器、煙管、簪、指輪、銭貨等の遺物は、元々は被葬者の副葬品であったと推測される。それが、洗骨儀礼に伴い、墓庭に廃棄されたものであろう。今後、発掘調査での検出時に、これらの廃棄された副葬品をある程度グルーピングすることができれば、その古墓において最低で何回の洗骨儀礼が行われたのか、推測することがある程度可能かもしれない。今後の調査方法に関する課題である。特筆されるべき遺物の出土状況として、墓庭中央からの豚頭蓋骨８個体分の検出が挙げられる。このような古墓での明らかな獣骨の埋納は、これまでの全体的な古墓の調査件数に比して検出例が少ない。第 11 号墓が近代墓となる可能性があることから、墓での獣骨埋納の発掘調査に伴う明確な検出事例として、時期的な下限を示すものかもしれない。

第 13 号墓は、上述したように仮墓的機能を有するものであることが考えられる。当該墓に伴うことが明確な蔵骨器は、得られていない。近接する第９号墓との関係が考慮される。

附　　編

附編１　フクヂ山古墓群出土の人骨資料について

株式会社 文化財サービス
土肥 直美
青山 奈緒

１．はじめに

那覇市文化財課によるフクヂ山古墓群の発掘調査によって第７・９・11 号墓墓庭より出土した人骨について報告する。検出された人骨はいずれも表面の風化が著しく、骨端が残るものも皆無であった。すべて原位置から移動されたものと推定され、出土量もわずかである。以下に概要を報告する。

２．調査の方法

人骨分析の際に用いた年齢区分は Knussman（1988）を参考に、乳児（出生－１歳）、幼児（１－６歳）、小児（約６－約 14 歳）、若年（約 14－約 20 歳）、成年（約 20－約 40 歳）、熟年（約 40－約 60 歳）、老年（約 60 歳以上）とした。計測については、計測可能な残存状態にあるものが無く、実施していない。

３．出土人骨の概要

１）人骨鑑定の結果

人骨はクリーニング後、出土箇所および取り上げ№ごとに接合作業を行った。その後、部位の鑑定を行って被葬者数（最小個体数）推定の基礎資料とした。すなわち、性別・年齢・左右を考慮しながら、同側・同一部位をカウントし、得られた最大数をもって推定最小個体数とした。各墓ごとの結果を以下に示す。

第７号墓 墓庭南東隅(遺物集中部) 第 37・38 図

性別不明成人の腓骨片（左）が１点、足の基節骨２点が検出された。すべてが同一個体のものかは判断できない。

第９号墓 墓庭左側第１層(人骨(焼骨)片集中部) 第 48 図

すべて被熱を受けた焼骨片である。骨片がわずかで、四肢骨片である。個体数等は不明である。

第 11 号墓 墓庭 第 57・58 図

表１に示すように、部位ごとのカウント数から推定される被葬者数は成人男性２体、成

人女性２体、性別不明成人２体である。左右、性別等が判定できる資料は大腿骨、上腕骨、脛骨などわずかであった。その他、頭骨片、指骨、歯などが見られた。

４．まとめ

フクヂ山古墓群第７・９・11 号墓墓庭より検出された人骨はいずれも小破片で数点程度であった。そのため、今回の鑑定結果がそれぞれの墓の本来の被葬者数を反映しているとは言えない。未成人骨は検出されておらず、病変等が見られる資料は確認できなかった。

形態的特徴については、頭蓋、四肢骨も含めて計測可能なものが無いため把握できていない。

参考文献

Knussman R. (1988) Martin/Knussman Anthropologie. Band 1,Stuttgart,Gustav Fischer Verlag.

写真１　第 11 号墓墓庭検出大腿骨
左から【男性右、女性右、男性左、男性左】

表１　第 11 号墓　部位別集計表 / 推定被葬者数

	成　人				備　考
	男性	女性	性別不明	計	
側頭骨 右				0	
側頭骨 左				0	
前頭骨 右				0	
前頭骨 左				0	
下顎骨 右				0	
下顎骨 左				0	
上腕骨 右			1	1	
上腕骨 左				0	
尺骨 右				0	
尺骨 左				0	
橈骨 右				0	
橈骨 左				0	
大腿骨 右	1	2		3	
大腿骨 左	2			2	
脛骨 右			2	2	
脛骨 左				0	
推定最小個体数	2	2	2	4	

表２　人骨鑑定結果一覧

	出土位置	No.	鑑定記録	備考
1	第７号墓　墓庭南東隅	7-020	腓骨（左）	第 38 図。
2	第７号墓　墓庭南東隅	7-021	足基節骨	第 38 図。
3	第７号墓　墓庭南東隅	7-022	足基節骨	第 38 図。
4	第９号墓　墓庭左側第１層		四肢骨等、骨片	焼骨。第 48 図。
5	第 11 号墓　墓庭	11-035	脛骨（右）、腓骨片	第 58 図。
6	第 11 号墓　墓庭	11-036	四肢骨片	第 58 図。
7	第 11 号墓　墓庭	11-037	大腿骨（左・男性）	第 58 図。
8	第 11 号墓　墓庭	11-038	上腕骨（右）、歯（上顎左中切歯）	第 58 図。
9	第 11 号墓　墓庭	11-039	手基節骨、下顎骨片 大腿骨（右・女性）、 歯（下顎右第２小臼歯）	第 58 図。
10	第 11 号墓　墓庭	11-040	大腿骨（左・男性）、骨片	第 58 図。
11	第 11 号墓　墓庭	11-041	頭骨	第 58 図。
12	第 11 号墓　墓庭	11-042	大腿骨（右・女性）、脛骨（右） 大腿骨（右・男性）	第 58 図。
13	第 11 号墓　墓庭	11-043	大腿骨片	第 58 図。
14	第 11 号墓　墓庭	11-044	手基節骨	第 58 図。
15	第 11 号墓　墓庭	11-045	手基節骨、中手骨	第 58 図。
16	第 11 号墓　墓庭	11-066	歯（下顎右第２大臼歯）	第 58 図。
17	第 11 号墓　墓庭	11-067	骨片	第 58 図。

※全て成人骨である。
※性別の記載無いものは性別不明

附編２　フクヂ山古墓群第 11 号墓出土の動物骨資料について

株式会社 文化財サービス
金井 慎司

はじめに

本業務はフクヂ山古墓群第11号墓墓庭から検出された動物骨の種類や部位を明らかにすることが目的である。動物骨は確認できるだけで頭骨が８個体分ある。現地では各々の頭蓋骨が識別できるようにＡ～Ｈの番号が付され、土ごと取り上げが行われているため、詳細な検出作業から実施した。

１．検出作業

動物骨は土ごと取り上げられているため、土の除去作業から行った。すべて状態は良好で、水洗に耐えられるため洗浄作業も並行して行った。Ｂ、Ｅ、Ｇ、Ｈの下顎骨下部より銭貨が検出されている。検出状況を写真で記録し、銭貨は100％エタノールで洗浄作業を行った。動物骨は乾燥後、接合作業を行った。

２．分析

動物骨試料は肉眼観察を行い、形態的特徴から種類および部位の特定を行った。計測は、デジタルノギスを用いて測定した。なお、骨格各部位の名称を図１に、また計測箇所は Deriesh(1976)に従い図２に示す。

３．結果

同定結果を表１に、歯牙の検出状況を表２に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

＜頭蓋骨Ａ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-068＞

左右下顎骨、右下顎第２門歯(乳歯)、左右下顎第３門歯(乳歯)、左右下顎第２門歯、左右下顎第３門歯、左下顎犬歯が確認される。

下顎第２門歯の歯根が完全に形成されておらず、また第３後臼歯が萌出直前であることから 1.5 歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｂ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-069＞

左右上顎骨、左右下顎骨、左右頭頂骨～後頭骨、口蓋骨、基底蝶形骨、基底後頭骨、右岩様骨、右上顎第１臼歯(乳歯)、左上顎第２臼歯(乳歯)、左右上顎第３臼歯(乳歯)、右上顎第２前臼歯、左上顎第３前臼歯、左上顎第４前臼歯、右上顎第１後臼歯、左下顎第３門歯(乳歯)、右下顎第２臼歯(乳歯)、左右下顎第３臼歯(乳歯)、左下顎第１門歯、右下顎犬歯、歯牙片などが確認される。遊離した歯牙の内一部は、上顎骨ないし下顎骨に接合する。また、歯牙片は、形成途中の未出歯牙とみられ、第３後臼歯と思われる。

第１門歯、乳臼歯、第１・２後臼歯が植立することから、１歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｃ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-070＞

左右前頭骨～右頭頂骨・後頭骨、左上顎骨～頬骨、右上顎骨、左側頭骨頬骨突起～後頭顆、左右下顎骨、左右上顎第１門歯(乳歯)、左右上顎第２門歯(乳歯)、左上顎第１門歯、左右上顎第２門歯、左上顎犬歯、左上顎第３前臼歯、左右下顎第３門歯(乳歯)、右下顎犬歯(乳歯)、左下顎第２門歯、左右下顎犬歯、左下顎第３前臼歯、歯牙片が確認される。歯牙片は、形成途中の未出歯牙とみられ、第３後臼歯と思われる。

第２後臼歯が萌出途中であることから、0.5～１歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｄ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-071＞

左上顎骨、右上顎骨～頬骨、右側頭骨～後頭骨顆、左右下顎骨が確認される。この他に、右上顎骨の破片が見られるが、これは頭蓋骨Ｂと接合し、別個体である。

第２門歯は、乳歯が植立し、永久歯が未出状態である。また、小臼歯が植立し、第３後臼歯が萌出準備しはじめている。これより、１～1.5 歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｅ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-072＞

左右上顎骨～口蓋骨、右上顎骨～頬骨、右頭頂骨～後頭骨、左後頭顆～後頭骨静脈突起、左右耳骨胞、基底蝶形骨～基底後頭骨、左右下顎骨、左上顎第３臼歯(乳歯)、左上顎第２門歯、左右上顎第１前臼歯、左下顎第２門歯(乳歯)、左下顎第３門歯(乳歯)、右下顎第１臼歯(乳歯)、右下顎犬歯、右下顎第２前臼歯、右下顎第３前臼歯、歯牙などが確認される。遊離した歯牙の内一部は、上顎骨ないし下顎骨に接合する。

第２・３前臼歯が未出状態、第１・２後臼歯が萌出済み、第３後臼歯も埋没していることから、１歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｆ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-073＞

左右前頭骨～後頭骨、上顎～口蓋骨～右頬骨側頭突起、左右下顎骨、左頬骨側頭突起、左右岩様骨、左右上顎第１門歯(乳歯)、左右上顎第２門歯(乳歯)、左右上顎第３門歯(乳歯)、左右上顎第１門歯、左右上顎第２門歯、左右上顎犬歯、左右上顎第１前臼歯、右上顎第２前臼歯、右上顎第４前臼歯、左右上顎第３後臼歯、左右下顎第２門歯(乳歯)、左右上顎第１門歯、左右上顎第２門歯、左右下顎犬歯、左下顎第２前臼歯、左右下顎第３前臼歯などが確認される。遊離した歯牙の内一部は、上顎骨ないし下顎骨に接合する。左右前頭骨～後頭骨には、解体に伴うとみられるカットマークがみられる。

第２前臼歯が未出状態、第１・２後臼歯が萌出済み、第３後臼歯も埋没していることから、１歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｇ　第 11 号墓墓庭　遺物 No. 11-074＞

左切歯骨、左上顎骨～頬骨、右上顎骨、右頬骨側頭突起、左側頭骨、左後頭顆～後頭骨静脈突起、右耳骨胞、右後頭骨静脈突起、左岩様骨、左右下顎骨、右上顎第 1 門歯(乳歯)、左右上顎第２門歯(乳歯)、右上顎第２門歯、右上顎第２後臼歯、左下顎犬歯、歯牙などが確認される。

第２前臼歯が未出状態、第１・２後臼歯が萌出済み、第３後臼歯も埋没していることから、１歳程度と考えられる。

＜頭蓋骨Ｈ　第 11 号墓墓庭　遺物 No.11-075＞

左上顎骨～後頭骨顆、左右下顎骨、右上顎骨、右頭頂骨～後頭骨、右頬骨、右側頭骨、左右岩様骨、右耳骨胞、左上顎犬歯(乳歯)、左上顎犬歯、左右上顎第３後臼歯、右下顎第２門歯(乳歯)、右下顎第３門歯(乳歯)、右下顎犬歯などが確認される。右側頭骨は、頭頂骨～後頭骨と接合する。

第２後臼歯が萌出途中であることから、0.5～１歳程度と考えられる。

＜第 11 号墓墓庭　遺物 No.11-083＞

右下顎犬歯である。

＜第 11 号墓墓庭　破片ＣＤＥ＞

右岩様骨、左後頭骨静脈突起、後頭骨、左上顎第１門歯(乳歯)、左上顎第２門歯(乳歯)、左右上顎第３門歯、右上顎第２前臼歯、左上顎第３前臼歯、右下顎第２門歯(乳歯)、右下顎第１門歯、左下顎第２門歯などが確認される。この内、後頭骨が頭蓋骨Ｄに由来するとみられ、左後頭骨静脈突起も頭蓋骨Ｄに由来する可能性がある。また、右上顎第２前臼歯は、頭蓋骨Ｅに由来する可能性がある。

＜第 11 号墓墓庭　破片ＧＨ＞

左後頭骨静脈突起、左上顎第２前臼歯、左上顎第２後臼歯などが確認される。左後頭骨静脈突起と左上顎第２後臼歯は頭蓋骨Ｇと接合し、左上顎第２前臼歯は、頭蓋骨Ｈと接合する。

４．考察

古墓を発掘調査すると脊椎動物遺体が出土することが知られている。今回、古墓の墓庭中央に埋設されていた動物はイノシシ属(ブタ)で、四肢骨が検出されておらず頭蓋のみを埋設している。いずれも第３大臼歯が萌出する以前の 1.5 歳以下の若い個体であり、成獣が含まれない。

このような事例について、菅原(2013)は埋葬遺構の検出数が少ない点から、落成という全ての墓に共通する要素に繋がるものとは考えにくいとした。浦添市の事例を集成し、埋設行為の形態が統一された規格ではないとし、埋葬遺構を構築することができる経済力や社会的地位が求められるか頭蓋骨を埋設する特別な葬送儀礼を行う必要のある状況などの理由が考えられるとした。また、浦添市内の近世墓に埋納されたブタ類18試料は第３大臼歯が萌出完了に達していない若齢個体とされる点はフクヂ山古墓群のものと共通している。

フクヂ山古墓群から８個体のイノシシ属(ブタ)の頭蓋骨が出土したことは、沖縄の古墓研究に大きく貢献するものである。今後、民俗学と考古学の両面から情報を蓄積し、比較と検討を重ねていくことが重要である。

引用文献

Deriesh, A., von den, 1976. A Guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Mus. Bull.(1):i-ix,1-137.

加藤　嘉太郎・山内　昭二,2003,新編　家畜比較解剖図説　上巻.養賢堂,315p.

西本　豊弘・松井　章編著,1999,考古学と動物学.考古学と自然科学②,同成社,210p.

菅原広史, 2013, 近世墓から出土する脊椎動物遺体, 沖縄考古学会 2013 年度研究発表 琉球近世墓の考古学 発表報告編, 沖縄考古学会, 59-67.
玉木順彦, 1996, 民俗学からみた伊祖の入め御拝領墓, 浦添市文化財調査報告書第24号 伊祖の入め御拝領墓発掘調査報告書, 浦添市教育委員会, 31-32.

フクヂ山古墓群第 11 号墓墓庭検出動物骨分析

検出遺物記録

ブタ頭蓋骨	遺物№	検出状況	備考	共伴遺物	
A	11-068	頭蓋骨のみ 上顎は 歯骨のみ	下顎骨に無数の傷	銭貨3点 （寛永通寶）	寛永通寶3点は、発掘調査時に検出された。2点は、新寛永である。
B	11-069	頭蓋骨のみ	下顎骨表面に無数の傷	銭貨2点 （寛永通寶）	2点ともに、新寛永。1点は発掘調査時に、もう1点はB採取後のクリーニング作業に伴い検出された。クリーニング作業時に得られた1点は、下顎骨（前方中央）下から裏面を上にして検出された。
C	11-070	頭蓋骨のみ	D・Eとまとまって出土	銭貨2点	1点は寛永通寶（新寛永）となる資料で、D下顎骨先端の左側面に接して検出された。もう1点は腐食の著しい鉄銭で、C・D下顎骨の間から検出された。仙臺通寶の可能性がある。
D	11-071	頭蓋骨のみ	C・Eとまとまって出土 側頭骨に若干の傷あり		
E	11-072	頭蓋骨のみ	C・Dとまとまって出土 下顎骨に若干のキズあり	銭貨2点	1点は寛永通寶、もう1点は腐食の著しい鉄銭である。2点ともに、E採取後のクリーニング作業時に検出された。下顎骨（臼歯側）下から、寛永通寶は裏面を上にして、鉄銭は側面を上にして検出された。
F	11-073	頭蓋骨のみ	残存状況が最も良い 下顎骨に無数の傷あり	銭貨1点 （寛永通寶）	新寛永である。F先端付近より検出された。
G	11-074	頭蓋骨のみ 上顎骨は 一部残存	Hとまとまって出土 下顎骨に若干のキズあり	銭貨3点	1点は腐食の著しい鉄銭で、発掘調査時に検出された。H先端の右側面付近に接して検出された。残り2点は寛永通寶（古寛永・新寛永）で、G・H採取後のクリーニング作業時に検出された。下顎骨（前方）下から、裏面を上にして検出された。
H	11-075	頭蓋骨のみ	Gとまとまって出土		
	11-083	歯骨のみ	D・E周辺より出土	―	

表 1. 骨同定結果 (1)

試料	遺構	遺物No.		種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
頭蓋骨A	11号墓 墓庭	遺物No.068		イノシシ属(ブタ)	下顎骨	左 右	破損	1 +	
					下顎第2門歯(乳歯)	右	略完	1	
					下顎第3門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					下顎第2門歯	左	略完	1	歯根未形成
						右	略完	1	歯根未形成
					下顎第3門歯	左	略完	1	
						右	略完	1	
					下顎犬歯	左	破片	1	
頭蓋骨B	11号墓 墓庭	遺物No.069	B1	イノシシ属(ブタ)	上顎骨	左	破片	1	
						右	破片	1	
					下顎骨	左 右	破損	1	
			B2	イノシシ属(ブタ)	頭頂骨～後頭骨	左 右	破片	1	
					口蓋骨		破片	1	
					頭蓋		破片	2	
			B3	イノシシ属(ブタ)	上顎骨		破片	2	
					基底蝶形骨		破片	1	
					基底後頭骨		破片	1	
					頭蓋		破片	17	
			B4	イノシシ属(ブタ)	岩様骨	右	破片	1	
					頭蓋		破片	8	
			B5	イノシシ属(ブタ)	上顎第1臼歯(乳歯)	右	略完	1	
					上顎第2臼歯(乳歯)	左	略完	1	
					上顎第3臼歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	上顎骨と接合
					上顎第2前臼歯	右	略完	1	歯根未形成
					上顎第3前臼歯	左	略完	1	歯根未形成,上顎骨と接合
					上顎第4前臼歯	左	略完	1	歯根未形成,上顎骨と接合
					上顎第1後臼歯	右	略完	1	上顎骨と接合
					下顎第3門歯(乳歯)	左	略完	1	
					下顎第2臼歯(乳歯)	右	略完	1	
					下顎第3臼歯(乳歯)	左	略完	1	下顎骨と接合
						右	略完	1	下顎骨と接合
					下顎第1門歯	左	略完	1	下顎骨と接合
					下顎犬歯	右	破片	1	
					歯牙		破片	1	未出歯牙
							破片	1	
頭蓋骨C	11号墓 墓庭	遺物No.070	C1	イノシシ属(ブタ)	前頭骨～右頭頂骨・後頭骨	左 右	破片	1	
					上顎骨～類骨	左	破片	1	
					上顎骨	右	破片	1	
					側頭骨類骨突起～後頭顆	左	破片	1	
					下顎骨	左 右	破損	1	
			C2	イノシシ属(ブタ)	上顎第1門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第2門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第1門歯	左	略完	1	未出歯牙
					上顎第2門歯	左	破損	1	未出歯牙
						右	破損	1	未出歯牙
					上顎犬歯	左	破片	1	
					上顎第3前臼歯	左	略完	1	歯根未形成
					下顎第3門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					下顎犬歯(乳歯)	右	略完	1	
					下顎第2門歯	左	歯冠部片	1	未出歯牙
					下顎犬歯	左	破損	1	未出歯牙
						右	破損	1	未出歯牙
					下顎第3前臼歯	左	略完	1	歯根未形成
					歯牙		歯冠部片	1	
							歯根部片	2	
頭蓋骨D	11号墓 墓庭	遺物No.071	D1	イノシシ属(ブタ)	上顎骨	左	破片	1	
					上顎骨～類骨	右	破片	1	M3接合が天地逆
					側頭骨～後頭骨顆	右	破片	1	
					下顎骨	左 右	破損	1	
					上顎骨	右	破片	1	頭蓋骨Bと接合

表 1. 骨同定結果 (2)

試料	遺構	遺物No.		種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
頭蓋骨E	11号墓 墓庭	遺物No.072	E1	イノシシ属(ブタ)	上顎骨～口蓋骨	左 右	破片	1	
			E2	イノシシ属(ブタ)	上顎骨～頬骨	右	破片	1	
					頭頂骨～後頭骨	右	破片	1	
					後頭顆～後頭骨静脈突起	左	破片	1	
					耳骨胞	左	破片	1	
						右	破片	1	
					基底蝶形骨～基底後頭骨		破片	1	
					頭蓋		破片	1	
					下顎骨	左 右	破損	1	
			E3	イノシシ属(ブタ)	上顎第3臼歯(乳歯)	左	破損	1	
					上顎第2門歯	左	破片	1	
					下顎第2門歯(乳歯)	左	略完	1	下顎骨と接合
					下顎第3門歯(乳歯)	左	略完	1	下顎骨と接合
					下顎第1臼歯(乳歯)	右	略完	1	下顎骨と接合
					下顎犬歯	右	破片	1	下顎骨と接合
					上顎第1前臼歯	左	略完	1	頭蓋骨と接合
						右	略完	1	頭蓋骨と接合
					下顎第2前臼歯	右	略完	1	歯根未形成,下顎骨と接合
					下顎第3前臼歯	右	略完	1	歯根未形成,下顎骨と接合
					歯牙		破片	4	未出歯牙
頭蓋骨F	11号墓 墓庭	遺物No.073	F1	イノシシ属(ブタ)	前頭骨～後頭骨	左 右	破片	1	
			F2	イノシシ属(ブタ)	上顎～口蓋骨～右頬骨側頭突起		破片	1	
			F3	イノシシ属(ブタ)	下顎骨	左	破片	1	
						右	破片	1	
			F4	イノシシ属(ブタ)	頬骨側頭突起	左	破片	1	
					頭蓋		破片	156 +	
			F5	イノシシ属(ブタ)	岩様骨	左	破片	1	
						右	破片	1	
					上顎第1門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第2門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第3門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第1門歯	左	破片	1	未出歯牙
						右	破片	1	未出歯牙
					上顎第2門歯	左	破片	1	未出歯牙
						右	破片	1	未出歯牙
					上顎犬歯	左	破片	1	
						右	破片	1	
					上顎第1前臼歯	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第2前臼歯	右	略完	1	上顎骨に接合
					上顎第4前臼歯	右	略完	1	上顎骨に接合
					上顎第3後臼歯	左	略完	1	歯根未形成
						右	略完	1	歯根未形成
					下顎第2門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第1門歯	左	略完	1	未出歯牙
						右	略完	1	未出歯牙
					上顎第2門歯	左	略完	1	未出歯牙
						右	略完	1	未出歯牙
					下顎犬歯	左	破片	1	
						右	破片	1	
					下顎第2前臼歯	左	略完	1	下顎骨に接合
					下顎第3前臼歯	左	略完	1	下顎骨に接合
						右	略完	1	下顎骨に接合
頭蓋骨G	11号墓 墓庭	遺物No.074	G1	イノシシ属(ブタ)	上顎骨～頬骨	左	破片	1	
					上顎骨	右	破片	1	
					頬骨側頭突起	右	破片	1	
					側頭骨	左	破片	1	
					後頭顆～後頭骨静脈突起	左	破片	1	
					耳骨胞	右	破片	1	
					後頭骨静脈突起	右	破片	1	
					頭蓋		破片	1	
					下顎骨	左	破片	1	
						右	破片	1	

表 1. 骨同定結果 (3)

試料	遺構	遺物No.		種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
			G2	イノシシ属(ブタ)	岩様骨	左	破片	1	
					切歯骨	左	破片	1	
					頭蓋		破片	1	
			G3	イノシシ属(ブタ)	上顎第1門歯(乳歯)	右	略完	1	
					上顎第2門歯(乳歯)	左	略完	1	
						右	略完	1	
					上顎第2門歯	右	略完	1	未出歯牙
					上顎第2後臼歯	右	略完	1	歯根未形成
					下顎犬歯	左	破片	1	
					歯牙		歯根部片	3	
頭蓋骨H	11号墓 墓庭	遺物No.075	H1	イノシシ属(ブタ)	上顎骨～後頭骨顆	左	破片	1	歯牙破損
					下顎骨	左 右	破片	1	歯牙破損
			H2	イノシシ属(ブタ)	上顎骨	右	破片	1	歯牙破損
					頭頂骨～後頭骨	右	破片	1	
					頬骨	右	破片	1	
			H3	イノシシ属(ブタ)	側頭骨	右	破片	1	頭頂骨～後頭骨と接合
					岩様骨	左	破片	1	
						右	破片	1	
					耳骨胞	右	破片	1	
					頭蓋		破片	61	
			H4	イノシシ属(ブタ)	上顎犬歯(乳歯)	左	破片	1	
					上顎犬歯	左	破片	1	
					上顎第3後臼歯	左	略完	1	歯根未形成
						右	略完	1	歯根未形成
					下顎第2門歯(乳歯)	右	略完	1	
					下顎第3門歯(乳歯)	右	略完	1	
					下顎犬歯	右	破片	1	
－	11号墓 墓庭	遺物No.083		イノシシ属(ブタ)	下顎犬歯	右	破片	1	
－	11号墓 墓庭	破片CDE	CDE1	イノシシ属(ブタ)	岩様骨	右	破片	1	
					後頭骨静脈突起	左	破片	1	頭蓋骨D個体?
					後頭骨		破片	1	頭蓋骨D個体
					上顎第1門歯(乳歯)	左	略完	1	
					上顎第3門歯	左	略完	1	未出歯牙
					頭蓋		破片	85 +	
			CDE2	イノシシ属(ブタ)	上顎第2門歯(乳歯)	左	略完	1	
					上顎第3門歯	右	略完	1	未出歯牙
					上顎第2前臼歯	右	略完	1	歯根未形成,頭蓋骨E個体?
					上顎第3前臼歯	左	略完	1	歯根未形成
					下顎第2門歯(乳歯)	右	略完	1	
					下顎第1門歯	右	破片	1	
					下顎第2門歯	左	略完	1	歯根未形成
－	11号墓 墓庭	破片GH		イノシシ属(ブタ)	後頭骨静脈突起	左	破片	1	頭蓋骨Gと接合
					上顎第2前臼歯	左	略完	1	歯根未形成,頭蓋骨Hと接合
					上顎第2後臼歯	左	略完	1	歯根未形成,頭蓋骨Gと接合
					頭蓋		破片	4	

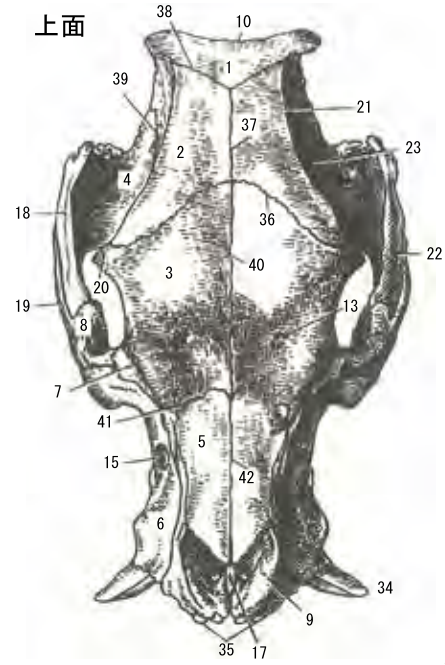
表 2. 歯牙検出状況

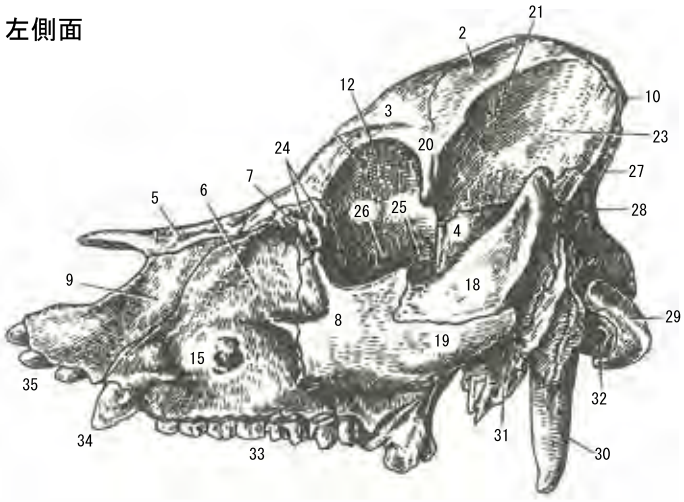
試料・部位		右											左										
頭蓋骨A	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
										○	○				○								
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		△	◎	◎	◎	×			◎	○	▲	◎		▲	○	○				×	×	×	△
頭蓋骨B	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			◎	◎	△														△	△	◎	◎	
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					◎														○	○			
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					◎	○									○					◎			
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		△	◎	◎	△	△	△		○				◎							△	◎	◎	△
頭蓋骨C	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			△	×		▲					▲		▲	▲		○					×	△	
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					×	×	×				○	○	○	○				×	×	×			
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					×		×		○	○				○	○			×	×	×			
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			◎	◎	△				○			△	△			○			○		◎	◎	
頭蓋骨D	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		△	×	×	×	◎													△	△			
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
											◎												
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		△	×	◎	◎	◎			◎		△	◎	◎			◎		×	×	×	◎	◎	△
頭蓋骨E	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			◎	◎		△		◎	◎					▲		◎	◎			△	◎	◎	
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					◎													◎		○			
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
							◎				◎			◎				◎					
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			◎	◎	△	△	△		◎	◎		◎	◎		◎	◎		△	△	△	◎	◎	
頭蓋骨F	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		▲	◎	◎	◎	◎	◎	○	○		▲	▲	▲	▲		○	○		◎	◎	◎	◎	▲
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
										○	○	○	○	○	○								
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
											○			○									
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		△	◎	◎	◎	◎			○		▲	○	○	▲		○		△	◎	◎	◎	◎	△
頭蓋骨G	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			▲	×				×			▲		×	×							×	△	
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					×	×	×				○	○		○					×	×			
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					◎	◎	×					◎	◎						◎	◎			
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		△	×	×					×							○		△			×	×	△
頭蓋骨H	上顎骨	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		▲	×	×	×	×	△		▲								×	△	×		×	×	▲
					dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					×				△														
	下顎骨				dm3	dm2	dm1		dc	di3	di2	di1	di1	di2	di3	dc		dm1	dm2	dm3			
					×	×	×			○	○		×	◎	◎			×	×	×			
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
			△	×					○			△	△			◎					×	△	

凡例)　◎:植立　△:未出　○:遊離　▲:遊離(未出)　×:歯根残存

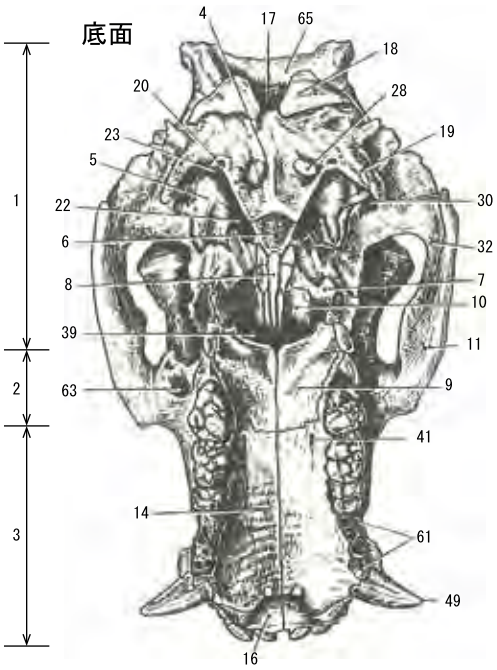
表 3. 骨計測結果

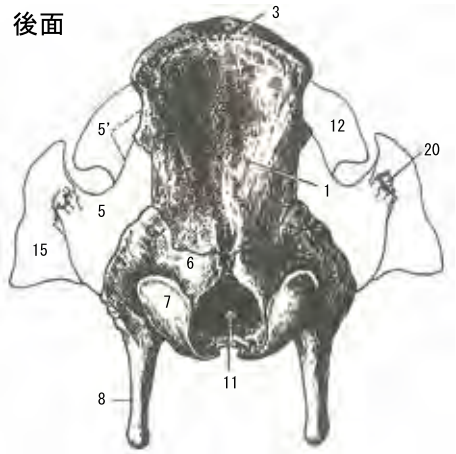
試料		頭蓋骨 A		頭蓋骨 B		頭蓋骨 C		頭蓋骨 D		頭蓋骨 E		頭蓋骨 F		頭蓋骨 G		頭蓋骨 H	
計測箇所		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
脳頭蓋	29									39.83	40.53						
	29a									32.00	32.38						
	34			54.71								50.47					
	35			49.80								70.03					
	36			21.93								20.29					
	37			20 ±								20.16					
	38			54.75								67.29					
	39			49.30								56.31					
	40			29.92								38.90					
	41					86 ±						81 ±					
	44									65.93		62.70					
	45			83 ±								88 ±					
下顎骨	1				168.92	181.28	182.46			189.21	187.63					180 ±	
	3	58.08	61.54		59.39	51.10	51.82	55.81	54.42	51.60	50.93	52.90	57.88	55.98	56.71	49.28	
	5		143 ±		140 ±	135.04	135 ±	133.03		139.70	138 ±	137.59	140.29	145.78	148.05	131.32	
	9a		34 ±					34 ±	33 ±	32.76	34.89		36 ±				
	11									31.12	30 ±				33.08	32.64	
	12	45 ±		31.66		47.32		50.03		51.42				52.25		43.04	
	13					92 ±						104 ±	105.83				
	14											95.58	96 ±		90.39		
	15											102.89			102.26		
	16b	−	38.69	37.67	37.65	36.98	35.51	37.11	39.19	39.79	38.37	41.57	40.35	37.26	38.07	33.71	34 ±
	16c	−	38 ±			38.89	37.93	37.12		40.74	40.00		38.38		41.64		





1. 後頭骨　2. 頭頂骨　3. 前頭骨　4. 側頭骨　5. 鼻骨　6. 上顎骨　7. 涙骨　8. 頬骨
9. 切歯骨　10. 項稜　12. 眼窩口　13. 眼窩上孔　15. 眼窩下孔　17. 切歯間裂　18. 側頭骨頬骨突起
19. 頬骨側頭突起　20. 前頭骨頬骨突起　21. 側頭線　22. 頬骨弓　23. 側頭窩　24. 涙孔　25. 視神経管
26. 篩骨孔　27. 後頭鱗項部　28. 外耳孔　29. 後頭顆　30. 後頭骨頸静脈突起　31. 側頭骨岩様部
32. 舌下神経管　33. 臼歯　34. 犬歯　35. 切歯　36. 環状縫合　37. 矢状縫合　38. ラムダ縫合
39. 鱗状縫合　40. 前頭間縫合　41. 前頭鼻骨縫合　42. 鼻骨間縫合





1. 後頭鱗　3. 項稜　5. 側頭骨　5'. 側頭線
6. 後頭骨外側部　7. 後頭顆　8. 頸静脈突起
11. 大孔　12. 頭頂骨　15. 側頭骨頬骨突起　20. 外耳孔

1. 頭蓋腔底部　2. 後鼻孔部　3. 口蓋部　4. 基底後頭骨
5. 側頭骨鼓室部　6. 基底後蝶形骨　7. 翼状骨　8. 鋤骨
9. 口蓋骨水平板　10. 口蓋骨水平板　11. 頬骨側頭突起
14. 上顎骨口蓋突起　16. 切歯骨体　17. 大孔　18. 後頭顆
19. 静脈突起　20. 舌下神経管　22. 破裂孔　23. 頸静脈切痕
28. 筋結節　30. 茎乳突起　32. 側頭骨頬骨突起　39. 後鼻孔
41. 大口蓋孔　49. 犬歯　61. 上顎骨歯槽　63. 上顎孔　65. 後頭鱗

図 1.　ブタ頭蓋骨各部の名称（加藤・山内, 2003 に加筆）

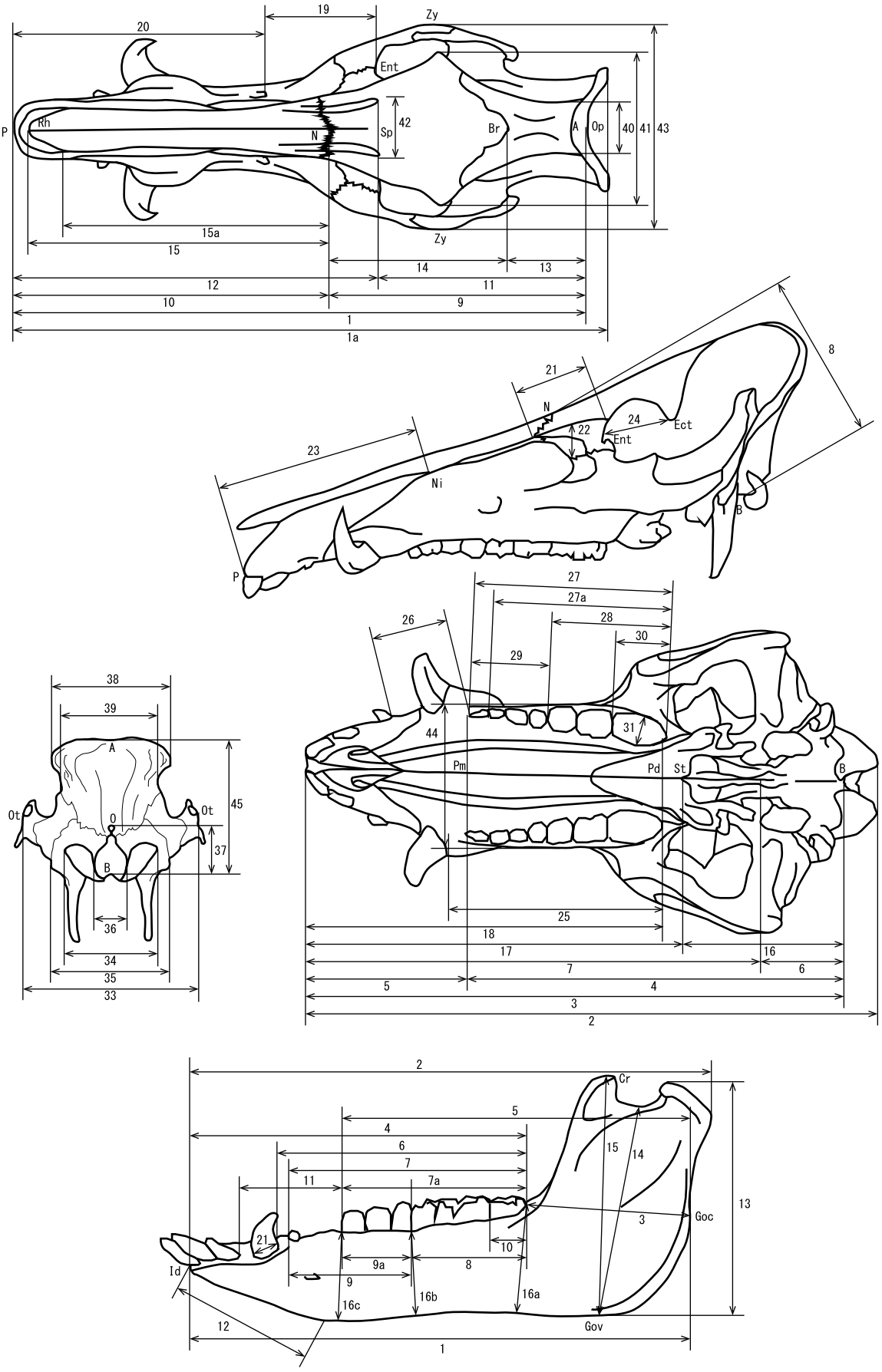
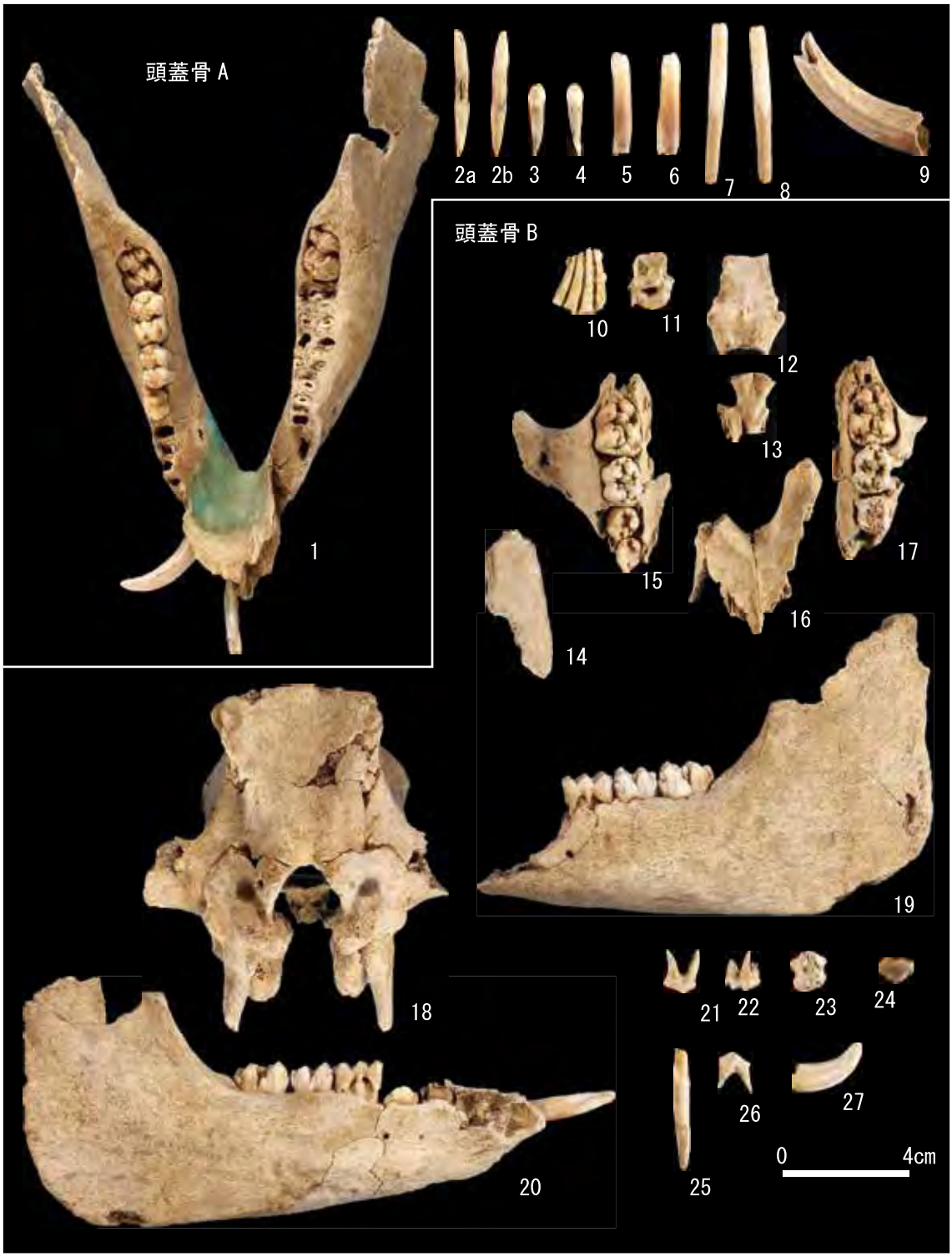


図 2.　イノシシ属（ブタ）計測箇所（Deriesh, 1976 に加筆）

図版1　出土骨(1)



1. 左右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
2. 右下顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
3. 左下顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
4. 右下顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
5. 左下顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
6. 右下顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
7. 左下顎第 3 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
8. 右下顎第 3 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
9. 左下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 068)
10. 二枚貝類殻 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
11. 右岩様骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
12. 基底後頭骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
13. 基底蝶形骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
14. 上顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
15. 左上顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
16. 口蓋骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
17. 右上顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
18. 左右頭頂骨～後頭骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
19. 左下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
20. 右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
21. 右上顎第 1 臼歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
22. 左上顎第 2 臼歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
23. 左上顎第 3 臼歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
24. 右上顎第 2 前臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
25. 左下顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
26. 右下顎第 2 臼歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)
27. 右下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 069)

図版2　出土骨(2)

28. 左側頭骨頬骨突起～後頭顆 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
29. 左右前頭骨～右頭頂骨・後頭骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
30. 左上顎骨～頬骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
31. 右上顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
32. 左右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
33. 左上顎第 1 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
34. 右上顎第 1 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
35. 左上顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
36. 右上顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
37. 左上顎第 1 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
38. 左上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
39. 右上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
40. 左上顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
41. 左上顎第 3 前臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
42. 右下顎犬歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
43. 左下顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
44. 右下顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
45. 左下顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
46. 左下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
47. 右下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)
48. 左下顎第 3 前臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 070)

図版3　出土骨(3)

49. イタヤガイ科殻 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 071)
50. イタヤガイ科殻 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 071)
51. 右側頭骨～後頭骨顆 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 071)
52. 左上顎骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 071)
53. 右上顎骨～頬骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 071)
54. 左右下顎骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 071)
55. 右頭頂骨～後頭骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
56. 左後頭顆～後頭骨静脈突起 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
57. 左耳骨胞 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
58. 右耳骨胞 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
59. 基底蝶形骨～基底後頭骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
60. 右上顎骨～頬骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
61. 左右上顎骨～口蓋骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
62. 左上顎第 3 臼歯 (乳歯) (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
63. 左上顎第 2 門歯 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)
64. 左右下顎骨 (11 号墓　墓庭；遺物 No. 072)

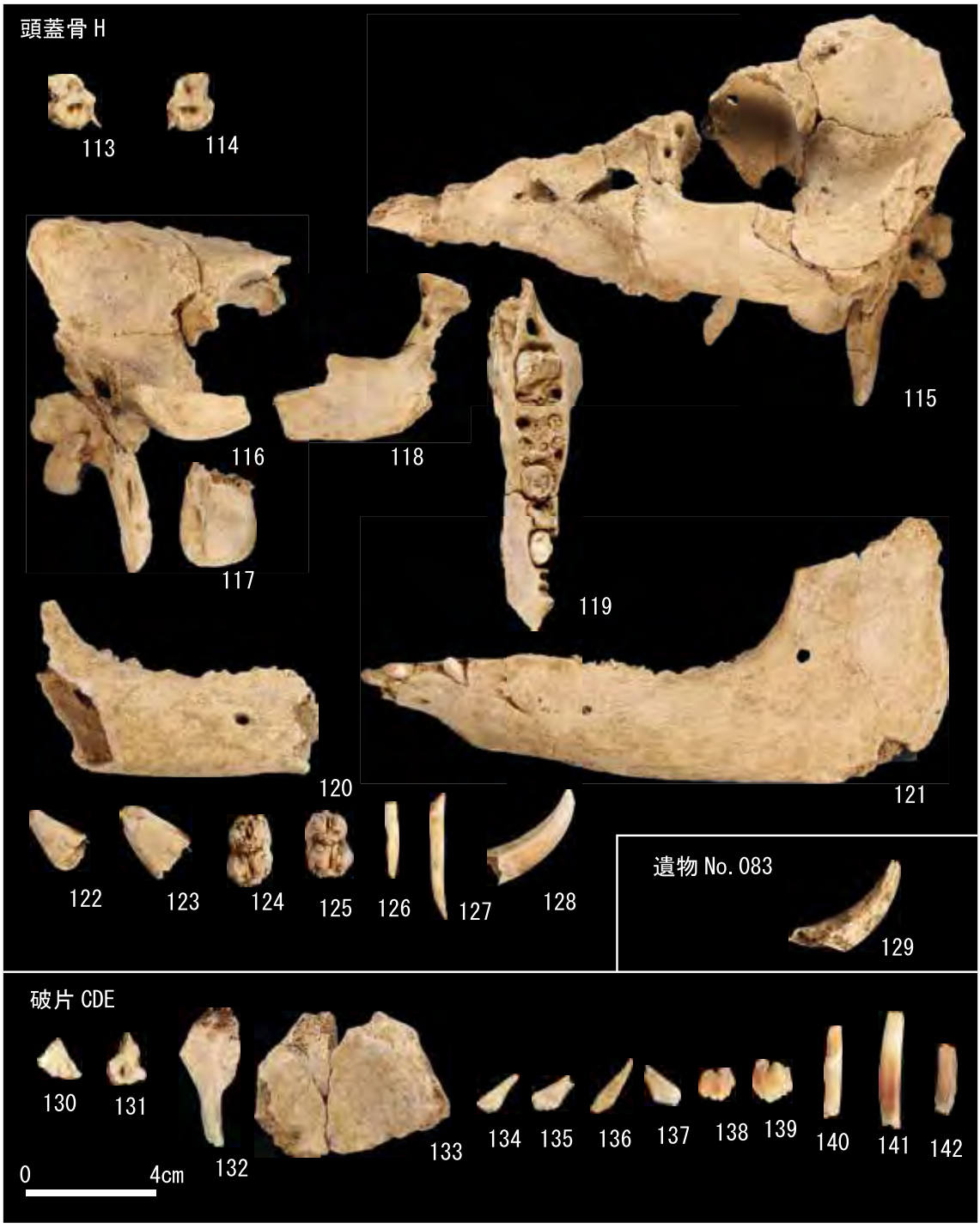
図版4　出土骨(4)

65. 左右前頭骨～後頭骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
66. 左頬骨側頭突起 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
67. 左岩様骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
68. 右岩様骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
69. 上顎～口蓋骨～右頬骨側頭突起 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
70. 左下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
71. 右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
72. 左上顎第 1 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
73. 右上顎第 1 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
74. 左上顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
75. 右上顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
76. 左上顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
77. 右上顎第 3 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
78. 左上顎第 1 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
79. 右上顎第 1 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
80. 左上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
81. 右上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
82. 左上顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
83. 右上顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
84. 左上顎第 1 前臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
85. 右上顎第 1 前臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
86. 左上顎第 3 後臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
87. 右上顎第 3 後臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
88. 左下顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
89. 右下顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
90. 左上顎第 1 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
91. 右上顎第 1 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
92. 左上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
93. 右上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
94. 左下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)
95. 右下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 073)

図版5　出土骨(5)

96. 左後頭顆～後頭骨静脈突起 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
97. 左側頭骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
98. 左岩様骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
99. 左上顎骨～頬骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
100. 左切歯骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
101. 右上顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
102. 右耳骨胞 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
103. 右後頭骨静脈突起 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
104. 右頬骨側頭突起 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
105. 右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
106. 左下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
107. 右上顎第 1 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
108. 左上顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
109. 右上顎第 2 門歯 (乳歯) (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
110. 右上顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
111. 右上顎第 2 後臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)
112. 左下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 074)

図版6　出土骨(6)



113. 左岩様骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
114. 右岩様骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
115. 左上顎骨～後頭骨顆 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
116. 右頭頂骨～後頭骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
117. 右耳骨胞 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
118. 右頬骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
119. 右上顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
120. 左右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
121. 左右下顎骨 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
122. 左上顎犬歯 (乳歯)(11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
123. 左上顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
124. 左上顎第 3 後臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
125. 右上顎第 3 後臼歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
126. 右下顎第 2 門歯 (乳歯)(11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
127. 右下顎第 3 門歯 (乳歯)(11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
128. 右下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 075)
129. 右下顎犬歯 (11 号墓 墓庭；遺物 No. 083)
130. 二枚貝類殻 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
131. 右岩様骨 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
132. 左後頭骨静脈突起 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
133. 後頭骨 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
134. 左上顎第 1 門歯 (乳歯)(11 号墓 墓庭；破片 CDE)
135. 左上顎第 3 門歯 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
136. 右上顎第 3 門歯 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
137. 左上顎第 2 門歯 (乳歯)(11 号墓 墓庭；破片 CDE)
138. 右上顎第 2 前臼歯 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
139. 左上顎第 3 前臼歯 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
140. 右下顎第 2 門歯 (乳歯)(11 号墓 墓庭；破片 CDE)
141. 右下顎第 1 門歯 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)
142. 左下顎第 2 門歯 (11 号墓 墓庭；破片 CDE)

附編３　フクヂ山古墓群より検出した漆喰資料について

パリノ・サーヴェイ株式会社
管理者　上田　圭一
担当者　上田　圭一
分析者　石岡　智武
坂元　秀平

＜目次＞

はじめに
１.試料
２.分析方法
（１）X 線回折分析
（２）薄片作製観察
３.結果
（１）X 線回折分析
（２）薄片作製観察
４.考察

＜図表・図版一覧＞

表 1.　分析試料
表 2.　X 線回折分析による検出鉱物

図 1.　No.1　第 3 号墓　墓室前壁の不定方位法 X 線回折チャート
図 2.　No.2　第 4 号墓　墓室前壁の不定方位法 X 線回折チャート
図 3.　No.3　第 5 号墓　墓室前壁の不定方位法 X 線回折チャート
図 4.　No.4　第 8 号墓　屋根の不定方位法 X 線回折チャート
図 5.　No.5　第 9 号墓　屋根の不定方位法 X 線回折チャート
図 6.　No.6　第 9 号墓　墓室左壁の不定方位法 X 線回折チャート

図版 1　試料
図版 2　薄片(1)
図版 3　薄片(2)

はじめに

フクヂ山古墓群は、那覇市に所在する近世から近現代の古墓である。採取された漆喰様の石灰質試料について、その材質を明らかにするために、薄片観察およびX線回折分析を行った。薄片観察では、構成される鉱物、岩片、基質を確認し、X 線回折では薄片観察では同定できない微細鉱物の検出同定を行った。以下にその結果を報告する。

1.試料

試料は、表1に示される6点の試料である。フクヂ山古墓群の第3号墓～第5号墓、第8号墓～第9号墓より採取された白色物質であり、その構成物や組織を確認するために、薄片作製鑑定やX線回折分析を実施した。

表1. 分析試料

試料№.	墓番号	出土地点	備考
No.1	第3号墓	墓室前壁	
No.2	第4号墓	墓室前壁	切石間より採取
No.3	第5号墓	墓室前壁	切石間より採取
No.4	第8号墓	屋根	
No.5	第9号墓	屋根	
No.6	第9号墓	墓室左壁	

2.分析方法

(1)X線回折分析

試料をダイヤモンドカッターにて切断、整形した後、乾燥機において60℃以下で12時間以上乾燥させる。乾燥後、振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）を用いて粉砕・混合し、粉末試料（200mesh, 95%pass）とする。粉末試料は、Ｘ線回折用アルミニウムホルダーに充填し、不定方位試料を作成する。作成した不定方位試料は、Ｘ線回折測定装置を用いて以下の条件で測定する。不定方位法X線回折試験は、試料中に含まれる主要な鉱物の種類を明らかにすることを目的としている。

装置：理学電気製MultiFlex
Target：Ｃｕ（Ｋα）
Monochrometer：Graphite湾曲
Voltage：40KV
Current：40mA
Detector：SC
Calculation Mode：cps
Divergency Slit：1°
Scattering Slit：1°
Recieving Slit：0.3mm
Scanning Speed：2° /min
Scanning Mode：連続法
Sampling Range：0.02°
Scanning Range：2～61°

(2)薄片作製観察

薄片観察は、試料を0.03mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片を作成するために試料をダイヤモンドカッターにより15×30×15mm程度の直方体(これより小さい試料は適宜の大きさ)に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、＃180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で＃2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

3.結果

(1)X 線回折分析

試験結果の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、JCPDS (Joint Committee on Powder Diffraction Standards) の PDF (Powder Data File) をデータベースとしたX線粉末回折線解析プログラム JADE により検索し、同定した。X線回折チャートを図 1～6 に示す。図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。検出鉱物の量比は、最強回折線の回折強度(cps)から、多量(>5000cps)、中量(2,500～5,000cps)、少量(500～2,500cps)、微量(250～500cps)およびきわめて微量(<250cps)という基準で判定した。以下の文中においては、回折チャートの同定に使用した PDF データの鉱物名(英名)は括弧内に記している。

表 2. X 線回折分析による検出鉱物

試料No.	墓番号	出土地点	検出鉱物							
			石英	斜長石	雲母鉱物	方解石	アラゴナイト	ポルトランダイト	ハイドロカルマイト	レピドクロサイト
No.1	第3号墓	墓室前壁	△	±	±	△	＋		±	
No.2	第4号墓	墓室前壁	○	±	±	△	±			
No.3	第5号墓	墓室前壁	±			◎				
No.4	第8号墓	屋根	＋			◎				
No.5	第9号墓	屋根	△			◎				
No.6	第9号墓	墓室左壁	±			△	±	△		±

量比 ◎:多量, ○:中量, △:少量, ＋:微量, ±:きわめて微量.

1) No.1　第 3 号墓　墓室前壁

不定方位法回折試験により、少量の石英(quartz)・方解石(calcite)、微量のアラゴナイト(aragonite)およびきわめて微量の斜長石(albite)・雲母鉱物(musocovite)・ハイドロカルマイト(hydrocalumite)が検出される。主要鉱物の方解石は、3.04Å(2θ：29.4°)に尖度の高い最強回折線を示す。ハイドロカルマイトは、7.8Å(2θ：11.3°)に微弱な最強回折線を示すのみであるが、セメント水和物の可能性が示唆される。

2) No.2　第 4 号墓　墓室前壁

不定方位法回折試験により、中量の石英(quartz)、少量の方解石(calcite)およびきわめて微量の斜長石(albite)・雲母鉱物(musocovite)・アラゴナイト(aragonite)が検出される。アラゴナイトの回折線は微弱であるが、3.40Å(2θ：26.2°)に最強回折線が検出される。

3) No.3　第 5 号墓　墓室前壁

不定方位法回折試験により、多量の方解石(calcite)およびきわめて微量の石英(quartz)が検出される。方解石の回折線は尖度が高く明瞭であり、3.03Å(2θ：29.5°)に最強回折線、2.28Å(2θ：39.5°)に第二強線、2.09Å(2θ：43.3°)に第三強線を示すほか、高次の弱い回折線も多数検出される。

4)No.4　第 8 号墓　屋根

不定方位法回折試験により、多量の方解石(calcite)および微量の石英(quartz)が検出される。方解石を主要鉱物とする回折パターンは、No.3　第 5 号墓　墓室前壁の試料と類似する。方解石は、3.03Å(2θ：29.5°)、2.09Å(2θ：43.3°)および 2.28Å(2θ：39.5°)に尖度の高い三強線を示す。

5)No.5　第 9 号墓　屋根

不定方位法回折試験により、多量の方解石(calcite)および少量の石英(quartz)が検出される。全体的な回折パターンは、No.4　第 8 号墓　屋根の試料と類似するが、石英の回折線がやや強い。方解石

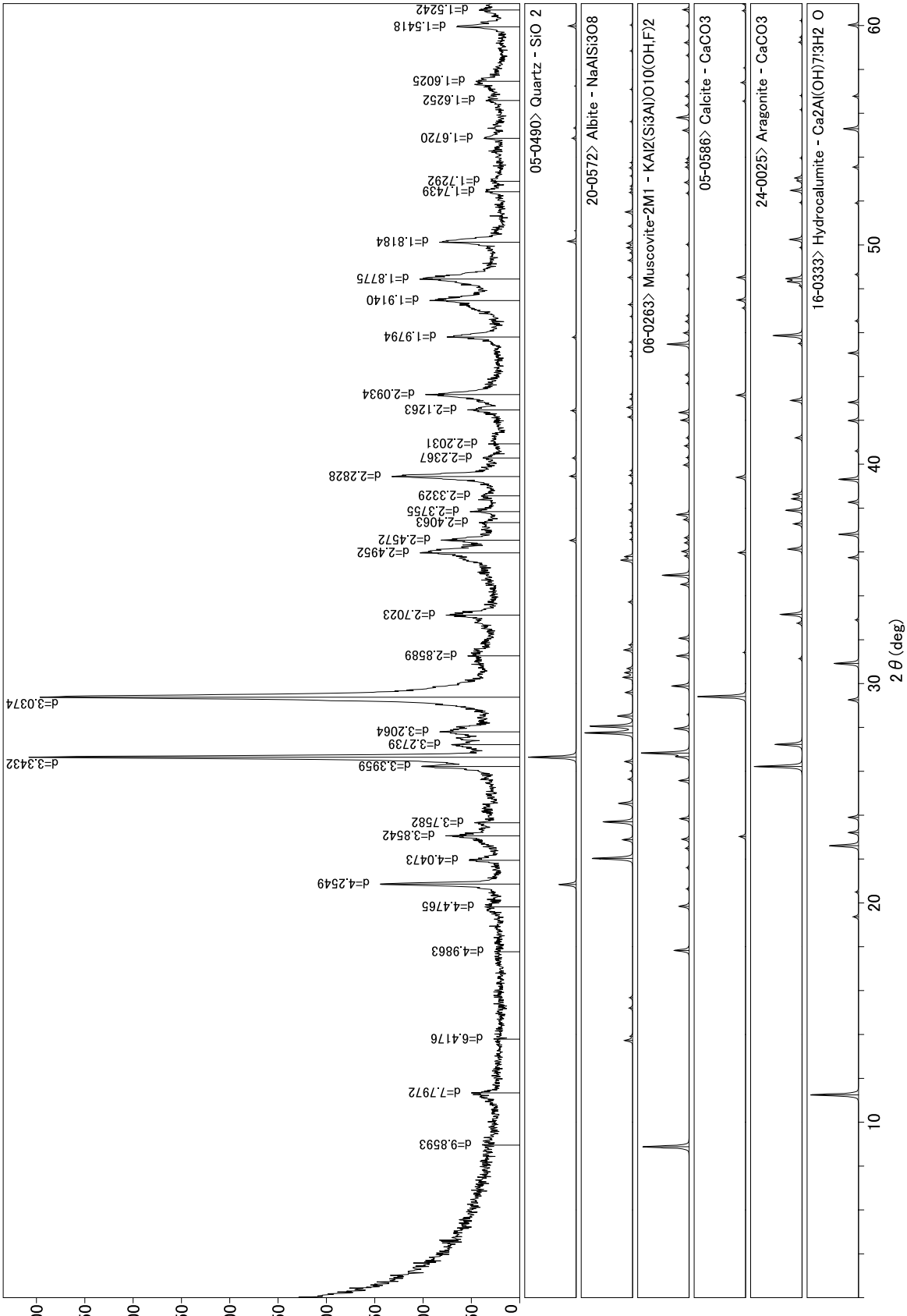


図 1. No.1 第 3 号墓 墓室前壁の不定方位法 X 線回折チャート

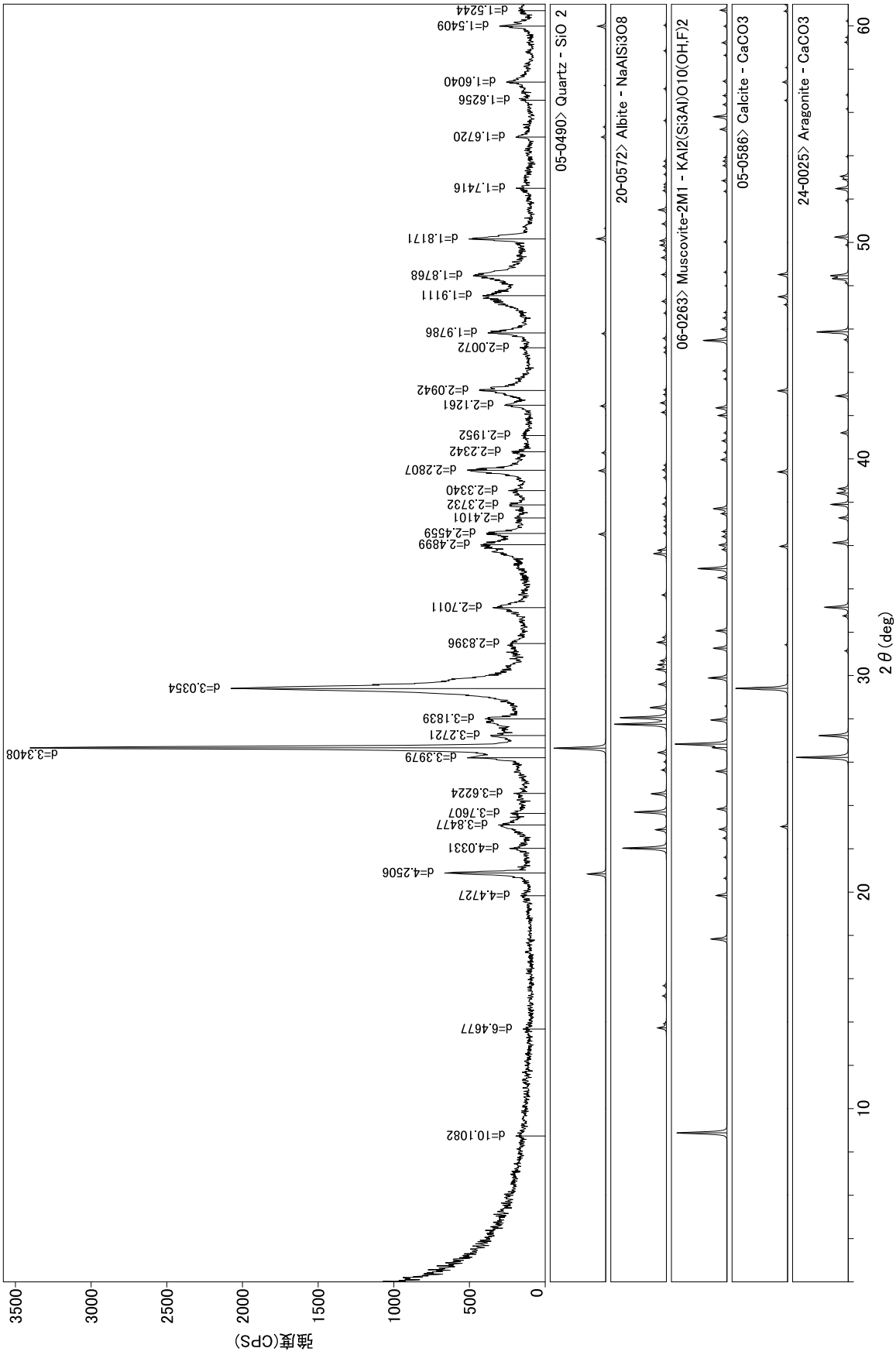


図 2.　No.2　第 4 号墓　墓室前壁の不定方位法 X 線回折チャート

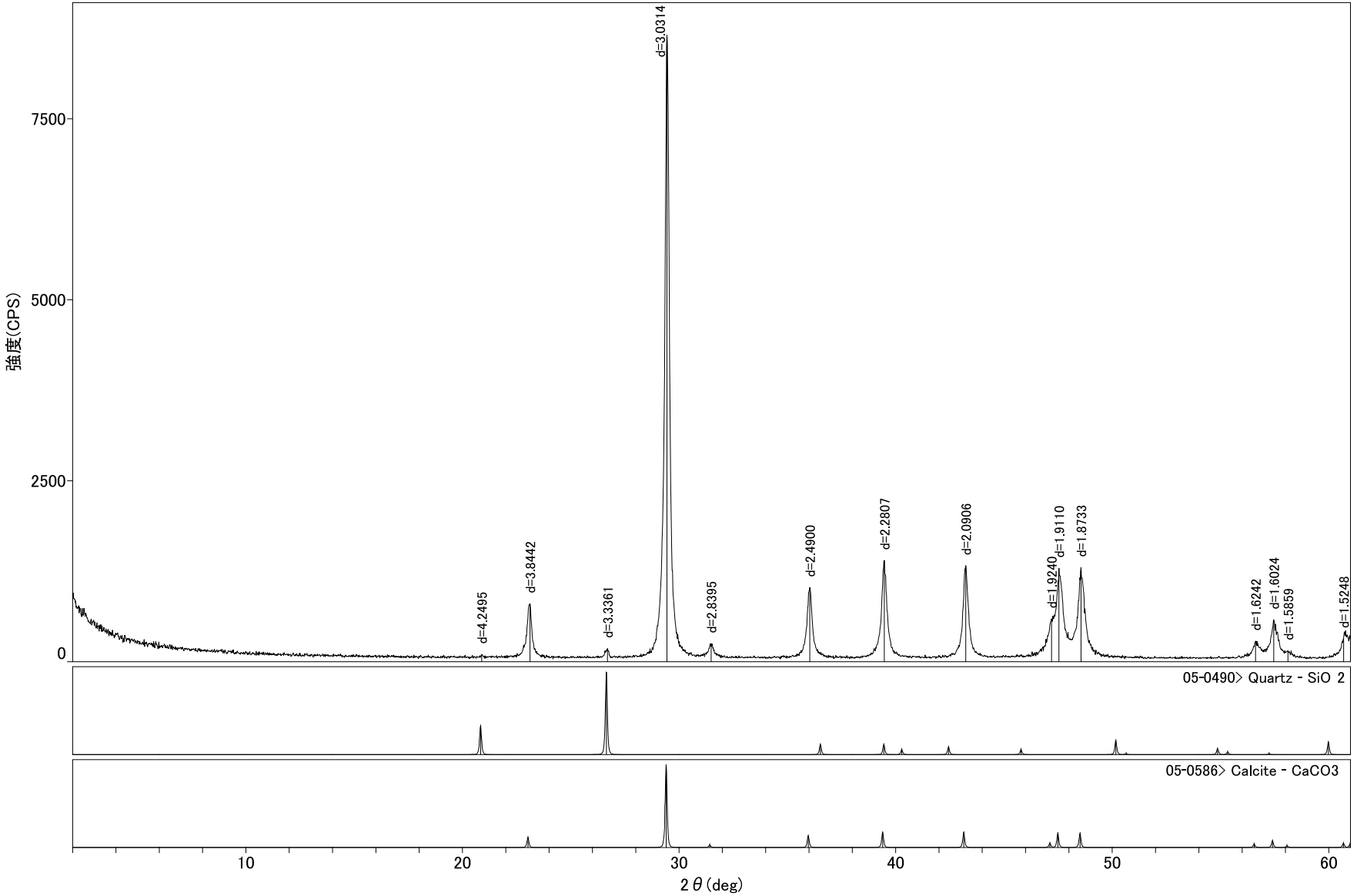


図 3. No.3 第 5 号墓 墓室前壁の不定方位法 X 線回折チャート

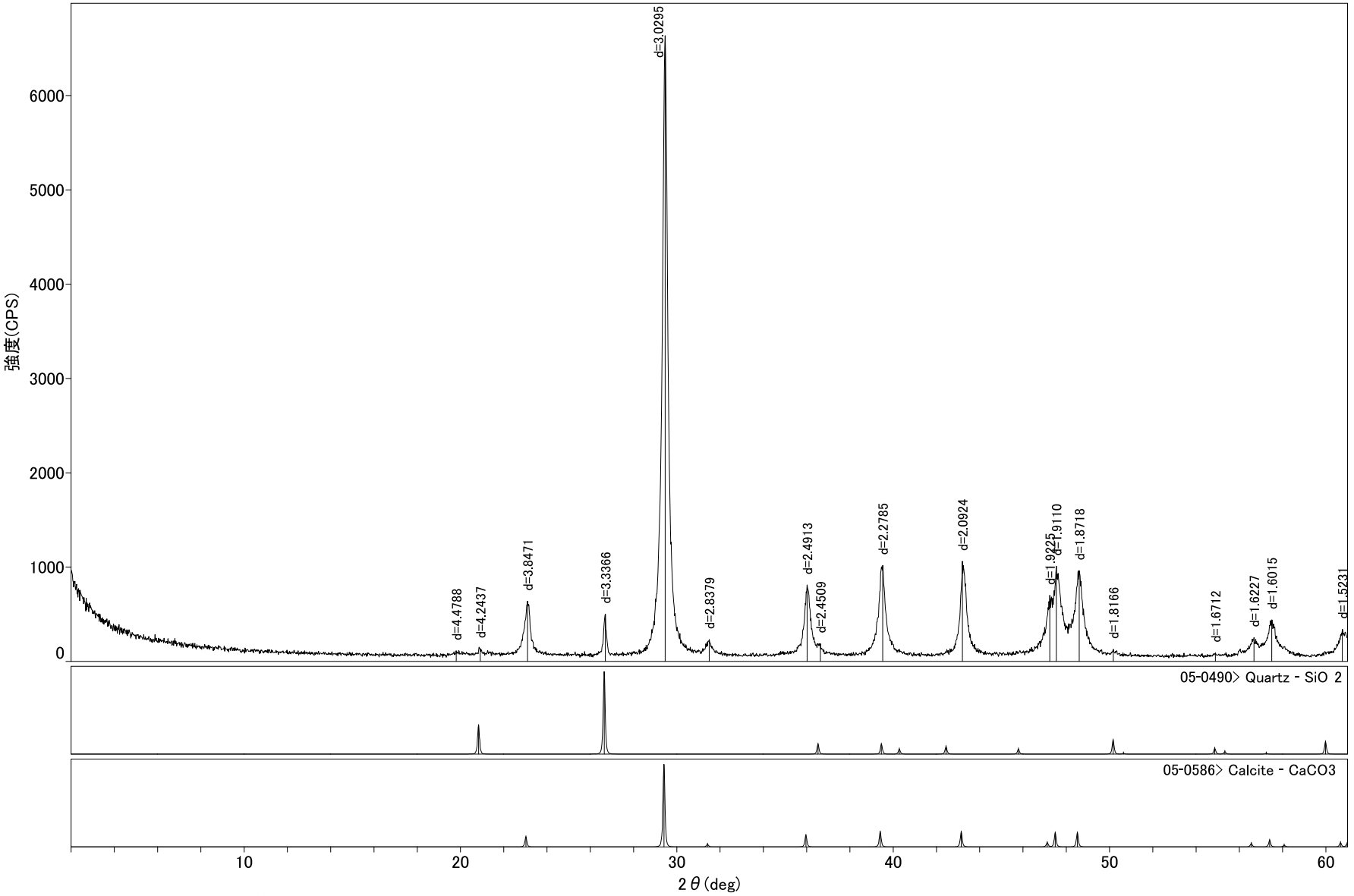


図 4. No.4 第 8 号墓 屋根の不定方位法 X 線回折チャート

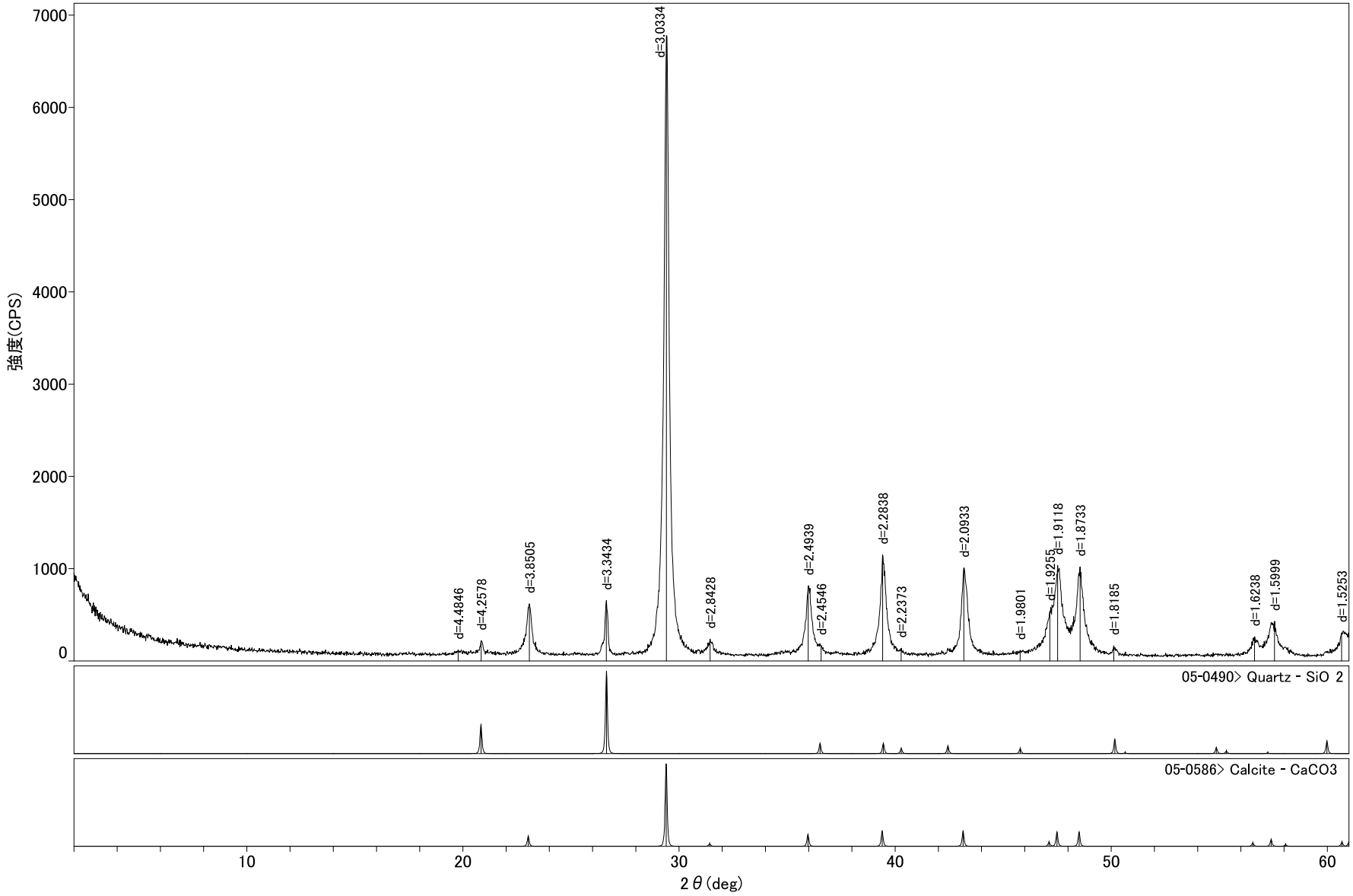


図 5. No.5 第 9 号墓 屋根の不定方位法 X 線回折チャート

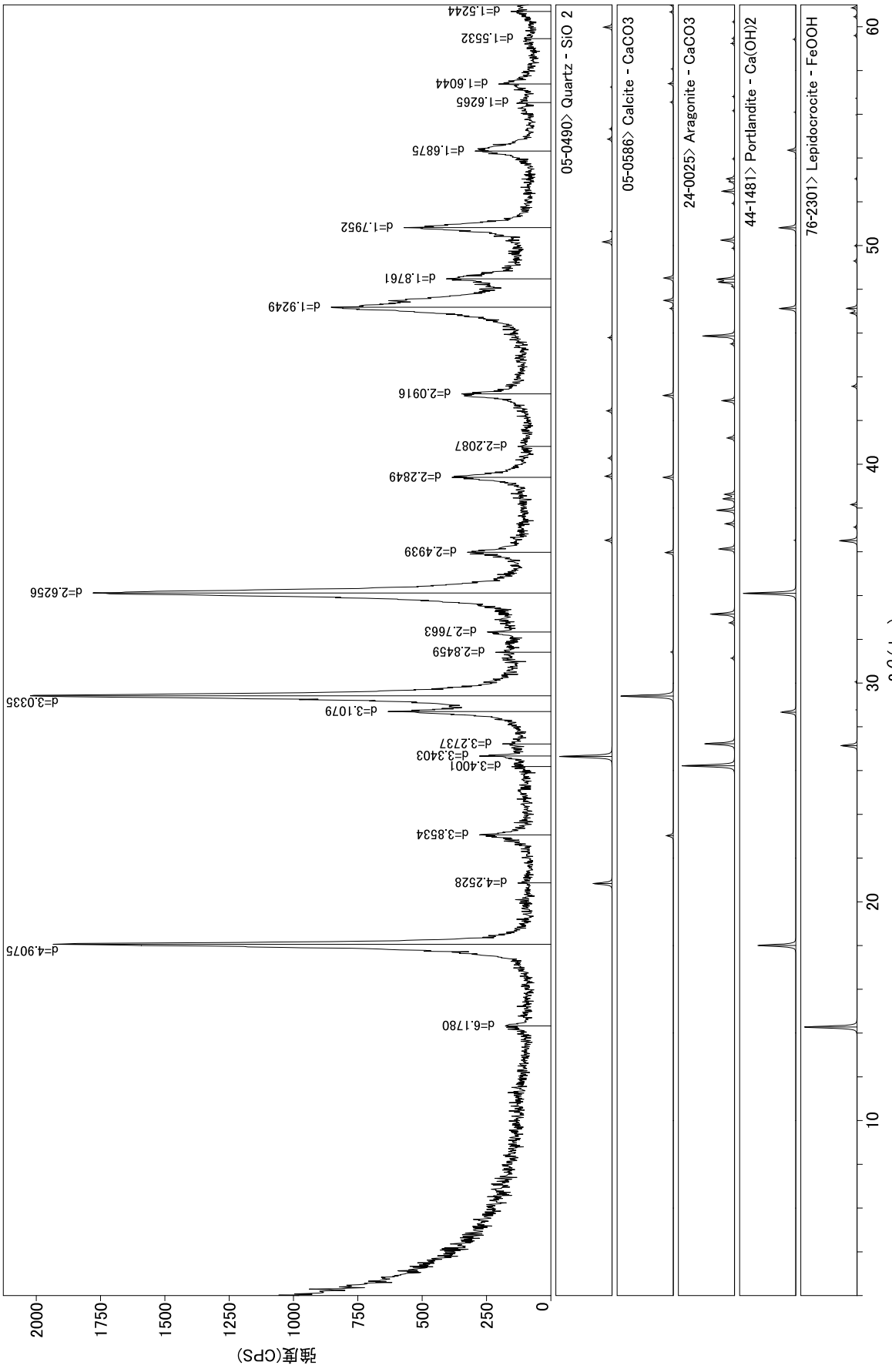


図 6. No.6 第 9 号墓 墓室左壁の不定方位法 X 線回折チャート

は、3.03Å(2θ：29.5°)、2.28Å(2θ：39.5°)および 2.09Å(2θ：43.3°)に尖度の高い三強線を示す。

6)No.6　第 9 号墓　墓室左壁

不定方位法回折試験により、少量の方解石(calcite)・ポルトランダイト(portlandite)およびきわめて微量の石英(quartz)・アラゴナイト(aragonite)・レピドクロサイト(lepidocrocite)が検出される。ポルトランダイトは、セメント水和物であり、4.91Å(2θ：18.1°)に最強回折線、2.63Å(2θ：34.1°)に第二強線を示し、いずれも尖度が高く、明瞭である。

(2)薄片作製鑑定

偏光顕微鏡下において焼成の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量(＞50%)、中量(20～50%)、少量(5～20%)、微量(＜5%)およびきわめて微量(＜1%)という基準で目視により判定した。骨材については、粒径 5 ㎜以上のものを粗骨材、5㎜ 以下のものを細骨材として区分した。鏡下における代表的な箇所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

1) No.1　第 3 号墓　墓室前壁

本試料は、細粒砂～細礫サイズの細骨材を多含するモルタルである。骨材は中量～多量含まれ、鉱滓様物質、石灰質化石が主体となっている。その他、粗粒砂以下の鉱物片が微量点在する。

化石片としては、藻類、有孔虫、棘皮動物、ウーイドなどが認められる。鉱滓様物質は、赤色を呈し、石英片を含む。岩片は、石灰岩、チャート、緑色岩などが認められ、亜円～亜角礫状を呈する。鉱物片は、細粒～粗粒砂サイズであり、石英、斜長石、雲母鉱物などが認められる。

基質は、淡灰色を示し、水酸化カルシウム、粘土、炭酸塩鉱物、有機物などで構成される。基質は中性化している(図版 2-1)。基質には、径 0.1～1.0㎜ 程度で、球状～不定形状を呈する孔隙が微量点在している。

2) No.2　第 4 号墓　墓室前壁

本試料は、細粒砂～細礫サイズの細骨材を多含するモルタルである。骨材は中量～多量含まれ、鉱滓様物質、石灰質化石が主体となっている。その他、粗粒砂以下の鉱物片が微量点在する。

化石片としては、藻類、有孔虫、棘皮動物、ウーイドなどが認められる。鉱滓様物質は、赤色を呈し、石英片を含む。岩片は、石灰岩、チャート、安山岩などが認められ、亜円～亜角礫状を呈する。鉱物片は、細粒～粗粒砂サイズであり、石英、斜長石、角閃石、雲母鉱物などが認められる(図版 2-2)。

基質は、淡灰色を呈し、水酸化カルシウム、粘土、炭酸塩鉱物、有機物などで構成される。基質は中性化している。基質には、径 0.1～1.4㎜ 程度で、球状～不定形状を呈する孔隙が微量点在している。

3) No.3　第 5 号墓　墓室前壁

本試料は、石灰質化石片を多含する石灰岩部と、植物片を含む漆喰部から構成される。

石灰岩の基質は、少量程度であり、石灰質化石片の粒間は、孔隙状となっている。化石片は、細粒砂～細礫サイズで、有孔虫、藻類、棘皮動物、珊瑚、貝類、ウーイドからなり、多量含まれている。

漆喰部は、試料表面から 8㎜ 以下程度の厚さで塗られており、細粒砂～粗粒砂サイズの鉱物片、石灰質化石、石灰岩などを少量含む。鉱物片としては、石英、斜長石などが認められる。また、長さ 0.52㎜ 以下の植物片を微量散含している。基質は炭酸塩鉱物、粘土、有機物などで埋められる。

4) No.4　第 8 号墓　屋根

本試料は、石灰質化石片を多含する石灰岩である。基質は中量存在するが、化石片の粒間は、孔隙

状となっている。その他、極細粒砂～細粒砂サイズの鉱物片が極めて微量含まれている。

化石片は、細粒砂～細礫サイズで、有孔虫、藻類、棘皮動物、珊瑚、貝類、ウーイドからなり、中量含まれている。鉱物片は、石英が認められ、散点状に分布する。

基質は、ミクライト～スパーライト質な炭酸塩鉱物、粘土、有機物で構成され、石灰質化石片の粒間を不均質に埋めている。基質には、径 0.1～1.8mm 程度で、球状～不定形状を呈する孔隙が微量程度存在している。

5) No.5　第 9 号墓　屋根

本試料は、石灰質化石片を多含する石灰岩である。基質は中量存在するが、化石片の粒間は、孔隙状となっている。その他、極細粒砂～細粒砂サイズの鉱物片が少量含まれている。

化石片は、細粒砂～細礫サイズで、有孔虫、藻類、棘皮動物、珊瑚、貝類、ウーイドからなり、中量含まれている。鉱物片は、石英、雲母鉱物、角閃石などが認められ、散点状に分布する。

基質は、ミクライト～スパーライト質な炭酸塩鉱物、粘土、有機物で構成され、石灰質化石片の粒間を不均質に埋めている。基質には、径 0.1～2.1mm 程度で、球状～不定形状を呈する孔隙が微量程度存在している。

6) No.6　第 9 号墓　墓室左壁

本試料は、細礫サイズの細骨材を含むモルタルである。骨材は微量含まれ、岩片が主体となっている。その他、細礫以下の鉱物片が少量点在する。岩片は石灰岩などで、亜円礫状を呈する。鉱物片は、細粒～細礫サイズであり、石英、褐鉄鉱などが含まれる。

基質は、淡灰色を呈し、水酸化カルシウム、粘土、炭酸塩鉱物、有機物などで構成される。基質は中性化している。基質には、径 0.1～14mm 程度で、球状～不定形状を呈する孔隙が微量点在している。

4.考察

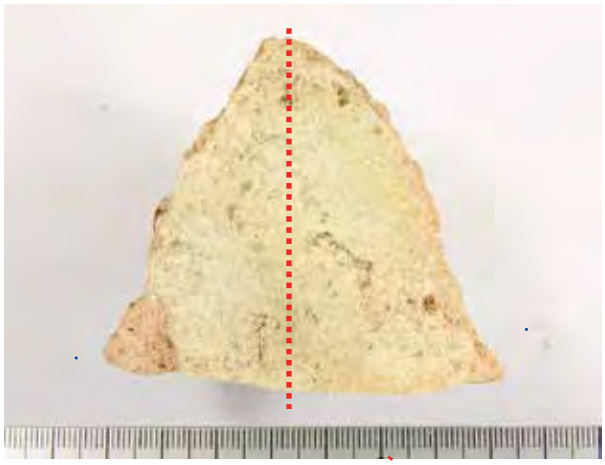
薄片観察の結果、第 8 号墓　屋根の No.4 および第 9 号墓　屋根の No.5 は、天然の石灰岩または石灰岩様の固結物と鑑定された。写真図版 3-4 および 3-5 に示されるように、完形の石灰質化石を含み、多孔質な組織を示す。X 線回折分析からは、方解石などの炭酸塩鉱物が主要鉱物として検出され、天然に産する鉱物から構成されている。

第 3 号墓　墓室前壁の No.1、第 4 号墓　墓室前壁の No.2、第 9 号墓　左壁の No.6 は、セメントを用いた建材であり、No.1、No.2 および No.6 がモルタルと判断される。No.1 および No.2 には石灰岩、チャート、鉱滓様物質を細骨材として含み、中性化が進んでいる。写真図版 2-1 にみられるように細骨材に認められるチャートは、周辺地質では採取できない石材であり、沖縄本島北部の名護層などに含まれる岩種であることから、輸送などの面を考慮するとモルタル自体は近代以降のものと推測される。写真図版 2-1 および 2-2 にみられる No.1 および No.2 に含まれる鉱滓様物質は、水中で酸化して赤褐色化が進行したと考えられる。また、写真図版 3-6 にみられるように No.6 には鉱滓様物質および、細骨材としてチャートが含まれていないことから No.1 および No.2 とは異なるモルタルを用いている可能性が示唆される。

第 5 号墓　墓室前壁より採取された No.3 は、薄片観察から石灰岩の表面に漆喰が塗布される構造が観察された。写真図版 2-3 にみられるように、石灰岩部は石灰質化石を多含するのに対し、漆喰部は肌理が細かく、植物片を散含する組織を示す。

図版1　試料

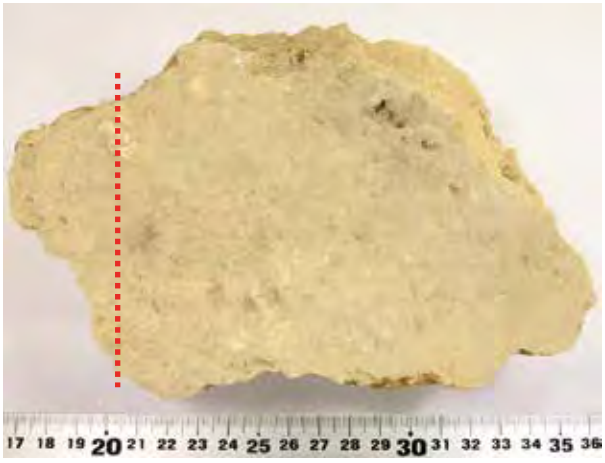
1. No.1　第3号墓　墓室前壁



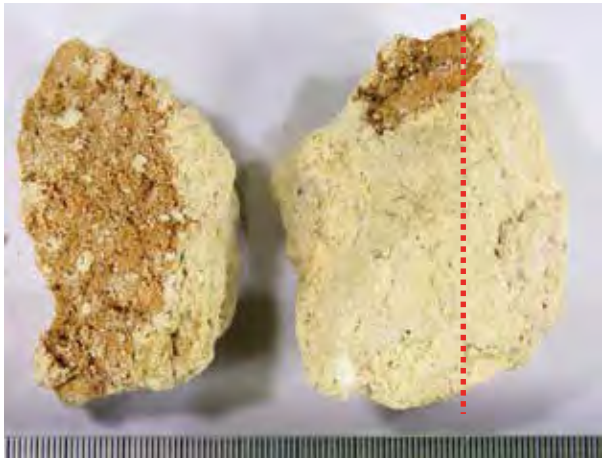
2. No.2　第4号墓　墓室前壁

3. No.3　第5号墓　墓室前壁

4. No.4　第8号墓　屋根



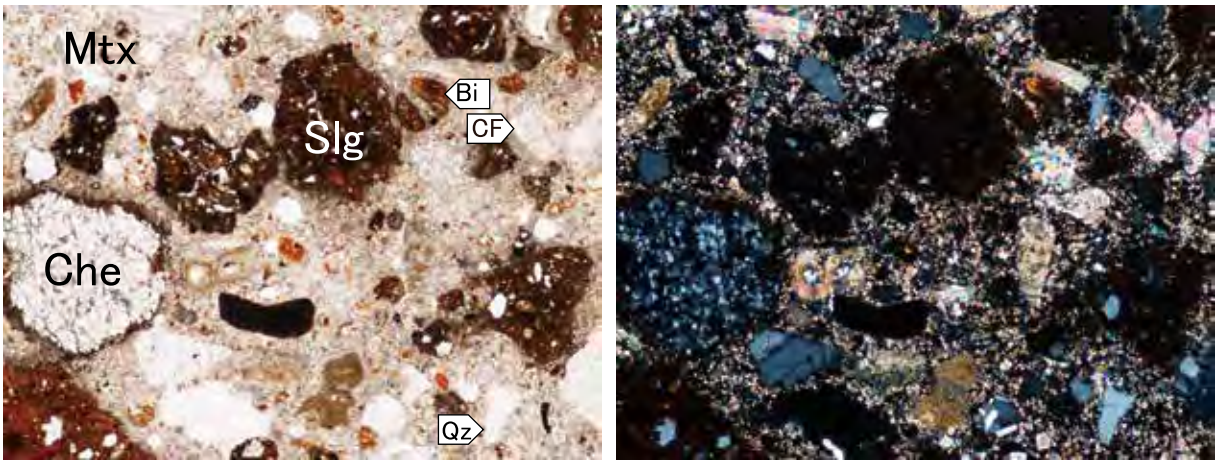
5. No.5　第9号墓　屋根



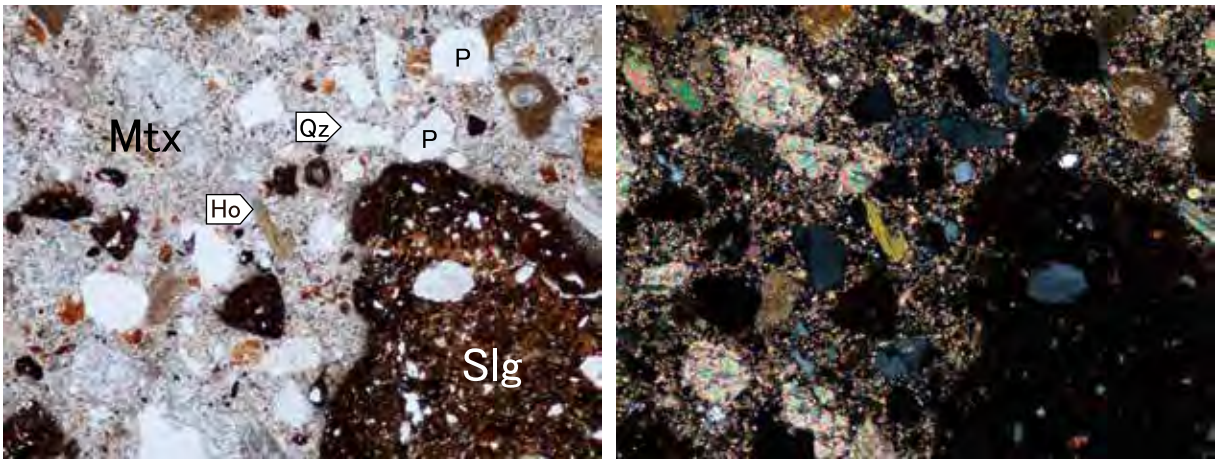
6. No.6　第9号墓　墓室左壁

※赤の破線は薄片作製の切断位置を示す。

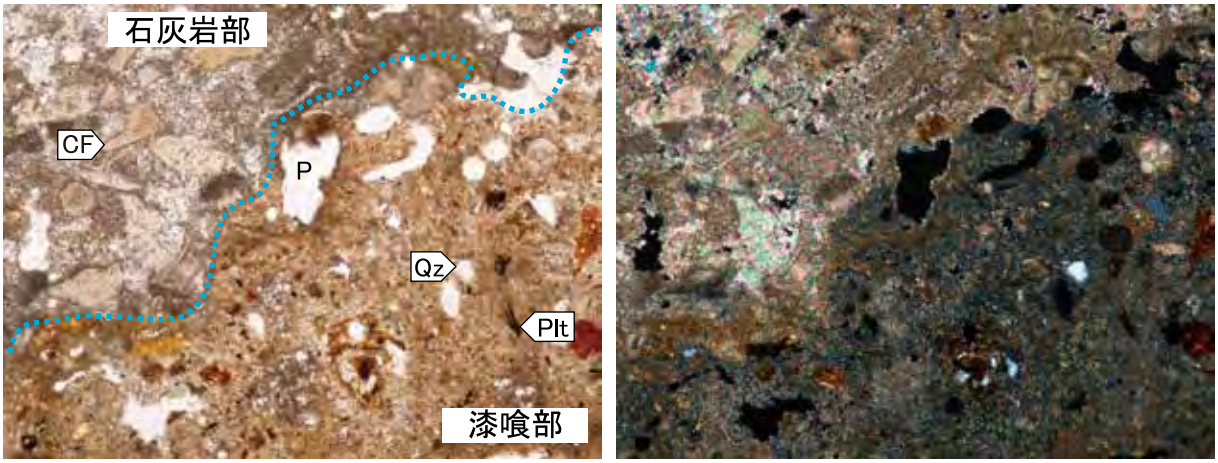
図版2　薄片(1)



1. No.1　第3号墓　墓室前壁



2. No.2　第4号墓　墓室前壁



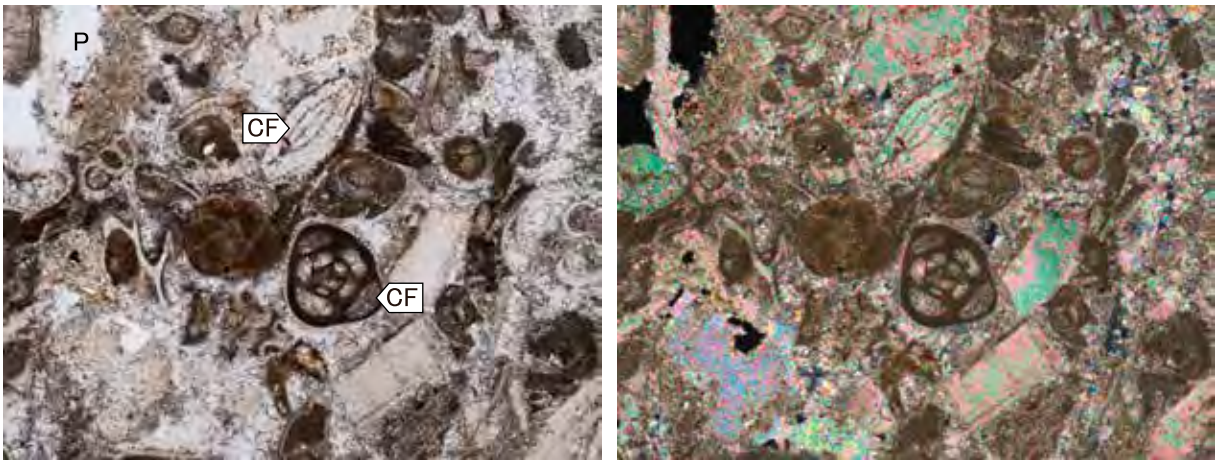
3. No.3　第5号墓　墓室前壁

Qz:石英. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Che:チャート. CF:石灰質化石片. Plt:植物片. Slg:鉱滓様物質. Mtx:基質. P:孔隙.

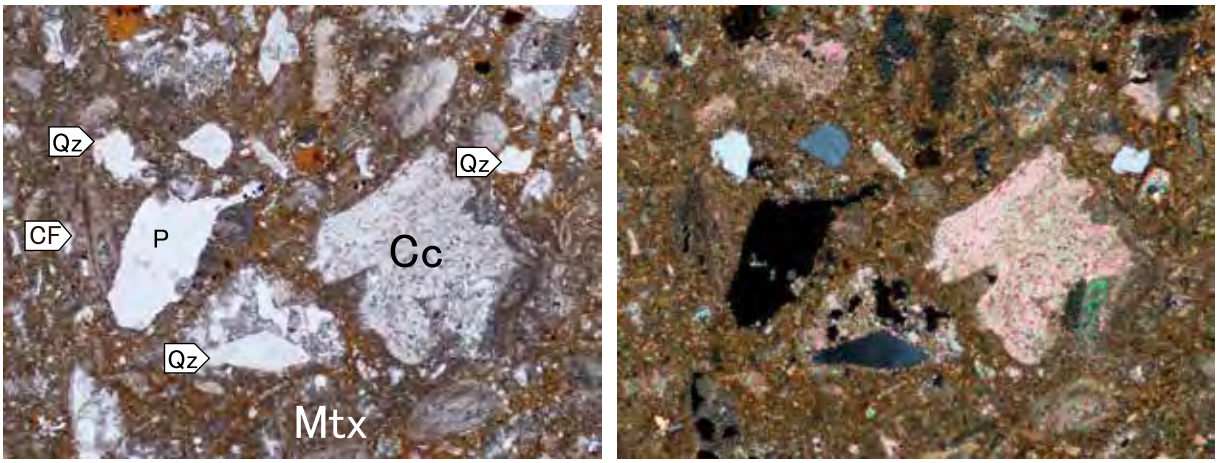
0.5mm

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

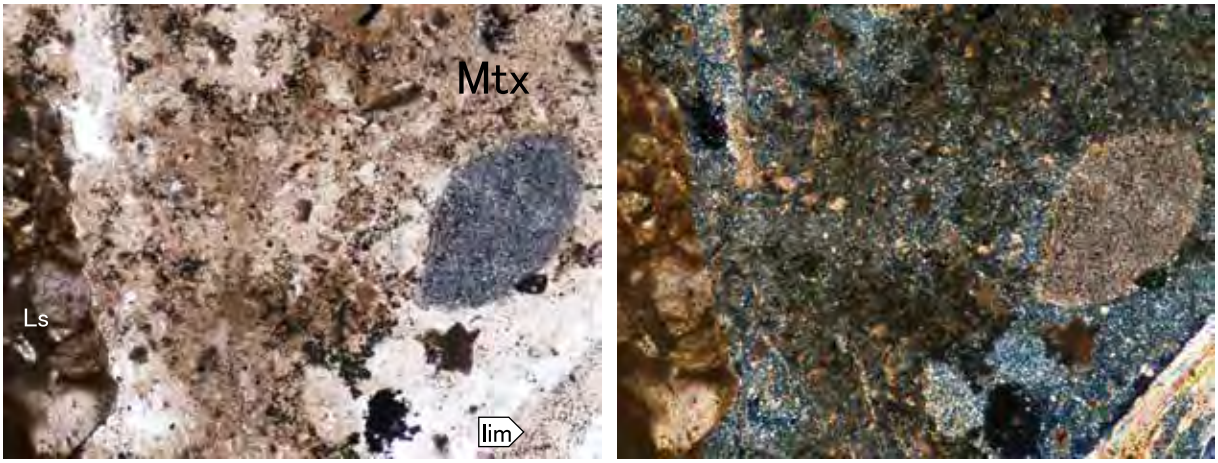
図版3　薄片(2)



4. No.4　第8号墓　屋根



5. No.5　第9号墓　屋根



6. No.6　第9号墓　左壁

Qz:石英. Cc:炭酸塩鉱物. CF:石灰質化石片. Lim:褐鉄鉱. Ls:石灰岩. Mtx基質. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

0.5mm

附編４　フクヂ山古墓群より検出したモルタル資料について

パリノ・サーヴェイ株式会社
管理者　上田　圭一
担当者　石岡　智武
分析者　石岡　智武

＜目次＞

はじめに
1.試料
2.分析方法
(1)X 線回折分析
(2)薄片観察
3.結果
(1)X 線回折分析
(2)薄片観察
4.考察

＜図表・図版一覧＞

表 1.　分析試料
表 2.　X 線回折分析による検出鉱物

図 1. №1　第 1 号墓　墓口羨道の不定方位法 X 線回折チャート
図 2. №2　第 1 号墓　屋根上面の不定方位法 X 線回折チャート
図 3. №3　第 2 号墓　サンミデー上段の不定方位法 X 線回折チャート
図 4. №4　第 3 号墓　屋根右端溝の不定方位法 X 線回折チャート
図 5. №5　第 4 号墓　墓正面軒の不定方位法 X 線回折チャート
図 6. №6　第 7 号墓　屋根の不定方位法 X 線回折チャート

図版 1　試料
図版 2　薄片(1)
図版 3　薄片(2)

はじめに

フクヂ山古墓群は那覇市に所在する、近世から近現代の古墓群である。採取されたモルタル様の石灰質試料について、その材質を明らかにするために、薄片観察および X 線回折分析を行った。薄片観察では、構成される鉱物、岩片、基質を確認し、X 線回折では薄片観察では同定できない微細鉱物の検出同定を行った。以下にその結果を報告する。

１.試料

試料は、表 1 に示される試料 6 点である。試料は、第 1～3 号墓、第 4 号墓、第 7 号墓の墓口羨道、屋根などから採取されたものである。分析処理前の試料の状況については、写真撮影を行い、図版 1 に示した。

表 1. 分析試料

試料No.	墓番号	出土地点
No.1	第1号墓	墓口羨道
No.2	第1号墓	屋根上面
No.3	第2号墓	サンミデー上段
No.4	第3号墓	屋根右端溝
No.5	第4号墓	墓正面軒
No.6	第7号墓	屋根

２.分析方法

（１）Ｘ線回折分析

試料をダイヤモンドカッターにて切断、整形した後、乾燥機において 60℃以下で 12 時間以上乾燥させる。乾燥後、振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）を用いて粉砕・混合し、粉末試料（200mesh, 95%pass）とする。粉末試料は、Ｘ線回折用アルミニウムホルダーに充填し、不定方位試料を作成する。作成した不定方位試料は、Ｘ線回折測定装置を用いて以下の条件で測定する。不定方位法 X 線回折試験は、試料中に含まれる主要な鉱物の種類を明らかにすることを目的としている。

装置：理学電気製MultiFlex
Target：Ｃｕ（Ｋα）
Monochrometer：Graphite湾曲
Voltage：40KV
Current：40mA
Detector：SC
Calculation Mode：cps
Divergency Slit：1°
Scattering Slit：1°
Recieving Slit：0.3mm
Scanning Speed：2° /min
Scanning Mode：連続法
Sampling Range：0.02°
Scanning Range：2～61°

（２）薄片作製観察

薄片観察は、試料を 0.03㎜ の厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片を作成するために試料をダイヤモンドカッターにより 15×30×15㎜ 程度の直方体(これより小さい試料は適宜の大きさ)に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、＃180～#800 の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ 0.1㎜ 以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で＃2500 の研磨剤を用いて正確に 0.03㎜ の厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

３.結果

（1） X線回折分析

表 2. X 線回折試験による検出鉱物

試料No.	墓番号	出土地点	検出鉱物								
			石英	斜長石	雲母鉱物	緑泥石	方解石	マグネシアン方解石	アラゴナイト	ポルトランダイト	ハイドロカルマイト
No.1	第1号墓	墓口羨道	＋				△	＋	△		
No.2	第1号墓	屋根上面					○	＋	△	±	
No.3	第2号墓	サンミデー上段	±				△	＋	△		
No.4	第3号墓	屋根右端溝	＋	±			＋	△	△		
No.5	第4号墓	墓正面軒	◎		±	±	△	＋	＋	±	
No.6	第7号墓	屋根					△	±	△	＋	±

量比 ◎:多量, ○:中量, △:少量, ＋:微量, ±:きわめて微量.

試験結果の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、JCPDS（Joint Committee on Powder Diffraction Standards）の PDF（Powder Data File）をデータベースとしたX線粉末回折線解析プログラム JADE により検索し、同定した。量比は、最強回折線の回折強度(cps)から、多量(>5000cps)、中量(2,500～5,000cps)、少量(500～2,500cps)、微量(250～500cps)、および、きわめて微量(<250cps)という基準で判定した。試験から得られた量比を表 2 に、X 線回折チャートを図 1～6 に示した。図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。以下の文中においては、回折チャートの同定に使用した PDF データの鉱物名(英名)は括弧内に記している。

1)No. 1　第１号墓　墓口羨道

不定方位法回折試験により、少量の方解石(calcite)・アラゴナイト(aragonite)および微量の石英(quartz)・マグネシアン方解石(calcite magnesian)が検出される。アラゴナイトの回折線は尖度が高く、明瞭であり、三強線以外の回折線も多数検出される。

2)No. 2　第１号墓　屋根上面

不定方位法回折試験により、中量の方解石(calcite)、少量のアラゴナイト(aragonite)、微量のマグネシアン方解石(calcite magnesian)およびきわめて微量のポルトランダイト(portlandite; Ca(OH)2)が検出される。ポルトランダイトは、2.62Å(2θ:34.2°)、4.89Å(2θ:18.1°)などに弱い回折線を示す。

3)No. 3　第２号墓　サンミデー上段

不定方位法回折試験により、少量の方解石(calcite)・アラゴナイト(aragonite)、微量のマグネシアン方解石(calcite magnesian)およびきわめて微量の石英(quartz)が検出される。方解石の回折線は比較的、強度は強いものの、半価幅の広いものが多く、結晶性はやや不良とみられる。

4)No. 4　第３号墓　屋根右端溝

不定方位法回折試験により、少量のマグネシアン方解石(calcite magnesian)・アラゴナイト(aragonite)、微量の石英(quartz)・方解石(calcite)およびきわめて微量の斜長石(albite)が検出される。マグネシアン方解石の最強回折線は、方解石の最強回折線よりもやや高角側に位置し、2.99Å(2θ : 29.9°)に回折している。

5)No. 5　第４号墓　墓正面軒

不定方位法回折試験により、多量の石英(quartz)、少量の方解石(calcite)、微量のマグネシアン方

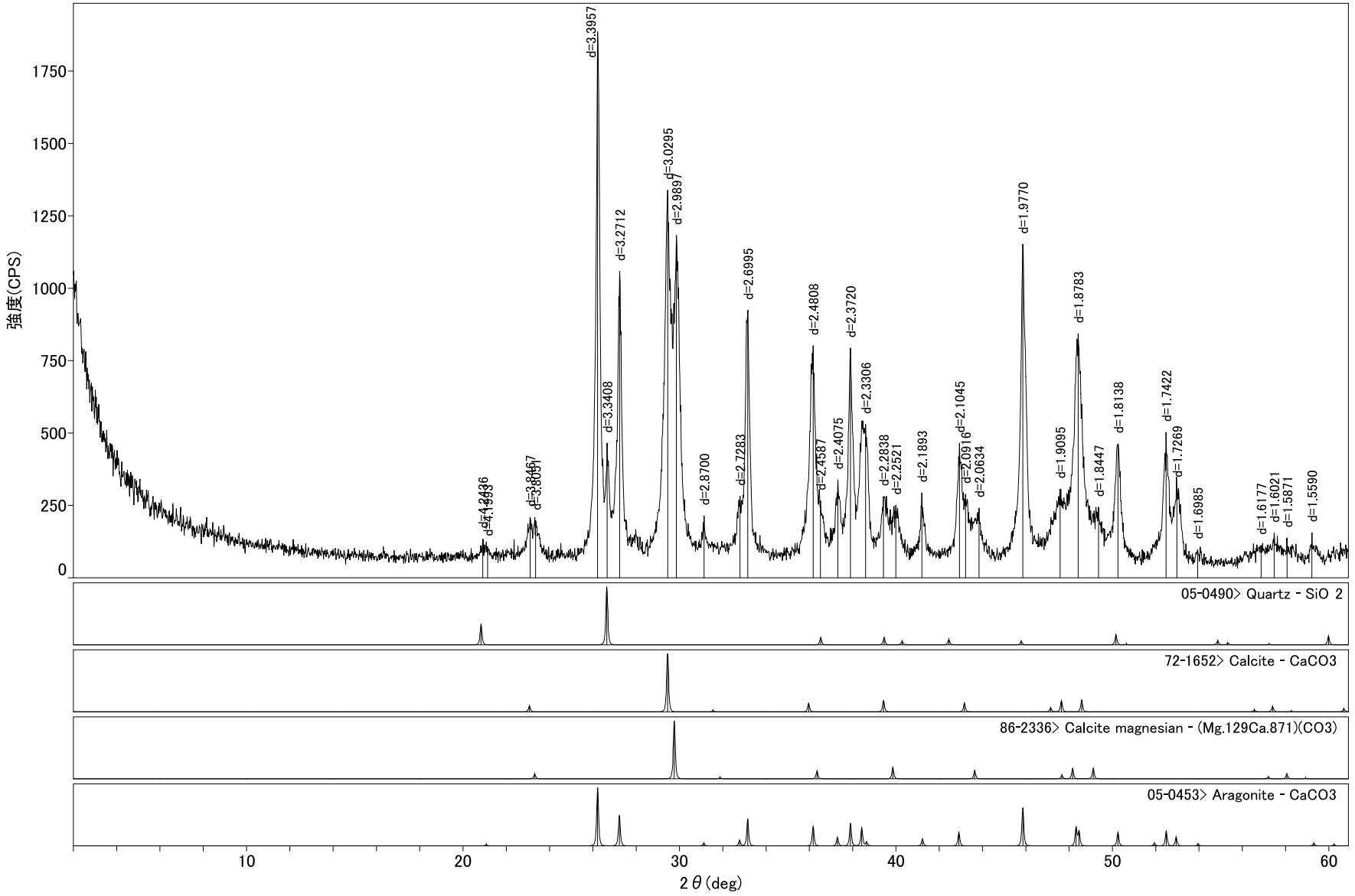


図 1. No.1 第 1 号墓 墓口羨道の不定方位法 X 線回折チャート

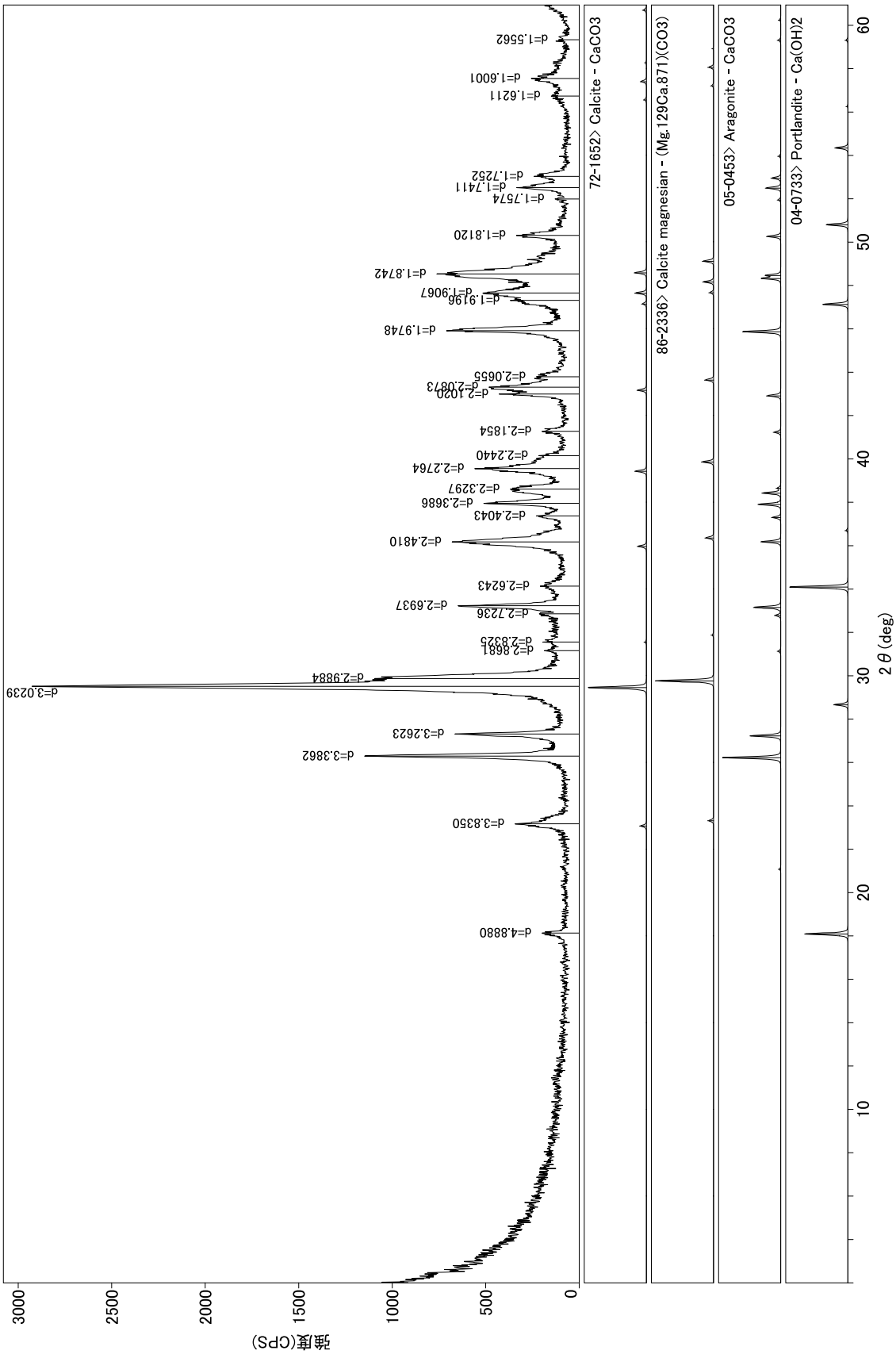


図 2. No.2 第 1 号墓 屋根上面の不定方位法 X 線回折チャート

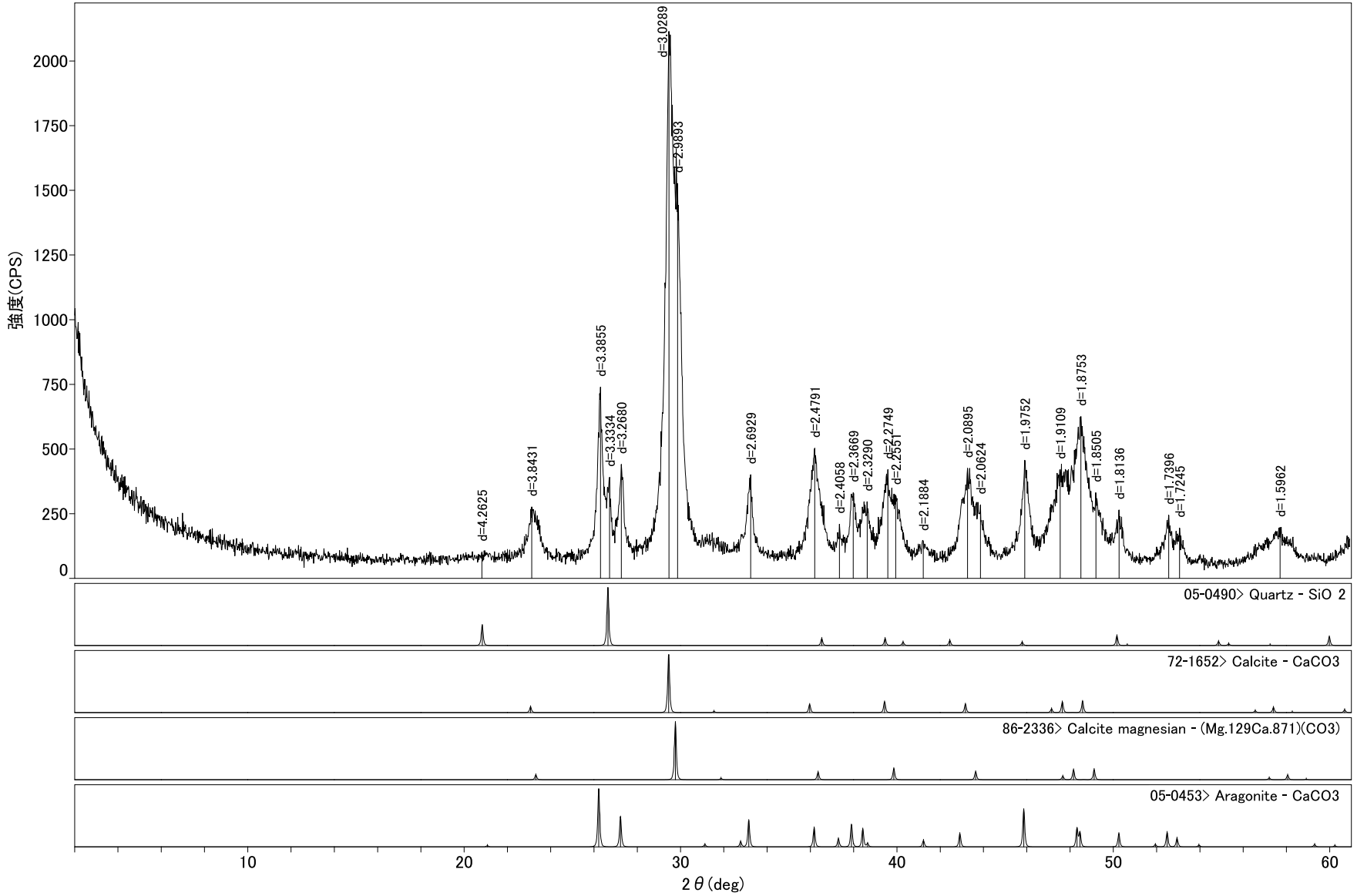


図 3. No.3 第 2 号墓　サンミデー上段の不定方位法 X 線回折チャート

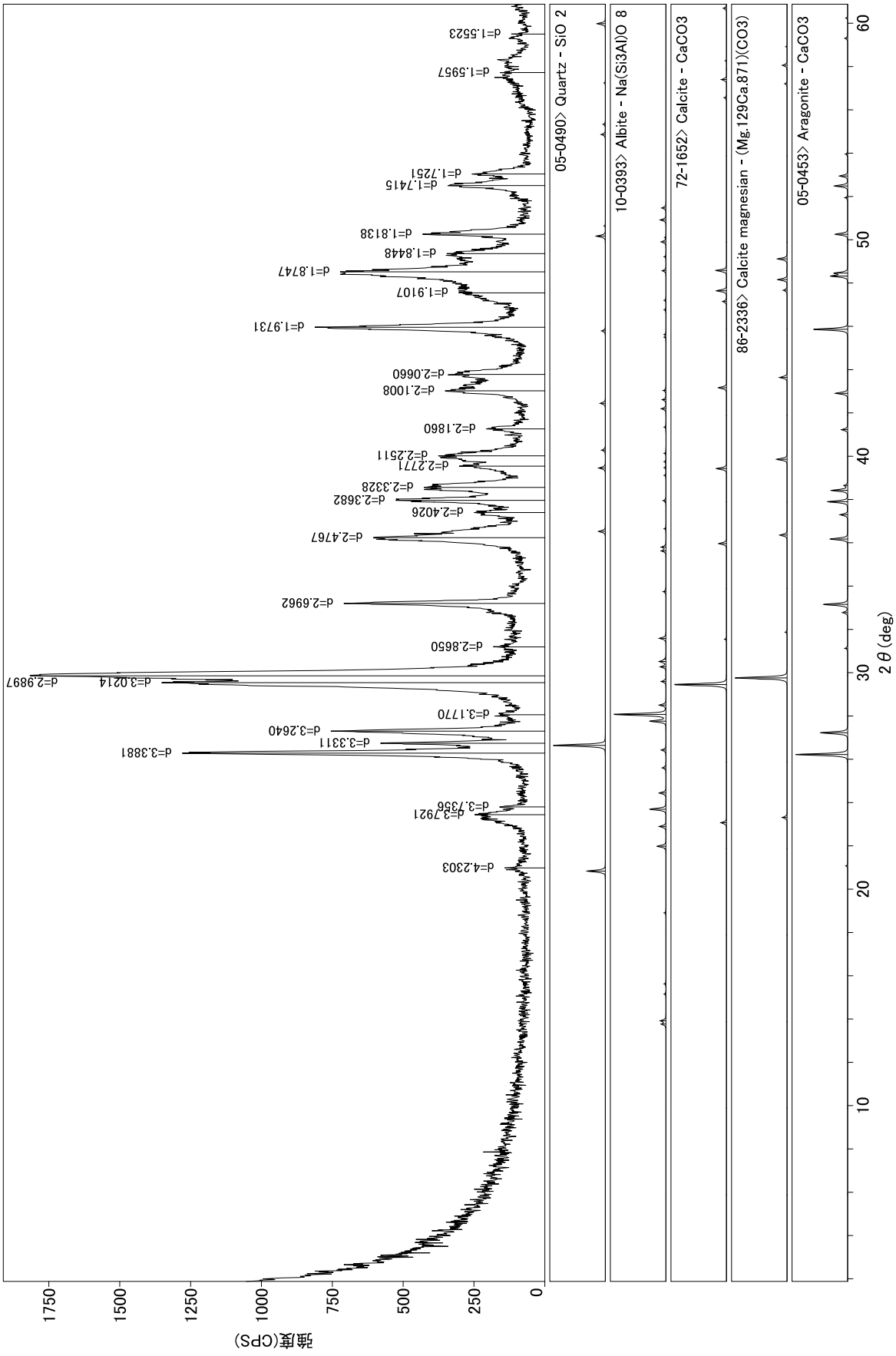


図 4. No. 4　第 3 号墓　屋根右端溝の不定方位法 X 線回折チャート

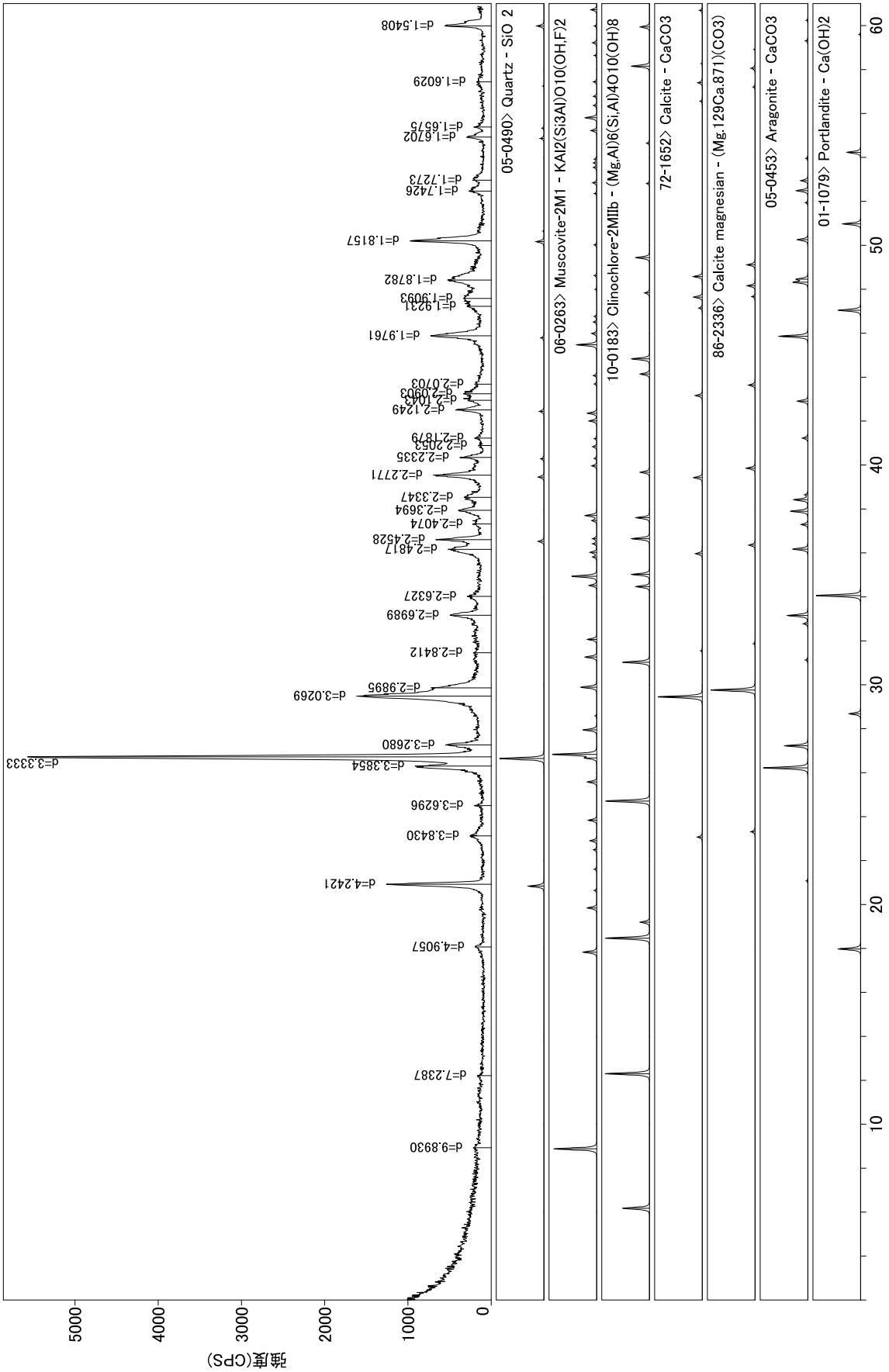


図 5. No. 5　第 4 号墓　墓正面軒の不定方位法 X 線回折チャート

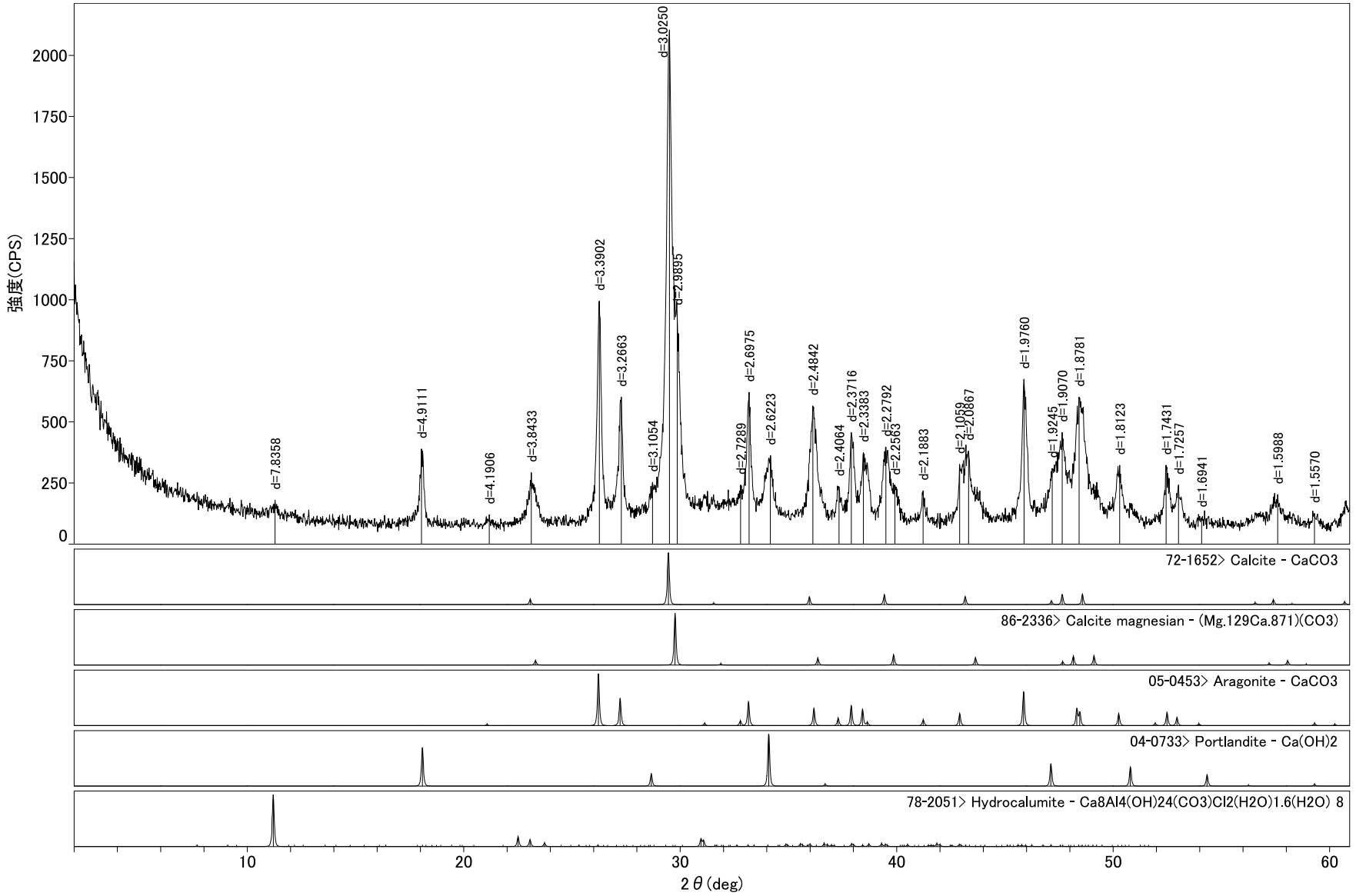


図 6. No.6 第 7 号墓 屋根の不定方位法 X 線回折チャート

解石(calcite magnesian)・アラゴナイト(aragonite)およびきわめて微量の雲母鉱物(muscovite)・緑泥石(clinochlore)・ポルトランダイト(portlandite)が検出される。粘土鉱物の雲母鉱物、緑泥石の回折線はきわめて微弱であり、含有の有無については、水ひ処理試料を用いた回折試験からの確認を要する。

６)No.６　第７号墓　屋根

不定方位法回折試験により、少量の方解石(calcite)・アラゴナイト(aragonite)、微量のポルトランダイト(portlandite; $Ca(OH)_2$)およびきわめて微量のマグネシアン方解石(calcite magnesian)・ハイドロカルマイト(hydrocalumite)が検出される。ポルトランダイトの回折線は、強度は弱いものの、4.9Å(2θ:18.1°)や2.62Å(2θ:34.2°)に比較的尖度の高い回折線を示す。

(２)薄片作製観察

偏光顕微鏡下において焼成の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量(＞50%)、中量(20～50%)、少量(5～20%)、微量(＜5%)およびきわめて微量(＜1%)という基準で目視により判定した。骨材については、粒径5㎜以上のものを粗骨材、5㎜以下のものを細骨材として区分した。鏡下における代表的な箇所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

１)No.１　第１号墓　墓口羨道

本試料は、石灰質化石、石灰岩を主体とする石灰岩または石灰岩様の固結物であり、塊状を呈する。基質量は少量程度であり、化石片の粒間は孔隙状となっている。化石片、石灰岩は、細粒砂～細礫サイズのものが認められ、粒径は不均一である。その他、中粒砂サイズ以下の鉱物片がきわめて微量含まれる。

化石片は中～多量含まれており、有孔虫、藻類、棘皮動物、珊瑚、貝類、ウーイドなどが認められる。石灰岩は、不定形粒状～不定形状を示し、ミクライト質な基質を有し、石灰質化石片が含まれる。鉱物片としては、石英、斜長石などが認められる。

基質は、ミクライト質な炭酸塩鉱物、粘土、有機物などで構成され、石灰質化石や石灰岩の粒子に付着するような産状を示す。

２)No.２　第１号墓　屋根上面

本試料は、粗骨材を伴うコンクリート部と植物片を含む漆喰部から構成される(図版 1-2、2-2)。

コンクリート部には、粗骨材となっている中礫サイズの石灰岩が少量含まれ、細骨材となっている極細粒砂～細礫サイズの石灰質化石、石灰岩などが中量程度含まれる。この他、細粒砂サイズ以下の石英、斜長石などの鉱物片がきわめて微量含まれる。基質は褐色を呈し、微細な水酸化カルシウム、炭酸塩鉱物、粘土、有機物などで埋められている。

漆喰部は、試料表面から 4㎜ 以下程度の厚さで塗られており、細粒砂～粗粒砂サイズの石灰質化石、石灰岩などを少量含む。また、長さ 0.5㎜ 以下程度の植物片を微量散含している。基質は、炭酸塩鉱物、粘土、有機物などで埋められる。

３)No.３　第２号墓　サンミデー上段

本試料は、石灰質化石片、石灰岩を多含する石灰岩または石灰岩様の塊状を呈する固結物である。基質は少量程度であり、化石片の粒間は孔隙状となっている。化石片および石灰岩は、細粒砂～細礫サイズのものが散在する。その他、中粒砂サイズ以下の鉱物片がきわめて微量含まれる。

化石片は有孔虫、藻類、棘皮動物、珊瑚、貝類、ウーイドなどからなり、中～多量含まれている。

石灰岩は、不定形粒状～不定形状を示し、ミクライト質な基質で、石灰質化石片、鉱物片を稀に含む。鉱物片としては、石英、斜長石などが認められる。

基質は、ミクライト質な炭酸塩鉱物、粘土、有機物などからなり、石灰質化石や石灰岩の粒間を不均質に埋めている。

４)No.４　第３号墓　屋根右端溝

本試料は、石灰質化石片、石灰岩を主体とする石灰岩または石灰岩様の固結物であり、石灰質化石片は非常に弱い配向性を示して散在する。基質は少量～中量存在するが、化石片、石灰岩の粒間は孔隙となっている部分が多い。化石片および石灰岩は、細粒砂～細礫サイズであり、粒径は不均一である。その他、中粒砂サイズ以下の鉱物片がきわめて微量含まれる。

化石片は有孔虫、藻類、棘皮動物、珊瑚、貝類、ウーイドなどからなり、中～多量含まれている。石灰岩は、不定形状を示し、ミクライト質な基質で稀に石灰質化石片を含む。鉱物片は石英、斜長石が認められ、散点状に分布する。

基質は、ミクライト質な炭酸塩鉱物、粘土、有機物などで構成され、石灰質化石や石灰岩の粒間を不均質に埋めている。

５)No.５　第４号墓　墓正面軒

本試料は、細粒砂～細礫サイズの細骨材を多含するモルタルである。骨材は中量～多量含まれ、石灰質化石、岩片が主体となっている。その他、中粒砂以下の鉱物片が微量点在する。

化石片としては、有孔虫、藻類、棘皮動物、ウーイドなどが認められる。岩片は、珪質粘板岩、石灰岩が主体となっており、亜円～亜角礫状を呈する。鉱物片は、細粒～粗粒砂サイズであり、石英、雲母鉱物などが認められる。

基質は、淡灰色を示し、水酸化カルシウム、粘土、炭酸塩鉱物、有機物などで構成される。試料表面付近の基質は、1～5㎜程度の深度まで中性化している(図版 3-5)。基質中には、径 0.2～1.5㎜程度で球状～不定形状を呈する孔隙が少量程度散在している。

６)No.６　第７号墓　屋根

本試料は、粗骨材および細骨材を含むコンクリートである。骨材は中量～多量含まれ、石灰質化石、石灰岩が主体となっており、鉱物片をきわめて微量伴う。

化石片は、細粒砂～細礫サイズで、有孔虫、藻類、珊瑚、軟体動物などが認められる。石灰岩は、径 15㎜以上の粗骨材や、細骨材として含まれており、石灰質化石を散含し、基質はミクライト質な炭酸塩鉱物から構成される。鉱物片としては細粒砂以下のサイズの、石英が認められる。

基質は、淡褐色～褐色を呈し、水酸化カルシウム、炭酸塩鉱物、粘土、有機物などから構成される。試料表面付近の基質は、幅 1㎜で帯状に中性化している。基質には、径 0.1～1.5㎜程度で、球状～不定形状を呈する孔隙が微量点在している。

４.考察

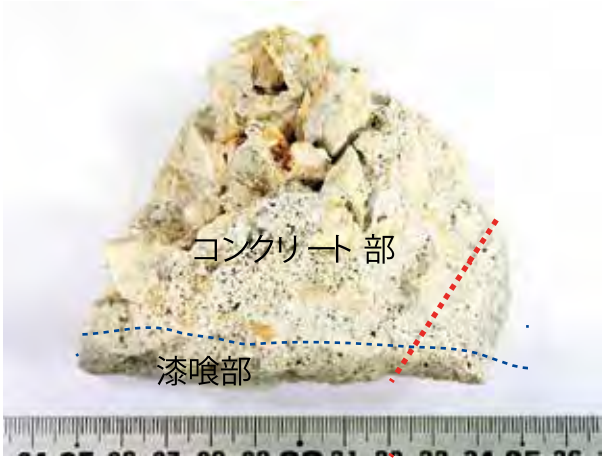
薄片観察の結果、第 1 号墓　墓口羨道の No.1、第 2 号墓　サンミデー上段の No.3 および第 3 号墓屋根右端溝の No.4 は、天然の石灰岩または石灰岩様の固結物と鑑定された。写真図版 2-1、2-3 および 3-4 に示されるように、完形の石灰質化石を含み、多孔質な組織を示す。X 線回折分析からは、方解石、アラゴナイト、マグネシアン方解石などの炭酸塩鉱物が主要鉱物として検出され、天然に産する鉱物から構成されている。

第4号墓　墓正面軒のNo.5および第7号墓　屋根のNo.6は、セメントを用いた建材であり、No.5がモルタル、No.6がコンクリートと判断される。No.5は、石灰質化石、珪質粘板岩、石灰岩を細骨材として含み、試料表面付近は中性化が進んでいる。細骨材に認められる珪質粘板岩は、周辺地質では採取できない岩石であり、本島北部の名護層などに含まれる岩種であることから、輸送などの面を考慮するとモルタル自体は近代以降のものと推測される。一方のNo.6のコンクリートでは、石灰質化石、石灰岩の骨材が主要なものとなっている。施工時期は不明であるが、試料表面の中性化が1mm程度の深度と浅いことを考慮すると、こちらも近現代の可能性が示唆される。

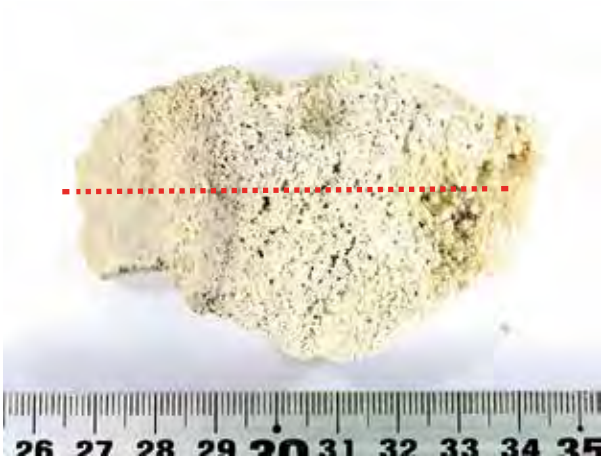
第1号墓　屋根上面より採取されたNo.2は、薄片観察からコンクリートの上に漆喰が塗布される構造が観察された。写真図版2-2にみられるように、コンクリート部は石灰質化石、石灰岩の骨材を多含するのに対し、漆喰部はきめが細かく、植物片を散含する組織を示す。試料表面部を構成する漆喰部は、試料表面から1mm程度の深度までの中性化が認められるが、非常に浅い中性化であることから、施工時期はNo.5やNo.6と同様に近現代と推測される。

図版1　試料

1. No.1　第1号墓　墓口羨道



2. No.2　第1号墓　屋根上面



3. No.3　第2号墓　サンミデー上段

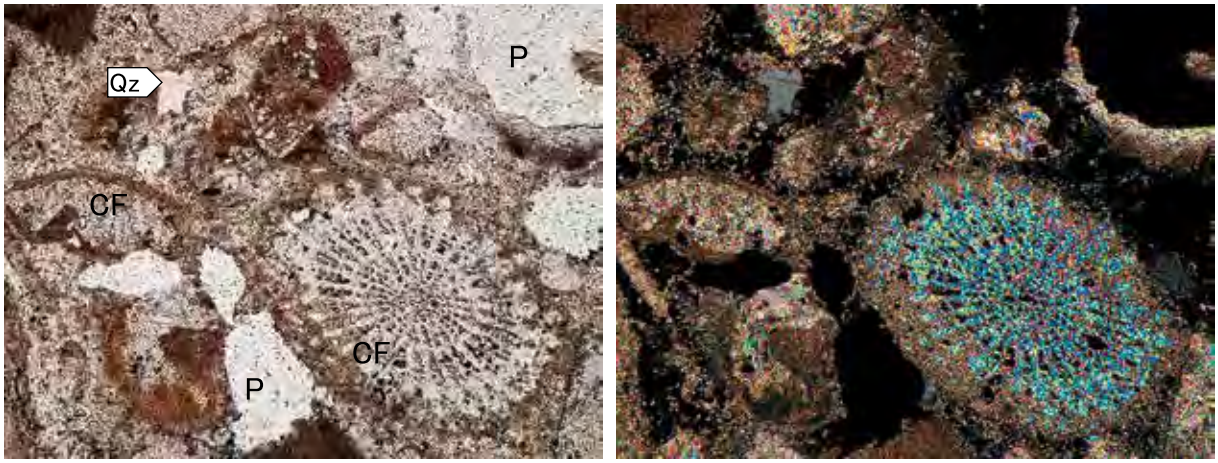
4. No.4　第3号墓　屋根右端溝

5. No.5　第4号墓　墓正面軒

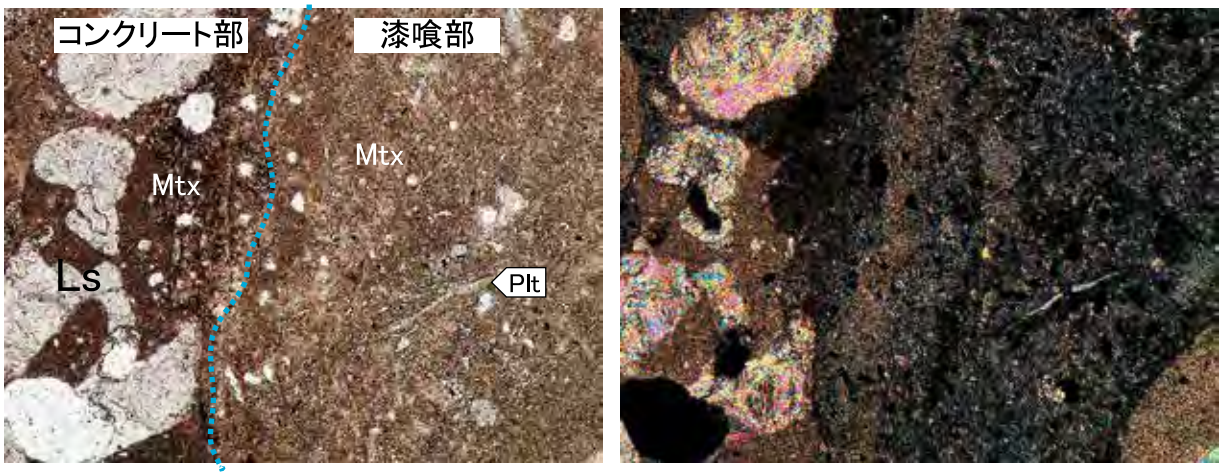
6. No.6　第7号墓　屋根

※赤の破線は薄片作製の切断位置を示す。

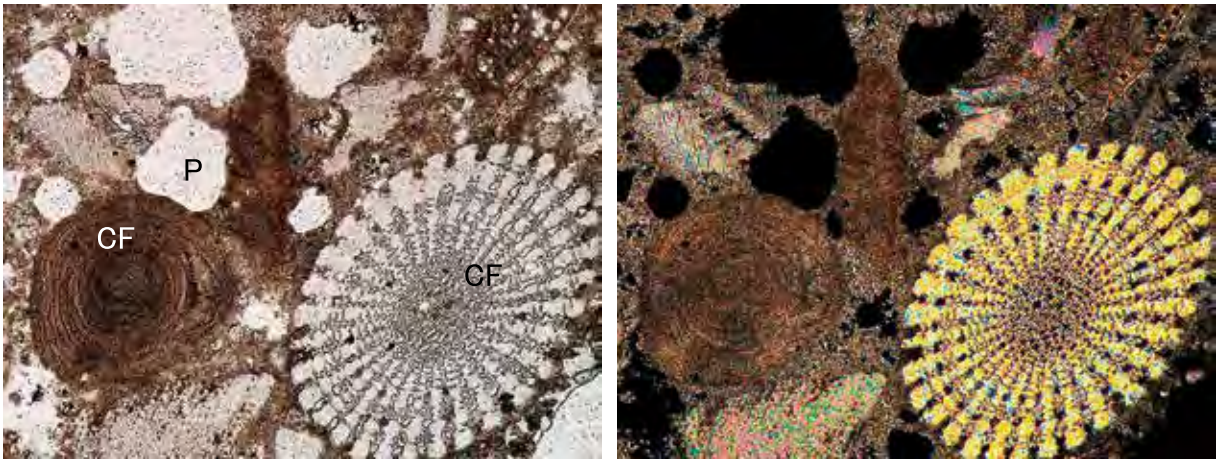
図版2　薄片(1)



1. No.1　第1号墓　墓口羨道



2. No.2　第1号墓　屋根上面

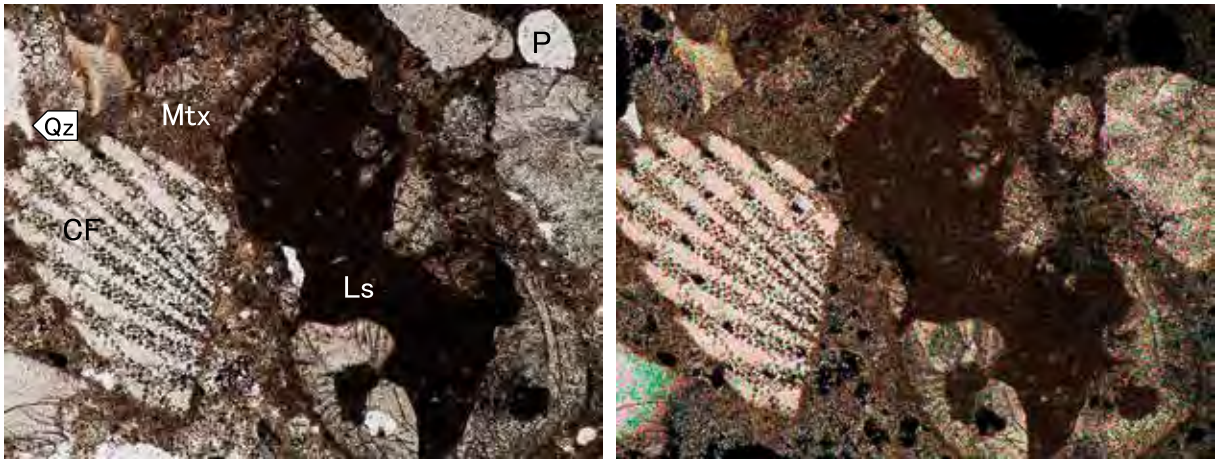


3. No.3　第2号墓　サンミデー上段

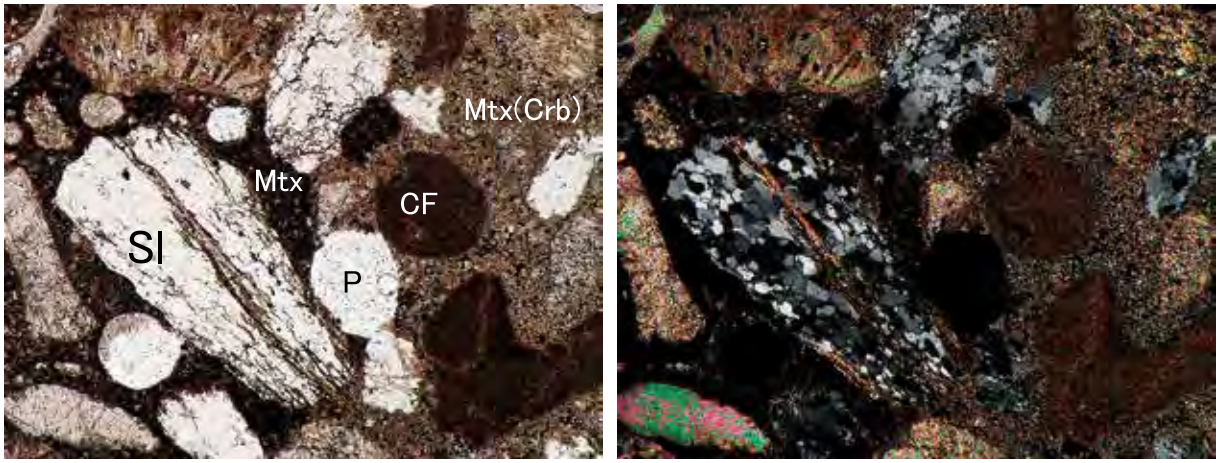
0.5mm

Qz:石英. CF:石灰質化石. Plt:植物片. Ls:石灰岩. Mtx:基質. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

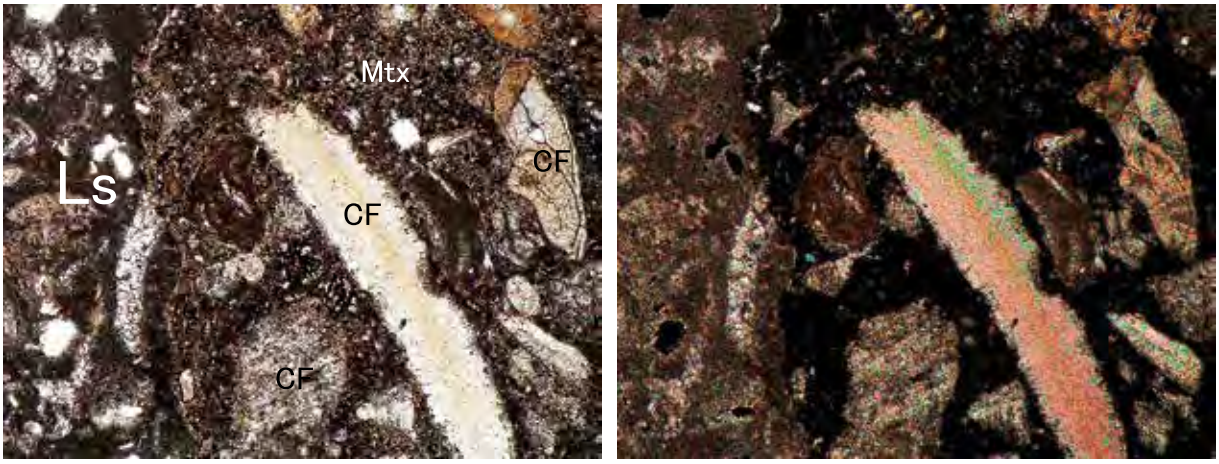
図版3　薄片(2)



4. No.4　第3号墓　屋根右端溝



5. No.5　第4号墓　墓正面軒



6. No.6　第7号墓　屋根

0.5mm

Qz:石英. CF:石灰質化石. Sl:珪質粘板岩. Ls:石灰岩. Mtx:基質. P:孔隙. Crb:中性化.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

附編５　フクヂ山古墓群出土銭貨の蛍光Ｘ線分析について

パリノ・サーヴェイ株式会社
管理者　上田　圭一
担当者　齋藤　紀行
分析者　齋藤　紀行

＜目次＞

はじめに
1. 試料
2. 分析方法
3. 結果
4. 考察
引用文献

＜図表・図版一覧＞

表 1.　試料
表 2.　測定条件
表 3.　蛍光 X 線分析結果（参考値）

図 1.　蛍光 X 線スペクトル

図版 1　試料

はじめに

フクヂ山古墓群は那覇市に所在する、近世から近現代の古墓である。本業務は、フクヂ山古墓群において出土した古銭の材質に関する情報を得ることを目的とし、蛍光 X 線分析による非破壊調査を実施する。

1.試料

試料は、表 1 に掲げた資料 No.1～7 の寛永通寶 7 枚である。なお、これら試料は錆化を受けており、表面には鉄や銅、鉛などの腐食生成物が認められる。

表 1. 試料

試料No.	墓番号	出土地点	遺物番号	日付	試料種類
資料No.1	第8号墓	墓庭前石垣(左)上	8-001	2014/10/29	銭貨
資料No.2	第8号墓	墓庭前石垣(左)上	8-002	2014/10/29	銭貨
資料No.3	第8号墓	墓庭前石垣(左)上	8-006	2014/10/29	銭貨
資料No.4	第8号墓	墓庭前石垣(左)上	8-009	2014/10/29	銭貨
資料No.5	第8号墓	墓庭前石垣(左)上	8-010	2014/10/29	銭貨
資料No.6	第11号墓	豚頭蓋骨A共伴	11-077	2014/11/20	銭貨
資料No.7	第11号墓	豚頭蓋骨B共伴	11-078	2014/11/20	銭貨

2.分析方法

蛍光 X 線分析は、サンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、ごく表面層を測定対象としているため、出土遺物表面が錆化の影響を受けている場合、遺物本来の元素組成を導くことは難しく、本来の元素組成を知るためには錆層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の元素組成を知るためには極めて有効な手法となる。

表 2. 測定条件

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rh
コリメータ	φ10.0mm
フィルター	なし
雰囲気	大気
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	自動設定
測定時間(秒)	300

本調査では、非破壊を前提とした材質調査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や錆（腐食生成物）の除去を行わず、調査に供する。材質調査に用いた装置はセイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（SEA2120L）である。本装置は、下面照射型の装置であり、X 線管球は Rh，コリメーターサイズは 10mmφである。測定条件の詳細を表 2 に示す。

計測した特性 X 線スペクトルは元素定性を実施した後、FP 法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いたスタンダードレス分析により定量演算を行い、相対含有率（wt%）を求めているが、算出された結果は腐食生成物を伴う試料表面において取得した元素スペクトルを半定量化しているにすぎない。あくまでも量比の目安として求めたものであり、参考までに止めておかれたい。

3.結果

蛍光 X 線スペクトルを図 1 に掲げる。また、参考として FP 法により求めた半定量結果を表 3 に示す。

(1)資料 No. 1

面背に鉄錆と見られる赤色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Ti（チタン），Fe（鉄），Cu（銅），Zn（亜鉛），As（砒素），Sn（錫），Sb（アンチモン），Pb（鉛）が確認される。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、銅に富む青銅銭である感を受ける。

(2)資料 No. 2

面には白色の腐食生成物、背には鉄錆と見られる赤色の腐食生成物と白色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Fe，Cu，Zn，As，Sn，Sb，Pb が確認される。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、

表 3. 蛍光 X 線分析結果(参考値)

試料		半定量結果(wt%)							
試料No.	遺物番号	Ti	Fe	Cu	Zn	As	Sn	Sb	Pb
資料No.1	8-001	0.08	1.19	89.25	0.15	0.55	2.69	1.00	5.10
資料No.2	8-002	-	1.79	65.30	0.19	2.92	11.49	0.32	17.98
資料No.3	8-006	-	1.62	60.40	0.19	0.76	3.88	0.34	32.82
資料No.4	8-009	0.20	2.90	64.54	0.25	0.37	6.66	-	25.07
資料No.5	8-010	0.12	2.69	81.45	0.01	0.95	0.50	3.06	11.23
資料No.6	11-077	-	0.53	89.62	0.02	0.45	-	2.37	7.02
資料No.7	11-078	-	0.80	66.76	-	0.81	3.05	0.37	28.21

銅を主とし、錫と鉛を伴う青銅銭である感を受ける。

(3)資料 No. 3

面には鉄錆と見られる赤色の腐食生成物と白色の腐食生成物、背には緑青と見られる緑色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Fe, Cu, Zn, As, Sn, Sb, Pb が確認される。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、銅を主とし、鉛に富む青銅銭である感を受ける。

(4)資料 No. 4

面には緑青と見られる緑色の腐食生成物、背には鉄錆と見られる赤色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Ti, Fe, Cu, Zn, As, Sn, Pb が確認される。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、銅を主とし、鉛に富む青銅銭である感を受ける。

(5)資料 No. 5

面には緑青と見られる緑色の腐食生成物と白色の腐食生成物、背には鉄錆と見られる赤色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Ti, Fe, Cu, Zn, As, Sn, Sb, Pb が確認される。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、少量のアンチモンを伴い, 錫に乏しい青銅銭である感を受ける。

(6)資料 No. 6

面背とも緑青と見られる緑色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Fe, Cu, Zn, As, Sb, Pb が確認され、錫は見えない。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、銅に富み, 少量のアンチモンを伴う錫に乏しい青銅銭である感を受ける。

(7)資料 No. 7

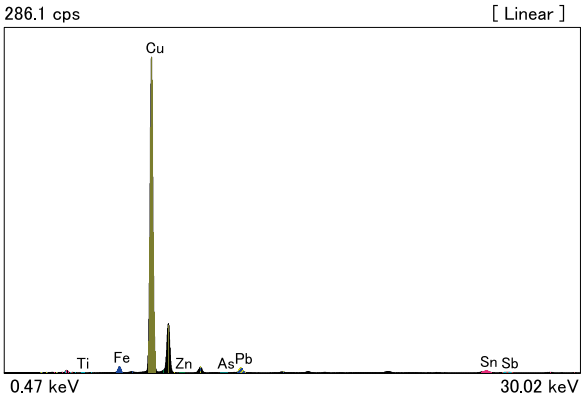
面背とも緑青と見られる緑色の腐食生成物が付着する。元素分析では、Fe, Cu, As, Sn, Sb, Pb が確認される。腐食生成物を伴う表面分析ではあるものの、銅を主とし、鉛に富む青銅銭である感を受ける。

4.考察

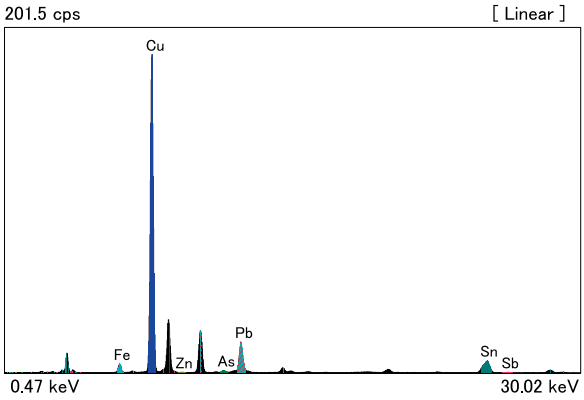
古銭の材質は、金、銀、青銅、鉛、鉄、黄銅など、その種類が多いが、特に銅と錫・鉛の合金である青銅の貨幣が大半を占める（山口,1994）。なお、寛永通寶は、齋藤・高橋・西川（2000）によれば、寛永 13 年(1636)に鋳造が開始され、寛永 17 年(1640)に一旦鋳銭が停止されるまでのものが古寛永と称され、「ス貝寶」と呼ばれる字体に特徴がある。また、寛文 8 年(1668)以降に再開されて発行されたと想定されているものが新寛永と称され、「ハ貝寶」と呼ばれる字体に特徴があり、明和 5 年（1768）以降には真鍮 4 文銭、万延元年（1860）以降には鉄銭が発行されたことが述べられている。

調査資料は、字体の特徴から資料 No.2,4 が古寛永、資料 No.1,3,5,6,7 が新寛永に分類されると見ら

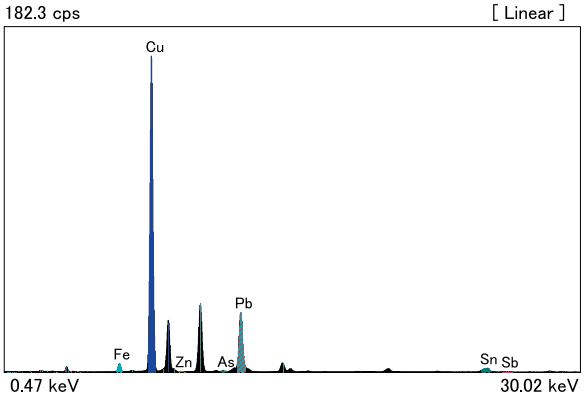
図1 蛍光X線スペクトル



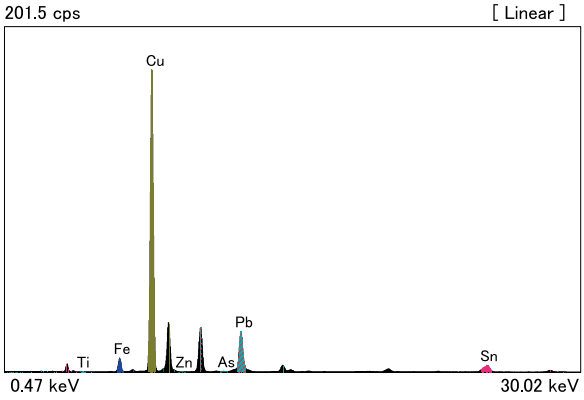
資料No.1



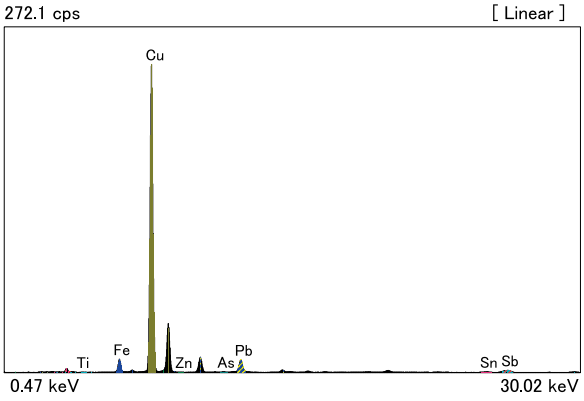
資料No.2



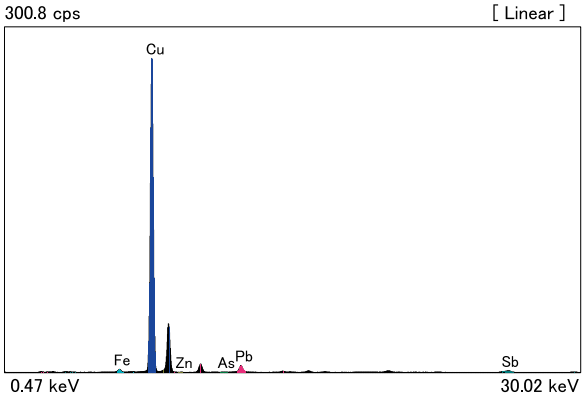
資料No.3



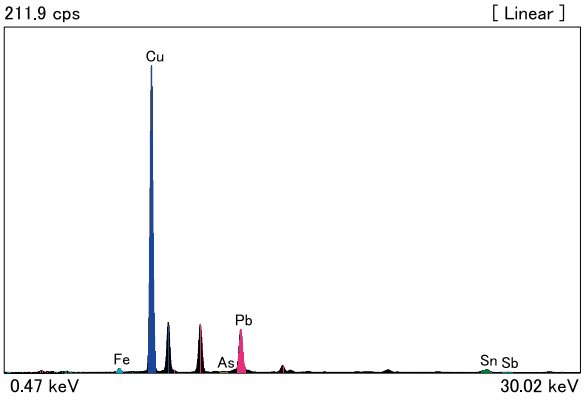
資料No.4



資料No.5



資料No.6



資料No.7

れる。蛍光X線分析による表面分析結果では、主に銅，錫，鉛が検出されていることより、いずれも青銅銭であることが確認され、真鍮銭や鉄銭は認められない。

主成分である銅，錫，鉛以外の検出元素は青銅に含まれる不純元素として検出される例が多い元素である。佐々木（1997）によれば、粗銅の不純成分として硫黄，鉄，砒素，アンチモン，錫，鉛，亜鉛などがあることや製錬要因で残留する重要な成分に金と銀があることが報告されている。なお、資料No.5,6に関しては錫に乏しく，少量のアンチモンを伴う点で着目されるものの、表面分析法による調査では結果の不確かさが拭いきれない。

蛍光X線分析法は、簡便，迅速，非破壊という利点がある一方、試料の表面状態や偏析などの不均一性に大きく依存する。確度の高い情報を得るためには、定量性の高い手法を以て地金本来の化学組成を求めることが肝要となる。

今後、法量計測や字体分類など銭貨学からのアプローチも期待されるところである。

引用文献

佐々木　稔,1997,出土銭貨の自然科学的解析法について.出土銭貨,7,93-105.

齋藤努・高橋照彦・西川裕一,2000,近世銭貨に関する理化学的研究-寛永通寶と長崎貿易銭の鉛同位体比分析.IMES DISCUSSION PAPER SERIES,No.2000-J-1.

山口誠治,1994,中世古銭の科学的調査について,中世の出土銭.兵庫埋蔵銭調査会,260-265.

図版1 試料

資料No.1

資料No.2

資料No.3

資料No.4

資料No.5

資料No.6

2cm

資料No.7

○は、測定箇所のおおよその位置

図　　版

図版 1　遺跡一帯の空中写真（1）（2010 年 9 月 27 日撮影）　（S ＝ 1/5, 000）　［ 上が北 ］

図版２　遺跡一帯の空中写真（２）（2010 年９月 27 日撮影）　（S ＝ 1/5, 000）　［上が北］
（赤線内が、調査地区範囲。黄矢印は、遺跡一帯の遠近景写真の撮影位置及び向き。）

図版３　上：調査地一帯の空中写真（2014 年 10 月 27 日撮影）（南から）
下：調査地一帯の空中写真（2014 年 10 月 27 日撮影）（東から）

図版４　上：調査地一帯の空中写真（2015 年４月３日撮影）（北から）
下：調査地近景（南東から）

図版５　調査地一帯の空中写真　第１～９・11 号墓分布状況　［左が北］
合成写真（2014 年 10 月 27 日・2015 年４月３日撮影）

図版６　上：第１号墓、第１－１号墓　空中写真（2015 年４月３日撮影）（上が北）
下：第１号墓

図版７　第１号墓

１段目左：墓全体（北西から）　　１段目右：伐採前の状況
２段目左：調査作業状況　　２段目右：漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去、土層観察用ﾄﾚﾝﾁ掘削後
３段目左：墓正面（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後 ）　　３段目右：墓庭右石積み（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）
４段目左：墓庭左石積み（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）　　４段目右：墓全体（土層観察用ﾄﾚﾝﾁ掘削後）（北西から）

図版８　第１号墓

１段目左：屋根後端石積み
２段目左：墓南西の第1−1号墓の方向へ向かう階段
３段目左：屋根土層観察用ﾄﾚﾝﾁ掘削状況
４段目左：墓口香炉石（上面）（上が正面側）
１段目右：墓庭南東隅排水口
２段目右：墓庭土層観察用ﾄﾚﾝﾁ掘削状況
３段目右：墓口香炉石（正面）
４段目右：墓口香炉石（右側面）（右が上）

図版９　第１号墓

１段目左：墓口蓋石（正面）（右が上）
２段目左：羨道
３段目左：墓誌検出状況
４段目左：墓室シルヒラシドゥクル

１段目右：墓口蓋石（上面）（上が正面側）
２段目右：墓室墓誌検出状況（奥棚１段目中央）
３段目右：墓室木炭片検出状況（奥棚３段目中央）
４段目右：墓室卵殻片検出状況（奥棚３段目左端）

図版 10　第１号墓、第１－１号墓

１段目左：第１号墓墓室検出状況　　１段目右：第１号墓墓室右側
２段目左：第１号墓墓室左側　　２段目右：第１号墓墓室前壁
３段目左：第１号墓墓室奥棚ﾄﾚﾝﾁ掘削状況　３段目右：第１号墓墓室奥棚ﾄﾚﾝﾁ掘削状況
４段目左：第１－１号墓覆土半裁状況　　４段目右：第１－１号墓基礎検出状況（正面側）

図版 11　上：第２号墓　空中写真(2015 年４月３日撮影)(上が北)
下：第２号墓

図版 12　第２号墓

１段目左：伐採前の状況
２段目左：墓庭検出状況（北から）
３段目左：墓庭排水口検出状況
４段目左：墓庭遺物出土状況（上部）

１段目右：調査作業状況
２段目右：墓庭前石積み検出状況
３段目右：排水に伴う墓庭外側暗渠検出状況
４段目右：墓庭遺物出土状況（上部）

図版 13　第２号墓

１段目左：墓庭遺物出土状況
２段目左：墓庭遺物出土状況
３段目左：墓庭遺物出土状況
４段目左：墓庭土層観察用ﾄﾚﾝﾁ掘削状況

１段目右：墓庭遺物出土状況
２段目右：墓庭遺物出土状況
３段目右：墓庭遺物出土状況（下部）
４段目右：墓室上の岩盤崩落状況

図版 14　第２～４号墓

１段目左：第２号墓墓室上の岩塊除去　　１段目右：第２号墓墓室上の岩塊除去
２段目左：第２号墓墓室検出状況(北東から)　２段目右：第２号墓墓室検出状況(北西から)
３段目左：第２号墓墓室検出状況(正面側)　３段目右：第２号墓墓室底面検出状況
４段目左：第２号墓カビアンジ検出状況　　４段目右：第３・４号墓正面(漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後)

図版 15　上：第３～６号墓、第３－１号墓、第４－１号墓　空中写真(2015 年４月３日撮影)(下が北)
下：第３～５号墓、第５－１号墓(南から)

図版 16　上：第３・４号墓、第３－１号墓、第５－１号墓(南西から)
　　下：第３～６号墓、第４－１号墓、第５－１号墓(東から)

図版 17　第３～６号墓、第４－１号墓、第５－１号墓

１段目左：第３・４号墓墓庭間の石列　　１段目右：第３～６号墓墓庭土層堆積状況
２段目左：第３～５号墓周辺伐採前の状況　２段目右：第５・６号墓周辺伐採前の状況
３段目左：第３・４号墓調査作業状況　　３段目右：第３号墓正面（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）
４段目左：第３号墓カビアンジ検出状況　　４段目右：第３号墓屋根土層堆積状況

図版 18　第３号墓

１段目左：墓庭遺物出土状況　　１段目右：墓庭遺物出土状況
２段目左：墓庭遺物出土状況　　２段目右：墓庭土層堆積状況
３段目左：墓口香炉石（正面）　　３段目右：墓口香炉石（上面）（下が正面）
４段目左：墓口香炉石（左側面）（左が上）　　４段目右：墓口蓋石（正面）（左が上）

図版 19　第３号墓、第３－１号墓

１段目左：第３号墓墓室検出状況(漆喰除去後)　１段目右：第３号墓墓室右側
２段目左：第３号墓墓室右側(漆喰除去後)　２段目右：第３号墓墓室左側
３段目左：第３号墓墓室シルヒラシドゥクル　３段目右：第３号墓墓室前壁
４段目左：第３号墓墓室底面半裁状況　４段目右：第３－１号墓基礎検出状況(正面)

図版 20　第３－１号墓、第４号墓

１段目左：第３－１号墓基礎検出状況（上面）　１段目右：第４号墓正面（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）
２段目左：第４号墓カビアンジ検出状況　２段目右：第４号墓屋根土層堆積状況
３段目左：第４号墓墓庭遺物出土状況　３段目右：第４号墓墓庭遺物出土状況
４段目左：第４号墓墓庭遺物出土状況　４段目右：第４号墓墓庭遺物出土状況

図版 21　第４号墓

１段目左：墓庭遺物出土状況
２段目左：墓庭土層堆積状況
３段目左：墓口香炉石（上面）（上が正面）
４段目左：墓口蓋石（正面）（左が上）

１段目右：墓庭遺物出土状況
２段目右：墓口香炉石（正面）
３段目右：墓口香炉石（左側面）（左が上）
４段目右：墓口蓋石（左側面）（左が上）

図版 22　第４号墓、第４－１号墓

１段目左：第４号墓墓室蔵骨器検出状況　　１段目右：第４号墓墓室検出状況
２段目左：第４号墓墓室右側　　２段目右：第４号墓墓室左側
３段目左：第４号墓墓室シルヒラシドゥクル　　３段目右：第４号墓墓室前壁(上部)
４段目左：第４号墓墓室底面半裁状状況　　４段目右：第４－１号墓正面

図版 23　第４－１号墓、第５・６号墓

１段目左：第４－１号墓左側面　　１段目右：第５号墓正面（調査開始前の状況）
２段目左：第５号墓ｻﾝﾐﾃﾞｰ上覆土半裁状況　２段目右：第５号墓墓口
３段目左：第３～６号墓墓庭（東から）　３段目右：第５号墓屋根ﾓﾙﾀﾙ断割り状況
４段目左：第５号墓墓室蔵骨器検出状況　４段目右：第５号墓墓室検出状況

図版 24　上：第５号墓正面
　　下：第５号墓正面（サンミデー上の覆土除去後）

図版 25　上：第５号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１・２）
下：第５号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１左側）

図版 26　上：第５号墓墓室蔵骨器配置状況(右棚)
下：第５号墓墓室蔵骨器配置状況(左棚)

図版 27　第５号墓

１段目左：墓室検出状況(漆喰除去後)　　１段目右：墓室右側
２段目左：墓室左側　　２段目右：墓室左側(漆喰除去後)
３段目左：墓室シルヒラシドゥクル　　３段目右：墓室前壁
４段目左：墓室シルヒラシドゥクル半裁状況　　４段目右：墓室奥棚１～３半裁状況

図版 28　第５－１号墓、第６～９号墓

１段目左：第５－１号墓正面　　１段目右：第５－１号墓右側面
２段目左：第６号墓使用時の状況　　２段目右：第６号墓墓室蔵骨器検出状況
３段目左：第６号墓墓室検出状況　　３段目右：第６号墓墓室右壁
４段目左：第６号墓墓室左壁　　４段目右：第７～９号墓(北西から)

図版 29　上：第６号墓正面
下：第６号墓正面(第５号墓サンミデー上覆土除去後)

図版 30　第７～９号墓

１段目左：第７～９号墓(北東から)　　１段目右：第７号墓使用時の状況
２段目左：第７号墓使用時の状況　　２段目右：第７号墓調査作業状況
３段目左：第７号墓正面　　３段目右：第７号墓正面(漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後)
４段目左：第７号墓カビアンジ検出状況　　４段目右：第７号墓カビアンジの内部

図版 31　上：第 7 ～ 9 ・11号墓　空中写真(2014 年 10 月 27 日撮影)(下が北)
下：第 7 ～ 9 号墓　空中写真(2014 年 10 月 27 日撮影)(下が北)

図版 32　上：第 7 号墓
　　下：第 7 号墓(漆喰・モルタル除去後)

図版 33　上：第７号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１～３）
下：第７号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１・２、左棚）

図版 34　第 7 号墓

1 段目左：墓庭右石積み
2 段目左：墓庭左石積み
3 段目左：墓全体(北から)
4 段目左：墓庭遺物出土状況

1 段目右：墓庭右石積み(漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後)
2 段目右：墓庭前石積み
3 段目右：墓屋根断割り状況
4 段目右：墓庭遺物出土状況

図版 35　第 7 号墓

1 段目左：墓庭土層堆積状況
2 段目左：墓口香炉石（上面）
3 段目左：墓室蔵骨器片散乱状況
4 段目左：墓室右側
1 段目右：墓口香炉石（正面）
2 段目右：墓口蓋石（裏面）
3 段目右：墓室検出状況
4 段目右：墓室右側（漆喰除去後）

図版 36　第７・８号墓

１段目左：第７号墓墓室左側　　１段目右：第７号墓墓室後側
２段目左：第７号墓墓室ｼﾙﾋﾗｼﾄﾞｩｸﾙ　　２段目右：第７号墓墓室前壁
３段目左：第７号墓ｼﾙﾋﾗｼﾄﾞｩｸﾙ半裁状況　　３段目右：第８号墓使用時の状況
４段目左：第８号墓使用時の状況　　４段目右：第８号墓調査作業状況

図版 37　上：第８号墓
　　下：第８号墓(漆喰・モルタル除去後)

図版 38　上：第８号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚右側）
下：第８号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚左側）

図版 39　上：第８号墓墓室蔵骨器配置状況(右棚)
下：第８号墓墓室蔵骨器配置状況(左棚)

図版 40　第８号墓

１段目左：墓正面
２段目左：墓庭右石積み
３段目左：墓庭左石積み
４段目左：墓屋根

１段目右：墓正面（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）
２段目右：墓庭右石積み（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）
３段目右：墓庭前石積み
４段目右：墓屋根

図版 41　第８号墓

１段目左：墓屋根（漆喰・ﾓﾙﾀﾙ除去後）　　１段目右：墓屋根土層堆積状況（右断面）
２段目左：墓屋根土層堆積状況（右断面）　　２段目右：墓庭遺物出土状況（南西隅）
３段目左：墓庭遺物出土状況（南西隅）　　３段目右：墓庭遺物出土状況（南東隅）
４段目左：墓庭遺物出土状況（南東隅）　　４段目右：墓庭前石積み左側

図版 42　第８号墓

１段目左：墓庭前石積み上銭貨検出状況（被石除去前）　１段目右：墓庭前石積み上銭貨検出状況（南から）
２段目左：墓庭前石積み上銭貨検出状況（東から）　２段目右：銭貨検出状況（上部）（南から）
３段目左：墓庭銭貨検出状況（上部）（南から）　３段目右：銭貨検出状況（下部）（南から）
４段目左：墓庭前石積み中の銭貨検出状況　４段目右：墓庭土層堆積状況

図版 43　第８号墓

１段目左：墓口香炉石（使用時の状況）
２段目左：墓口蓋石（正面）（右が上）
３段目左：墓室検出状況
４段目左：墓室右側

１段目右：墓口蓋石（使用時の状況）
２段目右：墓室蔵骨器片散乱状況
３段目右：墓室奥棚・後壁
４段目右：墓室右棚

図版 44　第８号墓、第８－１号墓

１段目左：第８号墓墓室左側
２段目左：第８号墓墓室前壁（上部）
３段目左：第８号墓墓室天井（後壁上）
４段目左：第８－１号墓正面

１段目右：第８号墓墓室左棚
２段目右：第８号墓墓室前壁（下部）
３段目右：第８号墓墓室ｼﾙﾋﾗｼﾄﾞｩｸﾙ半裁状況
４段目右：第８－１号墓右側面

図版 45　上：第８－１号墓安置蔵骨器
下：第９号墓墓庭人骨(焼骨)片集中部

図版 46　上：第９号墓
　　下：第９号墓(漆喰・モルタル除去後)

図版 47　第９号墓

１段目左：伐採前の状況
２段目左：墓正面
３段目左：墓庭右石積み
４段目左：墓庭左石積み

１段目右：調査作業状況
２段目右：墓正面（漆喰・モルタル除去後）
３段目右：墓庭右石積み（漆喰・モルタル除去後）
４段目右：墓庭前石積み

図版 48　第 9 号墓

1 段目左：墓屋根
2 段目左：墓屋根後端石積み検出状況
3 段目左：墓屋根土層堆積状況（左断面）
4 段目左：墓庭土層堆積状況

1 段目右：墓屋根（漆喰除去後）
2 段目右：墓屋根土層堆積状況（左断面）
3 段目右：墓庭人骨（焼骨）片集中部検出状況（破線部）
4 段目右：墓口香炉石（上面）（下が正面）

図版 49　第９号墓

１段目左：墓口蓋石（正面）（右が上）
２段目左：墓室蔵骨器検出状況（左棚）
３段目左：墓室奥棚２・後壁
４段目左：墓室右壁

１段目右：墓室蔵骨器検出状況（右棚）
２段目右：墓室検出状況
３段目右：墓室右側
４段目右：墓室左側

図版 50　第９・11号墓

１段目左：第９号墓墓室ｼﾙﾋﾗｼﾄﾞｩｸﾙ　　１段目右：第９号墓墓室前壁（上部）
２段目左：第９号墓墓室前壁（下部）　　２段目右：第９号墓墓室天井（前左側）
３段目左：第11号墓伐採前の状況　　３段目右：第11号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１・２）
４段目左：第11号墓調査作業状況　　４段目右：第11号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１・２）

図版 51　上：第 11 号墓　空中写真(2014 年 10 月 27 日撮影)(左が北)
　　下：第 11 号墓　全体(北西から)

図版 52　上：第 11 号墓
下：第 11 号墓(漆喰・モルタル除去後)

図版 53　上：第 11 号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１・２右側）
下：第 11 号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚１左側）

図版 54　上：第 11 号墓墓室蔵骨器配置状況（奥棚 1 左側）
下：第 11 号墓墓室蔵骨器配置状況（シルヒラシドゥクル）

図版 55　第11号墓

１段目左：墓正面
２段目左：墓庭右石積み
３段目左：墓庭前石積み
４段目左：墓屋根トレンチ掘削状況

１段目右：墓正面（漆喰・モルタル除去後）
２段目右：墓庭左石積み
３段目右：墓屋根
４段目右：墓屋根土層堆積状況(右断面)

図版 56　第11号墓

1段目左：墓屋根土層堆積状況(右断面)　　1段目右：墓庭遺物出土状況
2段目左：墓庭遺物出土状況　　2段目右：墓庭遺物出土状況
3段目左：墓庭遺物出土状況　　3段目右：墓庭遺物出土状況
4段目左：墓庭遺物出土状況　　4段目右：墓庭遺物出土状況

図版 57　第11号墓墓庭

1段目左：墓庭遺物出土状況　　1段目右：墓庭遺物出土状況
2段目左：墓庭遺物出土状況　　2段目右：墓庭遺物出土状況
3段目左：墓庭遺物出土状況　　3段目右：墓庭遺物出土状況
4段目左：墓庭遺物出土状況　　4段目右：墓庭遺物出土状況

図版 58　第11号墓墓庭

1段目左：墓庭遺物出土状況　　1段目右：墓庭遺物出土状況
2段目左：墓庭遺物出土状況　　2段目右：墓庭遺物出土状況
3段目左：墓庭遺物出土状況　　3段目右：墓庭遺物出土状況
4段目左：墓庭遺物出土状況　　4段目右：墓庭遺物出土状況

図版 59　第11号墓墓庭

１段目左：墓庭遺物出土状況　　１段目右：墓庭遺物出土状況
２段目左：墓庭遺物出土状況　　２段目右：墓庭遺物出土状況
３段目左：豚頭蓋骨検出状況（北西から）　　３段目右：豚頭蓋骨検出状況（北から）
４段目左：豚頭蓋骨Ａ～Ｅ（西から）　　４段目右：豚頭蓋骨Ａ～Ｅ（南東から）

図版 60　上：第 11 号墓墓庭豚頭蓋骨検出状況（北から）
下：第 11 号墓墓庭豚頭蓋骨検出状況（南西から）

図版 61　第11号墓墓庭

１段目左：豚頭蓋骨（下顎骨）Ａ
２段目左：豚頭蓋骨Ｂ
３段目左：豚頭蓋骨Ｃ～Ｅ
４段目左：豚頭蓋骨Ｃ～Ｅ

１段目右：豚頭蓋骨（下顎骨）Ａ
２段目右：豚頭蓋骨Ｂ
３段目右：豚頭蓋骨Ｃ～Ｅ
４段目右：豚頭蓋骨Ｅ

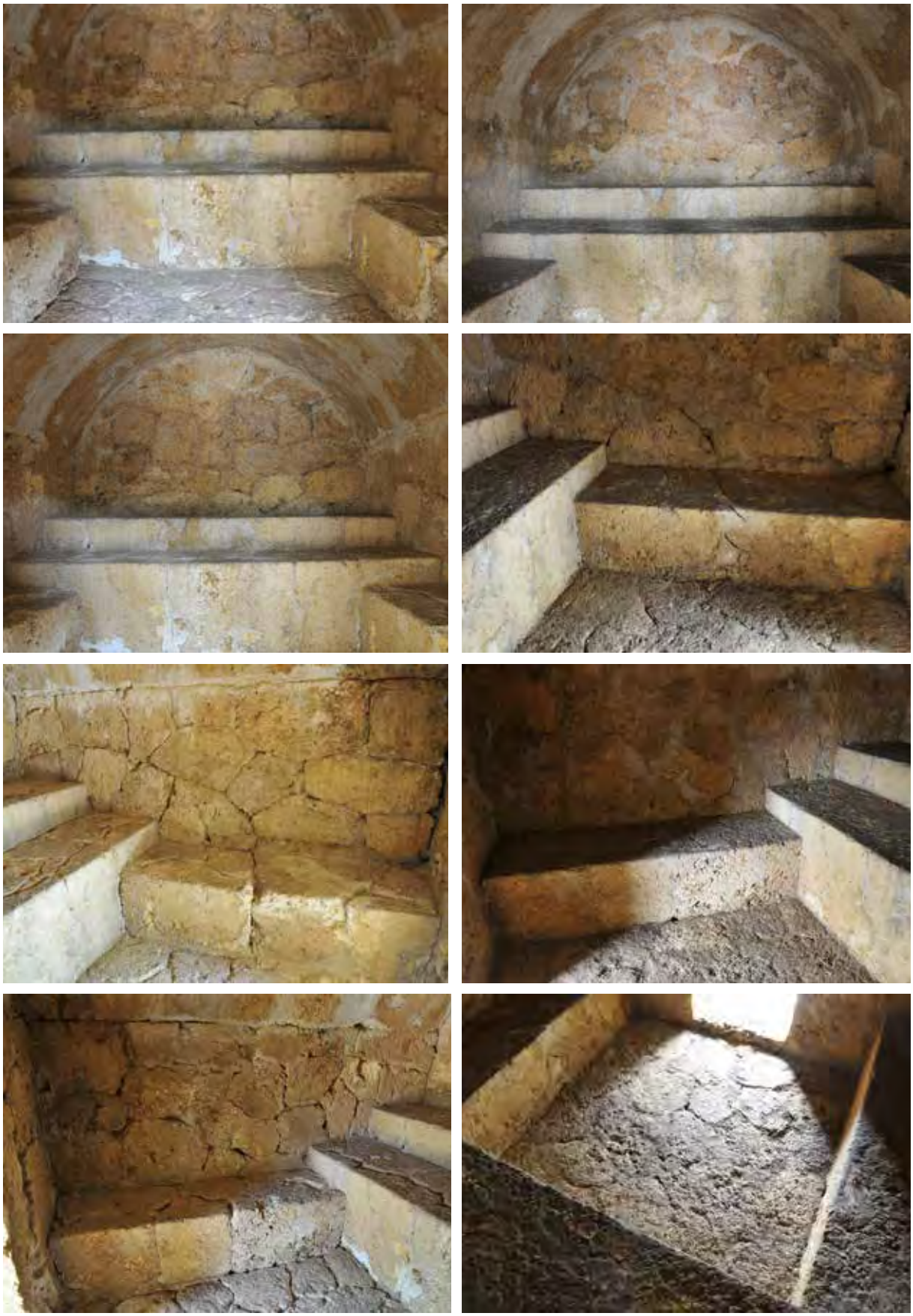
図版 62　第11号墓墓庭

１段目左：豚頭蓋骨Ｆ～Ｈ（東から）　　１段目右：豚頭蓋骨Ｆ～Ｈ（西から）
２段目左：豚頭蓋骨Ｆ　　２段目右：豚頭蓋骨Ｆ
３段目左：豚頭蓋骨Ｇ・Ｈ　　３段目右：豚頭蓋骨Ｇ・Ｈ
４段目左：墓庭土層堆積状況　　４段目右：墓庭土層堆積状況

図版 63　第11号墓

1段目左：墓口香炉石(正面)
2段目左：墓口香炉石(右側面)(右が上)
3段目左：墓口蓋石(破片)
4段目左：墓室蔵骨器片散乱状況

1段目右：墓口香炉石(上面)(上が正面)
2段目右：墓口蓋石(破片)
3段目右：墓口蓋石(上面？)
4段目右：墓室検出状況



図版 64　第11号墓墓室

１段目左：墓室検出状況(漆喰除去後)　　１段目右：奥棚１・２、後壁
２段目左：奥棚１・２、後壁(漆喰除去後)　　２段目右：墓室右側
３段目左：墓室右側(漆喰除去後)　　３段目右：墓室左側
４段目左：墓室左側(漆喰除去後)　　４段目右：シルヒラシドゥクル

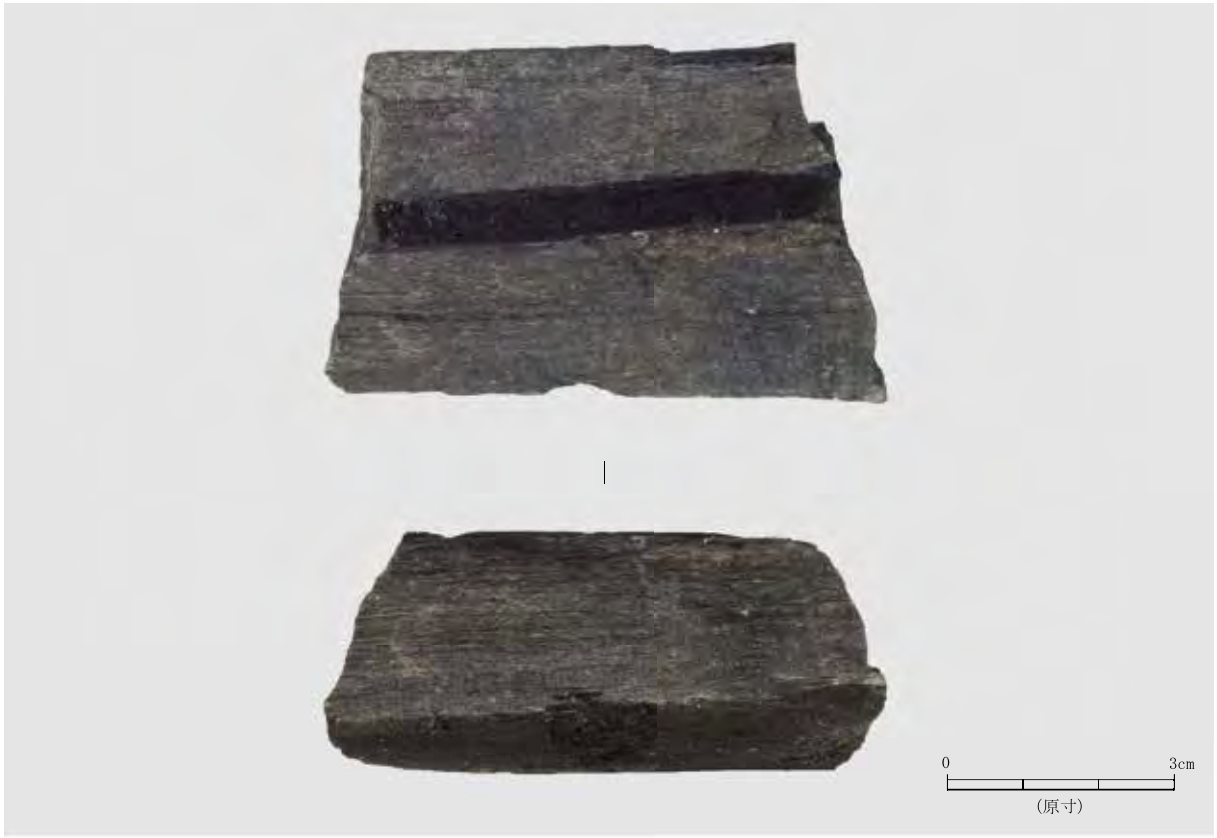
図版 65　第11号墓、第11－１号墓

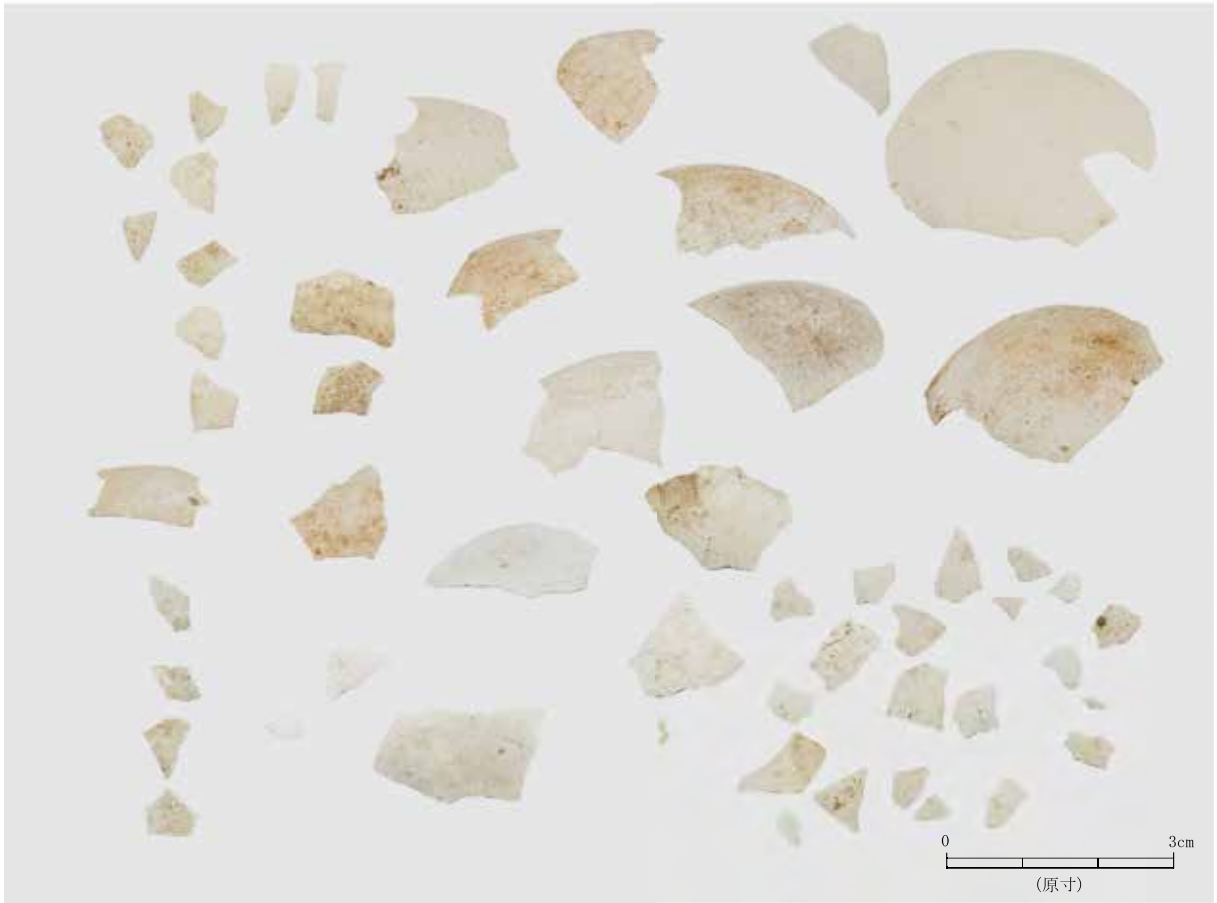
１段目左：第11号墓墓室ｼﾙﾋﾗｼﾄﾞｩｸﾙ(漆喰除去後)　１段目右：第11号墓墓室前壁(上部)
２段目左：第11号墓墓室前壁(下部)　２段目右：第11号墓墓室前壁(上部)(漆喰除去後)
３段目左：第11号墓墓室前壁(下部)(漆喰除去後)　３段目右：第11－１号墓検出状況
４段目左：第11－１号墓正面　４段目右：第11－１号墓右側面

図版 66　上：第 13 号墓正面
下：第 13 号墓墓室検出状況

図版 67　第13号墓

1段目左：伐採前の状況（近景）　　1段目右：伐採前の状況
2段目左：墓口周辺での蔵骨器片検出状況　　2段目右：調査作業状況
3段目左：調査作業状況　　3段目右：墓室
4段目左：墓前土層堆積状況　　4段目右：墓口の閉塞石





図版 68　上：第１号墓墓室奥棚３上面より検出した木炭片
下：第１号墓墓室棚上面より検出した卵殻片

図版 69　上：第７号墓墓庭前石垣（左側）上面より検出したニービヌフニ砕片
下：第11号墓墓庭出土の沖縄産無釉陶器（壺）内部より検出した枝サンゴ礫

図版 70　第２号墓　１号蔵骨器（１）
第４号墓　１号蔵骨器（２・３）、２号蔵骨器（４・５）、３号蔵骨器（６・７）、
４号蔵骨器（８・９）、５号蔵骨器（10・11）、６号蔵骨器（12・13）

図版 71　第４号墓　７号蔵骨器（１・２）、８号蔵骨器（３・４）、９号蔵骨器（５・６）、
10号蔵骨器（７・８）
第５号墓　１号蔵骨器（９）

図版 72　第５号墓　２号蔵骨器（１）、３号蔵骨器（２）、４号蔵骨器（３）、
５号蔵骨器（４）、６号蔵骨器（５）

図版 73　第５号墓　７号蔵骨器（１）、８号蔵骨器（２）、９号蔵骨器（３）、
10号蔵骨器（４）、11号蔵骨器（５）、12号蔵骨器（６）

図版 74　第５号墓　13号蔵骨器（１）
第６号墓　１号蔵骨器（２・３）
第７号墓　２号蔵骨器（４・５）、４号蔵骨器（６・７）、５号蔵骨器（８・９）、
６号蔵骨器（10・11）、７号蔵骨器（12・13）

図版 75　第７号墓　１号蔵骨器（１・２）、３号蔵骨器（３・４）

図版 76　第８号墓　２号蔵骨器（１・２）、９号蔵骨器（３・４）

図版 77　第８号墓　１号蔵骨器（１・２）、３号蔵骨器（３・４・４－１）

図版 78　第８号墓　４号蔵骨器（１・２）、５号蔵骨器（３・４）、
７号蔵骨器（５・６・６－１・６－２）、８号蔵骨器（７・８）、
10号蔵骨器（９・10）

図版 79　第８号墓　６号蔵骨器（１・２）
第９号墓　１号蔵骨器（３・４）

図版 80　第９号墓　２号蔵骨器（１・２）、３号蔵骨器（３・４）

図版 81　第９号墓　４号蔵骨器（１・２）、５号蔵骨器（３・４）

図版 82　第11号墓　３号蔵骨器（１）、14号蔵骨器（２）、15号蔵骨器（３）、
26号蔵骨器（４）、27号蔵骨器（５）、28号蔵骨器（６）

図版 83　第４－１号墓　１号蔵骨器（１・２）
第８－１号墓　１号蔵骨器（３・４）、２号蔵骨器（５・６）
第11号墓　１号蔵骨器（７）、２号蔵骨器（８）、４号蔵骨器（９）、
５号蔵骨器（10）

図版 84　第11号墓　６号蔵骨器（１）、７号蔵骨器（２）
第13号墓　１号蔵骨器（３・４）、２号蔵骨器（５・６）

図版 85　第２号墓　１号蔵骨器：蓋（１）
第４号墓　１号蔵骨器：蓋（２）、２号蔵骨器：蓋（３）、４号蔵骨器：蓋（４）、
５号蔵骨器：蓋（５）、６号蔵骨器：蓋（６）、
７号蔵骨器：蓋（７）・身（８）

図版 86　第４号墓　　８号蔵骨器：蓋（１）、９号蔵骨器：蓋（２）・身（３）、
10号蔵骨器：蓋（４）
第４－１号墓　１号蔵骨器：蓋（５）
第５号墓　　５号蔵骨器：身（６）、７号蔵骨器：身（７・７－１）、
13号蔵骨器：身（８）
第６号墓　　１号蔵骨器：蓋（９）

図版 87　第７号墓　１号蔵骨器：蓋（１）、２号蔵骨器：蓋（２）・身（３）、
３号蔵骨器：蓋（４）、４号蔵骨器：蓋（５）、５号蔵骨器：蓋（６）、
６号蔵骨器：蓋（７）、７号蔵骨器：蓋（８）
第８号墓　１号蔵骨器：蓋（９）

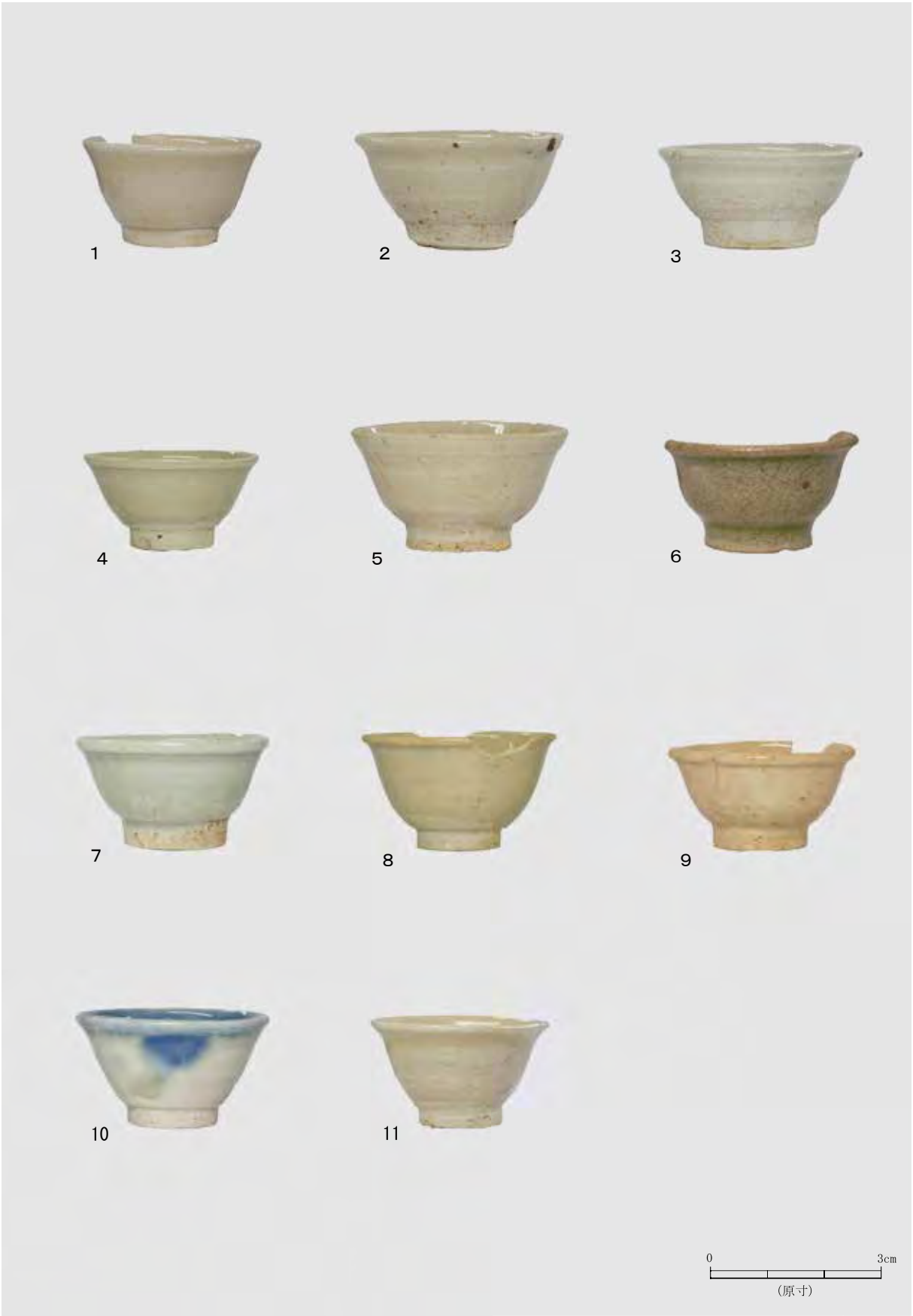
図版 88　第８号墓　２号蔵骨器：蓋（１）、３号蔵骨器：蓋（２）、４号蔵骨器：蓋（３）、
５号蔵骨器：蓋（４）、６号蔵骨器：蓋（５）・身（６）、
７号蔵骨器：蓋（７）、８号蔵骨器：蓋（８）、９号蔵骨器：蓋（９）

図版 89　第８号墓　　10号蔵骨器：蓋（１）・身（２）
第８－１号墓　１号蔵骨器：蓋（３）・身（４）、２号蔵骨器：蓋（５）
第９号墓　　１号蔵骨器：蓋（６）・身（７）、２号蔵骨器：蓋（８）、
３号蔵骨器：蓋（９）、４号蔵骨器：蓋（10）

図版 90　第９号墓　５号蔵骨器：蓋（１）
第11号墓　１号蔵骨器：身（２）、５号蔵骨器：身（３）、６号蔵骨器：身（４）、
14号蔵骨器：蓋（５）、15号蔵骨器：蓋（６）
第13号墓　１号蔵骨器：蓋（７）・身（８）、２号蔵骨器：蓋（９）・身（10）

図版 91　青花（1）
色絵（3）
染付（4）
本土産磁器（2・5～7）

図版 92　本土産陶磁器（１～５）
沖縄産施釉陶器（６～９）



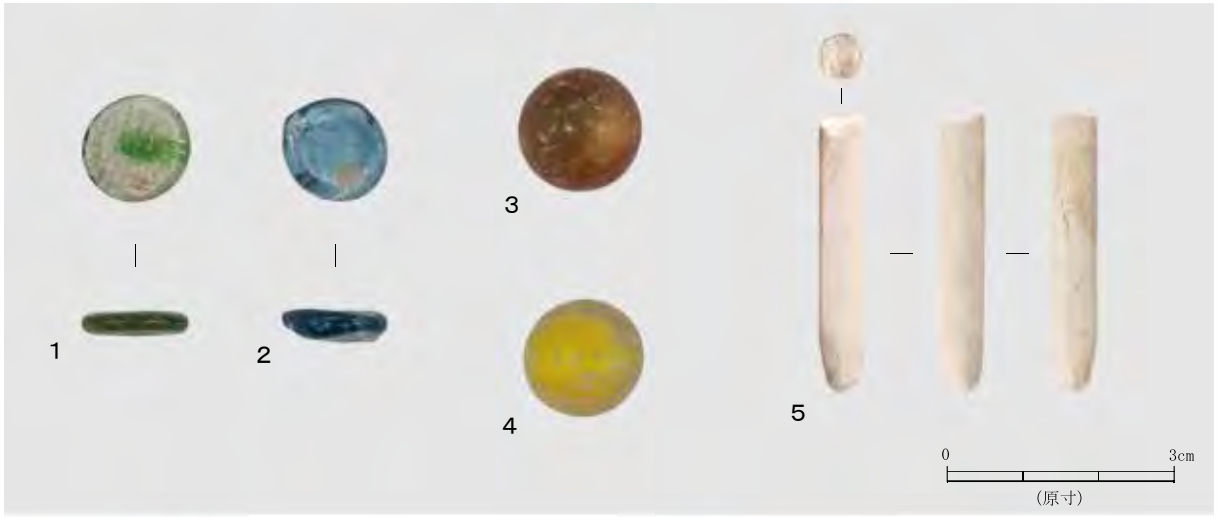
図版 93　沖縄産施釉陶器

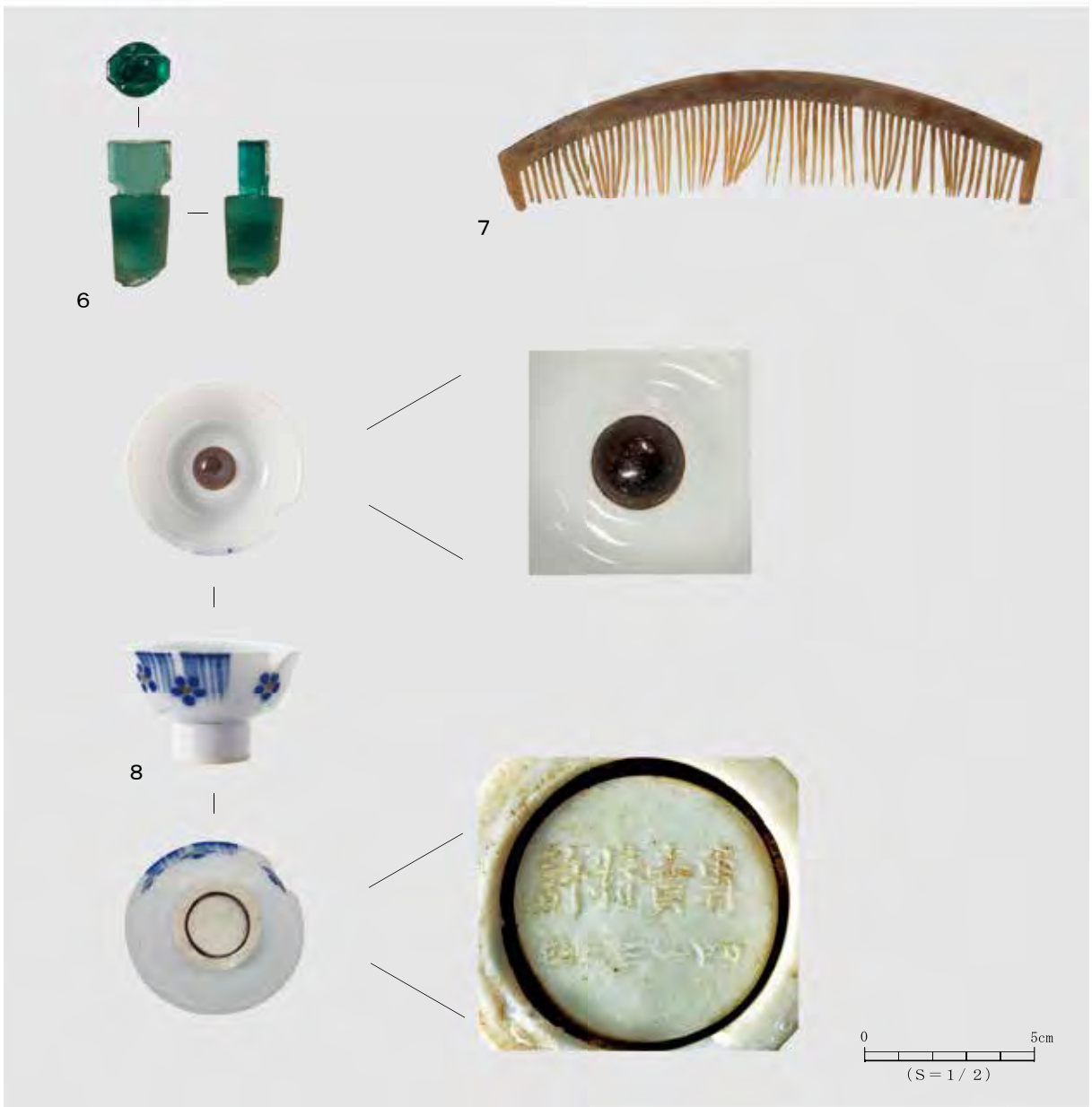
図版 94　沖縄産施釉陶器

図版 95　沖縄産施釉陶器

図版 96　沖縄産施釉陶器（１～５）
沖縄産無釉陶器（６）

図版 97　ガラス製品

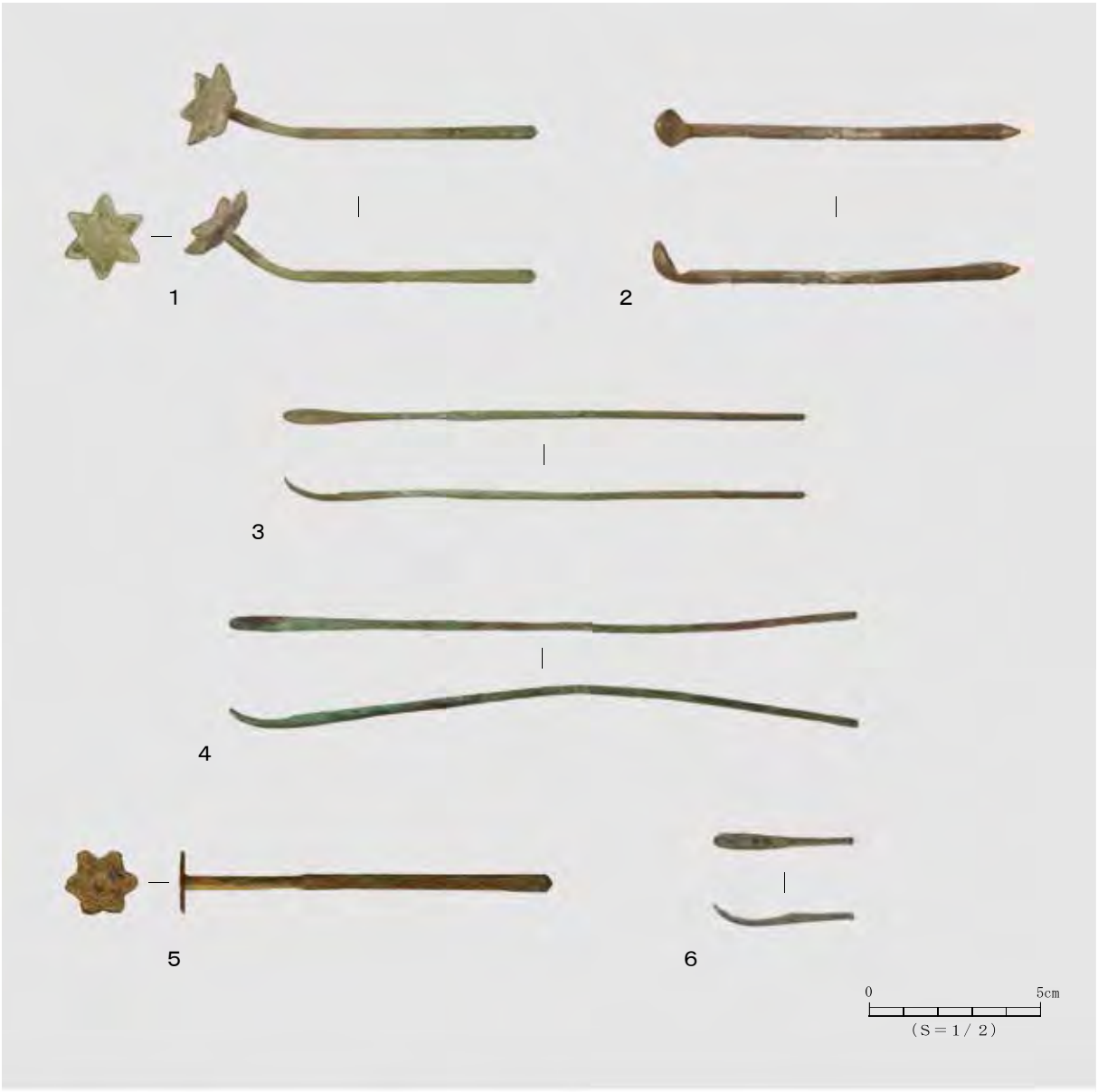




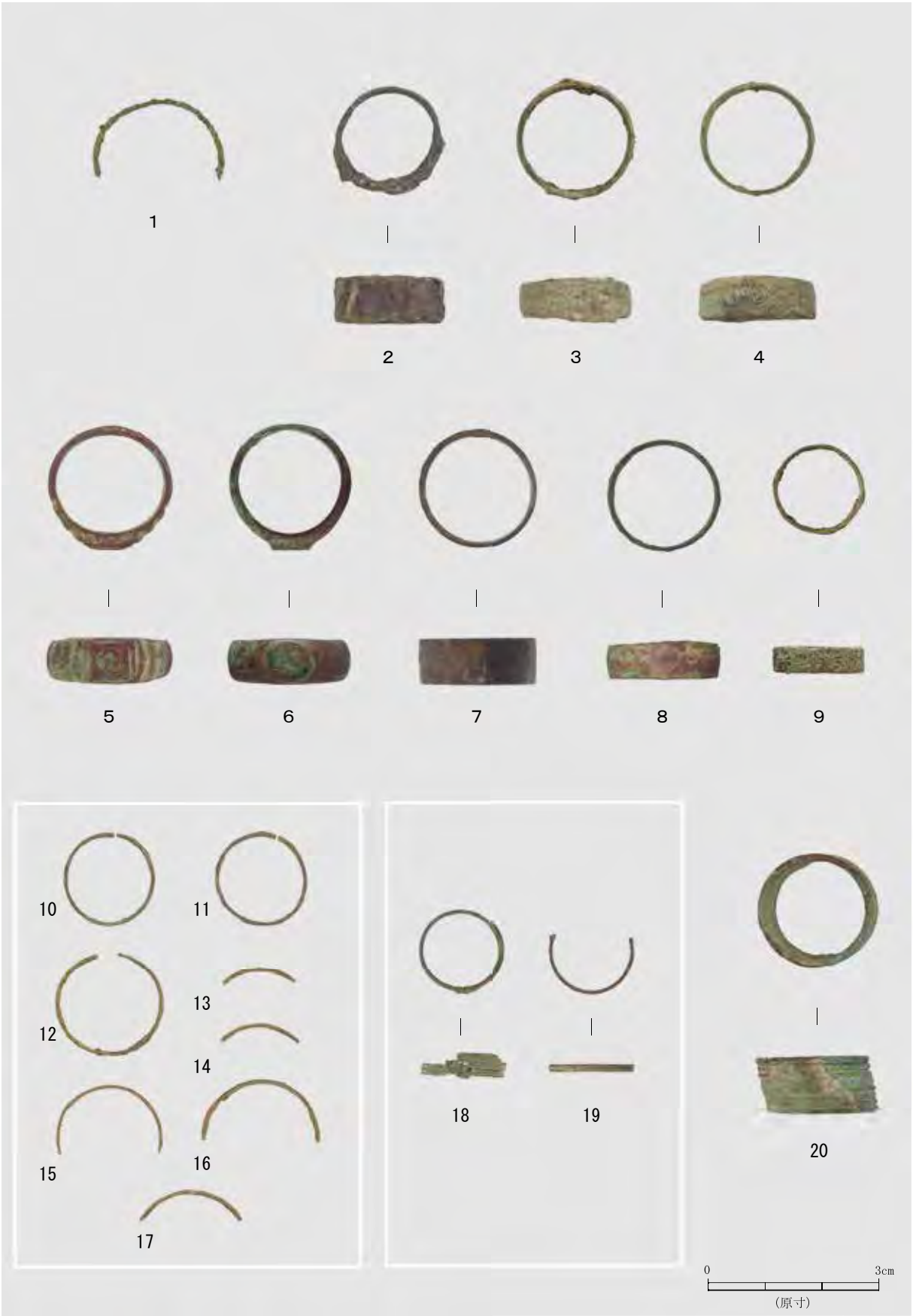
図版 98　ガラス製品（１～４・６）
石製品 石筆？（５）
プラスチック製品（７）
本土産磁器（８）

図版 99　陶製品 煙管（１～３）
金属製品 煙管（４～15）

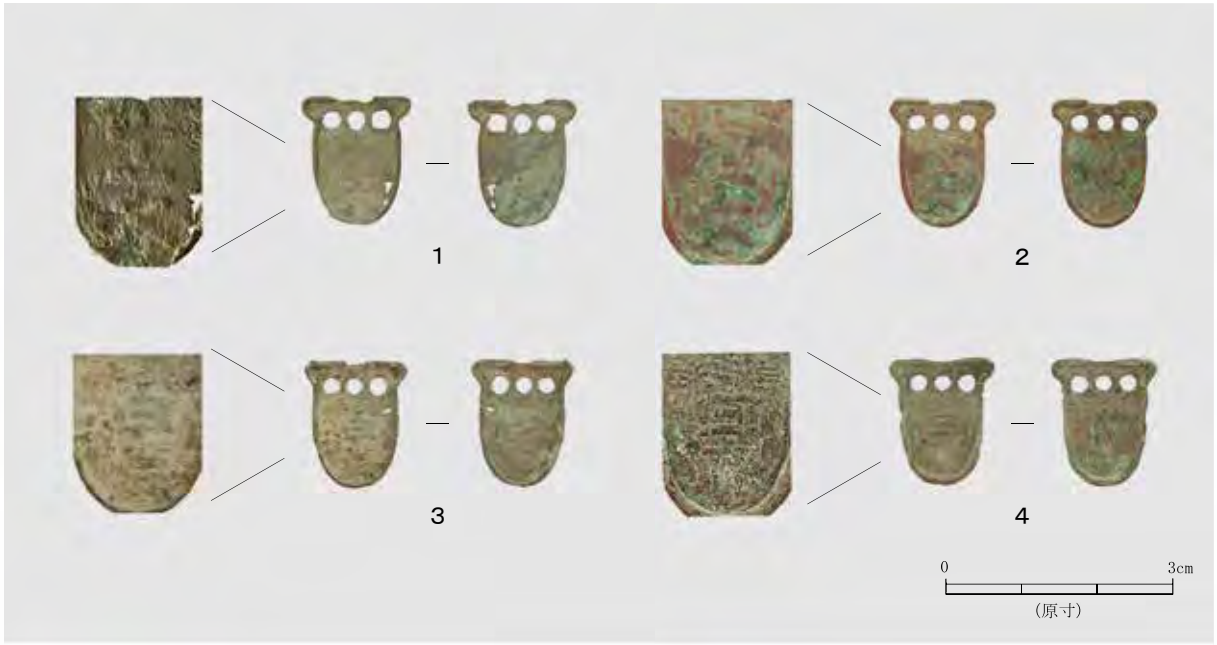
図版 100　金属製品 煙管

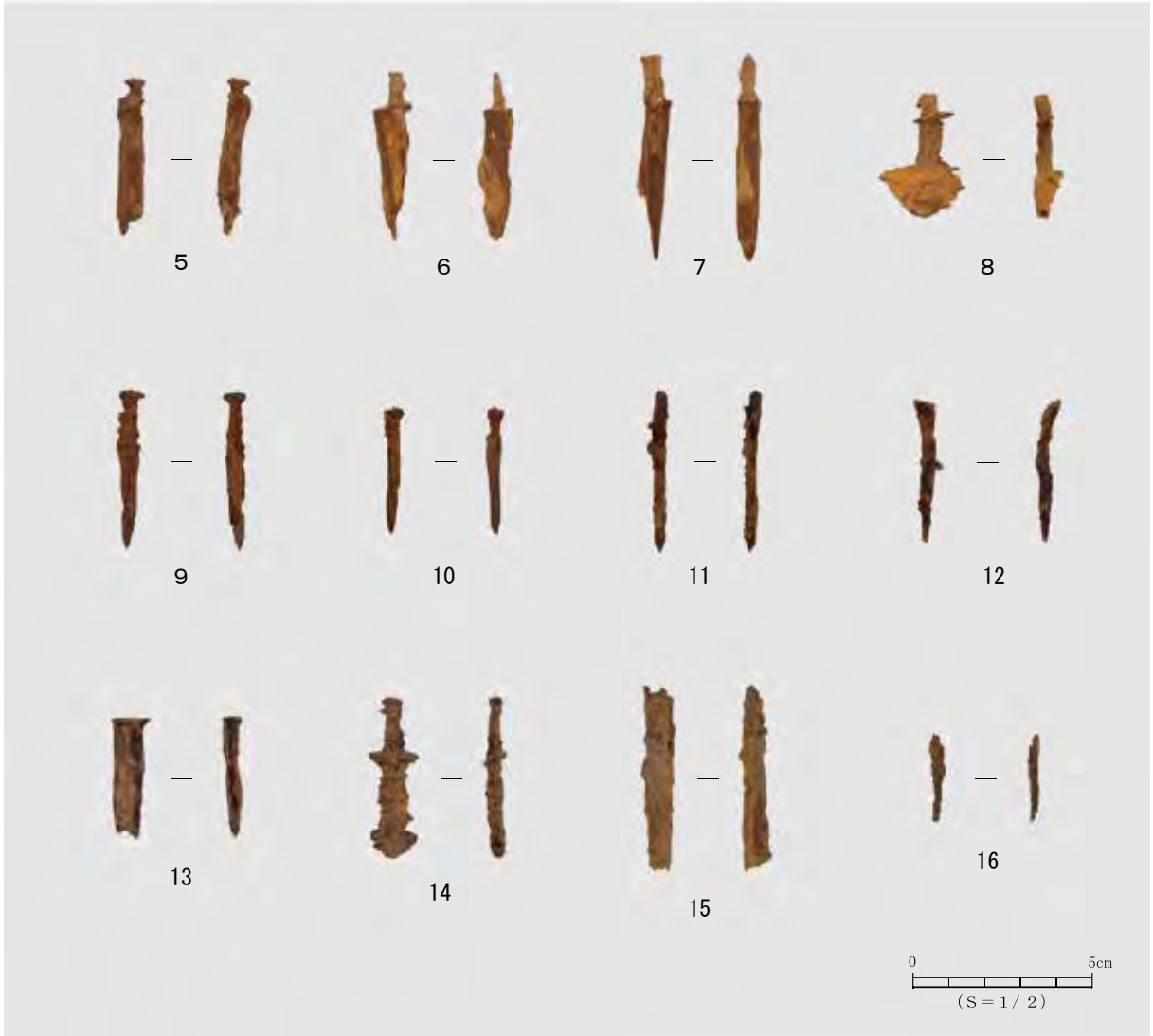


図版 101　金属製品 簪（1～6）
金属製品 指輪（7～14）

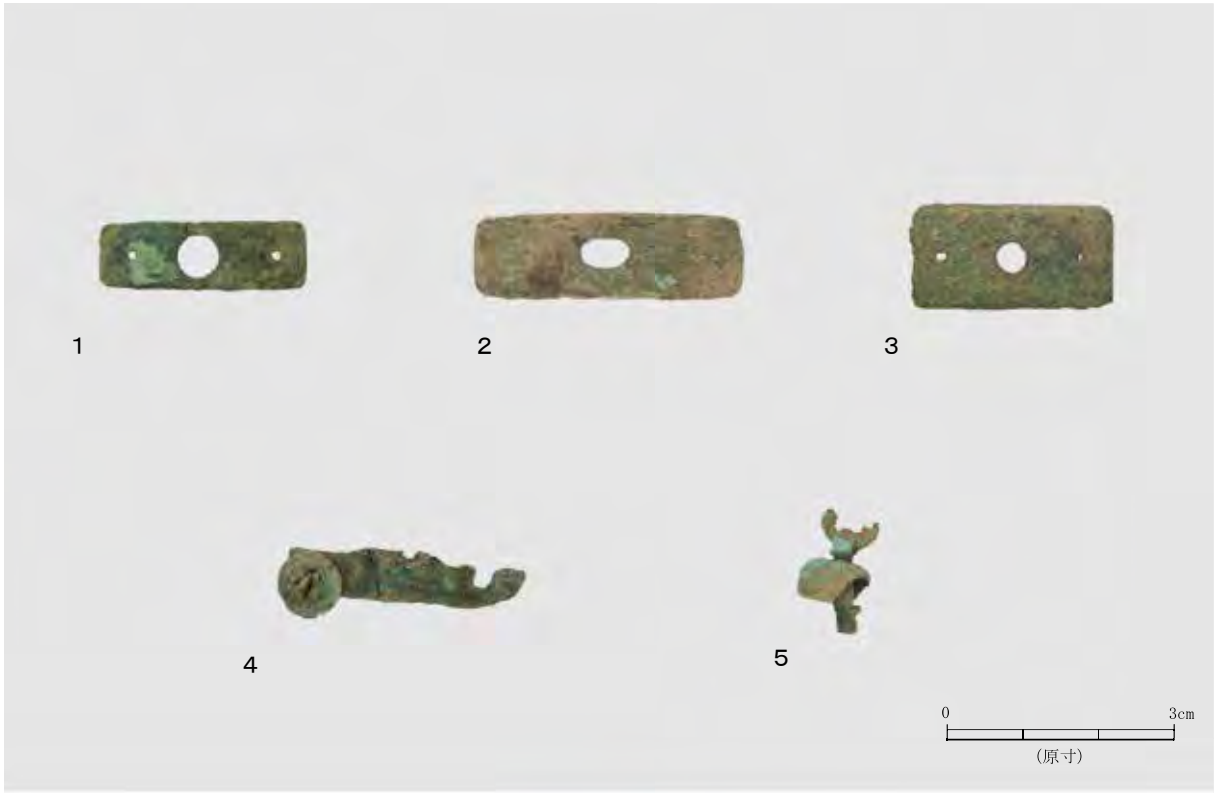


図版 102　金属製品 指輪

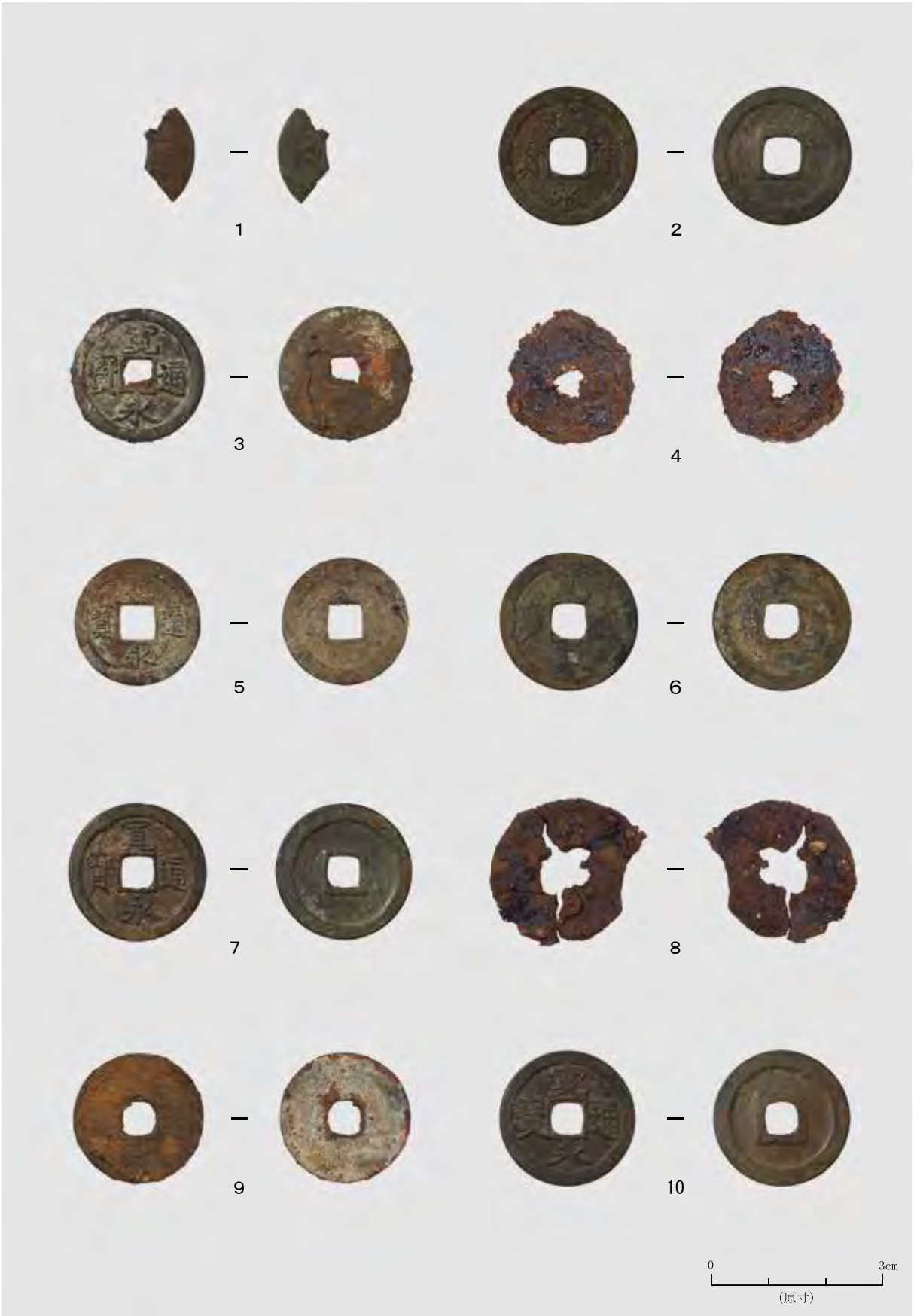




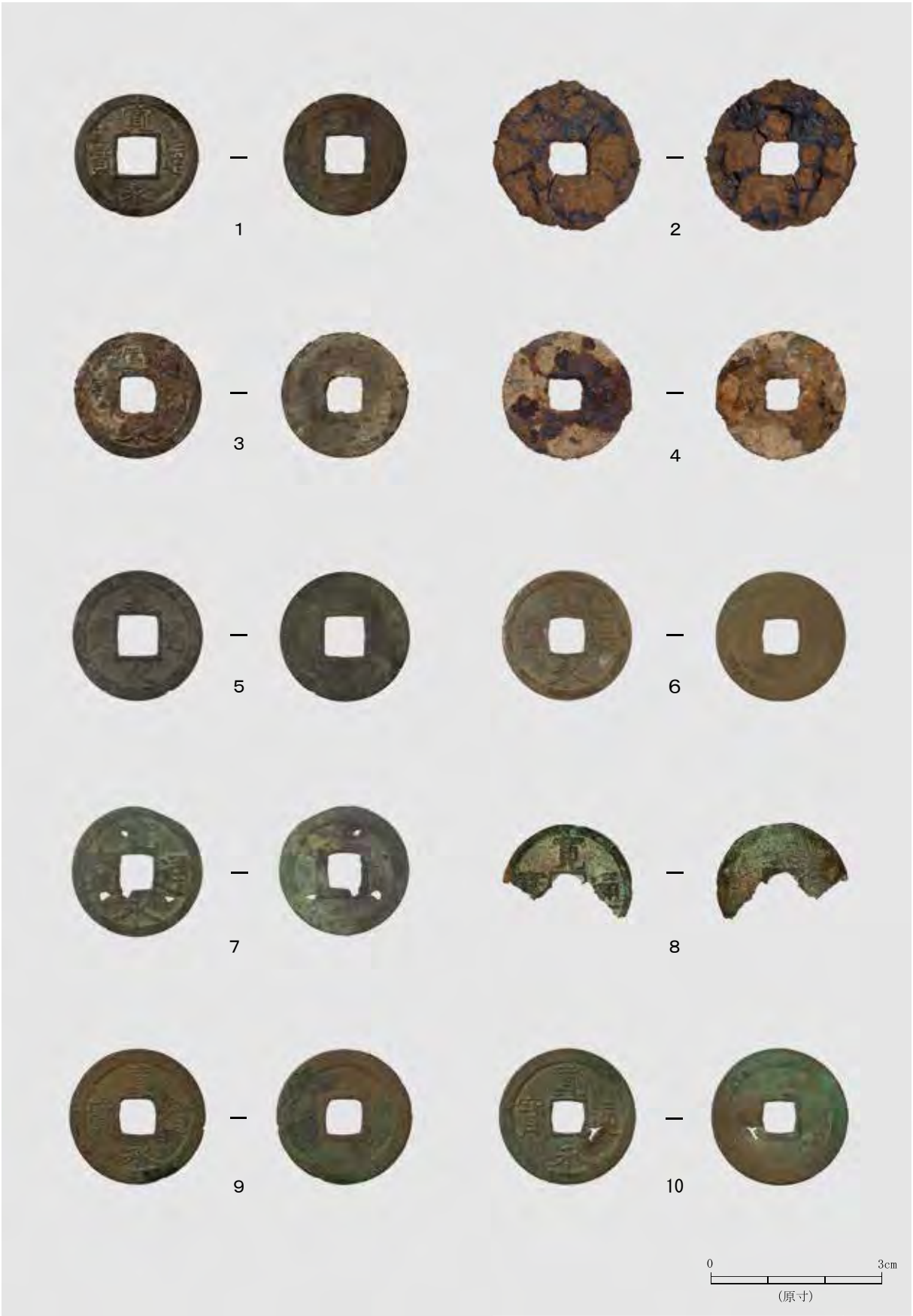
図版 103　金属製品 小鉤（１～４）
鉄釘（５～ 14）
金属製品 針（15・16）



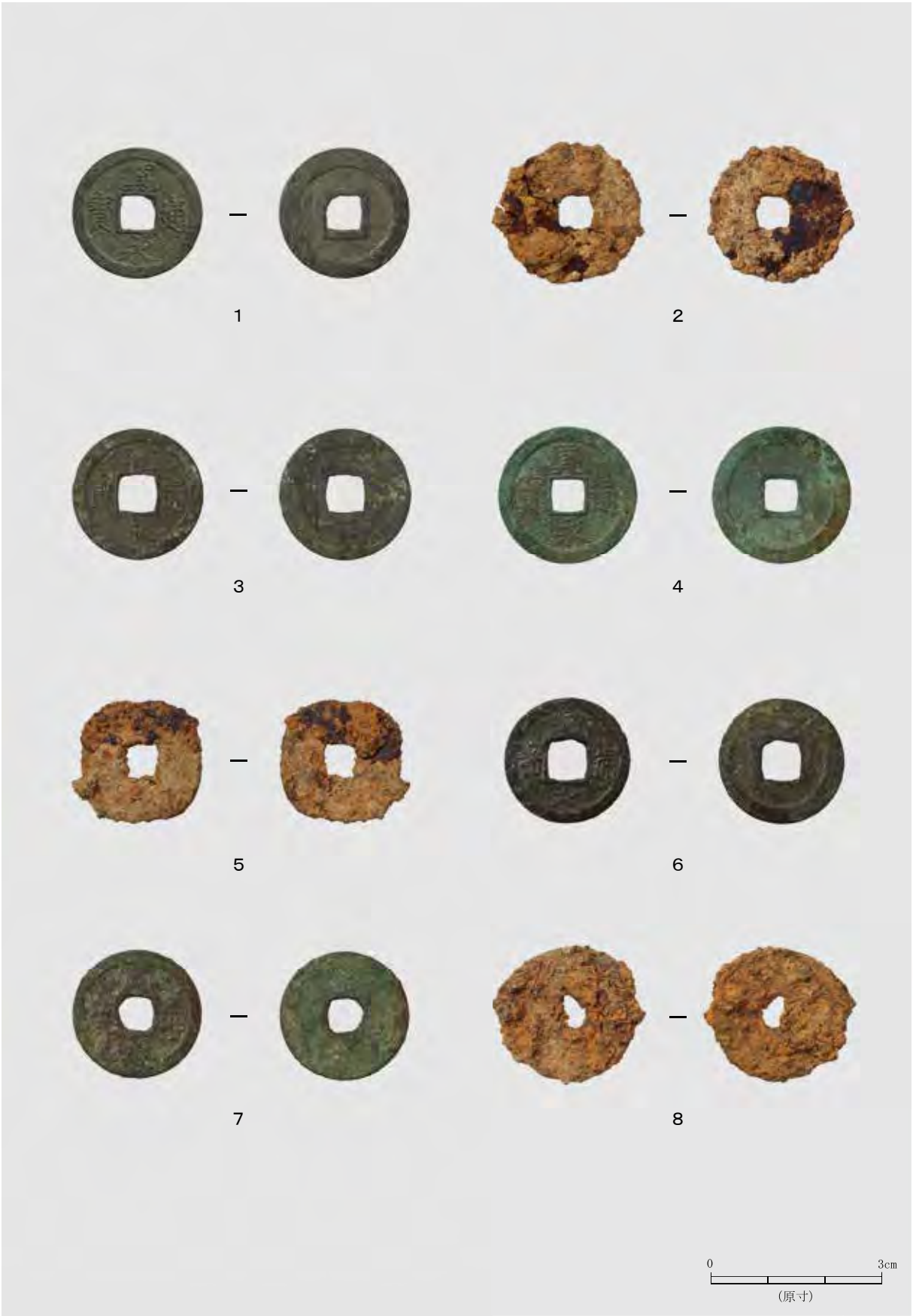
図版 104　金属製品 金具？（１～５）
金属製品 刀子（６～８）



図版 105　銭貨

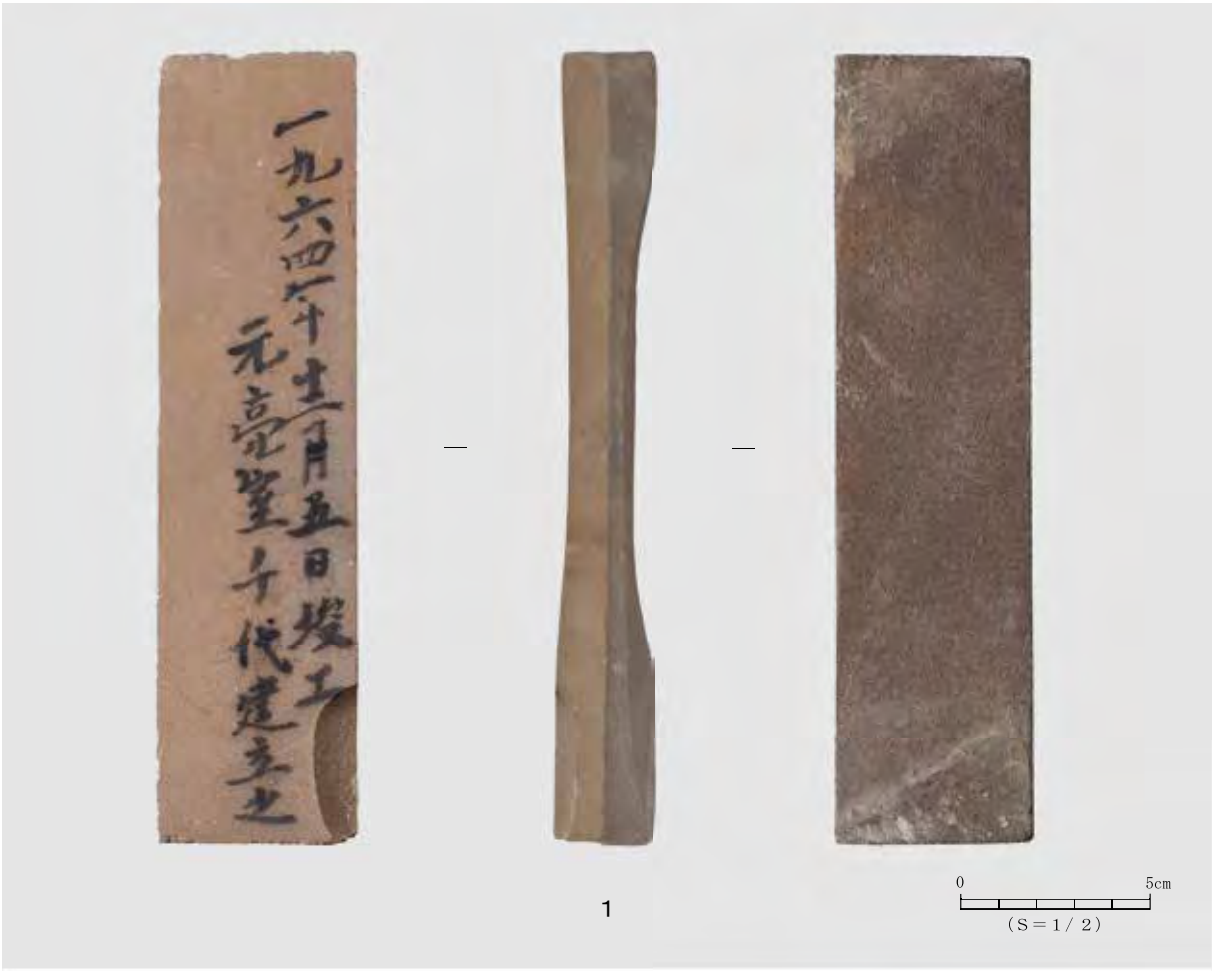


図版 106　銭貨



図版 107　銭貨

図版 108　銭貨



図版 109　墓誌（1）
石製品 硯（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふくぢやまこぼぐん
書名	フクヂ山古墓群
副書名	那覇広域都市計画道路事業３・２・浦１号沢岻石嶺線に係る緊急発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 109 集
編著者名	當銘 由嗣　（株）文化財サービス沖縄営業所　パリノ・サーヴェイ株式会社沖縄支店
編集機関	那覇市　市民文化部　文化財課
所在地	〒 900 － 8585　沖縄県那覇市泉崎１－１－１　TEL 098 － 917 － 3501
発行年月日	2019(平成 31) 年　1 月　10 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ふくぢやまこぼぐん フクヂ山古墓群	なはし 那覇市 しゅりいしみねちょう 首里石嶺町 さんちょうめ ３丁目	47201		26 度 14 分 04 秒	127 度 43 分 41 秒	（第１次発掘調査） 20140903 ～ 20141128 （第２次発掘調査） 20150121 ～ 20150417 （第３次発掘調査） 20150908 ～ 20151030	（第１次発掘調査） 426 ㎡ （第２次発掘調査） 375 ㎡ （第３次発掘調査） 35 ㎡	那覇広域都市計画道路事業３・２・浦１号沢岻石嶺線に係る道路敷設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
フクヂ山古墓群	古墓群	近世・近代・現代	平葺墓 石積墓 破風墓 疑似亀甲墓 亀甲墓 掘込墓	陶製専用蔵骨器、転用蔵骨器、青花、色絵、本土産陶磁器、沖縄産陶器、ガラス製品（瓶等）、石製品（石筆?・硯）、プラスチック製品（櫛）、煙管、簪、指輪、小銅、鉄釘、針、金具?、刀子、銭貨、墓誌	疑似亀甲墓となる古墓形態の確認。第８号墓墓庭前石垣上面より銭貨の集中を検出。第 11 号墓墓庭中央より豚頭蓋骨８個体分の埋納を検出。

要約

発掘調査は、３次に及んだ。全体で、古墓計 11 基の発掘調査を実施した。第1号墓は、屋根の形状から平葺墓としたが、亀甲墓のウーシ（臼）やワラビヌティ（童の手）に似た構造物を付帯しており、亀甲墓との折衷型とすべきものかもしれない。墓室は、地山となるニービ（第三紀細粒砂岩）に横穴を掘削したものである。第2号墓は掘込墓であったと推測されるが、墓室上の岩盤が崩落し、当初、墓室を確認することができなかった。第3次調査にて、墓室上に堆積した大形岩塊を除去し、墓室底面の調査を行った。第3・4号墓は、丘陵斜面の岩盤を垂直方向に掘削して墓庭を設けており、そこから岩盤に横穴を掘削して墓室としている。墓の外観は、平葺墓となる。第5号墓は、第4号墓と墓庭を共有している。平葺墓となる可能性があるが、一部の軒を残して屋根の殆どが崩壊しているために判然としない。墓室は、岩盤に横穴を掘削している。第６号墓は、第5号墓のサンミデーから伸びる墓庭石垣の内部に築造した小規模なもので、「石積墓」と仮称する。第4号墓の仮墓のようである。第7～9号墓は、相互に何らかの関係性を有する墓であると推測される。第7号墓の外観は破風墓となるが、軒を除く屋根の構造物は後代に追加して構築したようである。墓室は、岩盤に横穴を掘削している。当初は、出窓状の棚であった可能性がある。後世に、階段状の棚に改修したものであろうか。第8・9号墓は、墓堂の外観が亀甲墓に類似するが、亀甲墓特有のマユ（眉）やウーシ（臼）、ワラビヌティ（童の手）等の装飾をもたない。このような、墓の外観が亀甲墓に類似するが、装飾は省く墓を「疑似亀甲墓」と仮称する。２基ともに墓室天井は切石で構築し、左右方向の断面形がアーチ形となるマチ墓（巻墓）であった。疑似亀甲墓に類似する古墓として、宜野座村松田に所在する「幸地屋ヌ墓（幸地屋門中の墓）」がある。第8号墓の墓庭前石垣上面からは、寛永通寶を含む銭貨 11 枚が集中して検出された。第 10・12 号墓は亀甲墓となるものであるが、工事の施工範囲外であったため、今回調査は行っていない。第 11 号墓は、典型的な亀甲墓で、墓室構築墓であるマチ墓であった。墓庭南東隅より、本土産や沖縄産となる小杯・瓶等の陶磁器、煙管、簪、指輪、銭貨等の多様な遺物が出土している。これらは、本来被葬者の副葬品であったと推測され、洗骨儀礼に伴い廃棄されたものであることが考えられる。また、墓庭中央より、豚頭蓋骨８個体分が検出された。これら豚頭蓋骨は意図的に埋納されたものと推測され、いずれも墓庭出入口へ向いていた。第 13 号墓は、小規模な掘込墓であった。仮墓の機能を有するものであることが考えられる。

那覇市文化財調査報告書　第109集

フクヂ山古墓群

－ 那覇広域都市計画道路事業３・２・浦１号沢岻石嶺線に係る緊急発掘調査報告 －

発行　2019(平成31)年　１月　10日
那覇市
〒 900－8585　沖縄県那覇市泉崎１－１－１

編集　那覇市　市民文化部　文化財課
TEL 098－917－3501
FAX 098－917－3523

印刷　大広企画印刷
〒 902－0064　沖縄県那覇市寄宮３－16－30
TEL 098－854－2617
FAX 098－834－2881